大正三年四月十七日印刷
大正三年四月二十日發行
有朋堂文庫
近松淨瑠璃集下（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

近松淨瑠璃集下卷索引　終

や

ム

メ

モ

ミ

マ

ヒ

ニ

ヌ

ネ

ナ

ト

タ

ソ

セ

ス

シ

サ

ケ

ク

カ、クワ

ウ

エ、ヱ

オ、ヲ

イ、井

近松淨瑠璃集　下卷索引

（主として固有名詞、諺、特殊の語句等を採り、發音に從つて五十音順に排列す）

ア

郡内―甲斐の郡内より織出す絹織物

三國一―猶しい事

晨朝―卯の刻

上に無き名を留めたり。年は三九の郡内島、血汐に染みて紅の、衣服に姿搔繕い、妻の抱帶を二ッに押切、諸肌脱いで我と我、鳩尾と臍の二所、うんと締ては引くょり〳〵、脇指逆手に取持て、二首の辭世にかく計。「古を捨てばや義理も思ふまじ。朽ちても消へぬ名こそ惜けれ」「はる〴〵と、濱松風にもまれ來て、涙に沈むざょんざの聲」三國一じや。我は佛になりすます。しやんと左手の腹に突立て、右手へくはらりと引廻し、返す刃に笛搔切り、此世の緣切る、息引切る。晨朝過の勸進所、目すり〳〵門番が見付て、「心中ヤレ心中。死んだ〳〵」と呼はる聲、吹傳へたる濱松風、枝をならさぬ君が代に、たぐひ稀なる死姿、語りて感ずるばかりなり。

近松淨瑠璃集下卷終

光明云々—佛の光は十方を照して衆生を救へども殊に念佛者は擁護し給ふと也（觀無量壽經）

おのも—自分も

明日は早々届くべし。サア〳〵觀念最期の念佛怠りやるな、今が最後」とずはと拔く、一尺四寸親重代、我身を切れとて讓りはせじ。甲斐なき半兵衛が身の果や、と昔思へば手も慄ひ、不覺の涙堰きあへず。心覺の西向に、千世は合掌手を合せ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛彌陀佛の、聲より早く引寄せて、脇指咽に押當る。千「なふ待てたべ待たしやんせ」と、身をすりのけば半兵衛、「待てとは未練な。刃物を見て俄に命惜なつたか。卑怯者め」と睨付れば、千「いや〳〵未練も卑怯も出ぬ。今の回向は我身の回向、可愛やお腹に五ヶ月の、男か女か知らね共、此子の回向して遣りたい。嬉しやゝまめで產だらば、何樣して育てふ斯うせうと、案じ置は皆あだ事。日の目も見せず殺すかと、思へば可愛ふござんす」と、かつぱと伏して泣入れば、男も聲をすゝり上げ、「己も何ンの忘れふぞ。若云出したら和女の泣きやらふ悲しさに、默つて居た」と計にて、一度に「わつ」と聲をあげ、前後正躰泣叫ぶ。おのも翼を竝べながら、人の最期を急ぐ成、八聲の鳥も告渡れば、半「サア〳〵夜明に間がない。明日は未來で添ふものを、別は暫しの此世の名殘」十念逼つて一念の、聲諸共にぐつと刺す、咽の呼吸も亂るゝ刃、思ひ切つても四苦八苦、手足をあがき 三重 身をもがき、卯月六日の朝露の、草には置かで毛氈の、

十方旦那—四方の得意

女夫に成て居る所を、見立て死で下さんせ」と、さめ〴〵歎けば、半「ヲヽ過分な。此書置にも書く通り、養子に成て十六年此方、十方旦那の機嫌を取、隙有日には町中を振賣し、元は僅の八百屋店、今では人に少々の、金貸す樣に儲け溜ても、つらい目計に日を半日、心を伸す事もなく、死なふとせしも以上五度。恨有中にも和女に縁組、せめての憂を晴らせしに、それさへ添はれぬ樣に成、死ぬる身に迄成下る。由ない者に連添ふて、半兵衞が身の因果、和女に迄ふるまひ、在所の親仁姉御にも、悲しい事を聞すと思へば、此胸に鑢をかけ、肝を猛火で炒る樣な。エヽ口惜い」と拳を握り、膝に押付身を慄はし、涙はら〳〵朝露に、つれて流るゝ計なり。千「あれ又愚痴な事計。在所の父樣姉樣は、こな樣より諦よい。水盃の其上に、門火迄焚かれしは、生て再度戻るなと、私に異見の暇乞。其愚痴な事いふ手間で、早ふ殺して下さんせ。アレ〳〵〳〵三方四方に半鐘がなる鐘が鳴る。人の來ぬ間に來ぬ間に」と、急ぐ最期の玉かづら、夫に纏ひ泣沈む。半「それよ〳〵由なき悔。最早互に親の事、兄弟の事云出すまい。必和女云出しやんな。いざ此方へ」と毛氈を土に打敷、「なふお千世、此毛氈を毛氈とな思はれそ。二人が一所に法の花、紅の蓮と觀ずれば、一蓮托生賴有。親兄弟への書置も、此狀箱に入置けば、

に皆かく
ねもせで―寢と
昔にかく
ならずと―なら
ずとも
なへて―しなや
か
やつくるり―廻
る貝

生玉云々―生く
にかけて爰は衆
昧の我々を化導
する所と也

遷化―死去

ば思ひの雲の帶〳〵、さすぞ盃ならずと一つまいれ。否とおしやるに、こちやも、それじや〳〵。そうさんせそれじや〳〵。しかもよいこの情盛に、ちよきりこつきり小によほの、腰もしなへてやつくるり、くるりや〳〵やつくるりと、ぬめらしやんすは二人がほかに名取川。ヲヽそれ二人と二人が名取川。それじや〳〵」半「それ行過し」と立出て、「今の小歌の一節に、二人と二人が名取川。ヲヽそれそれじやと謠ひしは、己と和女が名取川。辻占が能い此方へ」と、勇むは男の矢竹心。千「アヽ嬉い」と引連て、共に急ぐは女氣の、情するどに人絕て、物しん〳〵たる寺町を、死に行く身も暫くは、爰生玉の馬場先に、法界無緣の勸進所、無明能化の門前に、念佛を便り辿寄る。半「なふお千世、心隨萬境轉と聞時は、心は境界に從つて轉じ變る。和女も千世といふ名を、ふうがく良訓信女と改め、我も八百屋半兵衛を、ろしう禪定門と改め、息の有內より早無き人の數に入れば、死後の骸の置所も俗緣を離れ、寺の庭でと思へ共、門開かねば力なし。爰は奈良の東大寺、大佛殿の勸進所。先年了海和尙、衆生濟度の說法を、此所にて說始め、今遷化の跡迄も、我親は講中の第一にて、由緒有所なれば、最期を爰と思ひ寄る。但望も有や」と問へば、千「なふ死ぬる身に何の望。水の中火の中でも、先の世迄もこな樣と、

ほのくらき薄曇、卯月五日の宵庚申。死ば一所と契りたる、其一言は庚申、參りの人に打紛れ、忍び出るも商賣の、八百や万を一文字に、半兵衛といふ名にも似ず、只ねぶかくも思ひつむ、わかな心の突詰めて、詞の義理に生薑や。智者は惑はず勇者は恐れぬ生付、流石は武士の種ぞかし。千世も今度が三度目の、嫁菜盛も古くれて、諸事を細な芥子からし、人の云ふ事木耳や、夫の親を手に豇豆、晝夜孝行土筆、仰せ背かぬ給仕へ、氣のとつさかな姑に、せり〳〵弄りたてられて、命もなしやありのみの、谷川ふりに身を投ふ、今日甘海苔に成らふかと、心は有頂寒天の、いつわつさびと僞もせねば、斯く成蓮でご山椒。何と生姜の身の果を、說教いふて返らぬ水蕗の、姑去で殺したと、祭文惡名つけて世の人の、蕨ま生姜お笑止と、悔めば夫は芋莖の涙、半「なふ和女さへ其如く、悔んで給るに此半兵衛、年比日比の御厚恩、送らで死ぬるは人のくず。罰をかぶらん恐ろし」と、酸漿程な血の涙、はら〳〵溢せば走り寄り、千「私も病者な父樣を、先へ送るが蕁菜を、却て憂目見せまする。是も何ゆへ相生の、松茸ゆへ」と抱き付、木末に知らぬ松の露、落ちて松露になりやせん。彼一群に聲高く、下向の衆のぞめき歌。見付られじと影隱す。歌「我が戀路はいとなき三味よ。なんのねもせで待明かす。それじや〳〵、見れ

庚申—叶
ねぶかく—葱
若菜—若い
生薑—恥にかく
智者云々—論語子罕篇にあり
芥子—小さい
さゝげ—大切にする
とつさか—鷄冠菜と暴逆
せり〳〵云々—芹婆にかけていぢめる事
ありのみ—梨
ふり—淵と瓜
わつさび—わつさりと山葵
蓮—苦
蕨—笑ひ
芋莖—隨喜
くず—葛と屑
かぶらん—蒙ると蕪
蕁菜—順
相生—睦き夫婦

荒布―あらず
白茶―知らずに かく
すゞどき―鋭き
去る―申にかく
夏―無にかく
杜鵑―半兵衛が養家を去るに寄せたり杜鵑は生んだ卵を鶯に孵して貰ふといふ

四寸、是が冥途の案内者。魂こむる書置箱。地獄へ落ちるか極樂か、末は白茶の死裝束。くる〳〵包む毛氈も、はや紅の血を見れば、死損いはせまいぞと、一心はすはれ共、暖簾一重彼方には、すゞどき母の鉦の聲、胸にこたへて身も慄ひ、踏所覺えぬ差足に、鎹外す手もわな〳〵、そつと出たる門口に、半「イヤアお千世か」千「おいの」半「サア鰐の口を遁れた。サアおじや」と手を引けば、千「マア待て下さんせ。生中一度戻つて、此方樣の口から退くぞ去るぞといはれては、未來迄の氣懸。此門口でたつた一言、去らぬといふて下さんせ」半「ハテ愚痴な事計。今宵は五日宵庚申。女夫連で此家を、去ると思へば能いわいの」半「ほんにそうじや」手に手を取つて此世を去る、輪廻を去る迷を去る、今日は最期の羊の歩、足に任せて 三重

道行思ひの短夜

歌名殘も夏の薄衣、鶯の巣に育てられ、子で子にならぬ杜鵑、我も二八の年月を、養親に育てられ、子で子にならず振捨て、死に行く身は人ならぬ、死出の田長か杜鵑、同じたぐひの女夫連。肩に掛けたる毛氈は、啼く音血をはく姿かや。覺悟極めし足本も、影

了ふ事と涙とかけたり（俚言集覽）

五々八々ー晝の五ツと八ツと夜の五ツと八ツ時は四月の知死期時

の永い時は得て物忘するものじや。よふ思ひ出しや。お千世泣かずと爰へおじやいの。未己が怖いか。爰へ〳〵」と猫撫聲。千「アイ〳〵お側へ參ります」と、立寄らんとする所を、半兵衛取て突退け、「女房計は親の儘にもならぬ。身が氣に入らぬ、去つた〳〵出てうせい。コリヤさんも丁稚もよふ聞け。半兵衛が女房去つたぞ。向隣丁内でも、母の浮名を立たらば聞事でない。うろ〳〵せずと出てうせい」と、眞顔に睨む目に涙。母「コレ嫁御おりや去らぬぞや。親の儘にもならぬは女夫是非がない。おれを恨と思やるな」と、いへ共何の返答も、泣入〳〵しやくり泣。母「ムヽ其涙はまだ母に恨が有さうな。有なら云や聞ませう」千「イヽエイヽエお慈悲深い姑御に、何ンの〳〵」と詞計にて、かつぱと伏して泣居たり。半「ヲヽおのれが云ふ迄ない、母者人に何ンの恨。口手間入れる面倒な」と、小腕取て門口に引出す。「此身も終に行、後に〳〵」と呼きて、目まぜに宿の名殘の涙、弱る心を見られじと、門口ぴつしやり見世ぐはつたり。鳴るは六ツかはや初夜か。時も時分も六々に、胸はわけなき五々八々、血死期近づく計なり。あかぬ夫婦の生別、流石の母も挨拶なく、おうゐを立て奥の間の、罪ほろぼしの鐘の聲、善惡照らす御燈の、火を見るよりも居眠る下女、外に見る目も荒布の束、中に隱せし一尺

養親云々—養親の惡評もつかぬ意か

りやうげ—了簡

はしり云々—流しの出刃にて愛は違約すれば咽喉をつくの謎

じやくは雨—寂にて後に死んで

後生も悪い。母の機嫌よふ一たん呼返し、改めておれが手から去る筈じや」千「エヽイすりやどふでも去らるゝか」半「ハテ肝潰すことかいの。死るは二人が兼ての覺悟。養親にさんもつかず、在所の親の遺恨もなく、エヽ流石じや、見事に死んだと未練者の名を取まい爲、母に向ひなんぼの詞を盡くしたと思やるぞ。書置も認め死裝束、脇指もあらめの荷へ捲込、此世の心がかりは微塵程もなけれ共、金に詰つて死ぬる心中と一口に云はれふかと、是が一ッの氣がかり」と、わつと泣ばわつと泣、千「こなさんの孝行の、道さへ立ば私も心は殘らぬ」と、夫婦手を取縋り寄り、伏沈むこそ道理なれ。母は念佛の回向より、嫁女夫の願以此功徳氣がかり、余所にゆるりと居る空も、見世鎖比によつと歸り、「なふお千世戻りやつたか。さつきにも云ふ通り、少したりやうけ違ひで、物思はせたいとしやの。ほんの生如來が見たくばおれじやと思や。長うもない浮世に、酷いつらいめ見て何にせう。なふ嫌やの。コリヤ半兵衞、はしりの出刃庖丁よふ研がしておいたぞや。ちよいと觸つても劒じやぞ。ア南無阿彌陀佛〳〵」と、半兵衞に合圖の詞。嫁は知らぬと思ひこむ、是ばつかりは佛なり。女夫は母の機嫌顔、見れば此世の本望と、思へどじやくは雨とふる、涙隱すぞ哀成。母「コレ半兵衞何も忘れたことはないか。日

桶な物云々—何もかも打解けたるさま

てた。娘は持たず天にも地にもたつた一人の花嫁。末期の水取らるゝも骨拾わるゝも和女。隨分孝行にしてたも。和女もおれがいとしがる。今お念佛に參る其内に、早ふ戻つて後に逢はふ。早う〳〵」と、とんと桶な物打あけた樣なお心。皆此方樣の云ひなしゆへと、ほんに男の御恩は戴いて居てもあきはない。松よ久しいな。最早どこも蚊が有に、女房主人がなければ、まだ蚊帳の釣手もなし。アノさんが居眠では、袷共の洗濯も出來まい。此戸棚のほこりはいの。奥の傷もまだ塞がず、香の物も見廻たし。何からせうやら氣がうろつく。居付た所に居て見よ」と、とんと坐りし茶釜のまへ。湯を沸かして水に成、末知らぬこそはかなけれ。半兵衛とかふの挨拶せず、「コリャ松よ、只ゐず共藏へゐて、椎茸よれ」と入をのけ、お千世が顏をつく〴〵と見て涙ぐみ、半「エヽ可愛や利發なやうでも女心、母の詞を眞實と思ふか。云やる事が皆噓じや。去ながら昨日もくれ〴〵いふ通り、佛法の端も聞入れ、物の慈悲も知つた人。我甥をさしのけ他人の身共に、跡式讓る心からは、根からいがまぬ是證據。人には合緣奇緣、血を分た親子でも、中の惡いが有物、乘合舟の見ず知らずにも、可愛らしいと思ふ人も有。人界の習慣斯うした物。いとしぼなげに根からの惡人でもない母を、和女故に邪見者といはせては、女夫の者が

のきざりせぬ—
離れぬ夫の事
つるし—吊し柿

と我親と、世間の義理と恩愛と、三すぢ四筋の涙の糸、たぐり出すがごとくなり。母はいやりと笑顔して、「ム、思ひ合ふた夫婦合。誠らしうは思はねど、嘘に涙は出ぬ物。眞實去るがぢやうじやの」半「ハテお前をだます程なれば、此御訴訟は申ませぬ」母「ヲ、嬉しい〳〵。おれも鬼には成とむない。必去りやや。間に合いふて欺しやれば、コレ此母が咽笛を、出刃庖丁でちよいじやぞや。母殺すか女房去るか、夫からは其方の勝手次第。アヽさらりと穢土の苦が脱けた。此世からの生佛とはおれが事。足輕ふ非時に參りましよ。こちや未來迄、のきざりせぬ閨の同行が、さこそ待や焦れて、南無阿彌陀佛〳〵。さんよ其形でつい供せい。ア南無阿彌陀。松よ、又見世のつるし喰ふな。アなまみだ」南無阿彌陀佛に取ませて、ぶつ〳〵いふてぞ出にける。お千世がかさ成五ヶ月の、重き身ながら足元も、手もかろ〴〵と帶の下、小褄引あげちよこ〳〵走、千「ハア久振で内を見た半兵衞樣。今日といふ今日、丁内廣ふ戻つたはいの。ア嬉しや」と抱き付ば、半兵衞ぎよつとし、「何として戻た。たつた今母が出られた。道で逢ひはせなんだか」千「さればいの。母樣の山城屋へよらしやんして、いつにない門口からにこ〳〵と、「いとしや〳〵。おれが少の思違ひで苦勞させた、今から去なそのいの字もいふまひと、心誓文た

居ては聞えぬ
筑後の川中島―竹本筑後掾の芝居に行ふ川中島四段目に天目山の作物あり（信州川中島合戰）
判官びいき―世人梶原を惡んで義經に贔屓する如く嫁に同情して姑を惡くいふもの
かうけん―かうけの轉、かうけは豪家にて權力

帳に、築山を飾られたも、筑後の川中島の四段目から出た事じやげな。こんな事も出にや聞れぬ。アヽ有難い南無阿彌陀佛」と、輪數珠くり〳〵出にけり。半兵衞一言の答もせず、涙にくれて居たりしが、顔ふり上「申母者人、今めかしい申事ながら、武士の釜の水で育ちし此半兵衞、廿二の年から御面倒に預り、一人の甥御を指置、家屋敷商賣共、私へお譲りなさるゝ御厚恩、肝にこたへて空にも存ぜぬ。御恩の母の氣に入らぬ女房なれば、私が離別致してこそ、孝行も立世間もたつ。所に此度國本の留主の間に、八百屋半兵衞が母が、嫁を憎んで姑去りにしたと沙汰有ては、まん〳〵千世めが惡いになされませ、判官贔屓の世の中、お前の名ほか出ませぬ。母の惡名を立て、若い者の人中へ頬が出されませうか。親仁樣にも面目失はする。爰が一ッの御訴訟。少しの間と思召、虫を殺し、美う千世めをお入なされ、其上にて私が、物の見事に去狀書いて隙やります」母「ホヽ、そこが男のかうけん。貴人高位の娘でも、夫が去るになんと申そ」半「時には千世めが姑への恨もなく、お前を慈悲じやと云はせたい。十六年此方、たつた一度の御訴訟。老少不定の世の中、假令私が先つても、いか成跡のとひ弔ひ、百萬遍の御回向より、聞入れたとの御一言、智識長老のお十念を、授かる心」と計にて、女房の親

妄語―、五戒の一、殺生、偸盗、邪淫、妄語、飲酒を五戒といふ

赤貝―女のものに譬へたり

めかり云々―目利かする（俚言集覽）

萱屋の雨―諺に萱屋の雨は内に

しおるわいの。現在おれが甥の太兵衛を指置、あかの他人の此のら殿に、家屋敷遣る此母、邪は少もない」伊「コレかゝ、それは誰も知つた事。今更調る事かいの。そのよな腹の立つ時は念佛が藥じや。兎角如來の御方便、修羅燃す和女を、呼に來るも彌陀如來、參るこちとも彌陀如來。機嫌直しや」と宥むれば、母「イヤこち女夫が出てゐて、跡へお千世を呼入れ、留主の間でほたへさす事は成ませぬ。此方一人參つて、私は俄に目が廻ふたと成と、頓死したと成と間に合に遣らつしやれ」伊「コレかゝ、たつた今西念坊が見て去んだはいの。此伊右衛門に噓つけか、ア勿躰ない妄語戒。此中さるお寺で、五戒の割口說聽聞した。三百戒五百戒も、約る所は赤貝に留まるとのお談義。半兵衛が叱らるゝも貝のわざ、和女におれが異見するも貝のわざ。一蓮托生の閨のお同行」と、じやれて機嫌を取ければ、「そんならマア此方參らしやれ。此樣な嗔恚の燃る時に念佛申せば、咽にすく〳〵立やうな。心鎭めて跡から參らふ。エヽかてゝくはへてあた鈍な念佛講。こんな時はめかり聞して延ばしたがよいはひの。ほんに〳〵此方の同行に、氣轉の利いたがひッとりもない」と、怖いめ知らぬ我儘たら〳〵、伊「ヲヽそんなら先へ行、跡からおじや。佛法と萱屋の雨は出て聞けと、外へ出れば又有難い事も聞。此度生玉大法事の開

ぬつけり—まじめくさつた

宗味が石—鐘鑄し人か石は刻のあて字なるべし

そゝくさ—せつかち

つこど聲—尖聲

荷拵して出て行。半兵衛は山城屋と聞より、「お千世が來たであろ。氣どられまい」と空とぼけ、半「ハァ山城屋からは何の用。どりや一寸いてかふ」と、はしり出るをむずと執へ、母「息子殿こりやどこへ」半「イヤ山城屋から逢ひたいと」母「ヲヽその山城屋合點成ませぬ。アノぬつけりとした顔はいの。こちと夫婦は何ンにも知らぬと思ふてか。氣にいらいで去した嫁、遠州戻りに在所へより、能くはへて戻つたな。常盤町の從弟が所に預けて置、商賣にかこつけ、間がな隙がな女夫こつてり。おれが知らいでおこかいの。嘸おれが事譏りやつつろ。十五年世話にした親の嫌ふ女房に、隨分と孝行つくし、親には不孝つくしや。恩知らずめ」と疊たゝいて喚き居る所へ、青布子の西念坊、案内なしにずつと通り、「熊野屋の權右樣から先達てのお約束。宗味が石鐘の開眼、麁相な非時致します。講中皆お揃ひ、旦那寺もとふお出、御夫婦ながら只今」と、いひ捨歸るそゝくさ坊主、未來賴むはあぶな物。母「アレ親仁殿。熊野屋から呼に來た。早よ往かしやれおりや往かぬ。きり〳〵さしやれ」とつこど聲。親伊右衛門は後生一ぺん、伊「ハレ嗅何を喧い。又しても〳〵半兵衛さへ見れば敵の樣にいふ人じや。世間する若い者、呼に來まい物でもない。少々の事は聞のがしにしやいの」母「ソレ其結構過たから、親を阿房に

けもの
とりへて―取入てか
あれば―水多くして炊ぎたる飯の粘液
二股大根―甲子のお供物
ても―扨も
のらつぽ―懶惰者原本のらつぽとあり
鼻毛云々―ほれた女に馬鹿にされる
おうご―天秤棒
此方―半兵衛

りへてたよんで打盤出して、ちよき／＼と打て。ヤ其ちよき／＼で夕飯のおねばさざめ。コリヤ松よ、今日は五日宵庚申甲子が近い。二また大根のけておけ。ソレさんよ茶釜の下が燃出る」と、商賣が八百屋とて、八百色程いひ付る、口せか／＼と忙きは、大晦日の生れかや。伯母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ、はしりの竹の子片荷には、獨活生姜青山椒白瓜二ツ。太、歌「是は扨も早い事でごんすよの。おれが戻るは、ても遅い事でごんすよの」嬶「コリヤのらつぽ、今朝卯の刻から内を出て、何時じやと思ふ晝下、どこで鼻毛をよまれて居た。旦那しゆの誂へ物、日覆してさへ傷む時、高い物をてんとぼし。商賣のおうごくらはせ、魂に覺させん」と取付けば、半兵衛走り出、「母者人のがこりや尤。コレ太兵衛、何處にのら／＼やつて居た。おくび町の笹屋から、竹の子取に矢の使。阿波座堀の丹波屋から、栗おこせといふてくる。朝倉屋からは青山椒、内にはきれる返事に困つた。太義ながら母者人の機嫌なをし、つい一走廻つておじや」太「ハテ私じやとて何ンの悪ひ所にはいつて居ましよ。横町の山城屋から呼こまれ、一ツ三ツ咄したばかり。夫も外の事でござらぬ。此方に誰やら逢ひたいとて、今朝から爰に待て居る、といふてくれとの言傳。私や得意を廻つて來ふ。此方もちよつと往かしやれ」と、誂物を取揃へ、

八功德池—極樂にありと云八つの池
おいにやれ—行かれよ
つど〜云々—千世が姉に色々話す
門火—葬送の時亡者の魂を送る爲門に焚く火、爰は生きて歸るなとの證
筵庇云々—青物しなびる故筵を庇に下す
日影—ひかげものにかく
五つ云々—夫より五つ老たり
いらだて—原本いらたて
べら〜—ブラブラ
のりかい—糊つ

ず、呑め共よはぬ水酒盛。不便と思ふ親の氣は、餘りて色に出にける。父「命があらば又逢はふ。死なば親子の末期の水、未來は八功德池の水、此世に思ひ置事ない。二人ながらおいにやれ〜。去らば」と夜著に打もたれ、二たび詞もかはされぬ、親の心に身を恥て、姉につど〜云ひかはし、思を陳べて立出る。「暫し」と父は起上り、「姉なふかさねて戻らぬため、祝ふて内で門火たけ」忌々しいとは思へ共、親に從ふ焚火の煙、姉「目出度ふ爰から焚きます」と、庭にこがるゝ下もへの、果は夫婦が無常のけぶり、灰に成ても歸るなと、其一言を此世の名殘、留まる名殘行名殘、長き名殘と 三重

下之卷

夏も來て青物見世に水かわく、筵庇に除けられし、日影の千世が舅の家は、新うつぼ油かけ町八百屋伊右衛門。淨土宗の願手、了海坊の談義に打込、開帳廻向の世話やき仲間。見世は半兵衛に打任せ、大坂中の寺狂ひ。女房は内外の世話に、五ッも年ふけて、朝から晩迄氣はいらだて、女房「此半兵衛は藏にべら〜何して居やる。見世の賣物がしなびる。ヤイ松め、きり〜と水打おろ。コリヤさんよ、のりかい物がひあがろがな。と

つらうち―面當て
下さんすか―原本下さんする
ぢん未來―盡未來にて永遠
しどなさ―無邪氣さ(俚訓栞)
か共―病氣かとも

自害して死んだらば、あれ見よ八百屋伊右衛門夫婦、嫁を憎んで去りしゆへ、子はつらうちに自害せしと、養子に悪名難を付、口々に取沙汰せば手がら〳〵。留るな娘、ぞんぶんに自害めされ。見物せん」との一言に、孝心深き肝をひしがれ、半「ハアそうじや過つた。眞平」と額を擦付身を悔み、「然らば御暇千世も同道、いざお立ちやれ」千「エイやつぱり私を女房に、持つて下さんすか」半「ヲヽ假令死んでも身躰も戻さぬ。ぢん未來迄女夫〳〵」千「アヽ忝い父樣姉さまも、悦んで下さんせ」と、はや締直す抱帶、さきをたぐつてにじりより、父ははら〳〵涙にむせび、父「半兵衛是見や此しどなさ。歸らんと云ふ嬉しさに、親の病ひをか共いはず、悦ぶ顔を見る親の、心の内の嬉しさを、叶はゞ見せて禮云ひたし。取締のない愚者、伊右殿夫婦の氣には入まい。頼むは其方の心一ツ。親は老病明日知らず、黄泉の底のそこ迄も、心にかゝるは千世一人。明日が日眼塞ぐ共、姉夫婦にきつといひつけ、十廿の金の取やり、いつ何時でも事缺かせぬ。隨分商ひ手廣くして、娘が事を頼入。契約の盃せん銚子〳〵。姉よ酒をきらせしか。親子の中に遠慮はない。酒と思ふ心が酒、燗鍋に水持てこい」と、盃の出る間もこがるゝは子故の闇。引うけ〳〵ずつと干し、父「半兵衛獻そふ」親子夫婦が水盃、さいつさゝれつ汲め共盡き

我あ―我はのなまり、きさまけなり

涙―無にかく

生れじやう―生れつき

當事―あてこすり

染みて忘れぬ物、若い形して忘れしか。忘れぬ證據、其身は實父の弔ひにかこ付、遠所へ出かはし其跡で、姑に追出させ、養子の親に我あつみを塗付る不孝者。義理も法も知つた奴か。あれが何の武士の果、鰹節の削屑。人でなしめに縁組んで、あたら娘を捨てたな。「ろくに吟味も爲なんだか」と、死んだ母が、あの世から、恨召されふ口惜い」と、愼み深き堅親仁、惡口交の口説泣。二人の娘も正だい涙、「とかく男に縁のない、生れじやうか」と計にて、聲も惜まず泣居たる。「扨は女房去られて爰へ戻つたか」と、始めて驚く半兵衛、胸に磐石据へたる如く、惘れ返つて涙も出ず、暫し詞もなかりしが、半「エヽ情ない女房。假令一言一宿のつき合にも、人の心は知るゝ物。況て足かけ二年の名染、子迄なしたる夫の心、知つても云譯してくれぬか。親仁樣の御立腹、申開くは知つたれ共、我罪を養親に塗付る、不孝者との一言からは、ゆめ〳〵存ぜぬ。我ら去りは致さぬと、申分くる程不孝の上塗。親仁樣につがひし詞、違へぬ武士の性根を見せる。見て疑ひをはれ給へ」と、ずはと引きぬく脇指より、おかるは早く縋り付。千世も驚き、「なふ悲しや。こなさまに恨はない」と、障子引あけ走りより、留めても留まらぬ男の力。千「父樣頼み上ます」と、騷げど騷がぬ平右衞門、「お身が居るとは知つての當事。耳にとまつての自害か、ヲヽよい分別。

母の刀自―平家物語一の巻にあり、清盛妓御前を得て祇王を捨つる所
あかちさま―ちよつと一時

段を聞ふ。讀みやれ」千「誠に紙を付た所が有」と押開き、文句「母の刀自なく／＼又教訓しけるは、天が下に住まん者、兎も角も入道の仰せは背くまじき事で有ぞ。千年万年と契る共、やがて別るゝ中も有、あからさまとは思へ共、ながらへはつる事も有。世に定めなき物は男女の習なり」千「ほんにそうじや」と讀みさして、我身に當る憂涙、留め兼てぞ泣るたる。父も不便に目をしば／＼、父「昔も今も人の氣の、移り易き世上の習。コレ姉もきけ。平家物語を千世が身に引比べていふ時は、清盛入道は八百屋半兵衛、祇王は千世が身の上よ。その清盛が心變つて追出す。憎や清盛、去年聟入せし折から、「不調法な娘を進上致した。氣に入らぬ事あらば、打毆き縛り括つても直させ、末々迄も見捨ず添ふて下されかし。此度共に三度の嫁入。在所は一ッ所どころにて、又歸つては平右衛門二度人中へ頬が出されぬ。娘は氣に入らず共、我を不便と面倒見て、必去つて給はるな」「ヲヽ去るまい／＼。御臨終の折からは、前輿は平六殿、後輿は此半兵衛、眞實の子を持たと思召せ。今こそ町人八百屋の半兵衛、元は遠州濱松にて、山脇三左衛門が悴。武士冥利商賣冥利、千世は去らぬ氣遣するな」「アヽ忝ない」と手を束ね、地頭代官の其外に、一生下げぬ頭を下げし互の契約。物忘れする老の身にも、其時の嬉しさは骨身に

むやくし顔―面倒くさい顔
とむねつく―胸にぎつくり姑の爲と動づく
せぐるし―息苦し
塵劫記―算術書
網島―心中天網島

姉「男共女子共、誰ぞお茶でもあげぬか」と、内にいぬ人呼立、むやくし顔の色合を、見て取ながら半兵衞、立も立たれず子細は知らず。互の心隔ての障子さつと明、「姉さま、お藥溫めて」と出るは女房。半「ヤアお千世爰に居るか」を、聞捨て物をもいはずつゝと入、障子をはたと引立たり。半「おかる樣、あれ女房いつから爰に。何ゆへ物は申さぬ」と騷げ共、姉「物いはぬ譯聞たくば、此方の心にお問ひなされ。人の知つた事の樣に、ハヽヽ〱可笑しい事では有」と空笑ひ。取てもつかれず、半「ムウムウ」と計差俯き、とむねつくより詞なし。奥には親のせぐるし聲、父「夜短かで日の長いは、老人の身によけれ共、それも息才で駈け廻る時の事。病ほうけて、口の長いは扨々退屈で暮らし兼る。千世よ、棚な本おろして、何成共讀んで聞せ。かるは何處に。來て聞かぬか。我伽せぬか、うせぬか」と、急しく老の氣もいらだて、姉「あい〱爰に仕事しながら、障子隔てゝ聞ます」と、流石半兵衞を捨てゝも立れず。障子の傍に立よれば、半「ヤ親仁樣御病氣か。容躰見たし」と云はんとせしが、不待遇成氣をかねて、詞を留め折を待、共に摺寄聞るたる。千世は數多の本取出し、千「伊勢物語ぢんかうき、父樣の傍に有まい。網島の心中もござんする。つれ〲平家物語、なふ父樣どの本が能からふぞ」父「姉が讀みさいた平家物語、祇王が

月もより云々―日に〱老衰する

去らるゝ―原本さらゝるゝ

物まう―物申さうの略

どまくれ―言ひそこなひ

しが、六十に足踏込んでは、年計よるでなく、月もより日もよつて、病ひにはからまる。身のおとろふる程彌増に案じらるゝは子の身の上。三度はおろか百度千度、去られても、去らるゝに定りし、前世の約束と思ひあきらむれば、悔みもせぬ憎ふもない。笑ふ人は笑ひもせよ、譏らばそしれ指もさせ、子の不便さにはかへぬぞ」と、老の繰言息よはり、父「半兵衛めは遠江へうせて留主の内とな。其留主合點。万一うせたり共物いふな顏も見な。彼奴が身上百倍の所へ嫁入させる。苦に持つて煩ふな。のふ姉下々は野へ往つらん。茶わかいて千世めに中食させてたもれや」と、餘念なき父の顏。姉は悅び「コレお千世、案じた父樣の御機嫌日本一。お側はなれず御介抱申しや。嬉しや胸が開けた」と、障子を引立〱勝手へ出る。折こそあれ門に、「物もう頼ませう」姉「何方」とこたへ入を見れば、千世が夫の半兵衛。扨こそ緣を切に來た、と思ふ心に口どまくれ、「去狀さま能ふ御座つた」と、云へ共なんの氣もつかず、旅出立のまゝ笠取て、沓ぬぎに草鞋の紐、心も解けて、半「おかるさま、何方も變る事有まい。國元へ參時分は、事急にて報知もいたさず。氣のつかぬ親共、留主の内にも嘸御無沙汰。拙者も無事に遠州より、只今罷歸ります」姉「フウそれはな、御奇特によふお歸りなさるゝ」と、顏を背けて鼻あしらひ。

脇には足云々―他に嫁ぎても長續きしまい

入まい―居るまいか

心は奧―心が置かれるにかく

誰かりす―誰が瘦すとはなけれども逃げ來る猪と瘠せた肉とかけたり

ござればよいに、惚れかゝつた一念、脇に足は留まらぬ筈。入まい〳〵。戻るといふも此鼻に縁が深いからじや。親仁殿にいひ込で、今日からでも我ら請込む。姉御大事にかけて囉ひましよ」と喚けば、二人は死入計。冷す心の奥に手を打、父「かるよ〳〵」かる「あいあい〳〵」金「南無三親仁おきられた。金藏が見廻ふたといふて下され。又明日御見廻申そふ」と、歸ればかるは腹も立、「是々去なずと、千世をお囉ひなされぬか」金「いや〳〵いふても大事の緣組。日を見て申出そう」と、へらず口して立歸る。「父樣お目が覺たか」と、姉が障子をあくる跡より、千世もおづ〳〵指覗けば、夜著にもたれて起臥も、なやみ苦しき老の坂、誰かりすとはなけれ共、落くる肉に顏あれて、見かはす親の顏と顏、堪かねて、千「なふ父樣、お藥あがつて今一度、達者に成て下さんせ」と、思はず知らず聲立て、さめ〴〵歎臥しまろぶ。父も見る日に涙ぐみ、「大事ないつゝと來い。つゝと寄れ」と膝近く、父「又去られて戻つたな。子に運ぶ親の心、居ながら千里萬里も行。況てや一ッ家の内寐ても寐られず、最前より何事も皆聞しぞ。そも我ながら斯くも心の變る物か。五十といふ年の内は、行歩心に任せずながら、心は若かりし昔に變らず、氣も強く義理にも引かれ、おのれ重ねて去られたらば、顏も見るまじ物云ふまじとの我もあり

北方の人—姉の夫平六
血筋—千行の涙にかく
親は泣寄—親身は憂き事あれば集まる諺
とはうなし—途方なしにて無茶
百姓云々—俺のやうな百姓の妻にするには一向構はぬ

麗橋貳丁目川崎屋源兵衞殿指置て、直に爰へ突付る仕方も憎し。よい〳〵、此方の人が京からの歸を待て、詰開かせ、大躰で暇は取ぬ。とはいへ世上の女夫中、去るといふ事誰こしらへ、憂目をさせる可愛や」と、歎けば千「わつ」と泣出す聲、姉「高い〳〵。障子の彼方、父樣の寐入ばな。泣くな〳〵」といひつゝも、つとふ涙の血筋とて、親は泣寄憐れさよ。「平右殿御氣色、今日は如何」とつゝと入、おなじ村の金藏。お千世はちやつと姉の影、見付けられじと身を隱せば、金「アヽ隱れまい〳〵。只今堤の茶屋で、大坂へ戻り駕籠の咄で聞た。お千世殿目出度い、去られて戻らしやつたげな」と、口も氣儘のとはうなし、おかるははつと余所よりも、親の聞耳憚りて、「金藏樣たしなましやんせ。聾はなし聲低にいふても濟むこと。千世は去られは致しませぬ、親の病氣を見廻のもどり。奥には父樣すや〳〵と寐てござる。目を醒して下さんすな。ひくう〳〵。おなじくは去んで囉ひたい」と、氣の毒がるほど猶聲高。金「親仁寐てか面白い。なんぼ隱しても慥な事聞てゐます。お千世殿幾度でも去られさつしやれ。彼是の聟達が、踏ひろげた田地でも、百姓の女房には大事ない。おれが持て一夜さも、淋いめはさせまい。去られて戻つた悲いと氣をくさらし、必女房ぶり損ふて囉ふまい。去春囉ひかけた時、おれが方へ

ふじやう｜不情か
たゞずみ｜居る家
風下に云々｜風儀を見習ふな
物しやんな｜物いふな
いた〳〵しー｜かはいさう

千「恥かしや又去られて」と、顔押隠しむせび入。姉も驚く顔に血を上「なふお千世、五度三度の聟入嫁入も世に有習とはいひながら、悪ひ事は手本にならぬ。恥かしい〳〵と、口で云ふ計が、恥を知つたといはれふか。和女もかる〴〵三度の嫁入。尤始の男道修町伏見屋の太兵衛殿、心ふじやうに身躰を持くづし、たゞずみもない様に成果あかぬ別れ。其次は死別れ。互に難はなけれ共、人は和女の辛抱がないゆへに、去られた〳〵と非難付、此度の嫁入も、追出さるゝに間はあるまひ、忘れても島田平右衛門が娘の風下に居るなと、娘持た人々は寄合、茶呑咄にも和女の噂。ま一度戻つては親兄弟、人中へ顔が出されぬとは知りぬいて、「火に入骨を砕かるゝ共帰るまい」「ヲヽ必去られて戻るな」と、念に念をつかふた今度の嫁入。よふ戻りやつた。父様お聞なされたら、お悦びなされうぞ。お顔見せる折が有ふ。必聲高に物しやんな。して半兵衛が暇の状取て戻りやつたか」千世「いや跡の月半兵衛殿、父御の十七年の弔ひの爲め、生古郷遠州の濱松へ。戻り次第道具に添へ、暇の状は跡から。先去ねと譯もいはず、お腹に四月唯もない身を、姑御が手を取て、駕籠に引ずりのせ、むごいつらい」と計にて、歎を見ればいた〳〵敷、姉「子の有物を夫の留主、暇くれる姑、心に一物有はいの。伯母聟ながら和女の親分、高

きやくしん―隔心

めつきり―キハグツ姿（俚言集覽）

ぬか。次郎よ〳〵」と呼廻す門の口、駕籠舁据て、「中々、大坂の新靭八百屋伊右衛門様から」と、駕籠の戸明くれば打萎れ、目元しほよる縮緬の、二重廻りの抱帶、涙の色に染かへて、なく〳〵出れば駕籠の者、「慥に御屆け申た」と云捨て歸るも足早成。親の家さへ女氣の、敷居も高く越かねて、佇む有樣姉は見付、「ヤアお千世おじやつたか。定て御病氣の見廻ならめ。よふこそ〳〵。何故駕籠の衆留めやらぬ。他外でも有やうにきやくしんがましい。酒一ッ進ぜて去しやいの。それ呼戻しや」といへ共、妹はさし俯き、歎けば共に歎かれて、姉「ヲヽ道理〳〵。とふ知らせんと思ひしに、此病ひでは死なぬ。氣のとりにくい舅姑持たお千世、聟半兵衛も忙い時分、聞たり共自由に來る事は成まい、案じさするも不便、沙汰するなとの、病人の氣にもさからはれず、高麗橋の伯母様、常盤町へも知らせぬ。氣遣しやんな京の御典薬に換てから、めつきりと藥も廻り、今朝も粥を中がさに三よそひ。病ひは請取て直すとの、お醫者様の請合は本復もおなじ事。和女の顏御覽なされたら、いよ〳〵父様の病ひはすつぺり直らふ。嬉しい〳〵。お目にかゝりや」と有ければ、千世「エヽ父様はお煩ひか、知らなんだ〳〵。何時からの事でござんする」姉「ヤ何じやお煩ひ知らぬか。そんなら和女何しに來た。何悲しうて泣ぞ」

は半兵衛が歌八百万代の神かけて、結ぶ契」ぞ三重

中之巻

歌「五月雨ほど戀慕はれて、今は秋田のおとし水」軒の玉水とく〱ござれ。繁くござれは名の立に、玉水近き山城の、村は上田に家富みて、庄屋に竝ぶ茅屋根も、内溫に下女、竝んでつむぐ綿車、手廻りもよくいくはへか、庭に五つのたなつ物、積蓬萊の島田氏、平右衛門といふ大百姓、妻は去年の秋霧と、きへても殘る娘二人。惣領かるに入聟を、鳥飼より呼迎へ、妹千世も大坂に、れつきとしたる聟取て、身の入まひは上田の、田畠の世話をやきやめば、萬事限りの俄病ひ。姉のおかるは側離れず。臺所には女子共、「なんと今朝から仕事のはかもいたではないか。ちと休ふ。お竹お鍋」と呼びつれて、思ひ〱に立出る、親のすや〱假寐の、隙を窺ひ女房は、心急く奥より立出、「是々臺所に人が獨もない。つれあひ平六殿は淀川筋、新田開きの御訴訟に、大事の病人振捨ての京上り。男共は皆野へ行。エヽ憎い女子共、我見る前ではちよびかはして、一寸立てば早何處へ。大切な主の煩ひ、藥一ッ溫めふ共せぬ。下々には何が成。圍爐裏の下焚付

五月雨云々—初め慕はれて後捨てらる（諸國盆踊唱歌）

玉水—山城伏見の南にある里

五つの云々—五穀にて米俵を云く

島田—島臺にかく

鳥飼—取にかく

ちよびかは—はたらく振して忙しそうにして

はてくろし—あつかましい
推—粹か
ぞんざい—麁相な奴
しほ—機會
痛い—板にかく

と同座のならぬ奴めが、武士に劣らぬ魂故、結構なお若衆樣の兄樣とは、忝けない〳〵、冥加ない。手付に一寸ほてくろしい事、御めん〳〵。半兵衛樣も氣をお通し」とべつたり抱き付、紺のだいなし白むくに、黑白推の兄弟なり。岡軍右衛門法界悋氣くわつとせき、「コリヤ下良め。見苦い置おれ」と、肩を取て引のくれば、小「コリヤ何なさるる。ム丶聞えたお取持の御酒が過たか。ム丶合點〳〵。流石二腰の御心がけは各別。柔術の稽古遊ばすな。無調法ながらお相手」と、座興にもてなしずつと寄て一當あて、引かづいてうんと投、「ハ丶〳〵〳〵こりや麁相で、ごはりまするでごはりまする」と空とぼけ。甚藏逸平堪られず、一度に寄て胸ぐら摑み、「ぞんざいなる小丁稚め傍輩をなぜ投げた。返報に砂かぢらせん」と引立る。小「扨々お心がけのよい、お前方もこりや柔術か。どりやお相手」と立拍子、二人が息合はつた〳〵と蹴かへせば、板敷より眞逆樣。小「ハ丶〳〵〳〵〳〵こりや又麁相御めん〳〵」といふをしほ、三人ぐず〳〵起上り「エ丶どんな所へ給仕に來て、酒もつて尻踏まれた」と、袴の腰の痛い顏、堪へてこそは歸りけれ。半兵衛ぞく〳〵小氣味よく、「扨も手際小一兵衛。我は他國便なき弟が事頼む〳〵。今日の料理の御褒美に、二人が事を旦那へ訴訟。權柄晴れて念比さする、其中立

見ぜせり—尻ごみする
七のづ—脛を高く褰ぐ
二合半—奴の扶持米
おだい—飯
てきない云々—辛い事でござります
かぶつて—食つても
まらせぬ—ませぬのなまり

らば、此場にて指違へ、人の構はぬ未來での念者若衆。サア弟をやる、何方成共兄弟の契約〳〵」と、三人を睨付る。思ひがけなき抜身の盃、死裝束に吃驚して、三人「へよん〳〵」と咳に紛らし身ぜせりし、ぐつと云ひ手も無りけり。道具屋御門脇の長屋より、紺のだいなし、裾七の圖迄引からげ、一ふりふつて振出すは、戀にこひとや小一兵衞、三人の鼻の先尻付出してかつつくばひ、小「兄御半兵衞様のお手前も、シャお恥しいべいながら、小七様にとんと打込、二合半のもり切おだい。喉につまつてぎつちく〳〵。てきないこんでごはりまする。今日君がお情をつん出して、未來では拙者めを、お念者になさるべいとは、有難いやら悲しいやら。セヽ〳〵〳〵唐がらし、五つ六つかぶつても、こんな熱い涙は出ませせぬでごはりまするでごはりまする」と、白刃を取て立よれば、小七郎も引よせて、すはやと見へし刀の中、半兵衞飛入「コリャ狂氣したか小一兵衞」と、二人を左右へ引分る。小「コレサ上方のお旦那、糟味噌汁の御恩にかへたお若衆、爰で死なねば心中が見へまらせぬ。是非に死なせて下され」と、立上るを引伏せ、半「男氣見えた。小七郎に誠の惚手はそち一人。爭ふ者が有てこそ、大事の弟を殺ふづれ。爭手のない若衆。山脇半兵衞が挨拶、向後兄分に頼んだぞ」「ハヽはつ」と悦び小一兵衞、「お侍方

立分―義理立を分つ
いきかた―氣立てに惚るゝ
しみしたゝるう―しつこく

ては置ながら、一通も封を切らぬがいづれも樣への立分。どなたに隨ふ心もなし。兄半兵衛の存られし事でなし。此文封の儘に御返弁、覺し切て下され」と、男色たてぬく詞の優さ。「其いきかたに猶なづむ」と、しみしたゝるふ取廻せば、半兵衛見かね、「ハテサテ聞分もないかた〴〵。形こそ町人心は侍。拙者が目利で惚手の內へ遣りませう。コリヤ小七郞、裝束せい」と心を目にて知らすれば、小「あつ」と心得うなづきて部屋に入れば、半兵衛多くの文の上書讀、「ハヽァ皆おの〳〵の名書。此一括の上書に、小一兵衛とは誰事、御存ないか」と問ければ、三人共口を揃へ、「其小一めは此屋敷の中間。へヽエ慮外な下主めが、遣りおつたは」とゑせ笑ふ。半「イヤそうで御座らぬ。此道に高下はない。其小一兵衛も呼出し、幷べて置て念者に賴む」「イヤ〳〵下主め、身などと同座に置奴でない。殊に留主やら頰も見ず。無用〳〵」といふ所へ、山脇小七郞白小袖に淺黃上下、覺悟極て座につけば、半兵衛は取敢へず、肴だいの三方に拔身二口弟の前に置、半「惚手は四人、ほれられ手は弟一人、何方へ進ぜても殘る三人の恨。此兄は他國住居行末も氣づかひ。いやと云はさぬ御所望。歷々のお侍、町人風情に手を下げてのお賴、のつぴきならず。弟に覺悟させての死裝束。表面計の戀慕でなく、末來迄も小七郞不便と思召すな

鐵枴—鐵枴仙人
ねまり—座る事
たくり—せがむ
外良—藥の名、透頂香
衆道—男色
御せい道—禁制

役めに立別るゝ。臺所には半兵衛一人、庖丁生箸薄刃俎板取片付、煙管くはへて吹息に、鐵枴が皺を延ばしけり。二番ばへ共はら〳〵と立寄、「拙者らは鄕左衛門組下の弓役共。身は山脇小七郎の舍兄とな。早速の無心。弟の事を頼むも馬鹿らしけれど、前髪姿に神ゝぞ爪先よりぎり〳〵迄打込、毎日〳〵しづ心なき玉梓。奉書の代も五百目計。身上を紙に打こんでも、つれない小七郎、兄き是非所望申た。是軍右衛門がねまり申て、手をつかへる。こりやさ拜み申す。吳れ申せ」と、たくりかゝれば、甚藏逸平、「コリヤ半兵衛、おゝとゆつたらむつかしいぞ。外方にも惚手が有。奉書代は愚な事、君に懸つて壹貫五百が外良積んだ此甚藏。弓矢八幡身にくれろ」逸「イヤサ此逸平にくれろふ」と、耳際に嚙付ごとく、惡風吹かけ眼もくらみ、前後忘ずる計なり。煙管も放さず半兵衛大あぐら。半「御城下のならひ衆道御法度。おゝと云へば弟が首が御座らぬはいの」三人「イヤサ當國は女の淫亂は、下々迄御せい道、衆道にはお構なし。三人の内どれへなりと、魂すへて返事せろ」と もやつく後に小七郎、是迄請し文一抱へ、半兵衛が前に置、小「兄者人の手前も恥しながら、斯う成上は隱されず。數ならぬ私にお執心とは、振袖の身の思ひ出。忝いは山々なれど、獨ならず彼方此方の文の數、無下に返すも情しらずと、請取

ひつぱなし―聽せずいひきる所

山の芋で云々―諺にて思ひもよらぬものにやられた

夕陽―せくにかく

とて、五尺余りの大芋、一寸足らずに切碎く、言語同斷手打にする奴なれ共、他國者といひ御成の時節、屋敷に叶はぬ出てうせべい」と、息詰つたる腹立は、詞少に凄じし。半兵衛膝も動かさず、「是は旦那の御意共覺えず。今日の御料理、隨分切形に氣を付、心一ぱい出かせしと一分自慢。御褒美はなされいで存の外の御叱り。惣じて貴人大人へは何に限らず、斯樣の珍しき物お目に懸けぬが料理のならひ。大名高家は大樣にて、一度お目に觸れられては、澤山に有物と思召、隣國のお出合にも、身が領内には、珍き山の芋有などと、お國自慢のお咄の上、ふと餘國より御所望の時、跡へも先へもいかず、國中を尋ても有合せず、自から殿樣を嘘つきにしてのける。そこを存て常の如くの調味は、旦那へお奉公と存ぜしに、御機嫌に違ひしは身の不仕合。如何樣共御存分に遊ばせ」と、どこやら詞のひつぱなし、殘る所が武士かた氣。鄕左衞門口あんごり、「ム、こりや尤。イヤ尤。あやまり申たく〳〵。其方が云分眞直に、御前へ申が又御馳走。やれやれ〳〵〳〵山の芋で足突た」と、どつと笑へば「早お立」と、お供廻が振出す毛鑓、臺笠立笠大鳥毛、乘物引馬斷き立、御城内迄お禮の御供。鄕左衞門もお輿にそひ、暮ぬ間の御歸城と、氣も夕陽の 三重 入日影、座敷の仕廻は侍がた、庭の締は中間小者、役め

輕薄云々—追從たら〳〵のし上る

うつたり云々—皷を打たり舞うたりにて一人で何もかもやる態

目八分—息のかゝらぬ高さに持つ（松屋筆記）

殼蜆—蜆の貝ぐるみ

てうど—十分

と、輕薄ぬらくら口に鱸の、油とろりとのせ掛くれば、「されば〳〵今日の仕合せ。手下の百姓、殿のお成を聞付、身が歸るさの道、料理にせよとてくれしは幸、今日の御馳走これ一種。お身が自慢の庖丁、隨分切形を出かしてくれ。賴む〳〵」と詞の下、お成門の貫の木の音、「すは殿の御入」と犇けば、鄕左衞門も次の間に、袴改めお迎とて出ければ、山脇小七、岡大橋、金田も續いて急ぎゆく。半兵衞料理に心は急く、うつたり舞ふたり身は一ッ、薄刃追取五尺の大芋三寸計切調へ、つゐ皮むいてちよき〳〵。葛醬油の出し鹽梅、煮かたは急ぐ、殿のお顏も拜みたし、座敷口より指覗けば、御城主も股引がけ上段に著給ふ。一間隔てゝ近習の人々、鷹匠犬引列卒足輕、玄關の小庭に居余り、臺所口を押通り、長屋々々を休息場。奥には料理の勝手を急ぎ、主鄕左衞門、殿の御膳目八分に持出れば、思ひ〳〵に給仕の作法、お汁がかはるかへ食繼、初獻の肴は鮹の足、一きれ當の引重箱。二獻めも御機嫌よく、お盃がかはつて平の蓋。有がたがための臺引物、定の通り御酒三獻、吸物は殼蜆、思ひの外の無馳走に、上には御悅喜納の盃、坂部もてうど下されて、首尾よく御膳はとれにけり。鄕左衞門板本に立はだかり、半兵衞を睨付、「今日の料理は芋一種。でつかい所を御目に懸くるが御馳走。どの樣に切れば

錦の直垂—宗盛より貰へり

佐々木源藏—高綱の父秀義、身貧なれども平家につかず

おもうし—饗應

むろ—伊豆の室の鯵は名物

圖なし—方圖もない大きい

を止むる一家中への御異見、夫を察せぬ御家中の二番ばへ逢のざまを見よ。木挽丁堺丁の役者からつりをとる衣紋付、をのが身の分限も知らず、一がいに殿がお吝い〱と、勿躰ない陰言。綾錦を召れてもお大名、綿服を召れてもお大名。齋藤別當實盛が、最後に錦の直垂は著たれ共、源氏を捨平家へ返忠の武士。心は汚れし襤褸同然。又佐々木源藏は二君にも仕へず、襤褸の肩を裾に結び、頼朝の御代を待しは心の錦。今の武士の美麗を好むは。實盛佐々木が遺風を芳しと思召す、此殿の御行跡は下を寛げ世を豊に、賣買を安くせん爲の御儉約。武士は元より町人のそちとら迄、此恩を忘るゝな。朝夕の御膳部も一汁三菜、酒も數を定られ三盃限り、今日のおもうしも麁相程御意に入。獻立も書に及ず。コリヤ食は赤まじりの古臭いをすつくりと焚かせ、かき立汁に小菜のうかし、向漬はおろし大根鰯膾、燒物はむろの酢いり、それも二ッ切、引て古茄子の香の物。扨ひらにはヲヽそれよ、家來に持たせし山の芋、是へ〱」と呼出せば、五尺計の山の芋、中間二人が指荷ひ、料理場の板敷へ、菰を放して舁あぐれば、半兵衛横手を打、「扨も圖なし。御當地は芋所か一生の見始。大坂で見世物に致したら、錢銀の攫取。第一お家の吉相。何故と申に、今日は殿の御成、旦那の御出世、追付山の芋から鰻にお成なされふ」

御堂―朝鮮人來りし時御堂を宿に宛てたり

中ても―何をいふても

松茸―待にかく

口も料理―料理と同じく口も鹽梅よくいふ

しぶき―繁吹にて風に吹かれて飜るが面倒なれば再び著るな

ふ〱はい出で手をつかへ、半「お國の御家風も存ぜず、お獻立を致せしは無調法。先達てお使に、一汁三菜との御意なれ共、大坂藏屋敷留主居方の振廻でも、隨分輕いが二汁五菜。結構にはだん〱。朝鮮人の饗應御堂へも雇われ、七五三五々三、山影中納言の家の切かた、料理一通りは承り傳へしゆへ、中でもお大名の膳部、よもや一汁三菜とはお使の聞あやまりと、いはれぬ念を入過しは猶無調法。お好みの一汁三菜我らが手際で、きり〱しやんと切立焚立、鹽梅能の御機嫌よき御意を松茸、つけ竹の子、生にかはらぬ仕樣が祕密」と、口も料理の鹽梅加減。鄕左衛門打笑ひ、「ムヽ山脇三左衛門が世悴なれば、身が爲にも家來筋。親の廟參奇特々々。幼少より他國に育ち、當御代の御風義知らぬは道理。料理は勿論衣類諸道具、すべて無益の費お嫌ひ。上方でも風聞はないか、去年十月高師山のお狩場、身が相役佐野文太左、始ての御供に縮緬の羽織著召れたを、殿がじろ〱と御覽なされ、縮緬は風にしぶき面倒な、重ておけろ。是をくれると御意なさ　御手づから下された召替の木綿羽織。さしもの文太左はつと赤面。其後此事を工夫すれば、お供に參る文太左、縮緬の羽織著めされふ樣がおりない。かねて文太左にお示し合せ、諸家中の見るまへ、木綿羽織を下されしは、美麗御停止とはなく、自ら奢

一こぶし—今一
息
たまげ—吃驚

かりそめ—借る
にかく

飛と思へ共、氣情も心計。去ながら殿には今一こぶし、遊ばし御入有ぞ、急く事はあらない。先お獻立を一見」と、長々と書付たる半讀さし、大きにたまげ、「こりやなんじや、殿の御膳は一汁三菜と先達て云越す所、三汁九菜の魚鳥づくし、身が身上を板本で切はたくか。此獻立は誰が指圖」と、以の外の不機嫌に、頭も光りちらかせり。小七郎しとやかに「憚ながら此義はお侍中の指圖ならず、二三日以前より、お長屋に逗留致し罷有、大坂の住人、靱油掛町八百屋半兵衛と申て、元は御當地遠州生れ、私とは腹がはりの兄。樣子有て五歳の時大坂へ立こへ、町人に奉公し、商人の養子と成、今の親は八百屋伊右衛門、實父山脇三左衛門は、私が生れし年相果、當年十七年親の墓への年忌まいり、私事も懐しく、召使はるゝ御主人へ、御禮も申たしと、逗留致せし兄半兵衛、商賣は八百屋殊更料理きゝ、幸と今日の御獻立を、致させし不調法は私。お目出度き折から、御機嫌を直され、兄へも御逢ひ下されかし」と、恐れ入たる謝罪に、主人の顔も打解くれば、小「是半兵衛殿能折のお目見へ。お獻立も仕直すため早う〳〵」と呼立る、聲を力に兄半兵衛、魂は武士なれど、三十余年町人に、業も姿もしみ付し、料理袴をかりそめに、御前といへば氣もおくれ、臺所の板敷けつま付やら滑るやら、は

引木云々・茶を挽くに忙がし
おちた—死んだ
三枚—肉を三枚に分ける
二番ばへ—二番息子
立かけ云々—大通な髮の結立ちにて頭計り見事なり
壁に馬—唐突の俚諺
手づつ—不調法
心を盡させ—氣を揉ませる
無下ない—無情

饗應なり。組下の二番ばへ、金田甚藏岡軍右衞門大橋逸平、打揃ふたる血氣ざかり。立かけのんこのあたまがち。裾はおるすの勝手見廻、「いづれも御苦勞〱。今日お鷹野より直お腰掛けらるゝとな。急なお成でさぞ取込。お料理組もふ出來たか、早し〱。我我も幸非番、用あらば遠慮無用」と挨拶口々。座敷口より小姓山脇小七郎、生花屑を花盆に、花の露うく前髪ざかり、する〱と立出、小「是は〱日比の御懇意、お揃ひなされての御出、主人鄕左衞門嘸滿足。只今の殿樣前代と違ひ、何角に付て輕ひお身持、壁に馬乘かけし今日のお成。主人は御供我々が當惑、掃除等もそこ〱。書院の筆架かざり石、生花も手づつながら、間に合はするも奉公。御内見の上御直し下され」と、詞も風も出過ざる、若衆とぬか味噌の味は屋敷に極りし。金田甚藏、岡大橋、「何か〱、君のお手際僻事が有ふか。去ながら人に心を盡くさせ、無下ない心が一ツの疵」と、目面も明ぬ取込に、額で睨みつ袖引つ、手の中つまむも一むかし。古ひ仕掛が田舍なり。坂部鄕左衞門衣服のきらも世につれて、戒むるとはなけれ共、上に從ふ木綿羽織に紺股引、鷹野出立のりゝしげに、すた〱と立歸り、鄕「家來共掃除は出來たか。ヤアいづれもお見廻過分。いやさ〱年はよるまい物。岩松村岩水寺の門前よりお暇請、たつた一

心中宵庚申

作者　近松門左衛門

上之卷

花のお江戸へ六十里、梅の難波へ六十里、百廿里の相の宿、都離れて遠江、濱松の一城主淺山殿の御在國。町屋々々の賑ひ商ひにたゆみなく、武士は弓馬に怠らず、日まぜ〳〵のお鷹狩、上一人の勵より、犬も油斷はならざりし。お家相傳の弓頭、坂部鄕左衛門、六十の皺の夜る晝なく、お側去ずの野出頭。今日も鷹野のお供にて、留守の屋敷は大手の見付、お鷹歸りの御入とて、晝當場より先案内。給人若黨お出入の町人迄、降て湧いたる忙しさ。御成座敷のかへ疊、床に掛物臺子の埃、掃いつ拭ふつ、お庭の掃除どつさ草引薄茶挽、茶道は引木にもまるゝ。實誠忘れたりとよ門の盛砂、小者は箒にもまるる。臺所の板本には、青物の淵魚鳥の山、獻立は三汁九菜、おちた肴を吟味の役人、こりや目出鯛を三枚におろし、山葵は八百屋が請取、南京の皿蒔繪の家具、善盡くしたる

梅の難波―王仁の歌より梅の難波といふ
日まぜ―隔日
弓頭―弓の組頭
夜る…皺のよるにかく
野出頭―えせ權門などの意か
留守云々―坂部の留守宅は城の表門の見張所
當場―狩の現場
どつさ草―混雑にかく

ふつつと—弗にて少しもと同じ

ひぐわん—悲願

千日—刑場にいひかけ與兵衛が死刑に行はれしを知らす

難義、不孝の科物躰なしと、思ふ計に眼付、人を殺せば人の歎き、人の難義といふことに、ふつゝと眼付かざりし。思へば二十年來の不孝無法の惡業が、魔王と成て與兵衛が一心の眼を眩まし、お吉殿殺し金を取しは河内屋與兵衛、仇も敵も一ッひぐわん。南無阿彌陀佛」と、いはせもあへず取て引敷、繩三寸に縛上れば、早町中が駈付〳〵、すぐに引立引出す。果は千日千人聞、萬人聞けば十萬人、殘る方なく世のかゞみ、傳へて君が長き世に、淸からぬ名や殘すらん。

胸がいーむなぐら
大裡ー朝廷
きはづき云々ー物がしみついて剛くなつて居る

踏こかし、一世一度の力の出場。棒ねぢたくり一振ふればわつと逊る、透を伺ひ迯んとすれば、「ソリャ迯すな」と追取まく。小庭の内を追つ返しつ、一二三ど四五ど透も見合せ、くゞりぐはらりと迯出る。門の前に兩三人「どつこい捕た」と、胸がい攫んで捻すゆるは、檢非違使の別當大裡の廳の官人なり。跡に續いておぢ森右衛門聲をかけ、「最前より各表に立給ひ、家内の一々殘らず聞屆けられしぞ。必未練に陳ずるな。エヽ是非も無やな。世間の風說、十人が九人をのれを名ざず。聞度に此おぢが心の中を推量せよ。事顯れぬ先遠國へも落すか、さなくば自害をすゝめ、恥を隱しくれんと、新町曾根崎行さきく\を尋ねても、跡へ廻り跡へめぐり、出合ぬは己が運の極め。それ太兵衛其袷是へく\。則五月四日の夜著し出たる己が袷。所々のきは付こはゞり。大裡の廳より御不審。只今證跡の實否、己が命生死二ッの界なるぞ。誰かある酒々」「あつ」と云より銚子燗鍋、手ッ々に引提げさらく\さつとこぼしかけ、かゝる甥持弟持ち心を碎く涙の色、酒しほ變じて朱の血潮。伯父甥顏を見合て、「あつ」とより外詞なく、惘れ果たる計なり。與兵衛覺悟の大音上、「一生不孝放埓の我なれども、一紙半錢盗といふ事終にせず。茶屋傾城屋の拂は、一年半年遲なはるも苦にならず。新銀一貫匁の手形借り一夜過れば親の

そらさぬ顏ーぬからぬ顏

己がもめー己が使つた也、もめは物をつかふ詞（色道大鏡）

まつこうー先づ斯う

一日我等夫婦、野崎參り致せし日、かいしゆの善兵衞、はけの彌五郎、河内屋與兵衞三人連で、參りしと咄せしが、其割付に極た。お吉を殺手も大かた是で知ました。三十五日の逮夜に當り、鼠が是を落すといふも、亡者が知せに疑ひない。是も佛の御恩德、アヽ南無阿彌陀」とひれ伏て、悦ぶ心ぞ道理なり。氣味惡ながらおり〳〵の、訪音づれも我仕たと、人にいはれじ覺られじと、一倍大柄そらさぬ顏。「河内屋の與兵衞でやす」とつゝと入、與「つい三十五日の逮夜になりましたの。殺した奴もまだ知れず、氣の毒千萬。したが追付知れましよ」と、我と口からむかふの吉左右。七左衞門尻ひつからげより棒追取、七「ヤイ與兵衞、女房お吉をよふ殺したな。をのれは爰へ縛れに來たか。遁れはない」と棒振上る。與「アヽ七左衞門聊爾するな。シテおれが殺した其證據は」七「いふな〳〵、野崎參りの割付、十匁一分五リンといふ書付、所々に血も付て、己が手に紛い無い。此外に證據が入か。同行衆捕へて下され」と、つかみつかん其勢。與「南無三寶顯れし」と、突上る胸の動氣じつと押へて苦笑、「此廣い世間、幾人も似た手が有まい物でなし。野崎參りの入用はおれがもめ、割付も何にも知らぬ。よい年をして馬鹿ひろぐな。をのれ等迄も同じ樣に立騷いで何と仕をる」七「まつこうする」と、摑み付を取て投、寄ば蹴倒し

稱名—佛名
もらかします—遣はしました

よも有まじ。此御さいそくに心驚き、彌一遍の唱名も悦んでお勤なされ。必歎せらるな七左殿。殺手も其内知ませふ。たゞ御息女の介抱が第一。先立人も夫をこそ滿足」と、しめせば有がた涙ぐみ、七「さやう共〳〵。お吉がことは思ひ忘れ、是も如來のお蔭と、信心堅固に悦びを重ね、行住坐臥に稱名は欠かしませぬ。去ながら乙のおでんめは二ッ子、乳がなふてはと不便に存じ、死んだ翌日金付て余所へもらかします。姉はよふいひ聞せたれば合點して、香花のきれぬ樣に佛壇について計ゐますが、なふ中娘めが朝から晩迄、母樣〳〵といふてほゑ居ります。是には困果ました」と、ちやつと後の壁向て、聲を呑だるすゝり泣。「尤さこそ」と同行衆も、濡さぬ袖はなかりけり。折節居間の桁梁、通る鼠の怪しからず、蹴立蹴かくる煤埃、反古をちらりと蹴落して、鼠の暴れは靜りぬ。同行「ソレ何やら落た七左殿」七「誠に是は」と取上見れば、半切紙に一ッがき、十匁一分五リン、野崎の割付、五月三日と計にて、誰から誰への名宛もなく、色こそ變れ所々血に染つたる書出し一通。七「不思議の物」と手に取廻し、「是は誰やら見た手じやはいの」同行「我等もどふやら見た手の風」七「ア丶河内屋の與兵衛〳〵」同「それよ〳〵」と四五人の、口も與兵衛に極まれば、思出して七左衛門、「誠に死だ亡者が物語。四月十

花色—はなだ色

變生男子—も言が來世に男子と生れる願立、法華經の句

熱い茶四五服呑程の、間もすかさず森右衛門、行燈目あてに花屋の門口、「花車に逢ふ爰へ〳〵」と呼出し、「河内屋與兵衛が跡追て參つた。二階に居るか下座敷か、罷通る」とつゝと入。花「是々申、新町に紙入忘れたとて、たつた今お歸り」森「何だ歸つた」花「まだ梅田橋越か越さずか」森「是はしたり又跡へん。然らば明日にも與兵衛が參り次第、酒でも呑せ爰に留置、早々本天滿町河内屋德兵衛方迄急度知らせ。只今參りがけ櫻井屋源兵衛へも立寄、吟味致せば五月四日の夜、大金三兩錢八百受取たと有。爰元へは何程拂つた。隱しては其方が爲にならぬ。眞直にいへ〳〵」花「私方へも五月四日の夜に入て、大金三兩錢一貫文」森「シテ其夜は何を著て參つた」花「廣袖の木綿袷、色は慥花色か、しつかりとは覺ませぬ」森「ムウよい〳〵。はひれ〳〵」といひすてゝ、元來し道を引返し、又新町へと三重、和讃變生男子の願を立、女人成佛誓たり。願以此功德平等施、一切同發菩提心往生安樂國。釋の妙意、三十五日お逮夜の心ざし、お同行衆寄集り、勤も既に終りける。中にも同行中の老躰、帳紙屋五郎九郎、「昨日今日の樣に思ひしが、早三十五日の逮夜に罷成。廿七を一期として不慮の橫死。平生の心立人に優れ、上人の御恩德報謝の心も深かりし。此世こそ劍難の苦は有共、未來は諸々の業苦を除き、本願往生疑ひは

幸左衛門、文藏—何れも當時の俳優
べり—しやべりの略
我—きさま
何がなしほ—何かの機會に

仕替て幸左衛門がするげな。殺手は文藏憎いげな。與兵衛様まだ見ずか。小菊様連まして ちとお出。やれお盃持てこい」と、たつた獨でべり立る。與「後家たしなめ。ちと人にも物云せい。生れて與兵衛こんなむさい床几の上で、酒呑だ事なけれど今日は許す。東隣借り足して、與兵衛が座敷分に一ツこしらや。材木諸色諸入目、見事に我等仕る。きつい物か〳〵。エげびた此蒲鉾の薄い切様は」と、潛上たら〳〵暴酒、しばらく時をぞ移しける。「與兵衛爰に居るか、知らす事が有て來た」と、はけの彌五郎床几に腰かけ、「我を侍がさがすぞよ」與「ヤしてそりやどんな侍が」と、胸にきつくり横たはるも、心に包む惡事の塊。俄に顚倒うろ〳〵眼。彌「ハテきよろ〳〵すないやい。昨日から兄が所へ來て居る侍じやとやい」與「アヽ夫で落付た。高槻のおぢ森右衛門逢ふては難義。爰へ尋ねて來ふもしれぬ。早ふはづして逢ともない」と、思へど急にも立れねば、「何がなしほに」と見廻し〳〵、「アヽ思ひ出した。新町に紙入忘れて來た。中にうめく程金入て置た。つい一走り取てこふ。はけも來い」と立出る。小菊引留、「アざは〳〵と何じやの。有所の知れた紙入、明日なととらんせ」與「イヤそふで無い〳〵。ふところが重とふ無ければ、つんと遊ぶ心がせぬ」と、袖引放し二人連、根から忘れぬ紙入の、空贅吐てぞ急ぎける。

三のづ—膝頭の邊
君を待夜云々—松の落葉七にある唄
頼もの鴈—田の面と頼むとかく
さうあう—相應

へ參らずか。氣遣の無い用事有て尋ねる者、隱されては彼が爲ならず。サア眞直が聞たい〳〵」松「まちつと先に見へまして、是から直に曾根崎へ、叶はぬ用とて御座りんした」森「何じや曾根崎へ。南無三寶遲つた。拙者も跡から參らずば成まい。次手に、も一ツ尋ませふ。五月の節句前か、後か、六月へ入ては漸六日。其間に爰元で金銀の拂ひ、金澤山に使ふたことは御座らぬか。是も隱さずお知らせなされ」松「どふござんすぞ、金のことは存じやせぬ。やり手にお問なさりんせ」と、いひすて局についと入。森「是は我等不調法。よしそれとても與兵衞に逢へば知るゝこと。道も知つたる曾根崎へ、たつた一飛一走り」と、尻三のづ迄ひつからげ、揉にもふでぞ三重、歌君を待夜はよやよやよ、西も東も南もいやよ。兎角待夜は北がよい」さきにも待は待ながら、こちからひたと行通ふ。道の犬さへ見知る程、うつゝ拔せし河内屋與兵衞、小菊にあふせを頼もの鴈よ。新町の花を見棄て蜆川、爰の花屋にたどり寄る。後家のお龜出迎ひ、「たま〳〵見へるお客にこそ、よふお出がさうあうなれ。與兵衞樣は爰が家、ちと風變り御出を止て、戻らしやんしたか。小菊樣呼びましや。内は上下座敷もつまる、濱の床几で大く酒盛。きり〳〵と呑かけましよ。小菊樣サア爰へ、行燈に油さしやや。油の次手に油屋の女房殺、酒屋に

ひんしやん―おてんば

放埒、若やと詮義も寄付ねば、先々尋ね廓の内、東口にて尋ねしに、そんじよ其處とは敎へしかど、何れも同局のかゝり。爰や備前屋、是や敎へし備前屋のかど、見まがひたたずみ居る折ふし、手にかさ高な文持て、西の方からくる禿。森「是々物問はふ。備前屋と申傾城屋はいづかた。其御内に松風殿と申傾城、御存じならば敎へてたべ。我等當所不知案内頼入」とぞかたくろし。禿「フウ子細らしい物の云樣、備前屋は此家、西の端に戸のさいた、客の有局が松風樣でござんす。コレお侍樣、左の足上さんせ、ソレ〳〵又右の足も上さんせ。ヲヽよふ上さんした。いかい世話の」と、弄てひんしやん行過る。森「所柄とて人に馴れ、エ氣輕い奴」と打笑ひ、敎へし局に立寄れば、内に火影は有ながら、戸口ひつしと立詰たり。森「扨こそ客は與兵衛に極る。出るを捕へ逢はん物」と、待間程なく戸を開き、編笠かづき立出る。すかさずむずとひん抱かゆる。女郎も續いて「こりや誰ぞ。卒爾せまい」と引別る。森「苦しからず卒爾で無い。をのれ與兵衛め、匿れたらば逢ふまいか」と、笠引ちぎり顔見合、森「ヤアこりや與兵衛で無い人違。まつぴら〳〵面目なや」と、腰折て手をすれば、きやつも忍びの戀やらん、うなづく計顔かくし、東の方へ走行。森「河内屋與兵衛に深い中と、音に聞松風殿。昨日にも今日にも、與兵衛は爰元

打とけ—中にかく
せんだの木—栴檀の木か
薄氷—戰慄の狀、小學にあり
四筋—新町の四つの町は妓も揚屋も國中無双
紋日が云々—紋日には賓入があるからも少しあれかしと也
忘八—揚屋の亭主
變替云々—厄介かけると變替する客もあれば賴まれて勢よく應ずる客もあり
位—太夫天神などの位

の上に鳴雷の、落かゝるかと肝にこたへ、戸棚にひつたり引出すうちがひ。上銀五百八十匁、宵に聞たる心當。ねぢ込ねぢ込ふところの、重さよ足もおもくれて、薄氷を履火焰踏。此脇指はせんだの木の橋から川へ、沈む來世は見へぬ沙汰、此世の果報の付時と、内をぬけ出一さんに、足に任せて。三重をしてるや、浪華の春は京に負け、京は浪華の景色より、劣るみな月なつ神樂、遊廓四筋は四季共に、散こと知らぬ花揃。妓の風俗揚屋のかゝり、富士も及ばぬ戀の山、第一日本の名所なり。一年に三百六十日、紋日が三日足らぬとて、忘八はなげく、女郎は夫程客に厄介を、變替に行客も有、好んで賴み賴まるゝ、客は一際いかつげに、籠を飛する揚屋客、扇で忍ぶ茶屋の客、一座遊びは女房めく。肩で風切からぞめき、位を問ふは田舍客、寐て物語る名染客、太皷過てと吽くは、女郎の手もめのふる廻客、親おや方の持客有、我身上の滅却有。飛脚も交り行通ふ、道の間をしばらくも、口たゞ置くは恥らしく、役者物まね地の物まね、小歌淨瑠璃口てんがう、西口東口々に、行も歸るもさはりなき、夕べ〳〵の大寄は、豊成世のいさをしなり。されば山本森右衞門、與兵衞が身持の知せに驚き、暫く主人に暇請ひ、大坂へ立越へしが、女殺して金取しも、慥に夫とは知れね共、衆目の見る所、與兵衞に指差す身の

出合―サア來い
をとほね―聲
あをち―煽つ事
さしもげに―挿すとかく
をくれ―怖ろしがり

い」と、跡退りして寄る門の口、明て迯んと氣を配れど、與「ハテきよろ〳〵何おそろしい」と、付廻し〳〵、「出合へ」とわめく一聲。二聲待ず飛懸り取て引締め、「をとほね立るな女め」と、喉笛の鎖をぐつと刺す。刺されて惱亂手足をもがき、吉「そんなら聲立まい。今死んでは年はもいかぬ、三人の子が流浪する。夫が可愛ひ死共無い。金も入程持て御座れ。助けて下され與兵衛樣」與「ヲヽ死に共ない筈尤々。こなたの娘が可愛程、己も己を可愛がる親仁がいとしい。金拂ふて男立ねばならぬ。諦めて死んで下され。口で申せば人が聞、心でお念佛南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」と引寄て、右手より左手のふと腹へ、刺てはゑぐり拔ては切。お吉を迎ひの冥途の夜風、はためく門の幟の音、あをちに賣場の火も消えて、庭も心も暗闇に、打まく油流るゝ血、踏のめらかし踏すべり、身内は血潮のあかづら赤鬼、邪見の角を振立て、お吉が身をさく劍の山。目前油の地獄の苦しみ、軒の菖蒲のさしもげに、千々の病はよくれ共、過去の業病遁れゑぬ、菖蒲刀に置く露の、たまも亂れて三重いき絕へたり。日比の強き死顏見て、ぞつと我から心もをくれ、膝節がた〳〵がたつく胸を押しさげ〳〵、提たる鎰を追取て覗けば蚊帳のうちとけて、寐たる子共の顏付さへ、我を睨むと身も震へば、つれてがらつく鎰の音、頭

きつう―どうあつても
油二升―賣て錢にする爲
つめて―はいるだけ入れてあげよ

ず、生ては居られず、詮方なさに見掛ての御無心ぞや。無ければ是非もなし、有金たつた二百匁で、與兵衛が命を繼で下さるゝ御恩德、黄泉の底迄忘れふか。お吉樣どふぞ貸て下され」と、いふ目の色も誠らしく、そふした事もと思ひながら、かねての僞り是も又、其手よと思返して、吉「フウヽまが〳〵しいあの嘘はいの。まだ尾鰭付ていはしやんせ。ならぬと云ふてはきつうならぬ」與「是程男の冥利にかけ、誓言立ても成ませぬか。ハアはあ何とせふ借ますまい」と、いふより心の一分別。「そんなら此樽に油二升取替て下さりませ」吉「夫は互の商ひ内、貸借せいでは世がたゝぬ。成程つめて」と賣場にかゝり、消る命の燈火は、油量るも夢の間と、知らで升取柄杓取る、後に與兵衛が邪見の刀、拔て待て共見ず知らず。吉「祝ふて節句も御仕廻なされ。こちの人共割入て相談、有金なれば役に立まい物でなし。五十年六十年の女夫の中も、儘にならぬは女のならひ。必私を怨んでばし下さるな」といふ内に、燈油に映る刃の光。お吉びつくり、「今のは何ぞ與兵衛樣」與「イヤ何でも御座らぬ」と、脇指後に押隱す。吉「それ〳〵急度目もすはつて、なふ恐ろしい顏色。其右の手爰へ出さしやんせ」與「をつ」と脇指持かへて「是見さしやれ。何も無い〳〵」といへ共、お吉身もわな〳〵、「アヽこな樣は小氣味の悪い、必傍へ寄ま

値ある新銀二百目の借金に僅か八百文位の錢では追付かぬ故

不義になつて云云—此一句千鈞の重みあり

け、どこに心が直つた。噓にも金貸てくれとはいはれぬ義理。世間の義理を欠いても、金借て悪性所の拂ひして、跡から段々行こふでな。成程金は奥の戸棚に、上銀が五百目余り、錢もありは有ながら、夫の留主に一錢でも貸ことはいかな〳〵。いつぞやの野崎参り、著物洗ふて進ぜたさへ、不義したと疑はれ、云ひ譯に幾日かゝつたやら。なふうとましや〳〵。歸られぬ内其錢持て、早ふいんで下さんせ」と、いふ程傍へにじり寄、與「不義に成て貸て下され」吉「ハテならぬといふにくどい〳〵」與「くどふ云ふまい貸て下され」吉「イヤ女子と思ふてなぶらしやると、聲立て叫くぞや」與「ハテ與兵衛も男、二人の親の詞が、心魂に浸こんで悲い物。弄るの侮るのといふ所へ行ことか。何を匿しませふ、跡の月の廿日に、親仁の謀判して上銀二百匁、今晩切に借りました」吉「ヤ」與「まあ跡を聞て下され。手形の表は上銀一貫目、借た金は二百匁、明日になれば手形の通り、一貫匁で返す約束。夫よりも悲しいは、親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ、先様からことはる筈。今に成て此金の才覺、泣ても笑ふても叶はぬこと。自害して死ふと覺悟し、是懐に此脇指はさいて出たれ共、只今兩親の歎御不便がりを聞ては、死で此金、親仁の難義にかくること、不孝のぬり上身上の破滅。思ひ廻せば死るにも死なれ

とかく

裏問―内の様子をそれとなく尋ねる

まんが云々―仕合が直る（俚言集覽）

新でたつた云々―常の銀より價

り。父母の歸るを見て、心一ッに打うなづき、脇指拔て懐中に、さいたるくゞりさらりとあけ、つゝと入より胸もくろゝも落付、與「七左衛門殿は何方へ。定めて掛も寄りましよ」と、余所の方から裏問ける。㐂「誰かと思ふたれ、與兵衛様か。こな様は仕合な。後共いはずよい所へござんした。是此錢八百此粽、こな様へやれと天道から降ました。戴かしやんせ。なんぼ浪人でも際の日の寶、まんがなをろ」とさし出せば、與兵衛ちつ共驚かず、「是が親達の合力か」㐂「ハテ早合點な、追出した親達が、なんのこな様へ錢金を遣しやんしよ」與「いや隱さしやるな。先にから門口に蚊に喰れ、長々しい親達の愁歎聞て、涙をこぼしました」㐂「ムヽそんなら皆聞てか。よふ合點參りしか。他人でさへ目を泣きはらした。此錢一文も仇には成まい。肌身に付て一かせぎ、お二人の葬禮に、立派な乘物に乘せふと云氣が無ければ、男でもくゐでも無い。夫を御背なされたら、天道の罰神の罰、日本の神々のさか罰が當つて將來がよふ有まい。先戴いて」とさし出せば、與「いかにも〳〵。よふ合點しました。只今より眞人間に成て孝行盡す合點なれ共、肝腎お慈悲の錢が足らぬ、といふて親兄には云はれぬ首尾。爰には賣溜掛の寄金も有筈。新でたつた二百匁計、勘當の許る迄貸て下され」㐂「それ〳〵、おくを聞ふより口聞

ひらなか―半字

落たる云々―樞が鎖つて隔てた

殿、私に隱してあの錢を遣て下さる心ざし、詞ではけん〳〵と云たれど、心で三度戴きし。何を隱さふ、あいつは立派好もする奴。取わけ祝月鬢付元結を調へ、人交りもしたからふ。生れて此かた節句〳〵、祝儀缺ぬに此月計、身祝ひもしてやりたさ。見苦い此恥辱を洒すも、お吉樣頼んで届けん爲。まだ此上に根性の直る藥には、母が生肝を煎じて飲せといふ醫者あらば、身を八ツ裂も厭はね共、一生夫の錢金、文字ひらなかちがへぬ身が、子故の闇に迷され、盗みして顯れた。恥しゆござる」と計にて、わつと叫び入ければ、「道理々々」と夫の歎き、子を持者は身にこたへ、行末思ふお吉の涙、折からに泣く蚊の聲も、いとゞ涙を添へにけり。德「ヤ祝日に心もない泣わめき不調法。其錢もお吉樣頼み、與兵衛にやつてお暇申しや」と、いへ共女房涙にくれ、「こな樣の遣て下さる其深い心ざしに、盗んだ錢がなんと遣りよ」德「ハテ大事ないひらに遣や」澤「いや許して下され」と、女夫が義理の遣るかた無さ。お吉も涙とゞめかね、吉「アヽお澤樣の心推量した。遣憎い筈、爰に捨て置しやんせ。私が誰ぞ能さそな人に拾はせましよ」澤「アヽ忝い迚ものお情、此粽も誰ぞ能さそな犬に、喰せて下さんせ」と、又泣出す二親の、心隔てぬくゞり戸も、子の不孝より落たるくろゝ、明て夫婦は歸りけ

死光—死後の光榮
しやかになひ—不詳
槃特—優陀夷の子にて佛弟子中尤も愚物
阿闍世—父母を殺さんとする惡人(觀無量壽經)
あいだてなし—差別なし
こうばり—剛情か

生で人は使はず共、いつでも相果し時の葬禮には、他人の野送り百人より、兄弟の男子に先輿跡輿昇れて、あつぱれ死光りやらふと思ふたに、子は有ながらその甲斐なく、無緣の手にかゝらふより、いつそ行倒れのしやかになひが、ましでおじやるは」と、又むせ返るぞあはれ成。澤「ア與兵衛め計が子では無い。兄の太兵衛、娘なれ共、おかちはこなたの子でないか。サア／＼早ふ先へ」と押出す。德「ハア去るなら連立ふ。そなたもおじや」と引立る、母の袷の懷中より、板間へぐはらりと落たは何ぞ。粽一わに錢五百。澤「なふ情なや恥し」と、我身をおほひ押かくし聲を上、「德兵衛殿眞平許して下され。是は内の掛の寄、與兵衛めに遣りたい計、わしが五百盜んだ。二十年添ふ中、隔心隔ての有やうに情けない。たとへあの惡人め、お談義に聞樣な、殊利槃特の阿房でも、阿闍世太子の鬼子でも、母の身でなんの憎からふ。いか成惡業惡緣か、胎内に宿つてあの通りと思へば、ふびんさ可愛さは、父親の一倍なれ共、母が可愛い顏しては、へだてた心に、餘り母があいだてない。こうばりが強ふて、いよ／＼心が直らぬと、さぞ憎まるゝは必定と、態と憎い顏してぶつつたゝいつ、追出すの勘當のと、むごふつらふあたりしは、繼父のこなたに、可愛がつてもらひたさ。是も女の廻り智惠、許して下され德兵衛

かま—曲つた母
きは—節季
ひづめ—吝め

さし出す。後の門口、「お吉樣お仕廻か」と、をとづるゝは女房お澤が聲。德兵衞びつくり、「ハツ逢ふては氣の毒隱れたい。卒爾ながら御免なれ」と、かくるゝ蚊帳のうしろ影、澤「是々德兵衞殿、我女房に隱るゝとは何事」と、聲かけられて夫も敗もう、お吉もどまくれ挨拶なく、そとには與兵衞、「サア母のかまがわせた。何いはるゝ」とくるゝの穴、耳を付てぞ聞ゐたる。女房お澤腰打かけ、「ナフ德兵衞殿、七左衞門樣もお留守といひ、内のことはそこ〳〵に。何時あはふと儘の向ひどし、互に忙しいきはの夜さ、爰へは何の用が有。惡性する年でもなし。ムウ又與兵衞めが事くやみにか。如何に繼しい子なればとて、餘りに義理過た。しんじつの母が追出すからは、こなたの名の立ことはない。此三百の錢のらめに遣るのか。つね〳〵に身をひづめ始末して、あいつに遣るは淵へ捨るも同前。其あまやかしが皆毒がひ。此母はそふでない。サア勘當と云一言口を出るがそれ限り、紙子著て川へはまらふが、油ぬつて火にくばらふが、うぬが三昧、惡人めに氣を奪れ、女房や娘は何になれ。サア〳〵さきへいなしやれ」と、引立る袖をふりはなし、德「エヽ嚊むごいぞやそふで無い。生立から親は無い。子が年よつては親と成。親の始は皆人の子。子は親の慈悲で立、親は我子の孝で立。此德兵衞は果報少なく、今

輕薄—追從

思ひ切て—與兵衛を斷念す

何方も云々—何處も節季で忙がしい

肌の物—着物

與兵衛に世話を燒く。何れの道にも子に世話やくは親の役、苦勞共存ぜね共、引付て一所に有中は氣も落付。あの樣な無法者を勘當すれば、やけを起し、明日火に入も構はず、謀判似せ判、一貫匁の銀に十貫匁の手形して、一生の首綱かゝる例も有事と思ひながら、生の母の追出すを、繼父の我等輕薄らしう留られず。聞ば順慶町兄が方に居るとやら。若此あたりへ狼狽て見へましたら、七左衛門殿御夫婦云合せ、父親はがつてん、隨分母に侘言いたし、どしやう骨入替、二たび内へ戻る樣に、御異見偏に賴み入、こちの女房お澤が一家一門皆侍。其習はかしか思ひ切ては見返らず、義理がたい生れ付。夫に似ぬ道樂者、本親の旦那もぎやうぎづよく、義理も情も知つたる人。二人の子共に心をつくすは、皆古旦那への奉公。今與兵衛めを追出し、一生荒い詞も聞ぬ親方に、草葉の蔭より恨を受る、無果報は此德兵衛一人。推量なされお吉樣」と、烟草に涙まぎらして、むせ返るこそ道理なれ。吉「ムウ思ひやりました。こちのも追付歸られふ、逢てお話しなされませ」德「いや〳〵何方も今宵のこと萬事のお邪魔。是此錢三百、女房が目良を忍び、つい懷へ入て出た。與兵衛めがうせたらば、追付正氣に赴き、さつぱりと肌の物でも買いをれと、ゆめ〳〵我等の名を出さず、七左殿の心付かどう成共、御機轉賴み入」と

ひごう—非道
せつく—催促
眠たくと—眠たくとも
首絞る—眞綿で首絞るの諺をとる

一貫匁、正味は二百目、今夜中に濟せば別條ない約束では無いかいの」小「されば明日の明六ッ迄に濟ば二百匁、五日の日がによつと出ると一貫匁。元二百匁を一貫匁にしてとれば、こつちの德の樣なれど、親仁殿にひごうの金を出さするが笑止さに、こなた贔屓でせつくぞや。今宵急度濟しやや」與「小兵衞こりや念いるゝな、河内屋與兵衞男じや〳〵あてが有。鷄の鳴く迄には持ていく、眠たくと待てもらを」小「はて今宵すまして入用なれば、明日又直に貸はいの。此方も商賣、一貫目や二貫目は何時でも、其男氣を見屆けた」と、詞で與兵衞が首しめる、綿屋小兵衞は歸りける。與兵衞見事に請合は請合しが、一錢のあてもなし、茶屋の拂ひは一寸遁れ、拔指ならぬ此二百匁。「有所には有ふがな。世界は廣し二百匁などは、誰ぞ落しそふな物じや」と、後を見れは小提灯、河といふ小文字は此方の親仁。「南無三寶」と、鎖たる店に平蜘蛛の、ひつたり身を付身を忍ぶ。德兵衞は氣も付ず、豐島屋のくゞりそつと明け、「七左衞門殿お仕廻か」と、つゝといれば、亭「是は〳〵德兵衞樣、此方のはまだ仕廻ず、天滿の端まで行かれます。私は取紛れお見廻も申さぬに、よふこそ〳〵。此際は與兵衞樣の事に付、いかひお世話でござんしよ」と、蚊帳より出れば、德「されば〳〵、こなたは稚い娘御達の世話、我等は成人の

とゞし—娘は九つなれば十歳にはまだ屆かぬにかく

立酒—葬式に飲む故

はかゆき—墓に捗取をかく

こじり—鐺と切迫とかく

中がさ添て持て來い。夜が短かい氣がせく。そこからつけ」姉「あい」とは云へどとゞしては、手もとゞかねば立上り、つぐも受るも立酒を、お吉見付て「そりや何ぞ、忌々しい。子共は頑是がないにもせい、立酒のんで誰を野送り。ア氣味わる」と、いはれて夫もちやつと腰掛取直し、与「掛乞に行門出にはか行の立酒。此世に殘らぬ〳〵」と、祝ふ程なを哀世の、永き別れと出て行。母を見習ふ姉娘、夜るの襖をしき〳〵に、歌「呉座よ枕よ、蚊帳の釣手は長けれど、屆かぬ足の短か夜や」姉「おでんをろくに寢させて、母樣もちとおやすみ」といひければ、母「ヲヽでかしやつた。父樣もまだ遲かろ。蚊帳の内から表は母が氣を付る。我身もねゝしや」姉「いゑ〳〵、わたしは眠たふござらぬ」と、いひつゝ眠るもおとなしし。此節季越にこされぬ河内屋與兵衛。手筈の合ぬ古袷、心計が廣袖に、提たる油の二升入、一生さゝぬ脇指も、今宵こじりの詰りの分別。勝手知つたる豐島屋の、門の口覗く後より、「與兵衛殿じやないか」與「ヲヽ與兵衛じやが誰じや」と、振返れば上町の口入綿屋小兵衛。「アこなたは順慶町へ行けば、本天滿町親御の所へと云るゝ、親御へゆけば、「追出した爰にはゐぬ」と有。貴樣は留守でも判は親仁の判。新銀一貫目、今宵延ると明日町へことはる」與「ハテ爰な人はいきかたの惡い。手形の表こそ

かゞみの家―同胞の家
掛一まき―掛取一方にあせる
ゆづ妻櫛云々―古事記にゆづ妻櫛を投棄玉ふとあるより投げるを忌む
つげ―告と黄楊
掛も十に云々―掛金も十軒の内七軒は寄つたと七左衞門とかく
うちがひ―底なき帶袋

三人の娘の世話、まあ姉からと、櫛笥取出しときぐしに、色香揉込む梅花の油。女は髮より形より、心の垢を漉櫛や。嫁入先は夫の家、里の住かも親の家、かゞみの家の家ならで、家といふ物なけれ共、誰世に許し定めけん、五月五日の一夜を、女の家といふぞかし。身の祝ひ月祝ひ日に、何事なかれ撫付て、髮引ゆづの妻櫛の齒の、𠀋「ハア悲し一枚折れた」惘れてとんと投櫛は、別れの櫛と忌ことを、と口にはいはず氣にかゝる。何ぞのつげのを櫛かや。掛も十ヲに七左衞門、大かた寄て中戻り、𠀋「アヽ思ひの外早い仕廻。内の拂ひもさらりとしまひ、兩替町の錢屋から、燈油二升梅花一合、今橋の紙屋から通帳持て燈油一升、當座帳に付てをく。まあ洗足して早ふお休み。明日はとふから禮に出さしやんせ」七「いや〳〵早ふ休まれぬ、天滿の池田町へ往ねばならぬ」𠀋「フウきやうとい最ふ宜はいの。池田町は北の端、近所の掛さへ寄たらば過てのこと」七「こな人何いやる。節季に寄らぬ金の、過て寄た例はない。今日暮てから渡さふと詞つがふた。つい一走往てこふ。此うちがひに新銀五百八十目、財布の錢も戸棚へ入れて錠おろしや。やがて歸ろ」と立出る。𠀋「申々そんなら酒一ツ。姉それ燗して進じや」と、立て戸棚へ德利から銚子へうつせば、七「アこりや〳〵、燗せいでも大事ない。肴も盃もいらぬ、

うぢ〳〵云々―ぐづ〳〵しをらば
怪顛顏―驚き怪むかほ
ひさし―久しと廂とかく
幟―五月端午爲ニ童兒一立ニ紙幟一（羅山文集）

づいたら、門柱は思ひもよらず、獄門柱の主にならふ。親は是が悲しい」と、わつと叫び入ければ、母「エヽもどかしい徳兵衛殿。石に謎かける樣に口でいふて聞奴か。出てうせ〳〵。うぢ〳〵ひろがば町中よせて追出す」と、又追取て母がつゝばる朸の先、怖ひめ知らぬ無法者、町中といふにぎよつとして、と胸つきたる怪顛顏、「なふ兄樣出してわしは跡に殘らぬ」と、縋る妹を押留め、母「きり〳〵うせふ。朸が喰ひたらぬか」と、振上こすり出されて、越ゆる敷居の細溝も、親子別れの涙川、徳兵衛つく〴〵と後姿を見送りて、わつと叫び聲を上、德「彼奴がかほ付背恰好、成人するに從ひ死なれた旦那に生寫。あれあの辻に立たる姿を見るに付、與兵衛めは追出さず、旦那を追出す心がして勿躰ない悲いはいの」とどうど伏し、人目も恥ず泣聲に、憎い〳〵も母の親、たしなむ涙堪へ兼、見ぬ顏ながら伸上り、見れ共余所の繪幟に、影もかくれて　三重

下之卷

吹きなれし、年もひさしの、蓬菖蒲は家ごとに、幟の音のざはめくは、男子持の印かや。娘計の豐島屋は、亭主は外の掛一まき、內のしまひと小拂ひと、油賣たり舞ふたりに

出し、私は此跡取ことといや。堪へて進ぜて下され」と取付ば、母「何知つて。退ておれ。是德兵衛殿、きよろりと見て居て誰に遠慮。エはがいひ、毆き出してくれん」と、朸追取振り上れば、ひらりと外しひつたくり、與「此朸でわごりよを打」と、ばた〳〵と打つくる。德兵衛飛かゝり、朸もぎ取、つゞけ打に七ツ八ツ、息もさせず打ちすへ、はつたと睨む眼に淚。德「ヤイ木で造り、土をつくねた人形でも、魂入れば性根が有。耳あらばよふ聞、此德兵衛は親ながら主筋と思ひ、手向ひせず存分に踏れた。腹を借た生の母に今の樣。傍から見る目も勿躰なふて、身が震ふ。今打たも德兵衛は打たぬ、先德兵衛殿冥途より、手を出してお打なさるゝと知ぬかやい。おかちに入聟取といふは、跡方もないこと。エヽ無念な、妹に名跡繼せては、口惜と恥入、根性も直るかと、一思案しての方便。あの子は余所へ嫁入さする氣遣ひすな。他人どし親子と成は、よく〳〵他生の重緣と、可愛さは實子一倍。疱瘡した時日進樣へ願かけ、代々の念佛捨て百日法華に成。是程萬面倒見て、大きな家の主にもと、丁稚も使はず肩に棒、稼ぐ程遣ひほつく。己今の若盛り、一働きかせぎ、五間口七間口のかど柱の主にと、念願を立てこそ商人なれ。たつた一間まなかの門柱に念かけ、母に手向ひ父を踏、行さき僞り騙ごと。其根性がつ

朸—天秤棒

日進—將軍義教に迫害せられし冠鐺日進上人

百日法華—一時日蓮宗になる（俚言集覽）

遣ひはつく—遣ひ捨てる

提婆—釋迦に刃向ふ惡人

さすて引手—何かにつけ

涙手のひま—涙を手て拭ふに暇なし

與兵衛がたぶさ引攫んで、横投にどうどのめらせ、乘りかゝり目鼻もいはせぬ握り拳、母「ヤイ業洒しめ、提婆め。如何な下人下郎でも、踏の蹴るのはせぬこと。徳兵衛殿は誰じや、おのが親。今の間に脚が、腐つて落ると知らぬか、罰あたり。おとましや〱、腹の中から盲で生れ、手足かたわな者もあれど、魂は人の魂。己が五躰何處を不足に生付た。人間の根性何故さげぬ。父親が違ひし故、母の心がひがんで、惡性根入るといはれまいと、さす手引手に病の種。をのれが心の劒で、母が壽命を削るはい。をのれ先度も高槻の伯父御が、お主の金を引おひしと、よふも〱此母を、ぬく〱と欺したなア。たつた今兄太兵衛に行合、をのれが野崎のあばれ故、伯父は侍一分たゝず、浪人し大坂へ下るとの便。をのれが嘘が顯れた。其時母がつか〱と親仁殿へ咄し、跡で知れては、扨は親子の云合と疑はれ、夫婦の義理もかけはてる。内でも外でも己が噂、ろくなことは一度も聞かぬ、其度毎に母が身の肉を一寸づつ、そいで取樣な因果晒しめ。半時も此内に置くことならぬ、勘當じや出てうせふ。出され〱」と打つゝくはせつ、たゝく片手に押ぬぐふ、涙手のひまなかりけり。與「此與兵衛が爰を出て、どこへ行く所がない」母「ヲヽ、己が好たお山が所へ出てうせよ」と、小腕取て引出す。かち「ノフ兄樣追

い加減にせよ

和御寮―おのれ、敬語にあらず

七人は、ゆるりと過る術しつたれど、年忌命日もとぶらひ、地獄へ落さず迷はせまい爲に、名跡ついで苦勞する。和御寮が好たお山請出し、女房に持せ、半年も立ぬ中所帶破つて、親方の弔ひもならぬ樣には得せまい」與「扨は是非聟取て妹に所帶渡すな」德「ヲヽ渡す」與「ムウよふいふた道知らずめ」と立上り、俯ぶけに踏のめらし、肩骨脊骨うん〳〵と踏付る。かち「なふ悲しや淺ましい兄樣」と、妹が縋れば、德「おかち構ふな。彼奴が腹のゐる程、存分に踏しやく〳〵」と、身も働かず座も去らず。妹堪へかね、余りな兄樣。私は何も知らぬ者。死靈の付た良して、此よに〳〵いふてくれ。それからは商賣も精出し、親達へ孝行盡し、逆らふまいとの誓文立。それが嬉い計に、病ほうけた此なりで、こはい〳〵恐ろしい、死人のまねして噓つかせ、父樣を踏づ蹴つ、それが親孝行か。年よつた父樣目でもまふたら、それは〳〵聞事じやないぞ」と、縋り取付泣わめけば、「いき女郎め、吐すまいと誓文立て口かため、憎いほうけた。死靈より與兵衛といふ生靈の苦しみ、覺えておれ」と同じくがはと踏伏せたり。「病疲れた妹を踏殺すか、畜生め」と、取付父親はつたと蹴とばし、與「腹のゐる程踏といふたな。是で腹をゐるはい」と、顏も頭もわかちなく、さん〴〵に踏む最中、母立歸り、はつと計藥投げすて、

数珠、さらり〳〵と押もんだり。印をも未だ結ばぬに、病人重たき顔を上、かち「なふ祈もいらぬ祈禱もいや。おかちが病直すには、聟取の談合止てたも。あの與兵衛が若氣故、借錢に責らるゝ、其苦しみが冥途の苦患。是ぞ呵責の責と成。ながれ勤の女子なり共、與兵衛が契約の思ひ人を請出し、嫁にして此所帶を渡してたも。是非に聟を取なば、おかちが命は有まいぞ。思ひ知たか思ひしれ」と、あたりをきよろ〳〵睨廻し、「アヽづつない苦しい」と、悶へわななきそゞろごと。父は驚き色違へ、法印少もおくせず、「汝元來何處より來る。疾く去れ〳〵。行者の法力つくべきか」と、鈴錫杖をちりよんがら〳〵「急々如律令」と責めかくる。與兵衛むつくと起き、「何を知つて去れ〳〵。どう山伏置おれ」と、落間にかはと突落せば、法「ヤア山伏の法を知らぬか。印を見せずば置まじ」と、駈上りん〳〵鈴りん〳〵、引ずり下せば又駈上る、不動の眞言どたくたぐはつたりばつたりだ。引ずりおろされ山伏も、錫杖がら〳〵命からぐ〳〵歸りけり。與兵衛親の傍に膝まくり、「是親仁殿、今のそゞろ言耳に入たか。死んだ人を迷はせ、地獄へ落しても、此與兵衛が好た女房持せ、所帶渡すことは否かならぬか」德「ヤイかしましいあたり隣も有ぞかし、餘程にほたへあがれ。此德兵衛は、死んだ人の跡式とらいでも、五人

そゞろ言―たはこと
急々如律令―道士の邪を掃ふ咒文の終りに唱ふる語
餘程にほたへ―つけあがるもよ

跡の月―前の月
十五日は阿彌陀如來の日
比叡―冷え
愛宕―頭
阿閦―足
白髭―老に皆かけたり
骨牌云々―骨牌の繪とりには麻布の明神を祈る、麻布にて製する故
どう取―博奕のどう取には數のつく明神を祈る
さがり―廉價
持―富者

やつれ、法印とつくと見、「ムヽ、年はいくつ」父「十五」法「病付は」父「跡の月十二日」法「ムヽ、藥師如來の緣日、十五はあみだ」と、懷中の書籍くりひろげ、指を折り、子細らしき聲付、「そも〳〵、法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と藥師は御夫婦と云々。則此病は一時も早く聟殿を呼入、夫婦に成たいと思ふ氣病に、少外の見入有」と、いふより德兵衞尤良。法印圖に乘り、「稻荷大明神の使者、白狐の教髮筋程も違はぬ祈、加持も藥同前。神佛にもその役〳〵、熱病さまし冷すには、比叡山の廿一社、溫むるには熱田明神、あたまの病は愛宕權現、足の病は阿閦佛、走り人盜人動かせぬは、不動の鐵縛、咳氣を祈るは風の宮、老人達の老病には、白髭明神白髮藥師、若衆の病の祈には、大慈大悲の地藏菩薩、骨牌の繪の付祈禱に、麻布の明神釋迦牟尼佛、どう取の祈は四三五六しや大明神、八ッこうなゝの社。別て此法印が得物、錢小判俵物の相場商ひ、上ふと下ふと高下は自由。持のお方が價上したい祈には、强氣に上り高天が原の八百萬神、旗下衆のさがりを祈るは、高きお山を時の間に、麓に下る嵯峨の釋迦、安井の天神、持と旗と兩方一度の祈には高からず安からず中を取て、河内の國高安の大明神、法力のあらたなこと、棚な物取て來る如く、禮物は大方卅兩何時でも受取。いで一祈」と錫杖ふり立、いらたか

耆婆―釋迦時代の名醫
いはれぬ―無益
四ツ寶―四寶銀
引あは―引負ふ
どんな―鈍な

る。ヤこれ親仁殿、おかちが煩ひより、何より大事が有。其當座に母者人にはいふたれど、夫よりはつたりと打忘れ、今日ふつと思ひ出し、商賣やめて歸つた。跡の月野崎で、おぢ森右衛門樣に行合、「わざ〳〵飛脚もやる所、幸ひの便親達へいふてくれ。主人の金四ッ寶三貫目余り引負ひ、此節季にたてねば、切腹かしばり首、一生の無心。兄太兵衛は義理も法も知らぬ奴。沙汰なしに三貫目調へ、與兵衛に持せて下され」と段々の言傳。二貫目や三貫目で伯父に腹切せて、こなた衆の外聞世間が立まい。今日は二日、際といふて明日明後日。萬事を指置き今日の中、三貫目調へて渡さつしやれ。あす夜明にかけ出せば、晝迄に往て戻る」と、たつた今直筆のおぢの文の裏表。憎く可笑く、與「如何な伯父でも、主の金引あほ樣な侍、腹切らせたがまし。何じやこだくさんに三貫目。三匁もおじやらぬ。お主が商賣、去年から一文も見せぬ。算用したら、三貫目や四貫目は殘る筈。やりたくば其金やれ。追付聟を呼び入る大事の娘が病氣、どんな評定する隙がない。ヤ法印樣お待遠。おかちが樣躰、御覽なされ下され」と、餘のことといふて取あはず。與「ヲヽ〳〵手柄に聟が呼れふば呼ふで見や。見物せふ」と親の前に足踏伸し、そろばん枕の胸算用、ぐはらりと蹉ふて見へにけり。父がそろ〳〵抱起す、おかちが顔の面

したい甲斐—したいまま

如來かけて—如來に誓つて

づつない—切ない苦しい（俚言集覽）

汗はなつ—身には夏の如く汗かけども懷は涼しい

山ぶ—山伏の略

首かけ—首を賭する

て、どろく者めがしたい甲斐に踏付る。親仁樣の蔭でこそ、親子三人はしにも寢ず、人の門にも立ず、名跡立て下された、其恩德は本の親にも變らず、と每度母も其の悔み。子共に遠慮あるからは、現在腹に宿した母にも、氣兼が有かと、思はぬ心置かるゝ。因果ざらしの物にならずに飽果てた。太兵衛賴む、江戸長崎へも追下し、死をらば死に次第、二度面も見とふない。みぢんも愛著殘らぬ、と如來かけての母が云分からは、何御遠慮。勘當なされ」と評議の聲に目を醒し、「アヽづつ無い母樣〳〵。かゝ樣は未歸らずか」と、おかちが苦しむ屛風の內。門には「物もう、河内屋德兵衛殿は此方か。山上講中賴みに付、稻荷法印御見廻申」と案內す。太「扨はおかちが祈禱なさるゝか。一だん〳〵。私は高槻の返事が急ぐ。お暇申す」と表に出、太「德兵衛宿に罷ある。早々御出忝し。あれへお通り遊ばせ」と、太兵衛歸れば法印は、端の間にこそ通りけれ。踏締も無く世の中を、すべり渡りの油屋與兵衛、賣溜錢は色狂ひ、絞り取れて元も利も、かすも殘らぬ油桶、重げに見せる汗はなつ、中はすゞしき明樽を、擔ふて宿へ歸りしが、與「ヤ珍らしいお山ぶ、こなたは見知た白稻荷殿、妹が病氣祈の爲か。あの付物が其方衆の祈でのいたら、此與兵衛が首がけ。母者人は藥取にか。耆婆でもいかぬ死病、いはれぬ氣骨をらる

あんだらめ—痴をいふ（俚言集覽）

尻のほどけた云云—尻から拔ける

様が手ぬるい。私と與兵衛めは、お前の種でないとて、あまり御遠慮が過ぎまする。腹に宿つた母者人と連添ふお前、眞實の父と存る。やがて聟を取程脊丈伸びた、おかちは打擲きなされても、あんだらめには拳一ッ當ずほたへさせ、萬事に遠慮が皆身の仇。たたき出して此方へこさつしやれ。どれぞひどい主にかけ、ため直してくれませふ」と、いへば親は無念顔。徳「エヽ口惜い。尤繼父なれば迚親は親、子を折檻するに遠慮はない筈なれど、そなた衆兄弟は、身共が親方の子。親旦那往生の時は、そなたが七ッのらめは四ッ、「坊さま兄様」「徳兵衛どうせいこうせい」と、いふたを彼奴が急度覺て居る。嚊も始めはおか様の、内儀様のといふた人。おぢ森右衛門殿が了簡で、「そちが家を見捨ては、後家も子共も路頭に立。兎角森右衛門次第に成てくれ」と、だん〳〵の頼みゆへ、親方の内儀と此如く女夫になり、親方の子を我子として、守立し甲斐有て、そなたは自分の獨かせぎもめさるゝ。與兵衛めに商賣の手を擴げさせ、手代も置き倉の一軒も立る様にと、あがいても尻のほどけた錢ざし、籠で水汲む如く跡からぬけ、壹匁もうければ百匁遣ふ根性。異見一言いひ出せば、千言でいひ返す。エヽ元が主筋下人筋の親と子、釘ごたへせぬ筈。身の境界が口惜い」と、歯をくひしばれば、太「サア此方の其正直を見拔

順慶町―逆に對していへり

書出し云々―節季にて書出やら何やかやて忙がしい時分なればと也

もつけ―意外

思ふつぼ―思ひし通り

しらせ。私は醫者殿へ參ります、是で綏りとお休み〳〵」と立出れば、先達「いや我々も面々の、親々妻子の顔も見たし」互に無事で悦びの、貝吹く降伏惡魔を祓ふ眞言の、聲もちり〴〵ばら〳〵ぎやてい、おんころ〴〵に別れ歸りけり。ぎやくな弟に似ぬ心、順慶町の兄河内屋太兵衛、用有げにも浮ぬ顔付。德「ヤ太兵衛來てか、おかちが氣色見廻か。書出し何か忙しい時分、見廻には及ぬ事」と、いへば太兵衛傍近く寄り、「母には道でお目にかゝり、立ながら委しう物語致せしが、高槻の伯父森右衛門樣から、たつた今飛脚の狀に、もつけな事がいふて來ました。見さつしやれ跡の月、御主人の供して、野崎參りの折節、ごくだうの與兵衛めも參り合せ、友達喧嘩に攫み合ひやうし、御主人へ段々の慮外。當座に與兵衛めを切殺し、ぬしも腹切合點の所、御主人の御了簡穩しく事相濟、歸つて後御家中、町屋是沙汰。のめ〳〵と頰さげて奉公ならず、暇を願ひ浪人し、四五日中に大坂へ下り、二度侍の立べき思案せずば、此ぶんで刀はさゝれぬとの文躰なり」と、いふよりはつと膝を打、德「扨こそな、何處ぞで大事仕出そふと思ふつぼ、かてゝ加へて、おかちが煩ひ、おぢの難義。まだ此上に、どろめが何を仕出そふやら、分別にあたはぬ」と頭をかけは、太「イヤ分別も何もいらぬ、追出して退さつしやれ。ぢたい親仁

下り口—米價の下り口

どろめ—道樂の與兵衛をさす次のどろくも同じ

一加持—佛力の加護を祈りて病を直す

やす〳〵と下り坂は、下り口とのをしへ。手透なら夕方おじや。色々お山の咄して、旅の疲をはらそうぎやてい、ぎやてい〳〵」とのゝめきける。親徳兵衛走出、「若衆下向か殊勝にござる。こちのどろめは山上參りの行者講のと、今年も身共が手から四貫六百、順慶町の兄太兵衛から四貫、以上十貫近い錢取て、どれどこに迎ひにも出をらぬ。神佛の罸も思はぬどろく者。友達がひに引しめて、異見頼みまする」といふ所へ、奥より母親兩手に茶碗、「なふ〳〵目出度下向、マア一ツづつ參れ。こちの與兵衛が、山上樣へ噓ついた其咎か、妹娘のおかちが十日計、風引て枕あがらず。「醫者も三人替て今に熱がさめかね、節句は近付聟を入るゝ談合極り、先からは急いで來る。何かに付て女夫の苦勞、皆與兵衛ののらめが、行者樣へ噓ついた祟。お若衆お佗の祈禱頼みます」と、しみ〴〵語れば講中の先達、「いや〳〵お山の祟なれば、與兵衛に罸が當る筈。役の行者共いはるる佛が、若輩らしう何の側がかりなされふ。娘ごの熱病は又外のこと、その樣な煩ひには、藥も醫者もいらぬ事。皆樣知らずか、あんまり奇妙で、異名を白稻荷法印と申、今の世の流行山伏、與兵衛も定めし知つてゐよ。此法印を頼めば、本復はたつた一加持。是から直に立寄、頼むに否は有まい」と語れは悅び、母「ナフ〳〵忝い。是も行者のお

辱とは、只一滴の濁水も、名字にかゝるは洗ふにおちず、すゝぐに去らず。あれら躰の雜人、身が目からは泥水。泥より出て泥に染ぬ蓮の八彌、名字は汚れぬ助けてやれ」森「ハアはつ」と、又有難き御意を大事に、振る手を揃へ足そろへ、行列立てゝぞ 三重

中之卷

揭諦〳〵、波羅揭諦、波羅僧揭諦揭諦〳〵。波羅揭諦波羅僧揭諦、唵呼魯〳〵旋荼利摩登枳、唵阿毘羅吽欠。おん油屋中間の山上講、俗躰ながら數度のお山、院號請けたる若手の先達、新きやくまじり十二とう組、吹出す法螺のかひぐ〳〵しげ成金剛杖。腰に腰當首に數珠、巾著代の水のみ、河内屋德兵衞店前に立より、先達「何と與兵衞内にか〳〵。講中何事なふ、お山勤めて有難い。今日の下向は知れた事。念比な友達は、桑津迄迎ひにじや。お主一人見へぬは氣色でも惡いか。忝い御利生見て來た。是が土產先話さふ。西國者とやら、兩眼つぶれた十二三な盲が、大願かけて山上し、行者樣を拜む中、兩方共にくはつと開き、小篠の坂を杖もつかず、つゝと下る。お山の衆が考へ、アヽ有がたい、此秋から世の中直る御告。あれ合點いかぬか。ちいさい盲は小盲、則米藏開いて、

名字に懸る―不義竊盜の如き名を汚す行
揭諦云々―般若心經の咒文唵呼魯以下藥師大日如來の咒文
油屋―あびらにかく
山上講―吉野金峯山に登る講中

とはん—茫然

泥をかゝらぬ—泥をかけられぬ

一人茶屋の見世、とほんとして居る所に、亭主を初め、あたり在所の者共五六人、「先にから妥な人は參りか下向か。一ッ所にうろ〳〵と、合點いかぬ。サア通つた」と追立る。折から「はい〳〵」の、聲に交はる轡の音。小栗八彌下向の徒歩立、與兵衛うろたへ迯損ひ、押わる供先伯父の目に、かゝる不祥の出合頭、引捉へ捻すへ、伯「最前は御參詣、今は御下向愼みなし。討て捨る」と、刀の柄に手をかくる。八彌「待て〳〵森右衛門、その者討て捨んとは何故〳〵」森「彼奴は最前の慮外者。他人ならば少々は見遁しにも致し、御免なされ下し置るゝ樣の、取成をも申べき所、彼奴が母は拙者が兄弟、現在の甥。何とも助け難し」と申も敢ぬに、八「シテ其咎と云は何ごと」森「御尋に及ず、御服に泥を投かけ、御身を穢し汚したる科」八「イヤ〳〵此八彌が身を汚せしとは心得ず。是見よ著類の何處に泥が付たるぞ」森「イヤ召替られぬ以前の御小袖」八「されば〳〵、著換れば、泥をかゝらぬも同前では有まいか」森「御意とは申ながら、已に御馬の鞍鐙も泥に染みお徒歩でお歸りなさるゝは、旦那に恥辱を與ゆる、慮外者」と申上れば、八「默れ〳〵。馬の皆具には泥のかゝる物故に、障泥といふ字は、泥をへだつと書く。泥のかゝらぬ物ならば、何してへだつるといふ字の入べきぞ。恥辱も慮外も咎もなし。武士たる者の恥

尾籠—不仕儸
ほからかす—打ちやる
おと—妹娘
法—乘るにかく

葭簀の奥長き、日影も正午に傾けり。「さぞや妻子が待らん」と、辨當かたげかた〳〵に、姉の手を引〃豊島屋の七左衛門、喉が乾けど呑間も急ぐ、茶屋の前にて中娘、「アレ父樣か」と縋り寄る。七「ヲヽ待兼たか。母は何處に」と尋れば、娘「母樣は爰の茶屋の内に、河内屋の與兵衛樣と二人、帶解て衣服も脱でござんする」七「ヤア河内屋與兵衛めと、帶解て裸躰に成てじや。エヽ口惜い目を拔れた。そうして跡はどふじや〳〵」娘「そうして鼻紙で拭ふたり洗ふたり」と、聞よりせき立七左衛門、顔色かはり眼もすはり、門口に立はだかり、「お吉も與兵衛も是へ出よ。但出ずばそこへ踏ごむ」と、呼はる聲に、吉「こちの人か。子共がお晝の時分も忘れ、何處に何してゐさしやんした」と、出る跡から與兵衛が、「七左衛門殿面目ない。ふとした喧嘩に泥にはまり、色々お内儀樣のお世話。是も七左衛門殿のお蔭、忝い」といふ小鬢さき、髪の髷も泥まぶれ身は濡鼠、腹立ッやら可笑いやら、挨拶もせず七「是お吉、人の世話もよい比にしたがよい。若い女が若い男の帶といて、そうして跡で紙で拭ふとは、尾籠至極疑はしい。餘所のことはほからかして、サア〳〵參ふ日がたける」吉「ヲヽ〳〵待て居ました。委い事は道すがら」と、姉が手を引おとは抱く、中は爺親肩車に、法の教も一ッは遊山、群集をわけて急ぎける。與兵衛

いきかた―心意氣
人ぜり―人込
けうとなげ―物憂や
けん〳〵―不愛想な扱も出來ず
爰かります―前の茶屋を借る

く、「をのれ下向には首を打。暫の命」と突きはなし。「隨分おぢが目に懸るな」と、いひたけれども侍氣、聲せぬ夏の手振鶯。「はい〳〵」武家のいきかたなづまぬ御馬、足を早めて急がるゝ。與兵衛うつとり、夢か現か醉たるごとく、「南無三伯父の下向に切るゝ筈。切られたら死ふ、死だらどふしよ」と、心は沈み氣はうはもり。迯てくれふと駈出、「ハアかふ行ば野崎。大坂は何方やら方角がない。こつちは京の方。あの山は闇峠か但比叡山か。どこへ行たらば遁れふ」と、眼も迷ひうろたへ、「アヽどふかせふ何と」加賀笠、お吉と見るより地獄の地藏。與「ヤアお吉樣下向か。わしや今切らるゝ助けて下され。大坂へ連れていて下され。後生で御座る」と泣きおがむ。吉「イヤこちやまだ下向じや無いはいの。七八町行たれど、あんまり人ぜり。こちの人待合せに爰迄歸つた。エヽけうとなげな、身も顔も泥だらけ。氣が違ふたか與兵衛樣」與「尤々喧嘩して泥を摑み合、はね馬に乘た侍に、其泥がかゝつて、それで下向に切らるゝ筈。頼みます〳〵」と立去らず。吉「エヽあきれはてた。親御達の病に成がいとしぼい。向ひ同士のけん〳〵共ならず。茶屋の内借て振濯いで進ぜましよ。顔も洗ひ、とつとゝ大坂へ歸つて、以後を嗜ましやんせ。又爰かります。お清よ、父樣が見へたら、母に知らしやや」と、二人

澁柹―柑色のこいもの

沛艾―躍り上る馬(文選)

二字―武士の事

つめやろ―はめやう

家の子、お小性達の出頭小栗八彌、馬上に上下御代參の徒士若黨、揃羽織の濃柹に、智惠の輪の大紋。手振の先供はい〳〵の、聲をも聞ず與兵衛が、たぐりかけて打つ泥砂。出合拍子に馬上の武士の、袷上下皆具迄、ざつくと懸るも時の運。栗毛忽ち泥付毛、沛艾鞍もしづまらず。與兵衛もはつと驚く所、「それ逃すな」と徒歩の衆、ばら〳〵と取まく中、相手は川を渡越し、小菊も花車も手ばしかく、參りの諸人に紛れてのく、徒士頭山本森右衛門、與兵衛が兩脛かいてぎやつとのめらせ、膝を背骨にひしぎ付る。與「アヽお侍樣、けがで御座る御免成ませ。お慈悲〳〵」とほゑ面かく。森「こいつ慮外者、お小袖馬具に泥をかけて、怪我といふては濟ぬ。面を上い」と首ねぢ上、與「ヤア森右衛門殿伯父じや人」森「ムヽ與兵衛めか」と互にはつと驚きしが、森「ヤイをのれは町人、いか樣の恥辱を取ても疵にならぬ。旦那より御扶持を蒙り、二字を首に懸たる森右衛門、慮外者を取て押へ、甥と見たれば猶助けられぬ。討て捨る立ませい」と、小腕を取て引立る。馬上の主人、「ヤイ〳〵、ヤイ森右衛門、見れば其方が大小の鞘口、つめやうが緩そうな。ふと鞘走つて、怪我でもして、血を見れば殿の御代參叶はず、歸らねばならぬ。下向迄は隨分鞘口に心を付て、森右衛門供をせい〳〵」森「ハアはつ」とお詞

どや〳〵はとや〳〵の誤、陸奥出羽の中に行通ふ山道をとや〳〵通といひ其山口の關をむや〳〵といふ
もさめ—田舍者奴(俚言集覽)
ぶい〳〵—こがね蟲、爰は罵つていふ
命の玉—睾丸
みち〳〵—ビリ〳〵
ゐら骨—頸骨
高槻—城主水野飛驒守

ちがふ。いひ合せし二人の連、つか〳〵と寄て、「ヤイもさめ、此女郎此方へ貰ふ、置て歸れ。但東土産に川の泥水振廻はふか」と、兩方より立はさみ、投てくれんず面構。坂東者のどう強く、「何さぶい〳〵共、人おどしの腕に、色々のほり物して、喧嘩に事よせ、懐中の物取と聞及ぶ。貧乏と云ふ棒に脛を撲られ、腰膝も立ぬ遊女狂ひ。上方の泥水より、奥刕者の泥足くらへ」と、つゝと寄り蹴上る足首、はけがおとがひ蹴ちがへられ、どうとまろんでころ〳〵〳〵、小川へだんぶとはね落され、「是は」と取付かいしゆが大事の命の玉、縮み込程蹴付られ、「鳶がかけた南無三」と、惘れて空をみち〳〵。腹這ひ〳〵迯て行衛は無りけり。友達投させ見て居ぬ男、與「倒まにうへてくれん」と、むづと摑めば振放し、「ヤちよこざいなけざひ六。ゐら骨ひつかひて呉れべい」と、くらはす拳を請外しては打返し、敲き合摑み合ふ。「なふ氣の通らぬ是どふぞ」と、中へ小菊がかせに入、「ア丶怪我さしやんすな。大事の身」と花車が圍へば、下女も手を引立隔つ。「そりや喧嘩よ」と諸人の騷ぎ。茶屋は店を仕廻ふやら、二人は絶躰絶命の、打合組合、堤の片岸踏み崩し、小川にどう〳〵落ちわかれ、藻屑泥土まひこみ砂、互に投げかけ攫かけ、打合打付、扱ひ手無き相手勝負、氣根比三重と見へにけり。折こそあらめ、島上郡高槻の

註

光だて—威光を振廻す

與門云々—方角の縁にて與兵衛の目玉の大なる形容

そだてられ—おだてられ

ゆつた—いつた

ちよがらかす—茶にされる

どや〳〵云々—

ん、同じ道計氣が盡きる。始の船に乘りたい」と、裾かい取て立やすらふ、さきに與兵衛帆柱立、跡に二王の張番立、二人「與兵衛せくな。女郎と詰開いて男立い。會津蠟燭が光りだてしたら、此方二人が心切て、踏消してくれる」と、草履を腰に腕卷り。客は顚倒花車も下女もうろたへ、小菊を圍ふてうぞぶるふ。與「小菊殿かつた。名染の河與がかるからは動せぬ」と、茶屋の床几に引ずりすへ、「是賣女樣やすお山樣、野崎は方が惡い、誰樣の御意でも參らぬ、と此河與と連に成を嫌ひ、すひた客と參れば方も構はぬか。其譯聞ふ」と理窟ばる。目玉の鬼門金神もなどやかに、小菊「コレ河與樣角が取れぬの。小菊といふ名が一ッ出れば、與兵衛といふ名は三ッ出る程、深い〳〵といひ立られた二人の中。連立て參らぬも、皆こな樣の最愛さゆへ。人にそだてられ嗾けられ何じやの。わしが心は誓文かうじや」と、ひつたり抱き寄せ染々呫く、色こそ見へね河與が悅喜。「エ忝い」と伸た顏付。客は堪らず傍にどうど腰かけ、「小菊殿お身は聞へぬ。いか成緣にか會津樣程いとしい人は、大坂中に無いとゆつたぞよ。國本の外聞身の大慶と、大事の金銀を湯水の樣に川遊び。ちよがらかされにや來申さない。其男が聞まへで、夕べの如く云はないけりや。どや〳〵通りのむや〳〵の鬮、二度と越し申さない。どふだ〳〵」と責せ

く入れたもの

こうとう—質素

しやうごん—莊嚴にて爲になるの意

物ごし—言葉つき

所帶じうて—所帶じみてか

やつし云々—扮しの名人は京役者甚左幸左と也

やつちや—ヤンヤ

手ぐすね引—用意して待かけ居る貌

帆柱立—動かぬ

集を、突のけ押のけ目に立風俗。本天滿町河内屋徳兵衞といふ、油屋の二番息子。茶屋〳〵のわけもろくに立ず、あの樣見よと指ざしするが笑止な。こうたうな兄御を手本にして、商人といふ物は、一文錢もあだにせず、雀の巣もくふにたまる。隨分稼いで親達の肩助けと、心願立さんせ。わきへは行かぬ其身のしやうごん。ハア氣に入らぬやら返事がない。姉おじや早ふ參らふ。道でこちの人に逢しやんしたら、本堂に待てるといふて下さんせ。茶屋殿過分」と、袂より置く茶の錢の八九文。四分におもく五分には、輕々しげの物參り、別れてお吉は通りける。惡性に上塗するかいしゆの善兵衞、「あの女は與兵衞が筋向ひの內儀樣でないかい。物ごしもどこやら戀の有美しい顏で、扨々堅い女房じやな」與「然れば年もまだ廿七。色はあれど數の子程生廣げ、所帶じうで氣がこうたう。よい女房にいかい疵。見かけ計でうまみの無い、飴細工の鳥じや」と笑ひける。かくとはいかでしろうとの、田舍の客に揚られて、連て主人の後家交り、かはりちんつの國訛り。歌「やつしは甚左衞門、幸左衞門が思案ごと、四郎三が憂ひ事。ちんつ〳〵ちんちりつてつて、日本一の名人樣、やつちや〳〵」と、譽る歌より褒さする、金ぞ諸藝の上手成。「そりや〳〵來たぞ」と三人が、手ぐすね引たる顏色。小菊遠目にはつと驚き、「申花車さ

中の風―天神姿
川御座―吳座船
一出入―一談判
問ふには云々―相手の詞の中に容子が知れる諺
しん〳〵―はんとう
入子鉢―大きな鉢に小き鉢を多

慥に中の風と見た。又一位見事では有ぞ」亖「如何樣若いお衆が此樣な折に、あんな見事な者引連れ、贅の遣たいは道理。こな樣も連立たい者があろ。こんな折に新地の天王寺屋小菊殿か、新町の備前屋松風殿か。なんと能知て居るか。なぜ連立て參らんせぬ」と、ばつと乘すればふはと乘り、興殘多い天晴今日は物の見事な事で、參りの群集に目を醒させふと、此中からもがいたれど、備前屋松風めは先約が有て、貰ひも貸もならぬとぬかす。天王寺屋の小菊めは、野崎へは方が惡い、どなたの御意でも參らぬと云切。夫に聞て下され。小菊めが今日會津の客に揚られ、早天から川御座で參りをつた。田舍者に仕負ては此與兵衞が立ぬ。小菊めが歸るを待て一出入」と、咄しの内から二人のつれ、腕押もんで力みかけ、鬼共組べき勢なり。亖「それ〳〵問ふには落ず語るに落ると、利口そうに夫がしん〳〵の觀音參りか。喧嘩しののら參り。買しやんすお山も傾城も、何屋の誰何屋の誰と、親御達がよふ知て、いとしぼや「其方は與兵衞めが間がなすきがな入浸て居る。異見して下され」と、私等女夫に折入て口說ごと。こちの七左衞門殿もいやらぬ事は有まい。定めしこな樣の心には、所こそあれ野がけの茶見世で、若い女子のざまで、入子鉢の樣な面々の子共の、世話計やきをらず、小さし出たと憎かろが、此諸萬人の群

藤口が氣になる是の見さんせー當時の流行唄

無量無邊云々ー法華經普門品の句を所々とりたり慈眼視衆生福聚海無量念彼觀音力……應以……身得度者云々

ぶふーな茶

坊主持ー道中荷物を順番きめて持ちあふを坊主に逢へば持たぬ人に渡す

よし〳〵ーヨチ〳〵

のんこー細贄の頑健なる風を云

しやーそれしやじやと也

もゆく船も、徒歩路ひらふも諸共に、迷ひを開く腰扇、御堂に念珠を三重繰返へす。所をとへば本天滿町、町の幅さへ細々の、柳腰やなぎ髮、とろりとせいも種油、梅花紙ごし荏の油、夫は豐島屋七左衛門、妻の野崎の開帳參り。姉は九ツ三人娘、抱手引手に見返る人も、子持とは見ぬ花盛り、吉野の吉の字を取つて、お吉とは誰が名付けん。お淸は六ツ中娘。「母樣ぶゝが呑たい」も、折節傍の出茶屋見世、吉「爰借ります」とやすらひぬ。是も同町筋向ひ、河內屋與兵衛、まだ廿三親がかり。同商賣の色友達、はけの彌五郞、かいしゆの善兵衛、野崎參りの三人づれ、萬事を夢と呑みあけし、寢醒提重五升樽、坊主持して北うづむ。與「小菊めが客と連立よし〳〵と下向するも此筋」と、のさばり返つてくる道の、茶見世の內より吉「申々與兵衛樣、爰へ〳〵」と呼懸けられ、與「ヤお吉樣、子共衆連ての參りか。存じたら連に成ましよ物。七左衛門殿は留主なさるゝか」吉「いや此方の人も同道。二三軒寄る所もあり、追付爰へ見へる筈。お連衆もマア是へ。平に〳〵」と强られて、與「烟草一服致さうか」と、腰打かくるものんこらし。吉「何と與兵衛樣、御繁昌な參りではないかいの。よい衆の娘子達やお家樣がた。アレ〳〵彼處へ桔梗染の腰變り、島繻の帶しやじやはいの〳〵」與「ソレ〳〵〳〵其處へ島縮に鹿子の帶、

懺法）
千手の云々―千手觀音が救ひ取りて黄金佛となす
薩埵―大心衆生と譯す此の野崎の觀音の事
散らぬ色香―娟連が著飾つて詣る
得庵堤―德にかく
夫に任せた云々―いくら色を商買にして居る身でも
とりなり―なりふり
町で云々―町風でなく名古屋帶を胸高に締めたるは小菊と一見判る故たまらぬとなり
よれつ云々―よれにかく、附纏うて道で手間をとる爲猶更人の

手の御手の摑み取、紫摩黄金の御肌に、忽ち那智の觀世音、去年は和州法隆寺、シテ聖德太子のタヽキ千百年忌、ツレこれ又救世の大悲の化身。シテ續いて今年此薩埵、二人櫻過にし山里の、誰訪ふべくもなかりしに、老若男女の花咲きて、足をそら〳〵空吹風に、散らぬ色香の伊達參り、大人童も歌ふを聞けば、歌行もちんつ、歸るもちんつ、又來る人もちんつちりつて、チリテツテ傳を賴みの乘合船は、借切よりも得菴堤、共に舳を漕付て、余所も一つの船の中、客は是見よ顏自慢。やゝ共すれば痴話ごとの、夫に任せた身の上も、人も恥かし氣詰りと、小菊は陸へ一飛に、びらりぼうしのふか〴〵と、眉は隱せどとりなりの、町で名古屋の胸高帶は、小笹に露のたまられぬ。儉約算用世智辯も、人にこそよれ品にこそ、よれつ冷泉もつれつ道草に、人の言草アヽむつかしく、うるさく憎く嫌らしく、我供船を小手招き、歌「これの見さんせナ、愛宕の山にヨエ、ぢんの煙が三筋立つ。烟がナぢんの、ぢんの煙が三筋立つ」四筋に別れ玉鉾の、是より辰巳奈良街道、丑寅隅は八幡道、玉造へは未申、西は元來し京橋や、野田の片町大和川、爰は名にあふ壽命の松、御代長久の岡山を、歌には忍の岡とも詠み、さらゝ山口一ツ橋、渡して救ふ御願力、無量無邊のじゆふくかく、慈眼視衆生念彼觀音、しんとくだう者の御誓ひ、問ふも語る

船は云々―松の落葉卷四、君はしんぞ踊の句をとりたり
武藏野の月―若綠卷四てる月の文句をとれり、武藏野は大盃の名
登り―小菊にのぼせると天王寺塔へ登るとかく
野崎詣―河内讃良郡野崎村の觀音へ詣ること
昔在云々―最後の三世利益同一體を三年續きとかへたり、(觀音

女殺油地獄

道行みなれざほ

歌 船は新造の乘り心、サヨイヨエ、君と我と我と君とは、圖に乘つた乘つて來た。しつとんとん〳〵しとゝん〳〵、しつとゝ逢せの波枕。盃は何處いた。チンド君が杯いつも飲たや武藏野の、月の、月の夜すがら戲れ遊べ。はやし立たる大騷ぎ。北の新地の料理茶屋、主人なけれど咲く花や、後家のおかめが請こんで、客の變名は郎九とて、生れは陸奥會津にて、名だいながさぬ金遣ひ。此比浪華此里へ、登りつめたよ天王寺屋、小菊を思ひ思はれたさに、なまず川よりゆら〳〵と、野崎參りの屋形船。卯月中旬のはつあつさ、末の閏に追繰て、まだ肌寒き川風を、酒に凌ぎてそゝより行く。昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世の利益三年續き、去々年戊亥の春は、うらやせどやに罪深く、針櫛箱や數珠袋、そこに日の目も見ず知らぬ、一文不通の衆生迄、千

頭北面—死者は頭を北にし面は西に向ける法なり

有緣無緣—有緣も無緣も悉く利益を與へる、平等の下に利益の二字を畧す

なり瓢—縊死者の首に譬ふ

誓ひの網島—網にて衆生を救ふにかく、次の目は網の緣

まい〳〵」小「早ふ〳〵」と女が勇むを力草、風誘ひ來る念佛は、我に勸むる南無阿彌陀佛、彌陀の利劍とぐつと刺され、引すへてものり返り、七ッ顚八倒こはいかに、切ッ先咽の笛を外れ、死にもやらざる最後の業苦、共に亂れて苦みの、氣を取直し引寄て、鍔元迄さし通したる一刀、剜る苦しき曉の、見果ぬ夢と消果たり。頭北面西右脇臥に羽織打著せ、死骸を繕ひ、泣て盡せぬ名殘の袂、見捨て抱帶を手繰寄せ、首に罠を引掛る。寺の念佛も切回向、「有緣無緣乃至法界、平等」の聲を限りに樋の上より、治「一蓮托生南無阿彌陀佛」と踏はづし、暫し苦むなり瓢、風に搖るゝ如くにて、次第に絶る呼吸の道、いきせきとむる樋の口に、此世の緣は切果たり。朝出の漁夫が網の目に、見付て、「死んだヤレ死んだ。出合〳〵」と聲々に、云廣めたる物語。直に成佛得脫の、誓ひの網島心中と、目ごとに涙をかけにけり。

ひよんな事―とんでもない事

牛王―熊野牛王の札には數多の烏の形の判あり

愚の有物か。よしない事に氣をふれ、最期の念を亂さず共、西へ〳〵と行月を、如來と拜み目を放さず。只西方を忘りやるな。心殘りの事あらばいふて死にや」小「何にもない〳〵。こなさん定てお二人の子達の事が氣にかゝろ」治「アレひよんな事いひ出して又泣しやる。父親が今死ぬる共、何心なくすや〳〵と、可愛や寐顔見るやうな。忘ぬは是ばつかり」とかつぱと伏て泣しづむ、聲も爭ふ群烏、塒はなれて鳴聲は、今の哀れを問ふやとて、いとゞ涙を添にける。治「なふあれを聞や。二人を冥途へ迎ひの烏、牛王の裏に誓紙一枚書たびに、熊野の烏がお山にて、三羽づつ死ぬると、昔より云傳へしが、我とそなたが新玉の、年の始に起請の書初め。月の始　月頭、書し誓紙の數々、其度毎に三羽づつ、殺せし烏は幾許ぞや。常には可愛〳〵と聞、今宵の耳へは其殺生の恨の罪、むくひ〳〵と聞ゆるぞや。報ひとは誰ゆへぞ、我故辛き死をとぐる。ゆるしてくれ」と抱き寄れば、小「いやわし故」と締寄て、顏と〳〵をうち重ね、涙に閉る鬢の髮、野邊の嵐に氷けり。後に響く大長寺の鐘の聲、南無三寶長き夜も、夫婦が命短か夜と、早明渡る晨朝に、最期は今ぞと引寄て、跡迄殘る死顏に、泣顏殘すな殘さじと、につこと笑顏のしろじろと、霜に凍ゑて手も慄ひ、我から先に目もくらみ、刃の立どもなく涙。治「アヽせく

三界—此世

妻子珍寶云々—大集經にある句

共に亂る—切り棄てし髮と共に亂る

狙木—水門の上の材

伏沈み泣ければ、治「ヲヽ夫よ〳〵、此からだは地水火風、死れば空に歸る。五生七生朽せぬ夫婦の、魂放れぬ印合點」と、脇指ずはと拔はなし、元結ぎはより我黑髮、ぶつつと切て、治「是見や小春。此髮の有内は紙屋治兵衞と云ふおさんが夫。髮切たれば出家の身、三界の家を出、妻子珍寶不隨者の法師。おさんといふ女房なければ、おぬしが立る義理もなし」と、淚ながら投出す。「アヽ嬉しうござんす」と小春も脇指取上、洗ひつ漉つ撫付し、酷や惜げも投島田、はらりと切ッて投捨る。枯野の芒夜半の霜、共に亂るゝ哀れさよ。治「浮世を遁れし尼法師、夫婦の義理とは俗の昔。迚もの事にさつぱりと、死場もかへて山と川、此樋の上を山となぞらへ、そなたが最期場。我は又此流れにて縊り、最期は同じ時ながら、捨身の品も所も替て、おさんに立拔く心の道。其抱帶此方へ」と、若紫の色も香も、無常の風に縮緬の、此世あの世の二重まはり、樋の狙木にしつかと括り、先を結んで狩場の雉子の、妻故我も首しめくゝる罠結。我と我身の死拵へ、見るに目もくれ心くれ、小「こなさん夫で死なしやんすか。所を隔て死ぬれば、側に居るも少の間。爰へ〳〵」と手を取合、「刃で死ぬるは一ト思ひ。さぞ苦痛なされうと、思へばいとしい〳〵」と、とゞめかねたる忍び泣。治「首くゝるも喉つくも、死ぬるに

か、とても存らへ果ぬ身を、最期急がん此方へ」と手に百八の玉の緒を涙の玉に繰まぜて、南無あみ島の大長寺、藪の外面のいさゝ川、流れ漲る樋の上を、最期所と著にける。治「なふいつ迄うか〳〵歩みても、爰ぞ人の死に場とて、定まりし所もなし。いざ爰を往生場」と、手を取土に座しければ、小「さればこそ死に場は何處も同じことと云ながら、わたしが道々思ふにも、二人が死に顔並べて、小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば、おさん様より頼みにて、殺して呉るなこころすまい、挨拶切と取替せし其文を反古にし、大事の男を唆しての心中は、さすが一座流の勤めの者、義理しらず僞り者と、世の人千人万人より、おさん様一人のさげしみ、恨み妬みもさぞと思ひ遣り、未來の迷ひは是一つ。わたしを爰で殺して、こなさん何處ぞ所をかへ、ついと側で」とうちもたれ、くどけば共にくどき泣、治「ア愚痴な事ばかり。おさんは舅に取りかやされ、暇を遣れば他人と他人。離別の女になんの義理。道すがらいふ通り、今度の〳〵ずんど今度の、先の世迄も女夫と契る此二人。枕を並べ死るに、誰が謗る誰が妬む」小「サア其離別は誰がわざ。わたしよりこなさん猶愚痴な。身躰があの世へ連立か。所々の死にをして、譬へ此からだは鳶烏につゝかれても、二人の魂付纏はり、地獄へも極樂へも連立て下さんせ」と、又

舟入橋—舟が入るにかく

天滿橋—天魔にかく

一つ刃の云々—一つ刃で死んで三途の川を渡る

夏書—夏九十日の間に經文或は信ずる佛の名號を多く書留る事

法—乘りをかく、信を得る事、をへては終へて也

もなき蜆橋。短かき物は我々が歌此世の住居秋の日よ、十九と廿八年の、今日の今宵を限りにて、二人命の捨所。爺と婆との末迄も、まめで添はんと契りしに、丸三年も名染いで、此災難に大江橋。あれみや浪花小橋から、舟入橋の濱傳ひ。是迄來れば來る程は、冥途の道が近付」と、歎けば女も縋り寄り、小「もふ此道が冥途か」と、見交す顏も見へぬ程、落る涙に堀川の、橋も水にや浸るらん。「北へ歩めば我宿を、一目に見るも見返らず。子共の行衛女房の、哀も胸に押包み、南へ渡る橋柱、數も限らぬ家々を、いかに名付て八軒家。誰と伏見の下り舟、著ぬ内に」と道急ぐ。「此世を捨て行身には、聞も恐ろし天滿橋。歌淀と大和の二ァ川を、一ッ流の大川や、水と魚とは連て行。我も小春と二人連、一ッ刃の三ッ瀬川、手向の水に受たやな。何か歎かん此世でこそは添ず共。未來はいふに及ず、今度の〳〵、つゝと今度の其先の世迄も夫婦ぞや。一ッ蓮の頼みには、一夏に一部夏書せし、大慈大悲の普門品、妙法蓮華京橋を、地藏和讃越れば到る彼岸の、玉の臺に法をへて、佛の姿に身御成橋、衆生濟度がまゝならば、流の人の此後は、絕て心中せぬやうに、守りたいぞ」と及びなき、願ひも世上のよまひ言、思ひやられて哀れなり。野田の入江の水煙り、歌山の端白くほの〳〵と、あれ寺々の鐘の聲、こう〳〵「かふしていつ迄

足をはかり—歩ける限り行く

謠の本は—謠本は近衞流の文字で書いてあるより出でたにきまつてゐる

野郎云々—役者の帽子は紫にきまつてゐる

次兵衞—原本のまゝ

根掘云々—委しく印刷して世上に賣出す

跡老松—追と老とかく

一首の歌—梅はとび櫻は枯るゝ世の中に松ばかりこそつれなかりけれ（桐嶋瞑筆）

互ひに手に手を取かはし、北へ行ふか南へか。西か東か行末も、心の早瀨蜆川、流るゝ月に逆らひて、足をはかりに　三重

名ごりの橋づくし

走り書、謠の本は近衞流、野郎帽子は若紫、惡所狂ひの身の果は、かくなり行と定まりし、釋迦の敎も有ことか、見たし憂身の因果經、明日は世上の言草に紙屋次兵衞が心中と、仇名散り行櫻木に、根彫葉ほりを繪双紙の、板摺る紙の其中に、有共しらぬ死神に、誘はれ行も商賣に、疎き報と觀念も、とすれば心ひかされて、歩み惱むぞ道理成。比は十月十五夜の、月にも見へぬ身の上は、心の闇の印かや。今置霜は明日消る、はかなき譬の夫よりも、先へ消行閨の內、いとし可愛としめて寢し、移香も何と　冷泉　流の蜆川、西に見て朝夕渡る此橋の、天神橋は其昔、菅丞相と申せし時、筑紫へ流され給ひしに、君を慕ひて太宰府へ、たつた一飛梅田橋、跡老松の緣橋、別れを歎き悲しみて、跡にこがるゝ櫻橋、今に咄しを聞渡る、一首の歌の御威德。治「斯る尊き荒神の、氏子と生れし身を持て、そなたも殺し我も死ぬ、元はと問へば分別の、あのいたいけな貝殼に、一杯

市の側云々―淫賣婦の住所
ごくにも立ぬ―役に立たぬ
くる／＼云々―咳すること
せき／＼―咳と急くとかく

こ／＼行所は、市の側の納戸の下」孫「大だはけめ、夫を誰が吟味する。サアこい裏町を尋ねて見ん。勘太郎に風ひかすな。ごくにも立ぬ父めを持て、可愛や冷たいめをするな。此冷たさで仕廻ばよいが、ひよつと憂めは見せまいか」憎や／＼の底心は不便／＼の裏町を、いざ尋んと行過る、影隔たれば駈出て、跡懐かしげに伸上り、心に物を云はせては、治「十悪人の此治兵衛、死に次第共捨置れず、跡からあと迄御厄介。勿躰なや」と手を合せ、伏拝み／＼、「猶此上のお慈悲には、子共がことを」と計にて、暫し涙に咽びしが、「兎ても覚悟を極しうへ、小春や待ん」と大和屋の、潜の透間さし覗けば、内にちら付人かげは、小春じやないか。待としらせの合圖の咳、エヘン／＼かつち／＼、ゑへんに拍子木打まぜて、上の町から番太郎が、くる／＼たぐる風の夜は、せき／＼廻る火用心。「ごよざ／＼／＼」も人忍ぶ、我には辛き葛城の、神隠れして遣り過し、透を窺ひ立寄ば、潜内からそつと明く。治「小春か」小「待てか。治兵衛様早ふ出たい」と氣をせけば、せく程廻る車戸の、明るを人や聞付んと、しやくつてあくればしやくつて響き、耳に轟く胸の中。治兵衛が外から手を添ても、心震ふに手先も震ひ、三分四分五分一寸の、先の地獄の苦みより、鬼の見ぬ間と漸に、明て嬉しき年の朝、小春は内を抜出て、

阿房奴―治兵衛をさす

てに駈來り、大和屋の戸を打叩き、孫「ちと物問ませふ。紙屋治兵衛は居ませぬか。ちよつと逢せて下され」と呼はれば、「扨は兄き」と治兵衛は身動きもせず猶忍ぶ。内から男の寐ほれ聲、「治兵衛様はまちつと先に、京へのぼるとてお歸りなされた。爰にでは御座らぬ」と、重て何の音なひも、涙はら〳〵孫右衛門、「歸らば道で逢そな物。京へとは合點がゆかぬ。アヽ氣遣ひで身がふるふ。小春をつれては行ぬか」と、胸にきつくり横たはる、心苦しさこたへかね、又戸を叩けば、男「夜更て誰じや。もふ寐ました」孫「御無心ながらま一度お尋ね申たい。紀伊の國屋の小春殿は、お歸りなされたか。もし治兵衛と連立て行はなされぬか」男「ヤヤ何じや小春殿は二階に寐てじや」孫「ア先心が落付た。心中の念はない。何處にかゞんで此苦をかける。一門一家親兄弟が、片唾を呑で臓腑を揉とはよも知るまい。舅の恨に我身を忘れ、無分別も出よふか、と異見の種に勘太郎を連て尋るかひもなく、今迄逢ぬは何ごと」とほろ〳〵涙の一人言、隠るゝ間の隔てねば、聞へて治兵衛も息を詰、涙呑込計なり。孫「ヤイ三五郎、阿房めが夜る〳〵うせる所、外には知らぬか」といへば、阿房は我名ぞと心へて、三「知て居れど爰では恥かしうていはれぬ」孫「知て居るとはサア何處じや。云て聞せ」三「聞た跡で叱らしやんな。毎晩ちよ

しつかどさし—門鎖しにかく
御座りまも—ますと間もなくとかく
挘—負ひをかく

よ。治兵衛様のお歸りじや、小春様起しませ。夫呼ませ」は亭主が聲。治兵衛潜をぐはさとあけ、「コレ〳〵傳兵衛、小春に沙汰なし。耳へ入レば夜あけ迄くゝられる。夫故よふ寐させて拔て往ぬる。日が出てから起していなしや。我等今から歸ると直に、買物の爲京へ上る。大分の用なれば、中拂ひの間にあふ樣に歸るは不定。最前の金でそなたの算用合も仕廻、河庄が所へも後の月見の拂といふて、四ツ百五十匁請取とつて給らふし、と福島の西悅坊が佛壇買た奉加、銀一枚回向しやれと遣つてたも。其外に懸り合は、ハア夫よ〳〵、磯市が花銀五、是計じや仕廻て寐やれ。さらば〳〵戻つて逢ふ」と、二足三足行より早く立歸り、「脇指忘れたちやつと〳〵。なんと傳兵衛、町人はこゝが心易い。侍なれば其儘切腹するであろの」傳「我ら預かつて置てとんと失念。小刀も揃ふた」と、渡せば取てしつかどさし、治「是さへあれば千人力。もふ休みやれ」と立歸る。「追付お下りなさりませ。よふ御座りま」もそこ〳〵に、跡は樞をごつとりと、物音もなく鎖まれり。治兵衛はつゝと去ぬる顏。又引かへす忍び足、大和屋の戸に縋り、内を覗いて見る内に、間近き人影びつくりして、向ひの家の物影に過る間暫し身を忍ぶ。弟故に氣を碎く、粉屋孫右衛門は先にたち、跡に丁稚の三五郎が、脊中に甥の勘太郎連れ、行燈目あ

肌を放さぬもの。晩からは父樣と寐しやや。二人の子共が朝ぶさ前忘れず、必くわ山呑せて下され。なふ悲しや」と、いひ捨る。跡に見捨る子を捨る、藪に夫婦の二股竹永き別れと　三重

下之卷

戀なさけ爰を瀨にせん蜆川、流るゝ水も行通ふ、人も音せぬ丑滿の、空十五夜の月冴て、光りは暗き門行燈、大和屋傳兵衞を一字書。眠りがち成拍子木に、番太が足取千鳥足、「ごよざ〱」も聲更たり。「駕籠の衆いかふ更たの」と上の町から下女子、迎ひの駕籠も大和屋の、潛ぐはら〱つゝと入、「紀伊の國屋の小春さん借やんしよ。迎ひ」とばかりほの聞へ、跡は三ッ四ッ挨拶の、程なく潛によつと出、下女「小春樣はお泊じや。駕籠の衆直に休ましやれ。アヽいひ殘した是花車さん、小春樣に氣を付て下さんせ。太兵衞樣へ身請がすんで、金請取たりや預かり物。酒過させて下んすな」と、門の口から明日待ぬ、治兵衞小春が土に成、種蒔ちらして歸りける。茶屋の茶釜も夜一時、休むは八ッと七ッとの間にちら付短檠の、光も細く更る夜の、川風寒く霜みてり。「まだ夜が深い送らせまし

朝ぶさ―朝食前に食ふもの（俚言集覽）
くわ山―桑山、子供の氣附藥

瀨にせん―蜆川即ち曾根崎を逢瀨にせん
一字書―一字づつ離して書く
ごよざ―御用心
下女子―いたく更けたといつて下女が上町から來るとなり

短檠―低き燈臺

利運云々―自分の運に乘じて人の事を顧みぬ

裳櫃「是程からになつたか」と、舅は怒の眼玉もすはり、夫婦が心は今更に、明て悔敷浦島の、火燵蒲團に身を寄せて、火にも入たき風情なり。五「此風呂敷も氣遣」と引ほどき取散し、「さればこそ〳〵、是も質屋へ飛すのか。ヤイ治兵衛、女房子共の身の皮はぎ、其金でおやま狂ひ。いけどう掏賊め。女房共は伯母甥なれど、此五左衛門とはあかの他人。損をせふよしみがない。孫右衛門に斷り兄が方から取返す。サア去狀〳〵」と、七重の扉八重の鎖、百重の圍みは遁るゝ共、遁れがたなき手詰の段。治「ヲヽ治兵衛が去狀筆では書ぬ是御覽ぜ。おさんさらば」と脇指に手をかくる。縋り付て さん「なふ悲しや。父樣身に誤りあればこそ段々の侘言。あんまり利運過ました。治兵衛殿こそ他人なれ、子共は孫可愛ふは御座らぬか。わしや去狀は受取ぬ」と、夫に抱付聲を上、泣叫ぶこそ道理なれ。五「よい〳〵去狀いらぬ。女郎こい」と引立る。さん「いや私や往かぬ。飽もあかれもせぬ中を、何の恨に晝日中、女夫の恥は晒さぬ」と泣佗れ共聞入ず。五「此上に何の恥。町内一ぱい喚いて行」と、引立ればふり放し、小腕とられよろ〳〵と、よろめく足の爪先に可愛やはたと行あたる、二人の子共が目を覺し、「大事の母樣なぜ連て行、祖父樣め。今から誰と寐よふぞ」と慕ひ歎けば、さん「ヲヽいとしや、生れて一夜もかゝが

ちんからり―空虚

やんす。先お茶一ッ」と茶碗をしほに立寄つて、「主の新地通ひも最然母樣孫右衞門樣お出なされて、段々の御異見熱い涙を流し、誓紙を書ての發起心。母樣に渡されしがまだ御覽なされぬか」五「ナ、誓紙とは此ことか」と懷中より取出し、「阿房狂ひする者の起請誓紙は、方々先々書出し程書ちらす。合點が往かぬと思ひ〳〵來れば案の如く、此ざまでも梵天帝釋か。此手間で去狀書け」と、ずん〳〵に引裂て投捨てたり。夫婦はあつと顏見合せあきれて詞もなかりしが、治兵衞手をつき頭をさげ、「御立腹の段尤共お侘申すは以前のこと。今日の只今より何事も慈悲と思召し、おさんに添せて下されかし。譬ば治兵衞乞食非人の身と成、諸人の箸の余りにて身命は繫ぐ共、おさんは急度上にすへ、憂め見せず辛いめさせず、添ねばならぬ大恩有。其譯は月日も立、私の勤方身上持直し、お目に懸れば知るゝこと。夫迄は目を塞いでおさんに添せて給はれ」と、はらはらこぼす血の涙、疊に喰付佗ければ、五「非人の女房には猶ならぬ、去狀書〳〵。おさんが持參の道具衣類、數改めて封つけん」と、立寄ば女房あはて、「著物の數は揃ふてあり、改むるに及ばぬ」と駈塞がれば、突退ぐつと引出し、五「コリヤどふじや」又引出してもちんからり。有たけこたけ、引出しても、繼ぎれ一尺あらばこそ。葛籠長持衣

子供の乳母か―此一句に思はず涙を催さしむ

爪を剝す―女が男に心中立する所作（色道大鑑）

間を渡す―間に合せる

につこり云々―笑ふふといふ所却て斷腸

ようお歸―親しき者には御出てといはずして御歸りといふ

つと行當り、さん「アツアそふじや。ハテ何とせふ。子共の乳母か飯焚か、隱居成共しませふ」とわつと叫び伏沈む。治「余りに冥加恐しい。此治兵衛には親の罰天の罰佛神の罰は當らず共、女房の罰一つでも將來はよふない筈。免してたもれ」と手を合せ、口說歎けば、さん「勿躰ない、夫を拜むことかいの。手足の爪をはなしても、皆夫への奉公。紙問屋の仕切銀、何時からか著類を質に間をわたし、私が簞笥は皆明殼。夫惜いとも思ふにこそ。何いふても跡へんでは返らぬ。サア〳〵早ふ小袖も著かへて、につこり笑ふて往かしやんせ」と、下に郡內黑羽二重、島の羽織に紗綾の帶、金ごしらへの中脇指、今宵小春が血に染とは、佛や知召さるらん。治「三五郎爰へ」と風呂敷包肩に負せて供につれ、銀も肌身にしつかと付、立出る門の口、「治兵衛は內にお居やるか」と、毛頭巾取て入を見れば、南無三寶舅五左衛門。「是は拶折も折よふお歸りなされた」と、夫婦は轉動狼狽ゆる。三五郎が負たる風呂敷もぎ取て、どつかと坐り尖り聲、五「女郎下にけつからふ。聟殿是は珍らしい。上下著飾り脇指羽織、天晴よい衆の金遣ひ。紙屋とは見へぬ、新地へのお出か、御精が出まする。內の女房いらぬ物。おさんに暇遣りや、連に來た」と、口に針有苦い顏。治兵衛はとかふの言句も出ず、さん「父樣今日は寒いによふ歩かし

―享保銀は以前の四寶銀の四倍の價ありて七百五十匁が四ッ即ち四寶銀三貫目に當る

打みしやいでも―身をはたいても

ないまぜ―色々の糸でなうた紐、無いにかく

四々の云々―一貫六百匁は新銀四百目をさし後一貫四百目は著物の代

ひらりと云々―簞笥をあけると鳶色の八丈縞あり

曲げ―質に入る

蔦の葉ののき―もちよく／＼と落しておいて壁に蔦の葉のき心と云ふ唄をとれり（松の落葉五）

ず。今の治兵衛が四ッ三貫匁の才覺、打みしやいでも何處から出る」さん「なふ仰山な。夫で濟ばいと易し」と、立て簞笥の小ひきだし、明て惜氣もなひまぜの、紐付袋押開き投出す一包、治兵衛取上「ヤ金か。然も新銀四百目、こりやどふして」と、我置ぬ金に目覺る計なり。さん「其金の出所も跡で語れば知れること。此十七日岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれ共、夫は兄御と談合して商賣の尾は見せぬ。小春の方は急な事。そこに四々の一貫六百匁と、まあ一貫四百匁」と大ひき出の錠明て、簞笥をひらりと飛八丈、けふ縮緬の明日はない夫の命しら茶うら。娘のお末が兩面の、紅絹の小袖に身を焦す。是を曲ては勘太郎が、手も綿もない袖なしの、羽織も交て郡內の仕末して著ぬ淺黄裏、黑羽二重の定紋丸に蔦の葉の、のきも退れもせぬ中は、內裸でも外錦、男かざりの小袖迄さらへて物數十五色。內ばに取て新銀三百五十匁、よもや貸ぬといふことは、無い物迄も有顏に夫の恥と我義理を、一つに包む風呂敷の、中に情を籠にける。さん「私や子共は何著いでも、男は世間が大事。請出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立て見せて下さんせ」と、いへ共始終さし俯きしく／＼泣て居たりしが、治「手付渡して取とめ、請出して其後、圍ふてをくか、內へ入るにしてから、そなたは何と成ことぞ」と、云れては

ハウ夫なれば云云―此一句斷腸

女子は我人云々―女は誰でも事あれば夫れ一方に思ひ詰るもの

敗亡―閉口

新銀七百五十匁

るゝ」と、どうど伏て泣ければ、はつとおさんが興さめ顏。さん「ヤアウハウ夫なればいとしや、小春は死にやるぞや」治「ハテサテなんぼ利發でも流石町の女房じやの。あの無心中者なんの死なふ。灸をすへ藥呑で命の養生するはいの」さん「いやそふでない、私が一生いふまいとは思へ共、隱し包でむざ〱殺す其罪も恐ろしく、大事の事を打明る。小春殿に無心中芥子程もなけれ共、二人の手を切せしは此さんがからくり。こなさんが浮々と、死ぬる氣色も見へし故、余り悲しさ、『女は相見互ひ事、切れぬ所を思ひ切、夫の命を賴む〱』とかき口說た文を感じ、『身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引れぬ義理合思ひ切』との返事。私や是守に身をはなさぬ。是程の賢女が、こなさんとの契約違へ。おめ〱太兵衞に添ふものか。女子は我人一むきに、思ひ返しのないもの、死にやるはいの〱。アヽアヽひよんな事。サアサアサどふぞ助て〱」と、騷げば夫も敗亡し、治「取返した起請の中、しらぬ女の文一通兒きの手へ渡りしは、おぬしから往た文な。夫なれば此小春死ぬるぞ」さん「ア、悲しや。此人を殺しては、女どしの義理立ぬ。まづこなさん早ふ往てどうぞ殺して下さるな」と、夫に縋り泣沈む。治「夫とても何とせん。半金も手附を打、繫ぎ取て見る計。小春が命は、新銀七百五十匁呑さねば、此世に止むる事なら

亥の子―亥の日

よいはいの。一昨年の十月中の亥の子に、火燵明た祝義とて、まあ爰で枕並べて此かた、女房の懐中には、鬼が住か蛇が住か、二年といふ物巣守にして、漸母樣伯父樣のお蔭で、睦しい女夫らしい寢物語もせふ物、と樂む間もなくほんに酷いつれない。左程心殘らば泣しやんせ〳〵。其涙が蜆川へ流れて小春の汲で呑やらふぞ。エヽ曲もない恨めしや」と、膝に抱付身を投伏、口說たてゝぞ歎きける。治兵衛眼をし拭ひ「悲しい涙は目より出、無念涙は耳から成共出るならば、云ずと心も見すべきに、同じ目よりこぼるゝ涙の色の變らねば、心の見へぬは尤々。人の皮著た畜生女が名殘も絲瓜もなん共ない。遺恨有身すがらの太兵衛、金は自由妻子はなし、請出ス工面しつれ共、其時迄は小春めが、太兵衛が心に從はず、「少しも氣遣なされな。假令こな樣と緣切れ添れぬ身に成たり共、太兵衛には請出されぬ。もし金ぜきで親方から遣るならば、物の見事に死んで見しよ」と、度々詞を放ちしが、是見や退いて十日も立ぬうち、太兵衛めに請出さるゝ腐り女の四ツ足めに、心はゆめ〳〵殘らね共、太兵衛めがいんげんこき、「治兵衛身代往著ての、金の手詰つて」なんどと、大坂中を觸廻り、問屋中のつき合にも、面をまぶられ生恥かく、胸が裂る身が燃る。エヽ口惜い無念な。熱い涙血の涙、ねばい涙を打越へ熱鐵の涙が溢

かたむくろ―頑固一遍
懐中より云々―孫右衛門が懐中より出す牛王の誓紙に紙治が縁切る血判をする也
梵天―天地創造の神
帝釋―人間を守る神
心ぞ直に―知らぬが佛

はない、母様證據に私が立ます」と、夫婦の詞割符も合、「扨はそふか」と手を打て、伯母は心を安めしが、「ム、物には念を入ふこと。先々嬉敷。とてもに心おち付ため、かたむくろの親父殿、疑ひの念なきやうに、誓紙書ずが合點か」治「何が扨千枚でも仕らふ」伯母「いよ〳〵満足」「則道にて求めし」と孫右衛門懐中より、熊野の牛王の村烏、比翼の誓紙引かへ、今は天罰起請文、小春に縁切思ひ切。偽り中にをひては、上は梵天帝釋、下は四大の文言に、佛ぞろへ神ぞろへ、紙屋治兵衛名をしつかり、血判をすへてさし出す。さん「ア、母様伯父様のお蔭で、私も心落付。子中なしてもついに見ぬ堅め事。皆悦んで下さんせ」伯母「ヲ尤々此氣に成ば堅まる。商事も繁昌しよ。一門中が世話かくも皆治兵衛爲よかれ、兄弟の孫共可愛さ。孫右衛門おじや、早ふ歸つて親父に安堵させたい。世間がひへる子共に風ひかしやんな。是も十夜の如來のお蔭。是から成共お禮念佛、南無阿彌陀佛」と立歸る、心ぞ直に佛成。門送りさへそこ〳〵に、敷居も越や越ぬ中、火燵に治兵衛又ころり。被る蒲團の格子島、さん「まだ曾根崎を忘ずか」と、あきれながら立寄て、蒲團を取て引退れば、枕につたふ涙の瀧、身も浮計泣るたる。引起し引立、火燵の櫓につき居、顔つく〴〵と打ながめ、」さん「あんまりじや治兵衛殿。夫程名殘惜くば誓紙書ぬが

賣買高い——世智辛い世の中

はみかへる——元の惡性に戻る

の深い大じんが外の客を追退け、直に其大臣が今日明日に請出すとの是沙汰。賣買高い世の中でも、金とたはけは澤山なといろ〳〵の評判。こちの親父五左衛門殿常々名を聞ぬいて、『紀の國屋の小春に天滿の大じんとは治兵衛めに極つた。嫂の爲には甥なれど、こちは他人、娘が大事。(茶屋者請出し女房は茶屋へ賣をらふ。)著類著そげに疵付られぬ間に取返してくれふ』と、沓脱半分下りられしを『そう〴〵しい神妙にも成ことを、明さ暗さ聞屆て上のこと』と押宥め、此孫右衛門同道した。孫右衛門の咄しには今日は昨日の治兵衛でない。曾根崎の手も切れ本人間の上々と、聞ば跡からはみかへる、そもいかなる病ぞや。そなたの父御は伯母が兄、最愛や光譽だうせい往生の枕を上『聟なり甥なり、治兵衛が事頼む』との一言は忘れねど、そなたの心一ッにて、頼まれしかひもないはいの」と、かつぱと伏て恨泣。治兵衛手をうち、「ハア丶よめた〳〵。取沙汰の有小春は小春なれど、請出大じん大きに相違。兄きも御存じ、先日暴れて踏れた身すがらの太兵衛、妻子眷屬持ぬ奴。金は在所伊丹から取寄る。とつくに彼奴めが請出すを私に押へられ、此度時節到來と請出すに極つた。我ら存じも寄らぬ事」と、いへばおさんも色を直し、「假令私が佛でも男が茶屋者請出す、其贔屓せふはづがない。是計は此方の人に微塵もうそ

の口を假りて云ふ
おつとまかせ—よしきた
二分の云々—一匁八分でもう二分あれば二匁の勘定といふ意と勘太郎とかく
結構—心のよい事
暖かに—下に「聞く物か」の句を略す

父様がつれ立てござるげな。此短かい日に商人が、晝中に寢に振を見せては、叉機嫌が悪からふ」とむつくと起き、算盤片手に帳引寄せ、治「一一天作の五、九進が三進、六進が二進、七八五十六」に成伯母打連て、孫右衞門内に入ば、治「ヤ兄者人伯母様、是はよふこそ〳〵先これへ。私は只今急な算用いたしかゝり。四九三十六匁三六が一匁八分で、二分の勘太郎よお末よ、婆々様伯父様お出じや、煙草盆持ておじや。一三が三、夫おさんお茶上ましや」と口ばやなり。伯母「いや〳〵茶も煙草も呑には來ぬ。是おさん、いかに若いとて二人の子の親。結構な計めではない。男の性の悪いは皆女房の油斷から。身代破り女夫別れする時は、男ばかりの恥じやない。ちと目をあいて氣にはりを持やいの」といへば、孫「伯母様愚なこと。此兄をさへ欺す不覺悟者、女房の異見など暖かに。ヤイ治兵衞、此孫右衞門をぬく〳〵と欺し、起請迄かやして見せ、十日も立ぬになんじや請出す。エヽうぬはなあ小春が借錢の算用か置をれ」と、算盤をつ取庭へぐはらりと投捨たり。治「是は近比迷惑千万。先度より後、今橋の問屋へ二度、天神様へ一度ならではしきぃより外出ぬ私。請出す事は扨置、思ひ出しも出すにこそ」伯母「いやんな云やんな。夕部十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天滿

釘—つめたき事の譬

知らん迄—知らぬなり迄は例の助辭

おふ〳〵—負ふにかく

伯父樣—兄樣といふべきを子供

めが戻らぬ事。風が冷たい二人の子共が寒からふ。お末が乳の呑たい時分も知ぬ、阿房には何が成。辛氣な奴じや」と獨言、「母樣一人戻つた」と、走り歸る兄息子。「さん「ヲヽ勘太郎戻りやつたか。おするゑや三五郎は何とした」「勘「宮に遊んで乳呑たいと、お末のたんと泣やりました」「さん「そふこそ〳〵。こりや手も足も釘になつた。父樣の寐て御座る火燵へあたつて暖まりや。此阿房めどふせふ」と、待兼見世に駈出れば、三五郎只一人のら〳〵として立歸る。「さん「こりやたはけ、お末は何處に置て來た」「三「アヽほんに何處でやら落してのけた。誰ぞ拾たかしらん迄。何處ぞ尋て來ませふか」「さん「をのれまあ〳〵大事の子を、怪我でも有たらぶち殺す」と、叫く所へ下女の玉、お末を背なかに、「玉「おふ〳〵最愛や辻に泣て御座んした。三五郎守するならろくにしや」と、わめき歸れば、「さん「ヲヽ可愛や〳〵乳呑たからふの」と、同じく火燵に添乳して、「是玉共阿房め覺える程打擲しや〳〵」と、いへば三五郎かぶりふり、「いや〳〵たつた今、お宮で蜜柑を二ッづつ食はせ、私も五ッ食ふた」と、阿房の癖に輕口だて、苦笑する計なり。「玉「ヤ阿房にかゝつて忘りよとした。申々おさん樣。西の方から粉屋の孫右衛門樣と、伯母御樣連立てお出なされます」「さん「是は〳〵そんなら治兵衛殿起そ。なふ旦那殿起さしやんせ。母樣と伯

女房限—親しき女房にも見せぬ意か

しなしたり—しくじつた

無心中—薄情

福徳云々—福徳に滿つ天滿の神、その名を取て天神橋といふ かみは正直—正直の頭に神宿るの諺をとれり

今は紛やの孫右衛門商ひ冥利、女房限つて此文見せず、我一人披見して、起請共に火に入る。誓文に違はない」小「ア丶忝い。夫で私が立ます」と又伏しづめば、治「ハアく\ハアうぬが立の立ぬとは人がましい。是兄者人、片時も彼奴が面見ともなし。いざ御座れ。去ながら此無念口惜さどふもたまらぬ。今生の思ひ出、女が面一ッ踏。御免あれ」と、つつと寄て地團太踏、「エ丶く\、しなしたり。足かけ三年戀し床しも最愛可愛も、今日というふ今日、たつた此足一本の暇乞」と額ぎはをはつたと蹴て、「わつ」と泣出し兄弟つれ歸る姿もいたく\敷、跡を見送り聲を上、歎く小春も酷らしき、無心中か心中か、誠の心は女房の、其一筆の奥深く、誰が文も見ぬ戀の道、別れてこそは三重歸りけれ。

中之卷

福徳に天滿神の名を直に、天神橋と行通ふ、所も神のお前町、營む業も紙店に、紙屋治兵衛と名を付て、千早振程買に來る、かみは正直商賣は、所がらなり老舗なり。夫がこたつ火燵に轉寐を、枕屏風で風ふせぐ、外は十夜の人通り、見世と內とを一締に、女房おさんの心配り。さん「日は短かし夕飯時、市の側迄使にいて、玉は何して居る事ぞ。此三五郎

此亭主に云々—此茶屋の主人に工夫して貰ひたり
小詰役者—下廻りの役者
月頭—一月一日二月一日と毎月の初めに取交す

思案、伯母の心も安めたく、此亭主に工面し、をのれが病の根元見屆くる。女房子にも見かへしは尤。心中よしの女郎、アヽお手柄。結構な弟を持、人にも知られし粉やの孫右衛門、祭の練衆か氣違かつゐに指ぬ大小ぼつこみ、藏屋敷の役人と、小詰役者の眞似をして、痴を盡した此刀、捨所がないはいやい。小腹が立やらおかしいやら、胸が痛い」と齒ぎしみし、泣顔かくす十面に、小春は始終むせ返り、「皆お道理」と計にて、詞も涙にくれにけり。大地を叩て治兵衛、「誤つた〳〵兄者人。三年前よりあの古狸に見入られ、親子一門妻子迄そでになし、身代の手纏れも、小春と云ふ屋尻切にたらされ後悔千万。ふつゝり心殘らねば尤足も踏込まじ。ヤイ狸め狐め屋尻切め、思ひ切た證據是見よ」と、肌に懸たる守袋、「月頭に一枚づつ取交したる起請合せて廿九枚、戻せば戀も情もない。こりや請取」とはたと打付、「兄者人、彼奴が方の我等が起請數改め請取て、此方の方で火にくべて下され。サア兄きへ渡せ」小「心へやした」と涙ながら、投出す守袋孫右衛門押開き、「ひいふうみいよ十廿九枚數揃ふ。外に一通女の文。是や何じや」と開く所を、小「アヽそりや見せられぬ大事の文」と、取付を押退け、行燈にて上書見れば、「小春樣參る、紙屋内さんより」讀も果ずさあらぬ顔にて懷中し、孫「是小春、最前は侍冥利

へらず口ー負けぬ口

人立すけばー人が少くなる

にべー愛想

と、減ず口にて迯出す。立寄人々どつと笑ひ、「踏れてもあの頤。橋から投て水食はせ。遣なく／＼」と追駈行。人立すけば侍立寄て縛めとき、頭巾取たる面躰、治「ヤア孫右衛門殿兄者人。アツア面目なや」とどうと座し、土にひれ伏泣ゐたる。「扨は兄御様かいの」と、走り出る小春が胸ぐら取て引居へ、治「畜生め狐め、太兵衛より先うぬを踏たい」と、足を上れば孫右衛門、「ヤイ／＼／＼其たはけから事起る。人をたらすは遊女の商賣、今目に見へたか。此孫右衛門はたつた今一見にて女の心の底を見る。二年余りの名染の女、心底見付ぬ狼狽者。小春を踏足で狼狽たをのれが根生をなぜ踏ぬ。エヽ是非もなや。弟とは云ながら三十に追掛り、勘太郎おするゑといふ六ッと四ッの子の親。六間口の家踏しめ、身代潰るゝ辨なく、兄の異見を請ることか。舅は伯母聟、姑は伯母じや人親同然。女房おさんは我爲にも從弟。結合々々重々の緣者親子中、一家一門參會にも、をのれが曾根崎通ひの悔みより外、餘の事は何もない。最愛は伯母者人、連合五左衛門殿はにべもない昔人。噂の甥子に倒され娘を捨た。おさんを取返し、天満中に恥かゝせんとの腹立。伯母一人の氣扱ひ、敵に成味方に成、病に成程心を苦しめ、をのれが恥を包まるゝ恩しらず、此罰たつた一ッでも、行先に的が立。斯ては家も立まじ。小春が心底見屆け、其上の一

身次第―俺の爲す儘にして

ほざいた―しやがつた

のめらす―のつけにそらす

頰がまち―頰げた

踏さがす―踏みちや〳〵くる

苦うない。障子越に拔身を突込暴れ者、腕を障子に括り置く。思案あり繩解な。人立あれば所の騷ぎ。サア皆奥へ。小春おじや往で寐よふ」小「あい」とはいへど見知り有脇指の、つかれぬ胸にはつと貫き、小「醉狂の餘り色里には有習ひ。沙汰なしに往なして遣らんしたら、ナア河庄さん私やよさそふに思ひやす」侍「いかな〳〵身次第にして皆はひりや。小春こちへ」と奥の間の、影は見ゆれど縛られて、格子手がせに悶搔ば締り、身は煩惱に繫るゝ犬に劣つた生恥を、覺悟極めし血の涙、しぼり泣こそ不便なれ。ぞめき戻りの身すがら太兵衞、「扨こそ河庄が格子に立たは治兵衞めな。投てくれん」と襟かい攫で引擔く。治「あ痛たた」太「あいたとは卑怯者。ヤアこりや縛付られた。扨は盜ほざいたな。ヤいき掏摸めどう掏摸め」とては、はたとくらはせ、「ヤ强盜めヤ獄門め」とては蹴飛かし、「紙屋治兵衞盜して縛られた」と、呼わり叫けば行かふ人、あたり近所も駈集まる。内より侍飛で出、盜人呼りはをのれか。治兵衞が何盜んだ。サア吐せ」と、太兵衞をかい摑み、土にぎやつとのめらせ、起れば踏付踏のめし〳〵、引捕て「サア治兵衞踏で腹るよ」と、足元に突付るを縛れながら頰がまち、踏付〳〵踏さがされて土塗れ、立上て睨まはし、太「四邊の奴原よふ見物して踏せたナア。一々に面見覺えた、返報する覺えておれ」

何の因果云々―小春が契約に背くはおさんの頼みによつてなり
ど性骨―ど根性、どは罵聲
障子―しようかにかく
くらはす―毆る事
關孫六―名高き刀匠にて名は兼元

ぞく〳〵頼みやす」と、語れば頷く思案貞。外にははつと聞驚く、思ひがけなき男心、木から落たる如くにて氣もせき狂ひ、治「扨は皆嘘か。エヽ腹の立。二年といふ物化された。根生腐りの狐め踏込で一討か、面恥かゝせて腹ゐよか」と、齒切きり〳〵口惜涙。内に小春がかこち泣、小「卑怯な頼み事ながら、お侍様のお情、今年中來春二三月の比迄、私に逢ふて下んして、彼の男の死に來る度毎に、邪魔に成て期を延し〳〵をのづから手を切ば、先も殺さずわたしも命助かる。何の因果に死ぬる契約した事ぞ。思へばくやしうござんす」と、膝にもたれ泣く有樣。侍「ムヽ聞屆けた思案有。風も來る人や見る」と、格子の障子ばた〳〵と、立聞治兵衛が氣も狂亂。治「エヽさすが賣物め。ど性骨見違へ玉しひを奪はれし巾著切め。切ふか突ふかどふ障」子にうつる二人の横貞。「エヽくらはせたい踏たい。何ぬかすやら頷き合、拜む吽くほへるざま、胸を押へさすつても堪へられぬ堪忍ならぬ。心もせきに關の孫六一尺七寸拔放し、格子の挾間より小春が脇腹、爰ぞと見極め、ゑいと突に座は遠く、是はと計怪我もなく、すかさず客が飛かゝり、兩手を摑んでぐつと引入、刀の下緒手ばしかく、格子の柱にがんじがらみ、しつかと締付、侍「小春騷ぐな覗くまいぞ」と、いふ所に亭主夫婦立歸り、是はと騷げば、「アヽ

笑止—氣の毒
しん八幡—しんは眞、僞りなくの意
色外に云々—上に思內にあれば色外に形す(俚諺)

氣を付れば、花車が咄しの紙治とやらと心中する心と見た、違ふまい。死神付た耳へは、異見も道理も入まじとは思へ共、去とは愚痴のいたり。先の男の無分別は恨ず、一家一門そなたを恨み憎しみ、萬人に死顏晒す身の恥。親は無かも知らね共、若しあれば不孝の罰、佛は愚地獄へも暖かに、二人連では墮られぬ。痛はし共笑止共、一見ながら武士の役、見殺しには成がたし。定て金づく、五兩十兩は用に立ても助けたし。しん八幡侍冥利他言せまじ、心底殘さず打あけや」と、さゝやけば手を合せ、小「アヽ忝い有がたい。名染よしみもない私、御誓言での情のお詞、涙がこぼれて忝い。ほんに色外に顯るでござんする。如何にも〳〵紙治樣と死ぬる約束。親方にせかれて逢せも絕へ、指合有て今急に請出す事も叶はず。南のもとの親方と爰とに、まだ五年有年ンの中、人手に取れては私はもとより主は猶一分立ず。いつそ死でくれぬか。アヽ死にましよと引にひかれぬ義理詰に、ふつと云交し、首尾を見合せ合圖を定め、拔て出よふ拔て出よ、といつ何時を最期共、其日送りの敢ない命。私一人を賴みの母樣、南邊に賃仕事して裏家住。死んだ跡では袖乞非人の飢死もなされふか、と是のみ悲さ。私とても命は一つ、水臭い女と思召も恥かしながら、其恥を捨て死ともないが第一。死なずに事の濟む樣にどふ

大方の事―よい加減な事
うてぬ―氣乘りせぬ
天滿に云々―天滿に長く住む紙屋治兵衛と也
大幣―逢ふにかく、御幣の事
腐り合ふ―腐り緣
燈に背けた顏―白氏文集の映々殘燈背壁影の句を取れり
連て云々―小春を連れて梅田(墓場)へ行かふといふを菅公飛梅にかけたり
めいる―沈む

は、さだめし此喉を切かたが、たんと痛いでござんしよの」侍「痛むか痛まぬか切ては見ず。大かたの事問はつしやれ。ア小氣味の悪い女郎じや」と、流石の武士もうてぬ顏。花車「エヽ春樣、初對面のお客にあんまりな挨拶。少と氣をかへどりやこちの人尋て來て酒にせふ」と、立出る門は宵月の、影傾ぶきて雲のあし、人足薄く成にけり。天滿に年ふる千早振る、神にはあらぬ、紙樣と世の鰐口にのる計。小春に深く大幣の、腐り合たる御注連縄。舞今は結ぶの神無月、せかれて逢れぬ身と成果、あはれ逢瀬の首尾あらば、夫を二人が最期日と、名殘の文の云かはし、毎夜々々の死覺悟、玉しひ拔てとぼ〳〵うかうか身を焦す。煮賣屋で小春が沙汰、侍客で河庄方と、耳に入より、治「サア今宵」と、覗く格子の奥の間に、客は頭巾を頤の、いごく計に聲聞へず。可愛や小春が燈に、背向た顏のあの瘦た事はい。心の中は皆己がこと。爰に居ると吹込で、連て飛なら梅田か北野か、エヽ知らせたい呼たい」と、心で招く氣は先へ、身は空蟬の脱殼の、格子に抱付あせり泣。奥の客が大欠「思ひの有女郎衆の御伽で氣がめいる。門も靜な、端の間へ出て、行燈でも見て氣を晴そふ。サアござれ」と連立出れば、治「南無三寶」と、格子の小陰に片身をすぼめ、隱れて聞共内にはしらず、侍「なふ小春殿、宵からの素振詞の端に

ないづ云々—無き例なりとてグヅつく

登り詰云々—行き詰つた揚句には往々心中をするもの

御機嫌よかれ—下に「が」字を入れて見るべし

わつさり—揚氣に

の面を目利するは、身を茶入茶碗にするか。嬲れには來申さぬ。此方の屋敷は晝さへ出入かたく、一夜の他出も留守居へ斷り帳に付、むつか敷掟なれ共、お名聞て戀慕ふお女郎。どふぞと一座を願ひ、小者も連ず先刻參つて宿を頼み、何でも一生の思ひ出、お情に預らふと存じたに、いかなにつこりと笑顏も見せず、一言の挨拶もなく、懷中で錢よむやうに扨々俯いて計。首筋が痛は致さぬか。何と花車殿、茶屋へ來て產所の夜伽する事は、ついにないづ」とぶつゝけば、花車「お道理〱。いはくを御存じない故御不審の立はづ。此女郎には、紙治樣と申深いお客がござんして、今日も紙治樣明日も紙治樣と、わきから手指もならず。外のお客は嵐の木の葉でばら〱〱。登り詰てはお客にも、女郎にもゐて怪我の有物、第一勤の妨と、せくは何處しも親方のならひ。夫故のお客の吟味。自然と小春樣もお氣の浮ぬは道理、お客も道理、道理々々の中取て、主の身なれば御機嫌よかれ、道理の肝腎肝もん。サアはつと呑かけわさ〱わつさり頼ます。小春樣はる樣」と、いへ共何の返答も涙ほろりの顏ふり上、小「あのお侍樣同じ死ぬる道にも十夜の内に死んだ者は、佛に成と云ひますが定かいな」侍「夫を身が知る事か、檀那坊主にお問なされ」小「ほんにそふじや。そんなら問たい事有。自害すると首くゝると

小判紙云々―一分小判を散らすにかく
くすむ―大小も男もはてにない事
はゞかる―ひろがる
內から云々―紀國屋より杉が走つて來た
青菜―逢ふにかく

身代漉破紙の、鼻もかまれぬ、紙屑治兵衛。エなまみだ佛なまいだ、なまみだ佛なまいだ〳〵」と、暴れ叫く門の口、人目を忍ぶ夜るの編笠。太「ハアヽ塵紙わせた。ハテ引きつい忍びやう、なぜ這入ぬ塵紙。太兵衛が念佛こはくば南無編笠ももらふた」と、ずり入たる姿を見れば、大小くすんだ武士の正眞。編笠越にぐつと睨たる、まん丸眼玉は敲鉦、念共佛共出ばこそ、「ハアヽ」といへどもひるまぬ顔。太「なふ小春殿こちは町人刀指いた事はなけれど、己が所に澤山な新銀の光には、少々の刀も捻曲めふと思ふ物。塵紙屋奴が漆漉程な薄元手で、此身すがらと張合は慮外千万。櫻橋から中町下りぞめいたら、どこぞでは紙屑蹂躪つてくりよ。皆おじや〳〵」と身振計は男を磨く、町一ぱいにはゞかつてこそ歸りけれ。所柄馬鹿者に構はず堪る武士の客、紙屋〳〵と善惡の噂小春が身に應へ、思ひくづおれ恍惚と無挨拶なる折節、內から走つて紀國屋の、杉がけうとい顔付にて、杉「只今春樣送つて參りし時、お客樣まだ見へず、なぜ見屆けて來なんだ、とひどふ叱られます。慮外ながら一寸」と、編笠をしあげ面躰吟味、「ムヽそでない〳〵氣遣なし。跡詰てしつぽりと小春樣、したゞる樽の生醬油。花車樣さらば。後に青菜の浸し物」と、口合たら〳〵立歸る。至極かた手の侍大きに無興し、侍「こりや何じや、人

大坂三鄕―南組、北組、天滿の三區劃

身すがら―係累なき

潛上―高言

ほたへた―じやれて甘へる

鉦の火入云々―火鉢を鉦の代りに煙管を撞木に代用す

や」とのさばりよれば、小「エイ聞共ない。得知れぬ人の仇名立、手柄にならば精出していはんせ。此小春は聞ともない」と、ついと退けば又揩寄、太「聞共なく共小判の響で聞せて見せふ。貴様もよい因果じや。天滿大坂三鄕に男も多いに、紙屋の治兵衛二人の子の親、女房は從弟同士舅は伯母聟。六十日〳〵に問屋の仕切にさへ追るゝ商賣、十貫目近い金出して請出すの根引のとは、蟷螂が斧で御座る。我ら女房子なければ、舅なし親もなし伯父持ず、身すがらの太兵衛と名をとつた男。色ざとで潛上いふ事は治兵衛めには叶はね共、金持た計は太兵衛が勝た。金の力で押たらば、なふ連衆、何に勝ふも知れまい。今宵の客も治兵衛奴じや。囉を〳〵、此身すがらが囉ふた。花車酒出しや〳〵」小「エ何おしやんす。今宵のお客はお侍衆、をつ付見へましよ。お前は何處ぞ他で遊んで下さんせ」と、いへ共ほたへた顔付にて、太「ハテ刀指か指ぬか侍も町人も客は客。なんぼ指ても五本六本は指まいし、よふ指て刀脇指たつた二本。侍ぐるめに小春殿もらふた。抜つ隱れつなされても緣あればこそお出合申。なまいだ坊主のお蔭、アヽ念佛の功力有がたい。こちも念佛申そ。ヤ鉦の火入煙管撞木面白い。ちやん〳〵ちやゝんちやん 歌ゑいゑい〳〵〳〵、紙屋の治兵衛、小春狂ひが杉原紙で、一分小判紙ちり〳〵紙で、内の

松山—柳久末の松山に出たる女主人の名

紺屋云々—與作踊にある句なり

とつ河内屋—とつかは(急忙)にかけたり、河内屋は河庄の事

花車—河庄の女主人

李蹈天—國性爺の敵役

日本の朝比奈流を見よやとて、貫木逆茂木引破り、右龍虎左龍虎討取て、難なく過る月日の關や。なまみだなまいだ〱〱。文彌迷ひ行共松山に、似たる人なき浮世ぞと、泣つエヽ〱ワハ〱〱。笑ふつ狂亂の身の果何と淺ましやと、芝を褥に伏けるは眼も當られぬ風情。なまみだなまいだ〱〱。歌ゑい〱〱〱〱紺屋の德兵衞、房にもとより濃る染込の、内の身代灰汁でもはげず。なまみだなまいだ〱〱〱〱」妓「アヽ是坊樣なんぞ、エヽ忌々しい。漸〱此比此さとの心中沙汰が鎭つたに、夫をいて國性爺の道行念佛が所望じや」と、杉が袖から報謝の錢。坊主、江戸「只た一錢二錢で三千余里を隔てたる、大明國への長旅は、あはぬだ佛あはぬだ〱〱」ぶつ〱いふて行過る。人立紛れにちよこ〱走、とつ河内屋に駈込ば、「是は〱早いお出。お名さへ久しう云なんだ。やれ珍らしい小春樣〱、はる〴〵で小春樣」と主の花車が勇む聲。小「是門へ聞へる、高い聲して小春〱と云ふて下んすな。表に嫌な李蹈天が居るはいの。密かに密かに頼みやす」と、いふも洩てやぬつと入たる三人連。太「小春殿李蹈天とはない名を付て下された。先禮からいひましよ。連衆、内〱咄した、心中よし意氣方よし床よしの小春殿、やがて此男が女房に持か、紙屋治兵衞が請出すか、張合の女郎。近付に成て置

ば云
此十月—十月を小春と云より續けたり
呼子鳥—をちこちのたつきもしらぬ山中に覺束なくも呼子鳥哉(古今集)
貴面云々—お目にかゝらねど
むさと—ウカと
贅こき—贅澤いひ
せく—逢はせぬ
のんこ—髷の細き髮の結方、柳亭筆記に「糸髷づくりのんこあたま」とあり
のら—放蕩者
樊噲流は云々—是は國性爺の九仙山にある句也

を世に殘せとのしるしかや。今宵は誰か呼子鳥、覺束なくも行燈の影、ゆき違ふ妓の立歸、「ヤ小春樣か何といの。互ひに一座も打絶へ、貴面ならねば便りも聞ず。氣色がわるいか顔も細りやつれさんした。誰やらが咄しで聞けば紙治樣故。内からたんと客の吟味にあはんして、何處へもむさと送らぬの、いや太兵衛樣に請出され、在所とやら伊丹とやらへ往かんすはづ共聞及ぶ。どふで御座りやす」と云ければ、小「アヽもふ伊丹〳〵といふて下んすな。夫でいたみ入はいな。いとしぼなげに紙治樣とわたしが中、左程にもない事を、あの贅こきの太兵衛が浮名を立て云散し、客と云客は退果、内からは紙屋治兵衛故じやとせく程に〳〵、文の便りも叶はぬ樣に成やした。不思議に今宵は武士衆とて河庄方へ送らるゝが、かふ往く道でも若し太兵衛めに逢ふかと、氣遣さ〳〵。敵持同前の身持。なんとそこらに見へぬかゑ」妓「ヲヽ〳〵そんならちやつと外さんせ。あれ一丁目からなまいだ坊主が、てんがう念佛申て來る。其見物の中に、のんこに髮結ふて野良らしい、たて衆自慢と云そな男、慥に太兵衛樣かと見た。あれ〳〵爰へ」と、いふ間程なくほうろく頭巾の青道心、墨の衣の玉襷、見物ぞめきに取卷れ、鉦の拍子も出合ごん〳〵、ほでてん〳〵ご念佛に仇口嚙交て、道具屋「樊噲流は珍らしからず、門を破るは

さん上云々―意味なく口拍子に唱へる當時の流行唄

大海―蜆て大海を量るの諺を用ゐたり

紋日云々―節句に行くと妓に契りて行かぬ爲仲居が景清と成て客の三保谷を捕へた（謡曲景清）

ふみかぶる―してやられる

南の風呂―小春はもと湯女なれ

かみや治兵衛
きいの國や小春

心中天の網島

作者　近松門左衛門

歌「さん上ばつからふんごろのつころ、ちよつころふんごろで、まてとつころわつからゆつくる〳〵、たがかさをわんがらんがらす。そらがくんぐる〳〵も、れんげれんげればつからふんごろ」妓が情の底深き、是から戀の大海を、替へも干されぬ蜆川。思ひ思ひの思ひうた、心がこゝろ留むるは門行燈の文字が關。浮れぞめきしあだ浄瑠璃、役者物眞似なやは歌、二階座敷の三味線に、ひかれて立よる客も有、紋日遁れて顏隱し、仕過しせじと忍び風。仲居のきよが是を見て、ウタイ三保の谷が著たりける、頭巾の錣を取外し〳〵、二三度迯延たれ共思ふおてきなれば遁さじ、と飛懸りひつたり惡洒落。ごんせ、と止たる女景清錣と頭巾、ついふみかぶる客も有。橋の名さへも梅櫻、花を揃へし其中に、南の風呂の浴衣より、今此新地に戀衣、紀の國やの小春とは此十月に仇し名

墨、耳殺ぐ劓ぐ、ちみどろちんがい追拂ふ。隣國他國幾萬人、博多小女郎が物語、語るも聞も後代の、永き噂を殘しけり。

血みどろ云々ー血まみれ血だらけ

檢非違使—今の警視の如きもの

當今—今上皇帝

今が博多—今は羽片に通はせたり

殺して下され殺して」と、狂ひ戰き駈廻る。斯る處へ檢非違使の某眞先立、爰彼處にて召取たる海賊原、傾城交り繩付共、一度に彼處へ引來る。檢非違使一札押開き、「召人共に申聞する趣、有難くも承れ。一、沖がかりの大船に通路を求め、波を潛り、水底を拔け、船へ近付、諸色を奪取し事、國法を背く大罪。武士に仰て死罪有べき所、當今御卽位の御悅びによつて、死罪一同を勅免成」と、聞も果ず繩付共、蘇生たる心地して、一度にあつとぞ勇みける。重て傾城共に打向ひ、「汝等は流れの身。彼奴等に添ふは勤の習ひ、科にあらず。行先迚も構なし。繩を許せ」と有ければ、畏て雜色共、立寄り解く繩の跡、吹擦り撫擦り、女郎「王樣の意氣方は又格別な物じやないか。此手が自由に成たれば、廓の門を出た樣な」と、笑ひ悅ぶ其中に、小女郎は始終しく〱涙、留め兼たる顏振上、「つれ合の惣七殿、斯るお慈悲を待受ず、私を捨、此世彼世へ飛去て、比翼の鳥の片翼、今が博多の此小女郎、生て甲斐なき命ぞや。お慈悲に殺してたべのふ」と、聲も惜まず泣居たる。「ヲヽ、尤〱、夫惣七同類とはいひながら、色に迷ひし若氣の至り、罪の輕重明白たり。自害せしは其身の不祥。汝夫に成かはり、親惣左衛門に孝行盡し、後世を弔ひ得さすべし。勅に任せ、彼奴原それ追拂へ。重て惡事を止灸の、顏に燒鐵入

天の網―原本天のあふ

命のかい―命の障り

人は互―人は相見互の諺

てどなく、此處迄迷ひ來て、天の網、地の繩に搦められし此惣七。古郷へ引れ死罪に遭はゞ、一門の頰に血を注ぎ、親へは不孝の上塗、と思ひ定ての自害。毛剃九右衛門が海賊に組し、今迄身に纏ひし繻子縮緬、和女に著せた綾錦の冥加に盡き、孤被る身に成果た。夫につるゝ習ひ迚、和女迄繩をかけ、名を流させ、憂目を見するは、我一心より事起る。此惣七がなかりせば、今の憂い目は見せまい物。不便や、嘸悲しかろ。長くも添はぬ物ゆへに、命のかい迄なしたよな。許してたもれ小女郎」と、いふ聲もはや息切れし、頼み少く見へにける。鋭く見ゆる取手共、獄屋へ渡しては叶はぬ事。人は互。兩方名殘惜ませよ」と、了簡することそ優しけれ。聞ば聞程猶悲しく、小「其起りは誰が爲すぞ。小女郎を人手に渡すまいとの御心から、親御に換へ、命に換へ、女房に持て下されし。それ程私が可愛ひか。冥加ない共忝ない共、お前に禮をいふ詞、日本は愚の事、唐天竺にもよも有まい。此手が自由に成ならば、拜んで死度ふ御座んす」と、夫の膝に顏さし寄せ、消入絶入、咽せ返れば、惣「此世で逢ふは今計。來世もかはらぬ女夫ぞや。南無阿彌陀佛、彌陀佛」の、聲もかすかに脇指ぐつと、拔くより早く息絶へたり。小女郎わつと聲を上、「待て下され連立度い。遲いか疾いか殺さるゝ我命。皆樣お慈悲に今爰で、

じゆつないー苦痛に堪へぬ

やの者、十手引提げくる〳〵と追取巻き、「咎は心に覺えがあらふ。其方共に仲間八人と分明の仰を請、我々捕に向ふたり。尋常に召捕らるゝか。蹈付て繩かけふか」と、いへ共念佛の聲の外、何の答へもあらざれば、役人「爰は途中、次の宿まで此儘連行、繩かけて國へ引け。それ駕籠遣れ」カゴ「心得ました。迚も遁れぬ命じやに、爰で繩をかゝらいで」と、呟き〳〵立寄て、駕籠舁上れば、がば〳〵と、駕籠から漏て流るゝ血は、大地に毛氈引如く、乘手はうん〳〵喚くにぞ、「やれ駕籠の内で自害した。出合〳〵」と駕籠投捨、恐れて側へ寄附ず。役の者共立懸り、網引除け、簾上ればこは如何に、一尺五寸切刃際迄突込で、刃先は弓手の脇腹に。虫の息、眼はぎろ〳〵。惘れて詮方なかりけり。斯る處へ小女郎が、身にもかゝつた縛繩、引れて來る身の悲しさより、此有樣を見る悲しさ。流れし血汐を踏しだき、駕籠の内へ顔さし入、小「小女郎が來ました。私も今縛られた、繩かゝりましたぞや。昨夜迄も一ッ枕に起臥て、一所と契りかはしたに、此方樣一人が先立て、存命へ物を思へとか。苦しふ御座ろ、じゆつないか」と、いふも涙に掻暮て、前後も覺へず泣居たり。惣七苦しき目を見ひらき、「ヲヽ、繩かゝつたか小女郎。國法を破り親に不孝の大惡人、廣い世界に狹められ、土地の住居もならぬ樣に身を持なし、落付方なく、あ

肩せい―肩かへ

おりゐ云々―河合村で駕籠を下りるにかく

うち―お客の泊る宿

さあ立て―駕籠を立てよ

より苧―綱を張るは罪人を逃がさぬため

こや―道傍の小屋か

日影も我も行空の、末果しなき旅衣、昨日今日とは思へ共、都を出て日數さへ、四日市にも程近き、追分にこそ三重著にける。

正しかれと心中に、頼みをかけし辻占の、駕籠舁が詞のはづれ、惣七が胸に應へ、かゝらぬ縄に氣を縛られ、向ふの人は下るれ共、我心から身を縮め、下りもやらず、惣「コレ小女郎、先和女から乘換へて先へ行きや」小「そんならお先へ參ります」惣「四日市とやらで待て居よ」小「駕籠の衆早う連れましてや」と、おりゐの駕籠の河合村。小女郎は何の氣もつかず、駕籠に任せて乘換へ行。石藥師から來る駕籠の者聲かけて、「女中の連衆乘せた駕籠は是か。うちも聞た駕籠換よい」「おつと幸、サア立てい。旦那殿換へまする。おりて下され」と、駕籠の簾を打上る。相手は駕籠をハヤ下て、提げたる風呂敷包、身輕い出立の袷股引、牙籤脚絆に身を堅め、腰に早縄見るからぞつと、惣七が余所見る顔は我顔を、見せじと忍ぶ頰冠り。心早に下り立て、「駕籠の衆太義」と駕換ゆる。駕籠の簾我手に取て引下し、惣「急ぎの者じや増やらふ。サア遣た」といふ聲は、人の耳にも慄ひけり。捕手「小町屋惣七捕た」と聲を打かける。駕籠により苧の細引網。中に是はとあがけ共、翼なければ飛れもせぬ、駕籠の鳥かや惣七は、中に音を泣計なり。豫て相圖のこ

け開寺小町を寄せたり
ならし竹―割れるにかけ甲斐絹に回忌をかけてそれに逢はれぬ事
黒繻子―苦勞にかく
方様云々―惣七ならで頼む人なし
ぬめ―絖と夢にかく
をこせい―氣を附け

け、何時も心に懸て置、歌 親の甲斐絹に綾錦、惣「最早都を見ん事も、又と成まい限り」といへば、共に泣く〳〵憂き黒繻子の、糸の切れざる辨柄島の、小「愚痴なさら〳〵左様ではないに、羅紗もない事云しや綸子な。先へ行子に尋れば、拔け參宮の頭字が、耳に留まる神心、守り給へ」と再拜の、袖に神樂の鈴鹿山、八十瀬の川に濡れ初し、惣「おれと和女が初戀に、二世も三世も變らじと、登り 冷泉 詰たる坂の下、今零落の身と知らば、ざつと淺黄に染ふ物。裏表ない心から、僞紫の色悪ふ、憔れ顔見る悲しや」と、絞る袂の涙の露、野邊の草葉も色つきぬ。泣て心を亂せとか。方様ならで、歌 頼む博多の小女郎がなくば、世帶の花も縮緬と、こんな姿にせまい物。ぬめ 幻の此世から、未來〳〵と夫婦ぞと、縋付てぞ泣居たる。歌 關のお地藏は、親よりましと聞なれど、優らぬ此世の舅御の、機嫌直して給はれと、頼みを直に救ひ乘せ、共に助かる駕籠舁の、「駕籠遣ませふ」と歩み來る。惣「尾張へ行者。先の宿迄駕籠賃幾許」カゴ「石藥師迄は、道は二里有駕籠賃ころり」惣「ころりは知らぬ」カゴ「知らずは錢百」惣「それは高い」カゴ「負て行ましよ」惣「七十〳〵」二人「能いは負けた」と駕籠下す。道は一筋駕籠二挺、二人思ひを抱乘て、打見るよりは肩重く、甲「小川じや」乙「そこせい」甲「かたせい」乙「まツかせ」杖突坂、小谷大谷打過て、

天必ず食を與へる

分量―程

戀と小袖云々―著心もよくの尾題を受けて能々と續けたるにて夫婦仲睦じけれども能々世間に捨られたと也

粟田口―逢ふにかく

關寺―急くにかく

ば、分限相應々々の、天の乳房が備はる。正道にない金儲け、榮耀する樣なれど、天道の乳首に放れ、三界の捨子と成、野倒死するは幾人か。猫は火燵に寢臥する、犬は土邊で物喰へど、火燵な猫の眞似せぬは、身の分量を知たるゆへ。畜類に劣つた身の程知らず、成れの果を思はれ、不便さに腹が立はいや」と、包みかねたる涙なり。「ヤイ惣左衞門が子に成たくば、手鍋提ても正道に、淺ましき死をせぬ樣に、命全ふ何卒親を先に立、惣左衞門が葬禮に喪服を著て供して見せ。其時は我子じや、と棺の中から悦ぶ。早ふ失ふ」と計にて、わつと泣入泣聲の、耳に殘るを形身にて、別れ行くこそ 三重

下之卷　惣七小女郎道行

歌 戀と小袖は一模樣、身に引締て合ふてこそ、寢心もよく著心もよく、能々見限り果られて、追出されし我宿の、あたりに顏を見られじと、戸口も店も明やらぬ、星も夜深き親の恩、重ねて著たる其時は、いとゞ心も輕かりし。今朝肌薄く行道は、肩背苦しき身の行ゑ。心柄とはいひながら、情名染の京の町、三條小橋で知る人に、粟田口かと思ひしも、先へ心の關寺に、身の衰への恥しき、今の小町屋惣七は、博多小女郎がならした

生身には云々ー
生あるものには

茶碗に縋り手に縋り、「お盃共、薬共、氏神の御神酒共、此上の有べきか」と、二人戴き飲交し、小「申御手は取れ共お顔は知らぬ。私はお許しなけれどお前の嫁。何卒御機嫌直して惣七樣共詞をかはし、一期の見始見納めに、お顔を拜ませ下され」と、舅の手を我顔に、押當々々泣涙、親の歎きもあらはれて、腕慄ふぞ哀成。盡せぬ涙の手を振放し、銀財布一ツ投出し、親「早う出て往け〳〵」と、いはぬ計に門の方、敎ゆる手さへ引入るれば、小女「今は親よ舅よ、と便り名殘もきれたるか」と、又絶入て泣けるが、惣「ナフ不孝至極の惣七に是程のお慈悲。路銀迄下さるゝお心、背くは猶不孝」と、財布を女夫が戴き戴き、「はや人顔も見へまい。これが本の名殘じや」と、互に身用意裙引上げ、泣く泣く表に出けるが、隣の門を遙に見入、惣「ヤレ姥、只一目親父樣を小女郎に見せてくれ。路銀のお禮も申度い」と、小聲にいふも聞付て、姥が出れば惣左衛門、「こりや姥、何をとぼ〳〵する。今の銀は隣の道具賣つた金、直に隣へ投込んだ。禮受る筈がない。惣左衛門が子共には商ひこそ訓へたれ、非道の身過する子は持ぬ。淺ましや不便や。天道も日月も、神も佛も罸は當はなされねど、此方から罸の下へ當りに往くとは知らぬかや。生身には餌食あり、人間一人生るれば、乳房といふ天道の御扶持方、正道の家職勤むれ

がはと踏込ー障子の中に足をふみ入る

聊爾ー粗忽

あらーあらずにかく

て打付る。足踏ためず、障子を我身に負ながら、どうと伏せば九右衛門、透さずかゝる片足をがはと踏込み、小女郎が上に重り伏し、障子越に突んとす。「突たらおのれ一打」と、上に晃く惣七が切先、危き中の危さなり。親は憧れ隣の壁、打毀ち〳〵、手の出る程に壁下地引破り、割符を出し閃かす。親の手つきの物云ふ計。惣七きつと見付、「ヤイ九右衛門聊爾すな。割符渡す云分あるまい。此方もさす、サアさせ」と、鞘に納めて眼前に、助かる命も親の慈悲、と手共に取て押戴き〳〵、惣「是々慥に受取れ」と、渡せばとつくと見屆、九「ムヽ別條ない受取た。是惣七、互に命がけの身過。魂を研く仲間の法。切結んだ劒の下から睦まじく成も魂、遺恨は残らぬ。氣苦勞の有顔色じや。山が崩れかかつても、狼狽へぬ心持ねば此商賣はならぬ事。いつもの時分に又下りや。國で逢ふ」と暇請ひ、出て行こそ膽太けれ。惣七、小女郎を引起し、「今のを見てか。忝い親の慈悲。此壁の頽れをせめて拜みや」と、泣ければ、小「アヽ有難い御恩德。慈悲心を受ながら、壁一重彼方の舅御の御面躰、見る事も叶はぬか。ハアヽ息切れて物いはれぬ。水でも湯でも」と苦しめ共、茶碗一ツ杓一本。あら氣毒なんとしよ、といふ聲隣に響入、茶碗に温湯壁越しに、情の親の手つきを見て、「ハアヽ冥加ない有難い」と夫婦わつと泣出し、

魚と水―情交親密なる事、劉備孔明の故事

反を打つ―拔く身構す

しのべ竹―葉細く節長き竹

捨る―前後に意を持たす

いふな。仲間を脱て一人儲けしようでな。音沙汰なしの俄宿替へと、てうど算盤が合ふた。此割符は其肌に付て居る知れた事。受取て見せう」と、大戸、潜戸の鎰棙、掟としめて伸し上れば、小女郎慌て、「これ九右衛門樣、魚と水とのお仲間、なんの嘘が御座んしよ。此割符は二三日中、私が急度渡しましよ。先歸つて下さんせ」と、押出す腕むずと取、「エヽ面倒な」と簀子にどうと投付る。惣「卑怯な、女を痛めず共、いふ事は身にいへ」と、脇指に手をかくれば、九「ヤ反を打て威ても、割符を取らずに置ふか」と、ずはと拔けば惣七も、飛退去て拔合せ、兩方腕は狂はね共、繩目も弱い古簀子、まばら朽たるしのべ竹、踏込む足を踏とめて、右へ拂へば左へかぶり、左を切れば右を踏込み、打合ふ切先春の日に、解け行く氷踏む如く、小女郎は中に身を捨る、掃溜の鍬箒、持て開いて相手の刃物、打落さんと立廻る。裙を簀の子にしがらみて、かつぱと轉ぶ頭の上、閃く刃ぞ三重危けれ。あたり隣に聞付ても、恐れて態と知らぬ顏。堪り兼て惣左衛門、何をいふも子の可愛さ。「割符を渡す怪我すな」と、表へ廻る門の戸を、押せど叩けど明〱にこそ。棙の穴から覗いては、「ハアヽ〱悲しやあぶなや」と、もがいて裏へ駈廻る。内には小女郎、障子を外し中の楯、相手の刃物を押へんと、前に塞り後に開き、隙間を見

つぼむ―ちんまりと寢す

う往きまする。命あらば御縁次第。お二人共に御無事でや」と、歸るぞ是も名殘成。茫然として惣七、「親父の耳へ入からは、世上に知れたに極つた。四日市には思ひ寄方も有。伊勢路へ向て遁るゝたけは遁れて見ん。もう七ツに下つた。サア用意」といふ處に、「惣七宿にか。早い門のさし樣」と、潛戸を明て突と入ルは毛剃九右衛門。惣七狼狽へ、「ヤ珍しい、何と思ふて。先々是へ」と、「煙草盆持て來い、茶持て來いよ」といふ程、九右衛門胡散顏、「默りや〳〵惣七。大坂で逢ふたは四五日前。追付上る、京で逢ふといひ合せ、こりや宿替と見へた。何とした仕だらで何方へ立退やる。氣遣ひなり」といひければ、惣「イヤ〳〵氣遣な事でない。たつた今上つてまだ洗足もつかはず。老躰の親別住ゐも異な物、と一所につぼむ談合で、諸道具を引やら、取込んだ最中。旅宿は何處ぞ、其中此方から便宜せう。休んで往きや」と出んとす。九「待ちや〳〵。ハテきよろ〳〵と女夫ながら飲込まぬ素振。是やがて商賣時分。此方も明日國へ下る。仲間中から預た島の割符受取に來た。其割符を渡して往きや」惣「ヲヽ如何にも〳〵、其割符は大事にかけ、箱に入、封を付、親父に預た。追付是から持せて遣らふ」と、いふより九右衛門色を變へ、「三千里を股にかける此仲間。命代の割符を親父に預ケたとは何處へ。味い事いふな

お笑止—お氣の毒

水臭き—寐耳に水とかけて水臭い奉公は馬鹿らしいとなり

木の空—磔

あげて—あけてか

に就ての事か。何れの道でも命有中、一夜も爰では明されず。エヽ是非に及ぬ、惣七が運も是迄。こりや女子共、男共、見る通の仕合、力にかなはぬ。主従の縁も是限り。大坂の遣ひ余り、一歩駒金少々有。三人寄て分て取れ。隙を遣る、さらば〳〵」金更紗の財布共に投出せば、下女共「お笑止共なん共、お辭義申もお慮外。又の御縁」と口上を、捻つて見れば手にさわる、一歩小判も八九兩。はつと寐耳に水臭き、半季一季の名殘なく、連立表に出にけり。物音隣へ聞ゆれば、姥が會所を脱て來て「なふおとましや〳〵。昨日の晩から親父樣がお出なされ、中々でもない事。淺ましい欲心に海賊の仲間に入、道に違ふた銀儲けを結構な事と思ひ居る。木の空に引張らるゝは今の事。菜大根肩に置ても、正道な儲けは三文でも身に付と、云聞せた詞反古にして、何んで出來た屋財家財。是が我子の敵じや、とおいとしぼや、涙片手に道具屋集め、二足三文に賣捨、家もあげて其上に、隣の會所で町衆の前に、畏、何やら斷りいふたり、皆お前ゆへの御苦勞」と、涙ぐめば涙ぐみ、惣「これ姥、懸硯に入置し割符の手形、是があれば一大事。入物共に道具屋の手へ渡つたか」姥「いや〳〵懸硯は賣れたれ共、其割符は殘して親父樣の鼻紙入に納てじや。そんな事氣遣ひせず、早う町をのけましたい。ハア會所から呼そうな。姥はも

家請—家を借るについての保證人
紙—神にかく
心づくし—筑紫に心配の事をよす
閑古鳥—淋しき也又泣くの緣
足の底云々—謠に脛に疵持て笹原歩かれずの意

計にて、下るはきんか頭なり。嘉「御親父の云分承り届けた。去ながら、惣七殿には口合家請も有仁。後日の念に御親父の一札、留守居の姥も判を取。サア會所へ同道、いざ御座れ」と、門の戸はたと引立て、天の岩戸にあらね共、此處にも紙の貸屋札、殘らぬ千早古道具、明屋とこそ成にけれ。博多小女郎は町風に、馴し夫の惣七が、あぶなき分限波の上、何百里共知らぬ火の、心づくしを過し身は、京大坂は隣にて、夫婦打連れ歸りしが、暖簾はづし大戸をしめて、墨黑に貸屋札。惣「こりや如何じや。ハツ〳〵」といふより詞なく、潜戸押明入たるに、湯水を飲まん鍋釜も、疊も擧て閑古鳥、泣にも泣れず興さめ果、口を明たる計なり。惣七心は足の裏の疵にこたゆる小笹原、簀の子にどうと座しければ、小女郎せいて、「是申、緩りとして居さんす處で有まい。念比にする家主殿、内義樣ッと私共親しうて、先度下る時にも、土産に大坂の三好下駄頼むぞやとおしやんした。それ程他事ない中で、譯の惡い仕方。わしや急度詰開かふ」と、走出るを、惣「是是々、女子のいふて濟ぬ事。貸屋といふは名計、破れ家を手前普請、根板も追付張る筈で、板も買置。屋賃といへば二ヶ月三ヶ月先へは遣れど滯ほらず。町義付合愚も無き身。家財迄取られ、姥が行衛も知れぬは、如何でも下の沙汰でなし。方々に預置し金銀荷物

たばね—取締

胴返—元手の倍の利

憂しほ云々—辛い目に逢うて

付届—贈物

の會所、サア〳〵歩びや」と、喚け共姥は涙に顔傾け、親惣左衛門手を束ね、「お家主と申お年寄、御尤々々。我等は惣七めが爺、小町屋惣左衛門と申て生國は長崎。廿ケ年以來上方居住致せ共、資本なければ商賣もはかどらず。山科邊に逼塞致し、古鄕力に惣七めが西國通ひいたせ共、仕合したとの便りもなく、如何か斯うかと思ひ暮す折節、端し〴〵人の取沙汰、小町屋の惣七は、西國で大きに儲け、博多の傾城請出し、心淸町に檜木作、節なしの見世を張り、風躰は無人の暮でも、内證の榮耀は千貫目持、と噂する程心得難く、夜前始めて尋參り、沙汰に違はぬ内の諸道具、代物に吃驚いたし、姥めに向ふても委しき樣子は知らぬと申。各も商人、我等も七十八迄商で食た者。胴返しの利なればとて、儲けるには法圖が有。僅か十兩十五兩儲けてさへ、吹聽して悦ばせた正直孝行な惣七め、一人の親に隱すからは、碌な銀とは存ぜぬ。後に募つてお町内、お家主へも難義をかけ、其身も人竝の死をせぬ奴。今斯う致すも親の慈悲。邪の銀は身につかぬと申事、骨身に泌て思ひ知らせ、憂しほ踏んで正道の、商に取付く心つけん爲、俄に道具屋へ走やら、古鐵買を呼やら、心急いてお町内へ無禮。お家主へ付届け申さぬは、眞平々々。幾重にもお侘言。貸屋札出して下されませ。お家は明ます〳〵」

狩野—角やにかく

百貫云々—百貫も費したのに編笠一かいの代にて賣拂ふ、諺を轉用したる也

南京—支那製の貫き陶器、八匁に鉢をかく

直打に云々—直打にすれば何匁になると猫の鳴聲とかく

五分と飛で云々—算盤の一桁おいて上るを飛ぶと云より時鳥と續け其鳴聲を取て本尊懸硯といへり

自慢は七人の、鼻に顯れ 三重

中之卷

市たてゝ、屋財家財の頽賣、捨賣に相場なし。戸棚箪笥塗長持、燭臺椀家具吸物椀、俎板佛壇、何や狩野の三幅對、表具計も百貫に、編笠提灯南京の、八匁から九匁を、鍔に見込の中脇指、鍋も釜も燻り鑵子も、疊も上て粗道具、簀の子の竹の小間道具、有とある物塵も灰も、猫も直打ににやん匁、五分と飛んで時鳥、守本尊懸硯、鐵漿壺も罷出で、金になれとや口々に、付て糶る〳〵糶市に、町内騒ぎ 三重 やかまし。家主菱屋嘉右衛門、興覺め顔にて駈來り、「是は〳〵狼藉千萬何事じや。此家は我等が貸し家。主は小町屋惣七といふ西國商人、夫婦連で十日計の逗留で大坂へ下る。跡にはあの婆々たつた一人。留守の事はお家主頼ますといひ置、今日か明日は戻られふ。お姥もお姥、留守居とは何の爲。是親仁、先わごりよは誰なれば、能い年をして京の町の作法知らぬか。町所へも斷りなく、人の留守に踏込、疊迄賣拂ひ、捌はなんとする事。此心淸町一町のたばねをする年寄則家主、うつかりと見ていよか。乳母も一所に詮義する。隣が町

チヨツ〱でんぐりはカイグリカイグリなり其尾頭をとりて栗と續けたり
あやめ―殺す事
いで菜―ゆでた菜

ぞゝ髮―おぞ髮が立つ
顯れる―罪の露見にとりなす

いた科人が、此廓へ入込んだと、上の町から客改、一人も客衆外へ出る事成ませぬ。捕手の衆がはや爰へ」と云捨てゝ、亭主を連て駈出る。動ぜぬ自慢の九右衛門始め、六七人がぐんにやり〱、俄に顏色いで菜の樣に、しほ〱と「コリヤ堪らぬ。何卒舟へ行道は外にないか、金の出るには構はぬ。土の底へは這入られず、天へ昇る梯子はないか。隱れ簑隱れ笠があら欲しや」と、我身一つを片付かねて慄ひ居る。惣七小女郎が手を取て、門口に氣を配り、片唾を飲んで居る處に、內か隣かぐはた〱〱。「捕た〱」と喚く聲。「なふ悲しや」と一同に、腰を拔して魂の、身に添ふたるはなかりける。亭主四郎左立歸り、四「アヽ氣遣ひない〱。此博多の殿町で、飛脚殺して金取った奴、隣の揚屋で捕へ、代官所へ引ました。此方の事ではない〱」と、いへば一度に顏を見合、賊「アヽ有難い。ヤレ忝い。可惜肝を潰した」と、溜息ほつとついたるは、世並の悪い疱瘡に、二番湯かけし如くなり。九「長居は無益惣七殿、京へ上ろ。サア〱皆々往なふ〱。女郎衆は駕籠で舟場迄」一口いふても八人が、「亭主さらば」と立出る。四「七人一度に身受とは、聞も及ばぬ大々臣。お獨びとり顏に書付張付度い」賊「ナフ磔と聞もぞゝがみ。嫌や〱」四「お手柄のお名が顯れう」賊「顯れるは猶氣懸り。何にもいふな」と出て行、男

濡れて云々―戀の爲破滅するは誰も免れがたき習

腕引て―腕を刺して

一兩二兩云々―一兩の包と二兩の包各七百五十兩其兩を兩方にかく

おんらが在所―當時の俗謡、ててうちは子供の

まで世話やかふとの心入。お身に悪い事でもなし、あつといふて仲間に成、早う私と起臥を、一所にしようとは思さぬか。お爲にならぬ筋ならば、いやと返事を云切らしやんせ。此方さんに添れねば生て居る小女郎じやない。女房に仕なと殺しなと、否か應かが生死の、大事の返事で御座んする。急く事はないぞや」と、懐に手を指入、「ヲ、此汗はい」と、鼻紙有たけ拭捨る。濡で破れる人の身の、たしなみがたき道ぞかし。惣七はつと打頷き、「得心致た。只今より仲間に成、お指圖は背くまい。承り及ぶ長崎には物の堅めに血酒飲とや。僞でない惣七が心底、腕引て誓ひを見せん」と片肌脱げば、九「ア、見へました〳〵。人にこそよれ何ンの此方に僞有ふ。改て盃事。皆來い〳〵」と呼集め、九「小女郎殿嬉しかろ。亭主身請の惣代金何程ぞ」四「書付是に」と指出す。追ッ取てさらりと讀、九「小女郎殿共七人の身請代金千四百五十兩な。端錢が有てやかましい。五十兩は亭主に遣る。千五百兩是受取れ」と、一兩二兩の七百五十、兩方目出度い仲間入。皆兄弟より他事なふなされ。歌へ〳〵」歌「おんらが在所はの、奥山のてようちの、でんぐり〳〵栗の木の、木の根を枕に轉寐。此小女郎戀する山家の、品物で南無阿彌陀佛、帶解いて是御座れ〳〵。抱て轉び寐、面白いぞ」と樂みける。町の夜番慌忙敷、「人をあやめ、法を背

小女郎を此方へ云々—自分の方へ請出せば汝の小女郎との約束むだになる

息が云々—親の世話にならずとも

ゐやい腰—片腰立てゝ仕懸るさま

駕籠に乗る云々—諺にて名句なり

出にける。小女郎は跡先知らず、惣七に引添ふて、二人の目元に氣を配る。九「コレ若い人惣七殿、此中の事一言いふても物が無いぞ。仰るな。此方共の商賣云はず共見られた通。何事も身が大事と思ふから、此中の事こらえさしやれ。否といわしりや事に成。ヤこらへさしやれ。小女郎を此方へ請出すと、此方の詞が反故になり、小女郎も可愛や、此方〳〵と心中を立通し、女郎の口から金貸せと迄恥を捨ての心ざし、無にして遣らしやるはソリヤいかひ邪見。惡い事はいふまい、此方の仲間へ這入らしやれ。小女郎も此方に添わせ、五十貫匁や百貫目の金は取換て、親御の息がかゝらず共、物の見事に取立ませよ。仲間が多ふ成程此方は損なれど、運を力にする商賣、運弱ふては埒明ぬ。此中の樣な場を遁れた命冥加な運强い此方。九右衛門が力に成人と見て、コレ手を下る。仲間へ入て下され」と、詞は下てもゐやい腰、否といはゞ切かけんづ、氣色面に見へ透いたり。惣七も手詰の返事、仲間へ入れば、家の大事命の仇。否といへば、小女郎を人手に渡すのみならず、命迄とらるゝ。何れの道にも死ぬる命。國法をや愼むべき、小女郎にや添ふべき、と二ツの心身一つに、定めかねてぞ居たりける。小「申是惣七樣〳〵、彼方の商賣は知らぬが、駕籠に乗る人、駕籠舁人、品は替れど行道は同じ事。金も取替へ、何から何

門から云々—門から入來る遊女をよりどりする
お敵云々—サア相手が來たと陽氣になる
おんと—穩當、おだやか
出るも云々—惣七の態

れ」の詞にいそ〳〵立歸る。幇間「太夫樣ゝお出」と呼はる聲。門から色の摑取、勝山、江口、大磯に、寄せ來る波の大騷ぎ。座敷に一杯入込んで、太夫「薄雲さん見さほ樣ゝ、小倉さん、三人はお跡から」手下「そりやこそお敵」と色めいて、毛剃が連共現を拔し、顏に餘念はなかりけり。九右衛門聲懸け、「コレ〳〵亭主、爰にはちつと用が有。妓樣方口の座敷へ。跡から見ゆる太夫方も爰へは無用」亭「おつとこなたへ來給へ」と、亭主に連て立廻る、女郎も田舍はおんと成。出るも如何出ぬも如何、小女郎に引れて惣七は、障子押明立出る、顏と顏互に見合せ、惣「ヤア小女郎が名染の男、今思ひ出した其方が事な。ヲヽおのれ等に逢たかつた。ヤア人は無いか、此奴等は下の關の」跡云せじと毛剃が連共、大聲上、「頰桁聞すな打殺せ」と、蹴立る盃燗鍋の、轉て疊にたぶ〳〵〳〵。「濡れから起つた喧嘩そふな。大事にはなるまいか」と、上する女子下男、うろつく顏も青褪て、生た心地はなかりけり。毛剃一寸動きもせず、「アヽ騷ぐまい〳〵、此九右衛門が思案が有。彌平次殘らず女郎衆の傍へ行け。跡はおれが受取た」手下「いや左樣でない。我々が相手に成。親仁一人心元ない」九「ヤア此毛剃負取る男と思ふか。汝等が居ればやかましい。とつと〳〵行け」と睨め付れば、手下「そんなら行ます。親仁次第」と打連て、表の座敷へ

近付云々ー懇意は內證にて今いへば人が聞く

もめー爭ひ

心便に成ましよ、と力を付てくれた人。金借て來やせう」と、進み出るを引留め、惣「近付は內證、人も聞。女郎の口から金貸てと、身の恥は思はずか」小「恥を包むも事に依る。たつた今いふた事。來月は筑後の客が私を請出すと、出口の佐渡屋と薄約束。お前の下りを月よ星よと待受たりや此樣な首尾。人手へ渡れば私や生ては居ぬぞや。金借た迚返せば恥にもならぬ事。私次第」と振切れば、遣るも涙行涙、隱して座敷へ繰歩み、毛剃が側へ坐はれば、パツと衣の香の、四邊の人はうろ／＼と、顏を見合す荒男、俄に嗜む衣紋付、鬼が花見る風情なり。小「毛剃樣ゝ久しいな。私や此方樣ゝへ無心に來た。此方に大きなもめが出來て、急に身請をして貰はねば成らぬ首尾に成たれど、肝腎の物が無い。かね／＼の詞も有。此方の才覺調ふ迄、私が身請の成程、金貸して下んせ。賴やする」といひければ、九「日本一の粹樣。金貸て下んせとはいひ憎い事。二言と聞ぬ。お前の用なら千兩でも萬兩でも。コリヤ亭主、小女郎樣も一所に身請、行きたい處へ遣りまする。金は毛剃が飲込んだ。女郎方の見ゆる內、小女郎樣借ました。飲や歌へ」と騷立。小「アヽ待んせ／＼。あの障子の彼方に、今云ふた大事の男が來て居さんす。連て來て禮いはせます程に、毛剃樣ゝ詞違へて下さんなゑ」九「男冥利商冥利虛言御座らぬ。お供なさ

節季—食事と二つの意を持たせたり
七ッ起—午前四時に起く
しべ—藁すべ
させ云々—さしたら必ず乾かせとなり
取奧田—取置にかけて止めて仕舞はねばならぬ
見てや—見たやか

土を摑んで起るは七ッ起。質を取らずは金貸すな。欲し物は買ぬが德。月夜に夜鍋はせぬが損。稼に追付貧はなし。芥子を千にも割木の焚樣、必灰を取る事勿れ。棄る物は何ゝにも無い。鍋の煤烟では細眉作り、しべのきれは痿痺の妙藥、水なき井戸は梯子の入物、鼠の尾迄錐の鞘。させ干せ傘。人に貸すな鰹魚節。擂粉木、擂鉢、砥石、石臼、藥研迄、目にこそ見へね貸す度に、減ずに戻る例しはなし。扨其外は愛嬌交際、始末貯蓄、讀書算盤秤目の、上を見れば法圖がない。我より下を手本として、右の條々守るに於ては、微塵積て山と成、長者の金言疑なし。無間の鐘とは名計にて、現世も未來も背かねば、自然と榮る福德緣起、聽聞あれ」と語けり。

四「否共應共申されぬ。世界中が此通に身持たら、私等が商賣は、取奧田屋」とぞ笑ひける。座敷の隔ては障子一重、彼方の騷ぎひし〳〵と小女郎が身に應へ、小「アヽ有處には有物かな。五人六人の太夫達請出そふ、何遣ろ彼遣ろ是遣ろと、金銀財寶は塵埃。父樣や母樣の貧な暮しを見た時も、能はぬ金が欲いとは、夢程も思はずして、今日といふ今日、彼方の身請が浦山しく、私や金が欲う成ました。仕合の能い人を、妬みは道でなけれ共、何な男ぞ顏見てや」と、障子の透より指覗き、「ヤアありや私が近付。まさかの時は

者經と擬へ、聲張上て讀にけり。

長者經

「そも此無間の鐘の濫觴を尋れば、天竺の大金持月蓋と名に高き、さつても吝嗇い長者有。佛是に示さん爲、朝な／＼の頭陀の行、はつち／＼も空耳潰し、うん共すん共いわれぬ佛の方便にて、光はさながら一歩小判の山吹色。金と見るより吝嗇長者、佛の箔を剝さんと、欲から入ル手の内を、釋迦の手管に仕懸られ、惜や悲しや南無阿彌陀佛、此撞鐘を建立す。されば穢い長者が心、末世の今に留て、先初夜の鐘を撞く時は、諸行無常に惜や／＼と響くなり。後夜の鐘を撞く時は、是生滅法な事と響くなり。晨朝の響きは、生滅滅多に入用知れず、寂滅入らざる鐘の聲、一文吝みの百八煩惱、此鐘の音を聞人は、現世にては分限の金持、未來にては無間の釜入。斯る不思議の撞鐘を、疎に撞べからず。扨行法の次第といつぱ、絹も紬も著る事ならず、木綿蒲團も榮耀の至。荒菰引て起臥の、身は慣はしよ奈良茶粥、精進潔齋菜入らず、晝夜にたつた二度の節季は尻褰げ、往來の中をちよこ／＼走、ちよこ／＼／＼脱て、落て有物只置な。轆ても

空耳潰し―聞かぬ顏して相手にせぬ
光は云々―方便にて身を黄金にしたり
無常―矢鱈にて無性にかく
晨朝―曉、滅多は滅已にかく、入費の多き事
入らざる―寫樂にかく
奈良茶粥―儉約の意

早ふ往て―四郎左が使にいふ詞

無間鐘―此鐘を撞けば死して無間地獄に墮つれども現世にては富豪となる、(秋齋閑語)

る人々の物言伽。明日迄待ぬ今日の中に首尾させい」九「是はきつい」と四郎左衛門、飛で出るを九「ヤレ待て〳〵。亭主が留守では興が無い。云付て呼に遣れ」四「畏た」と、硯引寄せ書付て、呼にやる足走書。四「早ふ往て來い。お吸物、大座敷も一つに爲い。子共泣すな。女房どもに藥服せ」九「ヤ何じや。花車が煩ふか。それ挾箱持て來い。油斷召されな。人參用ひて養生が第一。持合せた、はづもふ」と蓋押開き一包、一つ選の大人參、一斤余り投出し、「四郎左、子共は幾人有」四「娘が一人、男が二人御座ります」九「ヲヽよい子持。小さけれ共此珊瑚樹、對で秤目が八匁、二人の子に提さしやれ。お娘が著る物に有合せた緞子三本、繻子五本。此緋縮緬裏に能らふ」綿の代迄相添て、投出すほり出す、頂くに、亭主が腕ぞ草臥ける。四郎左衛門悔として、「お禮より先膽が潰るゝ。何時の間に此樣な大分限者にお成なされた」と、問詰られて間似合詞、九「きつい〳〵。江戸商間緩く、小夜の中山無間の鐘、撞當た福々長者。去ながら、此鐘撞には行法がむづかしい。長者經迚寺に傳はる、緣起の目錄聞せ度い」と打笑へば、亭主横手をはたと打、「有難いお經。我等も少とあやかる樣に、其お經授け下され」と、せがみ立られ、「然らば聽聞仕れ」と、何やら知れぬ懷帳、殊勝らしげに取出し、吝い事の嘘八百、長

さるぜ云々—何れも船來の反物
ちくら—唐と日本の汐境は紬羅沖なれば爰はどちらへもつかぬ事
一夜檢校—俄大盡
端ぜせり—小店遊び

日迄の露の命を繋ぎしぞや。此度の下には受出し、女房に持んとの深き契約。其金銀も人手に渡し、詞を違へ望みを叶へぬ我本意なさより、和女が恨みん心の不便さに、云譯やら顏見にやら、見苦しき身も恥ず、爰へ來て面目もなき物語」と、泪に聲を曇らせり。
小「能ふ打明て下んした。寶は涌物、お命さへあるなれば、私や嬉しう御座んする。私が心でお前一人は如何なと成。おいとしや肌寒かろ。お顏がたんと細つた」と、著ながら上著ふはと著せ、抱締てこそ泣居たる。表に血氣の下男、「大臣樣の御來臨」と鳴り喚く。
小「ヤレ人が來る此方へ」と、男の手を取身を寄て、奥の一間に入にける。客は過つる海賊共、眞先立て毛剃九右衞門、彌平次、傳右、仁左、平左、市五、三藏、「サア御座れ」と、引摺る雪駄の金にあかした衣裝付。各さるぜ羅紗すためん、かるさい、らんけん、繻子天鵞絨、下著上著も渡り物。頭は日本、胴は唐との襟界ひ、ちくら手くらの一夜檢校。終に目馴ぬ出立ばへ、奥田屋に動ぎ込、座敷に居流れ、毛剃が諸色受込で、差配らしげに勿躰顏。九「亭主薄々見知が有ふ。廓の縱横十文字、昨日迄端ぜせりした我々。俄分限は見らるゝ通。今日からは太夫狂。來る途すがら見て置た一文字屋の江口、丸屋の勝山、同じ家の薄雲、油屋見さほ和泉屋おぐら、車屋の大磯、此六人を請出して、是に居らる

京の惣七樣ン。なふ太夫樣、惣七樣ンの乞食に成てごんした」と、呼はればかい振て、迯るを 重「往なさぬ待んせ」と、帶に縋つて留むる間に、家內も驚き駈出る。小女郎は表に走出、笠掻投て、「ほんに左樣じや。嬉しや能ふ來て下んした。此有樣は如何ぞいの」と、何の樣子も聞ぬ先から泣淚。小「コレ四郎左樣ン、奧へ連れまして咄庋ふ御座んす」

四郎「如何にも〳〵。お名染の惣七樣、御用あらば御意なされ」と、亭主が情に打連て、入より早く縋付。小「戀し床しはいわひでも知れた二人が中。此お姿は親御樣の御勘氣でも受ての事か。樣子が無ふては叶はぬ筈。お前の心に此小女郎は、まだ傾城じやと思ふてか。此身は廓に居る迚も、心は疾から女夫ぞや。肩裙結び手を引て、人の戶口に縋る共、交した詞違やせぬ。今日は母樣の十三年の命日。お前に逢たは親達が、彼の世から手を取ての引合せ。女房まめに暮したかと、一口云ふことならぬか」と、眞實見ゆる淚の玉。男もハラ〳〵聲顫ひ、惣「小女郎息才にあつたの。一年振に顏を見て、よい姿も見せ、よい事も聞する事か、聞てたも。每年の如く諸色を仕込ンで下る處、下の關にて海賊舟に乘合せ、家賴は眼前海へ沈めさせ、我命さへほう〳〵の仕合にて此處迄迯延び、商賣の荷物衣類は其儘舟に棄置、肌に一錢貯へなければ、二度に二つの下著を賣て、今

御意なされ―仰せられよ

一角―一歩取てやらう
宰府―財布にかく
小町屋―來うにかく
心奥田―心置くにかけて遠慮する
つかうど―けんどん

小女郎様は奥の間に、經念佛して御座るでないか。附て居る太夫様の親御の事、線香でも立ふと思ふ氣はなふて、盲目相手に何事じや」重「否〳〵私共二人錢太皷稽古して居たりや、欲市の三味線で邪魔しやりんす」四郎「其錢太皷が猶惡い。物の稽古も時が有。奥へ往て附て居よ。二人ながらとつとと往け」「サア欲市、表の二階に宰府の源様が來て御座る。見廻ふたか」欲「やつちや一角せしめん」と、人の巾著當にして、嚊はぬ先の締括り、宰府の客へと取に行。百年經ねど衰へは、今身の上に小町屋惣七、下の關の大難に、命一つを拾ひ得て、博多へこがれ著しかど、身に付物は手足より、外には何の當もなく、知邊の方へも身を恥て、訪音信は絕へしかど、小女郎が情忘られず。戀しき風の吹立る、柳町には來たれ共、金銀なければ肩すぼり、おのれと心奥田屋の、門を覗いつ退て見つ、案じ佇み居る風情。内には乞食と尖り聲。「余り物は遣てしまふた。通りや〳〵」とつかうどなり。惣「扨ははや物籮ひと人目には見ゆるよな。成果たり仕なしたり。此風俗で小女郎に逢度いといふたり共聞入じ。聞入てから小女郎が恥。思ひ切た。顏見まひ」と、立歸る後より、「ヲヽ待や〳〵」と重之丞、「コレ今日は太夫様ヽの心ざしの日に當り、施の一錢」と指出しながら、「ハテ此乞食はお絹布を著て居る」と、顏指覗いて、「ヤアお前は

だんぼらぼーどんぶり

運は傳馬ー運に呟、傳に天をかく

いひき云々ー之より話は博多の廓の中に移りたり、此唄は松の落葉の唐人踊に出てたり

長崎の伊左衛門ー慾市を長崎の色男と嘲る

身上りー勤銀出して休む

攫付ば取て投げ、投られながら足首を捉と取、眞逆樣にずでんどう。どう〱と響く波音に捲りかけ、大勢かゝつてだんぼらぼ。邊りも知れぬ海の中、眞逆樣に打込で、「サア仕濟した、目出度い」と笑ふ聲。惣七はつと心付、見れば傳馬の中々に、物音せば惡からん、と纜解て櫓を押立、惡魚毒蛇の口よりも、遁れ難き場を遁れ、一反計漕出々々、「ヲ皆々骨折り〱。惣七是からお禮申。此返報は重て」と、心急げばゑいさつさ。ゑいや運は傳馬に有。押や櫓腕の續く丈、命限りと。三重「いひきにて〱、すいちやゑんちや、すはひすふいてう、ひいたらこはいみさいはんや、さんそ、うわうわう〱」禿「アヽ置や〱。なふ欲市殿、其拍子では踊られぬ。錢太皷の三味線、知らずば知らぬと頭からいふたが能い。長崎の伊左衛門樣ゝとは違ふた物。もう踊らぬぞや」欲「それで藝が上る物か。三味線引止む迄サア〱踊りや」といひければ、禿「なんぼでも踊らぬ。三味線止て、此方も石碓か跛引かしやれ」欲「なんじや跛引け、盲目と思ひ侮るな。目二ツ持たおのれ等に、いで物見せん」と三味線振上、聲をあてどに追廻す。亭主奥田屋四郎左衛門、臺所から立出、「こりや何じや。欲市たしなめ大人氣ない。禿共もあがいたら遣手に告て叱らすぞ。ヤイ重之丞、今日は小女郎樣の母御の十三年忌、追善の爲身上りして、

相仕―仲間
かきだつ―檜垣船の格子窓
ほたり込―はうりこむ
下人―惣七の下男
窺へ―窺ひか
褰―袜にかく

八十粒、手形の表是迄渡しました。此一通は來夏舟の割符。迎舟にお出なされとの言傳」と、渡せば取て押戴き、九「手柄高名、休み召され。二人の衆にも酒おませ」手下「お目出度い。お頭様、御褒美をしつかりと、御酒も祝ふて下されう」と、皆本船に乘移る。九右衛門相仕等招き寄せ、小聲に成て、「何れも見ずや。荷物を舟へ積折柄、乘合の京の奴、かきだつより顏指出し、合點往かぬと思ふ頬付、生て置たら頬げた叩き、後日の難義見る様な。切殺しては大事の門出、血を見るが忌々しい。縊殺して海へほたり込。下人奴も有そふな。油斷するな」「まつかせ込んだ。皆の衆脱るな」「心得た」と、鉢巻襷尻褰げ、腕骨試し力試し、合の舳際を小楯にて、時分を窺へ、「サア來い」と、櫓下るゝも忍び足。所は沖津汐風の、外は一味の舟の中、聞人もなし見る人もなし。人は知らじと思ふこそ、結句身の上知らずなり。下人が叫くまッかせ聲。櫓の上へ躍上るを、追續いて彌平次、傳右衛門、二人が中に取捲て、中に指上、「是わいな」と、投り込波の、あはれや下人底の水屑と成にける。「サア一人は仕て遣た。惣七奴が見へぬ。探せ〳〵。コリア〳〵爰に、傳馬込に」といふ聲に、惣七水棹追取て狂ひ出、「ヤア海賊奴等、樣子一々見届けた。死ぬる共一人死なふか」と、そつぼう滅法打立る。後へ廻つて市五郎、すきを窺ひ、

まつかせ—よしきた
緞子—鈍に移し—損しにいひかく
けもない—些ともない事云はしやるなに紗をかく
むりやう—唐織

、仰るな、聞迄ない。我等も博多へ參る者、此一座五人が小女郎殿の身請の幇間、大臣くはつとおはずみ」と、毛剃が起て膝立れば、手下甲「よふ〳〵身請の大臣樣」手下乙「こりや誰が大臣ぞ」手下丙「小女郎樣の大臣」と、一座がはらりと取廻し、座興も過ればむつとして、惣「嬲るか、但侮るか」と、心くる〳〵喘たぐる、胸を押へて、惣「ゑへん〳〵、今朝から風引頭痛致す。跡の咄は後刻〳〵。何方も是に」と挨拶し、思ひ惱みつ立煩ひ、漸下へ這下るゝ。九「身請する程内證が暖かで、風引たとは何處やら足らぬ和郎そふな」と、惡口苦口小倉口より、波押切て來る早舟、此舟目當の一文字、眞黒に成て漕付たり。九右衛門始め立騷ぎ、「ヤア三藏、市五郎、首尾は〳〵」二人「近年の拍子能く、荷物受取金渡し、彼方も機嫌此方も仕合。荷數手形に引合渡しませふ」と聞嬉しさ。九「船頭起よ、水夫も來い。荷物請取れ」手下「まつかせ」と、心も勇む虎の皮百五枚、仕合すれば氣の藥、海老出の人參五箱で卅斤、仕損ずるは手廻しの緞子七櫃二百本、船から舟へ寫の麝香四十臍。九「なんと遠見に見付られはせなんだか」「けも無い事いはしや島紹が十五箱、去ながら、むりやうの繻子が十二丸、世話入た漆七桶、運の強いは一昨日の夜の月影、照の能い鼈甲百斤、先斯仕濟し歸りました。天地の惠み明星程な珊瑚樹が

なかばん—ないのである
いろ—やら
いつかけ—引かけて呑むこと
赤鰯—錆刀
くさ—此方
かろわれ—擔かれ
なかたん—なかつたに
びたひらなか—鐚半文

薩摩者と喧嘩した咄、嘘じやなかばん聞つしやれ。九月の七日九日は氏神殿の祭、本踊いろ、唐子踊いろ、見事なことばん。本興善町といふ所で、石五器に一二杯、肝の束へ諸白をいつかけた薩摩二才、肥滿男で有たばん。諏方へ踊見がい行く行違ひに、中か赤鰯の鐺がくさの、おん共が脇腹さなへ當るが最期、引つまんで壁ゑ腕揩ふと思ふて、小尻を逆手にやつくるり。それは〳〵見事な事で有たがのふ。他國者に投られては國へ歸つても成敗。死ぬる命は何處でも一つ、と二尺八寸引拔た。コリヤンほたゆるな、と又引擔いて投たがの。角の有滿石で、くさ頭の顱骨が粉微塵に打破れた。ヲ舟では破れたといふは忌々しい。頭の顱骨が走つた〳〵。血が走いろ、涙が出るいろ。頭抱へてやといどにかろわれ、小宿さなへ往んだがの。今で思へば無造らしげに、其樣にせでも大事なかたん。上方衆は氣が良かけん、此樣な事は有まい」と、仕形まじりの高咄、皆安閑と聞居たる。「サア京のお客お咄なされ、次第々々に所望せん。上方は色處、定て深い譯があろ。お咄あれ」と口々に、乘すれば乘て、惣「されば〳〵、親惣左衞門吟味つよく、京大坂ではびたひらなか、我物で我儘ならず。毎年の筑前通ひ、幸に柳町の小女郎とは、抑より互に逆り、是非當年は請出して、女房に持るゝ合點、持約束」と半分聞て、九「ア

ばすぐ目が覺める海賊の御身だ云々—身は少しも寢ない
さな—あたり
しやう／＼てい—しやう／＼はしやらくの誤か、しやらくは遊女の異名
上唐人—惣七
仕果せ云々—一儲せにや往かぬ船
門出よか—門出よし、次のよかはよき便
わたい—吳れ
編片—貝多羅の葉にて編みたる筵
押付—無理に賴んで
そつと致ゐた—つまらぬ
平ぐわい—胡座
おん共—我等

けりやならぬといふ。仕おふせにや筑前へは行かぬ船、門出よか／＼。よか便聞ふばい。表の乘衆呼ふでわたい、咄どもして紛らさん」「あッ」と答へて平左衞門、呼に下るれば其跡は、鬼共組べき男共、編片取て敷かすやら、茶出しに唐茶摘み込。注出す色は薄けれど、頭を頭と敬ひし、禮義ぞ仲間の花香成。表の乘衆小町屋惣七、生得慇懃都育ち。呼れて櫓に割膝し、「船頭名染に押付ての便船、御訪ねなく共御挨拶申筈。無禮御免」と手を突けば、九「ア丶堅い／＼。同船致し、一ッ釜の食事食るは一門同然。サアお手上げられ。此五人は我等が仲間、他事無ふ咄明す中、近付に成てお咄なされ。斯ふ申某は長崎者。九右衞門と申てそつと致ゐた唐商賣。是は同國彌平次と申仁、次は上方小倉屋傳右、難波屋仁左。其元呼に參つたは、阿波の德島平左衞門と申て髮月代致さるゝ。船中の事缺き、心置ずとお賴なされ。して其元は何處何方」惣「我等も生國長崎。世悴の時分親に連れて生れ所を引越し京住ゐ。父が名は小町屋惣左衞門、同名惣七と申者。賣買の爲、筑前へは毎年の折上り。何方も船中平ぐはい御免。よいお近付もとめし」と、禮義仕廻へば膝崩れ、詞直せば寢匍匐ひ。早千年の名染程、心解たる朝霜の、奥底もなく成にける。九右衞門顏色打解て、「船中の淋しさ、物語程伽に成物はない。おん共が廿七の年、

博多小女郎波枕

作者　近松門左衛門

上之巻

歌「船を出しやらば夜深に出しやれ。帆影見るさへ氣に懸る」長門の秋の夕暮は、歌に詠むてふ門司が關、下の關共名に高き、西國一の大湊、北に朝鮮釜山海、西に長崎薩摩潟、唐阿蘭陀の代物を、朝な夕なに引受て、千艘出れば入舟も、日に千貫目萬貫目、小判走れば銀が飛ぶ、金色世界も斯やらん。沖に何まつ檜垣作、十四五端の廻船に、船頭水夫は褞袍著て、足踏延す梶枕。四五人の乘衆共、櫓の上につゝくつく。そよと波音舟影に、心を付る蚤取眼、物案じ顔も頬すいたる、中に頭の毛剃九右衛門、生れは長崎國訛、コリヤうん達、まだ市五郎、三藏が舟は見へいろ。心元なかばい、心たまぎりや夜ざとく成て、身だまんじり共せない。首尾能らふば筑前さなへ此舟廻し、柳町のしやう／＼てい共請出いて、上方さなへつゝ走る。表の間借切た上唐人、船頭が名染、筑前迄乘せな

船を出しやらば—此歌松の落葉巻六近江八景の唄に出でたり
門司—文字にかく豊前にて下關と相對す
檜垣作—十四五反の帆を張つた檜垣船の廻船が沖にて何か待てゐる
うん達—汝等
見えいろ—見えざるべし
なかばい—なき故
心たまぎりや云云—驚く事あれ

酒天童子—酒呑童子

せぶつてーいぢめて

縛付て引据ゆる。渡部の綱進み出、「やい長承れ。己が奉公人の抱へ様、人買同然の仕方。其上折檻嚴しく栲問をまなび、殊には歴々の町人さへ愼む程成奢、身の程知らず世を憚らぬ我儘。其外數箇條の罪科は、疾く召捕らるべき處、酒天童子退治に、弓箭の御用繁多の間宥免せられしなり。童子やすく退治有、御歸洛の道より直に、我々仰を蒙つたり」と云渡す。公時踊出、「女郎せぶつて摑取た一歩小判の金が罰、覺へたか」と、こんと喰はす頭の鉢、四邊も響く計なり。長頭を下げ、「一々誤奉る。世上の人も聞給へ。驕る者久しからず。我人に辛ければ人又我に辛し、と口にはいへど心に知らず。斯う災難の來る時、始て悔むも甲斐もなし。重罪は我一人、彼の世悴助け下され」と、涙に沈むぞ心地よき。綱「兎角は都の御沙汰ぞ」と、警固嚴しく引立る。酒天童子茨木童子、退治有も世の誡め。政道輝く賴光は、朝參院參御振廻、京近國の悅びたる、賑ひたるに酒樽に、だいくの御代こそ目出たけれ。

堅凍―玄冬にて冬の異名
九夏―夏九十日
三伏―夏至の後第三の庚を初伏第四の庚を中伏立秋後の初庚を末伏と云

うど臥て泣ければ、母「ヲヽ太刀に僞なければとて、親子とは何事ぞ、五つより其年迄人と成しは誰が養育。堅凍素雪の寒き夜、九夏三伏の暑き日に、老たる親を養ふより、子には心の碎るゝ。其憂苦勞を人にかけ、まんまと育て上させ、誠の親よ實子よと親み寄、養ひ親の心に滿足せうか。何ンと嬉しかるべきか。飛しされ子ではない。なふ加藤殿、とても此事に此母も、其子が乳母となしてたべ。是兩人、加藤殿へ忠孝勵み、我を親と思ふなゑ。一遍の念佛も親と思はゞ受まじきぞ。他人と思ひ回向せよ。一日の精進も養親への無禮なり。涙一ッ滴翻しなば、七生迄の恨みなり。お暇申加藤殿。横笛殿さらばや」と、刀を拔けば紅の、紅葉における秋の霜、消てはかなく成にけり。女房娘右馬之允、遺言重んじ泣ぬ顏。加藤兵衛所の者、「前代未聞の義士貞女、死骸共は跡より。母横笛は先へ歸れ」といひければ、長大聲上、「何處へ〳〵。横笛が代りにて、名も横笛と呼からは、其儘此方の抱への內。手形の通勤さす。暇が欲くば五十貫に廿割增し千貫積め。男共横笛を留め、親兄弟棒ずくめにして、追出せ敲き出せ」といふ處に、俄に表騷がしく、見世も格子も打破る計、坂田の公時眞先に、定光末武綱保昌、山伏出立に込入て、「上意〳〵」と金剛杖、ぶち伏せ〳〵、「誰か有。親子共にあれ括れ」「承る」と加藤兵衛、吉助、踏付〳〵

人の上云々ー人の身の上を推量する目はなしと也

り默止されず。此子を某申受、名を横笛と呼からは、我子が二度蘇生つたる同然。我子に指もさゝせぬ」と、猶抱しめて放さねば、夫婦あつと悦び涙。廣文何とか思ひけん、胸押寛げ拔たる刀、腹にぐつと突立、脊骨をかけて引廻す。人々「これは狂氣か」と、驚き騷げば、廣「ア、騷ぐまい〳〵」と押鎭め、「ナフ加藤殿、我等も昔は弓矢打物取て、誰に劣らぬ身成しが、主君の諫言耳に逆ひ、勘氣を受て此態。若かりし時忍び妻の腹に男子一人設けしを、商人の養子となし、其後此娘一人は持たれ共、年寄に隨ひ、世に力なく便なく、兄めを他人にくれずば弓馬の家を起し、老の樂み、浪人の憂目は見まじい物。惜や口惜や子程の寶は無き物と、我身の上は見ゆれ共、人の上には瞽同然。洛中變化蔓つて、夜な〳〵人を失ふ由。これ幸の紛しものと、思ひ初たる一念が、地獄の道の門出なり。なふ加藤殿、其子が素性も穢からず。平家の大將常陸介安盛が執權、八郎權の頭秀國とは我事よ」と、いふ聲に吉助、覺えず廊下を飛で出、吉「なふ父上か。我こそ商人の養子となりし、本名は右馬之允」と縋付ヶば、廣「寄まい〳〵子ではない。右馬之允といふ子は持ぬ」と、睨付られて聲を上、「子でないとは情なや。御無沙汰の不孝は御免あれ。何僞りを申べき。紅葉狩の此太刀を證據にて、親よと子よと只一言、お詞を賴奉る」と、ど

しさに、あらぬ歎をかけます」と、父を見上げ見下して、泣聲も早息切して、最期近くぞ見えにける。廣文が娘傍に寄て涙を押へ、「おいとしや。皆我父の所業故。此春よりの憂さ辛さ、御身の上を思ひ遣り、自が代りに殘り、御身樣を戻さんと、是迄は參りしに敢ない死を遊ばす。なふ父上、たとへ此身が代らぬ迚、彼の御方の最期を見て、すご／＼とは返られまじ。家を出るより覺悟ぞや。我をかばひ給ふな」と、さも潔き詞の末。父「チヽ出來いた／＼」と、取て引寄せ刺通さんとする處を、母「暫く」と押留め、「人の子殺して、我子を助けふではなけれ共、世には療治も有事。此子殺して若シ彼の子の疵本復有ならば、此方の娘は誰が產んで返そふぞ。なふ横笛樣、助かるも死ぬるも獨と思へど二人の命。氣を慥に持てたべ。看病してたべ人々」と悶へ焦れ泣けれ共、女郎遣手も哀さに、「何處ぞでは此家に、大きな事が出來う／＼と思ふた」と、袖を絞らぬ者はなし。今を最期の横笛、「なふ父上、必彼の子を助けて給べ。是のみ黃泉の障りぞや。私や來世で母樣に、久しうて逢ふが嬉しい。南無阿彌陀」の一聲も、睡れる如く息絕へたり。加藤は死骸に抱付、前後不覺に取亂す。廣文娘を引寄せ、旣に斯うよと見へける處、加藤周章て抱取、「いかな／＼思ひも寄らず。不便の娘が只今の遺言、父母の遺言よ

詰開―談判

思をかける―心配かける

等が賣し横笛取戻して、本親へ急度渡すべしとの上意に候へ共、其時の五十貫、今更一錢なければ、取戻さん力なきゆへ、此琴柱と申我等が娘を代りに取、此横笛を親父加藤兵衞殿へ渡して給べ。其爲所の庄屋組中、同道いたす」と陳ければ、長不興顔にて、「ム、此方が横笛が父御か。此方商賣の作法で、元銀に十倍增ても、取戻すの、代りのといふ事いたさね共、其處は身が了簡してやらふが、其方の娘は只た今自害して十死一生。それとても代たくば、此方は代德。相手同士の詰開き〲」加藤「はつ」と計に氣も狂亂。「いやさ命有ての詰開き。死なぬ内先逢されよ」と急きければ、遣手共口々に、「其身も父御の御出と聞逢たひ望み。只今是へ」と、手負を閨の床ながら、そろ〲昇て出る躰。父は目もくれ走寄、「ヤレ横笛父成は」と、朱の血潮に抱きつき、手足を廣げ身を撫て、疵もとつくと見屆け、加「自害の疵より棒の痕、死したる母が美しう、產付たる肌ゑを空虚もなく打れしは、自害せず共死ぬべきに、是を無念の自害かや。いつそ擲き殺されば、敵を取て腹いん物。可愛や早まつて思ひをかけてくれるか」と、人目も恥ず聲を上、伏沈みてぞ泣居たる。横笛父の手を取て、「ナフ打擲かるゝは常の事。今死ぬる病人さへ慘い辛い親方なれば、我一人無念なと思ふではなけれ共、流れを立てゝ母樣の、遺言反く悲

頬がまち云々―吉助の頬桁やら緣框やら腕骨やら障子の骨やら滅多打にする

死手―死出

御意得る―申上し通り

と跨り、握拳に息吹かけ、七ッ八ッ十二三、頭も砕けと撲廻す。一子太四郎飛で出「そりや親父様投た。打殺せ大事ない」男「まつかせ」と立かゝり、家内が寄て棒ずくめ、やう〳〵長を引除くる。吉助は只一人、取付ば捥放し、頬がまちゑんがまち、腕骨うで木障子の腰骨、片膝足の蹈どなく、誰が打つやらくらはすやら、棒に別ちは無かりけり。足は立ず目はくるめく、衣類も裂れ髪亂れ、心計の亂れねば、吉「おのれいッかに傾城屋の法なればとて、すり強盗を打如く、能つく恥を與へしな。我親の世なりせば、一々獄門にかくる奴なれど、町人の淺ましさ、女郎屋へ忍び込んだる過りなれば、エヽ此儘叩殺さるゝ。ヤレ白妙、死手三途を連立たん」と、廊下傳ひの欄干を、力に取付たぢ〳〵〳〵。這上つてはよろ〳〵〳〵、よろぼひ〳〵歩み付、數寄屋に入て、「ヤア白妙ははや息絶しか。先立しか」といふ聲に、家内はつと驚く折から、遣手の龜が慌だしく、「ナフ新艘の横笛樣が剃刀で自害して、まだ死切らねど深疵。斯う申内もあぶなし」と、色を違へて云ひければ、さしも野太きひらぎの長、悄としてこそ見えにけり。

第五

斯る處に北白河の廣文、親子夫婦在所の者、加藤兵衛伜ひつか〳〵と入て、廣「なふ〳〵長殿、先程より公用に就て御意得る如く、度々申入るれ共取合れず。當春我

雪の云々—雪といふより消えく〳〵と續けたり

ぬ女子の肌を口惜い。此樣な姿は地獄の繪に見た計。鬼め童子め茨木童子め、白妙さんと此横笛が妄念が、其方の身に報はふ」と、涙まじりの雜言は、人の泣より哀なり。長「エヽ憎くい奴め。それ男共、臺所の大根一本持て來い」と、五ッ六ッ續け打。打れて雪の裸身も消へ〳〵とこそ成にけれ。男「申旦那樣、此大根何になされます」長「何になさるゝとはそれ捻込め」男「此大きな物、何處もとへ捻込ましよ」𠮷「頰桁叩く口へ捻込め」男「畏た」と、口押割んとする處へ、數寄屋の障子蹴破つて、吉助堪らず飛んで出、大根取て下僕が頰はたと打、横笛が縛め捻ちぎれば、半死半生。𠮷「これ傍輩達、勝手へ連て看病あれ」と、取て押退け、長が前にどうど座し、𠮷「こりや長、白妙と二世の契約せし西國の吉助といふ男。白妙が病氣見廻ふが科ならば、横笛よりも先此男、打殺して腹を愈よ。サア打て打ぬか。長恐しいか、何所打ぬ」とせめかくれば、長「ヲヽおのれとても商ひ物に忍び逢ふからは盗人よ。此長が打兼ふか。サア腰の刃物を渡せ」𠮷「ムヽ此刃物が怖さに得討ぬか。ヤイ此刀は少由緒有て、うぬら如き根性の穢れた、犬同然の奴に拔く刀じやない。氣遣ひせず共寄て打て。但怖いか」長「何んの怖い」と打てかゝる棒の先、しかと取て拂ひのけ、突と入て擔ぎ上げ、大の法師を筋斗返り、ぎやつとのめらせ、馬乘にどう

脾の臓云々―脾の臓強き者は必ず聲大なり
びり―小めらう
旦那殿―敬語に殿は様より輕ければいふ

し」と會釋もせず、障子を明れば横笛が、身を慄はして居る處を、「旦那の御意じや」とあらけなく、人のもてなす花盛り、落花微塵に引出ず。脾の臓強き大音にて、長「こりやびり奴、此長が日來の手並知りながら、今から野太い根性さけ、後にはおのれ何に成。病人めに何用有て誰に頼まれた。サア吐さぬか」と振上て、二三十滅多打。起直ればたと打、居直れば丁と打。髪も頭も分ちなく、簪笄打折れて、鼈甲飛んで亂れ髪。骨も散るかと哀なり。横笛聲も涙にくれ、「白妙様へ見廻ふたは誰にも頼まれませぬ。あんまり見る目もいとしさゆへ、今死ぬるお人にちよつと見廻に往たとて、科緩怠になるならば、殺し成と如何成と。餘りな旦那殿」と、云せも敢ず、長「うぬが口から殿呼り。それ眞裸にして庭の松へ括し上げい」男「はつ」と云ふより情なく、帯引ほどけば一家の女郎、「それ程の科もない人を、こりやあんまりな旦那さん。新艘は打さぬ」と、駈寄る處を棒横たへ、長「一ッ穴の狐共」と、十ッ方滅方打廻せば、打れて左右なく寄付かず。横笛骨も砕くる計、弱る心を取直し、横「ナフ傍輩さん達怪我して下さんすな。私が事は構はずと置て下さんせ。これ殿といふた腹立に恥かしい裸にして縛りやつたの。何程でも云止まぬ。旦那殿どの〳〵どの。エヽ情ない。死なしやつた母様ならで、友達にも見せ

關路の云々―謠曲松風の最後の句

自然居士―謠曲の名、或居士が少女を救はん爲人商人に呵責せらるゝ筋なり

脇―人買はワキなり自然居士の少女を虐げる所を云

「あれはや能の切果ると其儘衣裳脱に。あれからは一目なり、咎められては何方らの爲にもならぬぞや」高「チャ何時迄も同じ事。今が末期の暇乞」白「さらばで御座んす」高「來世で逢ふ」白「さらばや」と、立て見居て見羽拔鳥。謠同音「關路の鷄も聲々に、夢も跡なく夜も明て、村雨と聞しも今朝見れば、松風計や残るらん〳〵」樽「そりや果た。南無三寶始の道は人立有、樂屋から猶ならず、ハア、何處から戻しましよ。それ〳〵其處へ親方が裝束で。隱るゝだけは先づ爰へ」と、白妙が夜著の裙に押隱し、横笛上に打もたれ、障子はた〳〵差籠たる。長は風折水干、後見お出入どや〳〵と、長「ハヽア出來た〳〵。殊に舞の内、「我も木陰にいざ立寄て」の思ひ入、息がはづむ」と大團扇、扇ぐやら擦るやら、家「先面脱せませ。汗を拭へ」と寄たかる。長烏帽子著ながら、長「何んと松風出來たか。此裝束で直に爰で自然居士をして見せうかの。脇の「人買が櫓櫂を以て散々に打」。ウタイ「身には縄口には綿の轡をはめ、泣け共聲の出ばこそ」といふ處を面白ふして見せう。男共樫の木の棒持て來いやい」と呼はれば、常の氣知りて下人共、二言と呼れず走來る。長「只今揚幕入さまに、面の内からちらりと見た。病人奴が居る數寄屋へ何者か逃込で、障子を鎖すを見付た。あれ探して引摺出せ。早う〳〵。川捨せば共に片端喰はすぞ」男「はつちや怖

ごくに足らぬ―役に立たぬ

寶は身の云々―寶は有合はすれば身を救ふの意の諺「代かへて銘をつきぬる腰刀げにも寶は身のさし合せ」(吾吟我集)

ごもりに殺した穢ひ奴と、人でなしの長めに蔑まるゝ此無念。身を切裂ても晴やらず。ごくに足らぬ身の上咄、語つて益なき事ながら、我親迄は人に知られし名有武士。子細有て浪人し、我五才の時西國、今の親の養子と成、氏を換え名字を捨、算盤秤を取しより、産の親とは音信不通。住所も知らねば、況て生死の便も聞かず。今の親は商人の一錢をあだにせず。手代共の算用嚴しくて、金銀は我物ながら水の月、目に見る計手に取られず。され共指た一腰は實父の讓り、大國二ヶ國三ヶ國の價共成名劒。寶は身の指合、代なして和女が身の代と、方々主を尋るに、ナフ是非もなや。我冥加に盡たるか。千兩共萬兩共限り知れぬ此太刀を、やう〳〵三百兩五百兩、六百兩より上に直を付る者なければ、神を恨み佛を恨み、唐高麗へも渡られず。詮方更にあらばこそ。むざ〳〵と廓の中で身を果さす、腑甲斐なき男持たよな。今の恨は此太刀、我腹に突立ば、人の命は取べきが、白妙といふ女の身一つを助けぬ物。寶とは誰名付しぞ。竹の篦には劣し」と、柄を叩き鍔を打、かつぱと臥て泣ければ、白妙も手を合せ、「余り冥加恐し。數ならぬ此身ゆへ、重代の寶を放そとは、左程私が可愛ひか。因果な物に馴初て、苦勞させますおいとしや」と、二人が繰言悔言、盡せぬ泪ぞ道理成。傍に聞居る横笛、涙に沈む顔振上、

忘られこそ一本忘られぱこそ、謠曲松風にも忘られぱこそとあれは誤なり

我とても同じ事。過にし事を思ひ出せば懐しや。三歳は爰で名染をかけ、何事も皆夢と成、此形身の紋付計は殘れ共、謠同音「是を見るたびに、彌增しの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も、忘られこそあぢきなや。形見こそ今は仇なれ是なくば、忘るゝ隙も有なん」とあれ謠に歌ふもことはり。一日も夫婦とて世に住む甲斐の有にこそ。忘れ形身何にしようぞいの。謠同音「捨ても置れず取れば俤に立まさる。起臥わかでまくらより、跡より戀の責來れば、詮方涙に伏沈む事ぞ悲しき」折も折なる松風の、謠が泣す二人が中」横笛内へ立廻り、「いとしや側へ寄たいか。まだ五段の舞が有。此間にちよつと」と戸を明ければ、吉助前後の辨へなく、「是は」と計走入、抱付ば抱締て、言「語る事なひ云ふ事ない。極樂でも地獄でも附て往きたいばつかりぞ」阜「エヽ忝なふ御座んす」と、互の肩に互の顏、打もたれ合ひ咽返り、泣忍び音に横笛も、連て袖をぞ絞りける。男やう〳〵涙を押へ、疊を叩いて、「エヽ心に任せぬ、なれば成行身の果かな。とても死ぬるに極らば、一日でも一夜でも、身が手へ引取往生させ、今生の名殘に、入棺も葬禮も手にかけんと思ふ心一筋に、六百兩といひかけしに、無德心の長めに足本見られ、千兩なくては暇くれまいと、云募て埒明ず。吉助が子を懐妊すれば本妻同然。僅四百兩惜んで、廓の中で持

三地五地―飛石三ッ五ッにかけて小鼓打手の名なり
一セイ―謠曲曲節の一種
秋風越ゆる―行平の歌による
引手數多―多くの客より懇望さるゝ和女
身にも云々―謠曲松風にある句以下同じ
須磨―爲るにかく、次のあまりは海士にかく

みに、聲立て下さんすな。人が聞付見付ては、吉様は大事の御身。後の詮義が喧しし。必靜に〳〵」と、咡く中に笛鼓。貢「あれ能が始まる、此紛れに首尾して連ましてや」と行振は、何時の間にやら里馴れて、しやんと搔取る飛石の、三つ地五つ地一セイの、音に紛らす忍路や。忍び男の忍び風、頭の上は橋がかり、歌ふ謠の松風に、身は村雨に袖ひぢて、涙に絞る頬冠り。鼓も耳にびく〳〵と、秋風越ゆるは須磨の關、越すに越されぬ金の關。盗みせぬ身も盗人の、忍ぶに似たる篠竹の、枝折戸口に佇めば、白妙待兼ね、「ナフ吉様かいの」と、起るにも腰立たず、立上れ共足立ず。男も垣に取付て、聲を忍べば招き合ひ、心を中に通はせて、年を隔ての天の川、涙を淵とせきかくる、稀の逢瀬ぞ哀なる。白妙やう〳〵椽際迄這出て、白「ま一度逢ひたい〳〵と、思ふ念が届いて、嬉しう往生しますれば、思ひ置事なけれ共、大事の子を身に宿し、浮世に殘し置もせず、未來へ連て往くわいの」と、又さめ〲と泣ければ、吉「ヲヽそれも先世の約束。引手數多の身なれば、面々の果報により、大名貴人の北の方共成べき人。思へば此吉は和女の出世の妨。あれ彼の謠を聞きや、ウタイ「身にも及ぬ戀をさへ、須磨のあまりに罪深し」とは我事よ。此下に重ねしは二人寢し夜の其方の寢卷。形身に肌を放さぬぞや」白「ナフ

寄つかぬ―よせつけぬ
生世の中―白妙の生きて此世にある間に

の人様の形見の袷、棺に入て下さんせ。持ごもりて死ぬる身の眼を塞ぐと其儘、井筒屋迄知らせて、彼のお人の回向が受たいわいの」と、打伏て泣涙さへ弱行。横「ヲヽ、そんな事氣遣ひせず、心慥に持しやんせ。私は常にも申通、嫁入する迄身を自墮落に持なと、母様の遺言立つまいかと、それは〳〵悲しうて、死ふ様にも存ぜしに、長門様の才覺にて、此度の水揚とやらいふ事を、彼の吉様をお賴ゆへ、私に帶も解せず。お主は間を替へ、床の傍へも寄つかぬ様になされしゆへ、今日迄身を穢さず親の遺言違へぬ。此御恩送りには、假令内へ漏れ聞え、寸斷〳〵に刻まれても、ちよつと成共生世の中、逢せましたさ、能見物に紛らし顏隱してあれ迄」と、いへば覺えず起直り、白「アヽ、有難い忝い。早う逢たいどれ何處に。あれ〳〵あれに居さんす」と、這出るを、横「これ申、何おしやんす。あれは庭の松の木、吉様ではないはいな」と、抱留むれば、白「アヽ、扨は眼も早暗んだか。もう死ぬるに間は有まい。死際の顏を見せ、さぞ吉様が悲しかろ。私や又それが悲しい」と、又伏沈む計なり。横笛見る目も遣方なく、横「早う逢ひたい見たいと、心のせくは道理ながら、あの入込の人々の目を忍び、橋がかりの椽の下より、泉水の際を廻らねば、どうも爰へは參られず。物數いはず聲低に、お二人が顏計、見つ見らるゝを樂

上臈の面—松風の面

邂逅に—たまさかに、行平のわくらはにとふ人あらばの歌による

力なじみ—力なくにかけて彼の言助

やり手—むりやりに著するにかく

視目嗅鼻—地獄の閻魔の前に居る千里人の善惡を見透すもの

れては跡の身持がむつかしい。いふ奴には云せて置け。構はぬ〳〵。あれ狂言が始つた。松風の用意せう。装束共持て來い」と、怯む氣もなき氣の強さ。そも人間の皮一重、下は恐ろし上皮は、先美しき上臈の、面を持せて 三重 入にけり。表に囃す松風の、爰にも吹て白妙が、身に泌み渡る病の床。誰邂逅に訪ふ人の、數寄屋といへど隙間なき、障子一重を明るさへ、力名染の「彼の人の、顔見る事の叶はずは、責て何うかと一言の、便が聞て死にたい」と、知らぬ來世の闇よりも、涙中有に迷ひけり。人に心を置鼓。横笛が稚な名を、直に付たる竹の名の、身は川竹と成例。衣裳の模樣仕立口、著馴れぬ物を無理やり手が、歩き振にも非難いふ、人目を偸みわくせきと、急ぎにけらし白妙が、病の枕に立寄て。横「お眼開てかや」といひければ、重たき目元にじろりと見て、白「ナフ横笛どのかいの。よい女郎に成てじやの。奇特に見廻て下されし。視目嗅鼻より恐ろしき親方の目を忍び、能々心にかゝればこそ、年も往かいでしほらしい。嬉しふ御座んす忘れはせぬ。暇の事を傍輩衆が身に替ての訴訟、端々聞えて心ざしの嬉しさと、親方の辛さとはいか成世にか忘れうぞ。吉樣に逢ふ迄、ま少と生たい〳〵、と今朝迄も思ひしが、物いふ事も力なく、此胸の苦しさは、大方今夜が往生。是此方頼むぞや。此抱て居る紋付は、彼

ての我儘に、點打人は有まじと思ふは我身一分の理、世間の人が許さぬ。其證據御覽なされ。只今我等此皷を調べしに、御存の折居の胴、拍て見ればほと〲と桶の底叩く樣なり。肝を潰し、皮を外せば何者の所爲にか、胴の中にお前の惡事、一家の惡口を料理の獻立、能の番付、二通に書て入置し。エヽ無念千萬此如く、後指を指るゝとは知らなんだ。一分が廢つた。讀むも涙が飜るれど、是お聞なされ。獻立「料理獻立。御汁世上の人を薄味噌、自慢臭い葱、面の皮牛蒡二ッに切鯛、明日御めし、煮物は傾城打擲の棒大口魚、燒物は取沙汰魴鮄、人間の葛醬油かけて、奢るもの久しから漬の香の物、引て嫁菜、さるほう。恥鱶の吸物、抱への女郎伊丹諸白」エヽ口惜い。皆迄まだ〲讀れぬ。是又能の番付、「大きなせんざいさん〲そう。脇能身の程を白髯、八島の崩れ、諸道具のけばの梅、兩の手に金輪、世間で謠ふ親子籠太皷、跡は天皷微塵」聞つしやれたか親父樣。親子の耳へ入るからは國中は一ぱい。何んと恥を雪がふぞ。エヽ〲口惜い無念や」と、ずん〲に引裂、疊に打付〲て、どうと居り泣き居たり。長「アヽ氣の小さい、其心で長が跡は繼れまい。此榮耀の叶はぬ奴等が皆猜んでいふ事。何年か此かた人の噂に乘る男。それ程身代殖て來る。ひよつと人に譽ら

折居—胴の折居に鶴の繪あり
お汁云々—お主が人を輕蔑する
切鯛—斬りたい
魴鮄—方々に廣まる
さるほう—嫁が去る
伊丹—痛み
大きな—畜
白髯—知らず
八島—一家
金輪—捕はる人

惣々――すべて

榮耀するとは――此下に何吐すのを三字を入れて見るべし

錬味噌――午蒡が味噌かぶつて泥塗のやうになる

けん――鱠の劒にて擬消し

めうが――茗荷と冥加

白妙殿獨の上。私始數多の女郎、アヽ忝い頼もしい。慈悲な親方と思へば、心健しう一人の客も取外さず、内の爲になる樣にと身を忘れて勤める。本にいふじやなけれど、能の囃のと、榮耀榮華に誇て、朝晩王樣の上る樣な、二の膳三の膳、酢の甘いのは誰が云はす。ヤア旦那さん、惣々の女郎の心が反れたら、「五千兩や七千兩の損が見たい迄。其頤が三間程横町へ飛やんしよ。ヤア旦那さん」とぞせりかけらる。長「何奴も〳〵憎い奴。女郎のお陰で榮耀するとは。世界中の忘八屋に、せめて長が三分一眞似る者が何處に有。持て出た身の果報でする榮耀。頤が三間程ゆがむかゆがまぬか。これ見よ」と立上り兩足にて蹴て〳〵蹴散す本膳二の膳、刺身の鯉は煮物に踊り、錬味噌かぶる牛蒡どろぼう鯛のあへ物、飯も汁もがんぞう鱠。けんに置たるめうがの程ぞ恐ろしき。有合ふ女郎「わつ」と計に迯んとす。長「こりや一人も動くな。遣手共男共繩持て來い、棒もて來い。頭取は長門奴」と、小柄摑んで引寄する。一子太四郎皷片手に素袍袴。「アヽ是々舞臺へ聞える」と走り出、「先御勘忍〳〵」ともぎ放し、きつと睨付け、太「これ女郎共、なぜ御機嫌を損ふ。面々のお客を捨、白妙が爰へ出る事か。重てぐつ共いふたらば、此太四郎が堪忍せぬ。慮外ながら親父樣も親父樣。今日は歷々方の集り　家内に

局―局女郎にて勤銀廿目（異本洞房語園）

ぐる云々―一味になつての願

すねはたばる―拗ねしやちばる

勤はせず藥は喰ふ、人手は取る。地躰此吉とやらいふ田舍客めが穢い奴。六百兩で暇くれい。暖に千兩の小判耳が缺てもならぬ。定て今日は此客めが見物に紛れて、逢に來る手管が有と推量し、あれあの鼻の先の數寄屋へ病人奴を打込で置。皆見廻に往く事無用。禿奴等局の奴等でも、白妙に水でも食はしたら棒縛り。新艘の横笛め、浪人の娘とやら吐して賴もし立すると聞。數寄屋の傍へも寄たらば、縛始にくゝし上てくれるといへ。客が大事往け〳〵」と、始の笑顔引換へ忽に閻魔顔、面を被替ゆる如くなり。

奥州ちつ共怖氣なく、「こりや旦那さん共覺へぬ。お客から千兩出る程なれば、私等が何の口叩きやしよ。あんまりそれは情ない。慘ふ御座んす旦那さん」長「何此長を情知らぬ慘いとな。扨は客に賴まれ、ぐるに成て訴訟か。六百兩に付るを千兩といふ身共より、慘いといふは客の事。知まいと思ふか、白妙めは其客の子を孕んでけつかる。見す〳〵我子を持ごもつて死ぬるを見捨て、まあ四百兩惜む物知らず。是が慘ふ有まいか。爰を引張て千兩取か、但千兩損するか、爰らを氣強ふかゝらねば傾城屋はならぬ。一人に情かくれば跡々の例に成。情知らぬ親方と、すねはたばつて勤麁末にする奴等、棒の先で勤さしよ。いふな默れ」と睨付れば、「何程默れと有ても此長門は默らぬ。千兩の損德は

ちんだ—南蠻の酒の名

轡—忘八にかく

あつち物—冥途のもの

新艘—禿などの傾城になり始めを云(色道大鑑)

全盛と、先親方の機嫌とる、ひどさぞ思ひやられたる。長大きに笑を含み、「ムヽ是は太夫達のお客方より今日の花か。扨々念比な過分々々。是といふも和女衆が精出し、客に廻つて親方大事に勤むるゆへ。さりながら勤め〳〵と思ひ、酒過し煩ふて下さるな。ヤお客の傍で嘸氣詰り。少の間成と寢轉んで休息なされ。親方と思ひ氣兼は無用。我等が大事の金箱達」と、ふはと乘せても暴馬の、轡に手綱許されじ。中にも長門は姉女郎、「のふ奥州さん半ぶ樣、いづれも旦那さんのよい御機嫌。今の御訴訟申さふでは有まいか」と、突と出、長門「折がな〳〵此お願ひと、傍輩殘らず申合せ置しは、あの病人白妙殿の事。旦那さんも油斷なふ醫者衆も替へ、養生は樣々なれど、次第々々に病も重り、金の鎖で繫いでも、此度はあつち物と醫者樣達のお咄。其身は時節是非に叶はぬ事ながら、いたはしいは彼の西國の吉樣といふお客。新艘からのお名染は、我々も存ぜし事。とても死ぬる道ならば、一日成共廓の外で死せたいとの歎き。我人はかない勤の身、兩方の心思ひやられます。此事は井筒屋から、度々御耳へ入し事。今日は別して惣太夫中天神衆殘らずの御願ひ」と、半分云せず、長「アヽこまだるい、跡を聞迄もない。了簡して白妙に隙くれといふ事か、成らぬ事。白妙といふ奴で何程か損をする。三十日余り煩ふて、

朝夕—長にかく

杉折—杉材て作れる折、雲脚以下は其形を云

三五の義理—五三の桐にかく

播磨瀉—張る

鹿様—飾磨

髭籠—竹籠の先を剋と編み殘したもの

祇園坊、靫、今橋—皆客の所の名とかけたり

そ据にけれ。七度搗に七度篩ひ、誰が水晶を飯にして、精いとはぬ白鷺の、せゝり箸して不機嫌顏。長「何んと世界にもう食ふ物は無いかい。明ても暮ても鯛の鯉のと喰れぬ物ばつかり。此の二の汁の鳥は何じや問ふて來い」玄「イヤ問ふに及びませぬ。何がな珍しい物をとて、生鶴のお汁」といふより、くはつと色を損じ、長「鶴といへば結構な物かと思ふて。今時分の鶴、脂が無ふて食はるゝ物か。打明て犬に喰せ。今持て來た平皿は何じや」玄「アヽ是は生鮭で御座りんす。態々若狹へ飛脚を立、取寄たと申されます」長「ムヽ若狹へ取に遣た。こりや出來した」と機嫌を直す食好み。朝暮珍物高直の魚鳥は直に小判嚙む、齒骨も茨木童子なり。思ひ〳〵の大臣の、妓の威勢を劣らじと、能の祝義の贈り物。花とはいへど木々に咲、花の時節は杉折の、雲脚蝶形洲崎形。五ツ重ねの島桐の、紋を透しに手を込て、奥州が名を忍ぶ客、三五に義理を播磨瀉、「鹿様より」とほのめかす。花紫が深い客、長堀の粋様、金糸の網をすきかけて、髭籠に籠し祇園坊。半ぶ御贔屓弓も引方靫のお客といふも有。銀の毛彫の飾壺、宇治の花香を其儘に、詰し昔も今橋と、逢夜が客の名に渡る。瑠璃白玉の玻璃罎に、ちんだ泡盛、薬と汲むや玉の井が、お客よりぞと我一に、しづか卷絹金太夫、長門薄雲初紫、色品盡す進上に、よい客持て

萬能一心―藝は有ても不正の人のみなり

米取―知行取つてゐる能役者も長には叶はぬと也

富士の煙云々―富士の根の煙も猶ぞ立昇る上なきものは思ひなりけり（新古今集）

京の水―京は水良ければ贅澤に取寄せたり

したゝめ―食事せよ

本膳―本當にかく

春正―名高き山本春正の作

臘虎の蒲團の三つ重、沉の脇足煙草盆、湯殿を出るひらぎの長、天窻の鉢に立湯氣は、富士の煙の上もなき、ほとび過たる湯上の、お伽共がお髭の塵。伽「扨も熊野の面白さ。何うもく。能い衆のお客達が先彼の衣裳の結構さ、大名もかなわぬとの御評判。お行水なされて追付松風、皆待兼て御座ります」長「イヤ行水心が悪い。水計に五人三人かかつて居て、京の水をきらして、かより湯にあふ坂の水を使せおつて、扨肌の鹽梅の悪さ。金次第でならぬ事はなけれ共、汲立の京の水と、嵯峨松茸のとりぐ、此二色が心に叶はぬ。アヽ松茸時分に上りたいが道中が大義な。舟嫌なり馬嫌ひ、駕籠はふらつく。ヤア福庵、お主は地躰京生れ。若し貧乏公家に近付が有ならば、御所車一輛買ふてくれ。乗て歩こ」と法圖もなき、月蓋長者の隱居せられし如くなり。見に來る人の空燻は、匂ひ渡りし橋がかり。二三の松を煙來て、樂屋にちよつたんほゝの調も伽羅に埋れて、皷の音さへ薫來る。長「あれ皷を調べるは、もう次を始めるか。己が案内する迄始るなど云ふて來い。此間何れも勝手へ立てしたゝめく。我も飯喰ふ膳を出せ」玄「そりやこそ御膳」と呼小鳥、古金蘭の膳覆、誠しからぬ取沙汰も、嘘で御座らぬ本膳は、春正蒔繪の價千金、かけ盤高つき、二汁七菜手を盡す。餘所の振廻ひらぎ屋の、朝夕とこ

に皇后の御ゆかりを憑みて入れたり(秉穗錄)

月も日も—庭の廣き事「武藏野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ」の歌による

光林—有名なる畫家尾形光琳

恥し—羽束師森

みやのぎ—宮城野か

しやく〳〵—笏と癪とかけて長の痞癪は持病なりと落したり、此句小出雲等を驚かしたる有名の句

熊野—湯屋にかく

たけ〳〵—竹や火を焚け

算用云々—藝よりも養ひ料の多い事

破落漢—鳴らずにかく

とかや。

第四五　植籠の大江山、榮華は大格子の唐織

月も日も、庭より出て庭に入、廓の内の武藏野や、ひらぎの長が廣庭の、光林風の築山を、見渡す目さへ遙々と、谷の岩組九十九折、筑波の山も恥しの、森と繁りし植込は、華麗を盡す物數寄の松の作木作枝、庭の松風三味線の、天柱に通ふ細廊下、數寄屋が軒の南天に、珊瑚珠繋ぐ玉簾、萩はみやのぎ躑躅が岡、梅や櫻の花紅葉、天より四季の仕著せして、手形の外の色ずくめ、金ずくめなる身の榮華、金の冠を著ぬ計、しやく〳〵は持病に有とかや。豫て催ほす檜木舞臺も成就し、今日こそ爰に晴の能。三番過て中入の、熊野より直にお行水、臺所にはどや〳〵と、五色の赤飯蒸立る、鍋釜有たけ、たけ〳〵と女子呼つぐ男共、見物場掃く水を打、樂屋に續く衣裳場に、お出入の藪醫針立、算用足らずの懸倒れ、傳授覺えて手は利ぬ、古鼓のならずもの。其他萬能一心の家業なし。「扨も出來た遊ばす〳〵、米取る能太夫も跣足じや」と、慶庵とり〴〵御機嫌伺ふ折節、湯殿の内より、「お上りい」と呼はれば、「ア、イ」と答へて禿共、緞子縮緬天鵞絨裏の、

營ーくらし向き

大嘗會ー御即位の後初めて行はせらるゝ新嘗祭

迯去、殊ー原本のまゝ

平橘藤ー源平藤橘を四姓と云、其内橘は尤も少きも嵯峨の御世

れず、「夫の悪事を女の身にて存ぜねばとて、同罪遁るべき樣なく候へば、陳じても益なき事。左樣の事は夢にも存ぜず。如何樣過し春の比、古傍輩の合力とて、浪人の營を助りし事も候へば、若し其子を賣たる値にてや有つらん。それも詳しく存ぜず。又欠落かとのお尋。假令首を討るゝとて、迯隱るゝ樣な夫にては候はず。去ながら一夜にかはる人心、夫婦の中とは申ながら、計ひがたし」とぞ申ける。賴「ヲヽ健氣成申樣。天子大嘗會の前なれは、死罪を宥め助け置。北白河の庄屋年寄、廣文を尋出し、娘を急度渡させよ。加藤兵衛も鏡山へ同道して受取れ。違背せば連來れ。庄屋其旨承れ」と、御座を立たんと仕給へば、親も庄屋も詞を揃、「其間妻子共迯去も氣遣はし。迚の殊に廣文出る迄此女、牢舍仰付られかし」とぞ願ひける。賴光打笑み給ひ、「ヲヽ、迯るといふ共唐土天竺へはよも行まじ。津輕合浦、筑紫の果、王土の限りは武將の下知。僅に圍ふ牢舍計牢舍とはいふべからず。賴光が許すといふ詞を出さぬ其内は、千里が野邊も牢舍たり。迯ば迯せ。賴光が一言は千筋の繩ぞ。罷立て」と簾中に入給ふ。文武の德のとう／＼と、威有て猛からず、實に名將の源の、水上淸き印には、世々に流れて家々の、平橘藤原や、八百八十氏は多けれど、めぐり／＼て盡しなく、猶源の御代に住む、民に幸有

料足―錢

陳ぜば―偽り申さば

十五才の我娘、當春加茂のやすらひ花に參り、それより今に行方知れず、度々訴訟申せ共、變化の業とて追歸さる。是御吟味の暗き處、變化異形を幸に、人商人の蔓り候。此御心付ざるは御政道の失ならずや。御穿鑿下さるべし」と、憚りなく訴ふれば、末武磐をあらゝげ、「御政道暗しとは天晴おのれは嗚呼の者。して汝が娘人賣に取られし證據や有」と睨付る。加藤兵衛ちつ共臆せず、「さん候。江刕鏡山ひらぎの長が許にて、娘を見付候ゆへ詮義を遂候得ば、北白河の廣文と申者より、料足五十貫文に買取と聞より早く廣文が宿所を尋候に、此比他國仕る由。去によつて恐れながら御威光をかり奉り「武將よりの御召成ぞ。廣文が妻子召連れ來るべし」と所の庄屋に申渡候へば追付引連參るべし。對決願ひ奉る」と憚りなく言上す。頼光聞給ひ、「神妙々々。汝が詞上を蔑するに似たれ共、却て政道を勵す一助。我何んぞ下聞を恥ん」との給ふ所へ、北白河の土民共、「廣文が妻子召連れ參りし」と、四十餘りの女房、十四五計の娘の子庭上に畏。頼光御覽じ、「廣文が妻子は己等よな。夫の廣文粟田口の加藤兵衛が娘を勾引し、鏡山の遊女に賣たる條紛なし。定て汝も能く知つつらん。夫が宿所に居らぬ由、欠落か、但行先知たるか、眞直に白狀せよ。少も陳ぜば拷問させうずるは」との給へば、女房は聊かわろび

尼の唄につて拍子「ちとくわん」にかく

弘徽殿云々—幽霊の告げ前に出づ

勾欄—欄干の折れ曲れるもの

師。明て十四の小娘、何者の仕業にや、首も腕も引拔て、腰より下は殘れ共、骨は碎けて候」と、泣こがれて申も有、音羽山の燒物師、女房が天窗の鉢打破れしといふも有。油の小路の傘屋が女房、武者の小路の具足屋の母、お室の糀屋、吉田には八百萬屋、御幸町のちご醫者、六條の豆腐屋、七條の袈裟屋、おほかめ谷の衣屋、櫛笥通の紙漉、押小路の鮨屋、三條の取上婆、娘を失ひ、妻を奪はれ、叔母は姪を尋れば、妹は姉を見失ふ。兎にも角にも御詮義あり、妻の行衞を知らせて給べ。娘に逢せて給はれなふ。御慈悲なるは、と聲々に、泣悲む有樣は、閻魔の廳に罪人の、罪を悔むも斯やらん。目も當られぬ次第なり。賴光も落涙有、賴「此比の訴訟人、爭論出入の事はなく、妻子を失ふ訴へ、春より帳面八百人に及べり。ヤア汝等、是は丹劦大江山酒呑童子が所爲成由、弘徽殿の告によつて某討手を蒙れ共、幼主御卽位、大内守護にて延引せり。近々に大江山に分入、生たる者は連れ歸らん。死したる者は敵を取て得さすべきぞ。目に見へぬ變化成共、源氏の威光弓箭の德、滅さで有べきか。靜謐の御代となし、追付歎をとゞむべし。罷立」と仰ければ、「ア丶有難や」と一同に、わつと叫びし其聲は大路に響き哀なり。爰に四十ばかりの男子勾欄の下に突と出、「某は粟田口の貧者、加藤兵衞と申者。横笛と申

して召出さん。先面々が訴訟のしなを帳に付ケ。それ鎭めよ」「承る」と隨兵かなぶち振廻せば、しいと鎭り突這て、皆々帳にぞ付にける。甲「恐れながら私は、上京西陣織殿屋の孫三郎と申者、十七に成年季の織人、一昨日の暮方より行方知れず失せ候。親請人に尋れば、却て此方を恨み口。御威光を以て御穿鑿仰ぎ願ひ奉る。故郷は錦の小路の者」と、口上の趣を定光帳にぞ留にける。乙「我等は二條室町糸商ひの吉次と申者にて候。一人の悴に一門中より嫁を取、里歸りの道にて見失ひしと申て、今に戻さず候へば、御詮義願ひ奉る。我等が爲には姉が小路の針や、從弟同士」と繰返せば、同じく帳にぞ留てける。次に年比六十余りの女房は、「柳の馬場のおこうと申綿摘敎へる寺子取。十二と三に成弟子が二日に二人の行方知れず。御慈悲に御詮義給はれかし。人の小娘失ひて、未來のつみ綿、親々の恨みはさながら眞綿にて、首締らるゝ思ひ成」と、涙を流して訴へける。丙「私は宇治の里、梅田と申茶師にて候。十八歳の娘閨の内にて姿なし。側に臥したる下女に問へば、「こちや知らぬと申なり。細に御詮義下さるべし」とぞ願ひける。丁「私は今熊の貞月と申比丘尼のお寮。廿三四の弟子二人、勸進に出今日七日、今に歸らぬ御訴訟。則其比丘尼の名、一人は貞林、一人は貞觀〳〵」とぞ申ける。戊「是は深草土器

かなぶち―鐵棒
姉が小路―姉にかく
つみ綿―罪
こちや、細か―皆茶の緣
お寮―比丘尼の師(俚言集覽)
觀々―例の比丘

せつちやう―貫打れてこき仕ふ事

亀屋―三條上りに當時亀屋和泉とて有名な菓子屋あり

末武定光―四天王の隨一卜部季武碓氷貞光

うせい」と、酒呑童子も其處除けの、茨木童子が摑頰、片腕切たき計なり。加藤兵衛聞けば聞程力落、「ムヽあの心では泣てもくどいても、聞入はよも有まじ。なまなか云出し仕損じて後日も如何。兎角頼光へ訴へ、御威光でなくんば」と、思ひ定て座敷を立、兵「これ御亭主、勝手も殊の外取込と見受たり。我等も今日もり山迄參る用事ゆへ、お暇申」と笠押取、「重てお出」といふ聲も、聞捨てこそ出にけれ。長跡を見送つて、「あの樣な奴客にすな。何ゝの二ツや三ツ宿したとて塵埃。小喧しい置たが能い。アヽもう往なふ、コリヤ何奴ぞ來い。猿奴、先へ往てぜんざい餠云付よ。小豆は舌に障る。京の龜屋が羊羹を擂潰してせいと云へ。太四郎も來い」と立出る。今の榮華は喜見城。女郎の爲には怖ろしき、鬼が城へと三重歸りけり。東宮兼仁親王七歲にて御位に卽せ給ひ、攝政兼家朝政を糺し、武將源の頼光非常を戒め給ひしかば、聖主の御代の九重や、民の訴訟なかりしが、永延二年の比よりも訴訟沙汰人日々に增し、頼光の門前は夜の內より群集して、御門の明をぞ待居たる。夜も明ゆけば頼光、決斷所に出給ひ、末武定光、執筆の役。檢非違使左右に著座して、庭に隨兵兵具を携へ、御門開けば訴訟人、我先にと込入しを、定光進んで「ヤア騷がし〳〵。御批判は後程名をさ

流を立—女房を遊女にする

おれそれ—挨拶

じゆんぎ—仁義か

通屈—談判

は女房に流を立さす、と惡名を立られふより、同じ恥をかく手間で、孕女を擔いた方が遙かに勝。ゆらめに平産いたさせ、私の子といたし、お前の詞も立ませふ。其上で何となふ親へ戻して下され」と、云せも敢ず、長「ヤア氣の弱ひ。彼奴を親へ戻して、せんよを受出す八百兩は何處から出る。惣じて慘ひ目を見まいと物の哀を知たり、人のおれそれ、世の中の義理じゆんぎを知るが最期、貧乏神が乘移る。此春抱へた廣文が口入のしんべめも、明暮吠え廻れ共、擲き込責め伏て、五十貫をやがて五千兩にして見せふ。コリヤ此ゆらも前出した六貫匁、せんよ受出す八百兩、五双倍にせにや置ぬ。男共ゆらを此方へ連て來い」と、起んとすれば、太四郎留めて「今暫く。中親父樣、ゆら一人が無ければとて、お前が貧乏なさるゝか。假令彼れゆへ金銀の山を築けばとて、太四郎樣の内義といはせた者に道中させ、私は生て得居ませぬ。子を産して、波風立ず去に何んの手はつかぬ。明日より此太四郎に人交りもするなとか。御了簡頼奉る」と、手を合佗ければ、ゆらも「只御恩には、京へ往なして下され」と、泣より外の事ぞなき。我子の恥と聞入て、長「そんなら如何成と、墮胎成と、産せ成と、埒明て京へ往なせ。今宵の中に俵屋と通屈して、せんよを明日から呼取、此八百兩の戻る程、餘の女郎共をせつちや

女房旱魃—女房に不足はせまい

こしらへ云々—身の支度も懐姙も

房な親が何處にあろ。大恥かゝぬ中出て失ふ。さなくば取て引摺出す」と小腕取て引立る。門口より親長は、「默れ〳〵喧しい。太四郎默れゆらも默れ。こりや、せんよに勤めをさするによつて、間夫の何のと喧しい。とんと受出して本妻にせい。町の分限者共の爲る程の事、此長が仕兼ふか。疾に内證聞て置た。八百兩では今でも埒の明樣に、俵屋と談合締て置た。コリヤゆら、われが親と云交した詞一言も違へぬ。京の東では住吉屋のゆらといふては名を取た娘じや。アヽ何ふぞ此方の格子へ出したれば、大儲する物じや、と見込で親へ囉ひかけたれば、「女郎には賣ませぬ。殊に大臣の子を懷妊して居る」といふて埒が明ぬ。其處で此長が思案を以、こしらへにも懷妊にも構はぬと一杯喰せ、先嫁に囉ふて、跡では其腹な子を疵にして勤させう、と此長が胸一ッで斯ふからくんだ。左樣なふて六貫匁といふ禮銀を、何ゝの値に出そふぞやい。此樣な手練をせねば分限者にはなられぬ。これが己が商賣じや。其腹な子を墮せ。今宵から此方へ來い」といへば、ゆらは返事なく、只伏沈み泣居たる。太四郎聞兼ね進出「せんよを受出し下さるゝ御恩は海山有難し。ゆらめに勤させふとは、それで此太四郎が若い者の一分、何と立ふと思召。歷々のお付合、京都迄も聞えたひらぎ屋長は、嫁に勤をさするは、むす子の太四郎

粋は悋氣―一本下に「は」字あり

三つがなは―一人を證にて取り三人て定むる（俚言集覽）

けんほくほ―未詳

まひがの。先其如く、余所の大事の立物の太夫と、揚屋の身で間夫狂ひ、廓にばつと沙汰あれば、第一商賣の妨げ。女房が倥侗じやとゆらが鼻毛がよまるゝわいの。今計云ふじやない。何んぞ云へば、氣の通らぬ悋氣かと一口に云込め、何んと粋は悋氣せぬ物との何處からの法度ぞ。何方からの極めぞ。サア云や〳〵」と武者振付ば、取て突退け、胴骨を踏付け〳〵、太「おのれが何處へ女房呼はり。其腹持ても女房か。七月の京土產、旣に此太四郎に男の一分を捨させうと能ふしたな。女房でない、出で失せふ。去狀が望なら千枚でも書て遣ろ。男共女共、引摺出せ」と犇めけば、家内騷ぎ立、「先親旦那呼で來い。座敷へ聞ゆる。門に人がたかります。アヽうとましや」と騷ぎける。ゆらけら〳〵と打笑ひ、「ハア改つた事計。此お腹が今見へたか。私も京に譯有て、此處へは下るまいと云切て居たれ共、此方の親御が、「懷妊大事ない。其子は太四郎が子にしておれが孫に極る。茶屋揚屋の嫁に其處らは構はぬ」「是非におゐてもらはふ」と、父樣との堅めで嫁入て來た私なれば、此腹の子は此方の子。親旦那と三つがなはで、けんほくほはれで產で見しよ。人の浮名立ふより、此方の浮名たしなましやれ」太「イヤ此奴噓付奴。女房旱はゆくまいし、おのれ計が女か。此澤山な女子に、身持な合點じや嫁にとらふといふ、阿

無德心―思ひやりのない事

松―待つ

後妻打―後妻の許へ先妻が亂暴に行く事、骨董集にうはなりを嫉妬の字にあつ變もその意

おゆら―心の動搖にかく

こづか―小腕か

遣「こりや客様ン達の手前も少とは恥しいと思へ。其遣ばなしな根生で、今から殿達に、しつぽり〳〵やらるゝか。とつとゝ失せふ」と引立れは、賴「申お客様ン、餘所の娘が折檻に逢居る、不便な事やと苦に持て下んすな。私や痛ふもないぞや」と、笑顔にかゝるはら〳〵涙。追立られてぞ歸りける。門を見送り立つ居つ、跡に焦るゝ親心。氐「サア〳〵有かは知れた。賴光の御前への訴へは、上り下りも日數を取る。今宵一夜も見捨ては親も命が堪らぬ。親方ひらぎの長と、太四郎とは親子とや、珍重〳〵。長が邪見無德心の者成共、鬼でもあらず畜類にもあらず。彼奴も子を持たれば、親子の哀は知るべきぞ。某が大地に手を突き頭を下げ、膝を折てくどくならば、指たる我大小の義理にも逼つて、聞分けぬ事よも有まじ」と、亭主が歸るを松茂る、小庭に佇み居たりける。間夫の後妻打波の、おゆらは夫太四郎が、こづか胸倉摑合、敷居で轉ぶ雪駄は飛ぶ。引摺込で上り口、どうと打付、ゆら「これ太四郎殿、せんよ殿とのもや〳〵知拔て居るぞや。今日も今日此方が門を出て行と、せんよ殿を呼に來る。「ヤア合點じや」と、裏の路次からそつと出て、こそ〳〵宿へ仕懸て一から十迄見屆た。此方衆親子の商賣は何ンぞいの。女郎屋と揚屋と、内の女郎と余所の揚屋と間夫したら、此方衆親子がきよろりと見ては居

小き下女をべといふ爰も其意

眠たい目云々ー寢たい時に寢る故いふ

研磨ー身のつくりみがき

さだつー内輪もめ

ひしー灸瘢

べは爰等へは見へぬか」と、奥へ通つて、遣「こりや爰にじや。はや今から野良かはくか。我身が爰へおじやつて、もう丈長が伸たとて、一日も太夫樣方に付もせず、供は仕やらず、眠たい目は仕やらず、朝晩仕事は研磨き。もう半年も居やれば、アノ氣立な旦那樣の手並を忘りやつたか、又しては遣手がぬるい〳〵と棒の側杖喰そふな。何野良かはいて爰に居る。エヽ因果奴」と撲こかす。禿「おりや遊びにや來ませぬ。太四郎樣からせんよ樣へ文持て來ました」遣「それ夫れが木馬のもと。若旦那の太四郎樣には京から御座つたおゆら樣といふ、歴としたお内義樣が有ぞや。コレ此眼に見へぬか。せんよ樣と若旦那のこそ〳〵ゆへ、おゆら樣とのもや〳〵が此耳へは入らぬか。内のさだつが面白か。惡魔奴」とてははたと打、「天狗奴」とては突伏せ、下がへに手を入て太股を、捻上げ〳〵捻上れ共聲立ず、痛さを堪ゆる憂涙、疊に落てはら〳〵と、齒齘みしても加藤兵衞、出るにも出られず、云へば云負。武士の娘を下主女に、みす〳〵親の見る前で、さいなまする無念やな。飛かゝつてや突き通さん、眞二つにや切殺さん、と刀に手をばかけたれ共、切て誰爲、遣手には科もなし。腹立つる程我子のひしと、喘立心押沈め、兵「テヽ遣手衆憎いは道理〳〵。其方は娘は持ずか」と、聲を涙に曇らせて、見ぬ顏するぞ哀成。

格子—太夫の次天神に同じ（異本洞房語園）

しんべー加賀で

ふかと思へ共、せめて父様に爰に居ると知らせたく。不繁昌な女郎衆は、私同然責さいなみ、木陰へ寄ては「兎角命が大事じや。地獄へ落たと思や」と傍輩衆の情にて、一日／＼暮せしが、抓り撲れ小刀針、身内に明所は御座らぬ」と、語る子よりも聞親の、心に釘針刺す如く、共に歎き沈みしが、氏「エヽ憎い奴原。しやつ人商人、其親父奴が名所は聞なんだか」横「手形の時見ましたが、北白河の廣文といふ奴じやげな」氏「ムヽ、何北白河の廣文とや。名所さへ聞たれば、政道明けき頼光へ訴へ、其廣文め獄門にかけ、其方は廓を安々と取出すは今の事。去ながら、其間にも必／＼、一夜でも遊女の勤して身を穢せば、重ねて武士の妻とならず。一生の大事ぞ」と語れば、横笛又泣出し、「サアそれが悲しう御座んする。母様の御臨終に、「貞女兩夫に見えず」とて、夫一人の外とては、男に手をも取らさぬ物。女の大事は是一つ」と、くれ／＼の御遺言、胸の守りにかけて居る。去ながら近い内格子へ出す、太夫にするとの用意を聞けば、責に逢ふより悲しうて、死なふと思ひ詰ましたに、今お目にかゝれば心に力頼も有。片時も早ふ取返して下され」氏「ヲヽ氣遣するな今の事。それまでは親の名も、人に語るな洩すな」と、いへ共洩る親子の涙、留めかねて居る處へ、遣手の鍋が藥罐聲、煮かへつたる顔付して、「此方のしん

木馬―拷問の道具

つて最早此世に無いものと、思ひ極し上ながら、若しやと爰へ來りしに、思ひも寄らぬ此躰、何として淺ましい。君傾城に使はるゝ禿とは誰がなしたるぞ。いか成者に欺されしぞ。不便の者の有樣や」と、聲打萎れ云ければ、横「父樣に歎きをかけ、我身も憂目見る事は、私が心の愚さゆへ。過し彌生やすらひ花の歸るさ、白髮頭に赤ら顏、浪人らしき親父めが、「ヤア加藤兵衛の娘か。小い時に逢ふたれば、定て其方は覺えまい。扨も〱成人。加藤殿へも無沙汰した。長の浪人笑止な。其方を賴光樣の御臺所へ御奉公に出そふ。親の立身身の出世、只た今加藤殿共談合し、お主を爰迄迎ひに來た。ちよつと逢する人有」と、欺すとは夢にも知らず、父樣の合點なら、どふ成共と連立て、船に乘せ駕籠に乘せ、此所ひらぎの長へ連て來て、五十貫とやらに私が一期を賣渡す。「ヤア其筈でない、左樣でない」と、泣ても喚いても聞入ず。長が手に渡りしより、間がな隙がな迯て退ふ。走つてくれふ、と心懸る素振を見て、慳貪邪見な親方が、「五十貫に買ふて、一萬兩にもする奴じや。其根性をなをさぬか」と、縛つて長押に釣下らるゝ時も有、柱を横に渡して、足に石を括付、木馬とやらに乘せられ、夏の夜は裸にして、植込に括付蚊にせめらるゝ時も有。食を停められ、打敲きは常の事。泉水へ身を投て死な

延－延紙

わくせき－那くれかく

せゝくしや－もみくしや

此廓の女郎屋、私が親方始めとして、禿共多ィと申て廿人か三十人。肝煎口合有内に、親本樋の判を取、吟味に吟味が廓の作法。此太四郎様の母屋は、ひらぎ屋の長とて隠れもない大忘八。太夫計が五十人、天職が七十余人、圍のはしのと二百人に餘つて、禿共さへ百人余。事の多ひ中なれば、どの筋から何ふこけて、お尋の娘子の御座るまい共申されず。アヽどふぞ知らせて上たや」と、しみ〴〵泣てぞ語りける。表口から急がしげに走つて來る禿の聲。「俵屋のせんよ様ッは奥にかゐ」と、突と通つて鼻紙の、中から出す延の文。「コレ太四郎様の、お前ゑ進ぜとおしやんす」と、文を渡せば讀隙も、呼けばさゝやいて、領き合し横顔を、能々見れば尋ぬる我子の横笛。「はつ」と嬉しさ抱付計。「親は爰に」といはんとすれ共人目有。人の思ひ我思ひ、汲かへ〴〵心の水、わくせきするぞ道理なる。せんよが心は戀一筋、側の顔には目も付ず、「ちよつと往て來ませう」と、文引裂いてせゝくしやの、小褄ほら〴〵立出れば、共に跡をも振返らず、連立急ぐ我子の振、氏「コレ禿衆〴〵、ちよつと爰へ借ませう」禿「あい」と見返り、「ヤア父様かいの」氏「アヽ高い〴〵。可愛の者や」禿「ゆかしう御座る」と計にて、抱付ば引寄て、聲を吞だる濕泣き。親子の樣ぞ哀成。加藤兵衛涙を押へ、「春より今日が日迄、尋餘

くあらば花をやりたいと也

私が昔―私の昔も其通り

打たき風情なり。龜が勝手へ立を見て加藤兵衛居直り、马先以て今日はお出忝い。我等太夫樣方を呼まする風躰な者でなく、身は都に住ながら、女郎達と詞をかはせし事もなし。況て此廓の何方が何方共名も存ぜず。亭主太四郎とやらが心得を以て、不思議にお目にかゝる事、返す〴〵も忝し。一見と申武骨者、なれ〳〵しき事ながら、瞽蛇に怖ずとやら、身に迫ての物語。我等が兄弟より親しき者、當春十五の一人娘、三月より行方知れず、狐狸の所爲かと、夜な〳〵の太皷鉦。人買人賣の手にも渡りしかと、京都伏見の遊女町、山々谷々探しても、今日迄行方知れず。殊に母もなき者、父の歎き御推量。死したるに極らば、せめてからだ成共と、親は狂氣の如くに成、子が存らへ有ならば、親の悲む一倍と、親子の心思ひやり、我等が身同然に、斯樣に尋申なり。禿子共に思ひ當りの方あらば、お尋も申度、扨こそ氣立の能きお女郎とは望みしぞや。色もなく戀もなく、大事の女郎に立入し御物語、噯譯知らずと思されん。是も心の遣方なさ。不調法は御免なれ」と、はら〳〵泣て語りける。せんよは鼻紙手に取て、せん「ナフ始めてのお客に泣たは、是が始めぞや。少と違ふか違はぬか。女郎の成立は皆それに似たる事。親御の歎き、御念比の中ならば、さこそと思ひやられて、私が昔も今更に袂を絞る計ぞや。

入レ—入ルか。

ぴかしやか—ぴん〳〵

隱居云々—長の居宅へ見舞にゆく

位—太夫の位

鼻紙袋云々—加[illegible]巾著に金多

見たし。路銀の餘り一兩二歩、これを貴殿に渡し申。然るべき樣に賴入レ」と述ければ、太四郎手を打、「さて打明た仰れ樣。それが結句野暮の粹。女郎にお望は御座らぬか」氏「いかな〳〵。太夫でさへあれば誰でも構はぬ」太「申女郎と申は、面々に情夫と申懸が有ゆへ、夫への心中、大方初手は振まする。其手管でお目を偸む事も有。左樣の時に得手のお方が、今宵一夜はおれが物、一寸側を放さぬと堅くろしいお方が御座ります。そんな事も御了簡なされますか」氏「構はぬ〳〵。振たくば振つしやれ。神樂の鈴程振つしやれ。只氣立の能、ぴかしやかせぬ太夫を賴む」太四郎悅び、「こりや女子共、俵屋へ往てせんよ樣呼んで來い。盃持て來い、小座敷の火燵へ火を入れい。先此方へ」と奥座敷。太「私は隱居へちよつと見廻ふて後方、お目にかゝりましよ」と、雪駄も足の横町の、こそ〳〵宿へぞ走行。ひらぎ屋よりと聞嬉しさ。せんよは心たぐり行く。「遣手禿も跡から」と、引舟入ず走込、客の事も問はゞこそ。せん「これ龜殿、太四郎さんは何處へぞ。私が來る事知てかや」龜「ヲヽ〳〵成程〳〵旦那樣の御合點。障りないお客さん、お座敷は中の間へ、せんよさん御出」と引合せ、位の有松の床柱、とんと靠れて寄添の、無ひ事有事しやら聲に、かみする女子の取廻し、盃計投入の、鼻紙袋にありあはゞ、露も

夫と天神が百人餘、百に桃をかけたり
圍はしー圍女郎と端女郎
夕べー結ふにかく
てゝなしー父の知れぬ子と資本いらずの金
鋸商ー揚屋と女郎屋と兩方で儲ける商
粟田口ー逢はずやすらゐ花ー今宮社の祭にて三月十日里人烏帽子素襖着て太刀をかたげやすらひ花よと囃して社を廻る(都名所圖會)
五分ー嬉遊笑覽に圍端女の花一本一匁一分とあれば五分は安女郎の價也

を見失ひ、足手限りに身を砕き、尋廻れど影も見ぬ、鏡の宿にぞ著にける。見馴れぬ里の賑はしさ、行かふ女郎の年恰好、同じ程なを見るに付、若し此里には居ぬ事かと、尋るも面伏せ、聞ねば心落つかず、摺違ひすれ縺れ、一つ處を行戻り、案じ佇み居る處へ、北むきのつまがはが袖を控へて、「これ君樣、旅のお人か近付もなさそうな。局へごんせしつぽりと、知る人になりんしよ」氏「ヲ、過分〳〵。客にもならふが、先密に尋たい事が有」と、云せも敢ず、つま「尋たい事合點じや私が位かゐ。極つた通り五分でごんす。安いものじや這入らんせ」氏「イヤそんな事ではない。此廓に居る禿子共の親里所は知てかや」つま「ム、〳〵私や禿使ふた事はなし。女郎のさもしいそんな事何んの知ろ。まあ這入らんせ」と引留め、「此三十日客せねば、賣物でない樣な味な所が有ぞゐ。まあ御座んせ」と引留る。氏「いや先重ねて〳〵」と、武者振付をもぎ放し、鬼一口を遁れし心。目を塞ぎ鼻摘み、ひらぎ屋へこそ入にける。內には見馴れぬ風俗の、胡散らしげな大小に、さすが袖にも待遇はず。亭主太四郎揉手をして、「何方かは見馴れぬお人。我等はひらぎ屋の太四郎と申者。御用は如何」といひければ、氏「拙者は京都浪人者。一生に傾城と物申た事御座らねば、揚屋衆に近付なし。閻魔の廳の訴へに、只た一夜太夫といふ者買ふて

任せ計ふべし」との院宣も終らぬに、平の安盛参上し、安「右近の前は叡慮に叶ひ候か。伺ひの爲參りし」と、いはせも果ず渡部、「院宣成ぞ」と胸板を、かつぱと踏付乘かゝり、繩をかくれば、安「こは如何に。忠節はげむ安盛を搦めよとの院宣は、心得難し」と立上る。綱「いや科はいふに及ず。をのれが心に覺有。云譯あらば頼光の御前にて申べし」と、頬骨を五つ六つ續け打に打付、「それ／＼」と引立る。猶々玉躰安全の御祈禱を、晴明が千早振てふ祝詞の聲。君は女御追善の御經の聲打交り、さながら神も影向し、佛も來迎有ばかり。佛法王法神道も、共に盛の花の山、今に古跡ぞ殘りける。

第三　東寺の西口いばらきがつかむ八百兩のきんさつ

歌「戀と呼ばずと、行かずに置こか。君が見たさの鏡山」ひらぎの長が土藏作、風にも散らず日に枯れぬ、黄金花咲く松と梅、百に餘りて圍はし、二百余人の玉蔓、夕べ／＼に産出す、てゝなし金の攫取、茨木童子と名に高く、母屋は惣領太四郎が、揚屋、女郎屋親子して、鋸商ひ金銀は、鋸屑と溜りける。こゝに加藤兵衛氏綱といふ浪人有、身にも譽持ながら、未時にも粟田口、浮世を忍ぶ柴の戸に、去ぬる彌生やすらゐ花、一人娘

晴明―爲よにかく

影向―神佛の降臨ある事

戀と呼ばすと―戀は來いか、次は呼ばいでもの意

ひらぎの長―此の作の主人公にて德川の初め榮華を極めし茨木屋幸齋を寫したるなり

松と梅云々―太

苦し―繰るにかく

夕闇―いふにかく

りつかう云々―六甲六丁、陰陽道の神の名

天津金木云々―天の鉋屑天の生菅を千座置戸に一ぱい置きて祈るは中臣の祓なり

靈化―ものゝけ

れ離れては、又引寄する戀慕の綱、「苦しく〳〵」と夕闇の、空恐ろしく賤の女も、惱み臥せば玉躰も、疲れ轉ばせ給ひしを、猶も離れぬ恨みの涙、凄じかりける次第なり。義兼惟成此音に、何事やらんと馳付て、抱き起し參らせ、「是は〳〵」と計にて、驚き騷ぐ其處へ、頼光の代官として渡部の綱、阿部の晴明誘引し、一散に馳來り、綱「今夜晴明天文を考へ候へば、讓位の帝死靈の惱す天變有、と奏問し、攝政兼家公の仰によつて、則晴明召具し候。頼光は禁裏守護に候故、渡部を以て言上」と、細々と述にける。法皇叡感斜ならず、「疾く〳〵加持し申せ」との院宣。晴明右近に近付、りつかうりく〳〵ていの祕文を唱へ、天津金木天津菅そを、千座の置戸に置足はして、祓ひ申淨め申せば、忽ち慄ひ口走り、「我こそ弘徽殿の亡魂よ。君に恨みは無けれ共、平の安盛將軍職を望ん爲、右近に敎へて寃罪を云懸け、三の君の命も我取たると奏せしは、跡形もなき詐り。三の君は丹波國大江山酒呑童子といふ鬼神の所爲。疑ひ晴て勅勘許し、契りを違へ給ふな。さらば〳〵」といふ聲に、靈化は失せて覺めければ、女御の姿あり〳〵と、もとの繪像に移りけり。右近夢の心地にて、安盛が詞の工言上すれば、死靈の告一言一句違ひなし。「皆安盛が惡逆」と、逆鱗殊に甚しく、北「今宵當所に宿する由、捜し出して搦取り、頼光が心に

裸百官―百貫にかく

片し―片はし

大原のお嫁は斯共知らず、酒をもとめて歸りしが、法皇右近は亂れ髮、摑み合ひ給ふ躰。嫁「こりや何んぞ、はや女夫喧嘩か。今から其樣な身持で、此憂世帶は持れまい。王樣も王樣じや。內裏の格がこゝへは向かぬ。向ひ隣の聞へも有、男は裸百官の、上に立てば女御樣。今で申さばおか樣ぞや。女夫喧嘩所帶の毒。ア、をとましや」と云ければ、法「兎角右近は狂氣ぞや。能く計へ」との仰にて、奥へ入らんとし給へば、右「何處へ〳〵」と玉躰を、引廻し引伏て、「なふ狂氣とは世にある人。我は形も夏草の、蔭に焦るゝ螢火の、聲を立ねばそれぞとも、岩に堰るゝ岩間水、二ツにさつと打割れて、波に碎かば碎けよ」と、さめ〴〵と泣ければ、嫁「是おか樣、何んじや割ての碎いての、二ツにも三ツにも鍋釜は、此方の割ても私は構はぬが、世帶の毒とは其處の事。擂木一本箸片し、只は出來ぬ錢が入る。但彼の王樣の細工に見事遊ばすか。假令それでも勿躰ない、王樣の擂木は握らりやせまい」と喚きける。右「いや愚なり。戀路には王位とても隔なし。現世の位は未來の仇、心に思ひ身に忍び、口に戀しと焦るゝも、身口意業の三業の、其三業を知らずや」と、縋付は、嫁「なふ悲しや。三ごうとは糠の事か。糠三合持たらば、入聟すなとは男の事」右「是は女の一念の、其玉蔓這纏はりて這懸り、遁れがたなや遁さじ」と、寄ては離

殿は三の君の敵なりと也

忽ち―立ちにかく

右近の橘―紫宸殿前の橘と五月待花橘の香をきけば云々の歌とかねて云へり

驪山宮云々―唐の玄宗帝楊貴妃と住まれし所

飛鳥川―親疎常なき喩

法皇誠と思召、大きに驚き逆鱗あり。「存生にては妬なく、賢女貞女とつくりなし、臨終にも異女に思ひ忘れて慰め、と能も〳〵も僞りし。戀も想ひも覺め果たり。釋迦牟尼佛も聞給へ、三世の契是迄。世々永劫の勘當ぞ」と、繪像を取て投げ給ひ、「是に付ても三の君が最期の心不便やな。形見には右近の前、閨へ來れ」と打萎れ、入御成こそは是非なけれ。右近繪像を取上、佛壇に掛置て、右「去とては情なや。お爲に成と有し故、教への通は申せしが、死したる人に無き名を負せ、我詞一ツにて縁を切らせ勅勘有、恨みを許し給へ」とて、涙を流し侘けるが、不思議や繪像動ぎ出、身の毛もぞつと忽ちに、地絹を離れ形を現じ、「右近とやらん慥に聞け、生身の寃罪も辛からずや。科なき骸に勅勘受、寃罪に妹脊の中絶へし、思ひを思ひ知れや」とて、懐に飛入と思へば、「うん」と魂切って、我ならなくに我心、弘徽殿と入替り、右「姿は右近の橘の、昔の契りは忘れじもの。彼の驪山宮長生殿のさゝめ言も、君と我中にあら〳〵、あらがねの七重の鎖は切る共縁は切らじ」と手を延し、引ば引るゝ御切髪、亂れ引れてよろ〳〵〳〵、よろぼひ柳氣力なく、風に揉るゝ御有樣。天に引立て地に引据へ、「君が心は飛鳥川、我は三途の波枕、朽る世迄は朽せじ」と、三界六道つき廻る、足弱車くる〳〵〳〵、苦しみ給ふぞ哀成。

お主の敵—弘徽

ませふ。こんな時には兎角酒、酒は情の露雫」德利提て出にけり。右近は猶も差俯伏き、君も何を打付に云懸給はん詞もなく、弘「盃には嘸踊りつらん。踊が好な貌付じや。京と違ふて踊もなき、此山里の淋しさは、住憂からん」と宣へば、右「いゑ〳〵物靜な御住ゐ、お殊勝な佛樣、私は是が好き。此方なは釋迦樣、彼の繪像の佛は何と申ス佛やら、悋氣深いいたづらそふな佛樣じや」と云ければ、法「ヲヽあれこそ丸が涙の種、弘徽殿がおも影よ。位も身をも捨たれど、契は思ひ捨られず。囘向をなしてくれよ」とて、御涙にぞ暮給ふ。右近も憐れを催ほせしが、右「ヤ忘れたり安盛の云敎へ、此處の事ぞ」と思ひ出し、「ヤア弘徽殿の御影か。なふ怖ろしや凄じや。夢幻に見たとは違ひ、容貌は美く魂は蛇身。見るも怖や」と迯惑ふ。法皇驚き、「こは何事ぞ。子細を申せ」と宣へば、右「さればこそ此間、或時は夢に見へ、又幻に顯はれ、「弘徽殿が怨靈なり。汝君へ召る筈、妬しし腹立や。三の君を取殺し、あら嬉しやと思ひしに、をのれが枕を竝べんとや。思ひも寄らず叶ふまじ。君に近付女あらば取殺し〳〵、日本國の女の種、枯野となして絕やさん」と、鬼共蛇共讐へなく、追廻さるゝ其苦しさ、身につまされておいとしや。三の君の御最期迄、思へばお主の敵ぞ」と、安盛が敎への通、違ひなく〳〵語りける。

上置なし―雜物なし

夢物語―獄の夢にあらずして弘徽殿の愛を殺がん爲安盛の作りごとなり

等が若い時分は、祕密口傳も入たれ共山家の奧の奧迄も、今の娘は一人食み。五日歸りする迄は、朝晩のかき鱠、お汁には何なりと尾鰭の付た燒物。尤飯は上置なしの生飯なり」と云ければ、花「扨も目馴れず聞馴れぬ、佗たる賤が物語、聞も山家の珍しさ」と、叡感限りなかりけり。はや安祥寺の入相の、音羽の峰に夕づく日、傾く笠の女姿、平の安盛同道にて、御庵室に伺公し、安「かね〴〵奏せし中納言高房が養子、右近の前御宮仕へ」と奏すれば、義兼惟成出迎ひ、「能ぞ〳〵。此方へ」と笠を取らせ、引繕ひ玉座に近づけ、安盛も同じく御前に伴はる。安盛憚る處なく、「三の君の身の果余り本意なく、責ての由縁と此女を御宮仕に奉る。叡慮にも叶ひなば、御恩賞には鎭守府の將軍職、偏に願ひ奉る。是右近の前、日比怖や恐ろしやと、怖恐れたる夢物語御咄申上、弘徽殿に負けまじ、と隨分お氣に入給へ。後程御機嫌伺はん」と、御前を退出し、旅宿へこそは歸りけれ。右近は稚き時よりも、公家奉公は馴れたれ共、王位に押され身も慄はれ、顏に紅葉の秋津君、共に御心恥かしく、御詞もあらざれば、義兼惟成氣毒がり、「サア此處らが男の困り物。お嫁どふぞ御挨拶、萬事は賴ふだ任せたぞ。我々は花山寺の和尙の方へはづすぞ」と、表へ出れば、山「ヲヽそれ〴〵跡は私が請取た。先は閨の御盃、酒買ふて來

おきよ所—御臺所

九十六の云々—德川時代に九六百文とて九十六文を百文に宛てたれば此舅の年も實際九十六なれども百としていふ

まなび—眞似

醪—濁酒

躰なや。親祖父代々おきよ所へ柴入た冥加の爲、薪は嫁が續けませふ。何程お位高ふても借錢には勝れぬ。本の位倒れじや」と、涙を流すぞ殊勝成。義兼、惟成打笑ひ、「いや〳〵左様の事ではなし。あれに御座なさるゝこそ今迄の帝様。御髪切らせ給ふ故、花山の法皇と申奉る。其方が心ざし叡感なり」と有ければ、「アヽ有難や」と手を合せ、山「其えいかんとは私が舅。九十六の錢百で一昨年死なれ、戒名はせいよう永久」と語れば、君も堪兼てどつと笑はせ給ひけり。兩人重て、「今宵君の御慰めに女中一人參らるゝ。御祝言のまなびしたけれ共、我々は男勝手知らず。待上臈も何もかも、萬事其方を頼む」とあれば、山「アヽつがもない。内裏様の嫁入とは、御所車の御入内一度拜んだばつかり。作法は夢にも知らぬはにや」二人「いや〳〵左様の儀式でなし。此御住居の事なれば、祝ふてざつと形計。其方達が嫁入と同然に入用の物調へて、御挨拶も申てくれ。平に〳〵」と頼まるれば、山「それならば安い事。八瀬や大原の嫁入は大躰祭同然。酒は醪の手作り。高野川の鮎の鮨、干梭魚の挘物、芋と蒟蒻煮〆て、三種の肴が入ますする。落付はお雜煮、餅は大方一人前、三升當に搗たれば大概に往渡る。冬なればさつぱりと洗濯衣著も入けれど、暑い時分は是が德。青柴一把燻れば蚊帳釣らずの新枕。閨の中は其身の氣轉。私

菜摘み、名聞離れし御遁世、戀故とこそ哀れなれ。義兼惟成御前に出、「内々平の安盛申上し高房が召使、右近と申腰本、三の君に似たるよし。則高房猶子となし、御徒然をいさめん爲、安盛今宵御庵室へ密に伴ひ申さん由申越候。若き女の男の中、女の連も候はでは、初々敷も頑にて、却而不興と存れば、京の御所より女嬬かおするか一兩人、呼び候はん」と申上れば、花「いやとよ王位を振捨て、内裏を出て世を遁れ、左樣の音信、都の譏り世に煩し。右近とやらんが伴ひには、此山科の里人、土民の妻子、賤の女にても密に語ひ、何方へも漏ぬ樣に」と宣へば、「アヽ誰をがな雇はん」と、二人談合取々の折に、折焚く柴付馬、あの山越へて此山賤が、「八瀨や大原木黑木束木、柴召され」とぞ賣にける。惟成見付て、「なふ義兼、あれは御所へ柴入るゝ朧の淸水のお嫁でないか。何と今宵あの者を賴むまいか」義「是は幸。柴買はん柴買ふ」と呼入れば、山「あい」と答へて内に入、不思議そふに顏を詠め、「是は〳〵見た樣なと思ふたら、京の御所でさい〳〵見た御公家樣達じやはにや。誠に聞ば上樣も内裏をお出なされて、お位は宮樣へ參つたと申が、爰に隱れて御座りますか。何暗からぬ王樣の、宮殿樓閣打捨て、私等が住居同然に御内の衆も無さそふな。是は先如何した所謂。お借錢がな有てゞあろ。御不自由を推量して、おいとし樣や勿

佛―釋迦

初々しく―物馴れぬ窮屈

女嬬―こしもと

おするー下女

朧の淸水―大原にある名水にて其邊に住む大原女

じやはにやーじやはいなあ

准三后—大皇大后皇太后皇后の三宮に准する祿を賜はる人

任槐—大臣になること

こもう—虛妄

雲井の云々—禁中におはせし花山帝も位を去りて田舍に引籠り給ふ

主殿司云々—端午の節句に主殿司を勞せずとも自然に菖蒲は檐に葺かると也

主水司—井水氷室などを司る役

何か違背申べき。歎きの中の悦び」と泣々お受申さるゝ。安盛悦び、「早速の御承引我等迄の大慶たり。扨右近に申含むるは、君は今に弘徽殿の事のみにて、外へ御心移らねば、御身をお寢間へ召す事は難かるべし。随分弘徽殿を悪様にいひなし、三の君を失ひしも、嫉妬の恨に弘徽殿の死靈のわざ、夢に見ゆる目に見ゆると恐ろしそうに申されよ。時には君も愛想つき、弘徽殿を思ひ切、御身の腹に若宮の御誕生も有時は、其身は則准三后。高房卿も任槐有、此安盛も鎭守府の將軍。第一君の御爲方便の僞りは罪にあらず、と佛さへこもうの御法を説き給ふ。世間忍びの山家の御所ひそかに迎へ申べし。悲しき跡は悦び有。各の末繁昌」と跡先しめて辯舌を、飾る詞の花の山、「花山の院へと三重分入し、雲井の月も山賤の、軒端に曇る御住居。松の柴垣竹の簀戸、錦の褥引替へて、苅穂の庵の草筵。主殿司の菖蒲草、葺ねど軒に生茂り、主水司の初氷、佛の閼伽と砕かれて、曉の鴈夜の鹿、何れ哀れの種ならぬ。西の一間は御佛殿、弘徽殿の繪像を掛け、中尊は釋迦牟尼佛。帝「佛も我も十九歳。それは衆生濟度の道、是は戀路の闇に入、猶三界を出やらず。佛は心穢しと、嘸見給はん恥かし」と、懺悔に絞る花衣、苔の袂と朽にける。參り仕ふる者とては、中納言義兼左中辨惟成ならで、下部の一人も置れねば、二人水汲みあさ

おふし立—育て上る
石な取—子供の戯お手玉
振分髪—童男童女の髪を左右に振分けて垂れたるもの
世をすて人—世を捨てにかく、捨人は法師
猶子—義子、兄弟之子猶ﾞ子より出づ

とはり。火葬は骨、土葬はからだ残れ共、變化に揃られし三の君、兄弟とてもあらばこそ、何を形見に慰まん。おことも姫も同い年、雛遊び石な取、振分髪より中よしで、主從の樣にはなかりしぞや。今日より我々養子にして、姫が二度歸りしと云てなり共樂まん。おことも父上母樣といふてくれよ」と泣給へば、右「いや御歎きは同じ事。髪をおろして姫君樣御菩提を」と計にて、夫婦主從縋り付、聲も惜まず泣給ふ。物の哀の至極なりける、所に常陸の介平の安盛、「公用によつて高房卿御夫婦の内意を得ん」と案内す。高「忌の内にも公用ならば先此方へ」と請ぜらる。安盛頓て對面し、「今度は不慮の御仕合言語を絕し候。それに付忝も帝には、弘徽殿の御歎きに又三の君迄失せ給ふ、いやましの御愁嘆。浮世の無常を思召し、十善帝位をふり捨、先月廿二日の夜、貞觀殿の小門より王宮を忍び出、山科の花山寺にて、世をすて人の御有樣。花山の法皇と申奉る。され共御息女の事猶忘れさせ給はず、右近と申腰本御息女と同年にて、御恰好も似たる由叡聞に達し、三の君と思召御座近く召れたし。貴方猶子として上られよとの院宣なり」と陳ければ、夫婦「あつ」と頭を下げ、「有難や冥加なや。今も今此者を娘が形見我子にせん、と申慰む折柄

一とこ—一つ

くれ」と泣きければ、保昌、渡部縋付、「假にも天子の御使、勅書懐中せし者に、足を當ッるは後日の越度。あやまるからは許してやれ」と、漸にもぎ放し、公「サア歸れ」と引立る。命拾ふて安盛は、足早に立退しが、立歸つて大音上、安「宸筆勅書を持たる人には、三公だにも下馬する作法。頼光が郎等共勅筆の御文を土足にかけて踏だる事、只今直に奏問す。詞をつがふた諍ふな」と云捨て引返す。公時其頤引裂んと飛でかゝるを、綱保昌、「洛中變化の騷動に取混て事喧し。先づ鎮まれ」と制すれ共、公時は「只た今夜食を喰ふた食こなし。變化も鬼神も悪人も、一とこに仕廻ふ」と駈出る。二人「止まれ留まれ」公「いや放せ放せ」二人「留まれ」取々の、雞の八聲や鐘の聲、夜はほのぐ〵と茜さす、公時が顏朝日の色に、つれて御所へぞ上りける。

第二

心の底の悲しさを、涙の外は知る人もなき俤は忘られず。三の君の父母夫婦の御歎き、未だ生死は知れね共、失なひし日を命日と、廻向追善今日も又、墓參りして歸らるゝ。御供の腰本はした迄、憂に沈む其中に、右近と云は姫君と同年にて、殊更中よく手習糸竹

ほらし―光らせ

ぶうぶう―ゆすりもの

いはれぬ處―用なき處

いさめん―和げ慰む

公時、例の大太刀前下りに指ほらし、のつさのつさと步み來る。安盛「はつ」と色違ひ、肩身を萎め軍兵の、中に屈んで隱れけり。公時は橋板も踏拔く計立はだかり、公「只た今迄此處に平の安盛が見へたが、搔消す樣に失たるは、是も變化の所爲成か。變化を切るは綱が得物。又人間のぶうぶうをひねり殺すは此公時が好物。何處へ失せた」と睨廻し、公「ヤア其處にか。是此處へ御座んせ盛樣。それは譯が惡いぞゑ。怖い事はないはいな。御座んせなあ」と小手招き、鬼の痴話かと氣味惡し。安盛怖々ながら、「左いふは坂田の公時な。我は天子の御使、下郞の傍は穢はし。云ふ事あらばそれから申せ。いはれぬ處へ出しやばつて、側杖に逢ん不便や」と、慄ひ慄ひも口減らず、公時堪らず暴出て、前なる軍兵引摑み、取ては投投、安盛を中に引立引摺出し、欄干にどうど打付々、公「やい嘘付め、綱が討手の勅諚とは、何の王樣の勅諚じや。日本の王の仰でないは只た今、賴光禁中で聞れた。大騙のもがり奴。此公時は閻魔王の勅諚にて、をのれらが討手に向ふた。地獄で手間の入ぬ樣に、粉に碎いてやるべし」と、元首押へて胴骨を、「ゑいやうん」と踏付踏付さいなめば、安「ア、痛や苦しや、許してたも公時。僞りとは云ながら、帝戀慕の御歎き、いさめん爲の忠節。諍據は此處に御文も有。去とては過つた。許して

口舐づり―甘い甘いと口を動かすさま（脚源抄）

鳴る騒ぎに綱保昌、あはやと驚き駈付見れば、乳母が死骸乗物も、散々に引捜し、三の君はましまさず。漸堤を呼び助け、事の様を尋れ共、變化の所爲か力に及ず。「無念々々」と計にて、言舌正しからざりけり。綱は怒つて歯ぎしみし、「エヽ口惜しや保昌、是は羅生門の執心残つて、我に恨みを爲しよな。微塵に碎いて捨んず」と、天を睨み大地を踏み、身を揉み猛り廻れども、翼なければ虚空も飛れず、怒れる眼に怒りの涙、嶺の夕日に夕立の、雨を濺ぐが如くなり。斯る處に平の安盛、平家の一族五百餘騎、橋の兩岸追取巻、朝「やア／＼それ成は渡部の綱、宣旨なるぞ承れ。高房の娘三の君、帝より召るゝ處、遮て是を押へ、剰へ失ふ段、朝家を輕しめ奉る罪科によつて、搦捕て參らせよとの綸言。違背に於ては首討て梟せとの御事なり。恥を思はゞ腹を切れ」と、弓杖突てぞ呼はりける。綱はにつこと打笑ひ、「やれ／＼嬉しや。相手欲しう思ひしに平家の大將安盛とや。それこそ綱が口舐ずり。變化より先をのれを」と、跳出れば保昌、「やれ待て渡部。平家にもせよ敵にもせよ、宣旨とあれば勅使なり。上へ對する朝敵と云れては一大事。先穏便に引取て負て勝つ思案もぞ。靜まれ」と制すれ共、綱「いやいや聞ぬ」と斷出る。安盛は勝に乘、「縛れ括れ」と下知をなす。三方論議の眞中へ坂田の

不覺—不調法

水かう—水を吞ます

戻り橋—一條堀川に在り、戻るにかく

召具—召具する

と、飛んで出るを押留る。若黨共口々に、「たつた今少將殿より、貞も衣裳も寸分替らぬ花垣殿姫君を迎取、此方よりも堤の彌三付て送られ候處、又只今の御迎旁不審に候」と、いひもあへぬに保昌「はつ」と膽を消し、「チヽ是は渡部せくも道理。疑ひもなく安盛奴が、花垣に能く似たる人をかねて拵へ、深き工と見へたれば、卒爾にては此方が天子に敵對、賴光の御爲ならず。堤の彌三が付からはさまで不覺も取まじきぞ。心を靜めて追かけん。此保昌が加勢ぞ」と、人數の手配り手を合せ、水かう馬の轡を、竝べてこそは 三重 打せけれ。堤の彌三忠時は、乘物守護し行空の、春雨連りに風落ちて、雲の脚さへ定めなく、南北に飛び東西へ戻り橋に著けるが、黑雲道を遮つて雷火電光震動し、前後を忘じて立たる所に、迎と見へし者共の、或は一角一眼、又は三目八ッ臂の鬼形、枝有角に赤頭、火焰の如く見ゆるもあり、異類異形の鬼神となつて、乘物蹴破り姫君を引出さんとする所を、「南無三寶」と堤の彌三、打物拔いて切拂へども、雲霧に眼も暗み腕弱り、切ても突いても水を切、風を切が如くにて、踏もためす欄干に、吽と云てのりかへれば、召具の者共たまりゑず、左手右手へぞ伏しにける。乳母「是は」と取付を、二つにさつと引裂て姫君を引摑み、惡風吹かけ炎を降し、虛空にどつと笑ふ聲、雲に殘りて失にけり。雷

あをり打立ー是より以下普通の七行本と文句違へり、次の「第二」の初めも異れり

雜掌ー雜事を辨ずる官府の卑職

腹巻ー鎧の一種にて草摺七枚あつて袖なし

駕輿丁ー駕籠舁

弓矢八幡ー誓の意にて間違なく

まだ〳〵とーぬく〳〵と

事。然らば我は駈付ん。先姫君を奥へ入ずる分大事にかけ申せ。必人に逢すな。渡部の叔母が又來た共、毛の生へた鬼の腕、姫君には一本もなし、と答へ」と戯ふれて、あをり打立ち走らする。渡部は姫君を奥に請じ、門々を猶も嚴しく、篝挑灯星の如く、聟君の迎の輿今や〳〵と三重待程に、小夜も漸更にけり。やゝ有て表門忍びやかに音信るゝ。「どなたより」と答ふれば「鳥飼の少將さねかぬが雜掌花垣權の守、保昌殿の御内意によつて三の君の御迎ひ。儀式の車は追而の沙汰、先御乘物取あへず」とこそは云いれけれ。待まふけたる家來共、門を開き入ければ、綱は悦び姫君を聟殿へ渡せば、花「珍重氣遣なしと兎角しつらひ乘參らせ、乳母は輿に引添ふて、堤ノ彌三主人の代、腹巻打かけ四邊を守護し、迎の諸太夫駕輿丁と共に、乘物引立て飛ぶが如くに急ぎける。五六町も行きつらんと思ふ所へ、保昌大勢引具して一文字に乘歸り、保「少將殿の雜掌花垣權の守、輿を持たせて御迎に同道せり。とく〳〵姫君渡されよ」と、勢ひかゝつて云ければ、綱は大きに驚き、「弓矢八幡安盛奴にたばかられ三の君を奪はれし。天が下にて此渡部を出し拔て、片時も生て置べきか。摑み挫いでくれんず」と、踊り出るを保昌捕へて、「こりや物に狂ふか渡部。子細を語れ」と留むれ共、渡「いやまだ〳〵と阿房らしい。咄さるゝ事でなし」

如在なし—愚なし

ひけ—よわみ

さんさ云々—歌詞にていかにも如在ないの意

引籠り、出仕をさへ仕らず。殊に常陸介安盛と源平武勇を勵む時節、不覺の批判受け候へば、源家の油斷と身を愼み、御祝言の御挨拶日限迄も延引。追付首尾なし申べし。聊か如在是なし」と、云も敢ぬに、三「アヽをきや〱。如在なしとは云れまひ。自らは弘徽殿の女御樣に似たとやらん叡聞にて、未だ祝言せぬ内に、大内へ召されんとて、平の安盛お使只今館へ來る故、我も乳母一人連れ、やう〱と迯出たり。今宵の内に嫁入せねば、明日は内裡へ召さるゝ筈。其褒美には頼光の官職を削り、安盛を鎭守府の將軍になさるゝ由。我々思ひかなはぬのみか、源氏のひけといふ物よ。斯る大事のありとも知らず、傍輩喧嘩の保昌も保昌。是は如在で有まいか、いや油斷では有まいか。如在ない〱と、口で計は小共もいふ。歌さんさ如在は御座らぬゑ。歌にも謠ふ聞きやらぬか」と、恥しめ恨み給ひける。保昌横手を打て、「何んと渡部、姫君のお咄しは正八幡の御託宣、遲なはる處でなし。思案は無いか」と云ければ、綱「ヲヽ思案と云て、姫君を鳥飼殿の御館へ、入申ス より外はなし。御分と我との諍は、根も葉もない内證事。お手前頼む、少將殿へ參つて片時も早く迎ひの輿を賜るべし、と申てくれたら滿足せん」と云ければ、保「ハテ此上臈を内裡へ上ゲ、安盛めに威を付ては我君の御恥辱。何れも我身にかゝつた

寶鐸—檐に吊せる大鈴
那由他云々—萬億の寶鈴、(上生兜率經)
瑤珞華鬘—寶玉に作れる身の飾と女の首飾
阿吽—口をあきたる仁王と口をとぢたる仁王、阿は開口の音吽は合口の音
ひんぬき—最も秀でたるもの

ん。此世に譬ん物はなし。保昌は古兵、太刀損じては悪かりなんと、するりと抜て帯取を、ふつゝと切て切放し、馬乘放しすつくと立ば、綱は鞘を持ながら、塀の上に突立て、睨み合ふたる頬魂、阿吽の二王に異ならず、悽じかりける勢ひなり。龍虎と挑む其中に、段模樣の染被、供の女が頬冠、御所のひんぬき二人が中へ、怖氣もなくしやんと分入る追風や。茨の枝に初花の、一輪咲たる如くなり。兩人怒つて、「ヤア誰か有。此女引摺退け」と睨付れば、被押除け、女「なんと渡部久しいの。其方は音に聞保昌の。我こそ中納言高房が娘三の君。是渡部、其方は武士か侍か。鬼の腕は切りやらふが侍とは思はれぬ。鳥飼の少將殿と自が祝言は、跡の廿八日とは媒介した其方の極め覺えが有ふ。一日も二日も手前から、萬事取持肝煎は、媒介の役ならずや。今日で十日に余れ共、何の便宜音信なく、父上は腹を立、使を越しても門を閉ぢ、取次者もないと有。コレ世間の娘に問ふて見や。十六七になつてから、嫁入を急ぐか急がぬか。急かぬ娘があつたらば二つ共ない首賭。少將樣も若い殿。駈出る馬を駐める樣にお心も急ふし、我も思ひの溜水、身も涌出る池水に、人目堤の切口は、いかな止めても押へても、「思ひ流すに流されず。サア返答聞かん」と仰ける。渡部も至極に詰り、「御尤千萬なり。去ながら東寺羅生門の變化を討、三七日の物忌に

歌人—前に僧正遍照の歌詞をうけてかくいへり

まつかう—鬼が我兜の眞額を引きし如く我も先づ斯ろこそ引けと也

丈山云々—常山にてその山に兩頭の蛇ありて巧に敵を惱ます事(孫子)

帶取—佩刀之飾也(三才圖會)

諸漏已盡—諸漏已盡無復煩惱名阿羅漢(金剛經註)

ぬ」と、引返して駈出る、太刀の鐺を渡部塀越にしつかと取、「ヤア左はいはせぬ保昌。左程侮づる渡部を見廻に來たは心へず。笑はん爲か褒ん爲か聞かでは得こそ返すまじ。留まれ」とこそは引たりけれ。保「ヤアひとり武者保昌が、歸ると云を天津風、雲の通路吹閉て、天地を動かす勢ひにも、とまらば留めて見よや」とて、鯉口鍔に握添へ、鐙踏張り乘すへたり。綱「ヲヽ汝は聞ふる歌人にて、大內にての花盜人。華奢風流の口吟み、辯舌は利いたり共、鬼神を取挫ぐ渡部との力づく、少と慮外」と夕闇の、「羅生門にて、我兜のまつかうこそは引たれ」と、しやくつて引けば保昌は、振放さんと捩り引。綱「留まれ止まれ」のうなり聲、保「かなはじ物」と怒る聲、磯の松風岩打波、兩頭の大蛇が丈山の山の腰、きり〳〵と卷締て、頭を竝べ引合ふも、是にはいかで違ふべき。兵庫鎖の白銀作り、筋金ひる金鎬の金、返り栗形裏がはら、中はいか成名作の、干將莫耶御座んめれ。鞘と一つに糾交の、繩になさんと左へ捻ぢ、卷れじ物と右へ捻ぢ、ゑいや〳〵の力聲、太刀の帶取寬ぎて、飾の金具搖ぎ出、からり〳〵からり〳〵と鳴る音は、諸漏已盡の大阿羅漢、神通力を試さんと、須彌山を動かす時、色界に風起り、四王忉利の大伽藍、百億の寶鐸、那由他の羅網、八萬恒沙の瑤珞華蔓、雲井に散て鳴渡り、響き渡るも斯くやら

九泉―黄泉にて死後迄も也

腹筋や―笑の甚だしき時腹筋がよれる故云ふ

昌用が有」と、聲をかけて渡部、塀の上に突立上り、「ヤア珍らしい保昌。御邊と某御前にての爭ひ故、其夜羅生門にて鬼神の腕を切たる事、定て音にも聞つらん。三七日の物忌過ば、鬼の腕を御邊が頰へ投付んと思ひしに、口惜や腹立や、化生の業は力なく、やみ〳〵と奪取られ、渡部程の武夫が、鬼神退治の證據を失ひ、表裡者の名を取らん、九泉の恥辱詮方なし。人間業にて此無念、晴さん事かなひ難し。某も腹切て、共に變化の鬼神と成、二度腕を取返し、御分が眼に晒すべきぞ。能い處へ能ふ來たナア。渡部の綱が腹切を能く見置て頼光へ御物語仕れ。今生の對面是限り。生を替て茨木が腕取返し逢ふべきぞ。必〳〵其時に變化と思うて吃驚すな。昔のよしみに取て嗤もとは云まい」と、飽迄に廣言し、既に刀に手をかくれば、保昌大聲上てかゝら〳〵と笑ひ、「やれ腹筋や腹の皮。鬼の腕を切たるが何程の高名ぞ。それを手柄と思ふ故、又奪はれしも恥辱と思ふ。エヽ淺ましや可愛やな。此保昌などは切たを手柄と思はねば、奪はれても恥ならず。變化鬼神を鎭むるは、禰宜山伏行法の出家の加持の數珠先にて、祈伏するも珍しからず。弓矢取身の高名は、鬼より怖い朝敵大敵を亡し、生捕分捕譽れを子孫に殘すこそ手柄とはいふべけれ。是しきに腹を切ふ背を切ふと云樣な、馬鹿侍の切腹を見て居る樣な目は持

下す事

一人武者―四天王以外の武勇者

二月―著るにかく

唐居敷―門の柱の下に敷きたる横木

初の人の詞の爭ひに、羅生門に行向ひ、茨木童子が腕切取、三七日の物忌に、門戸を閉て愼みし、武勇の程こそ由々しけれ。一人武者保昌は、綱が徒然尋んと、舍人馬添只二人、肌に腹巻二月や、空も朧の月毛の駒、門前に手綱搔繰り、「平井の保昌お見廻申。ものもう」とぞ呼はりける。門を堅めし堤の彌惣、唐居敷を飛んで下り、地に鼻を付て、堤「お出の由申入べく候へども、主人綱事、羅生門にて鬼神の片腕切取、三七日の物忌に籠り候へば、門外にて拙者承り帳に記し、一門他門共に對面仕らず。然るに一昨日渡部の叔母、久しく逢ざる懷しさ、床しい戀しいなんどとて、七十に余る身が樣々歎き恨みしを、變化の業とは思ひも寄らず、恩愛捨難く門を開き對面せしに、忽ち惡鬼と顯はれ、腕を偸んで天井より、あれ御覽候へ。あの如く破風を蹴破り、黑雲に入て失せ候。綱は是を無念に存じ、切腹のお暇申か、一期の浮沈と籠居の節。帳に留置後程申聞すべし。近比無禮千萬」と、慇懃にぞ述にける。保昌破風をきつと見上、保「ムヽウ聞しに違ひなかつしな。去ながら鬼の腕を取返やされそれが無念な口惜い、切腹せふと云樣な、不覺人の渡部に、逢ふて何の用もなし。左樣の男子と知らずして、馬の足費して、見廻に來る保昌迄不覺者と人や見ん。門に立も穢はし」と、駒引返し歸らんとする處に、「待て〱保

羅生門云々―茨木童子の腕を斬りし話劒の巻にあり

けいぼう―景望

堆高―けだかく立派

朝霜―淺くにかけて淺くして我心を迷はすな

御格子―格子を

事、上一人の善惡は下萬民の龜鑑ぞや。後代の譏りも恥しく、此世の戀さへ叶はぬな、況して冥途の人、戀しき思ひはいか成思ひぞ」と、十善天子の御身にも、世を辛しとの御述懷、戀路の習ひわりなさよ。安盛重ねて、「宣旨恐入候へ共、去ながら一夜も夫の家に入、夫婦枕を並べてこそ、主ある女とは申べけれ。未だ契約計にて、親の家を出ざる女。何條事か候べき。殊に媒介渡部の綱、羅生門の鬼神を切し愼みとて、物忌に籠り、傍輩の對面も仕らぬと承る。然れば祝言の日限も延々と覺候。これ屈竟の折柄、仕課せて參らせん」と勸め申せば、主上も「しるべ嬉しき戀の山、文通ふべき架橋せよ」と、宸筆もこま〴〵と艶書遊ばし、帝「此の度の恩賞は望次第」と宣旨ある。安盛烏帽子を地に付、「只今源家繁昌にて、滿仲より賴光まで、鎭守府將軍に任ぜられ、平家はあれ共無きが如し。此御使ひ仕課せなば、賴光が將軍職を某けいぼう仕らん。最早夜も更け候ひなんず。宿所へ歸らず、是より直に參らん」と、御文賜はり表書見れば、上々とても痴話文は、別にかはらず、「ね參る。身ゟ」と計薄墨に、御筆立の堆高さ。御文躰迄さぞ〳〵と、思ひ梨地の御文箱、蒔繪に照し桐菊の、「丸が思ひは深けれど、人は情も朝霜に、置惑はすなと傳へよ」と、常寧殿に入給へば、主殿司の宿直守、御格子參る。三重 扨も渡部の綱は、假

三千云々—長恨歌にある句にて恒子の寵を專にせる形容
嫉草—他の女より妬を受ける
南殿—紫宸殿
萩の戸—淸凉殿の西東
普天云々—陸地のある限王土なり、「普天之下莫非王土」(詩經)
いざとよ—いさとよにていやいや

中思ひの種ぞとて、晝は夜のお殿に御涙を友とし、夜は南殿の月に御心を傷しめ、歎かせ給ふぞ痛はしき。折節帝は萩の戸の、御階にすご／＼下りさせ給ひ、「人やある人や有」と召さるれど、宿直の公卿も程遠く、御應へ申人も無かつし所に、常陸介平安盛、瀧口に候ひしが、「安盛」と勅答して御庭に跪く。帝「近ふ／＼」と間近く召され、「汝は武士の身なれ共、桓武天皇の御葉末、雲井を出て遠からず。物の情は知るべきぞや。弘徽殿に露程も、俤似たる女あらば、尋出して我思ひ晴せよかし」と計にて、又御涙にくれ給ふ。安盛謹んで承り、「さん候。中納言高房が娘三の君は、顔容志操迄、弘徽殿に見かはす計似たる由、御所中の取沙汰、叡聞にも達し參らすべし。此比承れば鳥飼の少將、彼の三の君を戀慕ひ、源の頼光が郎等渡部の綱を媒介に頼み、近々に婚禮取結ぶとは申せ共、普天の下王土に住んで、勅諚と申さんに、誰か違背仕らん。安盛不肖の身なれ共、御文一ッ賜はつて彼の姫に與へ、父母に申聞せなば、今宵の中に伴ひ參り、弘徽殿の御忘れ草、宸襟を安め奉らん」と、忍びやかに奏すれば、主上仰有けるは、「いざとよ三の君が弘徽殿に似たりとは、豫て朕も聞しかど、渡部の綱が媒介にて、鳥飼の少將にまみゆるとな。然れば主有女ぞかし。讓位の後は例しも有、在位の身にて正なき

傾城酒呑童子

第一

作者　近松門左衞門

千度云々―遊仙窟に張文成が十娘に契りし時の樂を述べて「千看千意密、一見一憐深」
日々に云々―同じく別れし時の怨「日日衣寛朝朝帶緩、涙臉千行愁腸寸斷」衣寛帶緩は身體衰痩せるよ
潘安仁云々―美男子にて同書に文成の契りし崔女郎は潘安仁の外姫とあるを態と外甥として帝の美貌を讃せり
後きやう―後宮か

序詞 千度見れば千々の想きびし、一度見るに一つの面白い事深しとは、張文成が仙女に契りし詞、日々に衣緩び、朝な〳〵に帶緩ふ、悲しみの腸きざ〳〵にたつとは、文成が仙女に別れし恨み、天上下界猶戀慕の圍を出ず。況んや心を種として、和歌に和ぐ日の本の、色香に染める梅櫻、花山の帝と申こそ、雅か成御本性。艶かなる御形、潘安仁が母方の甥にも譬ふべかんめれ。女御後きやう數多さぶらふ其中に、大納言爲光が娘恒子の姫、一朝に選ばれ弘徽殿を御局にて、比翼連理の御語ひ。三千の寵愛只一人、六宮の粉黛も色を失ふ日蔭草、其嫉み草身に生ひて、ついに病の床の內、短き夢と消え給ふ。帝不覺の御歎き、朝政したまはず、雲の上何となく忌々しげなりければ、月卿雲客せめてはと、弘徽殿の御姿、繪に寫して奉る。形はありしに似たれ共、物云はず笑はず、中

結緣—佛に緣を結べと也

て討死し、此御恩報じたや。三寶佛陀も憐みたまへ」と、聲を上げて泣ければ、滿座の諸武士感涙し、鬼を欺く朝比奈も、「浦山しや時宗、果報ものよ時宗。有難の我君や」と、すゝり上〳〵、涙の中の悦びは、道理とこそ聞えけれ。和田秩父、千葉上總、「心あらん者共は繩に手をかけ結緣せよ。御立ちぞふ」と呼ばはれば、御門に控へし虎少將、母を誘ひ走り入、君を禮し時宗が繩に縋つて悦び泣。門にお馬のいばふ聲、假屋の木戸も明七つ、谷七郷の鎌倉へ、目出度還御なされける。今日一日の十二時、今日一日の十二時、今日一日の十二時〳〵、つもり積つて百千年、盡せぬ源氏の繁昌こそ、民安全の國土なれ。

一引が云々—一引が萬僧供養といふを反對にいふ、常流小栗判官の句を取る
ずんぼろ、ねつたい—坊主頭を罵っていふ詞
長助—寺男の通り名
譬あれば—譬ふれば

たた」與「ヲ、痛い筈。一引が千僧供養、二引が萬人の物笑ひ。鳥の毛を引く芥子の花もぐ、ずんぼろ坊主、ねつたい坊主鉢坊主。是がお寺の長助」と、笑ふてこそは追立ける。時宗五郎丸を引起し三間計取て投、「申こととも是限り。今生に用なき男サア寄て縄掛けられよ」と、後手に成て待ければ、雑式共はや縄持て立かゝる。與「ア、暫し〳〵」と御聲を懸け給ひ、「日本無双の兄弟助け置たき者なれ共、兄祐成が討れし上は、助かれといふ共よも助からじ。頼朝が父義朝を討たる長田の庄司めが首、討たる時の嬉しさは、平家の一門が首百千にもかへざりし。彼等が今日の心の悦び命の何か惜からん。國の憲法是非もなし。鷹が岡へ引出し、今生の暇取らせよ。去ながら一騎當千の兵、雑兵に縄掛けさせんは、弓矢の冥加も恐れ有。頼朝が縄掛けん」と、忝くも御大將白洲に飛おり、眞紅の房打たる御鎧の總巻取て押たぐり、與「頼朝が右の手には西三十三ヶ國、左の手には東三十三ヶ國、六十余州の力を以ァ懸けたる縄ぞ。恨むるな」とお聲の内よりも、時宗「わつ」と聲を上、「なふ伺公の大名小名、秋津島を海に譬あれば、雫程もなき、數ならぬ時宗が、親の敵討ずんば、日本の大將軍、頼朝公の御手より縄を受、斯る情の御詞を聞べきか。父河津聖靈、先立し祐成も、いか計悦び奉らん。哀今一度生れ替り、御馬の先に

剃りこぼつ―僧になして也

たか。よしない口を聞手間で念佛申せ」と冷笑ふ。五郎くつ〳〵と吹出し、「心有て懸つた繩おのれが力で懸けたとは、躰より口の廣ひ奴。とても死んづ命、よしない力身なれ共、時宗が僞りと君の思召、諸大名のさげしみも無念なり。おのれが力に搦められぬ證據、是見よ」と、筋骨に氣を込一搖搖つて、「ゑいやうん」とはつたる、高手小手の繩ふつゝ〳〵と切れたるは、三歳の童が燈心切より易かりける。飛懸つて五郎丸を、膝の下に取て引伏せ、時「ヤア夜前おのれが力にて搦めたが定ならば、ま一度御前で搦めよ」と、胴骨を膝節にて、ひしげて退と押ければ、聲は出ず兩眼に溢す涙は雨やさめ、油をしめる如くなり。斯る所へ朝比奈の三郎、小猫を提たる如くにて、京の小四郎が細首撮んで駈來り、御前にどうど打付る。頼朝御覽じ、「己は親兄弟に逆ひ、敵に組せし無道者。此世に祐經が居ぬからは未來へ參つて奉公せい。それ〳〵暇」との給へば、時宗謹んで頭をさげ、「明かなる御政道、先達し祐成さぞ有難く存べし。去ながら胤こそ替れ兄は兄。命召されんをまざまざと、見て居んも不仁の至り。助命願ひ奉る」と思ひ込で言上す。頼「時宗に免じ命は許すぞ。剃りこぼつて追拂へ」「承る」と朝比奈「剃刀も刃物の内。おのれに當てるは穢らはし。義秀が手剃刀戴け」と、髪くる〳〵と手にから巻き、一引ぐつと小「あ痛

はりに—頭ばりにて鼻端のみ強きをいふなるべし

きれもの—權者にて當時の巾利

生れた跡云々—事終りし後に騷ぎ立する諺

郎威丈高に成、「ヤア御尋も無き口上だて。時宗言上する事有。耳を澄まして能く聞け」と、御前の方を振仰き「恐れ多ャ申條にて候へ共、弓馬の家に生れて、親の敵を討候事、僻事共狼藉共よも御不審は候まじ。只今召出されしは御所の假屋へ討入りし御咎候な。時宗も好む所には候はねど、折合ふ兵頭はりに迯足強く、一人も手に立者候はず。御所の内にはよき武者ぞ宿直仕つらん。功有る武士に出合ひ、討死せばやと奥深く切入候所に、扨々當代のきれ物は化物と功成武士。いぜん我君討て出させ給ふ音。年にも足らぬ大友の一法師が、御物の具に縋つて、「曾我兄弟鬼神なれば迚、御手を下されんは源氏の御恥辱。殿原に仰付られ候へ」と諫言申を遙に聞、しほらしや優や、流石大友の家の惣領。哀此一法師が手に渡り討死せばやと存所、是成五郎丸薄衣被き「取つた」と云ふてしつかと抱付し、頭付は童成。「是社一法師ござめれ。望所」と嬉しく、易々と搦られ、今の千悔万悔。おのれとだに知つたらば、蹴殺して捨ん物。よし〱申て詮なきこと。疾疾首を召さるべし」と詞涼しく言上す。五郎丸聞もあへず、「ヤア生れた跡の早め藥、口計の廣言いふな〱。既に我手に入たる時、一代一世の力を出し、もぎ放さんと足手をもがき、許せ〱と大聲上て吠へたれ共、恂り共動かせず、取て引締め繩懸けたを忘れ

はつき〳〵―へきん〳〵と

寐所―寢所

の狼藉至極、上を憚からざる次第恐入存奉り候。是に依て老母幷に大磯の虎、化粧坂の少將と申遊女、兄弟一味の者共以上三人搦置申候。私同心仕らざる所聞召分られ、御褒美頂戴仕候はゞ、有難く存奉るべく候以上」君御顏色損じ、「惡くい京の小四郎が訴狀。能く當代を詮義暗しと見立しな。兄弟が力に成程こそなく共、祐經が內通の犬と成て、老母が方へ入込みしと云ふ事、賴朝聞かで有べきか。言語同斷諸人の見せしめ。老母二人の遊女急いで繩を許し、取手の者共彼奴召取來れ」畏て罷立んとする所を、朝比奈三郎又つゝと出、朝「何の彼奴に取手の者。我等に仰付られかし」賴「ヲヽ兎も角も」朝「忝し」と立出しが立戻り、若シ異議に及ばゞ摑殺して捨申さんか」賴「イヤ〳〵問ふべき子細有。殺すことは無用〳〵」朝「はつ」と答へ立出しが又立歸り、「然らば死ぬ程に骨々ほつきほつき捻折て參るべきか」賴「其段は兎も角も」との給へば、朝「アイ忝い。コリヤ面白からふぞ」と、小踊してぞ入にける。賴朝重ねて「日も闌なば鎌倉入明日に成。路次の經營もいかゞなり。相殘る訴は鎌倉にて聞べきぞ。先時宗を引出せ一目對面せん」とぞ仰ける。お次に扣へし御所の五郎丸、時宗が繩引立御白洲に引すへ、御「兄弟狼藉の余り此者御寐所近く切入、御命危ふかりし所、某難なく組留めて候」と嚴げに言上す。五

朝食云々ー殴った序に

の仕形。親殺し主殺しの外一家に祟る法はなし。女房も以前の如く相具し、兄弟が老母介抱等少も憚るべからず。老中此旨沙汰せられよ。扨仁田の四郎が高名は今に始ぬ事ながら、譽を他に讓つて身を謙る勇者、感じても余り有。恩賞は鎌倉にて計らふべし。次は〳〵」との給へば「恐れながら言上。拙僧義は、藤澤寺の住持瑞阿上人と申者にて御座候。今晝時分工藤左衛門祐經殿家來、近江小藤太と申仁參られ、梶原平次景高殿仰に候間、日中九ツの鐘を差置八ツに突申べき旨申され候ゆへ、叶ひ難きよし申候へば、拙僧を初寺僧共殘らず搦、自身鐘を突、近在隣鄉刻限混亂仕候。後日の御咎を恐れ言上仕候以上。月日」賴朝大きに御氣色損じ「住持が訴に限らず、隱目附の者共宵に耳へ達したり。蒲の入道が切腹も相手は景高と聞。鎌倉に於て急度詮義相遂ぐべし。夫迄は和田の義盛に預置ぞ」との給ひも果ぬに、平次景高「此義は段々申譯」と云ふ所を、朝比奈の三郎義秀、小腕を取て捻すへ、「云分あらば追ての事。今日から親仁が預りじや。北の丸で榛谷が朝食の相伴に、己が頰をはり殘して殘念」と、四つ五つはりこかし、羽搔締に引縛り、家來が手にぞ渡しける。廣元一通又取上、「曾我兄弟が種替の兄、京の小四郎恐れながら言上。右祐成時宗兼々の企承及、數度異見に及候へ共許容なく、御狩場

曾我亂入―曾我十番切の情況報告

訛判―確實なる批評となり

べうもや」と伺へば、御察聞シ召され、「鎌倉へ歸つては留主中の訴も多からん。狩場の間の事共は、只今にて沙汰せんず。廣元讀まれよ」との御諚にて、逐一にこそ讀だりける。「五月廿八日曾我兄弟亂入の刻、御家人手負の檢使竹下孫八左衛門、同安田の三郎見分の覺。一太樂の平馬之丞頼先深疵。但右の方なれば迯疵のこと。一愛甲の三郎弓手の腕馬手の肩後疵二ヶ所。一安西の彌七郎右の横腹深手、臈ずた〳〵に切存命不定に相見へ申候。一臼杵の八郎頭を割られ卽座に討死。一新開の荒四郎小柴垣を破り迯候砌り、竹のひつ刺にて左の眼突潰し申候。但し自身の怪我の由口上。次を讀まんとする所を、賴朝「暫く〳〵悉聞に及ばず。鬼神なれば迚兄弟二人に見苦き働。假令薄手かすり手負ふせたり共、討留め組留めずんば高名に有べからず。末代の訛判諸家の恥を殘すに似たり」御前に於て是を引裂き燒捨らる。大智の程ぞ尤成。次の一通押開き、「伊豆の國の住人仁田の四郎忠常恐れながら言上。一、二の宮太郎安淸專忠義を存、曾我兄弟が緣者たるを恐れ女房を離別致し、猶以祐成所存を察し、己が名を隱し某が假名を致し、祐成を喰留め申候刻、横合より折合首を取申候。某此度の高名は全く二の宮高名にて御座候。此旨御披露願ひ奉り候以上。月日」賴朝大きに感じ給ひ、「鎌倉の早打時を違へず重々神妙

遠方—落つにかく
千鳥—祐成の着物の模様

運開云々—日月の運行

御戴許—成敗の意か

の五郎丸が組とめ、御假屋安穩なり」と、呼ばはる聲に祐成、「あれ聞き給へ時宗は召捕られしとや。祐成が最期いかにと案ずべし。疾首討て、兄が最期淸かりしと悦せてたべ。仁田殿頼入。南無阿彌陀佛彌陀佛」と、首差伸べて目を閉る。与「名ざしの上は承る。御心易かれ」と、太刀拔き持て後に廻り、振上れば祐成が、首は前にぞ遠方に、はや曉の八つの鐘、鳥も啼く〳〵人も泣、ねをなく千鳥の直垂に、首よ涙よ包みても、洩て名高き富士の嶽、曾我兄弟が會稽山、骸は裙野に埋め共、譽は三穗の松の風、他の國迄吹傳へ、昔語を今の世の、人の眠を覺しける。

第五

運闢三百六十輪、天運三千六百周、頼朝卿の武運に和し、御狩の御遊建久四年五月廿八日、晝夜十二時に事終、同廿九日の鷄鳴梶原平次景高、朝比奈の三郎義秀、御迎へとして參上す。鎌倉還御の御供揃、廣庇に出給へば、秩父北條和田岡崎、何れもお供の出立にて伺公有。因幡守大江の廣元、奏狀訴狀口書等、數通御前に持參し、「是は御狩中諸人の願ひ訴へ、諸檢使の覺等にて御座候。鎌倉へ歸御有て、御戴許有べく候や。但今朝聞召上らる

報、あつたら若者を思はず討て殘念などとは、義を知つた武士の云ふこと。猪に乘て高名とする、獵師風情の云分には、過たく」と云せもあへず、与「ヤア小舅をしとめんとする程の不仁もの、武士の情は存も出るまい。祐成が首は御邊急ぎ討て手柄にせい」二「イヤ人に囉ふて手柄にする安涜ならず。御邊討て手柄にせい」与「イヤ二の宮討て」二「仁田討て」与「二の宮討て」と、責めかけられ、二「ヲヽ小舅の曾我を討つ刀二の宮は持合せず。是で討れば御邊討て」と、祐成と切合せし太刀をからりと投出す。忠常おつ取挑灯に透して見れば、こは如何に物打より切先迄、刃を石にて叩き潰し、打みしやいだる槌同然。与「ムヽ最前より此太刀にて討眞似したるか。アツア賴もし共優し共、弓矢取身の手本ぞや。雜言御免二の宮殿」二「それこそ互、惡口御免仁田殿。和殿の如く情有友を持つたる五郎十郎」与「御分の如く誠ある緣者を持つたる曾我殿原」二「一生花實も咲かざりし」与「天運の拙さよ」と、二人不覺の落涙に、鎧の袖をぞ絞りける。今を限の祐成起直り、「緣者と申も元は他人の二の宮殿、好なき仁田殿、御芳志は五百生、生替り死替る共忘るまじ。御手に懸り討るゝこと、祐成はなんばう果報の者、首討てたべ疾々」と、いへ共二人涙に暮れ、差俯いて居る所に、御所の方より聲々に、「曾我の五郎時宗御前近く亂入。御所

鬼死すれば云々―同類に禍のかかるを恐るゝ諺

獼猴云々―愚人が賢者を嘲る譬

愚智―愚痴か

指果報―僥倖

祐「弟の時宗はいづくにぞ。祐成こそ討れたれ、死出の山にて待つべきぞ。いふ事も是迄。サアいづれなり共首を打て。怯れたるか」と聲懸くる。与「イヤ討手の實否紛らはしく、黃泉の障も悼しし。誠の仁田が面を見せ名字盜を面縛させん。松明出せ」と呼ばはれば、忠常が下部共挑灯取て差あぐる。仁田と仁田が顏さし合ひ、与「ヤア二の宮、以前仁田と名乘つるは御邊よな。扨淺間しや。ヤイ兎死すれば、狐是を悲むとは、同じ類に禍の、來らんことを悼む故。元緣者の端くれ、御咎の飛しるかゝらんことを痛み、祐成を討つて一味せぬ心の云譯とは、はて能い思案。女房を離別せしは、他人に成て兄弟が力とならん心底。尤斯く有べき事と感心せしに、扨は立身の爲の離別か御分別〳〵。よしなき仁田呼が奇怪さ。思はず駈合せ、あつたら若者を手に懸けし殘念さよ」と、大きに怒つて恥しむる。二の宮から〳〵と笑ひ、「獼猴が帝釋天を嘲るとやら、おのれが足らざるを以て人の大智を計らんとして、却つて愚智が顯はるゝ。二の宮が曾我を討んと思はゞ、けふ迄何の待べきぞ。なまなか功有男子と思ひ、名字を借つてぼつ散らし、某他人に成たる德。天下晴れて匿へ置、時節を待て世に出さん、と手を取て引ぬ計にあしらへ共、祐成たじろかねば詮方なし。手柄はしたたし怖くは有、二の宮が聲を後楯にかけ合、こぼれ幸指果

ござめり—こそあると見える

人穴—忠常富士の洞穴に入りて異境に接したる事あれば云ふ

犬居—尻餅つく

くらには虎より猛き猪を乗留め、日本無双と譽を一天に輝かす、仁田の四郎忠常とは我事。物々し曾我殿原。思ふ敵は祐經一人、木葉武者五十百切たる迚、何の益か有。仁田の四郎が手に懸り、御勘氣の者の末孫と、獄門の恥が受たくば、いざ來いやつ」とぞ罵つたる。祐「チヽよい敵ござめり。仁田なればとて必勝にも極らず。人穴の地獄の鬼、猪なンど相手にしたとは違ふべし。十郎祐成手並を見よ」と打て懸る。与「エヽ無分別者是非なし」と、閃く太刀影雨夜の星、電火を飛ばして切結ぶ。更に勝負もなかつし所に、花やかに鎧ふたる武者一人、坂東聲を打揚げ「あら穢らはし我名を盗む曲者、高名を貪るか。伊豆の國の住人仁田の四郎忠常とは我事。見參せん」と呼ばはつたり。祐成飛退り、「六十余州は廣けれ共、頼朝の幕下に仁田ならで武士は無きか、あら仰々し。痩浪人一人か二人討んとて、彼も仁田是も仁田、似たく〵敷表裏者。二人共に餘さじ物」と打て懸る。「ヤア跡から出て仁田とは人眞似か。祐成は討たせじ」と懸隔たれば掻潜り、打付れば懸隔て、祐成一人に仁田は二人、入亂れて揉合しが、陽に開いて打つ太刀を後の仁田が陰に閉ぢ、受流して裙を薙ぐ。祐成が馬手の高股、膝口掛けて切落され、弓手計の片足立、二打ち三打ち打かひも、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうと轉びしが、

祐近－祐親

伊藤の次郎祐近が孫、河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成同じく五郎時宗、親の敵工藤左衞門祐經を討留めたり。賴朝公の御内に弓取はなきか。折合て打留めよ」と呼ばはつて、邊を睨んで控へたり。闇さは暗し雨は降る、假屋〳〵に、「すは夜討」と、弓一挺太刀一振に、五人三人取ついて「我よ人よ」と奪ひあひ、繫馬に鞭打て、遲しとあせる所も有、鎧に辷り兜に躓き、小手を臑當草鞋を笠、上を下へと犇けば、御馬屋の德竹大聲上、「物のあいろも見へざるに、松明出せ」と呼はれば、二千軒の假屋より箙靭簑竹笠、傘箒に至迄、火を付て投出せば、裾野の暗は忽に、百千の朝日影、一度に照す如くなり。騷の中より名乘掛け〳〵、切つて出れば兄弟は、小柴垣を小楯に取、入替〳〵名乘替へ、火花を散らして雨交り、揉立〳〵三重戰ひける。腕首切られて引も有、頰先肩先尻こぶた、弓手の太股馬手の足首、矢場に切られて死するも有。され共兄弟薄手も負はず、血氣に進む時宗は、假屋の人種絕やさんと、御所の間近く切て入、祐成は柴垣の影に息をぞ休ける。假屋〳〵の松明も降くる雨に打消され、東西暗き小蔭より、緋威の鎧著て、二尺余りの打刀、三尺五寸の大刀横たへ、四十足らずの武者一人、のつさ〳〵と動ぎ出、「抑是は先年上意を蒙り、富士の人穴に入て地獄の底迄名を顯し、此度の狩

歩―緣板

不退の彼岸―極樂

奉公日の出―日の出の勢ある侍共と刃を試す

を絞つて喉を濕し、勢ひ猛に立たりし、心の内こそ嬉しけれ。祐「エヽ心地よい時宗。年月の思ひに較ぶれば敵を討は易かりしな。余り嬉しさ心急いて忘れしが、祐經に止刺しつるか」と問ければ、時「あれ程に切上は、何の子細か候べき」祐「いや然はなし。跡にて實檢有らん時、敵を討は討たれ共、止を刺さぬは狼狽たりと云はれんは、骸の上の恥辱ぞかし。五郎如何に」と有ければ、時「尤」と打頷き、誰をか恐れ忍ぶべき。のつさ〳〵假屋の歩、ぐはつた〳〵踏鳴らして引返し、障子襖はら〳〵と蹴放し、祐經が死骸にどうと跨り、祐「能く聞け祐經。一念の嗔恚に依つて敵と成味方と成。六根の罪障消滅し不退の彼岸に到れよ」と、腰の指添ひん抜き、時「そも此刀は箱根にて、初て見參したる時、得させたる赤木の小刀。御邊元の主なれば、鐵の味は知つらん。只今返す受取れ」と右手の耳の下よりも、ゆん手へ通れと刺す程に、耳と口とを「一蓮托生、南無阿彌陀佛」と回向して、元の所へ立歸るに手指す者さへなかりけり。祐成待受、「落ば此儘落べけれ共、隱れ忍んで一生を暮さんは生たる甲斐は有まじ。一足にても迯とは弓矢の恥辱。殊更我々ゆへに御生害有蒲殿の御恩、御供申さで叶はぬ命。浪人の我々が銹太刀と、奉公日の出の殿ばらが、刃を試して討死せん」時「尤」と、二人等く大音上、「伊豆の國の住人

伊藤―伊東祐親

雨が延び云々―慌てゝ延と降と取違へたり

はなかりけり。本「是こそ祐經が臥床なり。心靜に本意を遂げ、會稽の恥を雪がれよ」と、最念比の詞に縋り、「御案内の程五百生の躰を燒く共、いかでか報じ盡すべき。隨つて通路の此割符、蒲の入道殿より密に拜借申せしかど、御切腹の跡なれば、返弁申さん樣もなし。我々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の、伊藤が末の曾我に組し、反逆の族よと、死後の虚名に御骸を瀆さん事、御恩を却つて仇にて報ずる道理。近經殿に預け置、然るべく賴み存ずる」と二枚の小札を手に渡せば、本「尤々近經に任されよ。主人重忠惡くは計らひ申されまじ。老母の事もゆめ〳〵麁略候まじ。今暫くと存つれ共、役目なれば知らぬ顏。弓矢の禮義是迄」と、本多は假屋に入にけり。「今は何をか期すべき」と、兄弟合羽かなぐり捨て、「本多が敎し敵の假屋は是なり」と、木戸駒寄を飛越へ跳越へ、兄弟につこと打笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討て入、次に伏たる宿直の侍、足音に目を覺まし、「すは盜人よ」と呼はつて迯出る。假屋〳〵に聞付て、「ソリヤ盜人よ御立よ」と、騷ぎの上に又混亂。相圖響かす大皷鉦、かん〳〵どん〳〵「どんくさい。又雨が延て來た。お立が降」と入も有、雨の足音さつさつさ、人の足音どろ〳〵〳〵。右往左往に 三重もてかへす。其隙に兄弟は、敵工藤祐經を思ひの儘に討おほせ、門外に走出、袂

波に揺らるゝ云云—曾我の爲唯一の案内者は我なりと也

頼入。假屋へは此辻を左へきれ、行當りの大構。いざ御通り候へ」と馬鹿慇懃の空輕薄。結句敵の引入を、仕濟顏にぞ別れける。兄弟遁るゝ鰐の口、虎の威を借る此割符、蒲殿の御恩ぞ、と御寮の假屋の傍近く、忍び入こそ危けれ。左右の假屋騷立、「お先手は發足の御觸有。合羽は取置腰錢を取落すな、馬よ鞍よ」と犇けば、兄弟彌氣も急かれ、「祐經が假屋とてもさぞあらん。是迄忍びし甲斐もなく、此雨の降止む事、神明にも見放され、能く武運に盡きしか」と、拳を握り齒を鳴らし、虛空を白眼んで立たる所に、秩父の執權本多の次郎近經、小具足に身をかため、本陣の夜廻してけるが、曾我殿原と見るよりも、近々と步みくる。兄弟「誰そ」と咎むれば、本「波に揺らるゝ沖津船、知邊の磯は此方ぞ」と、呟く聲に祐成「はつ」と嬉しく、「重忠公の御情、又は御身の御懇情、此度に限らね共、御禮申事もなく、禮義知らずとや思されん。今宵年來の大望達せんと存る所、俄に雨晴れ假屋〳〵は出足の用意。此騷には覺束なし。此儘歸つていつの時をか期すべき。無二無三に切込で、兄弟屍を晒す所存。重忠公へ一生積る御禮は、貴殿の執成頼み入ル」といひければ、兄弟が耳に口を寄せ、本「氣遣ばしし給ふな。祐經は明日君の御馬の御供、それ故假屋も寐靜まる。こなたへ〳〵。靜に」と、道の案内の杖柱、嬉しさ類

漿―仙人の飲む甘汁

おだゆみ―おは發語、止む事

星々―さつぱり

所領云々―領地没收の恩

つこん通つてわぢ〳〵と、物悲う罷成。敵に出合ひ働かば、所々の死を遂げんも計られず。最期の盃一つ飲ふで給はれ」と、腰に付たる懸烏帽子に、降くる雨を受溜めて、祐成が手に渡せば、祐「なふ七度結びて兄と成、六度契りて弟と成と傳へ聞。死替り生替り、兄弟の縁は切まじ」と、さらりと干してさしければ、時宗とつて押戴き、「兄は親にて候へば、母うへの御盃も是に籠り、天の甘露仙家の漿此酒に勝らんや」と、受ては飲み〳〵、降くる雨は恩愛の、親と妻との血の涙、親子夫婦の血を飲と、思ひ知らぬぞ哀成。

五月雨の一頻おだゆみて、空さりげなく星々と、北斗の光鮮に、晴れ渡れば、安西の彌七郎、新開の荒四郎、旅裝束に下部を引具し、「雨も晴て候ぞ。君は明日五ツの御發駕。先手は追付お立の御用意」と、呼はらせ打て通る。兄弟「はつ」と顔見合、「此騒に亂入、討て本望達せん」と、袖摺違へ斷通る。安「コリヤ〳〵〳〵何奴なれば御假屋の傍近く、斷もなく忍び行。馬盗人か盗賊か。それ搦よ」とひしめけば、祐成騒がず「イヤ苦からず、鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使。咎立して旁が、所領の仇ばしし給ふな。疑はしくは見られよ」と、首に掛けたる通路の割符、「是見られよ」と指出す。兩人恂り詞を替へ、「存ぜぬ事とて雜言申せし御免有。新開安西咎めたりとは、祐經殿へは必沙汰なしに

怯れじ—緒にかく

御寮—頼朝公

借—貸

急ぎ歸御有るべしとの、時刻も雨に事延びて、假屋の騷もいつしかに、辻の篝も影薄く、晝の疲の手枕に、短き夜半の鐘の聲、夢より夢を結びける。時節よしと曾我殿原、鬼王兄弟を古郷へ返し、出立祐成が裝束は、母上より給はりし、秋の野に草盡縫ふたる、練貫の單ぎぬ、村千鳥の直垂の、袖を結んで肩にかけ、黑鞘まきの太刀を佩き、竹子笠の紐強く、上に下部の青合羽、陣明松に道照らさせ、先に進めば五郎時宗、是も母より給はつたる、白綾に鶴の丸縫ふたる袷衣、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰ざし、別當より給はつたる、源氏重代友切丸肩に打ちかけ紙合羽、しめたる笠の怯れじと、跡に續いて出立たり。祐「いかに時宗母の御恩を徒に、今宵敵を討ずんば、不孝といひ世の人口、生たる甲斐も有まじきに、天の惠か降雨に、御寮の御立は延引す。狩場の用意も事靜まる。殊には蒲の入道殿、借給はつたる此割符。頼朝公の膝本へも通路自由と聞なれば、祐經を討は案の内。假屋には定て遊女數多有べきぞ。罪作に手な負はせそ。雨はいつも降ながら、今宵の雨ぞ身には染む。討死せしと聞えなば、思ひ切たる御心にも、母の歎はいか計。悲さよ」と涙ぐむ。時「仰にや及べき。祐經は籠中の鳥網代の魚、やはか洩し候べき。恐らくは此時宗、天魔破旬に出合ふ共、ちつ共怯まぬ魂。今宵の雨は身に掛り、ぞ

苗代水云々—能因三島の神に雨祈して「天の河苗代水に云々の歌を詠上しに雨降りしと云ふ（古今著聞集）

小野小町—理や日の本なれば照もしつさりとては又天が下とはの歌

慈意妙云々—普門品の慈悲は恰も大雲の萬物を覆ひ甘露の雨を沃ぐ如し

怖畏云々—怖しき軍中にて觀音を念ずれば仇退くとなり（以上法華經普門品）

道納受なからんや。我も共に」と立ち給へば、虎御前中に立、心の疑ひ夏草を結んで幣と禮拜し、眼を閉ぎ心中に、「南無や三島の大明神、傳へ聞古曾部の能因法師、苗代水にせき下せ。天くだります神ならば神と、詠ぜし歌は國土のため。日の本照す日の御神も、雨寶童子の御名は普き天の下、咎めて陳ねし大和歌、例も降し雨乞の、小野の小町も女なり。我も又女なり。三十一字は陳ねず共、妾が僞り無き心、百首千首の和歌と成て、感應の雨を降し、願ひを叶へおはしませ。日比信じ奉る普門品の天龍八部、阿修羅、迦樓羅緊那羅摩喉羅、其外南海下界の龍神、二人の願女が一身の血を絞つて雨となし、夫の大望母の歎を止め給へ。慈意妙大雲、澍甘露法雨、怖畏軍陣中、念彼觀音力」と、虎少將が小指を喰裂き、流るゝ涙諸共に、袖に浸して虚空に散らし、一身五躰に汗を流し、足をつまだて肝膽碎き、天を禮し地を拜し祈る心ぞ無殘なる。諸天も感應過たず、晴天忽常闇と虚空に閃く電光、足鷹山に雲覆ひ、涙の雨を誘ひ來て、俄に降くる雨の足、篠を亂すが如くなり。人々嬉しさ有難さ。濡るも厭はず伏し拜み〱、御本望の末頼もしく、袂を母に打覆ひ、狩場の方へ焦れ行く。されば五月二十八日に、今の世迄も降雨を、虎が涙や少將の、夜るの雨共三重名に高き、富士の裾野の御狩の御遊。鎌倉の騷動にて、

浮事—憂事

浮目にあおふ—憂目に逢はう

空目—見ぬ振

夫を慕ひ—望夫石の故事

縋り歎けばわつと泣、母「死で浮事聞まいとは、子を思はぬに似たれ共、母が身にも成て見や。子共の爲にと病を作り、思ひ設けし母が慈悲は仇と成、雨さへ降らねばお立は今宵八ッ立とや。顏振間も有ことか。」假屋〳〵の騷しきに、若シ近寄て見咎られ、盜賊成と搦られ、返つて浮目にあおふかと案ずる程身も悚はれ、自害せず共死兼まい。賴朝公の鎌倉入を止むるは雨計。アレ〳〵星も晃々と、雲の一筋あらばこそ。何故雨が降物ぞ。降らずば望は叶ふまい。五月雨は五月の雨、一ト日過れば六月よ。今宵は二十八日の、五月の雨はなど降らぬ。月日に僞りましますか、と勿躰なや天道迄恨申も此母が、命の情ない故ぞかし。空目して死なせてたも。刃物たもれ」と縋付、其手を直に抱付、三人一所に顏見合せ、思はずわつと聲を上、悶へ焦れて歎きしが、虎「少將樣何と思召す。雨さへ降ば明日五ッの御立とや。其間には御兄弟御本望は必定。お二人の名を下すも、名を上げるも雨一つ。夫を慕ひ石に成たる女も有。身社賤しき流れの女と成たれ共、一念は誰に劣ろふぞ。天道地神龍神も、流れの女は守るまじとの誓もなし。命にかへて天道へ雨を祈る心ざし、そなたはなんと」少「ヲヽ我とても其通。死ぬるに二つの道はない。サア〳〵早ふ」と勇み進めば母君も、「賴もしき心ざし思ひ込ふだる念力、天

やくたい―たわいもない

白兎―仕合を得る

ぐりはま―蛤の轉にて顚倒する事(用捨箱)

命長き云々―富則多レ事、壽則多レ辱(莊子)

御兄弟に付て大譯有てじやげな。それで假屋〳〵の騒動、踊の崩じやと思はんせ。それゆへ頼朝樣も、今宵八ツにお立鎌倉へお歸り。若し雨が三粒でも降ば、明日五ツにお立が延る筈。降ても照てもお先手は八ツ立とのお觸。荷を締るやら何やらやくたいの有ことか。私らが樣に假屋〳〵へ呼ばれた女郎衆、俄に里へ戻さるゝ。此有樣見て下さんせ。抱へる樣に思ふても、御運の悪い御兄弟。お知人に成ね共お袋樣もおいとしい。こなさん達お二人の心が察し遣れて、私や涙がこぼれる。去ながら悔々と思はんすな。來らぬ時節は是非がない。私も運が悪いは。まあ二三日狩場に居れば、白兎の子貰ふ物。何も時節と思はんせ。もう別れんす其中ゑ」と、大事の咄ひつ摘み、しどけ半に云ひさして、駕を早めて急ぎ行く。母君堪兼轉び出、「龜菊とやらんの咄聞ました。ヲヽ和女衆も悲しい筈。母が心も推量あれ。いふ事なす事ぐりはまに成、曾我の運存へて幾何の憂目をか重ね見ん。命ながきは恥多し。嫁御去ば」と守り刀を逆手に拔き持、「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」と稱名の、聲より早く飛懸りもぎ放し、二人が胴慾な御袋樣、命を捨てゝ御兄弟のお爲に成事ならば、二人が命惜まふか。望さへ叶はぬに、母御に自害させまし、不孝の罪は子に報ひ、一生御運は開けまい。御兄弟がいとしくば思ひ直して給はれ」と、

中よしの兄弟御の假屋へか。龜菊樣共一座して、御噂たら〳〵。近い内逢ふぞゑ。先おさらば」と、道を早めてそれそこへ、いたら貝は岩崎樣、網の手は菅原殿、舞たる鶴は茨木やの左門殿、龜甲は輪違やの花咲が、一座の座配、逢ふ夜のわけ。大一大万大吉と、我を折烏帽子立烏帽子、白一文字黒一文字屋の山の井殿、竹に雀は仙臺屋の陸奥殿、遣手は露の幸い菱。醒る眠りの梅ばつちり。竝んで二つ挑灯は大和屋の唐土、名も高橋の紋所。二人が心相籠で、追々に昇來る。急るゝ心に虎少將、詞を掛ねば答もなく、過行跡から龜菊が、印は紛ひも嵐吹、紅葉流しの紋挑灯。二女「コレ龜菊殿、虎少將じや物問ふ。乗物暫し」と止むれば、龜「待てたも駕の衆」と忙し中をせはし夏草、わくせき草にぞおろしける。龜「なふ逢ひたかつた二人樣」二女「此方とても其の通。して御兄弟のお身の上はどうぞいの」龜「去ばいな。云ふても〳〵御運の弱ひ御兄弟。御袋樣の御病氣とて、俄に曾我へお歸り。京の小四郎とやらが内通、何やかやで祐經とんと心を許しもう樂じや。今宵から假屋に足を伸して、御狩中は緩りと酒盛しよとの前巧。是はよい首尾御逗留の間には、どこぞで本望遂げさせましよ、と心力の有し所、けふ晝過八ツがしら鎌倉より、二の宮の太郎殿と云ふ人早打のお使。賴朝樣の弟蒲殿とやらが、腹切んしたといの。是も

いたら貝、網の手舞鶴、龜甲、大一云々—皆紋所の名

竹に雀—仙臺侯の紋所

幸菱梅鉢—之も紋所

嵐—あらじにかく

八ツ頭—八ツの上刻

如才云々—愚はあるまい
哀かし—嗚呼
石だたみ云々—紋所の名
しげれ云々—太夫の客と睦じく語る
三本傘、雪折竹—紋所
むのじ—無念などの略歟
さし合くらず—間を憚がらず

よもや如才は致まじ。哀かし龜菊に逢ひたひ事や」といふ中に、草の葉越に散つく火影、あたりを照して見へければ、二女「そりやこそ事よア、氣遣。一走往て見て來うか。跡も危なしあれ〳〵」と、心計を碎く間に、次第に近付提灯に、女交の笑ひ聲、「エ、氣遣ない〳〵皆廓の駕舁共。假屋〳〵へ呼ばれた女郎衆の戻りと見た。若シあの中に龜菊のいやるか、いざ待合せて問ふて見よ。母君は先暫し」と、草の繁に隱し置、小挑灯の心切しめし、待共知らでざゝめきて、一節謠ふ聲のあや。歌「三年以前の皐月闇、鴫立澤の歸るさに、禿こさんか誰やらが、螢を取て遊びなば、面白かろでは有まいかと、ウタイ醉を涼めし夜半の風、今の氣色に吹送る。駕舁が癖は駕でふり、螢は光淺瀬川。甲「跨げじや」乙「まつかせ」乘物の、乘手は知れた挑灯に、上と下とは石だたみ、中に二重の松川菱、木瀬川の三浦とて年まへの太夫、大彌太殿とは深い中。これも狩場へ呼寄られ、しげれ松山浦山しい。二女「跡から見ゆるは誰ぞいの」問れて駕の簾より、招く扇や開き扇は虎「朝霧樣、狩場の露でしつぽりと、濡れさんしたの〳〵。ぬれた印の三本傘、雪折竹は奥州樣」少「五十余人の松の中、手管の上手め見たぞ遣ぬぞ」朝「ヲヽいや惡口云ふは誰ぞいの」虎「問れて云ふはむのじながら虎でござんす」少「少將じや」朝「珍らしい問ふに及ぬさし合くらず

續穗梅―續ぎ木した梅

杌―食ひにかく

わくせき―せはしい、齷齪の字音

道と成。懺悔〳〵〳〵懺悔ゑ。何か菩提の道と成。さんげ〳〵〳〵〳〵ゑ」色にそみ又香に愛て、拾ひ洩せる後世の種、闇の闇路を如何にせん。照せ三島の宮所、御燈の光しんしんと、心も淸き瑞籬に、馬上の母は手を合、祈る願ひの百千々を、いはで心に駒急ぐ。老木の松はつれなくて、初咲櫻續穗梅、盛りの花の嫁達の、身にはいか成神無月、五月の雨の何の間に、涙の時雨染手綱、絞れど乾く隙ぞなき。出行人に後じと、笠取敢ず杖取らず、常の姿を其儘に、今來て見れば旅衣、裾野も近成にけり。星さへ見せぬ松林、下は野澤のちり〳〵水、裾は茨が綻ばし、足は草履が杌やきりかぶ小石原、一寸先は暗のうたてや小提灯、細蠟燭もほの闇く、駒の躓き氣遣し。御狩場も早程近し。是から二人がお手を引、「いざ徐々お歩」と、抱きおろすもおろさるも、よろめきながら下り立て、母「なふ嫁達乘てさへ草臥る、我身で思ひ遣るよ。もう何時ぞ。心のわくせきする故か、鐘は四つやら夜半やら、聞捨て數へもせず、更た樣に覺ゆるに、狩場の方に物音は聞えずや。兄弟が生死も誰か聞せん便なや」と、歩もやらず立給ふ。二女「お道理や去ながら、我々が妹分木瀨川の龜菊と申者、祐經が氣に入て狩場へも呼れしゆへ、御兄弟の御事を身に引締て賴しが、若けれ共龜菊は、侍まさりの氣性といひ、義理强ひは傾城の習ひ、

雲より上―郭公を云

三保―見ゆるにかく

闇はあやなし―古今集の春の夜の闇はあやなし云々の歌をとれり

白月毛―知らうにかく

浮別れ―憂き別れ

夜嵐に、ぱつと消へては狐火の、我とわが身を迷はする。雲より上の一聲や、又二聲三聲とだにも啼捨て、いづち行らんやよや待。汝よ冥途の鳥ならば、死出の山路に關据て、先立つ我子留よかし。心覺への道程も、ゆん手は秩父の山おろし。松の響か磯打波か、晝なら三保か 相山 清見寺、鐘かう〳〵とほの聞え、猶も心ぞ急がるゝ。きらめく露の玉澤村、闇はあやなし梅澤村、ふた村過て行狂ふ、駒の蹴上の鞠子川、衣紋流しのアヽ曲もなや。此駒の道の街に行泥み、打て共あをれ共、など進まぬぞ歩まぬぞ。哀一足に千里もがなと、こがるゝとは思ひ知らぬか白月毛の、駒に恨の涙の鞭、打に甲斐こそなかりけれ。いやなふ駒に科はなし。此別れこそ大磯道。夕暮ごとにお二人が、しやんとめされて通路の、戀の知邊の馴々し。今宵はそれに引替り、乘手も道も替るとは、知で止まる可愛さよ。御兄弟の御形見今一度里の方へと押向て、引立見れば不思議やな。元の如くに歩み行。引戻せば立止り、慕ふは誰そ我夫、我子よ主の浮別れ、共に悲しむ優やと、鞍の前輪に縋付、歎ば共に聞入て、耳をふせ尾を垂て、人諸共に泣涙、おのが毛色も染ぬべし。歎な駒にせい付て、ハイシイ足柄越は風荒く、露を蒔繪の箱根山、今行道もついに行、賽の河原のいつとても、大人童の隔なく、〽罪は重たし迷は深し、何か菩提の

四弘誓願―佛が衆生をして得度、解脱、安心、涅槃を得しむる誓願
返つて―却て
をしか―惜しと牡鹿
鹿の身の果―筆は鹿毛にて作るを良しとす
替へまほし―かへたいと屋とかく

四弘誓願ぞ有難き。「子を先立ての弔ひは、逆さま事とて其子に罰の當るとや。身は箱王が替りにて今日より我こそ箱王法師。十郎は我兄五郎は返つて我が親ぞや。いざ虎御前少將、初夜の勤の比なれば、親五郎殿兄十郎殿の菩提を祈らん持佛へ」と、泣々誘なふ御姿、兄弟此世の暇乞、名殘をしかの狩場へと、急ぐ足さへ跡へ引。立留まりても面かげを、中に隔つる小萩垣、物越もはや聞せじと、耳驚かす初夜の鐘、諸行無常を今迄は、餘所に聞しも我身の上。母は我子の上に聞、一ッ響きを別路の、涙々に聞分けて、又逢ふ夜なき親と子の、袖の露こそ重たけれ。

第四　とら少將道行

妻戀ふ鹿の身の果も、戀の文書く筆と成ル。有て甲斐なき老の身は、死て躰の置所、同じ裾野と心ざし、馬に任する道知るべ、是は若駒乘手は老の、姑獨嫁二人、踏も習はぬ双鐙、流石夜道の力とや、油煙も細き提灯に、足元計照らさせて、しほれ出るぞ哀成。先はいづくと詠むれど、富士さへ見へぬ闇の夜の、今宵一夜は十五夜の、月にぞ替まほしの影、ちら〳〵ちら〳〵螢火か。いや兄弟の亡魂よ、結び止んと下がへの、褄吹かへす

ねび者―年よりも大人びたるもの
氣がさ―勝氣の性質

妻―夫の事

心碎くはいか計。一万と云ひし時よりも、兄十郎はねび者にて麁忽せぬ生れ付。箱王の時より五郎は氣がさ者、すはと云へば氣がはやる。腕の骨のかたまる迄、人にも油斷させんため、出家にすると箱根へ登し置たるに、元服したる咎ぞ迚、此比迄の勘當は、是も敵に肌許させ本望を遂させせん、と勘當も親の慈悲。父の爲に捨る命、惜まぬ子には孝の道有義も有。討死すると知りつゝも勸める母は何の道。恨めしの身の上や。助かれといふ情はあれど、死ねといふ慈悲はなし。親の死を歎かぬ不孝の子は多けれど、孝行の子の討死を厭はぬ母は我計。若き子共を先立跡にさがる冥途の道、妻の河津殿へいひ譯は何とせん」と、涙の限り聲限り、口說給へば虎少將も絕入計。母の愛心兄弟が身に答へ胸に染、悲さ詮方遣方なく、伏拜では泣沈み、歎き入ては伏拜み、思ひ隔つる破垣、いとゞ涙に朽ぬべし。母「不便や可愛や兄弟が、由なき母に絡れ、嘸や道を急ぐらめ。去ながら現世の望叶ひなば、來世はなを賴み有。箱王を出家にせんと袈裟衣迄營みて、佛に契約申たる其言葉を違へじ、とかはりに母が出家して、その袈裟衣身をはなさず。是見よや嫁達」と、上の單を脫かくれば、下は黑染五條袈裟。一度に「あつ」と手を合す。庭と上とに四人の願ひ、ため。彼奴めに聞するは祐經に聞せ油斷させて、やすくと討せん爲の親の慈悲。

里—廓

夜るの蟬—聲立ぬ意

襟につく—勢につく

レ思切の無い奴」とて、はたと打、「未練者」とて丁と打。「里にては流れの身、爰にては武士の妻。夫の親の敵討、母が目顔を忍んでも、共に見たて出してこそ弓取の女房なれ」と、打敲き〱、「母は寐ても寐いらず、書置するを物合より、見て泣涙はいか計。そこを堪へた親心思ひやれや」と計にて、箒をからりと投捨て、轉び臥て泣給へば、垣越に聞兄弟、「宵には似ざる御心。又もや御意の變るか」と、立も離ぬ夜るの蟬、取付露の崩垣、忍び音になく哀さよ。二人の女かきくれて、「敵討ッを曲事と御呵りの間もなく、止むる我等をお咎は、狼狽て猶氣が迷ふ。合點の上で諸共に思ひ切なら切たい」と、恨顔にて口說泣く。母君いとゞ目も開れず、口は廻らず心は急。母「子細も云はず杖棒當て耻しい。昔を知らぬ人々の不審なも道理。兄弟の子共が五つや三つの比より、父を討せ無念なと思ひ込ふだる魂、成人に隨ひ增りこそすれ飜へさぬ、弓矢取る身の念力、母が止て留らふか。夫知ながら可愛そに、死目に逢ふと驚かせ惑はせ、邪魔を入て呼戻す、其邪魔は誰がさすぞ。恨めしや妾が腹かした、京の小四郎といふ種替りの大惡人、慾に耽り襟に付、敵祐經が家の子同然に身を寄せ、此比爰へ入來り、有事無事犬に成て嗅出し、内通すれば用心し討べき透間もなきと聞。病と僞り呼戻し、慘ふ憂ふ呵りしは、惡人の兄めに聞せん

波ー無にかけて
波の如き皺

期に著し冥途迄、母上に添ふ心地にて、父尊靈に逢ひ奉らん有難さよ。脱捨し著ならし衣、形見と御覧下さるべし。弓と靫は二の宮殿、机に殘せし萬葉集法華經は、時宗が八年讀誦し手に觸し。姉御前に參らする。守袋は禪師坊、諸神諸佛の誓を直に、後世の引導賴むぞや。鬢の髪は虎少將、千筋となでし數々の、移り香しめて忘るなよ。鞍と鐙は鬼王團三郎にとらするなり。我々が身に替り母上の宮仕へ、賴むことは是一つ。建久四年五月闇、天は暗しと申せ共、思ひは晴るゝ下旬八日。祐成判時宗判と書止め、からり〳〵と筆を捨、聲をも立ず泣居たり。「名殘はいつか盡すべき。短夜や更ぬらん。いざこい五郎」と先だてば、續いて出る時宗が、大力の踏足に、年經る家の落椽を、がはと踏拔どうと落る其響、障子の煽ざは〳〵、紙帳の騷ぎに目を醒し、虎「ヤア十郎樣がおはせぬぞ」少「五郎樣もござらぬぞ」虎「表よ」少「奥よ」と立騷ぐ。十「見付られては惡かりなん」五「やり過して跡より拔ん」と領き合、荒たる庭の萩薄引被いてぞ隱れ居る。「なふ此紙帳の書置扨は今宵討死とや。たつた今結びの盃して、直に離れてあられふか。かみ樣のお歎お腹立。追付て留て見て、つまりは共に死ぬる分」と、帶引締裾短、褄かいからげ走出んとする所に、奥より母上箒追取用捨も波の皺腕も、共に折よと打立〳〵、母「ヤ

藻汐草―書き集めると云より文章に用ふ
箱根の別當―時宗幼時世話になりし人

んと心締たる高からけ、母の形見と直垂かい込、身を潛めたる差足は、我身ながらも野狐の罠を窺ふ有様なり。云ひ合せねど同じ心に祐成が、虎を酒に寐いらせて、今生に有てこそ母の恨も有べけれ、今宵限りの命ぞと直垂身に添へ、拔足に燈し火暗き人影を、弟は兄共知らず、兄は又弟共、知らで互に忍び足、ちらと見付てつゝと寄り、十「時宗か」五「十郎殿か」十「音高しく〳〵。彼の一大事を今宵と思ひ定しな」五「我とても其通。よつく兄弟が心の斯く迄合ふ事は、本望遂んは手の内なり」十「兎につけ角につけ痛しきは母上。悦び寐入の御枕嬉しき夢がな見給ふらん」五「醒ての後の御歎、今見る樣に悲しや」と、奥を見遣て兄弟が忍び涙ぞ哀成。祐成涙を止め、「豫ては今宵假屋にて、心靜かに書置し、形見も殘さんと思ひしが、是より宙を駈る共、富士野へ著ば夜半も過、なかく〳〵思ふ外成べし。歎きの中の御慰一筆殘さん」五「尤」と、床の硯を引寄せて、料紙取間も有らば社、恨みなとてぞ書つくる。紙帳に涙拭へとや乳房啣し昔より、廿余年の身の思ひ。悲しさも嬉しさも書綴りゆく藻汐草、心餘れど盡されぬ。祐成はともすれば、虎が情の忍びがき。時宗が筆の運びには、箱根の別當の御事、母の御不興宥され申、倶不戴天の敵を討名を後代に上ん事、偏へに母の御慈悲とぞ。其外同じすさみにて、今日賜はる直垂は、最

あつい和郎―面の皮の厚い男

睦じき―六ツ時にかく

甘宮―漢武帝李夫人の契に喩へたるなるべし、甘宮は甘泉宮の畧か又は漢宮の誤寫歟

五郎見やつて「扨も兄きあつい和郎。こちや成ぬウヽ恥かし」と、俯向て疊に喰付身を縮む。少「是巾少將が若ふて、殿御の思ひ樣嫂に劣つたと姑御の思召も迷惑。サアござんせ」と引立つれば、五「否こちや否じや」少「否と云ふてすむ物か」五「それでも母じや人の見てじや物」少「あれ彼方向しやんした」五「否じや〳〵」少「も否ならぬ」閨に引摺入相の、鐘睦じき夕べなり。月なき宵の雨曇り、京の小四郎部屋の躰を伺へば、今宵計はたつぷりと、燈心太き燈火の、影に廻らす盃に、可笑や何を目的にて、八千代を結ぶ夫婦の緣、親子の緣の縺合、からむ岩根のさゞれ松、「濱松の音はざゞんざ千箱の玉」とぞ謠ひける。小四郎が思ふ壺、「甘し〳〵。假令兄弟鬼神でも、母と女房に斯う糶打れては、脚骨立ずの腰拔。祐經公一代の厄拂ひ。此足で注進し御褒美は何ンで有ふ。知行で有らふか。若金銀を下されたら小商まだるひ、とんと小判にかゝらふ。小判〳〵」と獨言、口に金の舌を嘗てぞ出にける。揚屋の空燻山里に、けふは蚊遣に燻替、二つ竝べし羅ものの、蚊やも紙帳と所帶めく、内は裏なき浮世蓙、心を延る種ならし。甘宮の床の上に契りを千年の鶴に譬へ、恩愛の筵の上には快潤たる母の詞、恐れざるにはあらね共、時宗が年月の念力、やはか今宵を過さんと、少將を醉臥せ、出る紙帳の戰ぎにも、祐成の目や醒

金打—武士の誓約する時刀の刃或は鍔などを打合せて誓ふ式

娵時云々—禮記内則篇にある語

悦ぶ—昆布にかく

かみ様—母様

と、呵られて悔りし、「口でまだ〳〵申さんより、誓文のため只今御前で金うたふ」兩「ヲ、尤。いざ金打」と兄弟刀拔寛ろげ、打合んとせし所を、母手に縋り押止め、「ヲヽ出來した り〳〵。生先祝ふ若者共金打はせぬ事ぞ。其眞實を見るからは最早心も落付たり。嬉しし嬉しし。今こそ母が樂と成し二人の子、元服させて此方の痞が下た」と悦びの、笑ひ顏さへ哀なり。母「惣じて若き男子に、妻子と云ふ羈を早く持せねば、身持を輕く命を塵共思はぬ物。虎御前や少將とは深き契約有こそせめ、押出して自らが嫁と呼ねば定まらず。娵時は必父母に申と禮記とかやにも有と聞。今夜是にて祝言の盃、取囃し祝ふてたべ」と、枕の文匣に疊み置く直垂二領、「是は兄弟が爰はの晴と嗜し。一世一度の妹脊結、二人の嫁御、衣紋風よく著せ給へ。狹く共あの部屋を嫁入御殿になぞらへ、肴は悦ぶ打鮑。折しも二の宮の姉がくれたる小樽をも、心で結ぶ蝶花形。母は持佛の前に寐て、河津殿の位牌諸共に、ざゝんざの聲聞せてたも。ヤァ京の小四郎おのれは方々寄方多し、今夜は歸つて重ねて來い。あれ日も暮かゝる。里の迎ひも來さき、兄役に祐成夫婦部屋へ〳〵」祐「あつ」と云へ共立兼て、恥て赤らむ横顏を差込む虎が袖の下、虎「是は〳〵大人氣ない。かみ樣のお世話に成事か。手管の逢ふ夜思ひ出し、手ばしかふ遣らんせ」と、手を取交し入ふりを、

なんどりと―おとなしう

身の、此比子共の狩場の留守、あられふ物か推量して、母も親の内ならば、可愛と少シは思ひやれ。母が此病といふも偽の誠ぞや。五臓六腑の病ならで、病はなしと思ふかや。雨風の氣に當り、物の祟の病には、療治も有藥も有。子ゆへの闇の病には、唐高麗の名醫をよせ、萬巻の醫書を探しても、藥の方はよも有まじ。藥に成も二人の子、病に成も二人の子。起臥立居明暮に病と成て痛めんより、鴆毒と成て一思ひに殺してしまへ兄弟」と、かつぱと臥て泣給へば、祐成時宗虎少將、「こは勿躰なき御詞」と、疊に頭を打付て沈入たる連涙。無智無慙の小四郎が義理にも泣ぞ道理成。祐成袖を絞り兼、「御教訓と申、御不便餘つての御恨。暫しが中御心を苦しめし段後悔恐入候。敵を討て命を捨るも父の孝養。母を悦せ申さんため御機嫌損ひ命を捨て益もなし。祐成に於ては敵討のこと、ふづゝと思ひ切たるが、五郎いかに」と有ければ、不請〳〵に佛頂顔。五「ハテ生る共死ぬる共一所と云ひ交した兄きの分別、變るからは獨物にも狂はれまひ。どう成と勝手次第お返事なされ」と、尖り聲。母「あれ〳〵あれこそ母が病の神。元の如く勘當」との給へば、虎少將、「エヽ悪い聲付。同じ物の云ひ樣で、あゝ畏たとついなんどりと、お受は成ぬことかは」と、諫めても猶頬癖。祐成大聲上、「母上のお命の障り御勘當に懲ぬか」

取る手も云々—初春の初子の今日の玉箒手にとるからに搖ぐ玉の緒(新古今集)

あふれ者—無頼漢

ふ寄れ此方寄」と、紙帳のつまより兄弟が、手首を捉と取る手もゆらぐ玉の緒に、まだ力有物ごしにて、母「虎御前少將、はれ〴〵と此紙帳取てたべ。早う〳〵」との給へば、二女「あひ〳〵」。返事するまも老人は、いとゞ心も短き釣手、手もむすぼれて、急げば廻る「あら鬱陶しや」と、押退出る母の顔、目の中慥に色合も常に變ぬ息ざしに、病人よりは側の人、はつと心ぞ煩ひける。母は怒の目に涙。「ヤイ兄弟、嚴しげに北條殿の御藥何にせう。母が病とは呼返さん爲の空言。譬へば他人でも、友達知音の大病死病と聞時は、萬事を捨て駈付る是が人情、世に住習ひ珍しからず。母が末期と驚て即時に歸るを孝行とばし思ふか。嘸や外の用迚母が呼には歸るまい。殊に今度の御狩の供は、工藤左衞門祐經を討ん爲の謀反とな。五郎めは勘當宥して昨日今日。此異見は幾度か色を替、品を替て云ひ盡し、今更同し事いふに及ぬ忘れはせじ。兄が勸たか弟が勸めたか。合點の行ぬ五郎めが頬魂、始の氣が直らぬな。當時祐經は一國の大名何百騎といふ大將。そもおことらに討れふか。一僕連るか連ぬ身を、祐經方のあふれ者、忍び討に打たる迚其時誰を恨るぞ。いふも愚河津殿は坂東一の勇者、兩國かけし大名なれ共、奥野の狩の歸り足、欺し矢は詮方なく、命を失ひ給ひたる、父の最期を手本にして、昔思へば老の

臨終の一念云々—死際に念佛して彌陀の光明に助けられ又十遍念佛を唱へて諸佛の來迎を待つ(觀經)
攝聚—攝取の誤

お忘れなされな南無阿彌陀」と、涙に濁る聲の色。母上息も苦しげに、「去ばよ老の病の床、後世忘るゝにはあらね共、臨終の一念に攝聚の光明を期し、十念の枕のうへに聖衆の來迎を待事も、此の世の念を拂ひ捨、一心亂れぬ上にこそ、本願にも逢ふべけれ。我子の絆にからまれて、暗より暗に迷ふ身は、三尊の來迎より懷しの祐成や、廿五の菩より床しの時宗や。過ちでもしたるか心許なやあら遲や」と、物ごしも早弱〱と、子故に惱む狩場の雉、おのが命は忘れけり。夕暮毎に兄弟を待馴しには彌增て、虎少將が氣も急れ、心も空に日は傾ふく。二女「ハアあの鳴る鐘は早七つ。なぜ遲い」と走出、表に立てば內氣遣、內には心落つかず。門の出入幾度か鐘の數々繁かりし。仇は返つて情の馬、曾我兄弟が孝の鞭、切所難所の六里半、只一時に駈させ馬を道に乘捨、つゝと通れば虎少將、「そりやこそお歸り。なふ申、御病氣賴すくなく、かういふ間も危い」と、聞も悲しく胸騷ぎ、兄弟「ヤ小四郎殿深切の看病忝し」と、挨拶一禮そこ〱の足音靜かに、床近く紙帳のつまに手を添て、兄「祐成歸りて候」弟「時宗歸りて候」兄弟「御心は如何ぞや。など御藥は參らせぬ。北條殿より給はりし奇妙の藥是に有。我々不便と思さば此藥召上られ、一日も御命延へてたべ母上」と、涙を隱し申ける。母「何兄弟が歸りしとや。近

風誘云々—病母の末頼みなき形容

むずおれ—俄に折れる

孫晨—字は五元公詩書に明にして家貧しく冬藁に臥す（三輔決錄）

胸詰らしく—胸詰らしてか

上刻と、八卦占かた八ツ響く、鐘に誘はれ、風誘ふ 三重 朽木の櫻春過ぎて、又いつの世の花をだに、待に甲斐なき曾我の里。痛はしや母上は河津に別れしゆふべより、廿余年の物思ひ。貧しきうへに世を忍ぶ、兄弟の子の成人を、急ぐは親の老と死を、急ぐと知らで身に積る、雪折松のむずおれに、俄病の萬死の床。樂みは似ぬ孫晨が、藁屋の紙帳漏りくる風。そよと寐返り息つぎも、今を限りと聞えけり。折しも大磯の虎化粧坂の少將、狩場の留守のお見廻も、見捨がたなく留りて、さま〲心を盡せ共、名染なき身は病人の、お氣扱ひと差控へ、團三郎は富士野の使。二の宮へ人を走せても、夜明より夫婦ながら、留守と計に否應もなし。うつにも舞ふにも京の小四郎、紙帳によりては鼻いき伺ひ、小「まだ歸らぬか祐成時宗。扨も遅し」と表に出ては南を見やり、足を空に馳廻り、小「是々二人の女中、我等は現在母の腹より出たれ共、五郎十郎とは種替り。殊に久敷通路もせず、漸〱此比來懸つて出來し顔の孝行だては兄弟衆の思はく、世間共に譯立ず。名染なけれど兩人は、嫁と云ふに頭振れず。年寄れても女子どし、遠慮なしに頼入。第一が臨終の勸々」と云ふに付、二女「扨ははや此世の頼も切たか」と、心細さの胸詰らしく、紙帳越に口差寄せ、「追付御兄弟お歸りに間もあるまじ。それ迄も先一筋に後生のことをお心に、

飼—飼料

鞍そばへ—鞍にふざける

臨命終—今はの時、王位臨命終時不隨者（大集經）

如意—人手の形したる器物にて僧家に用ふ

自救—身を護る不動の咒文

惘れ—開きにかく

弟急度目配し、「必定此馬に斷落させ、殺すか不具か恥かゝせん謀。辭退せば猶恥辱」と祐成會釋し、「天晴御馬候。かゝる名馬を申受、浪人の我々飼も舍人も不足なれば、路次の間借用」と、外道月毛を引寄せ乘らんとするに寄つけず、鞍に縋れば鞍そばへ、前へ寄ばすつくと立、後へ廻れば跳散し、踏立蹴立高嘶き乘んづ氣色はなかりけり。十「南無三寶、まへに大敵後に母の臨命終。一代一度の身の大事、弓馬の氏神鶴が岡、當所には富士淺間、箱根兩所駒形權現、分身は百和龍王右鵠王左鵠王、本地大聖文珠菩薩の獅子の駒、御手の如意は鞭と成、不動明王の縛の繩、手綱に變じ給へや」と、自救の偈を繰かけ〳〵、轡の立ぎゝむんずと握んで、搖りと乘に恐れなく、頭を垂て身を伏し佛神力ぞ有難き。時宗嬉しく「蛇に綱付ても乘らん物」と、婆羅門栗毛の口によれば跳あがり、倬立尻込あたりを蹴立る馬煙り。つゝと入て太腹をさけて退けとはつたと蹴る。左しもの惡馬もよろ〳〵〳〵、ひるむ所を引寄ひらりと打乘て、兄弟鐙ふんばつて、轡を並べ控ゆれば、祐經案に相違して、只うつかりと大口を、惘れ果てぞ見えにける。祐成勇ば時宗きほひ、十「サア〳〵團三郎汝は是より秩父殿和田殿、其外の旁へ一禮申て假屋を仕廻へ。サア來い五郎」五「いざ御座れ十郎殿」と、一鞭くれて乘出すも、日脚も早き午未我身の運も

酒の意趣云々―酒に託して敵討の方法を述ぶ
二日心―二日酔の氣味
得て是に云々―大抵は之に應じて失敗する
千疋―悍馬を抑へる
飲伏た―抑へつけた
朝込―早朝留に祐經を討つ事を仄めかせり
大寄―酒宴
八寸―四尺八寸
沛艾―跳り上る意にて暴馬にいふ

思はんすも氣の毒な。お侍の義に迫るも、浮世の戀に身を碎くも、命懸るは同じ事。譬へば酒の意趣有中、二日心か公用か、醉てはならぬ首尾もある。其足元を見て張合懸ての平强。得て是に手を取わいな。そこらを千疋繫いで、恥をかくが手柄の基。さあ飲伏たと油斷させ、心を宥す門立か。思ひ懸なき朝込、ずつと仕かけ、差引成ぬ手詰の盃。腕を捻上首を押へ、つぎかけ〳〵奈落の底迄飲伏せ、引起して止めの盃一獻さいて、しやんと取。是を本望本酒の手柄といふわいな。去ながら此菊も、いつぞや山下宿で三日三夜、和田さんの大よせに、朝比奈さんの無理酒には、誓文とんといきついた」と、笑ふて其座を寛ろげしは、物に馴たるこなしなり。此詞に兄弟差詰つたる氣を開き、「母の痛はり心ならず。參會は重ねて」と立んとすれば、祐經「暫く〳〵、孝行の程感じ入。祐經も一ッ家の端外の樣には思はず。本海道は遠ければ、山路の近道急ぎの爲、某が祕藏の名馬狩場まで引せしを、兄弟に餞せん。外道月毛婆羅門栗毛是へ〳〵」家來「あつ」と答へて引出す。其丈八寸余り、肉十分にふし高く、沛艾に口こわく、乘人もせぬ野髮の馬、一樣の鞍皆具、遣繩追繩口取繩、つらを振ば六人の、舍人もよろめきひつ立られ、前脚かいて齒をたゝき、人を威して鼻あらし。鬣より洩るゝ眼の光、角なき鬼の如くなり。兄

さもしげ—見苦しく

粉はい—粉灰

鍔—刀の鍔元を固むる金具
切羽—刀の鍔の柄と鞘とに當る金物
いはれぬ—無用の差出口

案所でなし。京の小四郎の不所存人さへひつ添て看病。此人にお二人が孝行劣り給ひては、冥途迄の御恨天の冥加も恐ろしし。祐經殿に和を乞ふてお立〳〵」と勸むれば、祐經大きに力を得、「是々兄弟、父の河津は流矢に當りし共、俣野の五郎が討たり共分明ならぬ親の敵。差當て祐經を狙ふとな。よし〳〵さもしげに云分はすまじいぞ。サア打懸よ切懸よ。音に聞程にもなし。怯れたか曾我殿原」と、足元見たる廣言。五郎堪らず「神妙候祐經」と、踊り出るを押止め、十「母の便を何と聞。狂亂か弟」五「いや〳〵微塵粉はいに成ればとて、敵に聲を懸られ、悄々立ては骸の恥辱。放されよ十郎殿」十「ヤイ身の譽れも恥も捨し、娑婆と冥途の父母を悦ばせ奉らんと、幼少より今日迄兄弟が念願。はや忘れしか時宗」五「ハッアそうじや。エヽ殘念至極、口惜い祐成殿」十「無念な時宗。淺ましき曾我の運命や」と、淚の齒ぎり身を振はし、握りひしぐ太刀の柄、拔かけ〳〵はつし〳〵と鍔打は、鎺切羽も一時に碎け散るべう見えてけり。龜菊手に汗握しが、禿の時より善惡の事に揉れて驚かず。しやんと立て「申お二人樣、顏を赤めてなんぞいの。たんと無念そうに見へるぞゑ。里通ひなされし程にもない。是がなんの恥ぞいの。いはれぬ差出か知らね共、他事ない虎さん少將樣。龜菊が一座に居て、うつかりと見ていたかと

形は人云々—祐經をさす

へ、今はの母に親子の對面、臨終の望叶へば身の功德共成申さん。エヽ團三郎が一生の奉公を仕損ぜし」と、血走つたる兩眼に、涙をはら〱とぞ流しける。祐經「ムウ老母の病氣に付兄弟を呼戻すとは、此方に割符のあふ事僞ならず。其外尋る子細有。所詮鎌倉殿御前にて吠させよ」と、ひつ立てんとする所に、五郎時宗何としてか見付けん、坂を下りに駈來り、列卒の兵五六人ひつ摑んで、手鞠のごとく打付〱、團三郎が繩も皮も引ちぎり、八幡の四郎をはたと蹴倒しどうと踏へ、梢も搖ぐ大音にて、「鹿の皮被きし人を、鹿と見るは愚の眼力。曾我の五郎時宗は、形は人にて魂の鹿をよつく見る。鹿こそ通れ。十郎殿おり合給へ」と呼はれば、祐成續いて走付、祐成「兄弟揃ふて珍しき對面」と、太刀の柄に手を懸れば、祐經が郎黨「主を討すな餘すな」と、二重三重に懸隔ひつ包んで立騷ぐ。團三郎割て入、「アヽ〱旦那麁忽なされな。今日のお命團三郎が預る。御一生の大事のお使。古鄕の御老母一昨日の夕暮より、俄の御病氣次第に重り只今も計られず。千に一つも御本復有まじき御覺悟。母「今生の名殘、兄弟に一目對面せん、萬事を振捨立歸れ。是背かば時宗は元の如く、十郎諸共生々世々の勘當」と、絕々弱る御聲を聞捨て駈付し」と、聞よりはつと力も落、兄弟目と目を見合て、寐ぬに夢見る心地なり。團「アヽ御愚

喉の下等ー不詳誤植なるべし
周武王云々ー武王は文王の誤、此話史記周紀にあり
孔子云々ー魯哀公十四年西狩獲麟と春秋にあり
蜜ー密の誤

にて身を包み、喉の下等人の面、見知りの有曾我の譜代の團三郎。はつと見る目も濁江の、沼に漂よふ龜菊が、土にも入たき心地なり。祐經元より目かど強く、「周の武王は渭濱の獵に大公望といふ賢臣を生取、孔子は魯國の狩に麒麟を得られし。工藤左衛門祐經は富士の御狩に、曾我兄弟が下人鬼王が弟、團三郎といふ四ッ足を生捕たるは、武王孔子に劣らぬ某。ヤイ畜類御吟味蜜しき惣構、鹿の皮を被り、忍び入らんとせしは根ざしたる所存有よな。眞直に白狀〳〵。僞るに於ては盜賊類になし、見苦敷刑罰に行ふべし。吐せやつ」とぞ睨付る。團三郎少ッ共臆せず、「鹿の皮を被り畜生の眞似する程の不肖の身、見苦敷刑罰を左のみ耻辱共存ぜず。去ながら盜賊類に落されては、浪人の主人兄弟が惡名も悲ければ、子細包まず語り申さん。祐成時宗は御狩拜見の爲、情有大名達の組下に交り、此狩場に罷有。古郷に殘す一人の母老躰に俄の大病。時を待間の命の中、子共の顏を一目見て、末期の水をも受たきとの歎。夜前夜半過に曾我を出、山川分たず馳付ては候へ共、慌たゞしく不思議立頰付にては、惣木戸の御番所御咎を憚り、雜人の屑り捨たる鹿の皮を身に纒ひ、柵を越へんとせし所を見付られ、多勢是非なく此有樣。なふお女郎、各々は情有流れの身、知る人も多かるべし。知邊も有らば兄弟に此趣きを告傳

心ざし—祐經を庇護する志
物にならずの野良者—役に立たぬごろつきのなまけ者
我も好み云々—龜菊も曾我に好ある故祐經の詞耳に障ると也
せごう—背甲なるべし

ば、祐「ハア、拜む〳〵。ゆめ〳〵悋氣の文にてなし。祐經が身に取て一つの難義。いでさらば懺悔咄して聞かせん。定て大磯の虎化粧坂の少將が噂でも聞つらん。曾我の十郎五郎某を親の敵と、狩場の群集に紛れ入て狙ふと聞。安と彼奴等に呉る命でなく、身用心の爲君のお側を離れず。夜るは御所のお次に寐る其究屈さ。生れついた鼾かき、嗜めば咽につまつて鼻へは出ず、耳で鼾もかくの仕合。然るに鎌倉に殘し置女共が、心ざしの過分さ氣の働の利發さ。曾我兄弟が種替りの兄、京の小四郎といふ、物にならずの野良者を賺し、金銀取らせ曾我の老母が方へ犬に入れて付置しが、母は血筋の恩愛に欺され、何事も隱さず曾我が家內、箸のこけた事迄、京の小四郎が內通聞は皆女共が智謀。此上にまだ悅び。彼老母十死一生の大病にて、死目に逢はんと兄弟を呼戾すとの內通。十郎も五郎も孝行な奴。聞と堪らず、最早曾我へ歸りつらん。神明佛陀の守り目深き祐經、疫病の神送つて心は武藏野爰は裾野。世間廣く今夜からどこに寐ても安樂世界」と、語るを聞けば曾我の噂、虎少將の由緣には我も好は外ならず、耳に答へて疎ましし。列卒の中より八幡の三郎が弟八幡の四郎、三股角の大鹿荒繩懸てひつ縛り、「せごうの兀たる盜人鹿。惣構の柵をくゞる所を、大勢おり合生捕て候」とひつ据る。其形頭胴躰鹿の丸皮

龜菊が髪筋―女の勢力の強き事、徒然草に女の髪の毛にて大象を繋ぐとあり

こけざる―赭げると老猿

第三

小男鹿のいる野も山も聲々に、列卒を揃へて狩にけり。工藤左衛門祐經「打まぜの狩には鹿論も事喧し」と、便よき岡邊に場を構、手の者組徒に鹿猿狩せ、遊君木瀬川の龜菊と、床几を並べ酒肴前につらね、祐「ヤア〳〵者共色有君が見物。豕でも鹿でも一疋生取り、龜菊が髪筋にて繋いで見たし。精出せ〳〵褒美を呉る」「畏た手取にせよ」と、我身知らずの猪武者、猪に駈散され鹿に突れて吠るも有、熊と組で眞逆さまにこけざるが、頬骨掻裂血まぶれの、面は猿より赤恥かいて迯るも有。口は手柄のゐい〳〵聲、おめき叫んで三重狩暮す。獵のきかぬも時の興。祐經盃を受ながら「なんと龜菊、諸大名の假屋〳〵、呼るゝ傾城白拍子も多からん、身に揚られたは仕合。猪狩肴に酒盛とは、鎌倉殿の御臺所も叶はぬ榮耀。か程に思ふ祐經に廻り樣がそうでない。そでない〳〵」と寄添ば、龜「否々上べ計の眞實なしとは是此殿。毎夜〳〵龜菊には留守させて、お前は御所の假屋に寐て、つるに寐姿見せもせず。思ふとはしら〳〵しい。鎌倉の奥樣の關の戸が嚴しいか。奥樣の文をそれ肌に付てじや。狩場では此龜菊が關破り」と、懐に手を指入れ

待宵—待宵の小侍従の歌「待宵の更行く鐘の聲聞けば歸る朝の鳥はものかは」(平家物語)

岸を踏崩し中ごし迄、ころび落れど兩方放さず放しもせず、さす股に踏張て暫らく息をぞつぎにける。下には安清姉御ぜん身を冷して待懸る。詞「サア來」と聲を懸け、一揉二揉枯木を倒すごとくにて、梶原が目の前地響打てどうど落る。透さず近江を取て抑へ、馬乘に跨がれば、平次景高はつと驚き、長追せば猶氣味悪しと、跡をも見ずして逃失せける。二の宮續いて追駈る。詞「暫く〳〵。一大事の御用先。逃ば其儘逃されよ。なふ二の宮姉御前」と、鬢鬘掻投捨、「我こそ弟稚名はおん坊、久上の寺にて法師に成禪師坊と申者。樣子は緩々申べし。梶原が指圖にて、當山藤澤寺の時の鐘、九つを八つに打替、安清殿に腹切らせんとの企。空は曇つて見へね共、まだ日は晝に傾かず。早く狩場へお出」と云へば、二の宮はつと嬉しく、「近江は刻限を違へし大罪人。法のごとく討捨」と、取て引寄首打落し、二「これも曾我の敵の枝。暇の印」と打出し一さんに駈出す。二人も跡を見送りて、泣て別るゝ雨雲の、絶間に漏る鐘の聲、數へて見れば二ッ三ッ、四ッ七ッ八ッ、又九ッと勇み行き、遠ざかり行駒の足、戀せぬ身にも思ひ知る、飽ぬ別れの曉の、鐘に涙はかゝる共、夫の武運長久と、又逢事を待宵の、鐘に契りて別れける。

至ること遲し」謠曲熊野に引ける百聯抄の句

與力ー梶原助勢の兵

二天ー多門天持國天也之に增長廣目を加へて四天といふ

を摑み拳を握り、せきくる涙とゞめても止め兼て見へにける。梶原平次景高揃の足輕數十人まつくろに駈付、「ヤアくく二の宮時切の早打、刻限相延御注進の手筈相違。其咎輕からず、切腹させ首を富士野へ持參せよ、とお留守居中の評定極り、檢使は梶原承る。腹を切れ」とぞ罵しりける。安「いふ迄もなく刻限違ふは安淸も覺悟。人の腹を借ても切らぬ、人にも切て囉ふまじ。首持參迄もなく、賴朝公の御前にてさつぱりと切て上覽に入る首。御邊などが苦勞にも預らぬ」と、又駈出すを 景「待々々。腹切かぬる臆病者、家來共引つゝんで打殺せ」家「承る」とひしめけば、女房同じく二の宮にひつ添て、打合さんとせし所に、禪師坊いつの間にかは登りけん、藤澤寺の岩頭に大音聲。「是々麁忽なされな。時が違ふた」と呼はれば、與力の下人聲々に、「ヤア面倒成下主め。住持を始同宿迄繩は解て助おる。投殺せ踏殺せ」と、摑付を取て引寄せ、禪「ゑい」と擔いて「うん」と投ればころくくと、二の宮が足の前轉び落るは梶原が揃の足輕。「扨社」と安淸も、上を白眼で突立たり。續いて懸るを組づ轉づ眞逆さまにずでんどう、小首を土に打おつて、きやつと計に死してけり。小藤太怒つて「己に負てよい物か」と、放逸無慚の瞋恚を張つてしがみ付。禪師坊二天四天の威をかつて組合たり。上に成り下に成り起つ轉んづ組合しが、片

といへば—あア言へば斯ういつて

かた—運

閑雲云々—雲に閉ぢられて鐘が聞えぬ、「鐘は隻雲を隔て〻聲の

らぬ夫婦。〽然るうへは見苦しげに緣者の依怙贔屓罷成ず。兄弟老母の身の上どう成ても構はぬぞ。必我ばし恨むるな」と云ひ捨て駈出す。二「待て下され去れませう。武士の情の離別とは、夢にも心付にこそ。去狀を見てはつとせき、安淸と緣切れては、祐成や時宗が片腕を落されたるも同じ事と、悲しやら口惜しいやら、一圖に腹の立計。外の譏無き樣に他人に成て兄弟が、力にとの誠の心、淚が溢れ添い。譬へ此身には不義有と成共、いか成疵を付て成共、兄弟の爲ならば離別してたべ去つてたべ。暇の狀をたべなふ」と引止むれば、安「見苦し。といへば斯くいひ、時切の御使仕損じ腹切が見たいな」二「のふ情ない事いふ口で去と一口云れぬか。侘言しても夫には添たひが女の習ひ、望で去るゝ淺間しさ。男も女も曾我一家の、是程かたの惡さは」と、包み兼たる淚のさま、下女が目荒き帷子に淚の玉をふるひけり。〽安淸不便に堪かね、「ヲヽ神妙にも聞分し。今日より他人の印ぞ」と、受取渡す名殘も、袖もふり切出る頭の上、一聲驚く鐘の聲、二の宮はつと指折て、三ッ四ッ五ッ六ッ七ッ八ッ「南無三寶早八ッか。九ッの鐘を何としてか聞洩せる。閑雲鐘を隔つといふ事を忘れしか。富士野へはまだ程も有。刻限違へば榛谷との口論無下と成、一生爰に極つて、曾我の運命我運命一ッ時に盡たよな。口惜や無念や」と、大地

官仕―奉公

馬氈―被の上の敷皮

進構ひ―故障をいふ

女の身、是に上こす恥辱はなし。二人の弟が豫ての大望、後見は石鐵の楯よりも、賴に思ふた甲斐もなく、お暇と有からは兄弟が事も賴れぬ。見る影もなき曾我殿原、よしない緣を結びしと悔しい顏の色めも見せず、もてなし給ふ心に惚て忝く、起臥立居一命懸ての宮仕。見落しでも有事か、貧き曾我の惡目が、今日といふけふ見へ初めしか。兄弟への面當か、兄弟を見放す氣か。佗しき身なれど河津が娘、道理が立ねば暇の狀は受取らぬ」と、馬氈に投付縋付。憂さと恨の諸手綱絞る淚ぞ哀成。安清せいたる顏色にて、ひらりと飛下木の根にどつかと腰打かけ、「暇を吳た女、詞も交さぬ筈なれ共今迄の好。聞ずや今朝北の丸にて曾我兄弟より事起り、蒲の入道の御切腹鎌倉の騷ぎと成、御詮義の筋目に依つて、兄弟が命の大事と成子細有により、密かに老中の耳へも達し、首尾能事を治たく、心は先へ飛折ふし、御臺所より、狩場の御注進八ツ切との御諚。願ふ所と有難く畏てお受申所、榛谷の四郎差構ひ、「曾我に緣者の此お使心もとなし」と、押へ諍ひしより心づき、北の丸の殿中にて見事に去狀書たるは、緣者を離れ諸人の疑ひ晴し、他人の義理合計を以、思ふ樣に曾我が肩を持ん爲の離別。飽も飽れもせぬ妹脊の中、此外安淸に別心なし。往還驛路に姿を晒し、吠廻る程添度ば、元のごとく二世も三世も變

八相—八方

ところてんどう—顛倒にかく

妻—夫の事

鹽手—鞍の前輪後輪に著くる紐の所

じ」と主從拔連れ打て懸る。妻「ヤア夫を出拔く梶原、長刀の刃を戴け」と、八相に振て懸る。上を學ぶ下女、腰の刀ぬき放し大勢相手に主從二人、切結ぶも女業。禪「こつちへ任せ。是こそ望む心太、商人が手並を見よ」と、山椒の粉胡椒の粉、ヲツ辛芥子それより辛ひ韓紅、唐辛の粉を摑込、水桶に酢も醬油も掻交〳〵、突出シを水彈、群り懸る雜人原顏を目當に、しゆつと突出す胡椒辛子の水鐵炮。唐辛子の石火矢ゆん手へ廻つてしやつぷり、め手へ廻つて又しやつぷり。鼻を突拔嚔噎咳逆、辛い涙に目玉も飛で、咽はひる〳〵火花を散して三重防ぎける。口も明れず眼も眩む。蕎麥切料理に打立られ、ところてんどう敗亡し、梶原主從八方散々迯失れば、「餘さじ遣じ」と禪師坊、跡を慕ふて追駈ける。妻「中村宿の方よりも、馬煙り霞を蹴立矢を射る如く乘來るは、妻の太郎安清殿。サア生るか死ぬるは此所。あの馬留よ」と云ふ程も、家來に乘ぬけ稻妻走り、尾筒を左手にから卷ば、下女は鹽手をかい握み、止ても止らず十間餘り、引摺れても猶放さず。跳上る馬に輪を懸て鞍づよに堪へしは、造り付たるごとくなり。安清はつたと白眼んで、安「卄里を三時切のお使、仕損じては一期の不覺。恥を知たる男子成ぞ。尾籠至極」と乘出すを、又引止め鐙に縋り、妻「つれないぞや二の宮殿、恥を知は男子計か。去狀受る

青嵐―夏の大風
白柄―知らせるにかく
お身が云々―お身が大じ
空さぬ―ぬからぬ

繋ぎ、「聲立さすな一所に追込錠卸せ」と、引立奥へぞ入にける。嶺は吹まく青嵐、海道は蹴上の土煙、一文字に來る人は二の宮の姉御前。夫の安清が暇の狀三行半分讀目も闇く、涙絞つて鉢卷しめ、恨を夫に思ひ白柄の長刀かひ込、走道芝照付て火を踏ごとき燒石原。下女は附傘息切し、「申奥樣ちとお休み。何を申もお身が有ての事。目が眩〳〵息が絕へる」と呼はり〳〵行先に、舁すゑたる梶原が早乘物。妻「サアあれが我夫」と女房乘物取廻し、「是太郎殿安清殿、今朝曉の鳥鐘も一つ枕に聞た中。何を惡目に離別とは。女の夫に去るゝは、軍に後見せた同然。削つても此恥辱は遁れぬ。日影者の曾我が姉、御勘氣の者の末などと、傍輩の侫人共に云ひ廻されての去狀か。いづれの道にも直に返事が聞たい」と、長刀構へ立たる所に、茶やの床几をそろ〳〵と梶原平次景高、長刀の柄をむずと取、「此乘物を二の宮と見違へて、おのれと名乘因果晒し。梶原平次景高を知らぬか」と、呼はれば下人共、一度にはらりと取廻す。妻「南無三寶人違へ」と、胸は騒げど空さぬ顔、長刀をもぎ放し飛退つて身構へす。景「コリャ女、侫人の傍輩とは誰こと。サア誰々を指て侫人。惣じて曾我に好みの奴原、世に有者を妬嫉僻根性。安清の今日のお使も眞直には云ふまひと、某遮つて、急ぐ御用に對して狼藉者。餘すま

足だまり—木の根を踏へ所とす

下から云々—下下の人が見ても近江は小人物に見ゆと也

あの藤澤寺へ登り、住持に逢ふて申そふは、「工藤梶原兩人が頼入、今日九ツの刻限を八ツに打替給はらば、恩賞せん」と賺し込、彼高所から下を見下し、馬でも駕でも早打と見るならば八ツ鐘を撞せよ。其時は我分別有。若シ又住持が否と云はゞ片端に引括り、御邊鐘を撞たがよし。下人も連て急げやッ」と景高は心太屋に入にけり。近江は僕を引具して、見上る寺の總構數十丈に山聳へ、常に參詣稀なれば、偶々登る人とても道は木の根の足だまり。眞砂交りに石高く、赤土露に蹈迄り岩角荒き荒男、手を引腰押やうやうと、門外に吐息つぎ、「ハヽア見ゆるは三保の松原清見寺。釣船も漕で行。扨涼しひは氣が晴るは。海道は糸引如く、嶺から見れば麓の人が小そう見へる」下から見るも斯ぞとは、我身を知らぬ愚人共、方丈に案内す。住侶立出對面ある。近江の小藤太慇懃に、しかぐ\の旨相述ぶれば、住僧更に心得ず、住「工藤梶原の御頼共覺へぬ物かな。鎌倉には鶴が岡の撞鐘を以、御番諸役の常規とし、當寺の鐘は二十里四方諸職人諸商人、往來通路の刻限を極め、君より寺領頂戴す。私に刻限を違ゆるは諸民を迷す大罪。勿躰なしく\叶ふまじ」と、云はせも敢ず飛掛り取て捻する、小「御出頭の工藤梶原殿のお頼を聞まいとは。家來共、坊主めら一人も殘さず引括れ」畏て取ては締付捻倒し、一人も洩さず猿

ところてんがう ―心太にかく、てんがうはいたづらをいふ
さ鉢―皿鉢
ひら皿―ひらににかく
まつかへさまに ―あべこべに

てはや乗物、見世前にどうと下し、人足に戸を開かせ、乗手は白布に胴骨巻たる仰々しさ。客「コリヤ〳〵亭主鎌倉から富士野へ、乗物でも馬でも早打は通らぬか。隱さず共申せ」といふ。亭「ハテ損も德もない事、見たらば何ンの隱しましよ。早打にも遲打にも今朝からはこの乗物計」客「よいは〳〵水一つ」と振仰いたる顏と顏、小藤太急度見付、「ヤ梶原平次景高公」景「さいふは近江の小藤太な。能所で行合ふた。咄す事有近ふ寄れ」と、招き寄すれば禪師坊、是ぞ聞及ぶ敵の家來。樣子は聞たしところてんがうする顏で、によつと突出す鼻の先、「こりや何しおる」と、梶原が睨付る眼はさ鉢皿打落し、豆の粉はいに砂まぶれ、「ひら皿御免」と入にけり。「して〳〵狩場に別條ないか。いづかたへ」と問ければ、小「さん候主人祐經、本多と矢を諍ひし大鹿鎌倉へと承り、風聞いかゞ聞て參れと申付、鎌倉へ」と云はせも敢ず、景「其鹿ゆへに祐經殿降て沸たお仕合。蒲の入道にも辯舌を以て腹切らせた。曾我兄弟の奴原も、此筋から罪に落し縛首打つ工面。去ながら氣の毒は二の宮太郎。御注進の使、八ッ切に御狩場へ行筈。女房を去て曾我と緣は切たれ共、彼を遣ては兄弟が事惡ふは御前へ申まい。某先へ駈拔てまつかへさまに言上し、曾我の根を絶さんと只今狩場へ行所。二の宮がまだ此所を通らぬこそ重疊〳〵。御邊は

列卒―精を入れを洒落に言ひかへたる也
呉須手―支那できの磁器
高すへて―高を括つてか
濳上云々―えらさうに食つたが其反對で金持たぬと也
身の櫨云々―身の恥やら色々の狀を面白く語ると也

まきがり、隨分商ひに列卒を入、往來の人の腰錢を狩とるべしとの御諚にて、見世先に富士を作り、御狩の躰を人形にて、水機關に仕懸てお目に懸る。サア只今始り」と聲可笑しくて拍子とり、御寮の其日の御賞翫、青葉涼しき心太、おなかよしげに一二膳、白皿受て召れたり。御相伴には五郎丸、赤繪呉洲手の錦皿、下し給はつて是で喰ふ。價は八十五文が所、燃立腹を涼やりと、四尺八寸の水船一尺八寸の突出し、十文字に突ままに、白木の丸箸右手の小腕に持添て、酒もすごし奉る。秩父殿は精進汁、花柚散して進まれたり。和田の一門九十三膳、代物合せて三百八十四文なり。千葉小山宇都の宮、いづれも辛子はお嫌ひにて、砂糖大豆の粉のつこ此、この〳〵高すへての暴れ喰い、皿も錫猪口も錫、箸打音がざゝめいて、さしもに廣き富士の裙野に、膳の据場はなかりける。去程に三千人の列卒の者、三日前から仕過しの濳上のまつかへさま。巾著振ひ底を叩いて、是で御免と侘るも有、身の櫨紅葉色々の品を竝べて人形に、人の氣を汲水車、水機關も鹽梅よき舌を廻して語ける。亭主もほつと息つぎに上下を見廻し、「あれ〳〵〳〵東から、乘物に綱付て人足が引てくる」小「ムウ乘た人が笑止や。腸が揉切ふ」禪「ハアヽ急な用そふな」小「飛は〳〵」と云ふ方より、順風の帆懸船坂を下れる車の如く、ゐいさ聲し

まだ〳〵まだるい事（俚言集覽）
長刀の道—長刀の身にかく
移る—映る
空尻馬—人を乘せる駕籠の荷を負ふ馬
糸筋—細き流れ
柳影—西行の道の邊に清水流るる柳影の歌による
[illegible]—御食津の神
心太—石花菜にかく
聞召—めし上る

も、其儘狩場へ遣りましては、今の恨つらみより、増つた歎も有ふかと思ふ故、搔たぐる程氣が急く物。まだ〳〵待ていられうか。八平次お留主大事にせい。皆の者共賴ぞ」と、端女一人引具して、振かたげたる長刀の、道を反せて三重鳴る鐘の空四ツあがり藤澤や澤邊の水に富士移る、雪さへ暑き夏の旅、空尻馬も徒人も蒸くる雲に雨を乞ひ、一吹さつとくださるゝ。涼風價千金と、行惱む道の傍に、葭簀圍ふて杉葉葺、清水堰入水車、懸樋の竹の糸筋に滴る水の柳蔭、暫しとてこそ旅人の、立寄る所天下一、根本仕出しの家と、看板冷やり氷室山、氷突出す染付の南京すゞし錫の皿、樗折しく青楓楢の葉もりのたよりなし。霍亂藥咽にはや秋風通ふ見世商ひ。主は久上の禪師坊、今度の御狩に祐成時宗、年來の本意を遂げ、富士野は兄弟が命の露の置所と、便密に寺を出、御骨成共拾はんと、懸鬢髪に姿を替、十日余り此營み。御狩場見廻の諸方の使、大磯通ひ鎌倉の、商人旅人暑を避て、上り下りの其中に、祐經が家來近江の小藤太、鎌倉への歸るさ見世に立寄、「コリヤ〳〵亭主水呉い」とぞ大柄成。禪「やすいこと。同じくは心太になされたら、そつちもこつちも後藥。暑氣を去て渇きをとめ、二日醉のよろ〳〵も一膳食へば心太、賴朝公も聞召し、大名小名御相伴の御膳料理。前代未聞のところてん、扨も甘しと舌を

お身—二の宮をさす
語らひし—原本かたらしい
はした—下婢

ば、八「何れも同じ御奉公とは申ながら、斯る御使身に取ての大難」と、卷込暇の印の笄一通を差出せば、開いて見るや見もわかず、はら〳〵涙の顏振上、「お身も息才御武運も長久と祈りしはたつた今。御出仕の折迄も云ひ語らひし數々は、捨詞か空言か、恨めしの心や」と、卷ては解き讀〻では泣、去狀顏に押當て、思はずかつぱと身を投伏し、聲も惜まず泣居たる。有合ふ腰本下女はした、樣子知らねば泣れもせず、互に顏を見合せて、溜息ついたる計なり。妻「コリャ八平次、どふしたことで隙やると御口上は無りしか。樣子は知ぬか知たらば聞かせてくれ」と、氣を急ば、八「委細の事は存ぜね共、祐成樣御兄弟、蒲の入道殿に方人なされ、賴朝公を討奉らん企と、梶原殿の詞に依て入道殿には御切腹。それ故旦那は御狩場へ御注進のお使。八ッ切との仰せを請、榛谷と又口論有。御暇の狀印の笄、渡し申せと仰せより外には何も存ぜず」と、いはせも取ず妻「ムウ聞えた〳〵。安清殿は最早狩場へ御座つたか」八「イエ〳〵御前で口論最中。今比お立も存ぜず」と、聞捨てずんと立、脛高々と帶引締、妻「誰足早な女子共、長刀持て追付」と云ひ捨て馳出す。各慌組り付、「お里へでは有まひし、恨云ひにお出遊ばすは御道理と云ひながら、殿の御歸り待受て侘なさるゝが能筈」と、止むれば振放し、妻「退去も有習ひ、我身の事は兎も角

百八云々―百八煩惱にかけてぼんのくぼは項の凹所を云
鰐百倍―鰐に見込まるれば遁れぬ夫よりは百倍と也
女波男波―巴と朝比奈をさす
片そぎ云々―神社の屋棟に組合せたる木は必ず一角をそぐより片そぎといふ神明のあらたなるを云ふ
緣日―不動の緣日は毎月廿八日

す共我見込だには鰐百倍、一度はとらで置べきか」と、日數を泳ぐ生死の海、淺瀨は波も朝比奈が、待來る寄せ來る磯の波、どう〳〵、とゞろ〳〵と踏鳴す、女波男波の足はやく、鰭を並べてひともつれ、ともに御所へぞ參りける。

第二

片そぎの千木や内外の曇りなき、空も五月の二十八日、式日の御祝義に、一の宮太郎安清出仕の留主の間には、夫に代る武士の妻、心の障身の不淨、手水の水に灌ぎすて、袋棚より取出し、紐解大聖不動の尊像、「五月なり緣日なり」と、床に移せば女子共、供へのお神酒お鏡に、向ふ心の眞直成、冥慮ぞ暗に有難き。一の宮の姉御前心靜に合掌し、「夫の武運長久御狩の御留主預りて大切の役目、禍のない樣に、取別け弟曾我の祐成五郞時宗、一万箱王と申せし時、不動を工藤と聞違へ、勿躰なくも尊像を、切奉らんと迄思ひ込たる、親の敵工藤左衛門祐經を、首尾よふ討せたび給へ」と、只一筋の念願は、感應嘸と著し。家來白崎八平次遽敷、「旦那より火急の御用。參りつけねど御居間へ」と、御免も乞ず大息つるで畏る。女房驚き、「何の御用か氣遣はし。御口上は」と問けれ

業を沸す—怒に堪へぬ

時切—時が定つてる

はんがい—榛谷にかけて櫃の事

中は空—何の力もない事

初夜云々—初夜には諸行無常、次は是生滅法次は生滅滅已次は寂滅爲樂と響くといふ

乞受る。是非に遣ぬ」と引留たり。「エヽ面倒心急き、五ツの時に程もなし。廿里に餘る道三時切の早打、天狗の羽をも借たい所、時刻延して二の宮に腹切せん工よな。腕ぶし切放す奴なれど互ひに御用蒙る身。騷動のうへの騷動命は助ける爰放せ」と、捻ても押ても榛谷少ゝ力增し、縋付て動せず。お次に朝比奈身を揉で、歯痒くまだるく遣戸口より身を半分、歯噛を爲しても母の怖さ。ずつと引込によつと出してはずつと引込、業を沸して睨む顔、巴御前きつと見て、「やれ朝比奈ちやつと來てあがけ〳〵。許す〳〵」朝「チヽまつかせ」と踊出、「母の御免じや忝し」とつゝと寄り、榛谷が兩腕取て捻上、「サアお往やれ二の宮」二「急用のお使、物申すも暇惜」と、云ひ捨駈出し走り行。榛「二の宮を遣からは我等に何の云ひ分。爰を放せ朝比奈」朝「チヽ二の宮は時切おのれを宥すも時切。知行潰しの米櫃飯櫃かけはんがい、片手に足ぬ中は空との明はんがい。御時分能らふ朝比奈が、握拳の握飯、喰ふて見よ」といふ空の、霞におつる鐘の聲、ごんと鳴ば、くわんと喰はせ、又ごんと鳴るくわんと撲る。三ツ四ツ五ツ頭の、頭で數とる拍子取、次でに初夜後夜晨朝入相寂滅爲樂、跡はひらゝく天窗の骨、碎けて百八ぼんのくぼ、つまんで小庭へどうと投げ、「思へば〳〵梶原め釣髭の釣鐘面、撲碎かひで殘念至極。よし〳〵今は逃

早打—早飛脚
課怠—過貫
婭—あいやけに同じ

の札の御詮義一度は切で叶はぬ腹、世に健氣成曾我が爲捨ん命、遁世の身の悦び。道引給へ南無歸依佛」と、小脇に突立引廻し、返す刀の刃先咥へ、眞逆樣に貫かれ、三十五歲五月闇、短き夢と消へ給ふ。御臺所の御使者として重忠の北の方、いてう御前徒跣足にて駈付、榛谷の四郎重供二の宮の太郎安淸を召出し、「榛谷は死骸共御預け、二の宮は富士野へ早打、蒲殿御切腹曾我兄弟御狩場に紛れ有よし、狼藉なき中急度御詮義 遊 との御口上。晝八ツの時切、半時の半時違ふても越度、課怠仰付らるゝとの御意。大事のお使早う〳〵」ニ「畏 奉る」と駈出る、刀の鐺榛谷の四郎捉と取て引留、「こりや待て二の宮。御分は曾我の姉聟。小舅の難義する御使眞直には得云ふまい。役替して死骸受取れ。富士野へは身が罷る」と引戻して駈出す。榛谷が鐺[illegible]搔摑んて呵々と笑ひ、ニ「和殿は祐經と婭。祐經を引心から此二の宮を疑ふな[illegible]ふた〳〵。ヤイ一門緣者の好と御奉公とは各別。ムヽ疑を晴して見せん」とどうと引据、床の硯引寄せ三行半にさら〳〵去て去狀、裏さしの笄、「暇の印」と卷きこんで、家來の侍呼寄せ、ニ「宿所に歸り、女共三世の緣の切目なりと申渡せ。富士野のお使曾我と他人の二の宮太郎」と、いひ捨て駈出す、袴腰むんずと抱留、榛「人に心を許させんとさつぱり立受とらぬ。御使は榛谷の四郎重供が

必諚—必定

まねき—烏帽子の上部三角のひれ

犬坊—往ぬにかく

是にて一見せん」範「ヤア御邊に咎られ是に候梶原殿迚、おめ〳〵と出すべきか。大事の切手汝等には見せぬ〳〵」景「扨こそ〳〵見せぬは曲者。曾我に割符を呉たは必諚。推量は違はぬ蒲殿、ヤア蒲燒殿蒲燒の鰻入道殿。ぬらくら拔ても拔させぬ」と、惡口雜言手詰になれば蒲殿も、無念餘つて一世の浮沈急き逆上たる顏色。巴御前は根元知らず何事やらんと氣を盡し、心を配つて控へたる。範「是梶原、入道が受取の割符紛失せば何とする」景「ヲヽ曾我は伊藤が末天下の怨敵の引入。能仕合で切腹〳〵」範「ムウ入道が切腹には冥途の供を召連るゝが合點か」景「洒落臭い誰を供に」範「梶原平次景高を連るは」と、衣の下の薄氷一尺二寸拔討に、はつと飛退く梶原が、烏帽子のまねきを切落され、後の障子蹴破つて、同じく迯て犬坊に、續いて迯る八幡が肩骨脇つぼ迄切下げられ、「うん」と反を取て押へ、心元を三刀刺し、死骸にどうと腰打懸け、一息ついで立給へば、お次外樣の騷動上を下へと返す音。巴御前大音あげ、「蒲の入道殿子細有て八幡の三郎をお手討。騷ぐな〳〵。御所へ走御臺所へ注進申せ。御用なき者此内へ一人も叶はぬ」と、戶口に立て呼はりしは、木曾殿の後家義盛の北の方ぞと物々し。其隙に蒲殿衣脫捨齒嚙をなし、「エヽ打物短かく梶原めを切損じて口惜〳〵。八幡般五十人百人成敗せしとて、誤る筋はなけれ共、割符

謂れざる云々！無用の詮義立失禮なりと也

梶原、「イヤサ濟ぬ〳〵。第一本多めが躰に似ぬ大矢。殊に的矢は業の矢とて、親の敵を射る故實あれ共、鹿を射る法はなし。サア矢の主の詮義〳〵」とせり懸れば、蒲殿も當話の返答猶豫して見へけるを、犬坊八幡聲を揃、「但本多が親を鹿に突殺され、其敵射たるか。何んと〳〵」とやりこむる。お次に朝比奈堪へ兼、襖半身出んとす。母きつと見て、「又なく〳〵。捻り餅身柱一炷すへふか」と、睨付られて身を縮め、引込顔こそ殊勝なれ。蒲殿ちつ共臆せず、「百樣知て一樣知ぬとは御邊が事。的矢を業の矢といへばとて、惡業の業と心得、親の敵をゐる事と故實を一ッ偏に覺へしな。是常に射馴て矢業よき故、わざの字の聲にて業の矢といふ義なり。靱胡簶に的矢一手入ルは侍所瀧口の骨法。親の敵に限らず鳥をも鹿をも射る時有。長袖と成たれ共、家に生れ弓馬の道は入道こそよく知つたれ。謂れざる詮義推參なり」と、御氣色變つての給へば、八「イヤサ主人祐經を、曾我兄弟が親の敵と狙ふよし、念を入が僻事か」範「ヲヽさもあればこそ頼朝の膝本離ず用心する祐經。曾我兄弟に翅はなし何を知邊に御前近く忍び入べき。用心無用」と仰せも果ぬに、梶原「イヤ〳〵祐經が出頭を妬嫉む者多く、曾我を引御前通路の割符の札、彼等が手に入まい物でなし。御身の方にも、彼札二枚受取て置れしが、散さず手まへに有ならば、サア只今

身柱云々—項の下に灸一つすゑろかと也

畝火山云々—萬葉集「高山と耳梨山と逢ひし時立ちて見にこしいなひ國ばら」の歌による

瀧口—御所を守る武士

山の甲斐—山と山との間をかひといふそれにかけたり

て慮外したらば又是じやぞ。まだ怖い目付止ぬか。身柱に一灶すへふか」と、威されてお次へたつ、灸嫌ひの髭男。短慮の病母親の、異見ぞ藥艾成。程なく「蒲殿御入」と廊下番衆取次ば、梶原始犬坊八幡出向ふ。蒲殿暫らく鹿に目をとめにつこと笑ひ、「なふ巴御前、寶を諍ひ地を爭ふは人間世の欲心。それとは替り是は優しき弓矢の藝。其諍ひは君子なりと孔子も是を譽給ふ。位爭ひ、歌爭ひ春秋の詠を爭ひし、雲の上人の風骨にも劣るまじ。心憎さよ優さよ。爰に一つの物語。昔の〱とつと昔の其古、大和國天の畝「我妻にせん」耳「いや我こそ」と山と山とが妻諍ひ、夜毎に谷峯震動す。出雲の國にはします阿暮の御神、是を扱止めんと、御船を走らせ給ふと聞キ、二つの山は中直り。あぼの神は播州印南野に神とゞまり在ます。此三つ山の爭ひ、中の大兄の御歌を萬葉集には載られたり。今の世迄も美目よき女をお山といふも、此香久山の謂れ成べし。惣じて物の扱には心なき山の甲斐も有ル、況や文武の工藤本多、入道が扱不足はあらじ。諍ひを親みの始にて、上下相和するこそ、源氏長久國家安穩の基なれ」と、御詞に花實を交、面白可笑き御扱。巴悅び小頷き、お次外樣遠侍聞傳へ〱、「あつ」と感ずる計なり。につこり共せず

香久山といふは女山。又畝火山耳無山此二山は男山、香久山姬のあて成形に想をかけ、

あんばく―栂白者、いたづらもの
我身を云々―巴ウンと力を入れて朝をもち上る事
朝腹に云々―朝飯前の空腹にて大力の母をもて餘す
六々鱗―鯉の事、鯉の鱗は頭より尾まで其數三十六枚ありといふ
謂つべく―謂つべしか
かたむくろ―頑固

頭打砕く。怪我なされな」と捻上る。巴「コレヤ打砕く程なれば己は頼まぬ。あんばく者め又捻餅喰たひか」と、片足擧て眞中より、棒を發矢と踏折つたり。朝「梶原め八幡め毆殺して退ん」と、飛で出るをむんずと組めば、朝比奈兩手を差込で、親子四つ手に取組んだり。母も母なり子も子なり、汗を貫く頰髭と、風に亂るゝさげ髪の、朝「すべり出たは母の腹、今は我等が腹櫓」と三尺計釣上る。巴兩足踏放し、我身を重りに持上れば、朝比奈も朝腹に、大力の母倦果、釣下しつ釣上げは、龍の氣ざしの六々鱗沸つて落る水の勢、鰭を敲いて龍門の、瀧登共謂つべく。母はね返し一放れ、大の男をひつ擔き、どうと落す其響き、祇園精舍の釣鐘を、切て落すも斯やらん、御殿も搖ぐ計なり。泣顔にて朝比奈、むづ〱起る胴骨膝に引敷き、巴「エヽ疎ましの荒者め、親に世話を揉するなア。かたむくろに曾我を引、おのれは最屓の引倒し。文武二道の弓取とて強い計が武士でなひ。又しては切ての投てのと、手習は否がる物讀は嫌で、和田の家が嗣るゝか。サア今から手習するか」と太股を、ふつ〱と抓られて、朝「あ痛〱あ痛、手習しましよ」巴「物讀するか」朝「讀ましよ〱。あ痛たゝ」巴「母がいふ事聞ねば又是じや」朝「あ痛〱」巴「捻り餅の味忘れな〱」と、ふつ〱抓り引起し、「行義よふして遠侍に相詰、何事有ふとお廣間へ差出

づない―方圖もない
鳥の海―鎌倉景政の右眼を射し人
もらかせ―くれろ
柘―柘植
物打―棒のつけもと

ば、御留主番の大小名遠侍相詰、蒲殿をこそ待受けれ。梶原平次景高、祐經が一子犬坊丸、郎等八幡の三郎相具し、御廣間にのさばり出、八幡の三郎目鼻を顰め、「扨々づない大矢、御覽なされ景高公。小兵の本多が射たれば辻一間も飛物か。是を射ん者昔ならば鳥の海彌三郎、當代は淺利の與一殿。然らば矢印有筈名を書ぬは合點。阿房力の曾我の五郎時宗と云ふ飢浪人、主人祐經一門のはし、毎度の無心合力、何貸せ彼貸せもらかせの騙り事も、人食ねば狩場で小盜せん爲、紛れ入たるに疑ひなし。和田殿の不穿鑿、兎角梶原殿御父子にかけねば明白ならず」とそやされ、景「チヽサ別はない。重ねて本多めに射させて見れば忽化が顯るゝ。此矢は景高預った」と抜んとすれば、巴「是梶原殿、其矢に指でも觸るが最期、腕を巴が引抜」と腕捲り脚捲り、紅梅もるゝ雪の膝ぶし、骨ふとぐと煉絹に岩を包みし如くなり。惡かりなんと梶原、「先蒲殿が來て扱の術に依ての事。ナフ女の力と首の無い石佛、外の用に使はれぬ、何の役に立ぬ物」と御書院にぞ通りける。物に堪へぬ朝比奈の三郎、斯と聞より御番所の柘の棒ひつ提て、駈込所を母飛懸り、棒の物打捉と取、巴「ヤイ餓鬼め御殿中を知ぬか。騷ぎを止め穩便に納めよ」と御意を受た巴が子、此棒で誰を打」朝「チヽ、曾我殿原を盜よ騙よ、父義盛の不詮義と吐した奴等、素

篦―矢竹
矢束―矢の長さ
べかつし―べかりし

ず物。もどかしさよ」との給へば、侍「御覽の上は包に及ず、曾我が下人鬼王と申者。今度の御狩を武運の時と兄弟忍び巡りしに、昨日の朝山、敵祐經尾越す鹿に目を付、弓矢番ひ追駈しを、茂みの影より五郎時宗、眞たゞ中をと急に急て放つ矢が、敵の竹笠射かすつて、鹿の草分ずんばと當り、祐經が矢は太腹、難なく鹿は留りしが、時宗は隱れなき大力、篦廻り太く矢束も拔群。殊に名乘假名の印もなく、既に矢穿鑿に及ぶべかつしを、秩父殿の執權本多の次郎近經、我こそ一の矢射たんなれ、と本多と祐經鹿論に取なし、大事の難は遁れしが、今度の御狩に討漏さば、何の世にか優曇華の曾我が天運開くべき。御賢察」と計いひさして、頭を下てぞ泣ゐたる。蒲殿も涙ぐみ、「あつたら勇士共世に埋もるゝ不便や」と、懷中より木札二枚取り出し、範「是は北條時政大江の廣元兩印にて、鎌倉殿の御前迄も内意を達する割符なり。祐經が用心構へ賴朝を後楯、尺寸側を去らぬと聞。兄弟に是を貸す。何處迄も恐れなく、鎌倉殿の膝下にて、晴業の敵討花やかにして無念を散ぜよ。必隱密〳〵」と別れ給へば、鬼王有難し共冥加共詞はたらず。御厚恩忝け涙包め共、心に漏る駕籠乘物、伏し拜み伏拜みてぞ三重別れ行。北の丸の大廣間、工藤本多が鹿論、蒲殿に扱せ穩便に濟すべしと、巴御前承り、鹿を庇に舁すゆれ

八枚肩—八人にて舁く乘物
はい〳〵—蠅にかく
おりゐの衣—下り居を縫りにかけて下の衣を呼出し衣の縁にてたち寄りとつゞけたり
討せ—討れを態と働かけにいふ武者詞
貧しき家云々—本朝文粋にある句

に能御座んまい。乘物やれ參れ」と傳へて八枚肩、徒歩脚脛やつこらさ、邊をはねてはね馬の、人を虫共はゐ〳〵、埃蹴かけて通りしは、存外至極の無禮成。堀ぬき井戸の方より廿計の若侍、編笠ぬぎ捨兩手を土に蹲ふたり。蒲殿御覽じ、「浪人か主持か此方への會釋ならば、お通りやれ〳〵」と手を出し給へ共、只「あッあッ」と計差俯き、忍び涙に暮ゐたり。蒲殿も斯計の涙怪しと乘物を、おりゐの衣立寄て、範「いか成人の何ゆへに、川有げ成落涙見捨難し」との給へば、涙に沈む顏打あげ、侍「直に申も恐れながら、口おしの世の中や候。殿は忝も賴朝公の御弟、九郎判官殿諸共に平家追討の御代官、五萬騎の大將軍。一の谷の大手生田の森を攻破、武功と申御連枝の六十余州に冠たる御身。梶原が末子なンど我は顏の乘打、御無念察し奉る。我等が主人も伊豆相摸に名を得し者の末なれ共、運の變に依て一族に父を討せ、本領は其者の秣かり場と成果て、昔の釼鑄浪人。貧き家には古人疎く、世にも人にも侮づられ、いつ花咲ん埋れ木の、身の無念存合せて不覺の涙。問はず語も御恥かし」と又涙にぞ咽びける。入道殿小聲にて、「扨は曾我兄弟が下人よな。年月の堪忍さぞ有ん。祐經君の寵に誇り、諂ひを勤と紛らし世に蔓り、鎌倉武士の風義を亂す佞臣、エヽ、齒がゆし得討ぬな。入道昔の範賴ならば天晴力を添ん

さがない—よくない

片荷づつて—一方のみ重くて

相手云々—不肖は不祥にて相手になつた災難

三巴—我名と大皷の紋に用ゐるよりいひかく

升形—城門二二の門内を云(倭訓栞)

ひける—負る

鬘もばら〳〵涙、鼻息計たへ〴〵なり。巴「ホウむつちりと抱心地よい甘そうな肉合。祐經殿の御祕藏が尤。さりながら、御臺樣の御前であゝまり慮外な口がさがない。乘物下馬迄巴が送る。我儘がいひ度ば祐經殿歸られて、夫婦閨の私語、無理も我儘も睦言は御勝手。人中で我儘云へば先此ごとく、痛いか〳〵、痛い目に逢ふぞや」と、締付〳〵「ヤ片荷づつて力に足ぬ、相手の不肖常夏」と、片手に取て引寄せ横抱締たる弓手の小脇、下髮垂て薄化粧、二つ頭の顏の色、我顏共に三つ巴、太皷の御門明六つの、雲ほの〳〵と 三重

白旗の、流は同じ源の、蒲の御曹司範頼朝臣、天下の疑ひ晴さんため修禪寺にて御出家有。法名源雄と衣を墨に染めながら、鎌倉殿の御舍弟世の覺え重けれ共、身持は輕き籠乘物。只一僕を侍にも、草履よ杖よ呉竹の、藪醫に紛ふ風情なり。大名小路の升形より、引馬に五つ道具、乘物の戸八文字に開かせ、布袋乘に乘たるは、梶原平次景高也。範頼の御乘物道を讓つて片付ヶば、梶原が近習共、「蒲の入道殿の御通り。下馬なさるべきか」と伺ひける。景「世捨坊主になんの下馬」と、顏さし出し坂東聲、「夫成は蒲の入道殿な。工藤と本多が扱の爲北の方へ御參ゝか。我ら始御留守役の大名小名相詰申。出頭第一の祐經と、陪臣の本多が鹿論は挑灯に釣鐘。鵜の毛のさき程も祐經ひける扱ならば、お爲

衡—今の戯射籍なりと倭訓栞にあり
もどく—非難する
訛判—批判
遺言—遺恨か
三ケの庄云々—三個所の庄園を得し近江八幡を祐經は家來とせし故云ふ
家賴—家來

は假名もなき衡の的矢。狩場の法も知ず慮外千萬の鹿論。お帳面替るか本多が名を消るゝか。いつ迄もお願ひ」と額髪押撫て、まばゆからぬ張臂辯口。末座に著し本多が女房常夏、「是々阿古屋殿、慮外といふは馬の乘合座敷の高下、盃の前後などの事。扨は戰場にても目上の敵には太刀打も慮外と、後を見せて迯らるゝな。弓矢の道不案内で小差出た訛判片腹痛し」と嘲笑ふ。阿「それ〳〵慮外といふが其事よ」常「イヤ上をもどく其方がゞ慮外よ」と、兩方聲もあら木の眞弓、詞銳に云ひ張ける。御臺所御聲高く、「あれ鎭られよ人々。老中さへ理非を分ぬ鹿論、女の訛判及ぬ事。されば蒲の御曹司範賴入道殿、今遁世長袖の身ながら賴朝公の御弟、おりしも在鎌倉こそ幸ひよ。北の丸に請じ互ひに遺言なき樣に、中分の扱御了簡に任すべし。巴宜しう沙汰せられよ」と、御褥を立給へば、阿古屋つゝ立「工藤左衞門祐經と、匹夫下郎の本多と、中分の扱とはお恨しい御臺樣」と、御裳袴に取付所を、常夏引きとめ、「匹夫下郎とはどれどの口から」阿「コレ三ケの庄の、主近江八幡なンど本多程の者は、家賴に持た大名の御前樣。下郎といふが不思義か」常「ヲヽ其大名の御前樣息の根留ん」と、爪紅血走る抓合、百花亂るゝ女中の騷ぎ。巴御前ずんど立、兩足宙に倲がへし、小脇にかい込「ゑいやつ」と締たる大力、眉も

神頭—上ざしの鏑矢（貞丈雜記）

草分—胸先

また者—陪臣

小太郎結城友昌、土屋平山千葉宇都宮、各矢先の高名有。外に牡鹿一頭、工藤左衛門祐經、秩父の郎等本多の次郎近經、一の矢二の矢の諍ひ、鹿一疋に矢一筋、祐經太腹本多は草分六分の勝に候へ共、鹿論未落居せず。二本の矢は射付の通、仍終に記す者也。御狩場の別當和田の義盛判」と讀上れば、伺公の女中面々の殿御の武藝を身の手柄、御臺所も御機嫌の御前さゞめく計なり。祐經が妻阿古屋の前進み出、「聞惡き御帳面。秩父の郎等また者の本多殿、我夫祐經と鹿論さへ慮外成に、本多が六分の勝とは義盛の依怙贔屓。末世に殘る御記錄、祐經一人射留し、と書改願ひ奉る」と憚なく言上す。義盛の北の方巴御前聞もあへず、「是阿古屋殿、本田の次郎近經は秩父の家來と云ひながら、武藏源氏の歷々、軍の場數は御出頭の工藤殿も及ず。此度の御狩にも假屋奉行夜廻り御直の御用承り、御近習の御家人竝、女房にも御臺所御對面有程の筋目、誰に恐れ負ていん。義盛が依怙とは工藤殿の奧樣、少口上が出來過た」と膝元に摺寄たり。阿古屋色をかへ、「イヤ昔は王の孫にもせよ、今は秩父の步若黨。そもじも昔は朝日將軍木曾殿のお部屋、御臺巴御前。大力の子種をとらんと和田の義盛申受られ、今は我々同輩。其時々の身の程知ぬ無用の本多が系圖立。然も金泥にて工藤左衛門祐經と矢印有、本多が矢に

與奪—将軍の名代
竹とりの云々—彼の赫灼姫の繪を金泥の彩色にて寫したれば光を増すと也
筆も云々—筆は鹿の夏毛にて作るをよしとす、故に筆頭の意にかけたり
鉄細き云々—矢傷も小さければ頼朝の腰袴に供せんと也
諸肘—肘をさすと日影さすの歌詞とかく
月の輪—熊の喉にある横様、月の縁に兎を出し兎は登坂を巧妙とす夫を打とめしと也「月浮ニ海上一兎走レ波」(詹々言)
山猪—猪の事

身、鎌倉を靜謐に持固めしも大將殿、武威目出度き故ぞかし。あの庭上に列べし御狩の中の勝物迚送られし、射手の譽も顯すため、それ〳〵目錄」と宣へば、中原吉之が妻承り、男文字に和訓を付ヶ、てには巧みに讀ンだりけり。「御帳面の第一の筆も夏毛の纂は、大友の市法師まだ十五歳の小腕の矢さき、就中御褒美たり。番鹿は秩父の六郎、三町五反の尾上を隔て、鉄細かき鹿子まだら、御行縢の料たるべし。牛共象共紛ひて三刀かき切たる肋骨、仁田の四郎忠常が、世上の美談に乘たる猪、御狩一の高名なり。長沼五郎が諸肘、さすや岡邊に蓬喰、呦々と鳴小牡鹿の角、二つに引裂て是を手取の證據とす。捷は土肥の彌太郎、岩ほに霆狼、その胡を踏んで擲きとめたる一討の、力鉄鞭恐ろしき、虎狼より盛長が組で刺留しあら熊と、名は明らけき月の輪も、浮んで薄の波走、番ひ兎の登り坂、駒馳ちがへ長刀に、のせてとめしは小山の判官。皮に疵なく山豬の、眉間の骨を射摧しは淺利の與市が神頭の弓勢。足鷹山に足くらべ、追もおふたり廿八町、息の限りを追詰られ、狐は死て岡部の六彌太、是も手取の高名たり。兒玉太郎が鑓玉に、上て突しは飛鳥の業。鴈股早く飛鹿の、もと首射きる安田の三郎。竹の下の孫八左衛門、向ふ猪に矢はたゞず、打物にて切とむる。宇佐美の左衛門川越太郎、相馬の

曾我會稽山

作者　近松門左衛門

照射―獸を呼び寄せる爲の篝火
狗は獸を云々―漢皇曰、逐殺獸者狗也、發縱指示者人也、諸君功狗也、至如蕭何功人也の句を取れり
狩衣―假るにかく
一天―天は點なり、今の三十分時
御臺所―平政子

照射する火串の影のねらひ獵、狗は獸を追ふて殺し、人は其處を指示す。今諸軍は功犬なり、蕭何がごとき、勝處を指示すは功人なりとの故事の、心を爰に狩衣、裾野にしばし御宿陣。右大將家の御威勢は、富士より高き鎌倉山。建久四年五月廿八日と、明るも寅の一天に、虎の御門ぞ開けける、御留守なれ共式日の、御禮は御臺所に與奪有。竹取の間に出給へば、和田畠山千葉上總大老執權の北の方を始として、工藤梶原宇都宮、土肥佐々木三浦黨、昵近高家の內室達、其外御譜代由緒有家の子の妻女迄、夫々の格に任せ、座次を亂さず參列して、廿八日の御禮一度にあつと拜謁有。袖の縫もの綾錦高燈臺に輝きて、金泥砂子竹とりの、翁が娘のさいしきも光を恥る計なり。斜ならざる御氣色にて、政子「なふ旁、富士の御狩の御留守に、幼稚の賴家、いひ甲斐なき自ら、各とても女の

二振袖—二ふりを振袖にかく

敷島—布くにかけて日本の事

稲田姫朱に成て顯れ出、「尾筒に隱せし十握の寶劍、やすく取て候」と、右と左に寶劍利劍、二振袖に引さげて、につこと笑ひし其顔、尊御悦喜淺からず、天叢雲御劍と名付、大日本寶揃ふぞ目出度けれし。尊大蛇が頭より、寸々に切伏せく亡し給へば、天兒屋を先として、大山祇、蘇民將來、手摩乳夫婦、日月の御籏眞先に押立、御迎ひの諸軍勢、野に滿山に敷島の、歌に和ぐ君が代は、八島の外の國迄も、日本の威を振袖の、人民無病延命に、五穀は家に滿にける。

悔ると―悔るとも

玉の自然―玉の緒にかく玉の緒はいのち　めろ火―猛火か

が姿、東南西北四面四ゆい、はたゝ雷電瞬く內、八つの形は顯然たり。蛇「誠の女はあれこそ」と、執念き顏吐く息は、巖を穿ち、古木を倒し、落來る木の葉ははら〳〵はら。あら腹立や〳〵。僞る人の心の酒、盛て悔ると甲斐有まじ。思ひ知らせん思ひ知れ」と、八つの姿は附纏はつて、くる〳〵〳〵、手繰れば千尋の大蛇が形、眼は火輪火焰の背、鱗を鳴し、角を振立、雲を卷上げ卷下し、高棚目懸かゝりしは、すさましかりける三重勢なり。姫は有にもあらばこそ。「死するに二つの道なし」と、只一筋に思ひ切、谷へかつぱと飛下るれば、つれなき玉の自然、土手の平沙に下り立たり。「嬉しや生る道筋」と、目指も知らぬ草の原、亂れ〳〵て迯まどふ。大蛇は怒の鱗を立、めう火の腮は利劍を吐き、山岳草木動搖し、河水をかへし、大地を蹴立、追立追詰、三重追廻り、弱腰を引くはへ、只一呑の毒蛇の口、遁れがたなき世の譬、哀れはかなき有樣なり。せきにせいたる尊の顏色、眞黑に成て駈來り、「姫が敵、天下の仇、何時迄遁し置べきぞ、寶劍出せ」と、心體八膚に力を入、小脇にうんと抱締め、「ゑい〳〵」と引立れば、勇力和光の猛勢強く、弱る處をどうと投付け、頭にしつかと踏跨り、「劍を返せ姫返せ」と、角を摑んで捻付る。時に胴骨動き出、大蛇が背を腹の內より、さら〳〵と切さばき、

くる〳〵―來るにかけて女は稻田姬

亂れ心云々―大蛇の醉て現なき譫言

やんようりうし云々―果實草花香木等を歌にしたるもの末はその拍子なるべし長春―薔薇

く大蛇が眼の光。蛇「あれこそ今宵の我贄ぞ」と、しもとを振上紅花の舌を振立〳〵、歩むとすれ共、毒酒の薫に引留られ、立寄る一つの甕の影。爰に女はあり〳〵〳〵有明の、月夜にあらぬ桂女の、姿は一つ陰は二つ、三つ四つ五つ、七つ八岐の大蛇が魂、八つの甕に八つの形、「いで飲干して、底成女を贄に取らん」と、飲でも亂るゝ酒のさゞ波、寄り來る〳〵寄せ來る面、面を浸し頭を下げ、飲め共〳〵盡せぬ泉。次第に傾く大蛇の影、面色變じて茜さす、角は珊瑚の枝を振立、忿怒の醉に足引の、山もくる〳〵、野もくる〳〵、踏留むればよろ〳〵〳〵。立上ればたぢ〳〵〳〵。かつぱと伏せば、亂れ心は只一身、返す〴〵も恐ろしや。亂瀧の響きは皷、松風笛の音、雫と積りて菊水消へながれ、竹の露の甘露、月は影有明、朝霧夕霧添へて汲むは玉水。面白の夜遊や。歌やあんようりうし〳〵、なつてんりうたんきん〳〵くは、唉た。銀杏金柑楊梅寒梅、瓢簞、鳳仙花、やあん鐵線花〳〵、栴檀沈丁花、芙蓉林檎、長春半夏草、ゑゝする、ゑゝゑすりよゑゝすゑすすりよこんりやう、ゑすゝりよこんりよこんちんこんりやうこんちんかう、ころ〳〵〳〵び、起てはまろび、己が心の戯れは、人の命の仇敵。蛇「捨たる身さへ若しや又、遁るゝたけは」と見廻せば、爰の山蔭、彼處の岨、八岐にまたがる大蛇

皺の川上云々—爰は大蛇の述懐
九十九髮—百と世に一年足らぬ云々の歌より出でて白髮の事、爰は亂るの序におけり
焔—嫉妬
あし原—惡しにかく

第五　八雲猩々

ウタイ既に時刻も夜半の雲、天を焦せる篝の煙、谷深ふして嶺聳へ、山水滾る皺の川上、八つの甕に毒酒を湛へ、影を浮べる高棚に、五重の荒菰、注連を引、贄の少女を居置たり。文祭無慙成かな稲田姫、昨日迄も今朝迄も、お乳や乳母にかしづかれ、荒き風にも當ぬ身を、つれなく一人捨られて、觀教父よと呼べば谷の聲、母よと呼べば松の風。かゝるべしとは夢にさへ、いざ白小袖の振袖も、絞りかねたる哀さよ。時に山鳴り震動し、谷の水音さゞ波立、あれ〳〵遠に雲起り、俄に降來る雨の足、鳴神稲妻天地を返し、大蛇が姿現れたり。消ゆるとすれど吹上て、又山風が焚く篝、皺の川上に年を經て、住と濁るは濃き薄き、酒にもまるゝ九十九髮。亂れ心は何ゆへぞ。我寶劔に心をかけ、岩長姫とは生れしが、蛇道の縁は切れやらず、悪女と生れ人に笑はれ憎まれし、美女は悪女の焔の種。よしとは云はじあし原や。八島の浦の外迄も、見め美き女を取盡さん、と皺の川上に隠れ住、八つ岐の大蛇と成て、人を取事多年なり。嬉しや今宵ぞ廻りくる〳〵姿は女、心はいかに、鬼共蛇共見へ分ず、見る目も暗き心の闇。消ゆるは露より心の玉、輝

ふな。ア、いはれぬ腕立、命の懸替有そ
ふな」と、一度にどつとぞ笑ひける。素知らずや、我こそ天照神の弟素戔嗚の尊。大蛇
を討べき我手だて能く聞け。如何に自由を得たり共、龍蛇は必酒にまどふ。八つの甕に
毒酒を湛へ、稲田姫が影を移し、呑干す折を見合て、討になどか討ざらん。ヤア稲田姫、
此白き衣服の袂、外を圓く縫はせしは、刃の反を隱さん爲。大蛇が間近く來らん時、わ
き明の此所より、劔を出し腮を刺せ。我其時走付、大蛇にもせよ、毒蛇にもせよ、一ひ
しぎに取て伏せ、奪はれし寶劔、やはか取らで置べきか」と、はゞぎりの名劔を渡し給
へは稲田姫、戴く劔をわき明の、袖に包んで衣更、太刀を一振かくせしより、わき明を
振袖とは、此時よりぞ始ける。手摩乳夫婦も、生死の頼は尊の詞の末。松にかゝれる
命の露、數の土民に引立られ、浮をかり行く稲田姫。夫婦は涙に暮方の、時をつれなく
別れの道、見返れば引立る、駈出れば引留む、名殘を末世にとゞめくる。事も愚や、稲
田姫は祇園少將井、大山祇は三島の明神、開耶姫は富士權現、瓊々杵尊は外宮の相殿、
神と神との振合せ、袖の緣こそ久しけれ。

浮—壹

足摩―足無し手摩―手無しにかく

身に知る雨―身につまされし涙

見通し―天下のあらゆる事を見ぬく

上〳〵歎しが、足摩乳髪搔撫、「毎年人身御供の時分になれば、若や此方の娘にもあたらふか。と幾瀬の思ひする内に、今年は餘所へと聞時は、アヽ嬉しや遁れたよ。來年は何うあらふと案ずれば、今年も亦遁れた、嬉しや〳〵、と人の子の取らるゝを悦んだ其報ひ、今年といふ今年、此方の身に報ひ來た。せめて病で死んだらば、骸成共殘らふ物。顏見せてたも稻田姫。ナフ此美しい顏を、大蛇の餌食になすかひの」と、抱き寄せ咽び入、父「立も立れぬわしや足摩乳」母「此方はもがれた本の手摩乳。如何しましよいの」と縋付、聲も惜まず泣居たる。姫も現の心なく、姫「大蛇の餌食にならん事、悲しい上はなけれ共、所の作法は是非もなし、と諦めも有ぞかし。お年寄られた父母に、長い歎をかけまする。是が悲しいばつかり」と、縋付ば抱寄せ、涙爭ふ親子の樣、在所の者も一同に、子を取られしは身に知る雨、我身にかゝらぬ人迄も、袂を絞る計なり。素戔嗚の尊。白小袖御手に引提げ、とう〳〵と動ぎ出、素「是こそ丸が望時節。大蛇を討て本意を遂げ、國の歎を救ふべし」と宣へば、百姓共口々に、「大蛇を如何した物とか思ふ。頭が八つ角が十六、眼も十六見通しの變化。男にも女にも形は自由自在の物、殊に男たる者、刃物を持たる影を見せても命がない。手に覺え有ならば、亡して一在所の末代迄の

よ。棒よ杵よ」とひしめきける。幣帛引さげ、村中舉つて數十人、どか〳〵と入來り、耳「コレ〳〵毎年の人身御供。いづくに印立べき、と地下中手分し窺ふ處、此家に知らせの宇津木がお立なされた。いつもの如く、人身御供所へ同道し用意せん。サア稻田姫をお渡し」と。呼はる聲々。夫婦も姫も力落、「前にしらせの大熱は、尊のお影で助かれ共、どふで遁れぬ命よな。ア丶所の衆頼ます。何卒助けて下され」と、抱付て泣居たる。耳ハテ悪い合點な長者殿。誰がむごい目が見たからふ。かういふ我々から、來年は誰が身の上であらふやら。合點づくでは渡されまい。サア御座れ」と押分る。手摩乳押留め、「粗忽せられな。我子ならば、所の法を我一人破らふか。此子は別に親が有。たつた今大山祇といふ人に養子娘にやつた。おれが娘でないからは、人身御供に立てふ筈がない。爰に置ゆへ喧しい。養子親へ手渡ししよ。娘よ來い」と手を取て、駈出れば百姓共、「何處へ〳〵。それでは其方の勝手が能かろ。其樣な事で濟なれば、大蛇に娘を取らるゝ者は獨も有まい。存の通、遲ふてさへ在所中へ祟が來る。長者殿でも手摩乳樣でも、是ばかりは除けられぬ」と、あらけなく引立る。夫婦は悶へ縋付、「過つた在所の衆、待て下され。人身御供に立ませう」と、漸に引留め、娘を中に取廻し、顔つく〴〵と詞なく、喘

が鶯と鳥の聲を二つ聚た如しと也

色代—挨拶

ねたる如くなり。母足摩乳、銚子盃携へ出、「大山祇様とや、妾こそ足摩乳。お心の本意なさ推量いたし、思ふ子細の候へば、先御酒一つ」と羞むれば、大「猶心得ぬ事かな」と、思ひながらも長柄の銚子、一つ受たる盃に、人の心を汲にけり。足「申山祇樣、御二人が中に稲田姫とて獨娘の候が、尊樣へお寐間の御伽に參らせて、御不便は蒙れ共、我々が娘、尊の后と申さんも恐れ有。是を養子に參らすれば、山祇様は舅君、是に増たるゆかりなし。御本意遂られて後、親しき御對面も有やうにと存るが、長者殿如何思召」手「尤々親子の盃。善は急げ」と立寄て、明る歩障のさやかなる。雲井の人の盃に、蘇氏も顔は色付て、「お目出度や」とぞ祝しける。大山祇大に悦び、稲田姫を我子にして指上れば、勅諚も背ず、尊にも背ず、此上の本望なし。御對面執成は、夫婦の人に任せ置。暫く旅宿に逗留し、吉左右を待申」と、蘇氏誘ひ立歸れば、稲田姫は親子の禮義、長者夫婦も色代し、別れて旅宿に歸りける。時刻吹巻く夕嵐、音も崩るる山宇津木、一枝虚空に鳴渡り、棟木にはつしと血煙立、柱を朱に染てけり。夫婦は「あつ」と動顛し、「悲しやしらせの山宇津木が立たは」と、母も姫も絶へ入ば、長者も騒ぎ、「うろたへなく〳〵。ヤレ男共女共、早ふあの木を取て捨、柱を拭へ。ヤレ梯子よ次足

歩障―衝立

云れぬ事の―無益な事であるよ

鸚鵡玉々―逢ふにかけて其鸚鵡

諚詮力なし。又寶劒の失ひ給ひしも、化生の業とは申ながら、我娘岩長と生れ出ての禍ひ。御加勢申、此寶劒を取返さでは、末代までの身の恥辱。此處に骸は埋む共、一度御目にかゝらでは、都へ迚は歸るまじ。今一應申て給べ」と、思ひ込んだる兩眼に、涙をはらはらとぞ浮めける。洩聞えてや女房達、「尊の御出」と呼はつて、子細は何と白綾の、歩障を中に押立れば、大山祇力を得、主手摩乳、蘇氏將來、あつと頭を傾くる。始て著なす脇明の、田舍めかずも稻田姫、尊の仰を蒙りて、歩障の影より聲作り、「ナフ大山祇、丸は素戔嗚の尊じやぞ。寶劒を取返す力にならんとて遙々の下りか。云れぬ事の。人頼する程なれば、流浪の身にはならぬ。丸が一人の力にて取返し、此寶劒は素戔嗚の尊の手から出たと、末代に名を殘して見せう。それ迄は都の人に逢ふまいと、天照神に誓を立たれば逢ふ事はならぬ。殊に后にも立開耶姫に心を懸け、上への恐れ、今での後悔。其開耶姫が親に逢ふても、どうやら心が殘る樣で異なもの。其上開耶姫よりは、手近いに折好い蕾の花が有て、寐ても起ても詠て居る。此蕾が悋氣深ふて、外の花とは一ッ瓶にも生させぬ。蘇氏は情を受た者、其外は、舅の長者ならでは對面せう由縁がなひ。早ふ往にや〱」と、形も見せず顏見せず、詞で人に鸚鵡の鳥、梅の鶯山烏、眞似びか

散々―餘程の不機嫌

手形守の威徳によつて、跡方もなく平愈し、御恩の尊御行末も氣遣、御跡より參らん、と御契約申せしゆへ、本國を打立んとせし折節、帝都より大山祇と申臣、尊を慕ひ奉り、我等に案内申せとの御頼。是迄お供仕る。是は又お預りの手形守。共に御披露賴奉る」と、云もあへぬに長者悅び、「何大山祇の臣のお出とや。天下に誰あらふ、瓊々杵尊の舅君、かゝる邊土の我等が宅へ御尋も、尊の御威光嘸御悅び。此方へ請じ奉れ」と、勇んで奧へ入にける。蘇氏が案内に大山祇、家は長者が宿なれど、尊を敬ふ心にや、下座に控へておはします。勇み勇める手摩乳長者、始の顏色引替て、澁々顏にて立出、「ナフ蘇民、大山祇とは彼方の事な。我等は手摩乳と申者。遙々の御出、尊へ申上る處、いか成事にや散々の御機嫌、素「大山祇の臣ならば、詞もかはさぬ顏も見ぬ。戻せ〳〵」との仰。我等もはつと存、「同道の蘇民に御憎しみばし候か」と、押かへし問申せば、素「情をかけし蘇民に何の恨の有べきぞ。丸を輕んずる大山祇、何の對面追返せ。年寄てくど〳〵」と、却て我等を御叱り。お歸りと申も迷惑。同道の蘇民も嘸迷惑。エヽ近比氣の毒」と頭かく、手摩乳長者が白髮より、座は白けてぞ見へにける。大山祇手を打て、「ハア御恨思ひ當つたり。我娘木花開耶姫に尊御心を寄られしを、其かひもなく帝の后に奉る。是は勅

立所―裁つ所とたちどころ

八雲立云々―夫婦一つに籠らん爲に八重垣を作つてくれるよとなり

むべも富けり云云―此殿はむべも富みけり云々の古今集の歌による

つき〴〵し―似合ふ

させば、見よ〳〵無病延命疑ひ有べらず。いで其印を見せんず」と、ほとをり冷す氷の御劍、閉たる左右の袖下、さらり〳〵と立所に、闕腋より燻り出、半天に煙滿ち〳〵て、うず巻去ると見へけるが、顔色さめて白〴〵と、心地涼しく見へにける。末代和國闕腋は、此御神の教なり。母は悦び、浮き〳〵いそ〳〵前後を忘れ、「ハア、有難や忝なや。此稲田姫夫もなし。恐れながら、尊樣御逗留の御寐間の伽、お宮仕に參らすべし。早ふ歸り、夫に知らせ悦ばせん」娘は「道の知邊に」と、立寄れば立寄て、一首の御製に斯く計、「八雲たつ、出雲八重垣妻籠に、八重垣つくる其八重垣を」是こそ三十一文字の、歌の始や闕腋の、袖と袖とや 三重 重ぬらむ、むべも富けり三枝の、三ツ葉四ツ葉の殿作り、築地大門つき〳〵しく、庭は自然の植込に、海を見晴し山請て、居ながら風情を奥座敷、手摩乳長者が屋形には、尊の御入、稲田姫の病氣本服悦びに、猶悦びの饗應は、毎日酒宴に暮さるゝ、主の長者もほろ酔ながら、「蘇氏將來が來りしとや、珍しや〳〵。案内所か是へ〳〵」と請じける。手「先息災で目出度いが、親兄の事聞及び、日比の巨旦が惡心、そふあらふと思ひしこと。和殿が正直天に叶ひ、尊の御宿申されしは子孫の譽。尊も度々の御噂、先お目見へ」と有ければ、蘇「されば我等も數箇所の手疵に遭しか共、預り奉る

軻遇突智—此話神代紀に見えたり

闕腋—袍に縫腋闕腋の二種あり

式—手本

ん。行衛も知らぬ旅人に、語るも云ふも悲しさの、心に餘るゆへぞ」とて、かつぱと臥て泣居たる。八岐の大蛇が物語り、尊とつくと聞召、「若や旁は、手摩乳長者の一家の人にては無きか。吉備の國蘇民將來が敎にて、手摩乳夫婦を尋る者よ」と宣へば、母「ナフ其手摩乳とは夫の事。妾が名は足摩乳、此娘は稻田姫。蘇民が知邊のお方と有ば、外ならぬ所緣も有。憐み給へ旅人」と、又さめ〴〵と泣涙、娘が苦む玉の汗、時雨村雨夕立の、一度に降來る如くにて、尊の旅の簑笠も、重て濡る計なり。尊包むに包まれず、「名は聞もしつらん。素戔嗚とは我事よ。身を燒骨を焦す大熱成共、忽退得させん」と宣へば、母は恐れて飛退り、頭を下て敬ひける。尊枕に立寄て、腰の御劔をするりと拔き、「抑此日本は、日の神の御國にて、陽氣盛んにして暖成事、天地の内に竝ぶ方なき國土なり。されば伊弉諾尊、軻遇突智といふ火の神を御誕生有し時、其軻遇突智が火焰に燒れて神さりませしも、内に大熱の火を包みしゆへなり。故に日本に生るゝ者は、十六の夏迄は兩袖の下を、闕腋の脇明にして熱を漏し、涼しみを受ざれば、國と人と相應せず。然るを父母愛に溺れ、さなきだに實熱深き稚子を、絹に包み綿に卷き、熱に熱を添るゆへ、寵愛却て愁の種と成ぞかし。今より日本の貴賤男女、我詞を式となし、闕腋を著せ

ほの字—穂と惚れた意とかく

人身御供—人間を神の生贄に供する

るゝ鳥は行方知らず、思はず知らず尊の上へ、轉びかゝれば驚き起て、じつと見かはす顔と顔、互に頷く花薄、ほの字を中に籠らせて、鳥の教へし縁の端、爰にも天の浮橋の、夫婦の始と成にける。戀に凝りたる尊の心、又惚れ〴〵と成給ひ、素「御覧の如く卑しき旅人。やんごとなき上﨟の人目も有。其處退き給へ」と宣へ共、姫は兎角ふのいらへもなく、ぞつと寒氣も忽に、顔色は朱を注ぎ、五躰に大熱ほとをり出、尊にひつしと抱付、悶へ苦しむ其有様。女房達も立騒き、尊も見捨難ければ、手を引かゝえ漸と、幕の内にぞ入給ふ。母は驚き屏風押除け、母「今日はよもやと思ひしに、又もや熱のさしけるよ」と、様々に看病し、「何方かは存ね共、旅のお方の御介抱、身にも餘りて忝し。問ひ問はるゝも値遇の縁。粗忽に申事ならねど、此國此處に八岐の蛇とて大蛇有。何時の世よりか年毎に、色よき娘を人身御供に取らざれば、一在所祟をなす。其印には山宇津木の折枝が、鳴渡つて棟木に立、家の柱より血しほ流れ出、其瑞相には前方に、必取らるべき娘が熱病を病む知らせあり。それ故に一在所娘持たる者毎に、風でも引て熱させば、若し家の棟へ山宇津木が立ふかと、親々の心遣ひは如何計。それに此子が熱のさし引様様の看病印もなし。若もそれに極つて、大蛇が餌食と成ならば、二人の親は如何なら

花見幕―花見の事にて風を防ぐ

まだ寐た云々―まだ寝て居る振して笠の下にて目をしば〳〵する

石たゝく―鶺鴒の事、爰は枕詞

たいじよ立して―あやまらせて

の、露にも濡れぬ獨寢や。引すさみ、手を盡したる大和琴、音に聞えし出雲國、手摩乳長者が獨子稲田姫は、此比熱のさし引覺め口は、お風召すなと花見幕、皺の川岸の櫻狩、見らるゝ花も見る君が、姿の花に恥ぬべし。旅の疲のふら〳〵と、居睡こけし岩が根の、枕が上の物の音に、尊の御目は覺ながら、まだ寐た顔の笠の下、瞬く眼元石たゝく、鶺鴒の鳥飛來り、堤の芝に羽を休め、足も尾先も忙しなく、ぱつと立ては又飛下り、日陰にあさるとり〴〵に、女房達「美しい優しい鳥、あの尾使ひの忙しなさ。あれ程に尾を動しては、嗚そな物じや」と、笑ひける。物をもいはず稲田姫、つく〴〵見惚れおはせしが、「いや〳〵笑ふ事でなし。忝くも女神男神、天の浮橋に立給へば、あの鶺鴒の鳥來り、妹脊の道を教より、夫婦契りをなし初、此芦原を産み給ひ、それより世の中の父母、夫婦の道顯れ、自や旁が生れ出しも此所謂。扨こそあの鶺鴒を、庭來鳴、庭叩。戀教鳥共云ふぞとよ。教ても習ふても、殿御持ぬ自が、習ふかひもないかいの。とても師匠に成からは男持たしや。今捕へて籠に入、たいじよ立して放さん」と心詞もしどけなく、そろり〳〵と手を上て、押ゆればふはと立、又押ゆればぱつと立。稲「ア丶辛氣や」とて尊の召れし笠追取、彼方へ押へ此方へ押へ、逐はへ逐はゆる笠の羽風に、恐

中々に―なまなかに
三つ―充つにかく、一つは十握の劍
ますらお―ますらをを
涙―なしにかく、白露云々は蘇軾の前赤壁賦にある句
柾の葛―常緑の蔓草
巖の鼎云々―焚く煎ずる何れも霞を烟と見立ていへり
おき惑はせる―霜の白と貝の白と紛ふ
皺の川―非にかく
蝶鳥の云々―花

見上れば久方の、高天が原は高く共、今の心をみそなはし、願ひを三つの御寶の、一つを守れ二柱、天の浮橋何時の間に、我爲辛き途絶して、思ひ渡らん便さへ、涙干す間を暫しとて、脱ても元の菅簑や、姿計はますらおが、矢竹心を力成。梓が杣に行暮て、見下せば、白露江に横はり、水光天に接れり。子を呼ぶ猿、斑鳩の聲、岸の小笹に刈藻掻く、臥猪の騒ぐ音迄も、御心を砕く端となり、柾の葛、青つゞら、歩み亂れて行末に、岩ほの鼎 江戸古木を焚き、青山雲を煎ずるに、咽を潤す便もなく、猶人里は遠ざかり、何ゆへ急ぐ雲の足。ウタイ嵐、山颪松風が、ばらん〳〵と吹音信るれば、峰の木の葉が、ざら〳〵〳〵と、散り〳〵、ちり〳〵水の音にさへ、假寐の夢を驚かし、寢ぬ夜寐る夜を重ね來て、苔にかたしく袖師の浦、磯に寄來る、浮藻玉藻を打混て、まだみるめ和布を打混ぜ〳〵、いろ〳〵の、波や錦を疊むらん。眞砂交りの濱傳ひ、汐のされ貝空背貝、置惑はせる春の霜、宛がら刃の如くにて、歩み疲るゝ玉鉾の、矛先に向ひては、惡魔も恐れ、鬼神も挫ぐ勢にも、御身一つの雪をさへ、拂ひかねたる簑笠や、身のうき事を繰返し、數へ〳〵て思ふにも、理は持ちながら心から、皺の川上にぞ 三重 著き給ふ。歌 蝶鳥の花を尋ねて、塒もとむるしほらしや。蝶鳥も、花には濡るゝに、我身は何と楢の葉

もちごもる—共に籠る、身持腹をいふ

月日の種—天神の血統

著て見よ—來てにかく

眞金吹—吉備の枕詞

伏せ敲き伏せ、咽笛に留めの鎌。則己が妻子の敵、神罰の程ぞあらた成。蘇氏夫婦は泣泣くも、悲みは親恨みは兄、二つの涙に五百機が、哀れも共にもちごもる、三つの空瀬を一つ野に、遺す形見や殘りても、かひなき夫婦が立歸る、道は涙に迷へ共、身は正直の道つくる、鋤と鍬とは耕作の、家の寶劒御寶の、手形を尊の御土産と、跡を慕ひて出雲路や、神の心も忠孝の、二つを守る十寸鏡。扨こそ蘇氏將來の、子孫とめぐみ給ひける。

第四　素戔嗚尊道行

舞詞 去程に素戔嗚尊、蘇氏が宿を御出有、旅より旅に出雲路や、昨日の八重の白雲を、今日の山路と踏分る。人目の關の關守も、咎むとしもはなけれ共、心と忍ぶ御有樣、恐れながらも哀なり。月日の種の御身にて、其影宿す露だにも、漏て溜らぬ破れ簑、著て見よとてや酒折の、山は霞の海深く、嵐漕行く落葉船、水に皺寄る翁川、年は經れ共色替へぬ、黒髮山とは彼れとかや。老の鶯名に恥て、聲な惜みそ眞金吹、吉備の中山中中に、散せし花を春風の、又吹ためて石崎や、彌高山の松が枝も、二度花の盛見すらん。

仰向にそるを弟が打つ其鋤が向ふへ飛ぶと也

水なき云々ー見ずにかく、井出は井堰

を、起直つて、弟が頰先より肩口迄、引かけて引鍬に、よろ〳〵とよろめきながら、眼兄が天邊を打裂ば、弟も眦を打破られ、兩方數ヶ所の手疵を受、兩眼に血は入たり、眼は暗闇身は紅、畦の柵踏顚し、堤を下りにころ〳〵どうと落重り、敲合ひ摑合ひ、這上れば轉び落、他人まぜずの挑合、命限りと 三重 見へけるが、兄はやう〳〵這上れば、弟も息續ぐ堤の原、躑躅の花を引むしり〳〵、口に嚙で咽濕し、命を繫ぐ花の露、兄は片息、草に喰付息ついだり。詞「おのれ親殺し、子殺し、女房殺し、遣らぬ〳〵」と這上るを、畠の土砂摑みかくるを事共せず、柵に手をかけ。眞砂交りの壤を、兩方摑んで打合しは、雨か霰の 三重 如くなり。賤機有にもあられず。走來て、「業人め、未だ死なぬか」と打かくる、鋤に恐れ堤をさして這下る。蕪民も賺さず這下て、堤の原を西東、迯るも追ふも深手に弱る。上には賤機、鋤を横へ待かくれば、迯るにわきひら水なき井出の、小川を越へて迯んとす。蕪民聲をかけ、「やれ樋の口抜け女房。樋を抜け〳〵」詞「チヽ合點」と走廻つて、女力も一世一代、貫の木に兩手を掛け、「ゑいや〳〵」と引程に、樋の口さつとさつ〳〵、逆卷落る水とう〳〵。川は狹し水は高し。餘つて瀬枕波枕、岩も劈く早瀬川、渡らん様もあら悲しや、と麓の畠に這上る。蕪民追付這上り、取て引

眞の左鎌—誠を示す左鎌と也

小腰云々—蘇民が下りる途端に切つくればなり
のつけに云々—

胎内の此子ゆへ。此子は如何成悪人ぞ。手を出して殺さねど、腹の内から親殺し、祖父殺し。恨めしい子を宿したと思へば、搔破つても捨たい物。まだ〲と月日を待、産落して嬉しからふか、目出度からふか。此方の敵は此子じやが合點か。折しも稲群に鎌のありしは、連なつた親子夫婦が罪滅せとの、神の教天のあてがい。死んで見せる。是で心あらためて、親子の者にむだ死させて下さるな」と、腹に突立引廻す、母が誠の左鎌。賤機是はと駈寄て、留むる甲斐も涙の玉、草葉の露と消へにける。蘇氏も鋤横たへ、「是女房、命にかへぬ御守、持てのけ」と聲かくれば、賤機心得身に引添へ、宿所を指てぞ走ける。蘇「エヽ辛い慘い、曲もない兄じや人。とつく恨いふ事は、此蘇民も知たれ共、兄弟の禮といひ、父に苦をかけまひ、と我身獨誤て、送る月日に時節も來て、一度父の機嫌能い顔、見よう〲の頼もけふにふつツと斷れ、今日から赤の他人。眞釼で出合ふか。但鋤の刃を喰ふか」と、詞を荒して罵つたり。巨「ヤ己に先をせられふか」と、打懸る鍬の柄、からりと受て打拂ひ、閃と廻つて打鋤に、巨旦が小鬢打裂れ、崖より下にどうと落つ。上手より重ね懸、打んとする弟が、向脚ぐはらりと打裂き、小膝を突ゐて下り樣に、兄が太股猊の口程切下られ、のつけに返せば突懸り、臼搗打に打鋤が、餘つて向ふへ越す處

五音—音聲つき
わごりよ—貴樣
塗る—かぶせる

の畠何者の仕業」と、鋤鍬入て刎返す痩骸、我親ぞ共白髮首、鋤にはねられ蕪民が身に、はたと當て落けるを、よく〳〵見れば我父なり。「ハアはあ」と計に鋤鍬捨て、骸に抱付わつと泣、顏を見てはわつと泣、「如何なる奴が手にかけし」と、駈出しては立戻り、走出てはどうと臥、夫婦足摺身を悶へ、畠の土に轉び打、大聲上てぞ歎きける。巨旦將來驚ひたる顏付にて、「ヤア〳〵蕪民、昨夕より父が見へず、人を配つて尋しに、見付た〳〵。親殺しの大惡人、後日の罪科あらがふな」とぞひしめいたる。蕪民「ムヽウ兄者人我殺して我畠へ晝中に埋まふか。世話燒やるな。其五音で殺し手は知れた〳〵」巨「知れたとは誰が殺した」蕪民「ヲヽ殺し手はわごりよじや」巨「ヤア孝行第一の巨旦に塗たとて塗らしようか」と、爭ふ中稻群搖ぎ、積だる藁はどさ〳〵と、崩るゝ中に嫂が、聲立てられぬ身の柵、賤機これはと走寄、口の轡も縛目も、かなぐり捨れば片息に、五「是蕪民樣の業でなし。夫の不孝惡逆、證據は連添ふ女房。是は大事の寶の守、是を戻せば心にかゝる事もない。嘸憎からふ巨旦殿。人を恨むる事はない、皆此方の欲心から。身にも及ぬ帝の寶を押取て、巨旦大王といわれうなどとは口吟にも云ふ事か。寢覺にも思ふ事かいの。其慾心の報ひが積り積つて、切れまい鍬で親を切。其欲心のもとはといへば、

牛の角文字―いの序にむきたり牛角はい形なる故(徒然草)させいはう―牛追ふ顆聲、馬どうく〳〵さあ勝つたり〳〵牛博勢させいはうせい〳〵(狂言記)

れなくも追出せし其恨。如何なればお事夫婦、かく迄深き心ざし、何時の世に忘るべき。我寶劍を取返し、三種の神寶揃なば、此恩は報ずべし。それ迄の契約、一つの祕事を傳へん」と、畔の柳を手折らせ給ひ、これを削小札となし、紅の總を付、蘇民將來子孫なりと書付、幼き者の襟に付よ。疫病瘧病、疱瘡赤疹、一切の惡病を免るべし。無道の巨旦が掠取たる疫神の手形、彼等が爲には守とならず、其身に災難來る事、三日は過まじき。正直の人にこそ守の印も有と知れ。百姓をさして天の下の御寶とは、天照神の御神託。農業耕作怠るな。さらば〳〵」と、簑笠携へ出給へば、夫婦は盡ぬ御名殘、「御機嫌能御本望。やがて〳〵」と見送るも、聲も霞に別れけり。蘇民「なんと女房有難い。不思議に高位のお宿を申、蘇民將來子孫とあらば、惡病難病拂ふとのお詞。末代の寶とは此事。殊に百姓を御寶と大神宮の御託宣、耕作怠るなと結構な敎。稼に追付貧乏なし。サア〳〵油斷ならぬ」と耒耜の、「牛と思ふな牛の尾も べらつきや遲ひ。牛の角文字急げば急ぐさせいほう。精出せば野らの荒地も上田」と、妻の賤機立寄て、身の上に引田の草も、茂る菜種の畦合を一鍬返す土の下。賤「是のふ此方の人、それ其畠に人の手足が生出た」蘇民「やれ麁相いふな女房」と、振返つて横手を打、「こりや如何じや。大事

是はならぬ―是はどうもならぬ

稲村―往なれずにかく

盡せねど―どはとか

ふの道、牛追ふて來る人は弟の蘇氏將來。巨「ヤア是はならぬ」と胸騒ぎ、骸を取て引ずり寄せ、「血性が脱て、早い骨の硬り樣」と手足押曲げ骨打折り、首投入れる苔の下、漸く埋み、踏付〳〵かきならし、足跡隱す畠土、これ惡業の種蒔と、思ひ知らぬぞ愚成。猶も近付牛の聲、素振でも見られては身の一大事、何國に隱れん木陰はなし。道は一筋、行も行れず、いぬるにも稲村の藁引のけ、女房引立押入て、上には藁を引繕ひ、我も木陰を狩場の雉の、命大事と身を忍ぶ。忍ばぬ世さへ貧しきに、蘇氏夫婦が情深く、素戔嗚尊に假の御宿參らせ、今日出雲路に八雲立、道も野飼の牛の鞍、お腰を暫し掛卷も、冥加の爲と送り行。夫が牛の綱取れば、賤機御笠簑を持、主君の如く敬ひし、心の内ぞ頼もしき。蘇氏牛を引留め、「見へ渡りたる此野邊は、殘らず親の讓の我地にて候ひしを兄巨旦に掠められ、我等の地とては是限り。兄の地を我牛に踏せんも如何なり。是よりは御徒歩にて、何國迄も御供と存ずれ共、兄に取られし惡鬼の手形を取返し、跡より追付奉らん。出雲國簸川手摩乳が妻、足摩乳は此賤機が叔母なれば、かくと告て御宿召され候べし。暫しも別れ奉る御名殘こそ盡せね」ど夫婦頭を地につくれば、尊牛より下御成て、「アヽ扨も世の人の心には品々有。過し雨の夜旅疲れ、巨旦に宿をもとめしに、つ

雲の裏でも—どんな所でも

罰も云々—罰も咎もないものと思うて

かたき石—敵と堅き

よりどうと落、絶へ〳〵喘息づかひ。女房鍬にすがり付き、「狂亂か巨旦殿。親御に疵でも付たらば、雲の裏でも云譯は有まい。放しや〳〵」と、捻合ふ間に父起直り、柵を使に取付、這上らん〳〵とする處を、巨「女奴放せ」と突退け、打て威すも不孝の罰の腕先狂ひ、父が耳の根がはと打込む、鍬の鐵や冴たりけん、覺えずゑいと引力、水も溜らず親の首、ずんばと切れて飛だるは、釖にかけたる如くなり。女房夢の心地にて、「はあ」と計に絶入ば、傍若無人の巨旦も、惘れて顔の色違へ、戰慄顫ひうつとりと、氣もうろたへて見へてけり。五「恨めしい、罰も咎めもない物と、女房の異見を余所に聞、今思ひ當つてか。刃もない鋤鍬で人の首が落るとは、日來の惡業惡心が積つて、鍬も釖と成、親殺しの咎人とは天道よりなし給ふ。又此罪が胎内の子に報はん、淺ましや」と、口說き泣こそ無慙なれ。巨旦ずんと立て、裾捻からげ脚踏しめ、「よい〳〵胸がすはつた。皆女奴が口ばしから」と、取て押伏せ、腰の手拭口に捻込押込、頤かけて引括り、帶引解き、後手に縛上げ、「こりや、迚も惡人の名を取た此巨旦、父の死骸を蘇民奴が畠に埋、咎を弟に塗てくりよう」と鍬提げ、善惡二ツの疇境、果は我身のかたき石、地をほり返し〳〵、掘るより深き罪科の、土も砂も身にかゝる、後の報ひぞ恐ろしき。土搔上る向

神の鳥居の二柱―鳥居の柱が二本あるは人は孤立が出來ぬを敎へたるものぞと也

とう〳〵―どうと響く丈で喘込んで居れば猶聞きとれぬと也

さぞあらめ。若い者の能い合點と、苦ひ口を甘ひ顔して見せつるは、己を人と思ひしゆへ。可愛や弟の蘇氏を裸にし、生る間もない親に疎ませ中を斷。さぞや蘇氏が親を恨みん不便さよ。宇賀石を返さば、强請取た大分の田畠、何故附ては返さぬぞ。人を損ひ、獨世に立たいとて立れうか。神の鳥居の二柱、一人は立ぬ敎とかや。天子の御寶、八咫の鏡と申は、善惡を照し給ふ神の御心、内裏に計有と思ふか。八咫の鏡は面々が頂く、彼の天にまし〳〵て、善惡を明らめ、罸も利生も頭の上に、忽來るとは知らざるか。我背中の垢穢れ、我は見ね共人は見る。心の内も其通。根性を直してくれ。親は他人の善人より、子の惡人がかはいひ」と、怒つ泣つ氣を揉上げ、口說き歎の親心、思ひやられて哀なり。巨旦眉を顰め、「女め能ふ頰げた叩いたなア。是親父、かう生れ付た巨旦、今更產もなほされまい。よしない子の世話やまふより、聾を苦に召されし」と、叫んでも喚いても、耳へはとう〳〵瀧の音、喘逆せば猶聞へず。父「なんじや其頰付待て居れ。蘇氏に知らせ、一國に生恥かゝせん」と、よろぼひ出る畦道、巨「サア通つて見や」と、鍬横へ立塞る。父「己が遣らぬとて往まいか。此道から」と立戻れば、又行先を立塞ぎ、巨「ならば手柄に通つて見や」と、振廻す鍬の先、父が胴骨はつたと打れて、畦の崖

涙ー無しにかく

鳥の跡ー文字

かゝるーかゝる に斯かる

ほでー手を卑しめていふ

ぬつぽりーきはく〵しからぬ心と俚言集覧にありよい加減になり

野老ー薯蕷に似て不味なり

が道かいふが道か、誰に語りて智恵を借る。人も涙に暮れけるが、「いや〳〵夫を世上に誹らせ、女の道はよも立まじ」と、思ひ定めて、五「是申蘇氏様の譲の田地、一寸も他人へ渡らず。親御様の御異見にて、兄御より弟御へ憐みあれば、御一家すなほに睦じし。是能ふお讀なされや」と、地をかきならし指を筆、書つく砂のこま〴〵は、磨る墨よりもありありと、一字殘さぬありのまゝ。盡ぬ眞砂も讀盡し、父は驚く鳥の跡、誰が呼子鳥何時の間にかは巨旦將來、後の畦の柵につゝ立、きつと見付る眼はさらに、それ共知らぬ嫁舅が、鼻の先突たる鍬追取延べ、がはと打立、土砂かきまぜる土烟。はつと飛退く顔に砂、かゝる子を持チ男持嫁舅こそ笑止なれ。こらへせいなき無法者、女房の頬先撲こかし、巨「何も知らぬ聟に男の身の上、能ふ告口ひろいだなあ。砂に書て見せうとは、其惡智恵を身が持てばまだ分限に成はい。物書ほで打折てくれん」と、飛付處を父摑付、元首押へて、父「こりや畜生奴、只た今聞て驚ひた。數年ぬつぼりと親を能ふだましたなア。女房を恨みず共、うぬが大惡大欲の魂は何故恨みぬ。弟の田畠貪取、養ふとは何の親。此親を養ふに何程の田畑が入る。著せる著物の中入は薄蘆の穗。さもしい事ながら、朝夕の膳部も五穀は有かなし。皆橡の實野老の根。親にさへ是なれば、身の始末

ころりとやる—死ぬる事
虫強い—堪忍づよい
味もしやゝりも—味も何もない
晝下り—下りと晝過とかく
埴安地神—土を守る神

時、ころりとやれば果報〳〵」五「イヤ〳〵まだ十七八年も置まし、腰膝立たずば抱て歩きます」父「ヤなんじや。十七八の腰本置て抱て寐さしよ。ハテ譯もない、途でもない事云やんな。いかな虫強い腰本も、此爺と寐たらば、破れ障子で骨計。味もしやゝりもおじやるまい。なふ恥しや〳〵」と笑へば嫁も吹出し、畑打賤も鍬を捨、腹を抱へて笑ひけり。五「やれ〳〵おかしい親父様、餘り笑ふて胸前も晝下り、休み時いざ來い」と、皆皆打連れ立歸る。四邊を見廻し、父「アヽ思はぬ笑ひに老の憂を忘れしぞ。なふ面は笑へど、心の底はおかしうない。此堤の四方八町に五町、家に傳はる我田地、隱居の時三つに割り、二分は惣領役、そなたの夫巨旦將來に讓、三分一は弟の蘇民將來、彼の樋の口から向ふの松迄一霞讓りし上田。口に榮耀身に奢り、皆他人の手に渡し、身代ちんぷらりと聞より内へも寄せ付ず、田地を見るも情なく、此邊足は向ね共、今日ぶら〳〵と是へ來て、アヽ重代の田地、余所の物になしたよな。此地の底にまします埴安地神にも見放され參らせし、と歩み來る踵、釘針を踏む如く、一入脚もよろめきて、無念におじやる悲しい」と、涙に老を噛ませて、聲をも咽に詰らせり。五百機ひつしと身にひゞき、「おいとしや道理や。夫の欲心一つより、弟御のうき目親御の歎、云へば夫の惡名。包む

ぎ放し、「頭の堅き宇賀石」と、抱しめ〳〵、こけつ轉んづ走行、心嬉しや 三重歌「在所女郎衆は皆美ひ聲で、一に麥歌ナ二に茶摘歌、三に早苗歌、四に仕事歌、歌で石うすかろ〴〵と。サンヤレさ、かろ〴〵と」 鋤鍬の柄や長き日に、畑打賤も肩脱て、溫氣成春の水、井出の樋の口堰入て、爰に彼處に小田かへす。東田も五反田、西田も五反田。中の畦道來る人は、巨旦、蘇民兄弟の父食保の長。齡も今年米麥の、田畑見んとて鳩の杖、まだ足元は若草に、揚る雲雀の水鏡、顔は老ても目性能、耳こそ少遠山松の、霜雪經ても膝腰は、根張強成柳影、四方を詠て休へば、嫂五百機敷物かたげ、「おうい〳〵。是はまあ〳〵お年寄の何時の間にやら、人も連ず危なや〳〵。爰で少お休み。酒はあがらず、お慰みに煎じ茶でも。茶辨當いひ付ましよ」と、いへ共耳の余所に吹、 父「ヲ、風も無ふて長閑な。去年の何時からか久しう田畠を見ぬゆへに、よろり〳〵と出たれば、又わつさりと氣が晴た。堤の芝が青々と、躑躅杜鵑花が早咲たの」 五「されば〳〵梅や櫻が散れば、菫蒲公英花は絶ゑぬ。氣の養生に成まする」 父「ヤア〳〵何と云やる」 五「ア、辛氣やの。是梅や桃や櫻が散れば、菫蒲公英花は絶ゑず、氣の養生と申事」 父「ヲ、〳〵能ふ知てじや。梅干を酒鹽で喰へば痰の藥。去ながら、もう此年で養生して何にしよ。腰膝拔ず、心面白い

井手云々—水門を閉ぢて水を田に入るゝ

米麥—八十八歳と米とかく

若草—若いにかけて足の輕く上るといふより雲雀と續け水鏡といふより顔と連ねたり

遠山松云々—遠いにかけて永の年數を經てもと也

目づくつた―目は芽にて娠んだ

火焰の中―危き所

奴養ふも田地取らふ爲。女房の腹に惣領が目づくつた。彼奴はいらぬ、連て歸れ」と投出す。賤「ヲヽ返さず共連て往く。此子を取れば氣が廣ひ、もう樂じや。これ巨旦殿兄御殿、蘇民將來を弟と思ひ侮つても魂が有ぞや。今の寶は申に及ず、田も畑も、藪も林も、今の間に取返して見せう。待て居や」と駈出る。五百機走出、宇賀石が兩足しつかと抱き、五「待て下され賤機樣。惣領に立んと契約で貰ふた子、今戻して二人の親世間へ顏が出されうか。身に宿りし子種を湯水と流し捨る共、世繼は此子。其儘置て我々が一分立て下され。守りも何も吞込んだ。此五百機が返さず」と、引留むれば、賤「なふ恐ろしや。大事の子、火焰の中から拾ひ上たと思ふ物。片時も爰に置ふか。サア其處を放しや」五「イヤ放さぬ」と、兩方義理と恩愛に、淚手詰の宇賀石が、「母樣のふ」と歎聲、巨旦將來守刀提げ、「ヤイ女奴、胎内に惣領持ながら、彼奴を留て何にする。放してやらずば此餓鬼奴胴中より切放す。サア何んと、サア何んとこりや〳〵〳〵」と閃す、刃も危し放しも遣ず、只「はあ〳〵」と身を冷す。巨「エヽあた面倒な」と振上る刃の影、さすがは產の母心、我子を悲しみ堪へかねて、放す拍子切る拍子、二ツ拍子の間違ひに、跡を切たる切先、椽框に切込んで、拔ん〳〵と悶く間に、母「どつこい」と掻潜り、嫂の手をも

方圖—限り
ぬつくり云々—うま〳〵尊に持たせておく
わゝり—むしやぶり付くの意なるべし
もどく—非難する
輕薄—追從

民のたわけ、此寶を奪取、帝へ上れば御褒美恩賞方圖は知れぬ。是をぬつくりと持せて置、其律義から貧乏する。今巨旦が手に入は招かぬ福德。此寶を以我も巨旦大王と呼れ、大國所領の主と成時、筵二三枚敷の田地は裾分しようと歸つて云へ」とつゝと立、入らんとするを、五百機驚きわゝり付、「餘りな無理無躰。穢い欲心持ふより、いつそ奇麗に盗したが能いわいの。サア返しやるかサア如何ぞ」巨「エヽ男をもどく出過者」と、はつたと蹴のめし入ければ、五「チヽ踏れうが打れうが、非道をさせて見ては居ぬ。賤機様恥かしい。常住我儘ばつかり。明ても暮ても云合て居るはいの。待て下され、取返して遣ふぞや」と續いて奥に入にけり。賤機惘れ氣も上り、「エヽ悔しい事をした。心を宥め田地を取輕薄に、大事の〳〵天下に一つの御寶を借參らせ、ふか〴〵と手に渡せしは何事ぞ。此身を寸々に刻まれうが、微塵に碎かれうが、取戻して尊様へ指上いで置物か。多年の恨、夫婦が胸に積れ共、獨子を養はれ、憐ふ辛ふ當らふか、と無念を押へ打過しは宇賀石といふ質を取られ居るゆへ。其無德心からは、定て宇賀石も殺してがな捨つらふ。サア其守り戻しや。但それへ踏込で、聊爾をするが合點か」と、思ひ切たる面色にも、我子は如何にと、あたりに目をぞ配りける。巨旦將來、宇賀石小脇に提げ、「こりや、此餓鬼

一日が云々―半日にて耕し終ふとなり

叱りこくつて―叱りとばす

べらと隙入て囃ふまい。いふ事濟んだらお歸りやれ」と、愛相なき詞付。與「如何にも御意の通り、人の手も我手にしたい時分、此方の蘇氏殿、作るべき田畑はお前に取らるゝ。殘て半畝か一反に足らぬ所、一日か日中にはつる鋤仕廻、永の日を遊んで居て行末の詰らぬ事。どうぞお情に半分ならずば、せめて三分一、田地戻して下さる樣に、五百機樣迄申せとの事。まだ此上に添て進上と申さば御機嫌もよい筈。取返すと申はお氣に入らぬと知りつゝも、云ねばならず、申も迷惑。我物ゆへに骨を折とは我々夫婦。ヤ何がなお土産と思ひ寄る珍しき物もなし。此お守は聞もお及なされたか。素戔嗚尊樣寶劔とやらを失ひ、大内を追出され、流浪のお姿で、二三日此方にお宿を召され、明日か明後日、出雲國へお立との事。則是は尊樣のお寶、疫神の誓紙の手形。是を頂戴せし人は、惡病難病を遁れ、萬の災難を拂ふお守。宇賀石の夜泣、御老躰の父御樣、御夫婦も戴きて、息才延命成樣に、暫しが中申下し、借受て參りし」と指出す錦の袋、巨旦將來悦び三度に戴き、「是ぞ内裏に傳はる三ツの神寶の其一つ、神璽と申天下の寶。四五日以前雨風烈しき夕暮、簑笠悄れし旅人、一夜の宿と賴しを、非人か又は盗人の引入かと思ひ、擲かぬ計に叱りこくつて追出した。エヽ殘多い。聞ば素戔嗚尊蘇氏が方に泊たげな。蘇

兄親と云々―兄や親の事なればと我慢する

夫の慙毀云々―世間では夫の悪口を我に隱す故夫婦共に邪見に見られる

道だて―道を守りて貧乏する

水共知れぬものを惣領に立たさ。宇賀石が疎ましく、科ない子を憎み立て、生ふが死ふが、有なしに育てゝは、人はおろか草も木も、雨風を防がねば、色美い花は咲ぬ物。蘇民樣は兄親と虫を殺し給ふ共、嫂の恨世間の口、夫の慙毀包む故、共に邪見の浮名を取、迷惑は我獨。田地も返し、弟御の身代立てば、父御の孝行其身の威勢で有まいか。眞實の異見する者は、女房ならで外にない。少は聞入あれかし」と諫めかねてぞ泣居たる。巨「ヤア聞共ない又しては同じ事。人に褒められ、兄弟思へば損がいく。弟の蘇民將來が道だてひろいて貧乏かはく。此巨旦は、人が憎み譏つても持たが病。仕合と親父は聾、何が何うやら聞ずに濟む。内義の御異見聞手間に野を見廻し、一寸成共地を廣げふ」と、立出る門口 弟嫁の賤機、にこ〳〵ほや〳〵會釋こぼして、御機嫌取の追從顏、「ムウ是は御夫婦ながら内方にか。少お見廻」と休らへば、五「能ふこそ〳〵。余所他人でも有ことか、遠慮なしにサア爰へ。蘇民樣はお健なか。此方にも父御樣始變る事はなけれ共、只宇賀石の夜泣が、今に於て止まらぬ」巨「アヽお前のいかひ御苦勞」五「アヽ何んのいの。腹痛まずに和女に產で嚊ふた子。それ程の苦をせいでは」と嫂中の睦じさ。巨旦將來鼻に皺寄せ子細顏。巨「これ賤機、百性の忙しい最中、爰等へ來てべら

牛を盗出すといへば男共の怠慢をかけて云へり

ぞべ〳〵〳〵ーぞろ〳〵長い着物きてゐる事七歳ーないにかく

見るやうなーさぞ寵愛せらるなちん其が目に見える様也

も追付蒔時分、東の岡に鍬の刃を絶すな。茶園の草引け。豆小豆の芽を雉に喰すな。苗代の鳥追へ。和郎共は牛の食物、事欠ぬ様に堤べりの草刈れ。これ宇賀石、百姓の子は小さふても、ぞべ〳〵と旦那顔して埒明ぬ。尻引褰げ籠擔げ、大根引て持ならへ」と、何の用捨も七歳子の裾捻上、跣で突出す太股は、引大根より細からめ。妻の五百機走出、「何程大事の大根にて、彼の子が引ねば叶はぬか。五年以來夜泣して、色悪ふ痩る子を、風に當て、露を踏せてよい物か。内との者共早う往け。いとし者を何の畠へ遣ましよ。是奥へ往て、溫にして遊びやいの」と押遣れば、王「いや〳〵育が甘さに病者に成。只養ひしようより、畠に立せ、鳥威しにでも仕てのけたが能いわい」と、愛敬なき夫の顔、見る目の中は涙ぐみ、妻「今更云ふではなけれ共、つれないさもしい心かな。夫婦中の子ならば、さぞ寵愛を見る様な。弟御蘇民將來様の獨子を養ふて、胤腹はかはれ共、水入らずの甥子ぞや。育てに物が入事の、父御様の養ひのと、弟御様の田地も上田殘らずねだれ取、其上に奢者、榮耀者、譲の田畑も失ふた、と耳も聞えぬ父御様へ弟御を讒訴し、親子中を割きながら、さらば此方が孝行でも有ことか、著類食物、不自由な目を見せまして、罰も冥加も思はずか。殊に我身、此ごとく懐胎身持に成しより、人共

雨より云々―雨よりも天に恐れて冠を着くるに忍びず竹笠を被ると也

玉水の云々―かかるに斯るをかく、諾冊二神天瓊矛にて海を探り其滴凝りて磤馭盧島となる

田かせは―耕せばか

八束―ふさ〳〵と穴の長きを云

暗がり―遅緩なるを暗がりより

非も少は晴やせん。暇申」と出給へば、兒屋の臣も悼しさ、破れし賤の簑笠を、旅の宿と參らすれば、共に涙の雨よりも、天を恐るゝ竹の笠。昨日の冠引替り、國を憚かる菅簑は、今朝の錦の移り果、高き位は時の間に、賤の奴と窶れ行。猛く賢しき力にも、押に歪まぬ逆矛に、打るゝ君が非をあらため、臣は諫めて打杖の、盡ぬ名殘や溢るゝ涙、包むに餘る雨雲の、立別れても天地の、誠の道の末直に、引一五三繩や永き世の、人の掟と成にけり。

第三

ウタイ芦原や天地人も開け初め、榮ゑにけりな逆矛の、雫の玉水のかゝる時しも生れ來て、民も豊に田かせは、稻は八束に粟麥も、賑ひ勝る秋津洲や。吉備國の百姓、食保の長が惣領巨旦將來、近鄕一の田地持。數多の家子下男、まだ東雲の暗がりより、引出す牛の犂や、擔げて出る鋤鍬の、苦は人間もかはらめや。巨旦將來養子宇賀石いざなひ、油斷させぬ人仕、「ヤイ〳〵男共、田も畠もくいさいた樣ではかが往ぬ。樋の口通りの八反田、今日晝迄に鋤仕廻、山續きの麥畠水溜るな。畦々一鍬入れ、隨分水に油斷すな。麻

三刀四刀—原本皆刀を力に作る
うぬが—自分が
感涙をかけ—涙を流す
天逆矛—神代の矛の名

元を三刀四刀指通し、返す刀を其身が鎧の引合せ、肋をかけて突込だり。士卒慌て駈寄るを、稚「ア、寄るな〳〵」と押留め、假屋の方を後目にかけ、「愚人千人萬人より、兒屋の臣の思召、黄泉の底迄恥かしし。命を惜み、軍を恐るゝ臆病とは、余り成仰やな。十一歳の春より、片時お側を離れず宮仕へ申せ共、斯く情なき御詞、終に耳に觸もせず、非道の御謀反に討死せば、何ばう命惜かるべき。うぬが身を立ん爲、悪事を勸むる鰐香背を、君忠臣と御覽有。我等は不忠佞人と見て、討て捨腹搔破り、命を捨て諫言申、臆病者の所爲を御覽ぜ我君なふ」と、諫言は磐石の、詞は重く一命は、露より輕く消にけり。天津兒屋も兩眼に感涙をかけながら、尊の前に突立、兒「此御矛と申は、女神男神の御代を治め給ひし天逆矛の御形。執權の家に預り傳へ、國の賞罰是に有。尊の咎を今打杖、姉御神の御手を貸給ふぞ」と追取伸べ、ちやう〳〵はた〳〵打や現共、夢共分ず忙然と、忽御心翻り、退去て逆矛頂戴有。返し捧ぐる御籏の印、輝く日月と、共に晴行御心を、諸卒も「あつ」とぞ感じける。尊盡せぬ御落涙、「兒屋の臣の誠の杖、天稚彦が忠義の自害、我父母の敎も此上の有べきか。寳釼を取返し、身の過を解く迄は、供も連も頼まじ。只我一人身を懲し、形を苦しめ心を痛め、雨に打れ嵐に臥、天地の責を受てこそ、

に入ず、剰御命を的にかけ、悪鬼退治の討手、過分共御太義共いふ事か、息もつがせずまだ賓釼が足らぬとは、悉皆帝の使ひがらし。下郎下人を雇ふても、禮をいひ賃を出す。德もなきむだ働。同じ手間では此御簱を押立、棟梁顔する兒屋の臣を討て捨、直に都に切入、瓊々杵帝を追下し、君御位に即給はゞ、后も寳釼も、ゐながら天下は御心の儘ならずや。エヽいひ甲斐なき御所存や。御謀反思し立給へ」と、鰐が見入し悪性根。尊殆ど打頷き、「馬引寄せよ簱揚よ」と、御謀反の氣ざし顯れたり。天稚彥、鰐香背が持たる簱掉ひつたくり、御膝本に突懸り、大地を叩いて、「エヽく口惜の御所存やな。厄神共に手形をせさせ給ひしは昨日今日。其手形は何の爲。日本の人民を惱さじ、國の妨致すまじとの手形ならずや。今御謀反の思ひ立、天下を覆へすは國の妨、民の煩ひ。鬼畜に劣りし御心。甚深不測の了智を具へし兒屋の臣を輕んじ、虫同然の鰐香背風情に云廻され、天孫の御身を危ぶめ給はん淺ましさよ。御爲大事と存るゆへ、慮外の詞御免あれ」と淚を浮め申けり。尊大きに御氣色損じ、「諫言立聞にくし。鰐香背は命にかへての忠節。己は命を惜み軍を恐れ、忠節に託け身を遁れんとの諫言。卑怯者臆病者」と、御足にはつたと蹴散し給へば、起直つて鰐香背が襟髮摑んで引寄せ、胸板に乘懸り、心

猿の面笑―諺にて自分に缺點ありながら他人の缺點を笑ふ事、猿が自分の面の赤きを知らずして他の猿を笑ふ

刧―功か

桑の立木―雷は桑を忌む事前にいへり

ん。サア來れ軍兵」と既に御足を上給へば、兒屋の臣太刀を手をかけ、「ヤア是々誤なしとは猿の頰笑ひ身の上知らず。美濃國の惡鬼退治を刧に立られんとはおろか〳〵。其爲にこそ日月の御籏を預、軍勢を付られし上は、それ程の手柄はなふて叶はぬ筈。芦原國三の寶の其一つ、十握の寶劒、和君の好色戀慕より、化生に奪はれ給はずや。既に出陣の時、此寶劒取らずんば、帝都の土は踏まじ、と天に仰ぎ地にむかつての誓言は、サア覺へてか、忘れてか。誓を背き、手振で歸つて神の式を越へんとや。僅か細き繩なれ共、一筋是を引時は、內有外有、上有下有四方有。繩を取れば內外上下の分ちなく、闇も同然。是一心を表する繩。心に一五三を引時は、主從親子、忠孝禮義の分ちを知。是を分つを神共いひ人共いふ。分ち知らぬを鳥類畜類と名付たり。今畜生の數に入て、越へ度ば越へられよ」と、一言四海を覆ふの詞、理りかな、末代日本文武の政を司どる、攝政關白の元祖、春日大明神と顯れ給ふは、兒屋の臣の御事なり。誠の道理にせめられて、さしもに猛き素戔嗚も、雲を放れし雷公の、桑の立木に挾まれて、苦しむ形も斯やらん、しほ〳〵として詞なく、差俯伏ておはします。鰐香背籏掉取て搔込、「アヽ正直過たり我君。常々申は爰の事。帝の爲には親同然の御身柄、開耶姫の戀慕、小女一人さへ御手

より御覽じてとなり

したゝめよし―充分食事をしたと也

端出―なひたる繩の尻を房の如く下げたるもの

又な―なは感詞

引す。先へ走て理り申せ」との仰せ。兎角お隙の取れぬ様に、一刻も早く御歸洛有が御馳走。ざつと御悦びのお盃計、お吸物など御無用。諸軍勢も認よし。何にもお構ひなさるゝな。はれやれ大きなお心遣ひ。ヤはや御旗の手の見へたれば、御馬も近付候」と、聲も隼雄素戔嗚の、お馬も進む轡の音、凛々たる威風四邊を拂て見へにける。天稚かくと披露申せば、手綱を控へ、素「是迄の出迎ひ過分〳〵。思ふ儘に惡鬼を鎭め、國靜謐推量せられよ。片時も歸洛急ぎ度、殊に凱陣の路次、馬上容赦に預らん」と乗出し給へば、天津兒屋飛で下り、端出の一五三繩引渡して、道の眞中を遮り、尊に對つて大音あげ、兒「和君も二柱の御子、天照神の御弟なれば、御存知の事ながら、此一五三繩は、日の神窟を出給ひし時、我等が先祖此繩を引廻し、又な窟へ入給ふな、と奏せしゆへ、神も此繩越へ給はず、長く此國に留り給ふ御一五三繩。サアならば越へて見給へ。都の方へは一足も叶ふまじ。日月の御旗を渡し、遠き韓國根の國へも逐電あれ」と、案に相違の顏色。尊を始諸軍勢、惘れ果たる計なり。尊馬より下立給ひ、「心得ぬ事を聞物かな。過り有て越るならば、法を越へ、制を背共云つべし。宣旨に任せ惡鬼を鎭め、手形をせさせ、凱陣する素戔嗚何事かあやまる。踏越へて入洛せ

印に水垂るとなり
虚勞—精神衰弱の病
内瘴—そこひにて眼の見えぬ病
此棧敷云々—此棧敷を尊があれ

けへん〳〵と喘上て、鉢巻水鼻「誰やらん」鼻「されば候。何がしは暑や寒やの風の神。手療治の薑酒、敗毒散に追出され、一汗さつと流れかゝりし橋杭の、悔の八千度百度も、送られました」と押にける。其外癰疔腫物の一統、虚勞陰去火動神、腹痛頭痛の頭神、急難急病内損外損 胝内瘴瘰の神に至る迄、残らず手形を顯せば、巻軸は首領の三熊、左右の大手をしつかと押、「芦原國の人民は、無病息才延命」といふ聲計、一紙に残り、立舞ふ霧の殯山、悪鬼は消て失せにけり。尊は猶も御威勢の、慶賀の聲や勝どきの、ウタイ聲に打添ふ松の風〳〵、靡く草木や日月の、旗をなびかせ 三重 歸洛有、尊の御威勢隠れなく、天津兒屋の臣勅諚蒙り、梓川原に平張打せ、文武の下司左右に從へ、棟梁の臣下の預り、天の逆矛、屋形紋の錦に恭しく、其身は床几に悠々と、尊を迎へ待給ふ。先陣の天稚彦、いきりきつて走付、「ハア兒屋の臣の御出か」と棧敷の前に膝を突き、稚「君此度悪鬼を鎭め、御凱陣隠れなく、悦びの御迎ひと相見へ、御念入段御苦勞千萬。いやはや近國の悦び、お通りの道筋、士民、姥嬶童迄が、「御恩の爲、道を清める。箒よ槌よ」と、足を空に駈廻り、所々の領主、郡主が出迎ひ〳〵、一樽を捧げ御馳走。御内の我々迄、行先の御酒で道ばか参らず。此棧敷、尊あれより御覧じ、「又隙とつては都入延

橙の實―熱下しの藥
ふじ三里―灸所、膝關節の下
小袋―睾丸
山梔―黃色にて言はぬにかく
お吸物―お推量にかく
桑の箸云々―半身不隨にて箸も左に持て食ふ
かも瓜―瑞にかけて冬瓜喰うた

出、名乘て手形仕れ」鬼「あつ」と應へて步み來る。白髮交りのおどろの髮、杖に縋つて屈み腰、鰐「彼奴は鬼の家老かや。如何成病の神やらん」鬼「さん候。某は冬の雪の夜秋の霜、寒氣の折々虫と成、鰐香背殿の腰の廻り、御見廻申せしお名染の疝氣の神。御見忘れは曲もなし。當代人間賢しくて、胸へ上れば橙の實、足へ下ればふじ三里、灸と針とに行方なく、近比慮外な小袋に、屈みまする」と顏しかめ、手形押てぞ入にける。次に出しは目の內迄、眞黃に染る朽葉色。木の葉衣の裏ふれて、黃成淚に袖濡れしを、天稚きつと目利して、「疑ひもなき黃疸神。汝が手では判の色も違ふべし。念を入て手形押せ」黃「扨も見脈お見立の、奇成哉妙成哉。別ては何うも山梔色。只御推量お吸物、我等が禁物、名を聞ても蜆汁、殼も怖いあら怖や」と、手形押〳〵押分て、ぶり〳〵慄ひ出たるを、鰐香背早く聲をかけ、「我も目利は劣まじ。邪氣瘧の眞最中と、見た目は三寸違はせぬ。如何に〳〵」と問かくる。鬼「いや〳〵大きな藥違ひ。某は中風の神、名は半身と申者。桑の箸さへ左の手」口を歪めて入にける。續いて見えしは水膨、はつたり〳〵腹の皮、可笑しさこらへて天稚彦、「いはねど水腫脹滿神」二人「申に及ぬ」鬼の口、とつてかも瓜山牛房、藥喰の其印、押せば押手に水垂りて、判も薄墨片隈から、亂れ髮に幣切懸け、

どうずけなう―どうは發語にて情なし

死なぬ例―死なぬ事はあつても我言は僞なし

著到硯―受附の帳面と筆硯

肉に隱し置。彼大蛇を滅ぼし給はゞ、寶劔ふたゝび神寶と成給はん事疑なし。全く我等が奪ふにあらず、命を助け給はれ」と、はら〳〵溢す血の涙、鬼の泣のは人よりも、どうずけなふて哀なり。尊嘲笑はせ給ひ、「當座の命を遁れん爲、丸を欺く愚〳〵。汝が奪はぬ證據を出せ」と、踏付給へば、三「アヽ申々、御疑ひ御尤。さりながら、天地の間の惡鬼惡蛇、同類同性とは申せ共、司る役々に替り有。我等は厄神の首領、四百四人の眷屬共、人間に四百四病を與へ、業の盡る命は取、非業の者は殺し申さず。神は正直、鬼神には横道なし。世界の人が無病で死なぬ例もあれ、微塵も僞り申さず。末世末代の人間、尊の御名を稱ずる者、守護神と成申さん。今の一命御助」と、首領が頭を下ければ、有合ふ眷屬一同に、「御免〳〵」と泣聲は、數千疋の犬狼、一度に吠るが如くなり。尊得心まし〳〵、「チヽいしくも申たり。助くべきものならねど、寶劔は八岐の大蛇が取たると告知せし恩賞によつて、眷屬に至迄、此度の命を助け置。重て我國に仇をなさじと誓の手形、天照神の御神制に任べし」と、肩骨摑んで投退給へば、三「有難し〳〵。命助る手形なら千枚でも致さん」と、眷屬共も活々と、悅び勇み跳廻る、鬼踊とも云つべし。鰐香背天稚聲をかけ、「ヤア〳〵御前成は靜まれ」と一紙の卷物、著到硯。「一疋づつ罷

鼻明せ—だしぬき

退散云々—魔軍のは魔軍をの音轉

儆の川上—儆の川上にて以下同じ

の鉾輕々と横たへ、づしり〳〵と揺ぎ來る。鰐香背きつと見るより、「何でも爰は思案所。彼奴を討て天稚に鼻明せ、今の面目雪んもの」と、胴を据へても歯の根が合ず。間近く來れば吃驚狼狽へ、「ア、〳〵待や〳〵。草鞋の緒が解た」と、屈むる弱腰無手と取、うんとさし上げ、くる〳〵と振廻し、大地へどうと打付、既に斯よ、と見へけるが、天稚透さず飛かゝり、只一討と振上る、太刀の柄無手と摑んで引寄せ、兩の膝に引敷たり。稚「ヤァどつこい、己に敷れうか」と跳返さん〳〵と揉合共、大盤石を負ふ如く、眼も飛出る計なり。素戔嗚遙に御覽じ、百獸の洞の内、獅子の猛る如くにて、一文字に駈付、三熊が項を摑んで輕々とさし上、巖壁にどうと打付、胴骨をしつかと蹈で突立上り、怒れる御聲にて、素「汝如何なれば我國にあふれ出、岩長姫と生を替へ、丸が預り奉る寶劒を奪取り、神國の寶を失ふは、國を傾けん爲か、丸が勢ひを押へん爲か。庭上にて呑だる寶劒何國にか隱せし。出せや出せ」とはつたと睨み、退散魔軍の御足にかけ、「寶劒出せ」と踏付給へば、通力自在の三熊も、天孫自然の威力に押れ、苦しげ成息をつぎ、「あゝら恐れ有。何ゆへにか此國の神寶を奪ひ奉るべき樣更になし。彼の寶劒と申は、出雲國儆の川上烏上の嶺に、億萬劫を隱れ棲む八岐の大蛇と申、一身八頭の大蛇奪ひ取、鱗の皮

鬼だまい―鬼溜り
洒落臭く―生意氣

さへ吃驚りせう。顯れ出て怪我しようより、怖くば何奴も出おるな」と、嚴しげに呼はれ共、胴はわなく慄ひけり。諸卒を下知して天稚彦、差詰引詰射かくる矢先、惡鬼も堪へず爰の梢、彼處の雲間、異類異形に身を變じ、土石を飛ばせ火焰を放ち、人畜兩陣入亂れ、火水を散して三重挑み合ふ。寄手は大軍四方八面に切立られ、鬼だまいにくはつくと、溜息吐てぞ控へたる。其中より犢牛の二疋連、鐵杖提、三熊の分身隱れなき、滅鬼積鬼といふ早業、「鰐香背が名乘樣、洒落臭く人臭く、鼻がひこく香しし。サア出て勝負せい。汝等が世話に云ごとく、我輩が煎餠嚙む樣に、がりくと嚙で呑んず」と、大口明てぞかゝりける。詞に似ぬ鰐香背、がたく慄ふて迯んとす。天稚彦草摺取て引戻し、「敵に聲をかけらるゝは弓矢取る身の好む處、軍大將のお働見物せん。所望く。サア一軍」と突出されて、慄ひく拔合せ、二打三打討つと見へしが、滅鬼積鬼がちらつく早業、打立く追つたてられ、鯉エ丶血腥い鬼共。穢いく」と頭掉て、味方の陣へ迯入しを、笑はぬ者こそなかりけれ。勝に乘つて追かけ來るを、天稚隔て渡りあひ、上段下段に切結び、飛鳥の翔の手を碎き、弓手馬手へ切散し、喚いてかゝる眷屬共、「得たりや應」と聲をかけ、當る者を幸に、落花微塵に三重切散す。大將三熊、三尖二刀

甲の鉢云々—此所渡部綱が茨木童子に摑まれし趣向を取る

あらかねの—土の枕詞

忍びの緒—兜に著けて頭の下に結ぶ緒

推參—無禮

壹越調—音樂の調子に十二律あり其第一を云ふ

くては後日の不覺」と、指添抜て松の荒皮押削、腰指の石筆嚙濕し、文句「今月今日當山に先陣をかくるといへ共、臆病の鬼共一疋も出合ず、近比弱味噌鬼味噌の汁かけ鬼、喰殘す殘念〳〵。素戔嗚尊の御内、天稚彦十八歳」と、大文字にぞ書たりける。時に山谷鳴動し、古木を吹折る一嵐、頭の上に落かゝり、一丈余りの鬼の腕、朱塗の熊手と云つべく、毛は金銀の針ばり〳〵、甲の鉢を、無手と摑んで引上たり。稚「ヤアしほらしし。引れはせじ」と、兩足しつかと踏しめて、錣に手をかけ、うんと留ればゐいやと引、ゐいや〳〵おふ〳〵わんと、引つ留つゝ人力魔力、暫し勝負はあらかねの、土を離れて引上しは、釣瓶を釣たる如くなり。太刀を逆手に突共切共、手答へなし。「さしつたり」と取直し、切て放す忍びの緒。主は大地へどうと落、甲は雲間に引入て、虚空にどつと笑ふ聲、山も崩るゝ計なり。臆病の癖高慢者、鰐香背大きに腹を立、「天稚に先陣越されし奇怪」と、軍勢引具し一散に馳來り、「軍大將を出し抜き、制法を破り、拔駈せんとは推參」と、聲をあらゝげ罵れば、稚「いやさ手柄は仕勝。味方同士の廣言いふ手間で、鬼に對つて一句も出るか。聞たい〳〵」鰐「ヲ、覺へがなふて大將が成物か」と、壹越調をかすり上げ、「抑惡鬼追討の勇將、素戔嗚尊の執權、軍大將鰐香背の臣とは我事なり。名を聞て

時—鯨波

同じ毛—鎧と同じ糸にて縅す

たけ成駒—たけは四尺を定尺とす（貞丈雜記）

そびをかふ—そびは水乞鳥にて雨の降らんとする時鳴いて名を呼ぶと云ふ（俚言集覽）

し、身を隱さば芥子に入、顯れば天に跨り、軍兵蹴殺し踏殺し、力立する天稚彦が細首引拔、手足を捥ぎ、尊を捕て八つに引裂き梢に晒し、日本を魔國にせん。勇めや進め眷屬共。怨々やつ」と喚く聲、雲に谺の木の葉を鳴し、麓に響く時の聲、石を降せて雨交り、土風山風、三重一セイ尊の昵近天稚彦、「拔懸の高名し、目を覺さん」と夕闇に、物の具取て肩にかけ、同じ毛の甲の緒を締め、たけ成駒に鞭くれて、舍人も連ず只一騎、陣所を出て鬼神の住む、繁みを目がけ歩ませたり。春雨の足もしどろに雲深き、嶮岨巖壁九十九折、ウタイ俄に吹來る風の音に、駒は頻に高嘶し、身振ひしてこそ立たりけれ。稚「ヤア怪しからぬ空の雨風、鬼殿そびを飼るゝな。ムヽそれ好た面白い」と、鐙踏張り、鞍蓋に突立上り大音上、「只今先陣の若者を誰とか思ふ。忝も天地同躰の御神、伊弉諾伊弉冊の尊の御子、天照太神の御弟、神武勇力の譽れ有素戔嗚尊の膝本去らず、天稚彦とは我事。手形外れか手形を背くか。三熊の大人虫とやらんに見參せん。出合やつ」と呼はつて、山を睨んで控へしは、いか成天魔疫神も、恐れつべうぞ見えてけり。山はひつそと靜つて、答ふる物は嵐の音。稚「エヽ聞た程もない鬼共。一疋も頻出しせぬは天稚彦が怖いか。出よ〳〵」と乘廻し〳〵、乘据てひらりと飛下り、「折角寄ても先陣の、證據な

懸河—早瀬の川

山又云々—山重り水重りて奇巖は削りなしたる如く緑の淵は染出したる如し【和漢朗詠集】

汐合—潮の満つる所

あらかねの、金鐵の德備つて、强きを破り剛きを割り、硬きを碎く牛頭天王、末世の惡魔疫神を、防ぐ神威ぞ有難き。

第二

萬古目前の境界、懸河渺々として巖峨々たり。山又山、何れの匠か靑巖の形を削なせる。水又水、誰が家にか碧潭の色を染出し。天より降し殯山、見上る嶺も森々と、萬木雲を貫ぬけば、月日の影も目に見へぬ、鬼住山ぞ恐ろしき。厄神の首領三熊の大人、眷屬部類の惡鬼邪神に圍繞せられ、黑雲に跨り座し、猛虎の吼る如き大聲にて、語つて曰、「扨も芦原國の始、天照太神に責付られ、我等が類、人民に仇をなさじと手形の誓をなしけるに、我其時は八重の汐合に隱住、彼手形に外れしゆへ、此度當國當山に住居し、風水山嵐、霧霞と變じ、人民に邪氣を吹かけ、惱し煩しめ、氣をのみ、血を綴るに、日本人肥て血の味甘く、眷屬の汝等迄腹を膨す事、唐土天竺に勝る。然るに素戔鳴尊といふゐせ者、討手を蒙り、あれ〳〵あれを見よ、麓に數萬の軍兵鏃を揃へ、鉾襖を作つて攻上る。そも素戔鳴なればとて何程の事あらん。通力自在は此度。水を卷上火焰を降

七多羅樹—印度の香木、一多羅樹高七仞、七尺曰仞(翻譯名義集)
齋機殿—齋み潔めたる殿にて神の御衣を織る所
日の御座—清凉殿にありて主上の晝の御座所
夜るの御座—同上主上の御寢所
雄詰—雄々しく叫ぶ事
與躰—死體の誤

鬼が身より火焰を放せば、尊の劒の稻光、恐れて虚空に飛上り、ウタイ其高さ七多羅樹旹「例へ天地は覆へる共、取たる劒は返すまじ」と逆手に取て柄頭より、鬼一口に呑むぞと見えし。朝拜殿に尊あれば、齋機殿に惡鬼有、いんはた殿に駈入給へば、新嘗殿に惡鬼有。新嘗殿を追詰給へば、殿上、日の御座、夜るの御座を行違ひ追廻し、惡鬼の叫喚、尊の雄詰、太刀音、足音、ゑいや聲、大地も裂る 三重 計なり。惡鬼が飛鳥のかけりをなせば、尊は射る矢の早業猛く、爰に追詰兩腕切、彼處のつまりに兩脚薙ぎ、踏伏て首討落し、太腹胸骨、五躰を八段に切碎き、腸を寸々に切さばき、見給へ共呑だる寶劒あらざれば、勇みに勇む素戔嗚の、矢竹心の力も盡、惘れ果てまします處に、魔風どつと梢を鳴し、切離れたる八つの與躰、蠢き出て集寄、一團の火焰と成、寶劒を引包、響き渡り鳴渡り、車輪の如く舞上り、霆き閃き飛で行。尊は身を揉み拳を握、つばさなければ飛行なき、虚空を睨んで立空に、雲を卷込颶風、さら〳〵〳〵、どう〳〵〳〵四大海の荒波の、天に逆卷ごとくにて、其行方は天さがる、素「國の果島の果、海龍王の棲家迄、探し求ず置べきか」と、無念の淚はら〳〵〳〵、「兄弟の月讀、日讀も照覽あれ。寶劒を取らずんば、都に歸らじ地は踏まじ」と、誓を堅め踏堅め、踏だる土や

變滿―遍滿か

相殿―劒と鏡と一つに安置せられし御殿

天蠅斬―素盞嗚尊八岐蛇を斬り給ひし劒、次の天羽々斬と同じ、天羽々斬今在石上神宮(古語拾遺)

武勇の破滅、我耻辱」と寶殿に馳上り、御箱の祕封「ゑいやつ」と捻切、御劒を御身にしつかと携へ、素「サア神通自在もなさば爲せ。寶劒は渡さじ」と獨語してまします處に、思ひも寄らぬ簾中より、天稚彦つゝと出、「内裏に惡鬼顯れしと承はり、御跡慕ひ馳付、方々尋申たり。いざ還御」とぞ申ける。素「ヲヽ出來した〳〵。一大事は此寶劒、汝供奉して館に納め、油斷なく守護し奉れ。丸は此紛れに開耶姫を奪取、追付伴ひ歸らん」とうたてや御劒をやす〳〵と、渡し給へば押戴き、稚「君知召さずや。彼惡鬼と申は、天に有ては雲の八街に住、地に有ては八方八隅に變滿し、八色八面の惡蛇、此寶劒を奪はん爲、大山祇が娘と生れ、疾くに取は易けれ共、相殿に在す鏡の威光に押れたり。八萬年が其間、念をかけたる此寶劒。望叶ひし嬉しやな。岩長姫は我なり」と、いふ聲も山彦の、鬼女と顯れ突立たり。尊いらつて牙を嚙み、「エヽ口惜し、誑られし。八萬年の望成共、半時持せ置べきか」と、御怒りに顏色も、あら〳〵凄じや荒神の、天蠅斬拔そばめ、禁裏雲井の樓閣の、神殿本殿廊下渡殿御階の下、切かけ〳〵、ぼつ詰られて通力の、電光石火水の月、前に顯れ後に消へ、震動雷電頻りにて、内裏も虚空に遡るかと、兒屋の臣を始として、雄走の臣、速日の臣、三十二臣四方を堅め、漏さじ物をと詰懸たり。惡

おふ／＼―追ふにかく
おのづから―おに烏尋をかけたり
わりなき―詮方なき

變化ごさんなれ。いで物見せん」と、掛卷も畏所に駈上り、神鏡抱き奉り、頭に捧げ、口には天津太諄、惡女が眉間に差向け差當、千早振る／＼和光の稻妻、閃き渡つて岩長姫の、瞋恚の巖も碎る計、五躰を縮め身を顫し、憍慢我慢の勢絶へて、よろ／＼と足弱車の、廻り歸れば追立られ、追廻し／＼、又立戻ればおふ／＼、大床さして追下す。斯る騒ぎの有ぞ共、知らでや素戔のおのづから、戀に探るゝ御姿、「開耶姫を奪取迄」と、人目を包む通路の、門も築地も飛越へて、恐るゝ關は恐れなく、「もしもや我を咎むか」と驚く物は風の音、忍ぶに辛き月影の、さしもに猛き御心も、わりなき思ひにかきくれて、「爰よりや入べき、彼處よりや入べき」と、前後に迷ひ立給ふ。殿上臺盤の方に叫ぶ聲しきりにて、恐ろしや凄しや」と、迯出る上﨟を、袖をひかへて、素「是々如何なる騒動。氣遣さよ」との給へば、局「なふ申岩長姫は變化にて、誠は鬼の正躰顯れ、早苗の局を引裂、御座の間近く入らんとせしを、兒屋の臣様、御鏡を以追拂ひ、御殿の騒ぎ、なふ怖や」と云捨、散り／＼ばら／＼にこそ迯出けれ。素「ムヽウ扨は彼奴、丸が討手を蒙りし美濃國の惡鬼が化身よな。退治延引の間を窺ひ、十握の寶劍を盜、此日の本に劒の威德を削らん爲の惡魔の所爲。丸が預る寶劍を盜まれては末代の不覺。芦原國の

酸醬—酸漿にて赤く輝くをいふ

四大—地水火風

神祇—神器

い天照太神の御魂に顏の移るを見給へ」と、各取付押立〱、八咫の鏡に差向たり。あら恐しや。虛靈不昧の德に照され、內心如夜叉の相顯れ、鏡に移る惡鬼の面、眼は酸醬牛の角、上下の牙は劒の如く、見る人はつと氣を失ひ、暫し絕へ入計なり。我と我身の鏡の影、始て驚く氣色にて、惘れ果て見へけるが、岩「ヤイ局、鏡に移る妾が顏は何と見た」早「ア丶形計は人なれ共、心の鬼のしるしには、惡鬼に見えし」といふより早く飛かかり、髻を摑んで膝に引敷き、「エ丶口惜や。神明の幣に四大五臟を探され、正躰見られし腹立や。生置て、己等人に語れば我身の仇」と、兩の腕ゑいと引揚げ、二つにさつと引裂しは、薄紙裂くが如くなり。「なふ怖や」と腰元下婢、身の毛を立て迯惑ふ。岩「ヤア迯るとて迯そふか」と、大手を擴げ追廻す。凄しかりける勢なり。折しも天津兒屋の臣、奉幣に參りかゝつて、此有樣を見るよりつゝと駈隔て、兒「ヤア心黑し岩長姬。妹なれ共開耶姬は后妃の位。恨妬むも恐れ成に、剩宮中といひ、三種の神祇の尊前にて、神も君も憚らず、法を知らぬは畜類同然。汝も大山祇の娘ならずや。恥を見ぬ先罷出よ」と、はつたと睨んで怒り給へば、岩長けら〱と嘲ひ、「棟梁の臣なん共ない。討れうが、切られうが、本望遂ずば動かぬ」と、睨み返す瞳の光、人間ならぬ鬼畜の相。兒「扨こそ

うつぼ柱―中空の柱

蓮切鼻―獅子鼻

畚尻―畚形の臀

所知入―俚言集覽に諸侯の初めて所知を領して入國するを云へり

桑原―雷鳴に必ず云ふ、堂上の桑原家は菅家なるを以てなり

者」と、衣打被き只一人、御殿を見れば女房達、奥を覗き密語く躰。「扨は妹奴と帝と寐くさつた。エヽ、妬しい浦山しい。見届て、おのれ引裂てくれう物」と、うつぼ柱に身を隱し、聞共知らで女房達、「此事構へて姉御へ隱しや。もし耳へ入て、怖い顏に嗔恚燃さば、なふ怖や〳〵。さりとは違ふた御兄弟、妹君は天下の美人、姉御の頬は何に似た。鱈口に蓮切鼻、猿眼に鉢額、耳は木耳 頤は蠑螺殼、畚尻に鰐足、歩き振は家鴨の所知入、物ごしは破れ鍋。あの樣な惡女と夫婦に成男は、よく〳〵の運の盡。それでも枕を竝べて傍にがさりと寢たらば、毬栗頰髭、いばら鬚、どさ打下しの荒筵、鴈木、鑢鮫肌、突く樣で刺す樣で、しつくり、ぼつくり、がつくり、しやつくり、寢返打たら寐られまい」と、どつと笑へば岩長姫、「ヤイそりや誰が事じや。ま一度吐せ。頤蹴て〳〵蹴放さう」と、御殿も搖ぐ雷聲。わつと平臥女房達、「世直し〳〵桑原」と、生たる心地はなかりけり。岩「うぬ等は隙な任に、人の顏の講釋か。能ふ妹を連て來て、姉の戀の上荷跳させたなあ。妾が大事の戀君と、ぬく〳〵寐させて置ふか」と、走廻るを早苗の局、抱き留め引据え、「是岩長樣、たとへ賤士民でも、身を愼み世を恥るは女のたしなみ。大山祇の臣の姉姫。爰は何處ぞ大内。人の訕を思召さぬか、淺ましや。人のいふが誠か嘘か。僞のな

舌たるい―しつこい
穗に現る―顏に出る
左前―鏡に映れば右前も左に見ゆれば云ふ
拔かる―欺かる
月夜に云々―月夜に釜拔くとて迂濶にして出し拔かるゝ諺、二度は蕎にかく
物見だけ云々―物見高いが色の道の習
岩長―いはぬにかく

目、辛き目、神を祈り歎くをも、憐のお心なく、なま中にお姿計、お詞もかけられぬは、舌たるいがお嫌ひか。淡泊がお好なら。どう成と御意次第。いとし可愛のお文は、誠か本か、覺えてかいの」と宣へば、君もあこがれほく〱と、頬給ふ鏡の影、開「ムヽ其御心底なれば、忝ふて猶戀しい。延々なは此方やいや〱。今宵は館へ歸らず、夜るの寢殿に只一夜、枕も入らぬお褥の、端に宿借たい」とざゝめけば、君もせかるゝ御心、穗に顯れて聲立ぬ、繪にかく柳糸櫻、頬き合つ招き合ふ、戀は昔もなまめかし。早苗の局もどかしく、「アヽ辛氣、口で計濟む事か。お側へ寄て抱付て、仕樣模樣も有そな事」と氣をもめば、開「いや待や〱。合點がいかぬ。あれが誠の我君ならば、召たる衣の襟付が右前の筈、左前に見ゆるは、外より移る影じや物」早「エヽほんにだまされた。拔かれてのけた」と氣も拔て、人々とほんと月夜に釜の、二度恨む後より、「爰に〱」と勅諚の、御聲を知邊に振返る。開「ハア是ぞ我戀我思ひ」と、走寄縋付、言の葉もなく品もなく、互ににつこりにこ〱瓊々杵の尊、笑顏と笑顏打重ね、引寄せ抱寄せ締寄せて、几帳に纏れ入給ふ。局を始腰元はした、こぼれかゝり乗かゝり、覗き囁き羨むも、女心の玉簾、物見だけきが色ぞかし。誰がかく共岩長姫、「我に隱れて妹が内裏へ參るは曲

念比に—念入に
お顏なら云々—お顏といひ姿形といひ
滅多腹云々—無闇に腹立ての惡匠
みづ〳〵—若くて麗はし
影移る—影映る
現—打にかく

なはる。姉様の氣が和げば、みづからが戀も成就する。邪見なお心止む樣に、立願頼む」との給へば、早苗の局が「御尤〳〵。岩長姫様のお根性の惡さと申、私始め見めの惡い女子も多けれど、扨も〳〵念比に見ともなひ。お顏なら、とりなりなら、交なしの本惡女とはあの事。惚て進ぜる男はなし、滅多腹が立てのわんざん。何方の御異見でも聞入の有氣質でない。頼むは神樣。サア腰元衆も願懸や」と、力をつくれば姫君も、猶伏拜み〳〵、顏振上て、木「ヤア是は不思義な。あれ〳〵、御神躰の中に、此世に御座らぬ母上樣、年月經てもお顏は忘れぬ。お年も寄らず、みづ〳〵と若やいで、唇は動け共お聲は聞えぬ。みづからを憐み、神の惠で見へ給ふか。胴慾な姉君に異見してたべ母上。なふ懷しや床しや」と鏡とは名を聞計、世に廣まらぬば見始の、向ふ我影移る共、白木綿かけし神前は、涙憚る哀さよ。御拜も終り瓊々杵の尊、「若彼人や詣でし」と高殿の御簾押遣り、叡覽有。姫はそれ共瑞籬に、打傾きし後姿、御覽も敢ず御心騷ぎ、どん〳〵轟く御胸は、神樂太皷の現なき、形は八咫の鏡の中、爰にといはぬ計にて、移り向ひし御俤「あれ戀しき君よ」と飛立計、抱付んも手は屆かず。折られぬ花の開耶姫、有にもあられず、興「是申 及ぬ雲の上人樣、恨と申も恐れながら、姉に妬まれ、責られ、憂き

いそふれ―急げよ
紅―くれにかく
もみ―紅絹と揉
採物―神樂の歌にあり、賢木、幣、杖、篠、弓、劍、鉾、酌、葛の九種
大山祇―逢ふにかく

くなゝどとは外の事。戀路は緣の物、何の咎め有べき。今夜惡鬼降伏の爲、八咫の鏡の祕封を解、御戸を排き、諸人の參詣許さるゝ。開耶姬が詣でぬ事よもあらじ。密に內裏に忍入、奪取て本懷逐ん。其處を放せ」と、鐙の鳩胸踏反し、靮取たる腕首はたと蹴放し、「いそふれ小童」と馬立直し、手綱も戀に紅の、もみに揉ふてぞ三重暮急ぐ、月も十寸の御神鏡。惡魔降伏の御祈禱、今夜始めて御戸排き、篝輝く瑞籬に、御神樂、採物諸物、御魂の鏡世を照す、磐戸開けし始迄、爰に覺えて君と臣、心も合に大山祇の妹姬、姿形容は名に顯れて、是ぞ木花開耶姬、「此日の本の寶物、拜むといふも稀の事、心の障なひ樣に、姊樣へは沙汰なしに、いざ」とて局腰本や、中居なんどをお供にて、畏所に參詣有。「忝し」と正直の、其一筋を御一五三繩、神も受させ給ふべし。心靜に姬君、幣奉り再拜し、本「なふ何れも能ふ拜みや。あの眞中に月日の如く、照輝かせ給ふこそ、御鏡と申物そうな。右は神璽の御箱、左の箱は十握の御釼、則三種のお寶物、中にも八咫のお鏡は、正眞の天照太神樣、萬の願も叶ふと聞。いか成御緣か、帝樣より自に度々の御玉章。我とても恐れながら、貴成君がおいとしう、思ひ沈みし戀の海。天津兒屋の奏問にて、內裏へ召さるゝ筈なれ共、姊岩長姬樣の法界悋氣が邪魔と成、何のかのとて遲

そりや其時。何ぞ今から海も見へぬ舟用意。惡魔も挫ぐ素戔嗚尊、臆病神に引され、道より迯て歸りし、と末代の嘲り、煮ても燒ても遁るゝか。殊に宣旨を背く過り、伯父君とて御免はない。分別過れば愚に返る。初一念に御進み」と、轡の水付ゐいと摑んで、四五間引て引出せば、尊「こりや〳〵、こりや天稚彦、汝が腹中狹い〳〵。此鰐香背が大腹中、宣旨を背く御咎め有こそ幸、それを次手に御謀反勸め、瓊々杵尊の御位を追下し、此君を天子と仰ぎ、開耶姫を后妃に立、天津兒屋を流罪に沈め、某棟梁の臣下と成、政道を施さば、天下に暗き事有まじ。是非お歸り」と、馬引立引返す。稚「いや君を討て、己が名利を貪るか。そうは爲せぬ」と、又引出せば又引戻す、兩方腕骨限りぞと、引つ引るゝ梓弓、弓杖三杖四つゑの間、野邊の若草踏しだき、駒嘶ふ聲ゐい〳〵聲、人馬の足音どろ〳〵〳〵、引ば返し、返せば引、寄る方分かぬ蜑小舟、汐の落合逆波に、搖れ揉るゝ如くにて、駒も四足を立かねたり。尊大きに御氣色變り、馬上より天稚彦をはつたと睨み、天も響く御聲にて、「推參成小童、丸が心も伺はず、さかし過たる利口達。瓊々杵尊は帝王なれ共天照神の御孫、我は弟。先祖に近きは此素戔嗚、秋津島に於て肩を並べん者誰か有。心をかけたる女一人望叶へず、何を我身の思ひ出にせん。宣旨を背

初一念—最初の志
水付—手綱着る轡の穴
丸—尊の自稱

千箭の箙―數多の矢を入れたる箙
心葉―冠の上に着くる銀の造り花
小車の錦―小車は錦の地紋
櫨の弓―黃櫨の材にて作りたる弓
龓―馬の頭部より轡にかくる組緒
鞅―龓に同じ

木を破るに異らず。惡鬼退治の宣旨に任せ、軍慮をめぐらす小車の錦の著長、銀の心葉、鬢に取て付、韓鋤の御佩刀、太手繦に白木綿かけて、千箭の箙、櫨の弓を弓筈高に振立、天斑駒白泡嚙せ、ゆらりと召せば馬の背も、撓む計の御骨柄。侍從の童天稚彥十八歲、主君に劣らぬ不敵者。御馬の左に引添ふて、三千余騎が隊伍を亂さず、日月の御籏眞先に、八十縫の白楯突立〳〵、しつとりしと〳〵打たるは、花待雲に雨を帶、暮山を出たる御勢。事も愚や、出雲の國大社、產御神、又は祇園牛頭天王、厄神攘ひの荒神と、末世に顯れ給ひしは、今此尊の御事なり。後陣の方より、「なふ〳〵御馬暫く」と聲をかけ、鰐香背の臣一文字に駈來り、龓取て引留、「扨々不覺の御出陣。知召さずや、兒屋の臣威勢に誇り、大山祇を瞞し込、木花開耶姬を天子の女御に供へ、君に鼻明せ、萬民の笑ひ草として、天下の後見、伯父君の威勢を落さん謀。御預りの國の寶、十握の劒も取上られ給はん。遠駈の御留主、開耶姬を內裏へ入れては、君御一生の御恥辱。臍を嚙共かひ有まじ。是非御歸り」と、鞅摑んで二三間引返す。左に立たる天稚彥、轡に縋て、「待て〳〵。こりや不吉者、惡鬼退治の軍の門出、一寸でも返すとは噯氣にも出さぬ忌詞。忌々しい聞たくない。兒屋の臣が權柄に、我君の威を落さんかとは、

鬼神に云々―謠にて鬼神は善惡の應報を誤る事なしとの義

蝿聲―田植頃の蝿の如く群がる疫神

鳩槃茶―厭魅鬼なり鳩槃茶食ニ人精血ニ其疾如レ風(圓覺經)

藍婆神―八部鬼衆の一

窺ふなんめり―原本うかふなんめり

身ぞ―下に忝きの二字を略せり

野大人と申惡鬼隱れ住、百千の眷屬村里にあふれ、青山を枯山にし、人民に毒氣を吹かけ、惱し苦しめ、人の命を取る事、毎日千頭余り。早く討手を下されずば、人種は候まじ」と奏すれば、上下の男女、驚き恐るゝ計なり。君震襟を惱まされ、「天照御神高天が原にて、諸〱の惡鬼惡神を誡め給ひ、長く我國に仇を爲さじと誓ひの手形を顯して、鬼神に横道なしと聞。今國民に害をなすこそ不思議なれ」と、神璽の御箱を開き給へば、天津兒屋進寄、繙印の一卷、八座の机にさら〱と、繰拔げてぞ叡覽有。理「異類異形の鬼神の手形、鳥の足蛇の爪、或は人に似たるも有。螢火の光惡神、蝿聲疫神邪神、鳩槃茶夜叉神藍婆神、此神國に害をなさじと、惡鬼惡魔の手形の中、三熊野大人といふ手形更にあらざれば、いか成變化の所爲ならん」と、疑ひ恐れ給ひけり。天津兒屋につこと笑ひ、「恐るゝに足らず。此手形に洩たるは、必定新羅、百濟の異國の邪神、芦原國を窺ふなんめり。武勇に猛き素戔嗚の尊を以、平げ鎭められんに何事か候べき」と、速日の臣を勅使として、素戔嗚の尊に宣旨有。惡鬼退治の大將の印に賜る御籏に、照耀ける月と日も、同し種成皇の、御代に住身ぞ三重掛卷も、忝も日の神の御弟素戔嗚尊、御身の長八尺、力千人引の岩を轉し、猛く烈しき勢に、邪を碎、仇を打こと、暮秋の嵐木枯の、草

見せんづ—見せんず

償ひ—追拂ふ

しほ〳〵—悄にかく

上たくば上て見よ。又素戔嗚の尊へも上させて見せんづ。ど性根を定めよ」と御前共憚らず、袴の裙けはらかし、禮義を頽して責かくる。大山祇ちつ共臆せず、「いはれぬ他の性根穿鑿、先御邊が性根、有か無いか、腸を探して見よ。尤娘御所望のお使は得たれ共、素戔嗚の尊に契約は申さず。其時御邊が辯舌、「御身に深き大願有、御本望達すれば、舅君と仰がるゝ後の果報を思へ」などと勸めしかど、「兎角娘は進ずまじ」と申切たを忘れたか。但、御邊と契約せしか。其時の魂有やいかに」鰐「ヲヽ契約した程ならば、口でいふて置ふか。よし契約は有共無く共、一旦答へは有筈。天子の伯父君、後見たる素戔嗚尊を侮るか、此鰐香背の臣を侮るか、侮る太刀の刃鐵を見るか」と、旣に柄に手をかくれば、兒屋根の臣聲をかけ、「ヤア〳〵恐れを知らぬ鰐香背。理非は兎もあれ、宮中にて太刀に手を懸け無禮の振舞、上を輕しめ奉る其咎據なし。刃を以人の肌斷、傷殺さば、國つ罪科にしづめよと、天照神の御制法。中臣の家に奉て、此兒屋の臣が急度罪に行ん。誰か有、彼れ償出せ」と、棟梁の臣の凛々たる、威勢の聲に吃驚して、さすがの鰐香背大口すほめ、蛭にしほ〳〵退出す。面目なふぞ見えにける。斯る處に美濃の國の造、早馬に汗かゝせ、蹄を飛せ、庭上に大息つぎ、「扨も本國殯山の巖窟に、三熊

打赤め―原本打あかめ
二柱―伊弉諾伊弉冊の二尊
豊の明―饗宴
露のかごとに―ほのかにといふ位の意
すね〳〵しく―ひがみたる心にて

「王既に寶祚の御位、天下萬民の父母たる御身、夫婦妹脊の道欠ては、王道いかで行れん。御心に入、御目に付たる女あらば、夜るの御座に召入られ然るべし」と奏問あれば、恥かしげに御顏を打赤め、「二柱の御神始給ひし夫婦の道、色を好むは僻事ながら、去年の冬、豐の明の燎の影、垣間見し面影の身に立そひて忘られず。露のかごとに名を聞けば、大山祇の臣が娘とや。深山の立木野邊の草、靡かぬ方はなけれ共、引にひかれぬ戀草の、種を誰かは植初し」と高き賤しき戀の曲、浮世恨の御詞。兒屋の臣を始、伺候の群臣一同に、「こは勿躰なき御かこち。何事か御心に叶はぬ事や候べき。折しも大山祇、御前に有こそ幸。御分の息女御宮仕に參らせ、叡慮を慰め申されよ。はや〳〵お受」とありければ、大山祇謹んで、「臣、娘二人持候へども、姉岩長姫は容醜く不束にて、心迄すね〳〵敷、親の眼にさへ疎ましき生れ付、宮仕は思ひも寄らず、妹木花開耶姫、容心樣、姉とは替り、女の數にも入べき者。宣旨違背候はじ」と勅答も終らぬに、鰐香背の臣といふ奸曲の佞臣、高遣戸荒らかに引明、大山祇の前にどうと座し、「是山祇、御邊が性根は有か無いか。胸の中を探して見よ。開耶姫には、忝も素戔嗚の尊御心を懸られ、此鰐香背の臣がお使にて、御所望有しは何と〳〵。娘を天子へ

和妙—和かなる布帛
荒妙—織方の粗い布帛
千早振云々—廣戈は刃の幅の廣き戈、其意は神の振袖にて民を憐み廣矛にて荒ぶる神を平ぐると也
十握劍—長さ十握ある劍
神璽—八尺瓊勾玉

日本振袖始

作者　近松門左衛門

序詞　天照皇太神に奉らる、四月九月の神御衣は、和妙の御衣廣さ一尺五寸、荒妙の御衣廣さ一尺六寸、長各四丈、御髻糸、頸玉、手玉、足玉の緒の緒返し、神代の遺風末の世に、惠をおほふ秋津民、千早振袖廣戈の、國平けく御す、天照太神の御孫、天津彦火瓊々杵尊と申こそ、代々に王たる始なれ。久方の日の神の、御影移りし八咫の鏡、天照是を見る事、吾を見るが如くせよ」との神勅にて、民恤みの仁の道、百王の後迄も内侍所と崇めらる。扨又御先祖伊弉諾尊より、御相傳の十握の寶劍、これ勇の形、義の理、御伯父素戔嗚尊、猛く勇める御器量とて、此寶劍を預り、王を後見ましませば、神璽の不測の禮智有。三種の寶の神德に、家に樂み野に耕し、手打て謠ふ土民迄、式を越ざる玉垣の、内つ御國ぞ道廣き。卅二臣の棟梁、藤原の大祖、天津兒屋の臣、御前に正笏し、

打ておけ—談判決定のしるしに手を打つ也

すつつとせい—もつと拍手せよと也

座敷に色替—座敷をして金の色にかはらしめたり

處で請出す三百兩、打ておけ」しやん〳〵。「ま一つせい」しやん〳〵。「すつつとせい」「コリヤ亭主、此千兩は始より身受に當た。一錢でも殘しては本意ならず。三百兩は亭主にはづむ」亭「コリヤ忝い」雛「二口合て六百兩、打ておけ」しやん〳〵。「四百兩殘つて氣にかゝる。寄て祝へ」とばら〳〵〳〵、金は座敷に色かへたり。揚屋の男女別なく、押合ひへし合ひ拾ひ取り、雛「皆取込んだかめでたい〳〵。祝ふて三度しやん〳〵」と、手拍子に口拍子、仕合拍子の三三九度、末は千秋萬年も、變らぬ妹脊を重ねける。

三度數―二度あれば三度あるといふ諺をとりて幸福なる事三度あつたと也

て居る。吾妻もいかい苦勞めさつた。ナフ親方殿、此一腰に引換て、吾妻を身共に下され」と、手をつけば、吾妻も、「久しい九郎左樣、旦那樣へお侘言、賴まする」と泣居たる。與平は勇んで彥介を取て引立、「おのれ能ふ聞。此與平が江戸へ稼ぎの根本は、吾妻を受出して廓の苦患を助けんと、思込ヅだる一商ひ。五百貫目に間の無い金、手間隙入ず儲け溜め、立歸る途次、與次兵衞殿にもお目にかゝり、樣子は段々聞居た。おのれを切たは此與平。與次兵衞殿に難義を見せ、金銀大分取たな。打のめしても腹愈ねど、めで度時節じや。とつとと歸れ」と突放せば、彥「アヽ有難や。正月も此座敷で取て投げられ、跡は切れて今日は又、殺さるゝかと思ふたが、お助けはかたじけない。三度の數が合ました」と、迯出るを治部右衞門、腕挫ぎに取て投、「おのれは何うも往なされぬ。淨閑が云譯させ、閉門御免請ねばならぬ」と、手ばしかく縛り上、治「身受は濟だか與平殿」與「いやまだ濟ぬ。金子は千兩、一枚の手形に換て」と難與平、親方が前に置。勘右衞門頭掉り、「來二月には年も明、身任せに成吾妻。千兩といふ金取ては、人の思はく男が立たぬ。金取らず共と申たけれど、よもやそふはなされまい。跡六月をば三百兩、殘りはいらぬ」と突戻す。與平素より氣散じ者「出來たく、手形は取た金取た。吾妻が身受濟ました。其

「様子は九郎左物語、吾妻が手形を身請とは、終に廓に無い格にて、兎角ふのお返事申難し。何れへ手形上ましても、此事世間に流布有て、欠落させた跡にても、金さへ遣ば濟事と、悪い性根を吹込れ、其處にも欠落、爰にも迯た、又しては關破りと、廓の騒動、親方中間の難義なり。此相談は成ますまい。一旦吾妻が顔を見て、其跡で能様に」と、聞も敢ず彦「聞えた〳〵。余人は知らず此彦介、早速吾妻を尋出し、身受はおれじや詞を番ふた。罷歸る」とずんど立。「そうはさせぬ」と難與平、小腕取引擔きてどうと投、脊骨にしつかと打跨り、「迯足も往に足も達者に生れ付た男、動かば頭撲碎く、合點か。藤屋の勘右尤千萬。今の詞は聞處、吾妻が顔を一目見たらば、其座で見受は違ないか」勘「何ンの虚言申ませう。末に年季の少い吾妻、今迄金は儲けてくれる。僞は申ませぬ」難「ムヽおもしろい。代官所の首尾も別條ないか」勘「其段も此方より申下せば相濟ます」難「珍重珍重。下々共其革葛を持て來い。亭主二つを開かれよ」勘「應」と葛籠の紐とく〳〵、中より吾妻與次兵衛、正氣に成て立出る。彦介は喫驚りし、親方亭主も興覺め顔。治部右衛門は包かね、「ヤレ與次兵衛か、治部じや〳〵。無事な顔見て嬉しや」と、跡は云はずの悦び涙。與次兵衛も頭を下げ、「何事も御免有。親淨閑へお侘言」治「頼むに及ばぬ淨閑の心入も聞

ぬもの

ずつしり—どつさり

福德の三方—福德の三年目の諺にかけたり

服部—煙草の産地にて攝州豐島郡にあり

淨閑は其祟りに、吾妻與次兵衛尋出す迄、道具諸色に封印付、厳しい閉門。聞けば與次兵衛めは野倒死したげな。出れば其儘切らるゝ首、仕合者じや有まいか。扨談合は吾妻が事。關破りの科人、此奴が命も助からぬ。佛性に生付たが彦介が病じやは。是も助けて取らせたい。先吾妻めが手形を請出し、跡では緩々行衛を尋、食でも焚せ、すゝぎ洗濯、手足擦らせ、一生は養ひ殺しにする覺悟。彦介なりやこそこうもいへ。相談して埒明い。コリャ現銀じや」と五十兩、亭主が前へ投出す。與平は始終を聞濟し、「御免」と襖押開き。難「亭主々々、吾妻が身請は身が先じや。金子は是ぞ」と持せたる、千兩包の木地の臺、前へずつしり餝らせたり。客「前後の爭ひなさるれば、此浪人者は一番」と、呼はつて座敷に出、「身請の代金此一腰、三千貫の折紙」と、共に投出す態恰好。中子は見ねど與次兵衛が物語の治部右衛門、紛ひなしと雖與平、口を閉て窺ひ居る。亭主九郎左は、福德の三方論義に行當り、九「兎角は親方了簡次第、呼にやらふか身が參らふ。それは御九郎左〳〵」と、獨語して馳出す。跡は互の睨み合。彦介は手懲した、與平が顔の氣味惡く、心も心ならね共、見付は厳い服部育ち、煙草盆引寄せて烟吹出す佛頂頬。烟管ぞ迷惑灰吹を、敲いて返事を待居たる。吾妻が親方勘右衛門、亭主に連て座敷に出、

は廓を迯出、關を破りし科人と、行ゑをもとめ探さる由、道中すがら承る。恩を受詞を番ひし此與平、捨置ては男立ず。彼を受出し世を廣ふしてやらん。吾妻が年季の證文あらん、此方へもらひたし。金に換て今宵の中に首尾する樣、九郎左御差配〳〵」と、ちよつとの露もしつぼりと、家内潤ふ計なり。九「おめでたい〳〵。お聞と有からは中に及ばず。去ながら、不思議な事が御座ります。今日暮方に、田舍めいたる浪人衆、吾妻は爰に居られず共、手形成共身請がしたい。金はなけれど一腰の字多の國行、二尺計の大刀物、折紙共に引換へと、奥の座敷に居られます。親方へはまだ知らさず、お前と一所に親方へいふて見ましよ」と立出る。表の騷ぎは葉屋の彦介、どか〳〵と入來たる。九「コリヤ珍らしい旦那」彦「とれたか〳〵、果報な九郎左、金儲けうなら我等に廻れ」九「輕いお出が身請の談合」彦「强いか〳〵、知た通此春早々、山崎の與次兵衛めに小鬢先をちよつつられた。弓矢八幡堪忍せぬ氣、代官所へも訴へ、親淨閑に御預け、內證から手を入て段々と侘言する。金銀で扱へば百萬兩でも聞ぬ男。コレ見よ疵も平愈した。與次兵衛めは憎けれ共、親めが心の不便さに許して遣た。其禮とて日くさり金、樽代としてよこした。酒戻しはせぬ物ゆへ、先あ受取て置たじや。吾妻めが關破りも與次兵衛が唆し、お預の内を連て迯た。

番ふ、鐘は流るる物故流れの里と續けたり

露―祝儀

とれたか―儲かつたか

ちよつつられた―かすられた

不便さに―原本不便さき

酒戻し―目出度い酒の禮は返さ

父に似ぬに譬ふ　萬葉集の已か父に似ては泣かず云々の歌をとる
破ればぐわち—曉れは粋も無粋もない（嬉遊笑覽）
空の足—雲の足か
當つて砕くる—末の見込は判らぬが進んで行くとの諺
廓—來るにかく
難與平—なるにかく
内大臣—ないにかく
輕薄に—も愛想に
油載せたる云々—油皿載せたる燈臺は座敷に出されぬ故燭臺に

西北に風起り、東南に向ふ空の足、梢木の間もはら〳〵、小川の水音さら〳〵、雲の羽袖もひら〳〵と、彼方へ靡き此方へ靡き、くるり〳〵くる〳〵くるりと廻りめぐるや、月は行け共果しなき、思ひは目前親の罸、當つて砕くる男の姿、走れば走り留れば留り、狂はぬ袖も亂れ心、命つれなき流れの身、流れ渡りの世の中に、しばし留まる賤が家の、軒を尋ねて三重悩みけり。

難波潟、梅に名を取り松繁り、紅葉の錦晝さへや、夜見世を新にお許しと、疾しや遅しと見に廓、四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顔、さす潮影のわけもよき、局々の手拭は、濡ぬ隙こそなかりけり。太皷は打たで大門に、轟く馬の高嘶き、井筒が許へ乗懸の、客は八幡の難與平、威勢美々しく飛下るれば、亭主迎ひの槌で庭。難「はくまい九郎左、見忘れか。當正月には造作の上、貴殿が世話に難與平。以前は金銀内大臣、今日參るは内證に、樣子も金も有大臣。罷通る」とつゝと入、九「誠にそうよお珍らし。先お茶烟草」と輕薄に、油載せたる燈臺も、はや立替る蠟燭の、流れの里ぞ氣散じ成。難「九郎左近ふ」と招き寄せ、「知らるゝ如く此正月、藤屋の太夫に囉ふた金、直に東に芽を出して、人いためずのどか儲け。馬の背骨も折甲斐有ッて、此度罷歸る處、太夫吾妻

凌ぐ—妨げる

三重の帶—辛苦に身の細るをいふ

預る半分の云々—髮にて與次を預れば半分は預る人の勝手にする

外八文字—女が外輪に八文字に歩く

たらいの底拔け千代能が歌に「とにかくに巧みし桶の底拔けて水たまらねば月も宿らず」(老の樂)

しやが父—しやは己にて與次は

切る山崎に、親の御恩を振捨て、和女の世話になりふりも、昔には似ぬ男山、今では人も秋篠や、外山の松よ事問はん。待が辛いか別れが憂か。待も別れもせぬ様に、親の許した女房は、義理と情の二面、かけて思へど甲斐もなく、半太夫今は野末の放れ駒、昨日はあづまに戀を乘せ、今日は古鄕の焦れ泣、我から狂ふ秋の葉の、亂れて袖に置もせず、寐もせで露のたま〳〵も、待たるゝ共待身に成な親と子の、便りを凌ぐ山崎の、妻も左こそは亂れ髮、いふた詞が力ぞや」吾「わしが名染は三重の帶、長ひ夜すがら引しめて、妬み悋氣の心なく、預る物は半分の、主は忘れて居さんすか。過し月見は井筒屋で、底意隈なき夜と共に、踊明した面白さ、わしや百迄も忘りやせぬ」踊歌「忘れぬ物よ見厭ぬ君が、外八文字の道中姿、目付で殺す所躰に泥む。傾城こまめにたらいが女房、請出したらいの底脫て、影も宿らぬきぬ〴〵の、親を悲しみ妻を戀ひ、心一つを二しなに、名乘て過る杜鵑。しやが父に似て父に似ず、子は色里に初音ふる。夕、ヤ冠は被ねど大臣と、花車が轟く口舌の門、遣手が叩く禿が睡り、皆夢の間の境界と、破ればぐはちも無りけり。かくは知れ共柳の糸の、蓬を亂す山颪、劇しき親の諫めの詞、妻が別れの一言葉、身に染々と戀しや」と、互に手に手を取交し、聲も惜まず泣居たる。夕陽岫に程もなく、

だ人、合駕籠で遣る妬ましさ」浦山しさと悲しさと、涙の筋は多けれど、いとしひ計一道に、見送る駕籠も遙々と、「さらば〳〵」「のふさらば」の、聲を紛らす後夜の鐘、跡へ戻るは雲の足、先へ急ぐは駕籠の足、せめてかたして留もせず、戀の重荷に小付して、親子の哀打乘て、別れて行衛や　三重

與次兵衛吾妻道行　下卷

歌春に育つも花誘ふ、蝶は菜種の味知らず、菜種の蝶は花知らず。知られず知らぬ中ならば、浮れ初めまひ、狂ふまひ物味氣なや。吾妻立寄り、「ヲヽ嬉しやお心も沈つたか。アレ御覽ぜよ。虫でさへ番ひ離れぬ揚羽の蝶、我々も二人連れ、粋な同士の中々に、お心弱や」と諌むれば、與、歌「吾妻請出せ山崎與次兵衛。請出せ〳〵山崎與次兵衛、何時か思ひのナ下紐解て、昔思へば憂や辛や、憂や辛や。忍ぶ昔も憂や辛や」吾「情なや誰有ふ、山崎與次兵衛樣とて人々に、後れぬ髪の亂れ心、吾妻が顏も見忘れて、現なや」と制すれば、與、歌「和女は藤屋の吾妻かの。與次兵衛に揉れて、色の惡さよいとしさよ。近い内には必と、請て樂さしよ世帶して、子共設けて二人が連て、お乳がかたくまおてゝが日傘、肩で風

かたし—片足も止めぬ

重荷に小付—負担を重からしむる諺

蝶は菜種云々—花の時に出た蝶は種の時には死んでゐる故いふ

かたくま—小兒が大人の肩に乘せらるゝこと

おのれは親に―
吊はれ死んで
親に弔はるゝか
と也

馬では人が云々
―馬に乗れば好
都合なれど人に
顔を見らるゝ恐れ
あり

忌追善弔ひたいと願ふぞや。おのれは親に弔はれ、歎が懸て見たいか。サア此相口皺腹へ突込で、望の通にしてやるぞ。南無阿彌陀佛」といふ聲に、與「申々落ませう待て下され親仁樣」と、どうと臥てぞ泣居たる。淨「ム、しかと落るか」與「何の僞申そうぞ」侍「ヤレ嬉しや落付た。今迄の不孝皆許し、三十年の孝行をたつた一度に受取た。死んだ祖母も嬉しからふ。お菊には親が有、淨閑にはお菊が有。跡には少も氣遣ひすな。連の女中が有そうな。嫌がる共灸するゐさせ、酒呑せて下さるな。馬では人が頰を見る、高く共駕籠に乘れし。頼みまする」とそこ〳〵に、心は千筋百筋の、島の財布を投出し、「さらば」と計云さして、跡は涙に咽びけり。與次兵衛猶も有難き、親の恩と妻の思ひ、別れの辛さに恍然と、きぬけの如くよろ〳〵と、前後も分ず見へければ、吾「是吾妻じや合點か。あれは奥樣お菊樣、さらばとせめて云はんせ。エヽ氣の弱いお人や」と、力をつくる我が身も、人目も深く忍ぶ夜の、「いざ合駕籠」と呟て、袖打拂ふ春の霜、「駕籠の衆おじや」と招けり。お菊の聲もうらがれて、「なふ何方に落付ても、其儘御無事の便を待。泊々の朝晩に、冷ぬ樣に頼むぞや。何やら云たい事共が、胸にはあれど口へ出ぬ。只御無事で息才で」と、いふより外は泣計。菊「誠をいはゞ我こそは、夫を連て退が道。何じや妬憎ん

下主人—下手人

もがられた—たばかられた

人の生身—生身は死に身でどうなるかわからぬ

刎らる。假へ先が無事でも、取迯したる咎めにて、それ程の罪は親仁樣の身にかゝる。其難を厭はぬ慈悲心、親仁は親の道が立。與次兵衛は今日迄始終親の氣に違ひ、剰へ親を身代りに、迯て命助かり、百年千年生る迚、人交りもならねば天地の内には住れぬ。お心をもどくでなく、歎をかくるが面白ふは無けれ共、やつぱり此儘死なせてくれ。命を捨て一生の孝行がして死たい」と、聲を上て泣ければ、「これも又お道理」と、二人も心破りかね、泣より外の事ぞなき。淨閑内より聲を上、「お菊〳〵、不孝者めが落まいといふそうな。エヽ〳〵情ない哀知らず。七十に成淨閑が、もがられたといふ外聞悪さ。人にこそ知らせね、内證手を入、二百兩迄扱ふても、足元見て、千兩でも聞ぬといふ。淺疵とは聞たれ共、人の生身何う有ふかと、親の案じは如何思ふ。將棊で心を紛らせば、結句傍から氣を付て、思ひ出す程胸苦しい。宵から心紛にはたいた升落し、量ても量られぬ親の歎を思ひやれ。一生子でも居るまい。一度は親にも成おらふ。胸の中が知らせたい。落るか落ちぬか、はや吐せ」と、聲荒けても泣顔は、壁より外に漏にけり。與次兵衛涙に平臥て、「有難いお詞程、如何も此與次兵衛、爰が立て落られぬ。眞平御免」と伏沈む。淨「ムヽよい〳〵、年寄た親を持者は、一日も親を先だて其身息才で、年

白鼠—福の神の意に用ふ（柳亭記）

どうがなーどうしたらよからう

人の父としては—此句大學にあり

濟む。此度の升落しに能ふ懲て、夜る毎に桁走り棚走り、盃嚙つたり、親の小判咬へて偸んだり、暴れ廻る事ふつ〳〵止め、後には白鼠の富貴と榮るを、親鼠が見る嬉しさ何う有ふ。たわけ鼠の狼狽鼠、此合點が往かぬか、とおりや此比夜が寢られぬ」と、涙に聲をふくませば、菊「如何にも〳〵、お慈悲な鼠算用。成程私が迯しませう」淨「ヲヽ滿足〳〵。ざつと胸が開いた。此比心に此事ばつかり、持佛へ參つても佛の顏も見えなんだ。嬉しや今宵から、心靜に看經せう」と、念佛力の後姿、見るに心ぞ遣瀨なき。與次兵衛走出、聲を知べのかたじけ涙。おきくは舅の足跡を手に戴いて、「吾妻樣與次兵衛樣、今のお慈悲を聞しやつたか。早ふ爰を退く程がお心安め孝行。淨閑樣の起臥は、此菊が居るからは、今迄より猶氣をつける。跡に氣遣ひ遊ばすな。お前に誰ぞ付たいが、アフどうがな」と案ずれば、吾「是お菊樣、それには此吾妻が居る。命を捨て出た廓、二度歸る心はなし。お前さへ御了簡、お供せよと有なれば、わしや忝ない。廓へは歸らぬ」と、思ひ詰たる詞の末、菊「ヲヽそんなりや前後首尾が能い。サア更ぬ先に」と引立れば、與次兵衛袖を打拂ひ、「そうでない〳〵。人の父としては慈にとゞまり、人の子として孝にとゞまるといふ。預り者が欠落し、先の相手が死ぬれば、忽親は下主人にとられ首

中の餌食を云々—鼠を與次に譬へ早く逃亡して命を助かれと諷する也

伯父鼠—治部をさす

に押當て、娑婆の名殘と涙さへ、思切たる哀さに、お菊は漸〳〵胸開け、袖引とめて、「是吾妻殿、義理にも命捨ふとは僞りにはならぬ事、心底がいとしい。主も定めし逢たからふ。沙汰なしに密と逢せましよ」吾「アヽ有難い。了簡深いお菊樣。大事の殿御を澤山に抱て寐ました。堪へてや」菊「ハテ取かへされはせまいし、それだけ此方の仕合せ」と、心解けたる爐路の中、「お菊〳〵」と呼ぶ聲は舅の淨閑、鼠取の升落し手に持て、「嫁は何處に」と立出る。菊「アレ爰へ親仁樣、折が悪い先少時」と、吾妻を塀の小蔭に隱し、「まだお寐も遊ばさず、夜更て何で御座ります」淨「イヤ別の用はない。是見やお菊、若い奴等が仕懸て置た升落し、はつたりと響いたゆへ、明て見たれば鼠は迯て往んだと見えて、升の内には何にもない。是でつく〴〵世の中の悟り開いた。中の餌食を頼みにして油斷すれば、落しに罹つてつる殺さるゝ。思ひ切て餌を捨、迯て退けば、其鼠が命を助かる計か、親鼠、舅鼠、女房鼠も有であらふ。此一家一門の鼠共が悦び。別して老鼠の親鼠が心の安まりは、いか計嬉しからうぞ。若若鼠の分別なしが迯た跡で、親鼠が又落しに罹らふか、とよしない意地を立おらふが、いかな〳〵親鼠は老功で、落にかゝる事じやない。定て伯父鼠も有ふ。其巣へ屈んで、爰らさへ影を見せねば、鼠落しも音なしに成て

される

いき傾城―いきは罵る詞

勤め計云々―勤の身なれども馴染重なるにつけ愛を増す

女子の馴む風俗―與次は女の好く容貌

と思へば鬼か天魔か。此剃刀で人の男に死ねとは。死んでよくば此方一人死んだが能い。大事の男の膚は荒され、心の底は見探され、世間に悪ふ謡はせ、生る死ぬるの難義も誰ゆへじや。傾城殿和女ゆへ。いき傾城の恥知らず」と、積る恨の高聲に、與次兵衛も障子そつと明、彼方も此方も道理詰め、道理の無いは我計。二人の心思ひ遣り、顔は燒火の冷汗に、消へも失せたき計なり。吾「いか程お恨みお叱りも、お前に逢ふて此吾妻が、申上ふ詞はない。引手數多の身の上さへ、悋氣妬は女の常。お心堅ひ町育ち、誠なき傾城めが、だましての賺しての、憎や〳〵はお道理ながら、與次兵衛様に逢ましたは、女房にならふ共、手かけ妾にならふ共、中交した事もなく、勤め計も名染だけ、夜を日にますおいとしさ。女子の馴む風俗、よい殿御持しやんした奥様、お世話はお前お一人。此度の騒動も人違ひを頼もしづくで、お身の難義もわしから起る。相手もやがて死にそなげな。悲しいは我身一つ、知らせて覺悟もさせましたく、廓を忍んで此有様、見付らるればみせしめに逢も合點、相手が死んだら自害させまし、私もお供と剃刀も用意しました。お主の名も流さず、私も情の御恩に命捨る心ざし、お前の御縁は妨げぬ。たつたま一度お顏見せて下さんせ。其目を直に塞ぎます。ナフお慈悲ぞや」と、懐中の剃刀咽

一つ書—一箇條づゝ別々にかく書き方
逢ふと—逢ふとも
泣きしみづき—泣て袖ぬれる
遠ふに—疾くに
賢女ごかし—賢女とおだててふみ倒す
睫讀む—馬鹿に

子細らしい一つ書き、文「此剃刀は私が研ぐ心の刃、もしもの折は必々、さもしい者の手にかゝらず、潔い御最期り〱。時は違ふと日は同日、最期處はかはる共、來世は一ッ蓮に、永き契をめで度〱」菊「エヽ此剃刀の入ざまは、何うぞお命助けたさ、女房舅が泣きしみづき、父御樣とも爭ふ程の大事の命。澤山そうに死ねと書た此文に、めでたく〱とは何ゝじやの。男共にいひ付叩き出してくれふか。イヤ〱それ程夫の名が立、直に逢ふて云ふて退けう」と、爐路の戸開き立出れば、與「ナフ與州樣か懐しや」と、縋り寄る手をしつかと取り、菊「音に聞た吾妻殿か。今の文も見ました。わしや與次兵衛殿の女房きくといふ者。遙々の處能ふ御座つたの。定て主に逢たかろの。知らしやる通の難義で、アレあの座敷に押籠られては御座れ共、おれが逢せぬ、アヽ此菊が逢せぬ。吾妻殿には遠ふに逢ふて禮いふ筈。此方ゆへに大事の家業も余所に成、内は野となれ山となれ、夜を日に次での里通ひ。親御の不機嫌世上の惡口、此度の難義それ見たか、と彌人のあざけり。我とても女の身腹が立いで有物か。夫の恥辱、さがない女房といはれまいとたしなんで居れば、お菊は奇特な悋氣せぬ、賢女賢女と、賢女ごかしの拜み倒しに逢ふて、吾妻殿に睫讀まれ居るはいの。此方を女郎か

と、人の数へし家並も、所稀成家造りの、裏門塀のかゝより迄、扨は爰ぞと知られける。
吾「駕籠の衆、爰が與次兵衛様のお屋敷、塀越に見ゆるがお部屋そふな。いとしやあれに押籠られてこそ。わしや彼處へ往くぞや。ちつと隙が入ふ共必待てや。戻りも頼ぞや。烟草が無くば進ぜふか。終往て來ふ」と裾輕く、寄程塀の高ければ、伸上り〱、伸上りても燈火の、影も通さず隙間なき、用心嚴しき内の躰、嵐と共に爐路の戸を、敲いて我が胸踊る、耳を壁に押當て、聞どひつそと音もせず。吾「いつ迄斯うして居たとても、誰レが知らせの便もなし。吾妻が來たと呼らふか」と、佇む足は釘氷、身も冷ゑ渡り冴え歸る。火燵さへなき座敷牢、「いとしや寐てか起てか」と、お菊が見廻ふ駒下駄に、飛石傳ふ足音の、吾「サア是じや」と飛立許、「與次さんじやないかいな、有にもあられず吾妻が見廻に來たはいな」と、聞よりお菊はつとして、「さても太い傾城め。何ふする事ぞ心見ん」と、内より壁を懐しげにほと〱敲けば、吾「ムヽ聞えたか。定めし何處も締つて入事もなるまいと、私が心に思ふ事、こま〲と此文に有。とつくと讀ンで自筆の返事見ますれば、今生の本望」と塀越に投込んだり。菊「ア、誰が拾はふも知らいで、女房の有男の屋敷、遠慮もない」と、披けば見知たり〱、朧月にも見違へぬ吾妻が筆、

ずれ使つたから
難儀になつた
數讀む―數が數
へられる
わくせき―氣を
せくことと
折立―下り立つ
そんじやうそこ
―どこそこ

は、此淨閑も知たれ共、死ぬる迄金銀を神佛と尊ぶ、是が町人の天の道。金の罰の當つた奴、まだ此上に惜氣もなふ金出して、いか成天罸大難にがな遭ひ居ろか、と可愛ひ程猶出しかねる。吝い名を取る此淨閑、金銀計惜むでなし。塵灰迄惜い物。たつた獨の世悴が命、惜うなふて何とせう」と、坊主頭を將棊盤、とんと投臥泣けるが、浮「治部右殿のお恨も聟可愛さとは存ずれ共、左程に思召すならば、何故日比引寄て、異見もして下さつたら、斯樣の事は出來まい物、と我子の痴氣は思はず、脇懸りの恨が出る。子ゆへには愚鈍に成不調法中も存ぜぬ。奥へ參る治部右殿、アヽ死だ祖母は果報じや」と、涙に咽び立ければ、舅も恨いふ事も、なく〳〵表へ立出る。跡にはお菊將棊盤、何處へ取付島もなき、菊「淨閑樣のお詞の道理は聞えた樣なれど、金銀なければお命ない。彼の内藏の金箱も、用に立ねば將棊の駒も同じ事。アヽ慈悲のない親御や」と、浮世の賴み涙にくれ、無常心や入相の、鐘物凄く 三重 暮渡、鴈の數讀む朧月宿り鳥の寄邊なき、藤屋吾妻がわくせきの、思ひを乘せて在所駕籠、淀の川水流れの身。 海道 行も山崎歸るも山崎、霞が内の畦傳ひ、そりや打渡す丸木橋、見馴れぬ目には怖ろしく、駕籠を留めて折立て、所躰作るも町風に、譯なき夜半の松の風、裾吹返し呼かはし、戀の山崎そんじやう其處

馬が合ふ―意氣投合

與次兵衛めが云云―與次が知ら

上られても、金銀とては出さぬとは、治部右衛門に氣を焦せ、面白いか可笑いか。其方も獨子此方も獨娘、兩方共に懸替なし。聟を子と思ふて居るが、嫁を娘と思はずか。與次兵衛が切られたら、可愛や菊が歎ふか、と思遣てたもらぬは、エヽ去とては恨めしい。縁組の時、祖母が留めて、小身成共侍に縁組たい、何ぼう分限者金持でも、町人とは馬が合ふまいとくれ〴〵留た。いや〳〵、名に觸れた山崎淨閑、武士交りもする仁と、我一人情張て、此比祖母が恨言、お主が吝い無慈悲から、五十年添ふ爺婆々の、めうと合迄不和に成、我子の命に替へぬ金銀、さぞや親類縁者が飢死する共構ふまい。我こそ牢人、主人持た一家も有。物知らずと縁を組一門の名を汚す。無念至極」と計にて、喘上げ〳〵泣ければ、淨閑もしば〳〵目「侍の子は、侍の親が育てゝ武士の道を敎ゆるゆへに武士と成、町人の子は、町人の親が育てゝ商賣の道を敎ゆるゆへに商人と成。侍は利德を捨て名をもとめ、町人は名を捨て利德を取り金銀をためる、是が道と申もの。いか成大病難病も、病には療治樣々有。國法で取らるゝ命には、人參で行水させてもいかな〳〵助からねど、金銀では助かる。命の買るゝ金銀、大事の寶といふ事を與次兵衛めが知たれば、此難義は仕出さぬ。なんぼう惜み貯へても、死では帷子一枚と

金持とは—金持とはいはれまい角が睨んでゐる

ぶに首を—歩で王が殺される意か

手見せ禁—前の都詰と共に將棊の語

かい金持浦山しいか」治「金持とは此角が白眼んで居る。斯う寄たらば金銀出して打たずば成まいぞ」淨「でも金銀は放さぬ。桂馬をあがろ」治部右衛門堪へかね、「ハテいかひ吝嗇坊、澤山な金銀握つめて何になさるゝ。來世へ持て往るゝか。是御覽なされ、此飛車を斯う引けば、天にも地にもたつた一枚の此方の此王が、片隅へ座敷牢の如く追籠られ、今の間に落るが、金でも銀でも打散して、圍ふて見る氣は御座らぬか」淨「我等が吝いは知れた事。座敷牢へ入ろふが、都詰にならふが、金銀は手放さぬ。歩あしらひで見しらせう」治「此方も歩をもつてぶに首を提らるが悔みはないか」淨「構はぬ〳〵。先迯て居ませう」治「コレ其内に香車の鑓を以、鑓玉に上らるが、それでも金銀出すまいか」淨「勿躰ない事、鑓玉に上られうが、獄門に上らふが、手前の金銀は放さぬ〳〵」と、兩馬強き慾の皮、傍でお菊は氣を揉て、包む涙も手見せ禁、命手詰と見えにけり。治部右衛門腹立テ顔、盤中の駒搔寄せ引摑み、淨閑が眉間へぐはらりつと投付たり。お菊はつと驚け共、淨閑は悔共せず。治部右衛門膝立直し、「恥を知れ淨閑。兩親家は元他人、駒を頰へ投付られ、咎めもせぬ恥知らずに、いふも國土の費ながら、將棊にことよせ、金銀出して嗳、與次兵衛命助けよといふ當言、合點せぬお主でなし。歩に首を提られ鑓玉に

お手—先手
成金—將棊の駒が相手の地に入れば金になる
深田に馬云々—謠曲兼平の文句
迷惑する駒—與次兵衛をさす

棊、勝負付ましよ。サア御座れ」治「是は餘りな淨閑老、拙者が每日老足を運ぶも、與次兵衛事氣遣さ。將棊さしには參らぬ。昨日の勝負は何方らへ成と付てお仕廻〳〵」といへ共、淨「いや〳〵馬鹿奴が事は運次第。昨日の駒動かせず置ました。サア御座れ〳〵」治「然らば勝ても負ても是一番。夕部から盤の上とつくと見定め、工夫した相手とさすはこは物。お手は此方か、サア遊ばせ」淨「先飛車先の步をつきませう」治「ヤ此成金して遣ふでの。こう寄りませう」淨閑頭を叩いて、「ハアヽ南無三、此馬落た。ウタイ深田に馬を駈落し、引け共上らず打て共行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ。むつかしゆなつた」と案じける。お菊盤の側に寄り、「是父様、彼方の方が落れば此方も落る、兩方の睨合て何時迄も埒明ぬ。迷惑する駒はたつた一枚。淨閑樣のお手には金銀がたくさんある。慾を離れて金銀さへおうちなさるれば、是此父樣の、向ふの淨閑樣の、此馬は助かる。何卒手に有金銀を打出させます樣に、思案して見さしやんせ。合點か〳〵」と袖を引ば、治部右衛門打頷き、「ヲヽ〳〵能ふ智惠付た。呑込んだ」と、いへ共淨閑氣もつかず、「親じやと思ふて助言いふまい〳〵。又ちよつこりと步で合致そ」治「ム、シテお手に何〳〵」淨「淨閑が手には金三枚、銀三枚、步も御座る。此步で廻したらまだ金銀が殖ましよ。い

和女一人に恥かしい。去ながら、石淸水八幡宮も照覽あれ、身は切らぬ。なれ共、彦介めが御座んす」と、恨まじりのうろ〳〵涙。與「いふてたもるな〳〵。一天下の人よりも、與次兵衞やらぬ覺へたかと仕懸た喧嘩、身が切たも同然。殊に其切手とは男同士の義理有中。奈落の底迄此與次兵衞が切たに成て、相手が死んだら切らるゝ覺悟。とはいへ彦介め、左程の疵ではなけれ共、强請て金にするもがりとは鏡にかけた事。見す〳〵金で買はるゝ命、こつちの藏の金銀では買れぬそうな。預られたは母の命日、皆是親に不孝の罸」と、投首するぞ不便成。菊「されば私が父樣も、それをいふて、「淨閑が聞えぬ、吝いも事による。千兩二千兩入ればとて、獨子の命にかへらるか。慾をさへ離るればつる埒の明事。口惜い此治部右衞門、浪人の身でなくば」と、くい〳〵いふて恨言、多分今日も見へませう。父樣の袖引て恥しめていはせたら、何程吝い親父樣も、得心なふて何とせう。アレ父樣の聲がする。やがて能事聞せましよ」與「もう往やるか、又後に見廻ふてたも」菊「いとしや淋しからふの」と、女夫の顏も打萎れ、淚隔てゝ引立る、明障子の明りにも、暗む心ぞ哀成。與次兵衞見廻として毎日淀の渡し舟、梶田治部右衞門は相親家の聟を思ふも娘の爲、老の心を惱せ共、父淨閑はさもなくて、「ヤ治部殿お出。昨日のさしかけの將

和女に賜せぬ人を皆氣する

預けられた―座敷牢に入れられた日が母の命日

くい〳〵―くよくよ

三重—三味線の長き引方にて往往文句を略する
罪なくて云々—顯基中納言のいひけん配所の月罪なくて見んこともさも覺えぬべし（徒然草）
左右次第—通知次第
氣を詰ぬ人—氣の詰まる思をした事のない人
賣いでは—下に叶はぬの句を入れよ
法界悋氣—自分

吾妻引舟遣手迄、狂ひ出れど放さばこそ。ハアはつと計の涙さへ、何と成身の 三重

中巻

おほつかな、罪なくて配所の月を見んといふ、古人の物好き如何なれや。日影も見せぬ座敷牢、九軒町の喧嘩、葉屋の彦介手負し事、代官所の沙汰と成、相手山崎與次兵衛と訴ふれば、與次兵衛も男の義理、難與平とは顯はさず、我身の科に引受け、親淨閑に預られ、相手の疵は養生し、死ぬるか本復か、二つ一つの左右次第。我も生る瀬死ぬる瀬を、定めかねたる飛鳥川、明日が日知らぬぞ力なき。一家の内に取分て、女房お菊の物思ひ。一日も氣を詰めぬ人、煩ひも出よふが、何がな心慰みと、炙る餅も我胸も、共に焦るゝ庭傳ひ、障子明れば與次兵衛、色も青ざめうつとりと、氣あひ惡氣に俯ぶけり。菊「二三日はお食もすゝまぬ。何處ぞ惡くば藥でも參りませ。地躰お前の短氣が私が明暮苦に成た。若し私にいたづらあらば、先の相手を切も殺もなさるゝ筈。ハテ傾城は賣物幾人も賣いでは。よしない法界悋氣から此難義も起つた。但其吾妻と私と一つに思ふて下さんすか。こんな事知つたらば、一寸も出すまい物。悋氣せいで今では口惜しう

のた打て　ーもがいて

樣皆樣つらりと遣立た。お暇申」と立出る。與「余りといへばけたゝまし。今宵一夜は苦しかるまい」雛「いや〳〵一歩は寸の初り、油斷は稼ぎの大毒」と、帶引解けば吾妻取付、「寒い折柄御遠慮のふ、矢張小袖を召ませい。道中も大井川とやらいふ川は、いかふ危ない事じやげな。御無事で吉左右待まする。やがて」と別れ、與次兵衛も見送つて、「與平殿、山崎には兄弟有と、此與次兵衛御心便に思召せ」雛「慮外ながら江戸にも兄弟有と思召、互の無事は狀通」と、別れて跡は戶障子しめ、月も雲井に寐靜り、松に嵐は鼾して、與平は九軒を一足二足三番太皷打やみて、廓淋しき折こそあれ、待伏したる葉屋の彥介、蛇目の紋を知べにて、與次兵衛と見るよりも、欺し賺してはたと切。ひらりと外し雛與平、「扨は宵のたわけ者、意趣返しの待伏か」と、突と入て跳倒し、小刀を逆手に滅多突き。眉間を突かれのた打て、彥「ヤレ人殺し」と聲立る。「見付られては出世の邪魔」と、おくれを見せぬ雛與平、風を追ふてぞ迯失せける。町中俄に騷出し、「棒よ熊手よ提灯出せ、大門うて」とひしめけば、彥介はうろ〳〵と、「相手は山崎與次兵衛、井筒屋の客めじや」と、喚き立れば與次兵衛、聞より胸にはつしと堪へ、「與次兵衛是に」と立出る。聲を知べに彥介は、後よりしつかと抱留め、「相手は捕へた組伏た。騷ぐまい」といひければ、

くひつみ—蓬萊飾

みづ〳〵云々—瑞々にて次は若水

緩りくはん—ゆつくりかんに鑵子をかく

お手上げられ—樂に居給へ

難與平—難義にかく

夜と共に—終夜

と、跡は笑ひの賑や、正月買の騒ぎ初め、飾の下では三味引、梯子の影では寶引、節分豆、豆撒き年男、槌の子抱て稲積んで、若戎にかけ鯛、密柑柑子橘橙と、祝ふて何處も吉野、榧搗栗、嘘で御座らぬ本俵、くいつみに土器、さすぞ盃ちよつと押へて、去年より今年はみづ〳〵〳〵〳〵、若みんづりの井筒屋と、わきて賑々賑はへり。粋の粋を、越へたる戀の山崎與次兵衛、駕籠を飛ばせて西口より、昇夫がいきつて、「旦那お出」といふより家内、「こりや目出度い」と、跣足で飛んで門口迄、「福の神のお迎ひ、ちやうさやよふさや、千歳樂萬歳樂、奥の座敷に設の火燵、亭主蓬萊、内義は銚子、娘は土器牛房も身祝ひ、太夫様も御全盛、お影で我等も仕廻は緩りくわんすで、先大福の口明に、變つた咄がごんする」と、吾妻は與平を與次兵衛に引合せ、有し有様一々を、語る詞に與次兵衛、「兼て意趣有薬屋の彦介、何ふがな、と存る折節、忝い與平殿。此以後はいつ迄も心安ふ御意得ませう。お手上られい」と一禮す。見馴れ云馴れ聞馴れぬ、詞遣ひも第一は、足の痲痺に難與平、只あい〳〵と計なり。與「御律義で重疊々々。江戸へとの思立尤々。吾妻が事は苦になされず、一廉の儲して仕合の上洛、門出に終夜、歌飲めや諷へや」難「一寸先は闇の夜と共、母が案じて居ませふ。いかひ御造作。與次兵衛様吾妻

額に毛あてる―男をつくる事

つき〲―つく〲

巳午―見ぬ間がよいと云にかく

除る、引舟に向ふ風、花車は彼方へ押込で、遣手も取て鑓梅の落花狼藉、昔を堪へぬ難與平、齒切をしても堪忍ならず、彦介が足首を火燵の内よりしつかと取、うんとしむれば、彥「あいたゝたゝ。ヤレ足首がちぎるゝは」と、目は顰むれど口減らず、「此火燵には狼が有そふな」と、蹴もじるを引倒し、蒲團押除け突と出、熟柹臭い彦介が、鼻の先に澁柹の、澁い顏して立はだかる。彥「ヤ此奴何じや」難「何者とは眼を明ケ。人じや男じや、男といふ物見て置け。うぬは何者」彥「葉屋の彦介といふ男見ておけ」難「ヤ生臭い男呼り、おけおけ、置てくれ。額に毛拔もあてる者が、いとしほげに女郎衆いぢつて何の男。サア男が定ならおれとせい。サアせぬかい。いやせぬかい。男同士の喧嘩といふ物教へてやろ」と突と入、小腕捻上、引擔いで逆とんぶり。ぎやつといわせ頭顚倒、匍匐にはつたと反めらせ、腰骨を七つ八つうんといふ程踏付て、鼻歌に懐手。吾妻つき〲可笑しさ堪へ、笑ひを殺す笑止顏。彦介漸起上り、「聞えた〱、與次兵衛がまはし物、彦介を蹈だぞよ。山崎與次兵衛覺へて居れ。したが、蹈れても此方に七歩の勝、正月早々己が身代蹈廣げてくれたな。殊に今年は戌の年、犬は土に寢る物、年八卦に叶ふた。コリヤ人の巳年が惠方ぞ」と、肱を張て立歸れば、「蹈れてさへ彼の頤、人を蹈んだらどふあろ」

つかまへさ―仕る
生爪―妓が嫖客の爲に髪切り爪放す等心中立にする（色道大鑑）
ひこずる云々―引摺る抓んだにて吾妻を我が自由にするの意か
廻らざ―廻らなんだら
頬がまち云々―頬げたをぴつしやり打つ
身上―花代出して勤を休む
無息力―無茶力

持参つかまへさ、大金持を知らぬかナ。アヽ慮外ながら、嫌とはいはれまい。都島原上林の高橋に、金遣ふて髪切らせた。伏見撞木町升屋の高尾に、又したゝか遣ふて、心中に生爪を放してくれた。まだ鼻も殺でくれた。耳を殺でくれた、大々盡の彦介。山崎の與次兵衛に仕負て、藤屋の吾妻に三度四たびふられては、此彦介一分たゝぬ。半分もたゝぬ。今日から三日ひこずるつかんだ。相場の高い總嫁の買初め仕り、金銀米錢ぐはらりぐはらりと蒔散したら、吾妻がくるり〳〵と廻らざ賭じや。サア〳〵買ふた」と、しなだれ寄れば、吾妻むつと頬がまち、ひつしやりとみしらせ、吾「エイあた贅ばつた、聞共ない。其高橋とやら高尾とやらは、其方の樣なうつそりでも、金さへ遣へば、髪もきろ爪もはなそ。京や伏見は知らぬが、此新町の傾城は魂が違ふた。恐らく此吾妻はいかな〳〵、一生身上り仕暮しても、其方の樣な意地腐りに、小判の手木でも動く女郎じやないぞや。がや〳〵口聞男の意地ならば、手柄に吾妻を廻して見や」と、ずんど立。彦「ムヽ張の強いに猶惚た。此彦介は吾妻を廻して見しよ。まはるは〳〵、遣手めが頬がぐるぐる廻るは。爰の家も廻るぞよ。廻るは〳〵山姥が、ウタイ山又山に山めぐり ハヽハ面白い。どうでもこうでも吾妻殿を、奥へ連て」と引立る、どれに下地の無息力。「是はどふぞ」と引

露―祝儀に出す小粒銀
阿波座―新町廓の通り
贅こき―贅澤いふ
こんだ―呑込んだの畧
どれこむ―ヘロツイて入込む
むりやう―瑠璃天狗に五絲の字を宛つ、唐織にて無量にかく
やう聞―よう聞の訛

打、「こりやあやかり物、嬉しいか〱」と、興を持せてやはらぐる、母は幇間子は大盡、はつと打たる露よりも、太夫が情いたゞいて、歸るさ急ぐ長持急ぐ、いそ〱賑々揚屋町。やり引舟が、「アレ〱太夫さん、阿波座から煩い和郎が見へるぞゑ」吾「ほんに〱贅吐きの彦さん、しかもづぶ〱醉ふた足本、見咎められては猶惡口」と、手繰り寄邊の井筒が許、內證花車に吹込めば、「こんだ」と計與次兵衛が、小袖をかりの雛與平、見馴ぬ揚屋の大騷ぎ、戀ぶるひしてみすぼらし。足はどれても目角は強き、袴肩衣横筋かい、町一ぱいをひよろ〱と、直にどれこむ井筒が座敷、吾妻は烟管の吸口閉ぢ、物もいはずにあちら向く。與平は人に見られじと、火燵の內へ顏指入れ、被く布團の緞子より、むりやうの事ぞ思はるゝ。彦介花車を引捉へ、「コリヤ花車樣め、聞給へ。正月は新春の御慶目出度く申納候。此々此鼻は、新酒の醉紛れ、積る恨を申始候。ナ何んと、否か。面白い。其處な遣手めやう聞ヶ。いかな吾妻殿でも、太夫樣でも、畢竟直段の高い總嫁じやないか。何と、否か。嫌とは申されまい。それに山崎與次兵衛には賣て、此葉屋の彦介には何故賣らぬ。一文一錢直切らぬ拙者を、いか成者とか思ふらん。忝くも桓武天王無躰の後胤、攝州津の國服部の住人葉屋の彦介、大坂に五間口の棚も所持仕る。貸藏も

致すにこそ―致すにあらず

庭錢―鐚頭にやる錢

どか儲―俄の儲

三ツ羽云々―金儲ける事矢の如く早い（瑠璃天狗）

緩り―ユツクリと落付

以前の小判攤ひました」と、取手を母がはつたと打、「ヤイ卑怯者、今の詞がはや違ふ。難波屋の家に疵付るか。げびた奴め」と叱られてかぶり掉り、「いや〳〵身の慾に致すにこそ。吾妻樣と與次兵衛殿是程の深い中、聞捨てゝは男がたゝぬ　此金を此儘置けば揚屋の庭錢、埃に成てすたります。小判と見れば小判、吾妻樣の身の油、金をおれが預つて、此方も身から油商ひ、どか儲すればどか損する。つると江戸へ下つて、十兩を百兩、百兩から貳百兩、貳百兩から五百兩、段々儲けの商ひ拍子、千兩にするは三つ羽の征矢。關東廻しの商ひの筋道は我等が家。吾妻樣根引にし、與次兵衛殿とお二人悦びの顔を見て、今日の情の御厚恩を送らねば、此難與平立たぬ〳〵。常々金がな〳〵、是を買ふて斯う賣てと、心當の事共有。江戸の道中、二歩では高砂野宮。母者人は、横堀の妹聟に預けりや緩り。其内金も上しましよ。難與平が立身、吾妻樣の御出世、與次兵衛殿の本望」千里一飛び一拍子、一器量有男なり。吾「聞けば聞程頼もしい御心底、此吾妻に戀有身で、與次兵衛樣に末長ふ添せうとて、俄に江戸の思立、二人が中のむすぶの神さん。門出の盃、染々お禮申たし。井筒屋へ伴ひましよ。母御樣は如何じやへ」母「イヤ與平が望叶へば、此世からの生佛。太夫樣おさらば。彌〳〵頼上まする」と、與平が背中しとゝ

さもしい—卑しい
いしんぢよ—堅い人
付屆—世話になつた心付の贈物
初紋日—正月の初めての節句
蛇の目—丸い紋形
つゝくり—ツクネンと
詰開—談判
押拭ひ—原本押ごい

の先計で戀せぬ證據は是成」と、腰の小刀引ん拔て、旣に小指に押當れば、吾妻取付、「待て下され誤た」と、漸に押とゞめ、吾「金進ぜたは過まりなれど、身の納りを思ふなどと、そうしたさもしい吾妻じやない。與次兵衛樣には幼名染の本妻有、父御樣は隱れもなひいしんぢよなり。わしから起るお宿のもや〳〵、悋氣やら御異見やら、跡の極月の廿日前、ちよつと逢ふてそれからは、不首尾〳〵の文計。舁夫揚屋の付屆、初紋日の買論も、わしが獨の胸算用。年〻の有うへ年切增し、男の恥を包む程、身拔けのならぬ此苦患、廓で祖母に成吾妻、可愛と思ふて下され」と、恥も哀も打明けて、つがなくこぼす正月の、涙も顏に憎からず。絞る袂の上一重、打かけ脫で帶解く、逢ふ夜の床の暖まり、又逢ふ迄は冷さじ、と深い中著は烏羽玉の、黑羽二重の蛇目の紋、吾「與次兵衛樣のお小袖、暫しも身は放さねど、是が私が心一ぱい。是を著て、表向の客に成ッて下んせ」と、小袖渡せば難與平、「これが誠のお情。私戀は叶ふた」と、押戴いて泣計。母は始終つゝくりと、「のふお傾城の詰開きは、むつかしそうな事や」とて、耳を澄すぞ殊勝成。與平涙押拭い、「お前に逢ふて眞實の、涙といふ物覺ました。金の草鞋で尋ても、二人となひ女郎に思はるゝ、與次兵衛殿はあやかり物。著物も戻しませう、代りには、

せつい―切なる、甚しい

御旅所―祭時に御輿を留置く所

まぶらせ―見つめさせ

衛様と申て、新艘の初床より、面白いと悲しいと、譯のありたけ仕盡して、勤めは名計、夫婦といふて今一人と、外には漏す水もなし。といふて母御様の御眞實、せついお前のお心入、立ながらの盃に酌流さんも本意でなし。是重山、預けた物それ爰へ」重「あい」と答へて引舟が、袂の内の服紗物、色こそいはね山吹の、十兩計一包、吾妻「是も可愛ひ山様ゆへ、譯の有金なれど、母御様へ進ぜます。與平様の身の廻り、立派な大盡に仕立て下さんせ。渡り竝の客に身を賣るは傾城の習ひ、枕をこそかはさず共、歳月の物思ひ、酒で流して下んせ」と、渡す小判を難與平、吾妻が膝へどうど投付、難「胴慾に御座る、曲がない。おりや金にや惚ぬ。貧な者と侮つて、金で口を塞ぐのか。我等が宿は庭かけて七疊半、貧乏神のお旅所といひそうな住居。師走正月もおんなし布子一枚なれど、傾城に金曬ふて揚屋へ往たといはれては、此難與平人中へ頬が出されうか。戀にかこ付物取とは、目きゝが違ふた吾妻様。七十に余る母迄、各に顔まぶらせ、無念に御座る、許して下され母者人」と、聲を忍びて泣けるが、難「ア、能ふ思へば、恨みしは不調法。追付與次兵衛殿に請出され奥様に備はるお身、我等は日用取内方へ雇はれて、沙汰でもすればお身の爲に惡い、と後を大事になさるゝは尤々。氣遣なされな、ふつゝりと思ひ切ました。鼻

五器—椀下げる乞丐の事

公平—坂田金時の子で豪傑

聞へも有、五器提る瑞相かと叱つて〳〵、追出しても退けふと存たれ共、アヽ昔の身ならば、若い者の、手かけ妾のといふ最中。中憎いが、太夫樣達一年二年買詰ても、何處の痛みにもならぬ身躰。其氣で育つた奴の事。アヽ可愛や、何うぞしてやりたい、と母が瘦我も子の望みも、金銀といふつはものには、又してもへし付られ、見殺しにする子の命、氣遣ひするな、情を商買になさるゝ吾妻樣、歎き申てお盃戴かしよ。それで思ひ切居れ、と彼奴を連れ、附纏ふも子の可愛さ。母が命が、一夜さの傾城代にも成ならば、今でも死んで見せませう。押付がましい事なれど、ちよつと計のお盃、是で上つて下され」と、袖から出す小半入りの、德利に餘る親心、缺盃の蒔繪の猩々、笑ひこうじて涙の種、泣事知らぬ遣手さへ、彼方向くこそ哀なれ。聞程吾妻押俯伏き、「粹な婆々さん、わたしが云はふ詞がない。與平樣は何處にぞ、顏が見たい御坐りやせ」と、呼れて祖母も一時に、千歲を延ぶる門松の、影にかくるゝ難與平、指を喰へて這出る、袖口取て引寄せ吾妻「惚れた〳〵と人每に、誠もない口癖さへ、勤めする身は先譽れ、公平の樣な男を煩わしたは此吾妻。嬉しう御座んす忝い。命にも替へ身にも替へ、逢通したい物なれど、戀といふてはちよつとの詞もかはされぬ、深い男が有はいな。山崎の與次兵

すいこ—酔興にてをかしなもの

古い—珍しくない

引舟—囲女郎

重山—引舟の名に繁きをかく

る。是女郎樣達の全盛を見掛て、姨の祖母のといふ騙ごとは古ひ〳〵。其爲のやり手。是眼が黒ひ、見て置や」婆「ナフ怖い事いふて下されな。騙事いふ樣に見へますか。アヽ貧乏はせまいもの。つれあひは船場で隱れもない、千貫目の廻しもした難波屋の與左衞門、爲換の金が滯、大坂を仕廻ふて八幡へ引込果られた。其難波屋の婆々で御座る。彼の頰冠は獨息子、千貫目の大釜の湯氣で育つた奴なれど、今では錢壹貫の廻しもならず、難與平〳〵と、其日過の日用取。騙と見ゆるもお道理」と、老の繰言眼に涙、問はず語に古へを、思ひ出したる風情なり。引舟禿遠慮なく、「ムヽ踊歌にうとふは祖母の事か。踊歌ゑい〳〵山崎ナ〳〵、八幡山崎難與平のお祖母、ヤア此、誠に金を出せさ、盆に御座れ」と笑ひける。吾妻は始終囃ひ泣、「皆の衆は何笑ふぞ。戀で有ふが有まいが、勤めする身の習ひ零落と聞ば見捨られぬ。吾妻を見込ンで頼むとは、いとしらしい婆樣。傾城冥加聞氣でごんす。爰は人立重山、ちよつと横町の小店をかりの揚屋町、爰へ〳〵」と手を取ば、涙を流し、婆「忝なや〳〵。お咄し申事迚も、此祖母が此年で、何の願ひ御座りましよ。月共星共思ふは彼の與平め。いつぞや人に雇はれ、此新町へ文の使の次手に、吾妻樣を見染て、ホヽ〳〵親の口からアヽおはもじ、戀病みに煩ひます。家主隣の

新町の云々—松を太夫に譬へ身請するを根引と云ふ（瑠璃天狗）
ほつほらは—ふイソリヤに當る
べかこ云々—べつかつこうにて此新助は赤目やるとなり
雪間に云々—白い足で歩けば伽羅の匂がする
霞の袂—以下花魁道中の美麗なる形容
新艘突出—禿よりなる傾城と飛入の傾城（色道大鏡）
紫鹿子—以下芥子に消え、經るに降る、越後に繪をかけたり
やり—遣手
七ッ屋—質屋
鶯茶—茶色の藍かゝつたもの
小舌たるい—し

榮へ、歌紺に鬱金に薄染淺黄、織物縫物染物盡し、小紋三重染二重染、淺黄鹿子に鶸鹿子、紫鹿子に經る年の、憂さをも芥子の紅鹿子、極彩色の越後町、三筋に三つの春たてば、松若緑梅時節、やりが前垂茜さす、天も醉ふたり人も醉ふ、初盃の内祝ひ、過て諸禮の妓揃へ、雪駄の音のしやら〳〵と、春めく中に紫は、色の司や藤屋が内、吾妻といへる名木の、松には續く花もなき。戀と利發を目の張に、情こぼるゝ道中は、往來の人も立留り、花を見捨る鴈金も、歸り廓の晴れ處、身にも年にも恥もせず、七十計の古婆婆の、古綿帽子の頰冠り、春知り顔に七ッ屋の、藏の戸出る鶯茶の、布子の袖を揩れもつれ、附纏ひ行足本。遣手のかやが聲高に、「是爰な婆樣、此廣ひ道を何ぞいの。高砂の尉と姥が離別したやうな態で、太夫さんに揩れもつれ、エイ嫌らしい小舌たるい。彼の跡から、同し樣に尾るて來る若い男は、舁夫の風共見へぬ。此方の連か。とつと除てもらはふ」と、押遣れ共腹立ず、婆「ヲヽお道理樣や御免なりませ。音に聞えた吾妻樣、お慮外ながら染々と、お咄し申たい事御座りまして、廓をぶら〳〵致ます。何卒お聞入なされて、お情に預れば、婆々が後生も助かります　大事の〳〵太夫樣に、鹽の辛い梅干婆々が、すいこな奴と思召そ。お恥しや」といひければ、遣手「ヲヽいや、口合をやらる

筑波根—衝く羽子にかけて陽成院の歌を取合せたり
九軒—羽根衝く數より大坂の遊廓新町九軒町に續けたり
羽かはす云々—二人羽衝合を客と遊女と睦び合に寄せたり
木欒子—色黑き禿も後に立派な太夫になる
末長き云々—禿の長き返事に松即ち太夫が關聯ある

山崎與次兵衞 壽の門松

上巻

作者 近松門左衞門

歌 筑波根の峰より落る瀧の白玉、一い二ふ三い四、五六七八九軒の町に羽かはす、比翼の羽子板木欒子も、磨入ては色に成、戀の二葉の禿松、枝と枝とを遣羽子も、三い四うい つも末長き、返事に馴るゝ門の松、抱への松あり客も待ッ。先新町の初子の日、松澤山に深緣、千代も根引は絶へすまじ。禿「コレ〳〵新介、嫌といふ物無理に突やつて、それ見やの、羽子を松へ突とめやつた。もとの様にして返やしや」と、袖に取付禿共。新「ナフ取付きやんな。男に突かすりや留まるとは、頭から知れた事。珍しそうに」と振放し、手を叩いて「ほつほらほ、此方や知らぬ。あべかこの新介」と、走て内へ駈込めば、禿「そりや〳〵逃すな捉へよ」と、羽子から起る諍は、飛ぶが如くに追ふて行く。情口説の萌出る、雪間に素足伽羅薫る、霞の袂虹の帶、冷泉 雲の上著をゆりかけて、新艘突出し出立

肝先踏へ云々―胸先を踏へて刺したる刀にて我足をも貫いた
谷の笹原―「谷の笹生に消えぬ白雪」の歌をとりて消滅せぬ意か

川とぞまがふたる。甚平姉を引ッ立來れば、さゝ「エヽ介太刀の其方に討るゝは口惜い。夫の手にかけくれまいか」甚「ヤ一之進程の仁、誰が介太刀を討物ぞ」と、橋の中へ突出せば、さゝ「なふ懷しや」と寄る處を、片手なぐりに腰の番ひ、くはらりずんと切下られ「あつ」と計に臥したりける。帶引掴んで頰引上げ、見れば子共の不便さと、憎くし憎しの恨みの涙、胸に浮む所を打拂ひ、ずんと切下げ取て引伏せ肝先踏へぐつと刺たる我切先、右の踵を跏かけ、ずつぱと切れ共覺へばこそ。直に男が胸板踏へ、留めは何れも一刀、鑓の權三が古身の鑓、疵も古疵咄も古し。歌も昔の古歌なれど、谷の笹原一夜さ咄、其鑓の柄も永き世の、御評判とぞなりにける。

北―來たにかく
笹の權二―七行本笹の權三か
十番切―曾我夜討の十人切、その名は三升屋二三治戲場書留に出でたり
足取―足蹈
橋はさながら云云―稀なる夫婦の固めにいふ、要は千載一遇
のたうつ―苦みもがく

べの雲、時は冥途の酉の下刻、運こそ北の橋詰にて行合ふたり。二「笹の權三、淺香一之進が女敵覺えたか」と、いふより早く打かくる。權三「チヽ待受たり」と指上る、弓手の小腕、水もたまらず切落せば、飛退去て、權三「武士の役、作法ばかり」と一尺八寸、拔合せて、刃向ふたり。處の人「スハ暴れ者、切たは〱。喧嘩よ棒よ、踊子共に怪我さすな」「お吉樣ア」「おせん樣ア」「半兵衛ヨ」「權介ヨ」人を呼ぶやら迯るやら、隣丁八丁九丁町、十番切の五月闇、夜討の入たる如くなり。女は甚平をちらりと見て、「望みは夫の切先、弟に討れ犬死」と、暫し身を引橋の影。權三が踏込み、打切先、欄干に切込で、喰へ留たる刀を捨、權三「エヽ竹がな一本。一手遣ふて鎗の權三と名を取しるし、諸人の形見に遺さんもの。足取なりとも見物せよ」と、刃を潜る無刀の働き。さすが成ける手負振、一生一世と念力に、切込んだる右の肩先、胸板を筋かひに、はらりずんと切れても猶身を引ぬ最後の身振。橋はさながら紅葉の、まれに逢ふ瀬の敵と敵、踏込み〱五刀、切られて仰反に返せ共、武士の死骸の見事さや、迯疵更に無りけり。一之進女を見失ひ、「南無三寶」と北へ走り南へ戻り、何處へ失せた、と小角〱を、唐猫の鼠を探す眼の光り。橋には死骸のたをうつ。折しも七月中旬、血は流れてとう〱と、月こそ浮べ伏見川、龍田の

一之進殿への奉公。私や此方が心ざし、斯しても居られまひ。今夜は何處に泊らふぞ」櫂「ハテ三栖が端か油かけか。そろ〳〵京へ成共上らふ」と、夕べの空もはや暮て、軒端軒端に灯す火は、切子燈籠いろ〳〵の、花の繪盡し判じ物。見世に涼みの芝居咄や踊子の、十二三から八ツ九ツの、娘優しや黒ひ羽織の腰卷に、野郎帽子の濃紫、揃ふ拍子や、容態もよく、踊「それ〳〵それ〳〵やつとせ。クドヤハエイ〳〵、難波江の、蘆の假寢の一夜さへ、長き契りと結びはすれど、許さぬ戀の關の戸や。いつそ山邊と思へ共、一期猿丸と他の誓詞のあれば、天智天王罰おそろしく、親の菅家もそこはかとなく、余所の人丸賴まれずして、直に大江の千里を越へて、凄き深養父中押分て、たんだふれ〳〵な爰で切れさ」踊る姿の懐しや。さゐ「ナフ彼の踊子を見るにつけ、國の子共も彼の年配。生たか死んだか煩ふか。可愛や今年は踊るまひ。離れ〴〵に成果て、何處で死んでも淺ましい。子共の水も受まひ、湯灌葬禮誰がせふぞ。迚もなら今死んで、此燈籠を六道の、中有の明りに迷ひを晴れ、せめて未來が助りたい」と、歩き〳〵の口說言。男も心かき曇り、空に今年の日照にも、袖には誰が雨乞の、身を知る雨ぞ果しなき。一之進が嗜む備前國光、運こそ來れ我妻に、此世の緣は薄柹の、帷子高く捻褰げ、甚平とは跡先に、引別れたる夕

野郞帽子—狄野澤之丞初めてつけたり帽子の左右を垂れて錘をつけたもの（嬉遊笑覽）
猿丸—去るまいにかく以下皆懸詞
天智—天の罰
菅家—勘氣
人丸—他の人
深養父—深藪
身を知る雨—涙の事

詰まらぬ事を—七本行「を」字なし

お噂様云々—狭いから二ッに切るとの洒落なれども權三等の身にこたへる

先、橋の上に目を放さず。舟人「爰な旦那殿は、うろ〳〵と詰らぬ事をいふ人じや。乘せもせぬ運賃取ては一分立ぬ。矢張乘て御座れ」權「それは酷い船頭殿、今の樣に跡から乘手もあれば狹ふ成、平に上て下され、頼みまする」と佗ければ、舟人「狹い事氣遣ひして下されな。明日の朝、大坂迄滿足に屆けりやよい。今宵一夜は、おかゝ樣も胴切にして、旦那殿も細々に刻んで、片付て乘せまする。其處らは構はず蹈反て、のたれて御座れ」といふことも、心にかゝる一つなり。おさる萬氣にかゝり、「ナフ船頭殿、物には情といふ事有。人を乘せず、運賃取れば船頭の一分たゝぬとや。我々とても、人に銀をことづかり、其買物を渡さねば何ふも一分立難い。是手を合する、是非とも上て下され」と、詞を盡せば聞分て、舟人「そんなら早ふ上つた」權「アヽ過分々々」と、二人手を引氣もせく足本。舟人「此方衆は怪我しそふな。雁木に躓き、おか樣の大疵に又、疵のつかぬ樣に用心々々」と、つね船頭の戯語も、今日こそ胸にこたへけれ。床の蔭に身を密め、權「甚平が爰にあるからは、一之進も此邊に居らるゝは必定。サア〳〵二人の望みかなふた。覺悟あれ」といひければ、さゐ「アヽそれは覺悟の前。國を出る其夜より、夫に進ぜた命、惜いとは思はね共、若し弟の甚平が手にかゝらば口惜い犬死。甚平と見るならば隨分と遁るゝが、

見付るか—欄三等が見付るか也

處と、相圖をしめて甚平一人、京橋の夕日影、船共を見廻し、甚「ずんど早ふ出る船があらば乘たい」と、乘手に目を付け見廻せば、舟人「早いが好なら此船、初夜が鳴ると出します」甚「おふいこふ狹そふな」舟人「狹い事は御座らぬ。若い旦那殿とおかゝ樣と笘の陰に屈んでじや。彼の側が廣ひ。彼處に置ませふ」甚「イヤ居處は如何成として居よふが、初夜といふてはもふ遲い。明日の晝船にいたそふ」舟人「そんなら勝手。船はこつちの、乘る身はそつちの。强はせぬ」と、云中に、船中とつくと見廻し、「顏は見へねど十ヲが十、是に極つた」と、嬉しさ足も飛上れど、笘の陰より見付るか、と態と緩々橋の上、涼む良して二三遍、心祝ひの神の鬮、一之進が旅宿へと、足を飛せて走りける。笘押除て、欄「ハッァ大事の物忘れた。コレ船頭殿、此方二人は上てもらを」きさ「人に頼まれ大事の買物、銀迄受取、乘急ぎするとてとんと忘れた。上てたもれ」舟人「してそれは何處迄買に往かしやる」欄「ヲヽ彼は、何とやらいふ町じや。ヲヽそれ〳〵、撞木町の彼方、藤の森の先じや」舟人「ハア此方も餘程の事いふたがよい。爰から何程有と思はしやる、一里半御座る。其中に船は出て仕廻ふ。上る事は成ませぬ」と、情もなげに取合ず。欄「イヤ遲くば構はず共出してたもれ。二人分の運賃は拂ふて上る。平に頼む」と、北南の見世

月に誰云々―此伏見船に寢て月を見てゐるは誰なるか
涼の文字―つくりが京の字なる故
一つ流―京の御祓川と
茶船―酒食を商ふ船
奈良茶―茶飯の事(三省錄)
そんじやう其處―何處其處

めが來た時、切らせふと思ふ用心。隨分休齋に茶の湯を習ひ、時々これへお見廻申、お二人へ孝行兄弟共に氣をつけ、權三めが來たらば切て捨てい。但一人殘るが怖くば連て行ん」と宥めたらせば、虎「如何にも一人殘りましよ。跡の事氣遣ひせず、必手柄遊ばせ」と、聞分の能き利發者。舅夫婦は目もくれて、「女子男打揃ひ、すぐつた樣な子共の成人、見たい心もなき母めは、いか成畜生ぞや。不便共思はぬ。切成共突なり共、やがて本望々々」と、淚ながらの暇乞。兄弟三人聲々に、「權三めは切殺し、母樣は息災で、連て戾つて下され。さらば〳〵父樣」と、いへ共父はさらば共、いはんとすれば目もくれて、胸に八色の雲とづる、古鄕はなれて三重別れ行。月に誰、寢て見よとてや伏見とは、船に寄たる里の名の、橋の夕暮來て見れば、涼しくの文字かたどりて、京を持たる京橋に、一つ流れの御祓川、末吹風も袂涼しき。權三おさゐは三日共、同じ所に足とめて、居るにゐられぬ梓弓、伏見に暫し墨染の、秋の櫻か入相も、明日をば知ず一日の、命々と聞捨て、難波の方に思ひ立、人目を忍ぶ乘合に、空居睡の船漕げば、傍に茶船を漕連て温飩蕎麥切、きり〳〵と押廻し豆腐奈良茶と茶を賣るも、宇治の川水落添ひて、昔を胸に淚ぐむ、女心ぞ哀成。一之進は御幸の宮、甚平は三栖の里、每日そんじやう其處其

金輪際—奈落の底迄も捜すべき敵
身の蜂—諺にて自分で身の始末をつけかねる

置ながら、二人の敵は手が屆かず。初日の敵後日の敵といふ分ちは知らず、介太刀賴まぬといふ一之進の女敵、一人は岩木甚平が介太刀討た、お見やれ」と、腰兵粮の器引ちぎり、押開けば伴之丞が首、洗ひたてゝぞ持たりける。一之進「是は」と手を打ば、舅夫婦大きに悅び、「金輪際の敵憎しといふは彼奴が事。但御扶持人、上へは、何と訴へた」「いや訴へに及ず。彼奴も身の蜂拂ひかね、お暇申捨て、欠落いたす處を、因州境にて思ひのまゝに討取ました」忠「手柄〱。なふ一之進、敵討の門出に是程の吉左右有べきか。忠太兵衛が指圖甚平を連られい。尤いふに及ぬ事、介太刀して本討手の名に疵つけな」二「畏つた。お暇」と立出んとせし處に、十計成旅人の、門柱に影かくれ、奥を覗いてちらめくを、一之進急度見「やら心得ず」と走出れば、中息子の虎次郎凛々しげなる旅裝束、二「をのれ此態は何處へ行心入。小癪者め」と小腕取て引出す。虎「イヤ父樣の供して行。姉樣おすては女子なり、私は男。敵討親を一人やるは武士でない」と、先に立て走出るを引留め、二「扨は己を產だ母を切る心か」虎「母樣何んの切る物ぞ。母樣を連て往た權三めを切てくれる。どふでも往く」と意地張たり。二「やい、惡い合點。叔父樣も父も出て行けば、祖父樣祖母樣お年寄、姉や捨は女郎の子。其方を跡に殘すは、若し權三

いはれぬ遠慮—無用の遠慮

ありないーないを強めていへり

腹筋なー腹筋よる程をかしい

幸ひの折に參り逢ふ、本望達せん吉左右。いざ御同道仕らん」とぞ勇みける。一之進手を打て、「扨々御苦勞お骨折。御親子の御懇意心肝に徹し忝し。最早是より御同道には及ばず、我等一人參るからは、外を賴む事もなし。甚平殿は御休息賴み入」と云ければ、甚「いやさいはれぬ遠慮。心は矢竹に存じても、人數なければ手の廻らぬ事も有。扨こそ留守の內、よもや何事も有まじと、落付ても斯樣の事の出來。權三も他國に親類知音も有べし。何と構へ置も知らず。三日路四日路共蹈出し、時の變にて介太刀欲い事も有べし。是非共に御同道」一「イヤ是御心底賴もしけれど、女房の弟に介太刀させ女敵討ては本望でも有まいか」甚「いやさ介太刀と極めず共、只力に成迄の事」と、聲高に成ければ一之進色を損じ、「扨は茶入釜の蓋取より外、人の首の取樣知るまいと思召な。弓矢八幡、身こそ少身なれ、見事斷れ具足の一領も用意して、すはといはゞ、刃鐵を鳴すお歷々にも負る事はおりないさ」甚平から〳〵と笑ひ、「ア丶腹筋な。然らば足本の女敵何故討ぬ」一「ム丶ウ足本の女敵とは、ム丶ウ川側伴之丞が事な」甚「それ程覺えのある女敵何故討ぬ」一之進はつと驚き、「尤 彼が不義の狀數通、女が手箱にて見付、彼奴も一刀と思へ共、一時には手に及ず、先是は後日の沙汰」と、いはせも敢へず、甚「それ〳〵、鼻の先に

すく〳〵—すつ〳〵と立

相番—同僚
番頭—武家一隊の長

と成たれ共、親より傳へ、今日迄樂みと致せし茶の道は忘れ難く、虎次郎めを千の休齋弟子分に預け申たり。お恨み晴れられ、門出のお盃を」といひければ、「尤左こそ」と打解て、隔ず交す盃に、いふ事とては、「首尾能追付本望々々」其本望とは子共の母、我妻を切ることを、身の悦びになす事は、いか成運、いか成時、いか成惡世の契ぞ、と思へばはつたと胸塞り、鐵石の如く成、一之進が心かきくれて、覺えず涙に咽びけり。女房おさゐが弟岩木甚平、宿なし旅の形もやつれ、一僕具して立歸る。忠太兵衛伸上り、「ヤイ〳〵甚平戻つたか。首尾は如何じや。一之進も只今門出、何と〳〵」とすく〳〵立、甚「ヤア一之進留守の中不慮の事出來。お歸りない先不義者共が提首、此方へ見せ申せと親共の心せき。我等は素より彼奴等が欠落の曉より、直にぶつ立チ、食物を腰に引附け、海道筋の旅籠屋、馬次、舟場を穿鑿し、山陰在々迄も近郷殘らず尋しが、いや〳〵足弱を連れ、氣の後れたる迷ひもの、深く隱るゝ心も付まいと存じ、伯耆路へかゝつて詮義いたせ共出合ず。つく〴〵存ずれば、相番を頼みし迄にて、番頭へも斷らず、日數を經るは不調法と存じ、引返し、只今歸りがけ、直に斷り相濟み、ちよつと立ながら兩親に逢ん爲此仕合。御自分も我等も、互に遲いか早いかで、お目にかゝらずば殘念たるべし。

涙たしなむ―涙の出るをこらへる

根性さげ―根性持ちて

進も「是は」と手をつかね、涙にくれし聟舅、武家の道こそ正しけれ。忠「サア〳〵婆々にも逢て暇乞の盃。兄弟の娘ま一度顔も見たからふ。草鞋がけの躰、態と奥へとは申さぬ。やい〳〵一之進のお出、皆來いやい」と呼はれば、二「ヤ申、少さい奴等に能く申付たるが、なんと吠はいたさぬかな」忠「イヤ〳〵器用者共、其處は氣遣めさるな」と、玄關に座しければ、母は二人の孫娘、左右に具して立出る。中に盃酒肴、盆正月の節振廻、三人の子の誕生日、一家寄合ふ祝ひ日の、座敷は座敷にかはらねど、揃はぬものは人の數、五人顔を見合せて、物をば云ぬ目禮に、涙たしなむ顔付は、泣叫ぶより哀にて、酌取る下女が袂まで、翻さぬ酒に絞りけり。母は涙のこらえ精、盡果てわつと泣き、「可愛や此子共が父御のいひ付覺えてか、目に涙は持ながら、温順いを見るに付、彼の業人の畜生の人でなしの腹から、此様な器用な子を何として産出した。人並の根生さげてくれたらば、母も子も揃ふたり、忠太兵衛夫婦は子も孫も産揃へた、手柄者と云せぬか。娘の子は母方付と、二人計送つて、虎を殘して下さるは、岩木の名字を疎み、此方とは縁を切心か、曲もない一之進。恨みに御座る」と聲を上げ、積る涙を一言に、泣盡すこそ道理なれ。二「イヤ〳〵御恨は相違。隔つる心は聊かなし。此度我等お暇下され、世の散人

一人物にも｜相手なきに騒ぐ事も出來ず

なふ一之進｜七行本になふ是市之進

ど反に反たる朱鞘ぼつこみ、一文字に駈出る。「アヽ申々」と袖引留め、笠取て捨ければ、忠「ヤア一之進、今朝は畜生めが諸道具、孫娘二人受取申た。旅出立は暇乞と見へた。お出過分。追付吉左右待申」と、云捨てゝ駈出る。二「いや申、御顔色も常ならず、氣遣千萬。巨細承はり屆くる迄は、慮外ながら放しませぬ」忠「なふ一之進、御自分江戸より下著の節、娘さゐめが提首をお目に懸いで口惜い。悴甚平は其日より尋ねに出る。年寄ても忠太兵衛、腰膝立ぬ身ではなし。刀の刃に血も付ず、高枕でも暮されず。一人物にも狂はれず、相手もがなと存るに、最初不義の證據を取て我等にも知らせ、國中に沙汰をした事觸は川側伴之丞。彼奴を切て老後の思出、お放しやれ」と駈出る、二「アア是々、御心外尤ながら、御老人の腕先、萬一伴之丞に討れさつしやれば、此一之進先女敵をさし置、舅の敵を討ねば叶はず、取まぜ迷惑は拙者一人。平に／＼御了簡、御厚恩に請まする」とさし俯ば、忠「なふ一之進、斯程根性の腐つた女房の親でも、忠太兵衛が討るれば、舅の敵を討氣よな」二「是は曲もないお尋ね。たとへ女は畜類に成たり共、舅は舅に極つた。忠太兵衛殿、敵があらば討いでは。そりやお尋ねに及ばぬ事」忠「一之進アヽ、御心底身に余り忝い」と大地にどうど老躰の、跪きたる感涙に、一之

ば二人の孫が出たと也

娘を母に云々—諺に女の子は女に付る

茶筅髷—髻の先を茶筅の様に結ぶ

霰釜—釜の外面に小き疣瘤びつきたるもの

孫共や。もし火を付たら能い物か。堅い父御のいひ付か、何故に聲を立なんだ。器用に生れついたよな。花紅葉の様な子共を、母めは能ふも見捨た」と、髪掻撫て泣ければ、お捨は何の頑是なく、「母様に逢たい。母様呼ふで」と泣計。姉のお菊は溫順しく、「父様は母様を切に行とおつしやる。祖父様祖母様頼みます。代りに私を殺して母様助けて下されと父様に佗言を」と、膝にもたれ伏しければ、忠「ヲヽ能ふいふた。母は左程に思ふまい。虎次郎は何故越されぬ。娘を母に付るは離別の作法。此方に隔の心はない。孫三人を朝夕に見たらば、憂さも紛れふ物。此子は父御の四十二の二つ子にて、祖母がお捨と付たが、今は父母兄弟が、世の捨者になつたか」と、口說き繰言身も萎れ、枯木の様成祖父の皃、涙に分ちなかりけり。「泣な〱大事ない。なんぼ母めが捨ても、祖父や祖母が可愛がる。甚平といふ叔父がある。サヽ來い〱」と手を引て、泣々奥にぞ入にけける。茶筅髮いひ甲斐もなき身なれ共、武道を研く霰釜、たぎる心は運次第。淺香一之進の歸國を直に門出と、三人の子を片付て、氣は廣けれど先しばし、お國の內は憚りの、笠深々と舅の門、今迄とは事かはり、案内なしも無禮なり、物もふも角立つ。暇請一禮の傳もがな、と立闚見入立たる處に、舅忠太兵衛瘦骨高く引裹げ、鍋のつるほ

堪忍めさ―堪忍めされ

他國の聞へ―下に「もうしろめたし」の句を入れて見るべし

門火焚く―生きて返らぬ證、道具出た後、門の右方にて焚く（嫁入記）

開く二人―蓋にかけて蓋を開け

る。母は堪えかね手を擴げ、「待てくれ〱。なふ祖父樣、道具惜うはなけれ共、今生でも來世でも、おさるが皃はもふ見られぬ。手に觸れた道具、せめて一色は老の形見に殘したし。家敷を欠落する時も、唐高麗に居るとても、さぞ忘れぬは子共が事。常々遣たい〱と、思ひし念も不便なり。一色づつも殘して、子共に取らせて下され」と、葛籠引寄せ簞笥に縋り、もだへ悲しみ泣ければ、忠「これお婆々、今是が悲しいとは。お身も我もま一度は、大きな悲しみ聞ねばならぬ。其時二人は何とせふ。年寄ては憂事を聞が役と覺悟して、じつと涙を堪忍めさ。身も堪忍〱」と、一圖に堅き國武士の、咽に涙ぞ詰りける。忠「何と思案して見ても、此道具請取ては、傍輩中の思はく他國の聞へ。若黨中間共、煙高いは憚り、一色づゝ取分々、燒て捨い」といひ付られ、迷惑ながら主命、葛籠簞笥、挾箱、引散し打碎き、海士の燒火と燃上り、煙に見へぬ俤に、母は猶も身を悶ゑ、「可愛やおさるが嫁入の時、まあ爰で門火を焚き、千秋萬歲と祝ひし其道具、門火の跡で灰となす。母がからだ諸共に、薪となしてくれぬか」と、歎くを見ては下女はした、若黨小者に至る迄、皆々袖をぞ絞りける。殘つたは長持一ツ。取分て燃せ、と開く二人の孫娘、兄弟抱合泣居たり。祖父も祖母も夢心地、「やれ〱あぶなや。命冥加な

老ぞ憂身の限なりけり」とありて二句頼まれずは七行本に頼まれきと直したり

まぢやうもの―眞正直者

ごくに立ぬ―役に立たぬ事

積重ね、「不義人の諸道具返納」と、呼はり散して歸りけり。母は持病の血の道に、おさゐが事の其日より、癪の痞ゑに胸痛み、いとど枕も上らぬに、母「なんじや道具が戻つた。聟共孫共緣切れたか、情なや」とよろほひ出、「なふ聞事も見る事も、悲しい事ばつかり」と、葛籠にかつぱと抱き付絕入ばかりに見えけるが、「如何成天魔の障礙ぞや。此樣な事仕出すさもしい氣は微塵もなく、まぢやう者の孝行者。子も尋常に育てゝ、母樣聞て下され、私は娘もたんと持、嫁入の時の諸道具を一色も散さず、子共躾ける便りに、少身の我夫に余り苦にかけともない、といふ詞が違ふにこそ。廿年に成道具、古びもせず持なす此心で、そもや惡事を何んのせふ。物の見入か報ひか」と、又口說き立泣けるが、「一之進の身に成ては口惜い筈なれど、余りに是はつれない。子共に讓つてくれもせず、見苦しい門に積せて、我子の恥は思はずか。ヤイ中間共下女共よ、余り人の見ぬ中、はやはや內へ運んでくれ」と、歎きあせれば忠太兵衞、「是々お婆々、聞て居ればくど〳〵と、何をごくにもたゝぬ事。一之進には過りない。男一所にうつて捨る女の諸道具、一之進が留て何にせふ。人間外れし女、汚れし道具、武士の家が穢るゝ。中間共片端に叩き割り、火を付けて燒て仕廻へ」中間共「畏つた」と棒さい槌、鋤鍬鉞ひつさげ〳〵立懸

眞苧―間男にかく
海士にだに―七行本海士にも
さりとは―嗚呼
ひよ〳〵となく―松の葉巻三の唄をとれり
露の笹原―當時の流行歌にて生玉心中にもあり
さりともと云々―續古今集に「さりともと昔は末も頼まれき

とや、世の噂、手で堰かぬる川水に、洗ふ帷子播磨潟、碌に寢ぬ夜の眼もとぼ〳〵と、埃まぶれの髪容、鹽燒く浦の海士にだに劣る、山田畠の 歌 鳥威し、さりとは鳥おどし、粟の鶉や澤の田鶴、ひよ〳〵と鳴くは鵯、小池に棲は鴛鴦、鴛鴦のしかも孀の夫の留主守、男鰥の憂住居、鳥の上にも歎かれて、いとゞ涙の種ぞかし。跡に夕立つむら〳〵雲に、さつと吹來る風の音、野邊の薄の戰ぎまで、我を追來る追手かと、歌 露の笹原ヤツトン〳〵、連立走る蹈分け走る、磯の千鳥をおつかけて、鎹摑んでずんずと伸しやる〳〵。サアゑいさつさ、ゑいさ〳〵ゑい笹葉の鑓の鑓先に、外す小鳥もなかりしに、今は羽風も恐ろしく、船は乘合人目せく、徒歩路急げどはかゆかず。何を知邊に難波津の、名は住吉も住憂しと、世の憂節も伏見山、染めぬ袂も捨る身は、心ばかりを墨染の、里に忍びて 三重 送りける。

下の巻

さりともと、昔は末も頼まれず。老の憂身の限りぞと、古歌の詞も思ひ知る、岩木忠太兵衛立關前、淺香一之進方より、小袖簞笥、挾箱、葛籠、長持、其外嫁入道具一ッ色、

二挺の尺—語に二挺の弓は引かぬとあり、爰はおさゐが權三と一之進と二人の夫を持つにたとふ
放さぬ先—不義せぬ前にばれた
出石—但馬にある山
湯桁—「伊豫の湯桁はいくつ左八つ右は九つ中は十六」(源氏頭書)
櫨楓—恥搔いてにかく
くすみ—じみな有様
大工どの云々—若みどり卷四にある唄
一腰は道芝—一本の刀は旅費に窮して賣拂ひて

戀慕はれし、二挺の弓の本筈の、放さぬ先に絃斷れて、引れぬ方にひかれ行、獨留守寢の床の內、心も澄て眼も冴て、しんき〳〵の空悋氣、終に我身のあだし草、世のそしり草浮草に、淺香の水の漏れ初て、笹野の露の置きまどひ、寢まどひ步みまどひては、古鄕忘れぬ二人が涙、涌て出石の山はあれど、戀の病は印なき、但馬の湯桁數ふれば、我とそもじは五つと七つ、十二違ひの月更て、姉ともいはば岩枕、かはす枕が思はくも、影恥かしや野邊の草、そなたは人の女郎花、おれが口から女房とは、身の櫨楓いたづらに、染めぬ浮名の村萩の、亂れ泣くこそあはれなれ。振上げ見れば源の、鬼神退治の大江山、峰は青葉に包まれて、谷も峰上も森々と、山の態さへ愛相なく、くすみきりたる、松の下蔭、藪の小蔭の一在所、あれ〳〵〳〵、麥搗く嚊等隣の姉が、三十計で鐵漿振袖、それでも戀の一節や、歌「大工どのよりナフ鍛冶屋が憎い。閨の鎰鍛冶がうつショガへ。なふ鍛冶がうつ。閨のかけがね鍛冶がうつショガへ」のふ鎰の、關の鎖の解初て、迷ひ初しは誰故ぞ。若い殿御を我故に、くずおれ姿二腰の、其一腰は道芝の、露の値と消ゐ果て、一本芒苅殘す、腰の廻りは秋の暮、淋しや悲しいとほしと、抱き合ては泣ばかり。國に親と子東に夫、思ひは千筋百筋の、我は涙のをがせ繰る眞苧をくる

見て、すや〱寐入る寐顔に、暇乞を」と泣きければ、權三「エヽ未練な。一之進に首尾能ふ討るゝより、浮世の願ひ何か有」と、引立門をあけんとすれば、門外に提灯人足、扉ぐはた〱大音上、「岩木甚平、笹の權三に逢ひに來た。誰も臥さつてけつかるか。あけよ〱」と呼はつたり。さゐ「ハア、悲しや、弟の甚平。門からは出られぬ。裏門はなし塀高し」飛んづ押つうろつく間に、家内は起る、門は叩く、前後に眼を付く茨垣、「ヤア惡人めが拔穴、我身に神の御利生」と、二人手を組む生死の巷、命の界四斗樽に、六道四生ぎつと詰つて動かれず、跡へも先へも酒樽と、共に逆樣さかどんぶり、ころ〱比は曉月の、時は夜明の七つがしら、二つ頭に足四本、胴は一つの酒樽に、歩む無明の酒の醉、これぞ冥途に通ひ樽、契りは偕老同穴と、一つ棺に一つ穴、何處ぞに埋んで桶の輪と、云はねど物がいはせたる。

權三おさゐ道行

歌 鑓の權三は伊達者で御座る、油壺から出す樣な男、しんとんとろりと見とれる男、どうでも權三は好い男、花の枝から飜れる男、しんとんとろりと見とれる男、いとしい男。

六道四生―六斗四升の音あり、四生は胎、卵、濕、化、樽より出られぬは六道の辻に迷ふにたとふ

七つ頭―午前四時前

油壺から云々―油の樣に光澤あつて女をして恍惚たらしむる美男

不請ながら―いやては有らうが

五臓―肺、心、脾、肝、腎、六腑―大腸、小腸、膽、胃、三焦、膀胱

エ是非もない、最早此二人は生ても死んでも廢た身、東に御座る一之進殿、女房を盗まれたと後指をさゝれては、御奉公はおろか、人に面は合はされまい。とても死ぬべき命なり、只今二人が間男といふ、不義者に成極めて、一之進殿に討れて、男の一分立て進ぜて下されたら、なふ忝なからふ」と、又臥沈む計なり。權「いや是不義者にならず、此儘で討れても一之進殿の一分立、死後に我々曇ない名を雪げば、二人も共に一分立。如何にしても、間男に成極まるは口惜い」さゐ「ヲヽいとしや、口惜いは尤なれど、跡に我々名を清めては、一之進は女敵を討あやまり、二度の恥といふもの。不請ながら今爰で女房じや夫じやと一言いふて下され。思はぬ難に名を流し、命を果すお前もいとしいはいとしいが、三人の子をなした廿年の名染には、私や換へぬぞ」と、わつと計歎きくづをれ見へければ、權三も無念の男泣き、「五臓六ッ腑を吐出し、鐵の熱湯が咽を通る苦しみより、主の有女房を我女房といふ苦患、百倍千倍無念ながら、斯ふ成下つた武運の盡き、是非がない。權三が女房」さゐ「お前は夫」權「エヽ〳〵忌々しい」と縋合、泣より外の事ぞなき。權「サア家内の眼の覺めぬ中、夜も短し、早立退ん」と引立れば、さゐ「可愛や三人の子共が、母が今此態で、住馴れた此屋敷を退く共知らず、何事か夢に

二重廻―女の普通の帶

肝のたばね云々―二ツの膽の繋ぎ目、くい〳〵はぶす〳〵

アヽ愚な―上下の句に續けたり

なき。二人の影ははら〳〵髪、權「如何にしても此態、帶解ても居られず」と、庭に出んとする處を、さゐ「アヽ〳〵帶に名殘惜いか。不承ながら此帶なされ。一念の蛇と成て、腰に卷付離れぬ」と、引解いて投出す。權三餘りにむつとして、「二重廻りの女帶、致した事御座らぬ」と、同じく庭に投出す。隙さず拾ひ伴之丞聲を立、「一之進女房、笹の權三、不義の密通數寄屋の床入。二人が帶を證據、岩木忠太兵衞に知らする」と、云捨て拔て出る聲。權「南無三寶伴之丞、弓矢八幡迯さじ」と、刀引拔き障子蹴破り飛んで出、燈籠の火の影薄く探し廻れば、波介がうろたへ廻るをしつかと捉へ、「伴之丞は何とした」波「私を捨て出られた」權「エせめておのれを冥途の供」と、肝のたばねをくい〳〵〳〵、ゑぐればぎやつと計にて、二刀にぞ留りける。直に逆手に取直し、弓手の小脇に突込む處を、おさゐ縋つて、「こりや何ふぞ。不義者は伴之丞、身に曇りないお前が何ンの過り。死なふとは」權「アヽ愚かな。二人が帶を證據に取られ、寐亂髪の此態、誰に何と云譯せん。もふ侍が廢つた。此方も人畜の身となつた。エヽ〳〵無念や」と泣ければ、さゐ「扨はお前も私も人間はづれの畜生になつたか」權「如何成佛罰三寶の冥加には盡果た」さゐ「淺ましい身に成果たか。はあつ」と計にどうど伏し、消入やうに歎きしが、さゐ「エ

あるは定—居るは必定

こちへ袋—堪忍袋

處、夜更て誰が來るものぞ」權「イヽヤ今迄鳴たる蛙がひつしやりと鳴止んだ」さゐ「アヽ蛙も少と寢まいでは。きよろ〱せずと先卷物ども讀しやんせ。あれ又蛙が鳴きます」といふ中に、波介樽を潛つて庭の內、主從一所に立やすらふ。權「あれ又ひつしやり鳴止んだ。どふでも誰ぞあるは定。ちよつと吟味」と、刀追取出んとす。さゐ「是遣らぬ。三方は高塀、北は茨垣、犬猫も潛らぬに、人の來る筈がない。獨しての氣遣ひ。扨はお前と私斯して居るを、妬む女子が喚きに來る、其覺えが御座んすの」權「是は迷惑、左樣の覺え微塵もない」さゐ「いや有いやある。媒が口を添へればつい埒の明樣に、內證しやんとしめて有。エヽ〱〱女の身の墓なさは、表べばかりに眼がくれて、胸の中を知らなんだ」と、わつと計の腹立泪。「これ宵からくら〱燃返るを、姑が聟の悋氣と浮名がいやさに、笑顔作つてこらへ袋、ふつつりと緒が斷れた。これ見よがしの其帶は、定紋の三ツ引と裏菊と、小じたたるい引竝べ。誰が縫ふた、誰が遣た。嚙斷つて退ふ」と飛かゝり武者振付。權「ハテ此帶は樣子がある」さゐ「ヲヽ樣子が無ふては。樣子といふが妬ましい」互ひに泣やら叩くやら、帶ぐる〱と引解き、疊みかけて擲り打、「エヽ嫌らし手が穢れた」と、手繰て庭にひらりと投げ、拾へといはぬ計成、思ひの闇ぞ詮方

祝言云々ー色々の儀式に用ゐる臺子
みすの中ー御簾に見よをかく
行幸の臺子ー道幸棚の事か
うつそりー鼻をあかしてやらう
いきぼれー息の根
鏡ー樽の蓋
葉山云々ー筑波山葉山繁山茂けれど思ひ入るには障らざりけり（新古今集）
跡からー七行本下に來いの二字あり
上づりー逆上

屋に入にけり。さゐ「是は繪圖の巻物、祝言、元服、出陣の臺子。これみすの中の茶の湯の圖、誠の眞の臺子とは、此行幸の臺子の圖、三幅對三ッ具足、壺餝りの品々、印可の巻許しの巻。これを讀ば口傳入らず。心靜に緩々とお讀なされませ」權三戴き繰返し、讀ば世間も靜りて、蛙の聲も更渡る。折しも川側伴之丞、四斗入の明樽下人に持せ、一之進が屋敷塀の廻り、うそ〱耳をそばだて小聲になり、「ヤイ波介、内には能ふ寐たぞ。おさゐが寢間へ忍び込、口說おほせ、積る念を晴し、色の上にてたらしこみ、眞の臺子傳授の巻物してやり、權三めにうつそりさせふ。若し人が起あふても女小者、口へ砂でも頰張せ、いきぼねを揚さすな。それ鏡突拔け」波「まつかせ」と踏つくれば、底も鏡もすつぽりと拔たるを、枳殼垣にぐんぐつと、葉山繁山繁けれど、茨障らず思ひ入、拔穴道とぞなりてけり。伴「おのれは四方見合せ、跡から」と伴之丞、そろり〱と這潜り、庭に出れば數寄屋の内に、燈火の影は障子に男と女　忍び逢夜のさゝめ語。頷き合ふて顏と顏、寄てしつぽり濡れの露。寢て仕廻ふたかまだ寢ぬか、染々うまい花盛。伴之丞も氣は上づり、裾はお留守を念がけて、先陣越された宇治川に、膝ぶり〱の流れ武者、咽を渇かし立けるが、權三が聲で、「ハア誰ぞ庭へ來たそふな」さゐ「ハテ晝さへ人の來ぬ

露け螢か—露の光るは螢火と紛ふ
ほつしり—しつぽり

庭の面、若葉の木立物古て、爐路ほの暗き燈籠の、火影宿かる熊笹の、露は螢か、蛙の聲の喧く、萱屋が軒に音づれて、しよろ〳〵流れ水の音、夜も森々と更にけり。おさゐは椽先に、家内は寐入、ほつしりと、何を思ふと咎め手の、無きが我屋の取得にて、涙も袖に落次第、「エヽ、思案する程妬しい。大躰の男を可愛娘に添はせふか。我身が連添ふ心にて、吟味に吟味、思ひこふだ稀男なればこそ、大事の娘に添はするもの、悋氣せずに置ふか。晝の婆々めが吐し頰、お雪樣と權三樣と內證しやんとしめて有。エヽ、腹が立妬ましい。悋氣者とも法界共、いひたか云ゑ。傳授も瓢簞も何のせう。臺子も茶釜も糸瓜の皮。エヽ恨めしい腹立や」と、身を椽桁に打付て、零す涙の袖雫、絞る茶巾の如くなり。さゐ「ハアウアヽ、思へば、悋氣も因果か病か。是程悋氣深ふては、我男を手放して、海山隔て能ふ置ぞ。能々お主は怖いもの。皆心の氣隨から。姑が聟の悋氣とは惡名の種、さらりと思ひ忘れふ」と、拂へども猶胸焦す、涙は癖となりにけり。
契約なれば笹の權三、供をも具せず、靜に門を叩く音、內にも答へず走出、「誰じや」「笹の」とばかりに明る戶を、入より早くはたと閉め、さゐ「直に數寄屋へ〳〵」と手燭片手に傳授の箱、二人忍びし有樣は、人の疑ひ有べしと、我身に見へぬ障子一重、明て數寄

やかましからう—八釜しかつたらう

わせ—お出て

傳授めさ—傳授せられよ

夕暗—云ふにかく、次のさすがに鎖すをかく

早ふ寢たいといふて、連立て歸つた。夜が短い、早く寢せて疾く起し、晝あがかせたが萬病圓。姉は奥にか。娘の子は十三四から、端近く出さぬがよい。姉や捨めはお身に似たが、虎めは一之進に生寫し。こりや、一之進江戸より歸つたといふて、母が側へちやつと往け」と、孫寵愛の戯れ。さゑ「ヲヽ久しう遊びやつた。祖父樣祖母樣やかましからふ。奥へ往て姉と竝んで寢しやや。乳母よ寐冷させまいぞ。やい角介、戻つたら何故燈籠に火は灯さぬ。日が暮たが目に見へぬか。女子ども、祖父樣のお慰み、今の名酒を少と上ませ」ともてなせば、忠「いや〳〵名酒より何より數寄屋の庭、毎日見ても見飽ぬ。一之進の物好き、心が伸ておもしろひ。ヤ豫て内意咄した笹の權三、眞の臺子の願ひにはわせなんだか」さゑ「如何にも懇望なされし故、卷物渡す約束に極めました」忠「出來た出來た。若い和郎の奇特な、諸藝の心掛頼もしい。仕損じあれば一之進の過失、殿の恥辱。祕傳遺さず傳授召さ。さりながら家の大事、譯知らぬ下々にも一言一句聞せまい。隱密〳〵。更ぬ先に歸らふ、提灯とぼせ。皆宵から寢ませ、夜敏に留守をいひ付やれ。又明日見廻申そふ。ヤイ角介、男といふはおのれ一人、門背戸に氣を付い。何をいふても、晝でも鼾角介だ」と。老の戯言夕暗に、歸れば跡は門の戸を、さすが數寄者の

骨は盜むまいー無駄骨折はさせまい

長鳴云々ー鷄の鳴聲の長く引くは不祥なりとの俗說

法界ー帆をかく

しよ。養ひ君のお雪様と申と、笹の權三様と云交せの事あれ共、媒が無ふて御祝言が遲なはる。殊に此乳母が働きで、一夜の枕をかはさせた。其禮に權三様より、雪駄一足銀一兩是が證據。侍の妹に侍が疵付ては、退引ならぬ大事。爰の奥様ちよつとお口を添へらると、波風たゝずつゐ埒の明様に、權三様と内證の跡さきしやんとしめて有。御子様方も有からは、錢金出して御祈禱さへなさるゝじや御座らぬか。人の爲のよい事は山伏入らずの御祈禱。首尾能ふ相濟み、相應の御禮、そこは乳母が呑込だ。此方も骨はぬすむまい。表べ計の取結び、偏へに賴み上まする。始ての長口上、ホヽヽ、アウおはもじや」と饒舌ける。萬「是なふ、そつちの心に長ければ、聞耳には猶長い。此方の奥様は禮物取て、肝煎する奥様じや御座らぬ。殊に酉のお年で、此方の様な長鳴が忌事じや。早ふ往んで下され」と、愛想なければ手持惡く、乳「ムヽウ私は戌で丁六十、狼狽歩いて棒に逢はぬ先に、長吠せずと往にましよ」と、迯吠してぞ歸りける。奥には得手に法界悋氣、瞋恚の怒綱きれて、靜めかねたる折節、「父岩木忠太兵衞、只今是へ」と若黨先に告げければ、家内おそれ鎭まりて、おさゐも可笑からねども、親に愛想の笑顏、虎「ヲヽ一之進の留守、皆機嫌能ふて滿足。虎や捨めが能く遊んで、晝寐をせず睡たい、歸つて

からねど、お慮外ながら奥樣へ、密にお咄申たさ。お雪使ひやら何やら、押かけて參りし由、賴みまする」と云入る。權三はつと色違へ、「扨々思ひも寄らぬ奴、何用有て參つたぞ。我等には大禁物、見付られては迷惑。どふぞ脫て歸りたい」と、うろ〳〵眼に成ければ、さめ「ハテ伴之丞の侍畜生。その妹の乳母何の氣遣。侍畜生の因緣聞て下さんせ。主有私に執心かけ、度々の狀文、夫ある身を踏付にする不義者。御用人衆迄訟へ、恥かゝせてと思ひしが、侍一人すたるといひ、一之進殿歸られては生死の有ことと、中使の下女に隙遣たれば、兄の不義の使に妹の乳母が來たそふな。直に逢ふも口惜い。留守を遣ふて、奥から樣子を立聞せふ。女子共挨拶して、いふ事いはせてつい往なせ。權三樣をも彼の婆々が、見ぬ樣にそつと脫して往せませ。夜に入人も沈まつて必お出。傳授の卷物渡しましよ」と、云捨奥にかくれ入。萬は氣轉才覺もの、目まぜ領き權三を圍ふ袖屛風、萬「なふ〳〵お乳母殿とやら、此暑いに老人の御太儀な。どれ汗拭ふて進ぜふ」と、顏にべつたり手拭の縮みと皺ともみくさの、どさくさ紛れ忍草、權三はぬけて歸りけり。萬「餘り拭ふて皃が痛いか。折角のお出に、奥樣は今朝より親里へ參られ、緩りと逗留有はづ。何なり共私にお語りなされ」といひければ、乳「それなら此方賴みま

縮みと皺―縮の手拭で皺の顏を拭く混雜紛れに權三忍び出る

當座の色云々—其場限りに契りし女はあつたにしても

二度具足云々—此誓を破つては二度と具足を肩にかけぬ卽ち武士を捨る事

橋がなければ—諺にて手がゝりがなければ物が成立せぬ

共恥しけにさし俯伏て返事せず。さゐ「サア如何で御座んすぞ。ハテ何の是が恥しい。扨は娘がお氣に入ぬの。ム、頭掉しやんすは否でもない。エヽ知れた。疾から外に約束が有そうな。左樣ぢや〳〵。主ある花は是非がない。可惜男に戀がさめた」と、立退けば、權「アヽ是は迷惑、誰共我等約束なし。木石ならぬ若い者、當座の色は各別、極めし事はゆめゆめなし。師匠の聟と申せば聞へもよし、娘御お菊殿、私妻に急度申受ませふ」さゐ「ハアウ忝いお嬉しい。サア望は叶ふた。お侍の詞、底を押すは如何ながら、媒なしの緣組、證據の爲ちよつと御誓言聞ましたい」權「御念入は尤、二度具足を肩にかけず、一之進殿の指料に刻まれ、骸を往還に曝す法もあれ」と、云せも果ず、さゐ「アヽもふ能ふ御座んす勿躰ない。今日は吉日、今宵臺子の傳授の書、印可の卷物渡しましよ。それお供の衆戻せよ。先娘には逢せませぬ。私に似たらば定て悋氣深からふ。側へ心散さず一筋に賴みます。惡性があつたらば、此姑が悋氣の腰押。お持せの名酒、お前と私が此樽に、斯ふ手をかければ契約の盃した心。橋がなければ渡りがない、臺子が緣の橋渡し。此樽も橋渡し」橋にて祝ふ鵲の、身も紅に染る共、世に謠はるゝ端ならん。又玄關に老女の聲、「女子衆少賴みましよ、川側伴之丞妹お雪と申者の乳母、ついしかお目にか

印可―許した證明書

遁れぬ云々―是非許さねばならぬ弟子

女房と云は―七行本女房といふには

かなり。權三手をつき、「御親切忝し。忠太兵衛殿か、御舍弟甚平殿を以申ス筈。近比粗忽の願ひながら、今度御祝言御振廻の御馳走、眞の臺子の餝り、一之進弟子中との仰渡し、常々一之進殿お物語り、一通りは聞覺え、未だ指圖繪圖の卷物、傳授口傳許し印可を受ざれば、押はなして眞の臺子覺えたとは申されず。天下泰平長久の御代、斯樣の事を勤めねば、武士の奉公秀がたし。數年の懇望今度の大願、卷物拜見を許されば、生生世々の御厚恩」と、額を疊に押下て、師弟の禮義見へければ、さゝ「扨も〳〵、御執心御奇特なお心入。此傳授は一子相傳にて、我子の外へは傳へられず。遁れぬ弟子は親子の契約有ての上、繪圖卷物も渡す事。それに付、次手がましい近比粗相な、藪から棒と申そふか、寢耳に水と申さふか、思召も如何なれど、折がな〳〵と兼々心にこめし故、申出して見まする。姉娘のお菊を、此方樣へ進ぜ度と常々私が望み。今も今とてお噂申せし折柄、斯ふ申せば如何やら臺子の傳授と換々にする樣で、娘の威も落ち、大事の傳授の詮もなし。それはそれ、是は是の談合で、菊を其方へ進ずれば、聟は子の相傳、一之進聞れて滿足。第一私が戀聟。押出して好い女房と云は限のない事。先大抵目鼻揃ふた祕藏娘、添はする殿御は、こな樣除て外にない。なんと合點して下さんすか」と、いへ

長門印籠―胎を詰めて嫁娶になれば丁度似合ふ事、此印籠は秋月長門守の製にて馬の皮にて作り藥をよく保つ(江戸塵拾)

持ずば―七行本持ねば

名酒―味醂

比翼―一つ身にて雌雄連る鳥(三才圖會)

つめたらしつくりの長門印籠。ほんに四人酉の年、是も不思議。榮耀云はずと殿御に持や。其方が否なら母が男に持ぞや。ほんに一之進殿といふ男を持ずば、人手に渡す權三樣じやないはひの」と、子を寵愛のあひたてなく、時の座興の深戯も、過去の惡世の緣ならめ。「サア此上に衣裳著せ替え、打かけさせて見せふぞ」と、娘自慢の鼻脂、手を引奥にぞ入にける。玄關に「物もう」茶の間の萬が「どれい」と應へ、出迎へば笹野權三一樽持せ、權「岩木忠太兵衞殿は是に御座らぬか」萬「アヽ毎日お見廻なさるれど、今日は未だ見へませぬ」權「ムヽ然らば奥へ申てくりやれ。此中は御不沙汰、お留守何事なく珍重に存じまする。ちと申度事御座れ共、委細は忠太殿迄申入ませふ。此一樽は上方の名酒、稚い方のお慰み、お見廻の印と、お次手に申てくりやれ」と、いひ置歸れば、萬「アヽ申、先暫く」と走入。女房はや立聞て、さゐ「御口上聞た／＼、待請た樣な事。苦しうない、お通りなされと、申ませ」と櫛笥鏡臺片付て、塵掃く羽根の二つ羽も比翼の惡緣底深き、笹の權三は遠慮ながら、常の居間にぞ通りける。さゐ「是は能ふこそ。お見廻と申シ、子共方へとお心付、珍しい御持參。折々玄關迄お出下されても、態とお目にかゝる事もなし。して御用とは何事か。親忠太兵衞迄もなく、直にお咄遊ばせ」と、隔てぬ挨拶まめや

肌身―七行本は
だか身
むつくり―ほや
ほや

其鏡を見や。親の目は最屓目、他人が證據。萬來いよ。飯焚の杉もちやつと來て、お菊が髮つき見てくれい」下女「あい〱」と走出、「是は〱、奧樣いかひお上手。額付髮つきで、下地の好いお顏が猶美しうならしやんして、女子でさへ辛氣が涌く。肌身をむつくりと抱て寐たい」と譽るも有、杉がはたと手を打て、「アヽそふじや、日比の不審が今晴れた。私が鏡で顏を見て、木地は隨分好けれ共、人が惚れぬ。異な事と思ふたが、髮の結樣ばつかりで、可惜此身が埋木じや。慮外ながら奧樣の手に二三日かよつたら、お國中の男は、秋風に薄の穗、靡けてやろ」とぞざゞめきける。さゐ「親の子を譽るは嫌らしけれど、此樣な娘を大躰の男に添はせるは妬ましい。常々つく〴〵思ふには、御家中で聟を取らば、表小姓の笹野權三樣に添せたい。器量はお國一番、武藝よふて茶の道も、弟子衆に續くはない。そして氣立といふ物が、萬人にも憎まれぬいとらしいかた氣。男の生粹々々」と、いへばお菊は童氣の、「中母樣、權三樣は大人で、叔父樣の樣に有ふ。わしやいや〱」と頭掉る。母「アヽわけもない。母は三十七の酉、父樣は一廻り上の酉で四十九、これ十二違ふても、見ん事我身達の樣な子を持た。權三樣は一廻り下の酉で廿五、そなたは酉で十三、十二の違ひは丁度能い似合比。まあ二三年して良も直し、脇

連て戻れ—七行本ての字なし

音羽山—山城音羽燒

けんで—きつう見えて

繪に書く云々—繪に書いた美人は只姿形のみなれど吉野の花を心で見れば髣髴と動く樣に見ゆる、お菊が殿御持た時の姿がありあり見ゆるとなり

めやすかるべし—見よからう

永の留守の中、子共が惡ふ育つたといはれては、かゝが浮名も恥かしい。男の子は男の手、祖父樣へ往て大學でも讀習や。馬鹿よ、供して暮方に連て戻れ」と、内外迄に氣を配る、留守こそ心盡しなれ。お菊はさすが姉だけの、「母樣いかいお世話、ちとお休み」と指出す、薄茶茶碗の音羽山、おとなくれたる振を見て、「ヲヽ孝行な、能ふ云やつた。溫順うなりやつた。妹のお捨は乳母と遊びに出たそふな。行水も仕廻ふてか。髮は誰が結ふた、萬が細工と見へたの。髷がま少と下つた。額もけんで愛相がない。髱の出し樣鬢付で、善ふも惡ふも見せる物。顏の道具相應に、眉が女子の大事の物。前髮も斯でない、母が直してやりましよ」と、開く櫛箱鏡臺の、此鏡より世の中は、人こそ人の鏡なれ。人の振見て我振の、善きも惡きも身の手本。繪に書く筆のすさみには、京や大坂の上臈も、心で見れば今宴に、吉野初瀨の花も見る。殿御持ての朝寢髮、湯上り顏や洗ひ髮、人にな見せそ亂れ髮、寐亂れ髮の枕にも寐顏は猶もつゝましや。容儀は生れ付なれば、只嗜みは黑髮の目出たからんこそ、女はめやすかるべし、とつれ／＼草にも有といの。兎角女子は髮かたち、千筋と撫る櫛の齒に、身持行義の解きほどき、子を思ふ手につや／＼と、見かはす程に見へければ、「それの、各別好い子になりやつた。嘘なら

一日は昔の字なれば云ふ（安齋隨筆）
氏―宇治にかく
ゆかしく―四九
三十六にあてたり
敷松葉―路次に松葉を敷くは茶の湯の式なり
かく成―掻くと斯く
景清云〻―謡曲景清にある句
ぬく奴―痴呆め
奔走―大事にする事

も能く氣も伊達に、三人の子の親でも、きやしや骨細の生れ付、風忍ばしくゆかしくの、三十七とは見へざりし。數寄屋廻りの掃拭ひ、下女中間にもいろはせず、帚木放さぬ奇麗好き、爐路の飛石敷松葉、石燈籠は苔むして、巖となれる手水鉢、植込の謡木の下蔭の、落葉かく成迄夫婦存命て、子共の末を高砂の、松の榮や祈るらん。中息子虎次郎棹竹横たへ、年季の角介杖提げ、爐路の中に走入、謡「景清是を見て物々しやと夕日影に、打物閃いて切てかゝれば、こらへずして刃向たる兵は、四方へばつとぞ迯にける」二人「ゑいやつとう〳〵」とぞ打合ける。さゐ「ヤイ〳〵〳〵、餘程にあがけよ其處なぬくめ。見ン事男の數に入ながら、江戸の供さへ得仕おらず、小さい子を相手にして、怪我でもするか數寄屋の壁に、疵でもついたら何とする。これ虎次郎、彼の馬鹿を相手にして、日がな一日惡あがき、一々に帳に付、父樣お歸りなされたら急度告る。待て居や」と叱られて、虎「いや母樣、惡あがきはしませぬ。わしは侍じや。鑓つかひ習ひます」さゐ「これなふ、そなたも最ふ十ヲじや。其合點がいかぬか。侍は侍知れた事。去ながら父樣を見やいの。御前も能く御加增迄下された。武藝は侍の役珍しからぬ。茶の湯を上手になさるゝ故、人の用ひ奔走も有。幼少時から茶杓の持樣、茶巾さばきも習ふて置や。永

た秘事

非の入る—非難を受ける

龍の馬にも云々—諺にて猿も木から落るの類

初昔—三月の季より廿一日目に摘みたる茶、廿

傳の大事なれば、權三躰が茶の湯で、傳授許請ふ筈も御座らね共、師匠の咄し聞はつゝた義も有、大概非の入ぬ程の御用の間には合せませふ」と、詞の中より伴之丞、「ハテ斯程大事の晴の御用、間に合せで濟む物か。此御用は伴之丞が一人して勤むる。忠太殿、其通り心へ召され」といひければ、忠「いや我一人の儘にもならず、娘ながらも一之進女房、かれが所存も有べき事。假初ながら眞の臺子の傳授事、過失有ては殿の恥、諸事談合づくが能い筈。サア御兩人御歸りか、いざ御同道致そふか」「兎も角も」と伴之丞跛ちがく腰を引。忠太兵衛頬憎く、「此方は腰をお引なさるゝが、疝氣でも起つたか」伴「さればされば、拙者程の馬の名人なれ共、龍の駒にもけつまづき、馬から落て落馬いたした」と、片言やら重言やら。忠太兵衛おかしさ、彼奴なぶつてやらんと思ひ、「馬から落て落馬したとは、いかふ念の入た落馬。痛むが道理。何方も落馬が流行やら、生駒新五左が瘧も、妙藥一服でかけもさゝず落馬いたす。我等は今朝他所へ參り、大事の精進をつい落馬いたした。此樣に落馬の流行時、むさと云分などなさるゝな。首が落馬いたそふぞ」と、澁口いふも茶の湯者を、聟に持たる三重身の習ひ。昨日は今日の初昔、世の口に合ふ茶の名所、人は氏より育ちかや。淺香一之進の留守の宿、おさゐはさすが茶人の妻、物數寄

れば、伴「こりや權三、相手はお主が月毛馬、此方へ渡せ切て捨る。馬を渡せ。あいたく。腰を揉め中間共、うぬらも首があぶない」と、權三が方を尻目にかけ、相手知れずの一人腹。權三もいはれぬ挨拶と、身を控へて立たる處に、進物番の岩木忠太兵衞、六十八でも生得堅氣、赤銅月代剃立て「ヤ御兩人是にか。御宅へも參るべきに能い處で御意得た。東御家老衆より御狀到來。此度若殿御祝言相濟みお悅び、お國に於て當月下旬、近國の御一門方御振廻御馳走の爲、眞の臺子の茶の湯なさるべしとの事。是によつて、我等が聟淺香一之進も留守なれば、御家中弟子衆の中、眞の臺子傳授の方へ、御廣間本式の餝物等勤めさせ申せ、と御留守御家老衆より仰付らるゝ。とは申せ共、何方が傳授なされたも存ぜぬ故お尋申。此度の御用に立ば、第一は御奉公、其身の手柄、聟の一之進も本望。何ンと御兩人、聞覺えもあつて茶の湯の名を取ふなら、此度なり」とぞ語りける。我慢者の伴之丞、「ハア、眞の臺子易い事。傳授許しは請ね共、祕事はまつげ、何でもない事。色色我等存じて居る。數年の稽古は此度。御用は拙者承はる。心安ふ思召せ」忠「それは先珍重。權三殿は御存じないか」權「されば、存じた共申されず、存ぜぬ共申されぬ。惣じて是は茶の湯の極意。家々の傳多けれ共、師匠一之進一流は、東山殿より嫡傳、一子相

御意得た—お目に懸つた

眞の臺子—臺子は茶の湯に用ゐる棚にて眞行草の三種あり（貞要集）

祕事は云々—諺にて秘傳は聞いて見れば易きものの意

東山殿云々—足利義政より傳へ

けなす－侮る詞

當言－あてこすり

せめて－閙らして

角－鐙のふちの四角なる處、馬の腹をうつもの（貞丈雜記）

らば賣て仕まひ、五兩も七兩も利を取て、又跡から安馬買置、乘入て賣たらば金持に成筈、よい藝覺えて仕合せ」と、人をけなす口癖。權三氣だてを能く知て、「ヲヽサ少身者の馬の手入、飼を碌にかはぬ故、見懸計で爰はの時の用に立ぬ。御身達は大身、人手は多し飼はよし、すはといふ時かん強く、歩み勝つはお身の馬。祕藏召され」といひければ、伴「ムヽ其云分は、先度二の丸の櫻の馬場で、其月毛に此馬が歩み負た當言な。サ一馬場せめて勝負せふ。サア乘れ〳〵」と氣を喘たり。權「イヤサ心へたといひたひが、今迄乘て、お見やる通、人馬共に草臥、只今歸宅。重ねて〳〵。小者共來いやい」と、いへ共いつかな聞入ず。伴「イヤ草臥とは負用心。勝負せねば堪忍せぬ」と、手綱を繰て乘出す。權三も今は力なく、馬には一息つがせたり。我身の汗も入方の、月毛の駒に櫻狩、祕密の手綱繰控へ、繰緩め、左右に輪をかけ違へ、互に負じと二三遍、入かへ〳〵乘たりしが、權三が馬は逸物の、口を切て角を入「ハウッ」と懸たる聲の内、一散に駈出す。伴之丞が栗毛馬、鞭影に尻込して、打ても引てもしやくつても、前脚搔て高斷し、躍上り跳上り、鞍にたまらず伴之丞、屛風返しにどうど落ち、木の根に腰骨打當、「あいた〳〵」といふ聲に、馬取中間草履取、主人の恥も打忘れ、一度にどつとぞ笑ひける。權三驚き飛で下り、「怪我はないか」と立寄

念入―七行本念は入
したゝめさせ―七行本したてゝめさせ

八幡―弓矢八幡の略にて誓の詞

情―精か

下されとは、何共それは恥しし。然るべき媒頼み、兩方へ挨拶あれ。我らは合點、作之丞さへ呑込まるれば、用人衆迄伺ふて、其上は緣次第。此詞を違へなば、たつた今此馬から眞逆樣に轉りと落ち、蹈殺さるゝ法もあれ、心底變らぬ變らぬ」と、いへばお雪がにつこりと、笑顔に開く小風呂敷、雪「是此帶の縫見て下さんせ。丸に三ッ引お前の御紋、わたくしは裏菊、能ふはなけれど私が細工。大小の締る爲、中入に念入たれど、くけ口がお氣に入まい。去ながら、末永ふ縫したゝめさせねばならぬ。どれぞ媒頼みて、本式の云入はお前から。是はまづそれ迄の心頼み。此帶の如く如何迄も、お腰本を離れず添纏ふてや。そふじやぞや」と、鞍の前輪に打懸る、其手を取てじつと締め、權「何ふもいはれぬ嬉しい心、八幡我らも心底かはらぬ。此馬も聞て居る。畜生の心は人よりも恥しい。こりや證據に立て。馬よ聞たか〳〵」と、いへ共いかな馬の耳、風に嘶く計なり。權三帶疊んで懷に押入、「あれ〳〵濱手から栗毛馬の遠乘は、舍兄作之丞」雪「ハアほんに乳母、兄樣がそれ其處へ」乳「ヤア旦那樣かこりやならぬ。見付られては後の邪魔。サア先此方へ〳〵」と、本社の方へぞ走りける。程なく作之丞乘來り、「ヤ權三お身も遠乘か。いかふ情が出て、馬持が能い故に、其月毛も一兩年めつきりと能ゥなつた。買人があ

好い手—よい加減

おつしやれたが—七行本おつしやれたか

目代云々—監督者の地位にある我は同類

十八豇豆—江戸にては十六豇大坂にては十八豇といふ(奴師勞之)

あべかこふ—赤目

むさと—うつかり

乘ル心もせず、氣が宙を飛ぶ樣で、是此如く汗かいた。地躰乳母、お主が不調法。屋敷の人目も有もの、若い女中に異見もせず、此樣な遠駈け、御家中ふつと名が立ては、此權三御奉公がならぬ。中交した詞は違へぬ。サア同道してお歸りやれ。早ふ〳〵」と乘出す、轡取て引留め、乳「乳母が不調法とは、好い手な事仰れな。やいの權三樣、よもや忘れはなされまい。去年の冬私が宿で、お雪樣とお前と逢せた時、是限りとおつしやれたがサア何と。たつた一夜切に切賣にする娘御じや御座らぬ、アウ忝も。それから梨も礫もせず、お文の往く度毎に、此方から返事せふ。どれ何處に一度の返事もなされたか。お雪樣の父御樣母御樣は御座らず、目代になる此乳母はぐるなり、伴之丞樣へたつた一言云入レて、つい御祝言濟む事。サア奥樣に持たしやるか、但否か。否なら嫌と今御意なされ、思案が有。ほんに私が育てゝ自慢じやないが、男に指もさゝせぬ。甘い盛りの十八豇豆、柔かな內を一口食ふて、せゝりさがして置ふや。そりや成ませぬ。アヽあべかこふ」とぞ喚きける。權「チヽ女中の氣では恨尤。文は落散る遠慮深く、返事せぬは身があやまり。御舍兄伴之丞とは、御膳番の淺香一之進に茶の湯の相弟子、心易い朋友なれ共、中憎いが味な氣質で、むさと物のいはれぬ仁。若い者の口から、御自分の妹

禪流の馬術
十八公—松の字とお雪の十八歳にかく
糸薄—戀を含める目元
荒駒—あるにかく
せめ馬—馬を馴す事
まかふ—事に託して離れさす

權三見る眼の糸薄、ちらりほらりと馬の先、除る振して邪魔をする。權三それぞと見し人の、心に覺え荒駒も、色にそばへて足早き、はい〱聲をかごとにて、馬ぞ迷惑痴話の鞭、打くれ〱駈けさする、轡の音ははりりん〱、泥障の音ははたく〱、叩く嵐や馬場先の、すゝの笹原さら〱、さら〱さつと乘飛び〱〱乘飛せ、跡を陸地につけばこそ、二町五反の馬場の內、息をもつがず半時計、達者を見せてぞ 三重 せめ馬の、鞍も鐙も汗に成、乘止むれば小者馬取、「もふお仕廻か」と走寄る。權「ヤイ丁稚、殊の外汗に成た。一走り歸つて著替の袷持て來い。馬取共其間宮へ往て休息せい」「ない」といふより中間共、休む方には足早く、立去る跡につる〱と立寄て、足の爪先鐙共にしつかと取、與「久しう御坐んす權三樣、御無事で目出たふ御坐んする。是見ぬ顏も能い加減にしたがよいぞや。かはいそに馬も骨折らせ、今日一時に稽古せねば叶はぬか。左程私が嫌ならば、最前から除けず共、何故此馬に踏殺させて下さんせぬ。エヽ此方樣はなふ侍のぬけ〱と、能ふ噓を吐かしやんす」と睨む眼の中おろ〱と、女は淚脆かりし。權「是お雪どの、人にこそよれ川側伴之丞殿の妹御。君傾城をなぶる樣に、權三が噓をつく物か。少も心かはらね共、下々の奴等まかふ爲、中間めらが見付ふか、と馬に

鑓の權三重帷子

作者　近松門左衛門

お留守—大名の留守邸
たしなむ—心がく
濱の宮—出雲の海岸
流鏑馬—騎射の式
美男草—とろゝを出雲にてかくいふ(俚言集覽)
女若—女と若衆
かん強く—七行本所の字を宛つ
さんせう—產所か
しゆみの髮—鼠をいふ(武用弁略)
大坪流—大坪道

君八千代、國は治る御留守にも、弓馬たしなむ梓弓、馬の庭乘遠乘と、遙に出し濱の宮、鳥居通の流鏑馬馬場、竝木に落る風の音、とゞろ〳〵と打波も、乘分けつべき器量こそ、表小姓の數々の、中にも笹の權三とて、武藝の譽世の人に、鑓の權三は伊達者の、どうでも權三は好い男、謠ひ囃らす美男草、女若二ツの戀草を、飼にかふたる月毛の駒、前脚とつてかん強く、雪嚙碎く白泡に、さんせうよしや尾は青柳の、しつたりしたりしたした〳〵、かつし〳〵と歩まする、大坪流の鞍の內、稽古に心染手綱、搔繰くり〳〵乘拍子、「はい」とかけたる一聲に、兩口放す奴が髭も、共に跳たる駿足や、袴の裾に風受て、小波寄するしゆみの髮、しつ〳〵〳〵と乘戻し、引廻し乘る袖摺の、松も女松の十八公、其年比の振袖の、京染模樣菅笠は、家中で誰の娘ぞや。お乳母らしいが小風呂敷、

八逆—謀反、謀大逆、謀叛、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義
五逆—父殺し、母殺し、佛身より血を出す、阿羅漢を殺す、和合の僧を破る
十惡—殺生、偸盗、邪淫、妄語、惡口、兩舌、綺語、貪慾、瞋恚、愚痴

らるゝ事、國性爺が運も是迄。末頼なき大將。我々兩人が命を助給はらば、國性爺が首取て差上ん。御誓言にて御返答承はらん」と、云もあへぬに韃靼王、「ヲヽ〳〵神妙神妙」と云所を、飛懸てはつたと蹴倒し絞上れば、透をあらせず國性爺、飛懸て父が縛め捻切〳〵、李蹈天を取て押へ、父を縛し楯の面、まつ其如く高手小手に縛付、三人目と目を見合せて、「アヽ嬉しや」と悦ぶ聲、國中響く計なり。諸軍勢勇みをなし、太子姫宮御幸なし奉れば、國「御前にて彼奴原則罪科に行ふべし。夷國とは云ながら、韃靼國の王なれば、縛りながら鞭打して本國へ送るべし」と、左右に分つて五百鞭、半死半生打すへて引退けたり。「サア是からが李蹈天、元の起りの八逆五逆十惡人、片身恨のない樣に、國性爺は首引抜かん。兩人は兩腕」と、三方に立かゝり、聲をかけて一時に、「ゑいやうん」と引抜き捨、永暦皇帝御代萬歳、國安全と壽くも、大日本の君が代の、神德武德せい德の、滿て盡きせぬ國繁昌、民繁昌の惠によつて、五穀豊饒に打續き、萬々年とぞ祝ひける。

とくの返答ー一本とかくの返答

しどろ足ー亂れ足

よつて親一官を斯の如く召取たり。日本流に腹切か。但親子諸共直に日本へ歸るに於ては、一官を助べし。承引なくばたつた今、目前にて一官を引張切にせん。とくの返答早申せ」と高聲に呼はれば、今迄勇む國性爺、はつと計に眼も暗み、力も落て打萎れ、諸軍勢も氣を失ひ、陣中ひつそと靜りける。一官齒嚙をなし、「ヤイ國性爺、狼狽たか後れたか。七十に余る此一官、命存へ何に成。母が最期の健氣なり迚、父にも語吹聽せしを忘れしか。是程迄仕課せし一大事、此皺爺が命一つに迷ふて、仕損ぜしと云れて、末代の恥辱古鄕の聞え。日本生れは愛に溺れ義を知らぬ、と他國に惡名とゞめんは日本の恥ならずや。女なれ共汝が母は生れ古鄕を重んじ、日本の恥といふ字に命を捨しを忘れしか。是程の手詰に成、此親が目前に八つ裂にせらるゝ共、目もふらず飛懸つて本望遂げ、大明の御代になさんと思ふ根性は何處で失ふた。エヽ未練なり淺まし」と、地團太踏んで制すれば、國性爺父に恥しめられ、思切て大王目がけ、飛で出れば李蹈天、父に劍を差當る。國「はつ」と氣も消へ立留まり、進みかねたるしどろ足。頭の上に須彌山が、今崩れかゝつてもびく共せぬ國性爺、前後に暮てぞ見えにける。甘輝吳三桂互に急度目配せ、突と出て韃靼王の前に頭を下げ、「斯迄仕課せ候へ共、御運強き韃靼王、一官搦め捕

緩怠千萬—横着千萬

大門、三十六の小門有。一方にても明たる方より落失せんは必諚。四方に心を配つて討て」と、相詞に手を配り、箙を叩き時の聲、天も傾く計なり。小睦が嗜む劍術の、牛若流の小太刀を以て一陣に進み出、小「相手選ばず時選ばず、所も選ばぬ此若武者、死たい者が相手ぞ」と、思ふさまに廣言し、多勢が中へ割て入、火水を飛せて 三重 戰ひける。賊兵數多討るれ共、七十萬騎楯籠つたる南京城、落べき樣こそなかりけれ。國性爺は如何にもして、父の生死を知るべし。と駈廻つても詮方なく、陣頭に大音上、國「我唐土へ渡つて五年の間、數ケ度の合戰終に無刀の軍をせず。今日珍しく劍の柄に手もかけまじ。馬上の達者劍術獲物の韃靼勢、寄て討てや」と招きかくれば、賊「憎い廣言打殺せ」と、我も我もと喚いて懸る。引寄て劍捻取、敲き挫ぎ打みしやぎ、鋒槍長刀もぎ取〱、捻曲げ押曲げ折碎き、寄來る奴原脚に障れば踏殺し、手に觸るを捻殺し、絞殺しては人礫、騎馬の武者は馬共に、一ッに摑んで手玉に上、四足を摑んで馬礫、人礫 馬礫、石の礫も打交り、人間業とは 三重 見へざりし。さしもの韃靼責寄られ、すは落城と見えたる所に、一官を楯の表に縛付、韃靼王を先に立、李蹈天進み出、李「ヤア〱國性爺、己日本の小國より這出、唐土の地を踏荒し、數ケ所の城を切取、剩 大王の御座近く、今日の狼藉緩怠千萬、是に

すゝどげ―鋭きに同じ

不興―敵の弱きに興をさます

如何なる天魔疫神も、面を向くべき三重方もなし。鄭芝龍老一官、夕霧暗き黒革威、すゝどげに出立て、南京城の外廓の大木戸敲いて、鄭「國性爺が父老一官と申者、年寄膝骨弱つて人竝の軍叶はず。されば迚若殿原の軍咄し、安閑と聞ても居られず。此城門に推參して、速に討死し、素意を達し度候。あはれ李蹈天出合、此白髪首を取て給べ。生前の情ならん」とぞ呼はりける。城の中より六尺豐の大男、「優しし一官、相手に成てとらせん」と、木戸押開き切て懸る。「心得たり」と二打三打討ぞと見へしが、突と入て首打落し、大きに不興し大音上、鄭「一官年寄たれ共、斯樣の葉武者に遣る首持ず。李蹈天出合れよ。外の者が出たらば何時迄も此通」と、城を睨んで立たりけり。韃靼大王壽陽門の櫓に顯はれ出、王「國性爺が父老一官とは彼奴めよな。問ふべき子細數多有。殺さず共搦め取て引て來れ」「承る」と四五十人棒ずくめに取廻し、透をあらせず滅多打、捻伏せ〳〵縛り付、城中さして引て入。無念といふも餘り有。程なく甘輝呉三桂、國性爺を眞先に、大手の門に駈付れば。引續いて六萬余騎、小睦を後陣の大將にて、今日を死戰と押寄せたり。國性爺下知を爲し、「未だ生死も知れず、殊に此南京城、四方に十二の

卒し—率し

旁—皆々

に預る事、全日本の神力に依てなり。然れば竹林にて從へし島夷共、日本頭につくり置、彼等を眞先に立、日本の加勢と披露せば、元より日本弓矢に長じ、武道鍛錬かくれなく、韃靼夷聞怖して、二の足に成所を、疊よせて乘取らんと、此比我女房に謀合せたり。ヤア／＼源の牛若、軍兵卒し是へ／＼」と、團を上れば、「あつ」と應へて立出る、小睦が髮の初元結、諸軍勢の元服頭、大和淺黃に唐錦、華麗成ける出立なり。假御殿の幔幕より、姫宮走出給ひ、栴「なふ／＼國性爺、此簱は御身の父一官の簱印。此書付は一官の筆、心元なき文言」と出し給へば。床几を下つて讀上る。文「我慾に明朝先帝の朝恩を報ぜんと、再び此土に歸參し、功もなく譽もなし。老後の餘命幾許の樂をか期せん。今月今夜南京の城に向つて討死を遂げ、美名を和漢に留むる者なり。鄭芝龍老一官、行年七十三歲」と、讀も終らず國性爺、すつくと立、「サア敵に念が入て來た。母の敵に父の敵、智略も入らず軍法も何かせん。旁は兎も角も、身に逼るは國性爺只一人。南京の城に乘込、韃靼王李蹈天が首捻切、父が最期の場を換へず、討死して父母が冥途の旅を同道せん。今生のお暇請」と、飛で出れば兩將袖に縋つて、甘「ア、曲もなし。甘輝が爲には妻の敵舅の敵」呉「呉三桂が爲にも妻の敵緑子の敵」國「ヲ、それ／＼孰れ

諜―謀の誤か

五臓―心、肝、腎、肺、脾

計尤候。又某が諜、斯の如く折籠二三千合も拵、樣々の菓子餉、酒肴したゝめ、各是に鴆毒を入、陣屋に貯へ竝べ置、陣所近く敵を引受け、戰ひ負たる躰にして、十里計引取るべし。韃靼が例の長追、勝誇て陣屋に込入、此食物に眼くれ、寶の山に入たりと軍將雜兵、我先にと摑み喰はんは必諚、唇に觸ると齊しく、片端に毒血吐き、刃にちぬらずして鏖しにしてくれん」と、面々軍慮心を碎き、評義取々區々なり。國性爺打領き、「孰れも一理有計略、批判申に及ず。去ながら、國性爺が魂に徹し忘れ難きは、母が最期の一句の詞。韃靼王は汝等が母の敵、妻の敵と思ひ込ンで本望遂よ。氣を撓ませぬ其爲の自害成との詞の末、骨に泌み五臓に徹し、刹那も忘るゝ事はなし。千變萬化の謀も何かせん。只無二無三に攻入て、韃靼王李蹈天に、押竝べてむずと組、寸斷々々に刻んで捨ずんば、假令國性爺が百千萬の軍功も、君の忠も世の仁義も、母の爲には不孝の罪」と、鏡の樣成兩眼に、涙をはら〳〵と流しければ、吳三桂甘輝を始め、一座の上下諸共に　皆々袖をぞ濡しける。國「殊更女の身ながらも、古鄕を忘ぜず生國を重んじ、最期迄日本の國の恥を思はれし。我も同じく日本の產、生國は捨まじ、と彼れ見給へ、天照太神を勸請す。某匹夫より出て數ヶ所の城を攻落し、今諸侯王と成て各の傅

云は力能はざれどもの普通事は出來得ると也

りうめが原―一本りうばが原

漂ふ―逃げ迷ふ

羽ぶいて―羽音を立てて

延平王國性爺、兵を用る事掌にまはすが如く、五十余城を屠り、武威日々に熾にして、妻の女房古鄕より、栴檀皇女を供し參らせ、九仙山より吳三桂、太子を御幸なし申せば、十善天子の印綬を捧げ、永曆皇帝と號し奉り、龍馬が原に八町四方の木城をからくみ、陣幕戸幕錦の幕、陣屋の上には日本伊勢兩宮の御祓、大祓を勸請し、太子を別殿に移し參らせ、其身は中央の床几にかゝり、司馬將軍吳三桂、散騎將軍甘輝、同じく左右の床几に座し、韃靼大明分目の勝負、軍評諚取々なり。吳三桂團扇取直し、「凡そ謀計は淺きに出て深きに至るに如はなし」と竹筒一本取出し、「此筒に蜜をこめて、山蜂多く入置たり。斯の如く數千本拵、先手の雜兵に持せ、立合の軍する躰にて、筒を捨て逃退かば、貪慾熾んの韃靼勢、食物と心得拾取んは必諚。口を拔と齊しく數萬の山蜂群り出、賊兵を毒痛せしめ、漂ふ處を取て返し、八方より討取べし。是御覽候へ」と、口を拔けば數多の蜂、鳴羽ぶいてぞ出にける。吳「賊兵嘲笑ひ、淺墓成童戚しの謀計、燒捨て恥かゝせよ、と積重ねて火を放けん。其時筒の底に仕懸たる、放火の藥鳴渡り、飛散て十町四方の軍兵に、生殘る者は候まじ」と、火繩を筒に差つくると齊しく飛だる亂火の仕懸、實にも斯とぞ見えにける。五常軍甘輝、菓物入たる花折一合取出し、甘「吳三桂の奇

面頬—眞つかふに同じ

葛藷—山芋に似て大なり味甚し、所にかく

四ッ目殺、中目しちやう、せきはま、劫—皆碁の詞、はまは虜、劫は功に寄す。

泰山を挾んで云云—孟子にある句にして泰山云云

颯と、雲の梯吹切て、大將始め五百余騎、どた〳〵〳〵と落重なり、面額打割る、天窓を碎く。泣つ喚いて彌が上、谷をも埋む計なり。呉三桂鄭芝龍「得たりかしこし心地よし」と、大石大木當るを幸、投かけ〳〵打つくれば、一騎も殘らず刹那が中、人の鮨とぞ成りにける。中にも大將梅勒王、岩根を傳ひ葛を手繰り這登れば、呉三桂遊仙の碁盤引提げ、呉「こりや此碁盤は、葛藷で練て石より堅く、苦ふて口に合ず共一口喰ふか。己れが一目目を持て御無用の碁の相手、碁勢を見よ」と、頭を出せば丁ど打、面を出せばはたと打、打付〳〵腦も鉢も打碎かれ、微塵に成てぞ失せにける。鄭「ヲヽ〳〵本望々々。本朝にても斯る例は、先例吉野の碁盤忠信。それは榧の木是は葛藷の九仙山。先手が味方へ廻りくる、四ッ目殺に中手を入て、しちやうに懸て打切て、攻手搦手斷切て、手詰のせきを勝軍、敵のはまを拾ひ上、國も御代も打かへで、手を盡したる劫も有。忠義の道は先つ斷う〳〵、道は斷うよ」と打連れて、福州の城にぞ入にける。

第五

泰山を挾んで北海をこゆる事は能はず。王の王たらざるは、能はざるにはあらずとかや。

福壽海云々―法華經普門品に慈眼視衆生福壽海無量とあり

葛城の久米―役小角神をして御嶽と葛城山に岩橋を造らせたる故事、一言主神形醜しとして夜渡したり（水鏡）

必諚―必定

千騎にて追駈る。年寄骨に力身を出し、踏留て命限り、防ぎ支へんとはやれ共、宮の御上危し〳〵。それへ何卒退たいが、此山不案内、谷を越す道は有まいか」呉「いや〳〵此山廻れば六十里。谷深ふて底知れず。是へも呼れず其處へも越されず。エヽ如何せん何とかせん」と、虚空を拜し、「只今奇瑞を現じ給ふ、御先祖高祖皇帝、青田の劉伯溫、神仙微妙の力を合せ、非常の危難を救ひ給へ」と、太子諸共一心不亂に祈誓有。姫宮小睦も手を合せ、妙「南無日本住吉大明神、福壽海無量」と丹精無二の心ざし、天も感應地も納受、洞口より一筋の雲無心にしてたな引ば、天の雲梯鵲の渡せる橋や、葛城の久米の岩橋夜るならで、夢路を辿る如くにて、渡る共なく行共なく、向ふの峰に登り付、足もわぢ〳〵慄ひけり。程なく賊兵雲霞の如くどつと駈寄せ、賊「あれ〳〵太子呉三桂も見へたるは、思ひも寄らぬ拾ひ物。鰯網で鯨を取とは此事。的に成たる奴原、やれ弓よ鐵炮よ。打取れ射取れ」とひしめきける。梅勒王下知をなし、「やれ待て〳〵、後は廣し退き場は有、弓鐵炮は叶ふまじ。こりや見よ遂に見ぬ雲梯、必諚國性爺奴が日本流の算盤橋、疊橋なんどいふ物ならん。敵に喰物あてがふは愚の軍法。續けや者共、渡れや渡れ」と五百余騎、押合詰合我先にと、ゑい〳〵聲をかけ梯の、中渡ると見えけるが、山風谷風颯々

思ひにて―一本思ひでに

「吳三桂〳〵」と召さるゝ御聲おとなしく、雪の深山に鶯の、初音を聞し思ひにて、「あいあい〳〵」と頭を下、天を拜し地を拜し、嬉しさ足も定まらず、二度夢の心地せり。御前に手を束ね、吳「古への鄭芝龍が一子國性爺、日本より渡つて、味方の義兵を起すとは音にこそ承れ。春秋五年の軍功明かに、大明半國は取返し候へば、國性爺に案内して、君是にまします旨を、告知せ度候」と、中も敢ぬに、遙の谷の向ふより、「なふ〳〵それ成は、司馬將軍吳三桂にてはなきか。吳三桂〳〵」と呼はる方を能々見て、吳「御身は昔の鄭芝龍か」鄭「是は〳〵吳三桂、命あれば珍しや。一子國性爺が古鄉の妻、栴檀皇女を御供せし」と招きあへば姬宮も、「懷しの吳三桂、お事が妻の柳歌君、命懸ての忠節にて、浮世を渡る浮れ舟、日本へ吹流され、一官親子夫婦の情、不思議に再び逢事よ。柳歌君は何國にぞ。緣兒は何と成けるぞ。早ふ逢たい逢せて給べ」と、焦れ給ふぞ道理成。吳「されば其時の深手にて、我妻は空しく成、后も敵の鐵炮に、命を落し給ひしゆへ、胎内を斷破り、我子を害し敵を欺むき、太子は山中にて安々育て參らせし。はや七歲の生先は、是に渡らせ給ふぞ」と、語るにつけて姬宮も、「わつ」と計にどうど伏し、人目も別ぬ御歎き、思遣られて悼はしし。一官麓を見返つて、「あれ〳〵梅勒王奴が姬宮を見付、數

月雖が誠よりしぐれそめけん(續後拾遺集)

付城—出城

鏡水—水鏡に映して見上となり

智見—悟開いた目

上十五—上弦

下十五—下弦

釣針—弦月に似たれば云

弓の影—弓張月といふより

に降積り、塀も櫓も埋れて、雪の眺は面白や」其外みん州けん州諸國の府、三十八ヶ所切取て、太子の御幸を待顔に、所々に付城築き、兵糧軍兵込置て、威勢は天の氣に顯れ、手に取る樣にぞ見えにける。呉三桂悅喜の餘り。身をも人をも打忘れ、太子を抱き奉り、城有山へと走り行く。二人の老翁引留め、「愚なり〱。目擊一瞬に見ゆるといへ共、各百里を隔たり。汝此山に入て一時と思ふ共、五年の春秋を送り、四年に四季の合戰を見たるとはよも知らじ。斯いふ中にも立月日。太子の成長汝が身の、面影を能く水鏡、水淸ければ影淸し。汝忠有誠有、心の鏡に移り來る。我は先祖高皇帝」劉「我は靑田劉伯溫」二人「住家は月の中に立、桂の裏葉吹返し」劉「智見の目には上十五」高「下十五夜と見つれ共」劉「衆生は心亂れ碁の、石とや嘸な見るらん」高謠「又水中の遊魚は」劉「釣針と疑へり」高謠「雲上の飛鳥は」劉「弓の影共驚けり」高謠「一輪も下らず」劉「萬水迚も上らねば」二人「滿ては缺る影あれば、缺ても滿る月を見よ。暫しが程の雲隱れ、遂には晴て天照す、日の本和國の神力にて、太子の位は早出る日」と、宣ふ御聲は松吹く嵐、佛計は松立山の、峯の嵐に吹隱れてぞ失せ給ふ。茫然として呉三桂、夢かと思へばまどろまず。實も五年の月日を經たる印にや、我顏には髭伸たり。太子の尊容時の間に、御背丈も立伸て、早七歲の御物ごし、

關吹き越ゆる—旅人の袂涼しく成にけり關吹越ゆる須磨の浦風（續古今集）

ヲヽ—かけ聲と負ふにかく

栗殻—義仲の倶利伽羅峠にて平家を追落す事　坂落—鵯越の逆落

楚人の一炬—楚人一炬可憐焦土（阿房宮賦）

僞のなき世なりけり—僞のなき世なりけり神無

者を敲き伏せ、逃るを摑んで人礫、左龍虎右龍虎討取て、難なく過る月日の關や、碁盤の上も」二人「關吹越ゆる秋の風、霧霽わたる山城は、韃靼の軍將海利王が楯籠り、前は巖壁後は海、要害賴みの油斷を見て、秋の夜討の國性爺、乘たる駒の轡虫、月松虫の聲澄渡り、しん〳〵りん〳〵しづ〳〵〳〵と、堀際近く攻寄て、百千の高提灯一度にぱつと立たるは、千世界の千日月一度に見るが如くにて、城の兵寢耳に水の、〻あはて騷いで甲を脚當、鎧は逆ま馬を背中に、ヲヽ〳〵〳〵〳〵、大手の門を押開き、切て出れば寄手の勢、貝鉦鳴し時の聲、大將團扇追取て、ひらり〳〵ひら〳〵ひらり三重閃かし」吳「日本流の軍の下知、攻付挫ぐは義經流、緩めて討は楠流」二人「栗殼落し坂落し、八島の浦の浦波も、爰に寄手の威勢強く、揉立々々三重切立られ、城中指てぞ引たりける。「時分はよし」と夕暗に、日本祕密のほうろく火矢、打て放つ其響き、須彌も崩るゝ計なり。楯も櫓も海士の焚く、鹽の煙か炭竈か。火焰は秋の村紅葉、楚人の一炬に焦土となんぬ、咸陽宮共謂つべし。國性爺勝時の駒の手綱を搔繰て、輪乘をかけてくる〳〵〳〵、くるり〳〵と乘廻し、巡る月日に僞りの無き世なりけり神無月、時雨て過る岡の邊に、棟門高き城廓こそ、是も國性爺が切取りし北州の長樂城。軒の甍は爛々と、玉を彩る初霰、霙交りの夕嵐、吹來る上

鳥の空音—清少納言の歌をとれり

文治の昔—謡曲安宅を取れり

到着—將士の到着を記録せる文書

それ倩々惟れば—辨慶勸進帳の作りかへ

御名おば—御名をば

褒似—周の幽王の寵妃

翁「鳥の空音は」呉「は」翁「か」二人「る共、ゆるす方なき威勢に、劒は夏野の薄を亂し、火縄は澤の螢火と、要害巖しき關の戸は、鳥も通はぬ計なり」呉「日本育ちの國性爺、譬へば此關鐵石にて堅めたりとも、押破て通らん事、童が障子一重破るよりも易けれ共、軍中の目覺しに、我本國文治の昔、武藏坊辨慶が、安宅の關守欺きし、例しを引や梓弓、軍兵に目配せし、國「そも／＼是は驪山の麓、楊貴妃の御廟所。大眞殿再興勸進の大行者、勸進帳を聽聞し、勸めに入れや關守」と、軍勢の著到一卷取出し、味方の祈禱敵調伏と觀念し、高らかにこそ讀上けれ。「それ倩々おもんみれば、韃靼の秋の月は、無殘の雲に隱れ、生死不定の永き夢、驚かすべき勢もなし。爰にそのかみ、帝おはします。御名おば玄宗皇帝と名付奉り、寵愛の玉妃に別れ、戀慕やみがたく、涕泣眼にあらく、涙玉を貫く、思ひを善路に飜して大眞殿を建立す。箇程の靈場の、絶なん事を悲しみて、臨節の褒似が末葉諸國を勸進す。一戰合戰の輩は、敵方にては首を矛に貫かれ、味方にては合戰勝利の勝時揚げん。歸命稽首敬て申」と、天も響けと讀上たり」翁「關の大將右龍虎左龍虎、「すは國性爺、飛で火に入夏の虫」呉「梢に蟬の喚いて懸れば」翁「につこと笑ひ國「樊噲流は珍らしからず。門を破るは日本の朝比奈流を見よや」迚、貫の木逆茂木押破り、向ふ

斧の柄─昔の王質山にて仙人の圍碁を見て斧を取らんとするにその柄朽ちたりと也暫くの間に數多の年を經し事（述異記）

柳櫻をこきまぜ─見渡せば柳櫻をこぎまぜて都ぞ春の錦なりける（古今集）

に夜る晝も、別で昔の斧の柄も、自然とや朽ぬべし」翁重てのたまはく、「今日本より國性爺といふ勇將渡て、大明の味方と成、只今軍眞最中。是より其間遙かなれ共、一心の碁情眼力に顯然と、合戰の有樣目前に見すべし」と、のたまふ聲も山風も、碁石の音にぞ響きける。吳三桂はつと心付、「實に〳〵爰は九仙山」此九仙山と申は、四百余州を目の下に、峰もかすかにおぼろ〳〵と、雲かと見れば一霞、麓に落る春風の、風のまにまに吹霽す。空は彌生の中旬なる、平家柳櫻をこきまぜて、錦に包む城廓の、顯然とこそ見えにけれ。何國の誰が籠りしぞ。門高く堀深く、柴々に垣楯築き、要害嶮岨を帶たりし、こう〳〵たる高櫓、揚る雲雀や歸る鴈、花と見つゝも色々の、籏に翼や休むらむ。長閑に照す朝日影、月影打て付たるは、日の本の美名を顯はし、延平王國性爺が乘取たる石頭城。いはねどそれと白眞弓、鐵炮高麗矛鑓長刀、大籏小籏靡き合、吹拔のぼり馬印、翩飜とひる返り、天も五色に染なせば、藤も躑躅も山吹も、共に映ろふ色見えて春の日數は盤上の、石の數とぞ積りける。二人「若葉が末の深綠、晴行雲の絕間より、是南京の雲門闕と、名乘て出る杜鵑、幔幕高き卯の花垣、今年も夏の中旬なり」吳舞詞「方三十里に逆茂木引、闕の大將左龍虎右龍虎三千余騎」翁「兜の星を輝かし」吳「太皷を打て亂調し」

崔嵬―石を戴く山

中間禪―欲を離れし境界

琴詩酒―琴詩酒友皆抛レ我雪月花時獨憶レ君（白氏文集）

曇なく―一本曇もなく

大地世界云々―「蒼天如圓蓋、地方如碁局」（晉書天文志）

峨と聳へし崔嵬の、山路に疲れ行末は、名にのみ聞しこう化府の、九仙山に攀登り、暫し佇む松風も、馴てや友と住馴れし、蓬眉白髮の老翁二人、石上に碁盤を据へ、黑白二つの石の數、三百六十一目に、離々たる馬目、連々たる鴈行、傍目もふらぬ碁の勝負。心は蜘蛛の空に繫れる糸に似て、身は空蟬の枯枝と成、浮世を離れし手談の技、吳「中間禪の高臺か」と、太子を石段に移し參らせ、枯木の株に頤持せ、見惚る我も諸共に、餘念の塵をや拂ふらむ。吳三桂輿に乘じ、「なふ〳〵老人に物申さん。市中を離れし座隱の遊び面白し。去ながら、琴詩酒の三ツの友を離れ、碁を打て勝負を諍ひ給ふ事、別に樂む所ばし候か」翁さして應なく、「碁盤と見れば碁盤にて、碁石と見る目は碁石なり。大地世界を以て、一面の碁盤となすといへる本文有。謠心上の須彌山是に有。大明一國の山河草木、今爰より見るになどか曇らん。一角に九十目、四方に四季の九十日、合せて三百六十目、一目に一日を送ると知らぬ愚かさよ」吳「面白し〳〵。天地一躰の樂に二人對ふは何事ぞ」翁「陰陽二つあらざれば萬物調ふ事もなし」吳「勝負はさて如何に」翁「人間の吉凶は時の運にあらずや」吳「扨白黑は」翁「夜る晝」吳「手談は如何に」翁「軍の法」吳「切て抑へて跳かけて」二人「軍は花の亂れ碁や。飛かふ烏、群居る鷺と譬へしも、白き黑き

陶朱公—范蠡

鑾輿屬車—天子の御こしと後につく車

ぬゑこ鳥—鵺子と書く、梟の類

舟より上り給ひ、梅「誠にお兒の御情、座したる樣成舟の中、かゝる波濤を時の間に、渡し給へる御方は、如何成人にて有やらん」兒「人がましやな名もなき者、我日の本に昔より、住馴れたれば住吉の、大かい童子と申者。暇申て此童は、ウタイ住吉に立歸り、歸朝を待申さん」と、夕波の汀なる、蜑の小舟を漕戻し、追風に任せつゝ、沖の方に出にけりや。沖の方へぞ 三重

九仙山

サシ傳へ聞、陶朱公は勾踐を伴ひ、會稽山に籠居て、種々の智略を廻らし、遂に吳王を滅して、勾踐の本意を達すとかや。クセ昔を問へば遠き世の、例しも吳三桂が、今身の上に白雲の、山より山に身を隱し、太子を育て奉る。移れば變る苫筵、宮前の楊柳寺前の花、峰の古木に立かはり、夕の霧の間には、我身を以て褥とし、ウタイ鑾輿屬車の輦も、蔦の錦に織かへて、朝の露のほとりには、谷の猿の肩に駕し、早二歳は昨日今日、暮るも山明るも山、我名も君が顏ばせも、人目を包む雲水に、虹の架橋途絶して、深山烏やぬゑこ鳥、梢に來鳴く鸚鵡さへ、昔をまねぶ聲はなし。水遠くして山長く、根笹茅原槇檜原、峨

供の遊戲、はたきも手玉
ちかの浦—筑前にあり近きにかく
二千里云々—三五夜中新月色二千里外古人心（白氏文集）
雲の峯—山の如く見ゆる雲
岩船—丈夫な船
松江—鱸の產地、江蘇省松江府にあり

風に、其方の方を見給へば、磯に手繰の厨川、波に搖るゝ釣舟に、鬢づら結ふたる童子一人、網は下さで釣竿の、いとゆう〳〵と眠來る。椙「なふ〳〵お兒、我々は唐土へ渡る者。能からん方迄乘て給べ」とぞ仰ける。兒「あら何共なや。一人は唐土一人は筑紫人。女性の身にて唐土へ渡るとは、戀しき人の有やらん。二千里の外古人の心、三五夜中にあらね共、影を漏さぬ月の舟、疾々召され候へ」と、ハヤ指寄する水馴棹、二人「不思議の縁」と打乘て、焦れ行衞も白波に、凪て長閑き海の面、椙「續きて見ゆる八十島を、異國の人の家產に、敎てたばせ給へとよ」童子舳板に立上り、海原遙に指さして、「いかに旅人聞給へ。先彼に續くは鬼界十二の島、五島七島中にも彼の白き鳥の、多く群れ居るは白石が島、此方に煙の立登るは硫黄が島。扨又南に高く霞かゝるはちどの島なり。あれは往古天照神の、住吉の明神に、笛吹かせ舞曲を奏し、二神の遊び給ひし所とて、二神島とは申なり。なふ唐土人」とぞ語らるゝ。語る間に敷島の、はや秋津洲の地を離れ、それより先の島々の、島かと見れば雲の峯、山かと見れば空の海、風はなけれど蜑小舟、天の鳥舟岩舟の、空走り行ごとくにて、山なき西に山見ゆる、月に先立日につれて、日の本出し秋風の、立もかはらず其儘の、まだ秋風に鱸釣る、松江の港に著にけり。人々

唐子髷云々—皇女と小睦の髮容即ち唐山日本の風俗を混じていへり
枕を疊む云々—船中の疊枕に盧生の夢を見、賢長坊の杖によせて千里をたゝむといへり（難波土産）
二葉に見せて云云—兩方にと梅檀は二葉より芳しと云諺とをよせたり、
大村—肥前にあり、多にかく
廿五筋—廿五歳にかく
すがゞきて—彈ずる事、唐詩の二十五絃彈夜月の句によりて文をなせる也
彈き石投子—子

三重　なりふりや。

栴檀女道行

唐子髷には薩摩櫛、島田髷には唐櫛と、大和唐土打まぜて、さしも習はね旅立や、舟と陸とを行道は、笠捨られず懷中に、枕をたゝむ夢たゝむ、千里を胸にたゝみこむ、女心の強弓も、男ゆへにぞ引れゆく。我は古鄕を出る旅、君は古鄕へ戻る旅、二葉に見せて栴檀女、小睦がいさめ力にて、大明國へと思立、心の内こそはるかなれ。親と妻とを持し身は、何か歎きは有明の、月さへ同じ月なれど、なふ二人見馴し閨の中、名殘數々大村の、浦の濱風一村雨は、さら〳〵と霽ても晴れぬ我涙、袖に包みて袂に拭ふ、鏡の宮に影とめて、泣ぬと人や見るめの浦、振さけ見れば久方の　日も行末の空遠く、歸るさ何時ぞ天津鴈、誘へや誘へ我夫も、廿五筋の琴の糸、結び契りし年の數、いざすががきて箱崎の、松とし聞かば我も急がん。磯部傳ひに寄藻搔く、海士の子共の打群て、彈き石投子又長か半、三つ四つ五つ算へては、稚遊びも睦じく、七瀬の淀に行水も、昔の影や隱ん坊、鬼の來ぬ間と謠ひしも、濡て乾かぬ旅衣、唐船を松浦川、港もちかの浦

合ふ術

青苔衣を云々—此所謠曲白樂天の句を引けり

足取手の内四寸八寸身の開き、踏込で打入身の木刀、古木の松の片枝を、ずつぱと切て落せしは、今牛若共謂つべし。何時の間にか栴檀女、森の影より走出、「ナフ〳〵小睦殿、毎日々々時を違へず變つた風俗。今日といふ今日跡を慕ふて見付しが、誰に習ふて此兵法、器用な事や」と宣へば、小「イヤ師匠はなけれど夫の打太刀、習はふより慣ての事。唐土の便心元なく、お迎ひ舟は參らず共、お供して渡らん、と此明神へ吉凶を祈候へば、是見給へ。木刀にて此松の木の、眞劒の如く切れたるは、神納受の印と申、商船の便船時節も能候」と申上れば、栴「それは嬉し頼もしし。片時も早く戻して給べ」と、御悦びは淺からず。小「御心安く思召せ。惣じて此住吉と申は、船路を守りの御神にて、神功皇后と申帝、新羅退治の御時、汐干玉汐滿玉を以御船を守護し、舟玉神共申なり。昔時唐土の白樂天といひし人、日本の智慧を圖らんと、此秋津洲に渡り給ひ、目前の景色を取敢ず、「青苔衣を帶て巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰をめぐる」と詠じ給へば、大明神賤しき釣の翁と現じ、一首の歌の御答へ、「苔衣著たる巖はさもなくて、きぬ〴〵山の帶をするかな」と、詠じ給ひし御歌に、ぎつと詰つて樂天は、爰より本土に歸るとかや。國を守りの御神の、其御歌は苔衣、我身に受て旅衣、いざ」迚二人打連れて、舟路遙けく

玉有る淵云々―文選の句

松浦潟―待つにかく

ちくら者―何處へもつかぬ風來者の意

翡翠の云々―かはせみの羽の如き青々とした髮の多い事

充滿其願―「充滿其願如淸凉池」と盂蘭盆經に出でたり

居合―坐ながら長刀を拔きて立

じと、國性爺は廿輝を恥、廿輝は又國性爺に、恥て萎るゝ顔かくす。亡骸おさむ道の邊に、出陣の門出と、生死二つを一道の、母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鐵棒、討ば勝攻れば取、末代不思議の智仁の勇士。玉有淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず。斯る勇者の出生す、國々たり君々たる、日本の麒麟是成は、と異國に武德を照しけり。

其四

唐土の便今やと松浦潟、小睦が宿の明暮は、唐の姫宮相住を、近傍隣家も浮名立、唐と日本の汐ざかひ、ちくら者かと疑へり。夫も今は國性爺と名を改、數萬騎の大將軍と聞からに、我も心の勇み有。若衆出立に態をかへ、撫付鬢の大たぶさ、翡翠の大髻ふつさりと、禰宜の息子か膏藥賣か、女とよもや水淺黄の、股引しめて羽織著て、朱鞘木刀眞紅の下緒、花の口紅雪の白粉、菅笠深く脛高く、足元輕き濱千鳥、濱邊傳ひを日參の、印松浦の住吉や、神前にこそ著にけれ。充滿其願と祈誓をかけ、手を合すると見えけるが、閃りと拔たる居合の早業、神木の松を相手取、木刀翳し跳上つて聲をかけ、小「ゑいやつたう／＼ゑい／＼たう。ゑいやつたう」と上段下段の太刀捌き、陽炎稻妻獅子奮迅、

章甫の冠云々―殷代の冠と花の紋を縫付けたる沓(難波土産)
莫耶―干將莫耶の如き名劍
幢の旗云々―天子の御車にさし翳すもの

唐櫃の、二重の錦、羅綾の袂、緋の裝束、章甫の冠、花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶、莫耶の劍金を磨き、絹笠さつと指かくれば、十萬余騎の軍兵ども、幢の旗幡の旗、吹拔き立鉾、弓、鐵炮、鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の、二たび出たる如くなり。母は大聲高笑ひ、母「ア、嬉しや本望や。あれを見や錦祥女、御身が命を捨しゆへ、親子の本望達したり。親子と思へど天下の本望。此劍は九寸五分なれど、四百余洲を治る自害。此上に母が存命へては、始の詞虛言と成、二たび日本の國の恥を引起す」と、娘の劍を追取て、咽喉にがはと突立る。人々「是は」と立騷げば、母「ア、寄まい〱」と、はつたと睨み、「なふ甘輝、國性爺、母や娘の最期をも、必歎な悲しむな。韃靼王は面々が、母の敵妻の敵と、思へば討に力有。氣をたるませぬ母の慈悲。此遺言を忘るゝな。父一官がおはすれば、親には事を缺くまいぞ。母は死して諫めをなし、父は存らへ敎訓せば、世に不足なき大將軍、浮世の思出是迄」と、肝のたばねを一刳り切さばき、「サア錦祥女、此世に心殘らぬか」錦「何しに心殘らん」と、いへ共殘る夫婦の名殘。親子手を取引寄せて、國性爺が出立を、見上見下し嬉氣に、笑顏を娑婆の形見にて、一度に息は絕にけり。鬼を欺く國性爺、龍虎と勇む五常軍、涙に眼は暗め共、母の遺言背くまじ、妻の心を破ら

便々―無用の話して時をうつす（俚言集覧）

女房の緣といへば猶ならぬ。御邊が日本不變なれば、我は唐土稀代の甘輝、女に絆され味方する勇士にあらず。女房をさる處もなし。病死する迄便々共待れまい。追風次第早歸れ。但置土産に首を置て行きたいか」和「イヤサ日本の土産に己奴が首を」と、兩方拔んとする處を、錦祥女聲をかけ、「アヽ〳〵是なふ〳〵、病死を待迄もなし。只今流せし紅の水上を見給へ」と、衣裝の胸を押開けば、九寸五分の懷劒乳の下より肝先迄、横に縫ふて指通し、朱に染みたる其有樣、母は是はと計にて、かつぱと臥て正躰なし。和藤内も動顚し、覺悟を極し夫さへ、不覺に愕く計なり。錦祥女苦しげに、「母上は日本の國の恥を思召、殺すまいとなさるれど、我命を惜みて親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥と。斯成上は女に心ひかさるゝ、人の誹はよも有まじ。なふ甘輝殿、親兄弟の味方して、力共成て給べ、父にもかくと告てたべ。もう物云はせて下さるな。苦いわひの」と計にて、消消とこそ成にけれ。甘輝涙を押隠し、甘「ヲヽ出來いた〳〵。自害を無にはさせまい」と、和藤内が前に頭を下げ、「某が先祖は明朝の臣下、進んで味方申べき身の、女の緣に迷ひしと、俗難を憚りしに、我妻只今死を以て義を勸る上は、心潔く御味方。大將軍と仰ぎ、諸侯王に准へ、御名を改、延平王國性爺鄭成功と號し、裝束召せ奉らん」と、武運開くる

唐錦―血の涙にかけたり
錦中絶ゆる―龍田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中やたえなん（古今集）
奉つて―汝を崇めて
持てうすれば―尊敬してやれば

して所を尋ね送り還し參らせよ」錦「いや送る迄もなく、此遣水より黃河迄、よき便には白粉流し、叶はぬ知せは紅を流す約束にて、迎ひにお出有はづ。いで紅解て流さん」と、平常の一間に入にけり。母は思ひに搔暮て、思ふに違ふ世の中を、立歸りて妻や子に、何と語り聞せんと、思ひ遣る方涙の色、紅より先の唐錦。錦祥女は其隙に、瑠璃の鉢に紅解き入、「是ぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる、名殘は今ぞ」と夕波の、泉水にさら〳〵、落瀧津瀬の紅葉と、浮世の秋をせき下し、共に染めたる泡沫も、紅潛る遣水の、落て黃河の流れの末、和藤內は巖頭に、簑打被き座を占て、赤白二つの川水に、心を付て水の面、和「南無三寶紅が流るゝ。扨は望は叶はぬ。味方もせぬ甘輝奴に、母は預置れず」と、踏出す足の早瀨川、流れをとめて行先の、堀を飛越へ塀を乘越へ、籬透垣踏破り、甘輝が城の奧の庭、泉水にこそ著にけれ。「先母は安穩嬉しや」と飛上り、縛めの繩引斷り、甘輝が前に立はだかり、和「五常軍甘輝といふ髭唐人は和主よな。天にも地にも只た一人の母に繩かけたは、おのれをおのれと奉つて、味方に賴ん爲成に、持てうすれば方圖もない。味方にならぬは此大將が不足なか。第一女房の緣と云、其方から從ふ筈。サア日本不雙の和藤內が、直に賴む返答せい」と、柄に手をかけ突立たり。甘「ヲヽ

親三人―一官と先妻後妻の三人の中一官と先妻には生んで貰ひし恩あり

くはへて引ば、娘が死んと又立寄るを、口にくはへて唐猫の、塒をかゆる如くにて、母は目もくれ身も疲れ、わつと計にどうど伏し、前後不覺に見へければ、錦祥女縋付、「一生に親知らず、終に一度の孝行なく、何で恩を送らふぞ。死せて給べ母上」と、口説き歎けばわつと泣。母「なふ悲しい事いふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人、殘り二人の父母は產落した大恩有。中に一人の此母は、憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず。今爰で死なせては、日本の繼母が、三千里隔てたる唐土の繼子を惡んで、見殺しに殺せし、と我身の恥計かは、普く口々に、日本人は邪慳なり、と國の名を引出すは我日本の恥ぞかし。唐を照す日影も、日本を照す日影も、光に二つはなけれ共、日の本とは日の始、仁義五常情有、慈悲專らの神國に生を受た此母が、娘殺すを見物し、そも生て居られふか。願くは此繩が、日本の神々の注連繩と顯はれ、我を今絞殺し、屍は異國に曝す共、魂は日本に導き給へ」と聲を上、道もあり情もあり、哀も籠る口說き泣、錦祥女は縋付、母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して、不覺涙にくれけるが、稍有て甘輝席を打て、「ハツア是非もなし力なし。母の承引なき上は、今日より和藤內とは敵對。老母を是に留め置、人質と思はれんも本意ならず。輿車用意

朝比奈—三郎義秀

小僕下劣の身を以て、智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け、大明の世に靏へさんと此土に渡る。彼が討手誰ならんと、數千人の諸侯の中より、此甘輝を選出され、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を給はる。和藤内を我妻の兄弟と、今聞迄は夢にも知らず。彼奴日本に傳へ聞、楠木とやらんが肝膽を出、朝比奈、辨慶とやらんが勇力有共、我又孔明が腸に分入、樊噲、項羽が骨髓をかつて、一戰に追て追捲り、和藤内が月代首提げて來らん、と廣言吐し某が、一太刀も合せず、矢の一本も放さず、ぬく〱と味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に聞怖する者でなし、女に絆され緣に引かれ、腰が拔て弓矢の義を忘れし、と韃靼人の雜口にかけられんは必定。然れば子孫末孫の恥辱遁れがたし。恩愛不便の妻を害し、女の緣にひかれざる、義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せん爲。ヤイ錦祥女、留むる母の詞には慈悲心こもり、殺す夫の劍の先には忠孝こもる。親の慈悲と忠孝に命を捨よ女房」と、理非を飾らぬ勇士の詞、錦「チヽ聞わけた。身に叶ふた忠孝、親にもらふた此躰、孝行の爲捨るは惜い共思はぬ」と、母を押退け突と寄り、胸押明れば引寄せて、見る目危き氷の劍、母「なふ悲しや」と駈隔て、押分けんにも詮方なく、のけんとするに手は叶はず、娘の袖に喰付て引退くれば夫が寄る。夫の袖を

お恨とは云々ー否といはれても恨みぬと也

く、韃靼の恩賞被り、月日を送る折から望む所の御頼、早速味方と申度が、少存る旨あれば、急にあつ共申されず。とつくと思案しお返事を」と、いはせも果ず、母「アヽウそりや御卑怯な詞が違ふ。是程の一大事、口より出せば世間ぞや。思案の間に漏れ聞えて、不覺を取悔んでも還らず。お恨とは思ふまじ。成れ成らざれ、お返事をサア只今」と責つくれば、甘「ムウ急に返答聞たくば易い事〳〵。如何にも五常軍甘輝、和藤内が味方なり」と、いふより早く錦祥女が、胸元取て引寄せ、劔引拔て咽笛に指當る。老母周章て飛懸り、二人が中へ割て入、持たる手を踏放し、娘を背中に押遣〳〵、仰向に重臥大聲上て、母「是情なや何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺殺すが唐土の習ひか。心に染まぬ無心を聞も、女房の縁有ゆへと心腹が立てのことか。但は狂氣か。偶々始て來て見たる、母親の目の前で殺そうとする無法人、日比が思ひ遣られた。味方をせずばせぬ迄よ。今迄と違ふて親の有大事の娘。これ怖い事はない、母にしつかと取付や」と、隔ての垣と身を捨て、圍ひ歎けば錦祥女、夫の心は知らね共、母の情の有難さ。錦「怪我遊ばすな」と計にて、共に涙に咽びけり。甘輝飛退つて、「チヽ御不審御尤。全く某無法にあらず、狂氣にも候はず。昨日韃靼王より某を召、此比日本より和藤内といふゑせ者、

優曇華—珍らしい意
心置るな—遠慮せらるな

其甲斐もなき縛めは、時代の掟是非もなし。それ女房、お手が痛むか氣を付よ。優曇華の客人いさゝか疎略を存ぜず。何事成共此甘輝が、身に相應の事ならば、必心置るな」と、世に睦しく待遇せば、老母顔色打解て、「ヲヽ、頼もしい忝ない。其詞を聞からは、何しに心置べきぞ。頼入度大事、密に語申たし。是へ〳〵」と小聲に成、「なふ我々此度もろこしへ渡りし事、娘ゆかしい計でなし。去年の初冬、肥前の國松浦が磯といふ處へ、大明の帝の御妹栴檀皇女、小船に召され吹流され、御代を韃靼に奪はれし御物語、聞と齊しく、父は素より明朝の陪臣。我子の和藤内と申者、賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を亡し、昔の御代に飜へし、姫宮を帝位に付んと先日本に遺し置、親子三人此唐土へは來たれ共、淺ましや草木迄皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に心ざす者一人も候はず。和藤内が片腕の、味方に頼むは甘輝殿、力を添へて下されかし。偏に頼み參らする。是が拜む心ぞ」と、額を膝に押下げ〳〵、只一筋の心ざし、思込ふでぞ見へにける。甘輝大きに驚き、「ムウ扨は聞及ぶ日本の和藤内と申は、此錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。ムヽ武勇の程唐土迄も隱れなく、頼もしき思立、尤斯こそ有べけれ。我等も先祖は大明の臣下。帝ほろび給ひてより、頼むべき主君な

むすび―組合ふ事より相撲取と見立たり
きれ物―品切
絹笠―絹張の傘

ず。皆打寄て詮義致せば、日本では相撲取をむすびと申げな。それゆへ方々尋ても、折しも悪ふお歯に合そな相撲取がきれ物成」とぞ申ける。表に轟く馬車、兵「御歸館」と呼はつて、唐櫃先に舁入させ、優々たる絹笠も、さすが五常軍甘輝と名に負ふ其物躰。錦祥女出迎ひ、錦「何とて早き御退出。御前は何と候ぞや」甘「されば〱、韃靼大王叡感深く過分の御加增、十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠、装束賜り大役仰付らるゝ。家の面目これに過ず」と有ければ、錦「それはお手柄、目出たい〱。なふ家の吉事はかさ成物。日來戀しい床しいと、申暮せし父上、日本にて設け給ひし母兄弟、頼度事有とて門外迄來り給へ共、お留守といひ、嚴しき國の掟を憚り、男子は皆歸し、母上計を留置しが、猶も上の聞えを恐れ、繩をかけて、あれ彼の奥の亭にて御馳走は申せ共、胎内借らぬ母上、繩かけし御心底、悲さよ」とぞ語りける。甘「ムウ繩かけしとはよい了簡。上へ聞えて云分有。随分饗應せ。いざ先我も對面せん。案内申せ」といふ聲の、漏聞えてや妻戸の内、母「なふ錦祥女、甘輝殿のお歸りか。爰は余り高上り、妾それへ」と立出る、形はいとゞ老木の松のしめからまれし藤かづら、起居苦しき其風情、甘輝見る目も悼はしく、甘「誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ、

かはらぬ故兩譯はいらぬと也

大きに和かな—例の滑稽

龍眼肉—熱帶に產する圓形の果

こくせう—味噌汁にて煮つめたもの

す有樣は、天上の榮花共、又高手小手の縛は、十惡五逆の科人共、見る目いぶせく痛はしく、樣々に宮仕へ、誠の母と勞りし、心の内こそ殊勝なれ。腰本の侍女共寄集り、甲「何と日本の女子見てか。目も鼻も變らぬが、可笑い髮の結樣、變つた衣裳の縫樣、若い女子も彼であらふ。裾も褄もほら〱ほら〱と、ばつと風が吹たら、太股迄見へそうな。ア、恥しい事じや有まいか」乙「いや〱迚も女子に生れるなら、此方や日本の女子に成たい。何故といや、日本は大きに和ぐ大和の國といふげな。何ンと女子の爲には、大きに和かな、好もしい國じやなひかいの。ホウ有難い國じやの」と、眼を細めてぞ領きける。錦祥女立出「是々面白そうに何いふぞ。彼方は自とは產さぬ中の母上なれば、孝行といひ義理といひ、誠の母より重けれ共、國の掟詮方なく、縛り搦めるおいとしさ。韃靼王へ漏聞え、良人に咎めあらふかと、宥免も成がたく、難義といふは我身一つ。孰れも賴む。食物も違ふとや。お口に合ふ物伺ふて進ぜてくれよ」と宣へば、侍「イヤ申如才もなふお料理も念入、龍眼肉のお食、お汁は家鴨の油揚、豚のこくせう、羊の濱燒、牛の蒲鉾、樣々にして上ても、「なふ忌々しい、其樣物嫌々。縛られて手も叶はぬ。ついむすびをしてくれ」と御意なさるゝ。其むすびといふ喰物は、何の事やらどうも合點參ら

菩提門云々―佛の道に赴く意にて成就に譬へ無明の闇を不成就にたとふ

雪の梅云々―錦祥女の孝行に譬ふ、又錦女のやさしき詞も母に

親子が顔を見合せて、笑顔をつくる日本の、人の育ちぞ健氣成。錦祥女も堪へかぬる、歎きの色を押包み、錦「何事も時世にて、國の掟は是非もなし。母御は自が預る上は氣遣なし。何事か存ぜね共、御願ひの一通りお物語承り、夫甘輝に云聞せ、何卒叶へ參らせん。扨此城の廻に鑿たる堀の水上は、自が化粧殿の、庭より落る遣水の、末は黄河の河水と流れ入ル水筋なり。妻の甘輝が聞入て御願ひ成就せば、白粉解て流すべし。川水白く流るゝは目出度印と思召、勇んで城へ入給へ。又御願ひ叶はずば、紅をといて流すべし。川水赤く流るゝは、叶はぬ左右と思召、母御前を請取に門外迄出給へ。善惡二ツは白妙と、唐紅の川水に、心を付て御覽ぜよ。さらば〳〵」と夕月に、門の戸さつと押開き、伴ふ母は生死の界、菩提門を引かへて、是は浮世の無明門、貫の木てうど下す音、錦祥女は目も暮て、弱きは唐土女の風、和藤内も一官も、泣ぬが日本武士の風、大手の門のたて明に、石火矢打は韃靼風、一つに響く石火矢の、音に聞さへ三重遙成。夢も通はぬ唐土に、通へば通ふ親子の緣、恩愛の綱結び合、結ぶ餘りの縛繩、かゝる例は異國にも、まれに咲出す雪の梅、色音は同じ鶯の、聲にぞ通事入らざりし。錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し、二重の褥三重の蒲團、山海の珍菓名酒を以て、重んじ待遇

きこらい云々—例の意味なし強ていはゞ歸去來と觀音薩埵の轉倒ならん
此はゞ—一本此婆々

繩かゝられ—一本繩をかかれ

どんな事—鈍な事

浮目—憂目
械杻—手足を束縛する刑具

り。され共是は各別。こりや兵共、如何せん」と有ければ。了簡もなき唐人共、「いやいや思ひも寄らぬ事、成らぬ〳〵。歸去來〳〵、びんくはんたさつ、ぶおん〳〵」と又鐵炮を差向へば、人々案に相違して、惘れ果て見へけるが、母進み出、「尤々、大王より掟とあれば力なし。去ながら、年寄た此はゞに何の要心入べきぞ。彼の姫に只一言物語する計。妾一人通して給べ。誠浮世の情ぞ」と、手を合ても聞入ず。兵「否々女迚宥免せよとの仰はなし。然らば我々了簡して、城内に有中は、繩をかけて縛り置、繩付にして通せば、韃靼王へ聞えても、主君の云譯我等が身晴れ。急いで繩かゝれよ。夫が否なら、歸去來〳〵びんくはんたさつ、ぶおん〳〵」と睨つくる。和藤内眼をくはつと瞋らし、「ヤイ毛唐人、己奴等が耳は何處に付て何と聞。忝くも鄭芝龍一官が女房、身が母、姫の爲にも母同前。犬猫を飼ふ樣に繩付て通さんとは、日本人はどんな事聞て居ぬ。小むつかしい城内入らひでも大事ない。サア御座れ」と引立る。母振放し、「それ〳〵今云しを忘れしか。大事を人に賴む身は、幾度か樣々の浮目も有恥も有。繩はおろか、械杻にかゝつても、願ひさへ叶はゞ瓦に金を換るが如し。小國なれ共日本は男も女も義は捨ず。繩懸給へ一官殿」と、恥しめられて力なく、用心の腰繩取出し、高手小手に縛上、

我影にも云々—錦祥女父の顔が自分の顔にもよく似て額の黒子迄父君にある上は疑なしと也

錦「なふ其詞がはや證據」と、肌に放さぬ姿繪を高欄に押開き、柄付の鏡取出し、月に映ふ父の顔、鏡の面に近々と、寫し取て引比べ、引合せて能々見れば、繪にとゞめしは古の、顔も艶有翠の鬢、鏡は今の老窶れ、頭の雪とかはれ共、かはらで殘る面影の、目元口元其儘に、我影にもさも似たり。爺方讓りの額の痕、親子の印疑なし。錦「扨は誠の父上か。なふ懷しや戀しや。母は冥途の苔の下、日本とやらんに父上有と計にて、便を聞ん知邊もなく、東の果と聞からに、明れば朝日を父ぞと拜み、暮れば世界の圖を開き、是は唐土是は日本、父は爰に在すよ、と繪圖では近い樣なれど、三千余里の彼方とや。此世の對面思ひ斷へ、若や冥途で逢ふ事もと、死なぬ先から來世を待、歎き暮し泣明し、廿年の夜る晝は、我身さへ辛かりし。能ふ生て居て下さつて、父を拜む有難や」と、聲も惜まぬ嬉し泣。一官は咽返り、樓門に縋付、見上れば見下して、心餘りて詞なく、盡ぬ涙ぞ哀なる。武勇に逸る和藤内、母諸共に伏沈めば、心なき兵も、溢す涙に鐵炮の、火繩も濕るばかりなり。稍有て一官、「我々是へ來る事、聟の甘輝を密に賴度一大事。先先御身に語るべし。門開かせて城内へ入てたべ」錦「なふ仰なく共是へと申筈なれ共、此國未だ軍半、韃靼王の掟にて、親類縁者たり共、他國者は城内へ、堅く禁制との掟な

鐵炮放すな」と、心遣ぞ道理なる。一官も始て見る娘の貌も朧月、涙に曇る聲を上、「粗忽の中事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座に空しく成、父は逆鱗蒙り、日本へ身退く其時は二歳にて、親子名殘の浮別れ、辨へなく共乳母が噂、物語にも聞つらん。我こそ父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年を經て、今の名は老一官。日本で設けし弟は此男、是成は今の母。私に語り頼度事有て、成果し此姿、恥を包まず來りしぞ。門を開かせたべかし」と、染々口說く詞の末、思ひ當りて錦祥女、「扨は父か」と飛下て、縋付たや顏見たや。心は千々に亂るれど、さすが一城の主甘輝が妻。下々の見る處、涙を押へて、錦「一々覺え有事ながら、證據なくては有論なり。自が父といふ證據あらば聞まほし」と、いふより兵口々に、「證據〳〵、證據を出せ〳〵」一「ハテ親子といふより別にかはつた證據もなし」兵「そりや曲者よ」と、鐵炮の筒先一度にはらりと突懸る。和藤內斷隔て、「無用の鐵炮、ぽん共いはせば撫切にしてくれん」兵「イヤしやつめ共に遁すな」と、火蓋を切て取圍み、「證據〳〵」と責かけて、既に危く見へけるが、一官兩手を上て、「ア、是々、證據は其方に有筈。一歲唐土を立退く時、成人の後形見にせよ、と我形を繪に寫し、乳母に預置つるが、老の姿は變る共、面影殘る繪に合せ、疑ひを晴れ給へ」

推參—無體
打みしやげ—打ちつぶせ
我妻—我夫

と制すれば、和藤内門外に大音上、「五常軍甘輝公直談申度事有。開門々々」と敲きしは、城中響く計なり。當番の兵士聲々に、「主君甘輝公は大王の召に依て、昨日より出仕有。何時御歸りも計られず。御留守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極。云ふ事あらば夫から申せ。御歸りの節披露して取らすべし」とぞ呼はりける。一官小聲に成、「イヤ人傳に申事ならず。甘輝公の留守ならば、御内室の女性へ直に逢て申べし。日本より渡りし者と申せば合點の有筈」と、いひも果ぬに城中騒ぎ、兵「我々さへ面も拜まぬ御臺所、對面せんとは不敵者。殊に日本人とや、油斷するな」と、高提灯、鐲、鐃鉢を打立々々、塀の上には數多の兵、鐵炮の筒先揃へ、「石火矢放して打みしやげ、火繩よ玉よ」と犇きける。奥へ斯とや聞えけん、妻の女房樓門に駈上り、「アヽ騒ぐな〳〵。聞屆て自が、それよと聲をかくる迄、鐵炮放すな粗忽すな。ナフ〳〵門外の人々、五常軍甘輝が妻錦祥女とは我事。天下悉韃靼の大王に靡き、世に從ふ我妻も、大王の幕下に屬し、此城を預り、守り嚴しき折も折、夫の留主の女房に逢はんとは心得ず。去ながら日本とあれば懷しし。身の上を語られよ、聞まほしや」と云ふ中にも、錦「若も我親か。何ゆへ尋給ふぞ」と、心もとなさあぶなさに、懷かしさも先立て、「兵共粗相すな。むさと

行合姉―異父同母を行合兄弟といふ、それを異母姉の義に轉用せし也

で別れ、日本へ渡りし父といか成證據を語る共、容易く城中へ入れん事難かるべし。如何はせん」とぞ私語きける。和藤内聞もあへず。「今更驚く事ならず。一身の外味方なしとは、日本を出る時より覺悟の前。遂に見ぬ舅よ聟よと親み立して不覺をとらんより、頼まれうか頼まれぬか一口商ひ、否といはゞ卽座の敵。二歳で別れし娘なれば、我等共行合姉。彼奴孝行の心あらば、日本の風も懷しく、文の便も有べきに、頼まれぬ心底。我竹林の虎狩に從へし島夷を、軍兵の元手にして切靡ける程ならば、五萬や十萬勢の付は隙入らず。何の人頼み、此門蹴破り不孝の姉が首捻切、聟の甘輝と一勝負」と、跳出れば、母縋付押止め、「其娘御の心入は知らね共、夫に連れて世の中の、儘にならぬは女のならひ。父とは親子、御身とは胤一つ、他人は自ら獨にて、海山千里を隔てゝも、繼母といふ名は脫れず。娘の心に親兄弟戀慕ふまい物でもなし。其處へ切込んで、日本の繼母が妬みなりといはれんは、我恥計か日本の國の恥。御身不肖の身を以テ、韃靼の大敵を攻破り、大明の御代に返さんと、大義を思ひ立からは、私の恥を捨、我身の無念を堪忍し、人を懷け從へ、一人の雜兵も味方に招き入るこそ、軍法のもとと聞。況して聟の甘輝は一城の主、一方の大將、是を味方に頼むこと、大方にて成べきか。心を修め案內せよ」

るなん四郎ほるなん五郎、うんすん六郎すん吉九郎、もうる左衞門、じやが太郎兵衞、さんとめ八郎いぎりす兵衞、今參のお供先、跡に引馬虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取口取國を取、譽は異國本朝に、踏跨げたる鞍鐙、虎の背中に打乘て、威勢を千里に顯はせり。

第　三

仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず、慈有父も益なき子は愛する事能はず。大和唐土樣々に、道の巷は別るれど、迷はで急ぐ誠の道、赤壁山の麓にて、親子三人めぐり合、我聟と計聞及ぶ、五常軍甘輝が館城、獅子が城にぞ著にける。聞しに優る要害は、未だ冴返る春の夜の、霜に晃く軒の瓦、鯱天に鰭振て、石壘高く築上たり。堀の水藍に似て繩を引が如く、末は黃河に流れ入、樓門堅く鎖せり。城内には夜廻りの鑼の聲喧すく、矢間に弩透間なく、所々に石火矢を仕掛置、すはと云はゞ打放さん其勢、和國に目馴ぬ要害なり。一官案に相違し、「亂世といひ、斯るきびしき城門事々敷、夜中に敲き、聞も馴ぬ舅が、日本より來りしなんと云共、誠と思ひ取次者も有まじ。假令娘が聞たり共、二歲

仁ある云々—曹植が「慈父不ㇾ能ㇾ愛ㇾ無益之子ㇾ仁君不ㇾ能ㇾ蓄ㇾ無用之臣」の句を取る

頭の鉢の水―頭の鉢に鉢の水をつけてと也

突立たり。宣「ア丶申御堪忍、御免々々〳〵」と手を合せ、土に喰付泣居たる。和藤内虎の背を撫て、和「うぬ等が小國迚侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手並覺たか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が世忰、九州平戸に成長せし和藤内とは我事なり。先帝の妹宮栴檀皇女にめぐり合、三世の恩を報ぜん爲、父が古鄕へ立歸り、國の亂を治なり。サア命惜くば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か應か」と詰めかくる。宣「ナフ何ヽの否で御座りましよ。韃靼王に從ふも、李蹈天に從ふも、命が惜さ。向後お前の御家來共。お情賴奉る」と、地に鼻付て畏る。和「ヲヽ出來したく〳〵。去ながら我家來に成からは、日本流に月代剃て元服させ、名も改て召使はん」と、指添の小刀はづさし、是も當座の早剃刀、母も手ゝ々に受取て、竝ぶ頭の鉢の水、揉や揉ずに無理無躰・片端剃やらこぼつやら、糸鬢厚鬢剃刀次第、瞬間に剃仕廻、二櫛半のはらけ髮、頭は日本髭は韃靼、身は唐人、互に顏を見合せて、頭冷つく風引て、嚔々〳〵、村さめ〳〵と、淚を流すぞ道理成。親子どつと打笑ひ、「揃ひも揃た供廻り。名も日本に改て何左衞門何兵衞、太郎次郎十郎迄、面々が國所、頭字に名乘、二行に立ってぼつたてろ」「承り候」と、お先手の手振の衆、ちやぐちう左衞門東蒲塞右衞門、呂宋兵衞東京兵衞、暹羅太郎白城次郎、ちや

しやぐはん〳〵―難波土産に射官とあれど冠者を逆に唐音めかしたるなるべし
餓鬼も云々―詰らぬ者も一盃ある諺
しほらしい云々―感心な事ぬかす
色めく〳〵―ひるむ事

打殺さん。しやぐはん〳〵」と、喚きける。李蹈天と聞よりも、願ふ處と笑つぼに入、和「ヤア餓鬼も人數、しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。左程欲がる虎ならば、主君と賴む李蹈天とやら石花菜とやら、爰へ突出し侘事させい。直に逢ふて用も有。さもない内はいかな事、ならぬ〳〵」と睨付る。安「ヤア物ないはせそ討取れ」と、一度に劒をはらりと拔く。和「心得たり」と守を虎の首にかけ、母の傍に引据ゆれば、繋ぎし如くに働かず。「ヲヽ心易し」と、太刀指翳し、群る中へ割て入、八方無盡に割立〳〵撫捲る。列卒の大將安大人、官人引具し立歸り、安「おのれ老ぼれ餘さじ」と、一文字に切懸る、猶も神明應護の印、神力虎に加はつて、むつくと起て身慄し、敵に向ひ歯を鳴し、猛りうなりて飛懸る「こは叶はじ」と安大人、列卒の者が指たる劒、かり鉾數鎗、手に當るを幸に、投付〳〵三重打かくる。虎は神力自在を得、劒を宙に引喰へ〳〵、岩に打當微塵になす。刃の光り玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物つくれば官人共、色めき立て迯惑ふ。後より和藤内「どつこい遣らぬ」と顯れ出、安大人が素首を摑んで指上、くる〳〵と振廻し、「ゑいやつ」と打付れば、岩に熟柿を打ごとく、五躰ひしげて失にけり。此勢に官人原、跡へ戻れば惡虎の口、先へ行ば和藤内、仁王立に

十四歳の時教ひたる話
ひつからげ―裾をからげる
西天―天竺。
大童―結びし髮の解けしさま
神より受し云々
身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也（孝經）
五十鈴川―いますにかく

繕ひ、母を圍ふて立ッたるは、西天の獅子王も恐れつべうぞ見えてけり。案に違はず吹風と、共に荒たる猛虎の形、ふし根に頬をすり付く〳〵、岩角に爪研ぎ立、二人を目がけ啀かゝるを事共せず、弓手に掴り妻手に受、振つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乘移り、上に成下に成、命競べ根競べ、聲を力にゑい〳〵〳〵。虎の怒毛怒聲、山も頽るゝ三重如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息疲れ、石上に突立ば、虎も岩間に小首を投げ、大息吐いだる其響、吹鞴吹が如くなり。母藪影より走出、母「ヤア〳〵和藤内、神國に生れて神より受し身躰髮膚、畜類に出合力だてして怪我するな。日本の地は離るる共、神は我身に五十鈴川、大神宮の御祓、納受などかなからんや」と、肌の守を渡さるれば、和「實に尤」と押戴き、虎に差向け差上れば、神國神祕の其不思議、猛りに猛る勢も、忽尾を伏せ耳を垂れ、じりゝ〳〵と四足を縮め、恐れ戰き岩洞に隱れ入、尾筒を掴んで跳返し、打伏せ〳〵ひるむ處を乘懸り、足下にしつかと踏へしは、天斑駒、素戔嗚尊の神力、天照神の威德ぞ有難き。かゝる處に列卒の者、群り來る其中に、大將と覺しき者大音上、「ヤア〳〵奴は何國の風來人、我が高名を妨ぐる。其虎は忝 も主君右軍將李蹈天より、韃靼王へ獻上の爲、狩出したる虎成ぞ。早々渡せ。異議に及ばゝ

たつき—たより、一本立木

ほうどくわ云々—惘然と自失する

宿なし旅の—一本宿なし旅は

嗩吶—喇叭に似て管に七孔あり

虎嘯けば云々—虎嘯而谷風至、龍擧而景雲屬（淮南子）

楊香—父虎に啣へられしを楊香

合すべし」と、方角とても白雲の、日影を心覺へにて、東西へこそ 三重 別れけれ。教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、甲斐〴〵しく母を負、たつきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧津波、飛越へ跳越へ、飛鳥の如く急げ共、末果しなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷入。和藤内ほうどくはを拔かし、「なふ母者人、此脚骨に覺え有。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行ば行くほど藪の中。ムウ合點たり。方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。化さば化せ。宿なし旅の行付次第、小豆の飯の相伴」と、根笹大竹押分踏分、猶奥深く行先に、怪しや數萬の人聲、攻皷攻太皷、喇叭嗩吶高音をそらし、ひやう〳〵とこそ聞えけれ。「すは我々を見咎めて、敵の取巻く攻太皷か、又は狐の爲す業か」と、忙然たる其折節、空冷じく風起り、砂を穿ちどう〳〵どう、竹葉颯と巻き立〳〵、吹き折る竹は劒の如く、凄しなん共おろかなり。和藤内ちつ共臆せず、「讀めたり〳〵。扨は異國の虎狩な。あの鉦太皷は列卒の者、爰は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺へたり。二十四孝の楊香は、孝行の德によつて、自然と脫れし惡虎の難。其孝行には劣る共、忠義に勇む我勇力、唐へ渡つて力始。神力ます〳〵日本力、刃でむかふは大人氣なし。虎は愚象でも鬼でも一挫ぎ」と、尻引からげ身

闕題―逢ふにかく

育てば云々―草木は露の惠養ひ得ては花の父母たり（謠曲熊野）

尋陽江―潯陽江、白樂天の琵琶行に詠殘されし大江

江戸上別れ行舟路の末も不知火の、筑紫は雲に埋めども、後に應護の神風や、千波萬波を押切て、時も違へず親子の舟、唐土の地にも著にけり。鄭芝龍一官は、古郷へ歸る唐錦、裝束引替へ妻子に向ひ、ニ我本國と云ながら、時遷り代變り、天下悉李蹈天が引入にて、韃靼夷の奴と成、昔の朋友一族とて、誰を尋ん樣もなく、司馬將軍呉三桂が、生死の有かも知れざれば、何を以て義兵の旗を上、何國を一城に楯籠るべき所もなし。然に某去ル天啓五年此國を立退き、日本へ渡る時、二歳に成し娘の子を、乳母が袖に捨置しが、其子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は八重の鹽路の中絶えて、何時父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の惠に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻と成由、商人の便に聞及ぶ。頼む方は是計。親を慕ふ心有て娘さへ承引せば、聟の甘輝もやす〳〵と頼まるべし。是より道の程百八十里、打連れては人もあやしめん。我一人道を變へ、和藤内は母を具し、日本の獵船の吹流されしと、頓智を以人家に憩ひ追付べし。これより先は音に聞ゆる千里が竹迚虎の住む大藪有。江戸それを過れば尋陽の江、これ猩々の住處。風景聳ゑし高山は、赤壁迚昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城、獅子が城へは程もなし。其赤壁にて待揃へ、萬事を謀

望夫山―此山にて夫が虎に喰はれしを妻虎に似たる石を射たりしより此名あり（難波土產）

領巾麾山―大伴狹手彥の妻の故事

姫宮をしつかと預置からは、男の心かはらぬ證據。姫宮に仕へ奉るは、舅に孝行、夫に仕ふる百倍ぞや。命にかけて頼み入。國治て迎ひの御舟のお供せよ」と、宥むれば聞入て、小「此方には氣遣せず、隨分無事で御座れや」と、いへ共弱る女心、「責て一夜の覺悟もせず、夢見た樣な別れや」と、夫の袖に縋付わつと計に泣叫ぶ、心の内ぞやるせなき。和藤内も胸塞り、至極の思ひに目も暗み、共に心は亂るれど、斯ては果じいざさらば、さらば〳〵の暇乞、栴檀女も涙ながら、「追付迎ひの輿を待ッ其時伴ひ歸るべし。必早ふ」と宣へば、畏て和藤内、泣く〳〵舟を押出す。又纜に取付て、小「云殘せし事の有。暫くのふ」と引留むる。和「エヽ聞分なし」と引切て、舟をふかみへ漕出せば、詮方波に身を浸し、只手を上て、小「舟よなふ、舟よ」と呼べど出舟の、かいなき巖に馳上り、足を爪立延上り、見送る影も遠ざかる。「唐土の望夫山、吾朝の領巾麾山、今の我身の我思ひ、石共なれ、山共なれ、動かじ去らじ」と掻口說き、涙限聲限、互に呼れ招かれて、姿を隱す汐曇り、聲を隔つる沖津波、沖の鷗磯千鳥、泣焦れてぞ　三重

千里が竹

身躰―身代

結構者云々―阿呆になるも時によると也

走付、船の纜しつかと取、小「ムウ内には親仁様母様も皆お留主。異な事と思ひしに、道理こそ是じや物。親子とつくと談合しめ、親御の國からお内義呼び、此小睦を置去に親子夫婦四人連、唐へ身躰引氣じやの。餘りむごい情ない。何の見落仕落が有。唐高麗は愚の事。天竺雲の果迄も、共に連んと云交した二人の中、媒人もない挨拶ない、二人が胸と胸とに起請も誓紙も納て有。なんぼう厭れた中成共、今迄の情に、せめて同舟に乘せ、五里も十里も沖中の波に沈めて、鱶や鮫の餌に成共、夫の手から殺て下され藤内殿」と、舳板を叩き泣くどき、放さん氣色はなかりけり。和「エヽ大事の門出不吉の吠頬、其處立退け目に物見せん」と、櫂振上れば、姫宮慌て縋り付、留め給ふを押退け、櫂も折れよと舟端たゝき、威しに打を身に受て、小「打れて死ねば本望」と、濱邊にどうと臥轉び、聲も惜まず歎きしが、「エヽ是でも死なれぬな。アヽよし〳〵今は是迄、結構者も事による。此海底に身を沈め、嗔恚は嫉妬の大蛇と成て、もとの契りは今日の仇、今に思ひしらせん」と、石を袂に拾ひ入、巖の肩に攀上れば、駈上つて和藤内抱留て、「やいこりや粗相すな、心底見付た。軍なかばの大明國、事太平に治る迄姫宮を汝に預、日本に留め置んと思へ共、筋なき女の心を窺ひ、態情なく見せたるぞ。是四百余州と釣替の

本卦云々―師の卦は六十四卦の一にて專ら軍の事を斷りたる卦(難波土産)

天の時云々―軍の利は何よりも人の和が第一となり(孟子)

あらみさき―日本紀に荒魂爲先鋒而導師船とある荒魂也

べしとの神の告、我等が本卦師の卦に當て、師は軍の義なり。坤上坎下の卦躰、一陽を以て衆陰をすぶるといつぱ、我一身を以數萬騎の軍兵を從へ有つ大將。今散水のさす潮に、早く日本の地を去て、南京北京に押渡り、浮世にながらへ有ならば、吳三桂と軍慮を合せ、李蹈天が賊徒を亡し、軍勢催し韃靼へ逆寄に押寄せ、韃靼頭の芥子坊主、捻首貫き追伏せ切伏せ、御代長久の凱歌を上ん事、和藤內が心魂に徹する處。天の時は地の利に如ず、地の利は人の和に如ず。吉凶は人によつて日によらず。此儘直に御出船、途すがら島島の夷を語ひ、案の中成軍せん。御出陣」と勇みしは、三韓退治の神功皇后艫舳に立しあらみさきを、今見る如き勢ひなり。父は大きに感心し、「チヽ潔よし頼もしし。誠や一粒の花の種は地中に朽ず、終に千輪の梢に上るといふ本文、實に一官が子成ぞや。我々夫婦も同船にて御供申べきが、大勢は目に立て所々の渡海の番所、國の咎め恐れ有。夫婦密に藤津の浦より出船すべし。おことは是より乘出し、便よき小島に姫宮を預ヶ置、船路を變へて追付よ。親子が忠心正直の頭に宿る神風は、船中何の氣遣なし。出合ふ所は唐土に隱れなき、千里が竹にて相待べし。急げ〳〵」と姫宮にお暇申、夫婦は遙に別れゆく。和藤內、姫宮の御手を引、元の唐船に移し乘せ參らせ、押出さんとする處に、女房息を切て

まざ〳〵ー實々の字にてありありと也

おんくはうー蘊奥の轉語か

様」と、聞も敢ず一官夫婦、あつと頭を地に付て、「御聞及びも候はん。某は古への鄭芝龍と申者、只今の妻や子は、日本の者にて候へ共、舊恩を報ぜずんば忠臣の道立べからず。某こそ年寄たれ、此世忰兵事軍術を嗜み、御覽の如く骨太に生れ付、大膽不敵の強力者。今一度大明の御代に飜し、冥途に在す先帝の震襟を安んじ奉らん。御心安く思召せ」と、世に頼もしく申上れば、皇女御涙にくれ給ひ、「扨は聞及びたる鄭芝龍とは御身よの。李蹈天が惡逆、韃靼國と心を合せ、兄帝を失ひ國を奪ひ、妾も既に害せられんとしたりしを、呉三桂夫婦の臣が介抱にて、今日の今迄惜からぬ、露の命のつれなさを、頼む」と計宣ひて、又潸然と泣給ひ、互に通ずる詞の末、縁につるれば唐のもの、くひの八千度繰返す、昔語ぞ哀成。母も袂を絞りかね、「實に誠斯様の事を承らん印にや、今朝曉夫婦變らぬ夢の告、軍は二千里を出て西に利有と云事を、まざ〳〵と見て候。ヤア和藤内、此夢を考へ、君御出世の忠勤を勵むべし。如何に〳〵」と有ければ、和藤内謹んで、「只今某此濱にて、鴫の鳥と蛤希代の業を見受しより、軍法のおんくはうを悟開いて候。千里を出て西に利有とは、大明國は我國より、西に當つて千里の波濤。軍法の法の字は、散水に去と書。散水は水なり、水を去とは此出汐の水に任せ、早く日本の地を去る

何時の便宜―いつ唐山に便りして女に關係したとなり

にやう／＼」と、手を打て、互に染々手を取組、悲歎の涙睦じし。小睦はくはつとせき上、胸ぐら取て、「これ男、唐人詞聞たふない。如何にいたづらすれば迚、何時の便宜に唐三界、餘りな稼ぎじや。やい其處なとらやあや、此方の大事の男を、能も／＼きんにやう／＼にしたなあ。日本の男の鹽梅は、吸ふて見る事も成まい。此鹽梅喰ふて見よ」と備中鍬振上れば、和藤内ひつたくり、「ヤイ眼をあいて悋氣せい。是こそ日比語りし父一官の古への主君、大明の帝の御妹栴檀皇女、國の亂にて吹流され給ふとの御物語、見捨がたなく悼しし。直に我家へお供せば、庄屋の斷り代官所の詮義、何の彼のと喧じし。兎角親父と談合。おぬしは内へ返つて、早々是へ同道せい。人の見ぬ中早う／＼」といひければ、小睦もはつと手を打て、「扨も／＼おいとしや。同じ日本の内さへも、王位高貴の姫君は、荒ひ風にも當ぬと聞。況してや是は見ぬ唐土の王胤の淺ましき御姿や。所も多きに爰へお舟の寄事も、主從の御縁深きゆへ。追付親父樣呼ふで來ませう。アアおいとしのとらやあや、きんにやう／＼」と、涙にくれ、家路にこそは歸りけれ。斯とは知らず一官夫婦、不思議の瑞夢蒙りしと、當國松浦の住吉に詣ふで歸るさの濱傳ひ、和「なふ／＼」と聲をかけて招き寄せ、和「栴檀皇女亂國を遁れ、御舟是へ流れよる。悼はしき有

ひよんな事—とんでもない事

なむきやら云々—禪宗にて常誦する經文の句を唐音らしくしたるもの以下皆此類

雨に萎れし初花に、目鼻を付し如くなり。小睦小聲に成、「ありや繪に書て有唐の后、いたづらして流された物じやわいの」和「アヽそうじや〳〵よい推量。おれは惡ふ合點して、唐の楊貴妃の幽靈かと思ふて怖かつた。何ンでも能女房じやないかいな」小「ムウ嫌らし、彼の樣な女房が目につくか。親父樣が始の樣に唐にござつて、此方も彼方で生れたら、彼の樣な女房抱て寢さしやらふが、日本に生れた因果に、私が樣な女房持て口惜からふの」和「ハテひよんな事計。なんぼ美しうても、唐の女房の衣裳付頭付、辨才天を見る樣で、勿躰なふて氣が張て、寢られはせぬ」とぞ笑ひける。其隙に上臈濱邊に下りて夫婦を招き、「日本人〳〵、なむきやらちよんのふとらやあ〳〵」と有ければ小睦ふつと笑ひ出し、「ありや何ンといふお經じや」と、腹を抱へて可笑がる。和「ヤイ〳〵笑ふな。あれは日本人爰へおじや賴たい、といふ事」と、押除て立寄れば、上臈涙にくれながら、「大明ちんしんにようろ、君けんくるめいたかりんかんきう、さいもうすがすんへいする共、こんたかりんとんな、ありしてけんさんはいろ。とらやあ〳〵」と計にて、又潸々と泣給へば、小睦は濱邊に轉りと臥、腹筋捻て堪へかぬる。和藤内は常々父が詞の唐韻覺へ、はつと手を突き頭を下げ、和「うす〳〵うさすはもう、さきがちんぶりかくさんきんないろ。きん

る其虛に乘てうつせ貝、蛤共に擱しは逸物の高氏將軍、武略に長ぜし處なり。誠や父一官の生國は大明韃靼、鴫蛤の國爭ひ、今合戰最中と傳へ聞。あはれ唐土に渡り、此理を以て彼理を推し、攻戰ふ程ならば、大明韃靼兩國を、一呑にせん物お」と、眼も放さず工夫を凝し、思ひ初たる武士の、一念の末ぞ逞しき。理かな、此男唐土に押渡り、大明韃靼を平均し、異國本朝に名を揚し、延平王國性爺は、此若者の事成けり。小睦遠目に、「なふ〳〵もう汐がさいて來る。何をきよろりとしてぞいの」と、走り寄て、「是は拯鴫と蛤と口吸ふか。女夫といふ事今知た。如何やら犬の樣で見共ない。どりや放して取らせふ」と、笄拔て口押割れば、鴫も悅び蘆邊を指して、滿來る汐に蛤の、則隱れ沈みけり。

もろこしふね

和「ハア時雨そふな、いざ歸らふ」と、見遣る洲崎に楫を絕へ、搖れ寄るは珍しい作りな船。「鯨舟でもなし唐の茶舟か」小「何じや知らぬ」と舟底見れば、唐土人と覺しくて二八餘りの上臈の、芙蓉の顏柳の眉、袖は涙の汐風に、化粧も剝て面瘦て、哀にも美しく、

物お―物を

則ち―砂にかくる

茶船―一種の川船にて運送に用ふ

上臈―高貴の姫君

嘴をいふ、佛行に喩へて殺生戒と續けたる也

雪折竹云々―初祖に教を乞はんと神光といふ僧雪中竹の折るゝ時來りしも教へず終に臂を切つて教を受たり(難波土產)

鷸蛤の諍―鷸蚌の爭は漁夫の利(戰國策)

連衡―張儀六國に說きて秦と連合せしむる策

と喰締め動かせず。鴫は俄に興覺顏。引つしやくつゝ羽たゝきし、頭を振て岩根に寄せ、打砕かんず鳥の智惠。蛤は砂地の得物、鹽の溜へ引込んと、尻下りに引入る。羽ぶしを張てばつと立、一丈計上れ共、吊られ落ては又立上り、ばつと立てはころりと落、鴫の羽搔き百羽搔、毛を逆立てぞ爭ひける。和藤内熟々見て、備中鍬からりと捨、「アッア面白し。雪折竹に本來の面目を悟、肱を切て、祖師西來意の、輪を開きしも尤かな、斷りかな。我父が教によつて、唐土の兵書を學び、本朝古來名將の合戰、勝負の道理を考へ、軍法に心を委ねしに、今鴫蛤の諍ひによつて、軍法の奧義一時に悟り開けたり。蛤は貝の堅きを賴んで鴫の來るを知らず、鴫は嘴の鋭に誇つて蛤の口を閉るを知らず。貝は放さじ、鴫は離れんと、前に氣を張て後を顧るに隙なし。爰に望んで我手も濡らさず、二つを一度に引摑むにいと易く、蛤貝の堅きも詮なく、鴫のはしの尖りも終に其德なかるべし。是ぞ兩雄を鬪はしめて、其虛を討といふ軍法の祕密。唐土には秦の始皇、六國を呑だる連衡の謀。本朝の太平記を見るに、後醍醐の帝天下に王として、蛤の大口開きし政取締なく、相摸入道といふ鴫鎌倉に羽叩し、奢の嘴鋭く、吉野千早に鹽を吹せ申せしに、楠正成新田義貞、二つの貝に嘴を閉攻られ、捲り取た

ら長沙の罪を避け、此日の本に筑紫潟、老一官と名を改、浦人に契りをこめ、此男を設けしゆへ、母が和國の和の字を用ひ、父は唐人唐の聲をかたどつて、和藤内三官と名乘、廿余年の春も立、秋も過行十月の、小六月沚暖かや。備中鍬に魚籠提、身の活計を夕凪に、夫婦連立出にけり。見渡せば、沙頭に印を刻む鷗、沖洲にすだく浦千鳥、潮の干潟を鋤返し、蛤踏んで色々の、かいどり小褄しよぼ〱濡れて、拾ひし貝は何々ぞ。寄生蟲、小螺子、淺蜊貝、汐吹き上げの簾貝、ちらと見染し姫貝に、一筆書て送りたいらぎ、口明てほや〱笑ふ赤貝に、心よせ貝ァヽいたら貝、君は酢貝と吸付ど、我は鮑の片思ひ。憎や其許の猿頰に、喰せたいぞやさゞい貝、梅の花貝櫻貝、寢もせで一人赤螺の、誰をまてとや、人の見るくい忘れ貝、我二人寢の床節は、身に蜆貝視貝、門出よしの螺貝は、悦びのかひとぞ取にける。中に一つの大蛤、日蔭に口を打開き、取人有共白泡の、汐を吹て盛上しは、實にや蛤能く氣を吐て、樓臺を爲すといひしも、斯やと見とれ居る處に、磯の藻屑に飛渡り、求食る羽音おもしろく、下り居る鴫の急度見付、觜怒らし只一啄と狙ひ寄る。ヤイいはれぬ鴫殿。看經もする身で是が眞の殺生かい。蛤も蛤、口をくはつと破戒無慙、飛付てかち〱〱、啄く處を貝合にしつか

長沙の罪—賈誼の配所、一官の放逐せらるゝに寄せたり
沙頭云々—平家物語三にある句
かいどり—貝採りと裲襠にかく
寄生蟲—空貝殼の中に宿る蟹
たいらぎ—どぶ貝に似た貝、たいにかく
猿頰に云々—赤貝に似た小き貝にて我を去る奴なれば榮螺の拳骨を振舞ひたいと也
赤螺—明すにかく
見るくい—蛤に似て大なる貝
床節—床臥
蜆—染むに皆いひかく
蛤能く氣を吐—蜃氣樓の事
看經—鴫の小き

栴檀女—爲んにかく
納受—願を聞屆けらる
誰を友千鳥—皇女居られねば誰を友とせんと也
沖津波—波は折るゝもの故寄せと二つにかけたり

緜蠻たる云々—詩經小雅の詩句、大學に引用せり、緜蠻は啼聲、意は鳥でも止る場所あり況や人に於てをやと也
我から—虫の名自らなしたる戀仲の意と互ひにとかく

の、御舟を守護し給へや」と、舩取て押出せば、折しも引潮の名殘を何と栴檀女、涙しほるゝ汐風に、龍神納受の沖津風、沖を遙に流れ行く。柳「あら心安や嬉しや。よし此上は生延ても我身一つ、死でも誰を友千鳥、生死の海は渡れ共、妻の行衞子の行衞、君が行衞は覺束波の浮世の海を越へかねし、渡りかねしといはば云へ、此一心の疾風舟、仁義の櫓櫂、武勇の楫は、折ても折れぬ沖津波、寄せ來る時の聲か」とて、劒に縋つてたぢ〳〵、よろ〳〵よろぼひ寄方の、磯山嵐松の風、亂れし髪を掻上て、四邊を睨んで立たりし、和漢女の手本紙、筆にも寫し傳へけり。

第二　はまづたひ

緜蠻たる黄鳥丘隅にとゞまる。人として止る所にとゞまらずんば、鳥に如かざるべしとかや。爰に大日本肥前の國、松浦の郡平戸の郷に、釣垂れ網引世を渡る、和藤内三官といふ若者有。妻も同じ海士の業、藻に栖む虫の我からと、仲人なしの手枕に、括枕と締合し、小睦といへる名に愛て、世を睦しく暮しけり。そも此和藤内が父は、元日本の者ならず、大明國の忠臣、大師大爺鄭芝龍といつし者なりしが、暗き帝を諫めかね、自

雷光石火─果敢なき事にかく

踏ためず─ふみとゞめず

よろぼひ─ひよろ〱して

せし處に、何處より這ひ上りけん、剛韃鎧も濡雫、戟提げて廿騎計、餘すまじと追懸る。柳「ハア忙がしや御覽候へ。敵手ひどく追懸れば、暫し防ぐ其間、船底に隱れましませ」と、拾ひし劍と腰の劍、二刀に振て待かけたり。剛韃程なく駈付「憎い女め、櫂で打た返報」と、長柄の戟押取延て突かくる。柳「ヲ、其方から當がふた此劍。此方からも返報」と、切て廻れば廿余人、女一人に切立られ、陸にまどへる蘆邊の鷗、一羽もたゞず討るも有、痛手を受て迯るも有。柳歌君も剛韃も、數箇所の深手朱に成、一村蘆を押分〻〻、追入追込、互の眼に血は入たり、前後も分ぬ瞽打、岸の岩角切先に雷光石火の命を限り、危かりける三重有樣なり。剛韃戟も切折られ、膝行寄てむんずと組、柳歌君が持たる劍、もぎ取らん〱と捻合ふ足を踏ためず、仰樣にかつぱと伏す。直に乘て乘懸り、指通し〱、首ふつつと搔切て、につこと笑ひし心の內、嬉しさ類なかりけり。柳「なふ〱姬宮樣、お身には怪我もなかつたか。舟は其儘其處にか」と、よろぼひ寄て、「此躰では船中のお供はならぬ。又敵が寄せ來れば、最うどふも叶はぬ。潮に任せ何處迄も落ち給へ。沖へ舟の出るまでは、此女が陸に扣へた。敵何萬騎寄たり共、命限り腕限り。さりながら、主從二度の對面は、御緣と命計ぞや。隨分御無事で〱。南無諸天諸佛、別して八大龍神、萬乘の君の姬宮

浮名殘―憂名殘

仕留たは―射殺したよ

人前廢つた―忠臣の名が廢つに

がむしや―猪武者

渡りに船―都合よき譬

報者、よい時生れ合せて、十善天子の御身代り、出來しおつた出來いた。娑婆の親に心殘すな。親も心は殘らぬぞ」と、いへ共殘る浮名殘、鎧の袖に若宮を、包む涙に咽返り、別れ行くこそ哀なれ。斯とは知らず柳歌君、栴檀女を誘ひ、港口迄落延しが、前後に敵滿々たり。柳「サア是迄ぞ遁るゝだけ」と、繁る蘆間を搔分て、身を忍びてぞ隱れ居る。李蹈天が侍大將安大人、手勢引具しどつと駈寄せ、安「今の鐵炮、たしかに后か呉三桂に當たと覺へし」と、四邊を見廻し、安「コリヤ見よ、后を仕留たは。ハア腹を切割き、懷妊の王子迄殺した。忠節立する呉三桂、主君を捨て、名を捨ても命惜いか。彼奴は人前廢つた。此上は彼が妻の柳歌君、栴檀女を尋る計。眼を配れ高名せよ」と、四方に別れ走り行。中にも剛韃といふがむしや者、「いで栴檀女を召取、一人の手柄にせん」と、鎧の上に簑打かけ、海士の小舟に棹して、入江々々を漕廻り、「此蘆の蔭が氣遣ひな」と、押分る櫂の先、柳歌君しつかと取、力に任せ跳返せば、舟端を踏外し、俯伏にかつぱと沈み、浮上らんとする所を、櫂も折よと疊みかけ、打ば沈み浮めば打、息もつがせず泥龜の、泥を泳ぐが如くにて、水底潛り落失せけり。柳「エヽ無用の拔がけ、殊に舟迄仰付られた。渡りに舟とは此事」と、船中にかくし置たる劒取て横へ、栴檀女を乘せ參らせ、我も乘らんと

木まぶり—木守り
渚—なくにかく
札よき—鎧の板の丈夫な事

は是迄事急なり。御死骸は兎も角も、一大事は御世繼」と、后の手を引立出れば、此比生れし我水子、乳房を慕ひわつと泣。吳「エヽ邪魔らしい、去ながら己も我が世繼ぞ」と引寄て、戟の柄にしつかと結付、「こりや父が討死するならば、成人して若宮に、忠臣の根繼となれ。我等が家の木まぶり」と、振擔てぞ三重落人を、切留めんと敵の兵、慕ひ寄れば踏留り、切捨打捨引汐の、海道の港に著にける。是よりたいす府へ渡らんと、見れ共折節船一艘も、渚に沿ふて立たる所に、四方の山々森の蔭、打かくる鐵炮は、横ぎる雨の如くなり。吳三桂は札よき鎧、飛來る玉をうけとめ〳〵、后を覆ひかこへ共、運の極めや胸板に發矢と當り、玉の緒も斷れて敢なく成給ふ。吳三桂もはつと計前後に暮れて立たりしが、「御母后は是非もなし。十善の御子胤を胎内にて、暗々と泡となさんも云ひ甲斐なし」とて、劒拔持て后の肌押寛げ、脇腹に押當、十文字に割き破れば、血潮の中の初聲は、玉の樣成男子親王、嬉しも嬉し悲しも悲し、遣る方涙に母后の、袖引ちぎり押包み、抱き上しが、「待て暫し、取卷たる四方の敵、死骸を見付、若宮を匿し取たり、と行末迄探されては宮を育てん樣もなし」と、とつくと思案し、我子引寄せ衣裳を剝ぎ、宮に打掛けまゐらせ、劒取直し、水子の胸先指通し〳〵、后の腹に押入、「あつぱれ己は果

水もたまらず―一瀉して過ぎ行く意の俚諺

齎―李蹈天を討つに譬へ非時は李海方に譬ふ

さしつたり―おい合點と

なひ、末代に名を流す。口に甘き食物は、腹中に入て害をなす、と知らざりし我愚さよ。汝等も知る如く、夫人が胎内に、十月に當る我子有、誕生も程有まじ。月日の光を見せよかし。せめての情」と計にて、御涙にぞくれ給ふ。李「ア、成らぬ〳〵。大事の眼を刳出したるは何ンの爲。忠節でも義理でもない。君に心をゆるさせ、韃靼と一味せん爲。睛一つが知行に成、君の首が國に成」と、取て引寄せ御首を、水もたまらず打落し、李「サア李海方此首は韃靼王へ贈るべし。汝は后を搦め來れ」といひ捨て、寄手の陣へぞ駈入ける。司馬將軍吳三桂、敵數多討取、難なく一方切開き、君を落し奉らん、と立歸れば南無三寶、御首もなき尊骸朱に成て臥給ひ、李海方后を搦め引立る。吳「ヤア味ひ處へ出合ふたな。我君の弔ひ軍、齎にこそ外れたれ、非時を喰ふ」と飛懸り、李海方が眞向、二ツにサッと切割て、后の縛め切ほどき、涙ながらに尊骸を押直せば、代々に傳はる御國讓り、御卽位の印の印綬、御肌に懸けられたり。「エ、有難し。是さへあれば、御誕生の若宮、御位心安し」と、鎧の肌に押入、「一先后を御供せうか。先御骸を隱そうか」と、難義は二つ身は一つ、打碎かんと敵の勢、一度にどつと亂れ入。吳「さしつたり」と切拂ひ、込入ればなぐり立て、打伏せ薙伏せ捲り立、走り歸つて「今

倭訓栞）

おことーそなた

大手云々ー表門の賊に當らん

おん廻しー追廻し

餘さじー殘らず討取れ

刃の錆は云々ー汝に出づるものは汝にかへるといふに同じ。之は翁の成語と雖波土産に云へり

柳「なふ口惜や御運の末。公卿大臣を始雜人下郎に至る迄、李蹈天に一味して御味方は我我計。無念至極」と切齒をなす。呉「ア丶悔むな〳〵いふて益なし。但后の胎内に帝の胤を宿し給へば大事の御身。一方を切拔て君諸共に、某御供申べし。其子も爰に捨置、おことは一先御妹を介抱し、海道の港を指して落よ〳〵」といひければ、柳「心得たり」とかひ〴〵敷、栴檀皇女の御手を引、金川門の細道を、二人忍びて落給ふ。呉「いで是からは大手の敵を、一當あてて追散らし、安々落し奉らん。御座を去らせ給ふな」と、いひ捨て駈出、「明朝第一の臣下、大司馬將軍呉三桂」と名乘かけ、百騎に足らぬ手勢にて、數百萬騎の蒙古の軍兵、割立ておん廻し、無二無三に切入れば、韃靼勢も「餘さじ」と、鐵炮、石火矢隙間なく、矢玉を飛ばせて三重戰ひける。其隙に李蹈天弟李海方、玉躰近く亂れ入、帝の御手を兩方より拕と取。后夢共辨へず、后「天罰知らずの大惡人、御恩も冥加も忘れしか」と、縋り給へば、李「ヲ丶おのれとても助けぬ」と、取て突退け、氷の利釼を御胸に差當る。君は怒れる龍眼に御涙をかけながら。帝「實に刃の錆は刃より出て刃を腐らし、檜山の火は檜より出て檜を燒く。仇も情も我身より出るとは、今こそ思ひ知られたれ。鄭芝龍、呉三桂が諫めを用ず。己等が諂に誑かされ、國を失ひ身を失

明の字に偏なければ日の光なき國は常闇、忝も彼の額は、御先祖大祖高皇帝、御子孫繁昌御代萬歳と宸翰を染め給ふ。宗廟の神の御怒り畏しと思召、道を正し非を改御代を保ちましまさば、君に擲つ呉三桂が一命、踏殺され蹴殺されても厭はゞこそ。土共なれ灰共なれ、忠臣の道は違へじ」と、御衣に縋り大聲上、涙を流し諫めしは、代々の鏡と聞えける。斯る處に四方八面人馬の音、貝鉦鳴し太鼓を打、時の聲地を動かし、天も傾ぶく計なり。思ひ設けし呉三桂、高殿に駈上り、見渡せば山も里も韃靼勢、旗を靡かし弓鐵炮、内裏を取卷攻寄せしは、潮の滿來る如くなり。寄手の大將梅勒王、庭上に乘入大音上、「抑我國の主順治大王、此國の后華淸夫人に戀慕とは謀略、懷妊の后を召取、大明の帝の胤を絕さん爲。李蹈天が眼を刳て一味の印を見せたる故、時を移さず押寄たり。とても叶はぬ呉三桂、帝も后も搦取て味方に降り、韃靼王の臺處に匍匐い、炊水でも啜つて命を續げ」とぞ呼はりける。呉「ヤア事おかし。百八十年草木も搖がぬ明朝を、攻破らんなんどとは、大海に橫はる鯨を蟻の狙ふに異らず。彼れ追拂へ〳〵」と、駈廻つて下知すれ共、我手勢百騎計の徒士武者ならで、公家にも武家にも誰有て、おり合ふ味方のあらざれば、拳を握て立たる處に、女房柳歌君水子を肌に抱きながら、后の御手を引立、

炊水—米をとぎたる白水

おり合ふ—力を合せる

みづ子—赤子、みづは弱き意

五刑―墨、劓、宮、大辟、刖

拳を以て云々―外るゝ事なき譬

白雪却て黒し―物は見やうによるといふ禪宗の法語

金刀點―大字は三點よりなる、一は玉案ノは犀角、ヽは金刀點（難波土産）

民を救ふといひなし、國中に散し與へ、萬民をなつけ、謀反の臍を堅めし、と知召されぬ愚さよ。彼が左の眼を刳りしは、是ぞ韃靼一味の相圖。御覧候へ南殿の額、大明とは大きに明らかなりといふ字訓にて、月日をならべ書たる文字。此大明は南陽國にして日の國なり、韃靼は北陰國にして月の國。陽に屬して日に譬へし左の眼をくつたるは、此大明の日の國を、韃靼の手に入ん一味の印。使も敏く其理を悟悦んで立歸る。積惡奸曲の佞臣、早く五刑の罪に沈めずんば、聖人出世の此國 忽蒙古の域に陷ち、尾を振り皮を被らぬ計畜類の奴と成、天地の怒り宗廟の神祟りをなし、其罪帝の一身に歸せん事、拳を以て大地を打には外るゝ共、吳三桂が此詞は違ふまじ。恨めしの叡慮や」と、泣つ怒つつ理を盡し、詞を盡して奏しける。帝大きに逆鱗有、「物識顏成文字の講釋、理を付ていふならば白雪却て黒し共いふ義有。皆李蹈天を嫉みの詞。事もなきに甲冑を帯し、朕に近寄る汝こそ逆臣よ」と、立懸つて御足にかけ、吳三桂が眞向を踏付給へば、不思議やな、御殿頻に鳴動して、勅筆の額搖ぎ出、大の字の金刀點、明の字の日偏、微塵に碎け散たるは、天の告かと畏ろしし。吳三桂猶身を惜まず、「エヽ情なや、御眼も暗みしか、御耳も聾たるか。大の字の形は一人と書たる筆畫、一人とは天子帝の御事。其一人の一點取れば、帝の御身は半身

頻伽―迦陵頻伽とて極樂に居る鳥

一家仁あれば云云―一家は君家一人は天子（大學）

時の聲―鬨の聲

官同音に勝時揚る頻伽の聲、宮中響き渡りしは、千羽鶯百千鳥、囀りかはす如くなり。司馬將軍吳三桂、鎧兜さはやかに出立て、偃月の戟會釋もなく振廻し、梅も櫻も散々に薙散し、御前に畏、吳「只今玉座の邊に合戰有とて、時の聲殿中に響き、宮中以の外の騷によつて、物の具固め馳參じ候へば、扨馬鹿らしや、御妹栴檀女と、李蹈天が緣定の花戰とは、天地開けて此かた、斯るたわけた例を聞ず。君知しめさずや、一家仁あれば一國仁を興し、一人貪戾なれば一國亂を起すといへり。上の好む處に從ふは民のならひ。此事を聞及び、山樵土民の嫁取聟取、爰にても花軍彼處にても花軍、喧嘩鬪諍の端と成、花は散て打物業、誠の軍起らん事、鏡にかけて見るごとし。只今にも逆臣起り、宮中に攻入喚き叫ぶ時の聲は聞ゆる共、すは例の花軍と、馳參る勢もなく、玉躰を暗々と逆臣の刃にかけん事、勿躰なし共淺まし共、悔むに甲斐の有べきか。其逆臣佞臣とは李蹈天が事。君は忘れ給ひしか、御若年の時鄭芝龍と申者、佞臣を斥け給へ、と諫め申を鱗逆有、鄭芝龍は追放たれ、今老一官と名を變へ、日本肥前の國、平戸とかやにすまい致と承る。鄭芝龍が傳へ聞、日本迄大明國の御耻辱ならずや。先年大明飢饉の時、李蹈天が邪智を以て、諸國の御藏の米を竊み、君に憐みなきゆへに、おのれ韃靼の合力を受、

風流陣—昔玄宗楊貴妃と宴する時女官をして旗を持たせて戰はせたる故事

誰が袖云々—梅花の散る形容、鶯は櫻もてる女官にたとふ

柳渦く云々—花軍の兵法にて風は伏兵、莟は力、花を開くは功名、楉は新手の兵に皆譬へたり

二月の雪—花軍の形容、朗詠に折梅花而挿頭二月雪落衣

妹聟、北京の都を譲らんと約せしが、御身承引有まじと、此花軍を催せり。賢女立してすん／＼と、素氣なき御身が心を表し、梅花を味方に參らする。朕が味方は櫻花、女官共に戰はせ、櫻が散て梅が勝たば、御身の心に任すべし。櫻が勝て梅花が散らば、御身の負に極つて李蹈天が妻となす。天道次第緣次第、勝も負るも風流陣。懸れや懸れ」と宣旨有。下知に從ふ梅櫻、左右に分つて備へける。勅諚なれば姫宮も、よし力なし去ながら、心に染まぬ妻定め、左右なう引べき樣はなし。花も我身も魁がけて、當今の妹栴檀皇女、緣の分目の晴れ軍、「大將軍は我なり」と、名乘もあへぬかざしの梅、誰が袖觸れし梢には、群居る鶯の翼にかけ、散らす羽音も斯やと梅が香も、芬々と打亂れ、受つ流しつ戰ふたり。姫君下知しての給はく、「柳渦く木蔭には、風有と知るべし。弱き枝には莟をもたせ、強きに花を開かせよ。うつろふ枝を楉にかへて、互に力を合すべし」と、花に慣れたる下知によつて、喚いて懸れば花を踏で、同じく惜しむ色も有。唯一文字に頭に挿せば、二月の雪と散るも有。落花狼藉入亂れ、軍は花をぞ三重散しける。豫て帝の仰によつて、心を合せし女官達、梅方態と打負て、枝も花も折亂され、むら／＼ばつと引ければ、勝色見せて櫻花、「サア姫宮と李蹈天御緣組は極つたり」と、數多の女

月の都云々―赫灼姫の故事をとれり(竹取物語)
男女の中云々―歌は男女の中をも和ぐと古今集の序に出づ

萬乘―禮記に天子は萬乘の國とありて軍車萬乘を出す故云

まじ。韃靼の使は早本國に返すべし」と、宴樂殿に入給ふ。實に佞臣と忠臣の面は似たる紛れ者。目利を知らぬ南京の君が榮華ぞ三重例なき。爰に帝の御妹栴檀皇女と申せしは、まだ御年も十六夜の、月の都の宮人の、胤や此世に降る露の、玉をのべたる御形、管絃の道文の道、文字も働く口吟み、日本で歌といふげなが、男女を和ぐとや。爰にも戀の中立は、變らぬものと詩を吟じ、年より古し御心、兄帝の奢の樣、色に耽り酒宴に誇り、朝政し給はぬ、御異見の種にもと、行義正しき御身持、伽の女官召寄て、浮世咄も呫きの、耳は戀する眼は睨む、心が伽羅の燒さしの、思ひ埋てあかさるゝ。長生殿の方より、「出御成」と呼はつて、廿限りの后達二百人、梅と櫻の造枝、百人づつ片わけて振かたげ、左右に召具し入給ひ、帝「なふ妹君、我萬乘の位に卽き、臣下多き其中に、右軍將李蹈天は遂に朕が命に背かず、明暮心を慰むる第一の忠臣、御身に心を懸ると聞。幸ひ朕が妹聟にせんと思へ共、御身更に承引なく、今日迄は打過たり。然るに此度韃靼國より、無躰の難義を云かけ、既に合戰に及び、國の亂と成べき處、吳三桂などが忠臣顏、口先の道理は誰もいふ事、李蹈天が左の眼を抉て宥めしゆへ、使も伏して歸つたり。國の爲君の爲、身を捨て不具と成、末代無双の忠臣賞せずんば有べかなず。是非に朕が

伍子胥―此人呉王を諫めて眼を東門にかく（東周列國史）

を變ずるは、此大明こそ道もなき法もなき、手に足らぬ畜生國。軍兵を以て押寄せ、帝も后も一くるめ、我大王の履持にする事、日を數へて待べし」と、席を蹴立立歸る。李蹈天引留め、「暫く〳〵、憤り尤至極せり。某先年貴國の合力を受て一粒も身の爲にせず、國を助けしは忠臣の道成に、今又約を變じ兵亂を招き、君を苦しめ民を惱し、剰恩を知らぬ畜生國といはせんは、御代の恥國の恥、此度臣が身を捨て、君を安んじ、國の恥を淨むる忠臣の仕業、是見給へ」と、小釼逆手に拔持、弓手の眼にぐつとつき立、眼蓋を懸てくる〳〵と繰出し、朱に成たる睛引摑んで、「李なふ御使者、兩眼は一身の日月、左の眼は陽に屬して日輪なり。片目なければ不具者、一眼を抉て韃靼王に奉る。國の恩を報ずる、道を重んじ義を守る、大明の帝の忠臣のふるまひ是候」と、笏にすへて差出せば、梅勒王押戴き、「アヽ適れ忠節や候。只今呉三桂の言分にては、否共兩國權を爭ひ、合戰に及ぶ處、天下の爲に身を捨て、事を治め給ふ事神妙々々。忠臣共賢臣共申にも餘り有。后を迎へ取たるも同前。我大王の叡感、使に立たる某も面目是に過べからず。早御暇」とぞ奏しける。叡慮殊に麗しく、帝「李蹈天が眼を抉りしは伍子胥が余風、呉三桂が遠き慮りは范蠡が趣あり。兩臣政事を糺我國は、千代万代も變る

奏聞—奏聞

三皇—伏犧神農黄帝 五帝—少昊より舜迄

五倫—君臣父子夫婦兄弟朋友

飽迄食ひ—孟子の飽食暖衣をとれり

管仲云々—管仲が諸侯を聚めて威伏せし事（史記）

度韃靼の情によつてなり。恩を知ねは鬼畜に同じ。御名殘はさる事なれ共、疾々后を送られ然るべし」とぞ奏問す。大司馬將軍吳三桂たいろう殿にて篤と聞、御階欄干踏散し、李蹈天が膝元にどうと座し、吳「不便や御邊は何時の間に、畜生の奴とは成たるぞ。忝も大明國は、三皇五帝禮樂を興し、孔孟教を垂れ給ひ、五常五倫の道今に盛なり。天竺には佛因果を說て斷惡修善の道有、日本には正直中常の神明の道有。韃靼國には道もなく法もなく、飽迄に食ひ暖に著て、猛き者は上に立、弱き者は下に付、善人惡人智者愚者の別ちもなく、畜類同前の北狄、俗呼んで畜生國といふ。如何に御邊が賴む迚、數百萬石の米穀を合力して、此國を救ひしとは不審しく〳〵。民勞れ饋に及ぶは何故ぞ。上によしなき奢を勸め、宴樂に寶を費し、民百姓を責はたり、己が榮華を事とする、其費を歇めたれば、五年や十年民を養ふに事を缺かぬ大國の德。叡慮も計らず、公卿僉義にも及ず、懷妊の后を輕々しく、夷狄の手へ渡さんといふ心底聊か心得ず。契約は御邊との相對、上に知し召さぬ事。畜生國の貢物、內裏の汚れ取て捨よ、官人共」と、北狄を事共せず、國の威光を見せたるは、管仲が九度、諸侯の會も斯やらん。韃靼の使梅勒王大きに怒つて、「ヤア〳〵大國小國は兎もあれ、合力を得て民を養ひし恩も知らず、契約

阿監—女中頭
中呂—四月
火浣布—火鼠の毛織布
馬肝石—馬の肝に似た石（以上難波土産）
唇齒—仲善き事、左傳の語
卿相雲客—公卿（三位以上）、殿上人（四位）

中にも大司馬將軍吳三桂が妻柳歌君、此比初子を平産し、殊に男子の乳なれば迚、御乳付の役人、其外乳母侍女阿監、役々の官女附添て、掌の上の珊瑚の珠とぞ嘉祝ける。時に崇禎十七年中呂上旬、韃靼國の主順治大王より使を以て、虎の皮豹の皮、南海の火浣布、到支國の馬肝石、其外邊國島々の寳、庭上に並べさせ、使者梅勒王謹んで、「韃靼國と大明國、古より威を闘み、國を爭ひ軍兵を動し、鋒先を交へ、互に仇を結ぶ事、且は隣國の好にたがひ、且は民の煩ひたり。我韃靼は大國にて、七珍萬寳くらからずと申せ共、女の形余國に劣つて候。此大明の帝には華清夫人とて、隱れなき美人おはする由、我大王戀焦れ、深く所望に候へば、此方へ送り給はつて、大王の后と仰ぎ、大明韃靼向後親子の因をなし、長く和睦致さんと、形の如くの御調物。數ならぬ共鎭護大將梅勒王、后御迎の爲參朝」とこそ奏しけれ。帝を始、卿相雲客、今に始めぬ韃靼の難題、すは諍亂の基ぞと、宸襟安からざる處に、第一の臣下右軍將李蹈天進み出、「今迄は國の恥辱をつゝしみ隱し置候。去ル辛の巳の年、北京五穀實らず、萬民饑渇に及びし刻、某密かに韃靼を頼み、米粟數百萬石の合力を請、國民を救ひ候き。其返報に、何事にても韃靼の望、一度は必協へんと堅く契約仕る。君今四海を保ち、民を治め給ふも、一

國性爺合戰

作者　近松門左衛門

花飛云々—三體詩の句にして樂しき春は過去つても禁中は數多の姿を置きて榮華を盡すとなり。

三夫人云々—夫人は本妻他は女官

二月中旬—唐王建の句にて六月ならでば熟せぬ瓜を二月に出す榮耀

越羅云々—越國のうす物蜀江錦

序詞　花飛び蝶駭け共人愁へず。水殿雲廊別に春を置。曉日粧ひなす千騎の女、紅唇翠黛色を交へ、土も蘭麝の梅が香や、桃も櫻も長へに、花を見せたる南京の、時代ぞ盛り盛んなる。抑大明十七代思宗烈皇帝と申奉るは、光宗皇帝第二の皇子、代々の讓の糸筋も、絕へず亂れぬ青柳と、靡き從ふ四方の國、寶を積んで貢物、歌舞遊宴に長じ給ひ、玉樓金殿の中には、三夫人、九嬪、廿七人の世婦、八十一人の女御有。凡三千の容色顏を悅ばしめ、群臣諸侯媚を求め、珍物奇觀の獸物、二月中旬に瓜を獻ずる榮華なり。爰に三千第一の御寵愛華淸夫人、去年の秋より懷妊有て、此月御產の當月、君の叡感、臣下の悅び、聖壽四十に及び給へ共、世繼の太子在さず。豫て天地の御祈り此度に印有、王子誕生疑ひなしと、產殿に名珠美玉を列ね、產衣に越羅蜀錦を裁ち、御產今やと用意有。

夏草—無いにかく

石の火—電光石火の意をとる

しげ糸—粗雑な絹糸。

のり返る—そりかへる

抱帶—夫婦抱くにかく、嘉平次顔を包み嵯峨の扱帶にて縊死せしとなり

さへ見えぬ雨空、未來の暗さが思はれて、夫が悲しうござんす」と、歎けば男も涙ぐみ、「ヲヽ道理、我とても今生の名殘、ま一度顔も見たけれど、燈とては夏草にせめて螢の影でもほしい。ヲヽ思ひ當りし」と、小石拾ふて脇指の、鍔を火打の石の火の、光待つ間の命の樂み。下緒の房のしげ糸を、ほくちとなしてかち〳〵、かつしと打て吹付る、火影も息も幽にて、互に見替す顔と顔、「永い別れになつたか」と、わつと計に縋付、大聲上て歎きしは理り責て哀なり。既に明行烏の聲、泣々胸を押廣げ、さが「サア何にも思ふ事はない」嘉「ヲヽでかした〳〵」と、拔たる脇指取直し、「南無阿彌陀佛」とさし通せば、うんとばかりのり返る。ぐつとゑぐれば手足をもがき、又さし通せば身を悶へ、ゑぐりくり〳〵目も眩めき、娑婆に出る息絶果て、終に冥途に引入たる、敢なき最期ぞ哀成。死骸を繕ひ血刀よつく押拭ひ、同じ刃と思へ共、守にせよとの親の讓り、此刃に死するは最期の不孝。二世迄夫婦抱帶、契りは先の世〳〵迄も、重ぬる床の竹すがき、死顔見せじと押包む、羽織も空も黒羽二重、床几をがはと踏はづせば、色も變じて目眩き、忽ち息は絶てける。惜や五日の花菖蒲、花の躰を血に染て、戀の刃に伏見坂の、世語りとこそなりにけり。

寺町から藤の棚、ま一ぺん尋ふ」と云ふ所へ、西東より大勢つれ、「あの茶見世に泣聲はさがと嘉平次。サア仕てやつたぬかるな」と、ばら〳〵と立懸り、半兵衛小弁にむさぼり付、「死なば嘉平次ひとり死ね。大事の奉公人よふ殺さうと仕たなあ」と髻取るやら引張やら、灯燈上て顏と顏、町人「ヤア半兵衛でないか」半「町の衆か」町人「エヽ優長な、人に世話をやかす事じやないわい。さがが事を仕出せば、損といひ大きな町の騷じや。サアたて〳〵」半「いかい皆の苦勞じや。草臥た上に小弁がめろ〳〵泣ので、共に氣が落て來て少爰で休んだ。どふでこいつら死のふはい。つんと足が進まぬ」と、歸る柏屋止る柏、命枯葉の夜嵐に、又東西へぞ別れける。人影なければ嘉平次も、さがも葭簀ほどいて溜息つき、嘉「今のを聞てか」さが「聞やつたか」嘉「半兵衛が情の詞、エヽ男じや過分な」さが「小弁が優しい心ざし」忝いと嬉しいと、胸に余れば聲にもる、二人が歎ぞ至極成。嘉「ア、何のかのと隙どる程涙の種。サァ今じや念佛申や」と引寄れば、さがは「わつ」と泣出し「まちつと〳〵、まあ待て下され」と前後不覺に取亂す。嘉「待てくれとは命が惜うなつて來たか」さが「アヽ今になつて愛想づかしいふて下んす。命惜いほどなら高で身をうつ事もない逢。初めてけふが日迄、烏の啼ぬ日はあれど、顏見ぬ日もなかつたに、死ぬる今夜に限つて顏

歸る柏屋―歸るは半兵衛止るは嘉平次なり、嘉は實卷になれば柏餅に似たる故云ふ

高で身を云々―頭から身を棄てて此處へは來ないとなり

寸善尺魔—善事は少く惡事は多い

下主の云々—諺にて愚な者は事後に氣がつく

しんろかろ—せつなかろ

鍬をぬかした—ぼんやりした

たをれ—損耗

に、嘉「あれ誰やら、南無三寶見知の有柏屋の灯燈。サア寸善尺魔いかゞはせん」と狼狽ゆる。さがは賢く茶見世の圍ひ、葭簀廣げてぐる／＼ぐる。平もぐる／＼ぐる／＼巻に、二人寶卷の妹脊川、流れの智恵も才覺も、今宵限りのうき身かな。親方柏屋半兵衛、小弁諸共方々と尋かね、半「エヽ下主の智恵は跡から、紋付の灯燈で尋ぬるは無分別。さぞ小弁もしんろかろ。をれも鍬をぬかした。爰で暫く休まふ」と、蠟燭消て立寄るも、同じ茶見世の床の上、夫と知ぬぞ是非も無き。小弁しくしく泣出し、「いとしやさがさんどふしてぞ。傍輩といひ姉女郎、ほんの姉さん妹と、兄弟の契約してあのさん便りに勤めたに、若心中など仕て死なんしたら、私や木から落た猿。親方さん頼みます、早ふ尋て下さんせ」と縋り付て泣ければ、半「ヲヽやさしい事よふ云ふた。親方の身になつて見い。可愛計かさが死ぬると大きなたをれ。年の廻り合せで損するも有事。夫は絲瓜共思はぬが、聞えぬは嘉平次。此半兵衛を男でないと思ふたか。さがを連て退手間でおれが内へ駈込、まづこう／＼した首尾で死なねばならぬ難義、男と見懸て頼むとたつた一言云ふて見い。人にも知られた柏屋の半兵衛、いや知らぬといはふか。ほんにやれ／＼家財賣ても救ふ心底。胸の扉に鎰がなふて無念なはい。アヽ是も跡へん、今云ふて返らぬ事。さあ小弁、中

罪業の程思はれて、呵責恐し鬼踊りの、寺の藪垣物凄く、身を慄はしてぞ立にけり。さがは涙にゆきやらず、「のふ夜明に間も有まいが、何處で死なふと思ふてぞ」[男]「ヲヽ馬場先の松原を最期場と心ざし、來事は來たがあれ見や、星さへ一つない雨空。たとひ奇麗に死んだり共、血汐の躰を雨にうたれ、むさい穢ない死に顔と、笑はるゝも口惜しい。此茶見世を最期場に極めん」と、羽織打敷座を組ば、共に寄添ふ床の上、[男]「サア今が最期ぞや。臨終の一念は無量劫を引と云ふ。なんにも心に懸らぬの」さが「アヽくどい事、思ひよふたこなさんと、一所に死ぬる私じやもの、浮世の本望遂たれば、思ふ事も悔む事も露程もないわいの」と、いへば平は猶泣出し、「そこをいはふといふ事。今死ぬる今迄も我は親の顔を見る。親兄弟の事計、云ひ續けて我は死ぬるぞや。そなたも父母持た身、けふが日の最期迄、父共母共いひ出さぬは我に未練を見せまい爲。嗜み深いそなたじやと思ふて涙がこぼるゝ」と、語ればさがはわつと泣き、「忘れていた物ひよんな事。母様ゆかしうござんす」と、男にひたと取付て、聲の下行涙の流れ、袂に溜る哀さよ。[男]「ヲヽでかしやつた。いふて仕廻ふは懺悔の一つ、罪を助かる種共成。サア夫婦が親の事いふ其詞を冥途の引導、一時も急がん」と氷の刃するりと抜、既に血汐と鹽町の畠づたひ

鬼踊―寺の前にて鬼の面被りて踊る

臨終の云々―一念五百生懸念無量劫(智度論)

思ひよふた―思合うた

遊山所―生玉の境内は見世物などにて賑はしい
いさめ―勇ましくする
太平記―太平記理盡抄を讀みて錢をとるもの
冥途の友―時鳥を死出の田長といふより云（比古婆衣）
それ覺えてか―嘉平次がさがにいふ詞にてまだ覺えてゐるかと也
堅手―頑固
貸す―遊女が客に買はれて行く、買ふは客に請て他の席に出る
辨財天―生玉に社あり
おはへて云々―追ひかけて來たと北向

生玉坂の、草にやつるゝ白露を、あこがれ出る玉か迚、拾へば消る初螢、夜ルは思ひに燃れ共、晝は名にをふ遊山所の、貴賤群集の伊達盡し、人をいさめの藝盡し、茶やが葉屋の軒續き、竹の柱に節込し、稽古淨るり太平記、琴の連歌引替て、松にはげしき雨風や。我は初音か時鳥。冥途の友と鳴連て、いとゞしほるゝ袂かな。それ覺えてか此春の、花の紋日を此床で、二人寢覺の小盃、そなたま一つおれ一つ、さはる手元に萬歳が、あいも興有相の山。花は 相山 散ても根に返る、人は返らぬ死出の山、死して返らぬ道ぞとは、今のうき身を謠ひしか。三途の瀬戸の燒物盡し、親は堅手の茶碗と茶碗、我疵付て我と我、名をや流さん恥しの、我が噂も明日よりは、歌祭文を身の上に、サイモン 坂町邊のな通り筋、柏屋内におさがとて、年は廿の、ヨイ花盛り。客衆客衆の揚づめを、貸すの囃ふの暇無き、つらい勤の中に扨、深い願ひは一ッ屋の、嘉平次ゆへに身をはめて、替るまいとの七枚起請、書て二人が取替す、小指の血汐杉原に、押て心をみかきもり、衛士の燒火と品替る。かの小林が舞扇、是も浮世の ウタイ 形見こそ、今はあだなれ松風や、無常の風も立騒ぐ、辨財天の鰐口の、鰐の口より恐ろしき、追手の聲のあれ／＼、おはへて爰に北向の、八幡宮の燈明も、をのれとしめり行先は、

生神にて常に人の肩上に居て其人の善惡の所業を記録する男女の二神

もがり—紺屋の物干

西を後に—極樂は西にあればいふ

利釼即是—利釼ハ即チ是レ彌陀ノ號、一聲稱念ニ罪皆除カル（般舟讃）

かゝる契—懸るに斯るをかく

堀詰—ほうるにかく

人玉—人魂

迷ひこがれて三重

嘉平次おさが道行　下之巻

南無阿彌陀〳〵、南無阿彌陀佛なむあみだ〳〵、なむあみだ〳〵、南無阿彌陀佛南無阿彌陀〳〵、南無阿彌陀佛を頼ても、西を後に歩み行、極樂淨土に背く共、利釼即是と聞時は、死する刃も彌陀の緣、南無阿彌陀佛の聲細く、心細さや來世迄、かう手を引て行事か、若や離れはせまいかと、引合し手を引寄せて、猶抱締て泣盡す。今日の祝ひの菖蒲の露も、我が袖には憂はしや。つらや端午の紙幟、神にも世にも捨られて、菖蒲刀の切先に、かゝる契りの惡緣と、返らぬ道を辿り行、涙の雨に星消へて可愛ひそなたいとしい殿御、顔も見せぬか五月闇、命も世をも我身をも、今一時に堀詰の、あれ井戸にも女夫有はひの。そちも妹脊は替らねど、こちは釣瓶の繩切れて、横に切行道筋の、是六道の新道と、花屋が辻にしよんぼりと、うき數々を今宵しも、一數へ盡して下寺町の、後夜の響も身にしみじみと、今ぞ二人が一生の、夢の寐覺を松屋町、是が父御の通りかや。我が生れも此筋の、親兄弟も此身とは、しらで夢をや結ぶらん。結び留てもとまらぬは、わしが人玉

まつかせ―よしきた
五重塔西行法師―皆陶器製の品
けづめ―足蹴にされるにかけたり
ちみどろ云々―血途にてちんがいは血にあゆるの轉語
どやくや―混雑
岩をこし―岩て涙川をとむる
番―三十六番神ぐしやう神―俱

をむんずと取、見世の小角へはつたと投付る。起上つて組付を「まつかせ」と引抱へ、上に成下に成、見世の燒物皿茶碗、花入粉微塵、五重の塔、西行法師も痛手を負、ちやぼの鷄飛でちり、けづめに蹴られて長作が、轉ぶ所をどうと乘、備前鉢にて天窓の鉢、覺えたか〳〵と、打碎かれて錦手の、目鼻血みどろちんがいに、長「嘉平次の生盜人、出あへ〳〵」と呼はつて、闇に紛れて迯失せけり。嘉「エヽ嬉しや〳〵、一期の本望とげたぞ。親の御恩の壹歩を、己にのめ〳〵取れふか」と、見れ共〳〵皿打明て壹歩はなし。嘉「ハアヽ今のどやくやに同道めが摑で走つた。サア嘉平次死物狂ひ一寸もやらふか」と、囉ひし脇指ほつこんで、駈出んとする所に、紺屋の手代若者どや〳〵と門口に、「嘉平次殿あんまりな。たまたま歸つて何事仕出す。兎角評議は明日、一足も出させぬ」と、外より門口はつたとしめ、「夜明迄張番」と、棒突並ていごかせず。嘉「譯を聞て下され」と、ことはつても侘ても、斷立ねば男も立ず、一分立ねば壹歩もなし。「死ね〳〵」と來る死神の、引手は爰ぞと窗の子を、踏へてひらりと飛所を、涙の袖にひつたりと抱留て、さが「どふぞいの」嘉「どうとは死ぬるばつかり。足音しやんな泣聲すな」と、身より餘りて涙川、堰も止めよ岩をこし、番は閻魔ぐしやう神、紺屋のもがり劒の山、先には死出の大和橋、踏むは三途の泥の海、

究竟—力強きもの
わせた—おはしたの轉
十六兩云々—十六兩唯取られそれがもとで
しやら臭い—生意氣な

どふなれば迚、そなたを捨ておきはと添ふ氣は微塵もない。南無三帶が切れたか、表から廻つておじや。勝手しるまい連にいかふ」と、表を明て出る所に、印でんやの長作究竟の者連て、長「ヤア嘉平次、親五兵衞は爰にじやげな、逢たい〳〵」嘉「譯もない長作何時じやと思ふ。親仁が爰へいつわせた事が有。用があらば明日成と明後日成と、松屋町へゐて逢へ。歸れ〳〵」と押出す。長「是何ンとする。親仁に逢もそちが用。内々の手形の銀子不埒故、明後日お願申と斷に越たれば、松屋町へいけと有。夫故自身いつたれば、親仁は是へわせたと有。千も萬も入ぬ、銀戻すか戻さぬか」と、無躰に内に入ければ、嘉平次先へ駈込で、壹歩を隱さん〳〵、と皿の上に中蹲踞、前打合せ合せても、膝の合より顯はるゝ金は金にて銀ならず。長「ヤ嘉平次見事な。町人は神佛共主君共、額に戴く壹歩を、股に挾で股が冷よふ。さ程澤山な壹歩を戻すまいとはそりやわやじや。奇麗にしやんと渡せ〳〵」嘉「コリヤ長作十六兩たゞしられ、夫がぞもとに嘉平次が、うろたへ始命沙汰に及んだ。お願ひ申さば申上ゲ、子細の有此壹歩、粉にはたかれてもやる事ならぬ」長「ヲヽ此長作が粉にはたかれても取て見せう」嘉「ヤアしやら臭い、常々の嘉平次とは違ふた。口廣事云ふと思ふな。命を先へ出して置て取て見よ」長「ヲヽ取て見せう」と、摑み付手

をよらず―探られず

ぎえん―縁起

睨けば―睨けば しみづいて―深くぬるゝをいふ

嘉平次も人々の心の中を思ひやり、一言も無さしうつむき、落る涙は盃の是もうへこす計なり。おきはも涙にくれながら、晦日の夜から夕邊迄、案じて一日もをよらず、お心疲れお身の毒、歸つてお休みなされませ」親「チヽ歸らふ是嘉平次、此脇指は死んだ母と身共が祝言の時、聟引出物として舅より囉ひ、枕元の守刀と僞たる故家内に何の怪我もない。ぎゑんのよい脇指、今宵は身共がおきはが親に成替り、聟引出に取する」と、仇とはしらぬ凡夫心。親「サア今宵こそ早歸つて明日の晝迄緩りと寢よふ。やい嘉平次埒明次第起にこい。明日顏見よう、さらば／＼」と立出る。さらばは誠のさらばにて、明日見る顏は死に顏の、生顏見るは親と子の、是ぞ此世の別れ成。嘉平次は親の影隱るゝ計見送つて、内に駈入り窗の下、睨けばさがは消入計、泣しみづいて音もせず。嘉「是々萬事皆聞てであろ。忝いと云はふか、悲しい事と云はふか。是で結句嘉平次が、親の冥加に盡るわいの」さが「否々そりやこなさんの不孝と云ふ物。今の酒とは銀そうな。どこも首尾よふ仕廻ふておきは樣と夫婦に成、親御の心を悅ばせて下さんせ。私獨死ぬれば濟。どの道からどう云ふても、只こなさんがいとしい。悪ふ聞て下んすな」と、眞實見へたる涙の躰。嘉「ア、ひとり死なせてよい物か。囉ふた一歩は百計、銀さへあれば何談合も仕易い。譬

萩燒—長州萩の産にて黄白の釉藥あるもの

無明の酒—女に迷ふ心

持參した」と、羽織の下より一升入の祕藏の瓢簞取出し、「サア親の酌一つ飲」嘉「あつ」と云ふより素燒の盃取出す。親「否々小さい、そちが飲は知つてゐる。鉢でも茶碗でも大きな物で一ッのめ」嘉「さのみ深ふはたべませぬ」どれか是かと茶碗尋る其音を、聞にもさがが袖しぼる、露の萩燒大皿出し、嘉「慮外ながら」と受れば、親「てうど飲」と、瓢簞傾け注ぎ懸る。酒にはあらぬ糀の色、花の壹歩のから〳〵〳〵、さら〳〵〳〵と七八十、皿うづ高く盛あぐる。子は惘れうつかりと、親の顏のみ打守れば、親は「わつ」と聲を上、親「やれ慈悲知ぬ親の酒を見よ。誠の慈悲の味はひを呑みてしれや」と泣ければ、嘉「ハア、有難し」と計にて、親の膝に打もたれ、聲も惜まず歎きしは、性は善成淚なり。包むに余る親心、「不便や可愛や此春より、うろたゆる躰を見て。此酒一獻飲ませたく、幾たびか思ひ寄たれど、否〳〵氣の定らぬ間は却て毒酒と扣たり。此酒飲で方々の恥辱を雪ぎ、無明の酒の醉醒ませ。身共は年寄氣じやうにて、病といふ事知ね共、五六日は己ゆへ胸も痛んで不食する。兎角人の親には病と成も子の心、藥と成も子の心。今宵の異見を聞入て、彌〳〵心を持直し親の藥と成てくれ。長生したいと思はね共、せめて卅二三迄とつくと見立、人にないて死ねば樂じや」と咽返り、成人の子を引寄せて、背中を撫て泣くどく親の心ぞ哀成。

十方がどこもかも

ツ屋の五兵衛が一分立て見せう。サア返事、サア何と」と拔懸て責つくる。おきはは柄に取付て「伯父樣殺事はない。わたしが死ねば十方がすみます」と、縋り止めて泣叫ぶ。さがが悲しさ身に迫り、死に手は爰に只ひとり、父御前の目の前で死で見せん と涙の帶、たぐり取付、登ん〳〵と心計に力なく、足は泥に引締り、帶は中よりふつゝと切れ、芦邊にどうと落水と共に涙ぞ流れゆく。迚も死身の嘉平次、親の心を休むるは安い事〳〵。是一生の孝行おさめと觀念し、嘉「ハア誤り入て御尤。若氣の至り云替せしを捨難く、今迄御心背きしは不調法。是より魂入替御意を背かず、如何にもおきはと祝言」と、云へ共さがは心を知らず、誠と聞て恨みやせん。死際迄僞事、親を欺すか勿躰なや、と思へばせきあげ聲吃り、いひさしてこそ泣居たれ。親「いや〳〵今迄幾度かたらされた。其心底に極つた證據が見たい」「ハテ證據とて何と致そうぞ」親「ヲヽ、證據には今宵直にこちへ來て、祝言の盃せい」嘉「夫は余りな親仁樣。申かはした女にもとくと合點させ、何國も首尾よふ埒明たせうこ、明六日の晝迄待て下され」と、云へば親も打うなづき、「尤々。然らば祝言は其上、姉も呼寄せ一家集り盃せう。只今心の定まつた印の盃、一つ飲で身にさせ」嘉「否出見世で終に酒飲ず。酒とてはござらぬ」親「ヲヽそう有ふと思ふて酒は身が

慈悲とはどこへ—どこへ盡せといふか
どしやう骨—どは罵聲性骨也

も立ませぬ。心さへすはつて家を蹈へる覺悟なら、おさが樣を呼入て、兎角お身の立樣に、わしや在所へ戻つて尼に成共成まする」と、道を正して泣ければ、さがは聞より氣も亂れ、「いとしやあのお人も、心の內は妬ましかろ。わしが離るゝことも否。父御のも尤なり。エヽ死にやうが遲かつた。今鹽がさいて來て、此身を取ても往けかし」と、身を悶へてあこがるゝ。嘉平次は「只何事も親の慈悲、御免」とよりは一言も、泣て俯伏く計なり。五兵衛大きに腹を立、「何事も親の慈悲とは、扨は此親は慈悲を知らぬと思ふよな。ヲヽ慈悲知らぬ。慈悲知らぬ親持たが不祥。此おきはにも親が有。をのれと夫婦の約束で、人の娘を嚾ふて、こつちの息子が合點せぬ、そつちの娘を返すと、すご〳〵と戻して一ッ屋の五兵衛が世間へ面が出されうか。親に恥を與へる子に慈悲とはどこへ。エヽ淺ましい根性、二本指を侍、一本指ば町人と計思ふかうつけ者。大小は此胸に有、武士に劣らぬ五兵衛とけふ迄人に笑はれぬ。其世忰がどしやう骨、茶屋の銀負ふて逃隱れ、死でも恥が拔はせぬ。をのれが身はすたつても此五兵衛は立通す、此おきはと夫婦になれ。サアどうじや。サア否か應かの返事せい。いやといふと此脇指。こりや、ハテびつくりすな己は切ぬ人も切ぬ。おきはが母は身が姉、爺は他人。おきはを寡にする替り身が腹に突込で、一

物際―節季の間際
虎口―原本のまま
菖蒲の盃―節句祝の盃

ア取付てぶら下れ」と、共に手をかけ筒非筒、非筒にあらぬ釣瓶下し、干潟の沼を踏む足も、淵に沈むが如くなり。左あらぬ顔にて、嘉「只今臥せる折から何事の御用がな」と、門の戸明れば、親五兵衛常に數寄の大脇指、「遠慮せずに此方おじや」と、手を引入るは養ひ嫁のおきは。思ひがけなき嘉平次、こりや何事が起つた。さがが嘸悲しかろ、と挨拶も何するやら、聲も上洩る計なり。おきはは道々泣たる顔、親も涙を目に一ぱい、親「ヤイうつけめ、をのれ商人の叉してはく、見世を明て余所歩き。晦日前物際は、武士の軍の虎口ぞい。跡の廿八日より出見世を出、朔日は天滿にて阿房を暴し、大事の五月の節季を捨、今日迄は何處に居た。たつた今家主より知らされし、淸水燒の仕廻物買に、京へ上つて今日歸り、親仁も機嫌が能いとは、五日にも十日にも、親に顔を何時見せた。さがとやらが顔さへ見れば、親の顔も兄弟の顔も、をのれは見たふ有まい。鹽町の姉が禮に來て、親子兄弟菖蒲の盃する迚、今日の節句は嘉平次の顔が見へぬと、うぬが事悔んで可愛や泣て歸つた。去ながら、こりや此おきはが顔ばつかりは、否でも應でも一期見せねば叶はぬ」と、いへばおきははわつと泣、「エヽ情ない嘉平次様。嫌な物私が無理に添はふといふにこそ。お前の心が不定で、外を家になさるゝゆへ、親仁様の御苦勞、一ッ星の家

三度とてモウ一度は謎なもの

銀の瀨戸―金の工面の難關

三世相―木火土金水に因りて人事を占ふ書

仰顚―仰天

道成寺―安珍淸姫の故事

是迄こそ太儀なれ。何處に何の障りもなし。二人が斯う竝べば夫婦仕居し同然なり。是爰がそなたの内じやぞや。エヽ口惜い世間廣ふ内へ入れ、親にも逢せ、町へも廣め、そなたに世帯を打任せ、商ひも仕擴げ、嘉平次が女房は勤の者の風はない、何程の大世帯も捌かねまい女房じや、といはせうと思ふたに、叶はね事は叶はぬ物。たつた僅か壹貫目余りの銀の瀨戸を越かねて、浮名を取て死ぬる事、無念なはいの」と齒ぎしみし、頭も上ず泣ければ、さが「さればいの、わしとても一日成と父御樣に御奉公、姉御樣を姑御と給仕へせう物と、明暮の願ひ事叶はぬのみか此しだら。及ばぬ願の逆罰か。此前去人に三世相見て貰ひしに、先生で佛前の茶湯の茶碗打割りし報ひ有、愼めとの物語。今思ひ合すれば、こなさんの此商賣を、打破つて身を果す、茶湯の茶碗打割りし、因果が廻り來ました」と、又伏沈み泣居たり。嘉「かう成身の三世相、ろくな事が有物か。夜半も過たいざおじや」と、既に出んとする所へ、「嘉平次用が有爰明い」と門たゝく。嘉「誰じや夜更てやかましい。用があらば其處からいへ」「たわけ者親の聲を知らぬか。五兵衛じや明い」嘉「はつ」といふより仰顚し、たつた一間の濱納屋を、さがが素振も見せ共なし、何處に隱さん道成寺の、鐘はなけれど卽座の智慧、窻の貫に帶をきつと結び下げ、嘉「サ

仕廻物―掛物
やだ―弱點
とてもの事―序に
わつさり云々―賑かに騒ろう
兵―剛の者
跡じやろり―跡退り
二度起た―籤に二度あるものは

の見世を捨て、何處へぬつくり這入てぞ。書出しやら懸請やら、今宵迄も尋て來る。返答にも困つた。エヽ譯の悪いお人じやなふ」嘉「尤々。京の清水燒にずんと安い仕廻物が有と聞、人に先を越されまいと、俄に上つて漸々今朝下つた。日比やだの有此嘉平次、さぞ逃た走つたと評判で御座らふ。親仁も商ひに精出すとていつにない機嫌で、今夜は出見世に泊れといはるゝ。何處も首尾に成ました。家主殿の錠そうな。サア鎰が有なら明て下され。とてもの事に火も囉はふ。行燈に燈して下され。何かと皆の御苦勞。其代に今度の清水燒には利がある。わつさりと振廻を」と、さがを圍ふて身を反け、此期に成ても口利口、後を見せぬは兵なり。其間に錠明て、若者「是火も燈し付ました。茶でも所望に御座らぬか」と、表へ出れば嘉平次は、跡じやうりして入替り、「もう休んで下され。明日お目にかゝらふ。いかふねむたい寢まする」と、はたとさして内より懸鎰しやんと締れば、さがは溜息身を顫はし、「早ふ死でのけたい」と、呫くも只涙なり。表には猶不審を立、小側に打寄、若者「今夜の歸り合點がいかぬ。云分といひ飲込まぬ。清介は親御に此樣子知らせておじや」清「まつかせ」と駈出す。者「こつちも是で二度起た。ま一度起るは定の物」と、呟き内に入にけり。嘉平次表に氣を付、「サア向ひの門もしまつた。

ゐて―住いて

くり石―圓く小さき石

●

見るめ―海松にかく

我と我、心で狭く住なせし、日本橋にぞ著にける。さが「なふ平様、どれ顔見せさんせ。いとしや漸々に氣が暗ふならんす。どう思ふてぞいの。此様にうか〱と、唐高麗を歩いた迚、壹貫目と上つた銀ふり涌ふ筈もなし。其中人に見付られ、見苦しひ目に逢ふ時、難波燒の嘉平次が死んでものけず、茶屋の銀負ふてあのざま見よといはれた時、此比天滿で姉御さんのおしやんす通、御一門迄頬汚し。とても生ぬ覺悟の上、早ふ死なふじや有まいか。アヽ思へば姉御さん、こなさんを大切にいとしそうなお詞。さがといふ名は聞て成、大事の弟を先度の奴が殺しおつたか、恨めしいと憎みをうけうが悲しい」と、手に取付て泣ければ、嘉「チヽ今宵は延さぬ合點なれど、先そつと出見世へゐて、小刀でも用意し、我宿と名づけた出見世の門口、夫婦手を取最期の門出する心。嬉しや通りの人にも逢なんだ。サア這りや」と戸を押て、嘉「南無三寶、つい引樞差て出たれば、親仁からか家主からか門に錠をおろした。こりやかう有筈」と、四邊を尋、くり石拾ひ、力に任せしやん〱〱、しやん〱〱と打響き、四邊はしん〱遠音の谺、紺屋に聞付、「すは盜人よ。捻棒よ、灯燈」と若い者共駈出る音。さがを後に羽織の下、裙を被きの海士ならで、人の見るめも覺束な。若者「ヤア嘉平次殿、此中はどうじや。際の日に商人

毘首羯磨―工巧を司る天神

借錢檀―赤栴檀にかく嵯峨清源寺の釋迦は赤栴檀にて作るといふ

信濃紬―その縦糸は至て細き故云ふ

られぬ。懸請衆なら、夕べ請ふたがよいわいの。節句しも何事ぞ。惣じて其處は出見世で火を焼事も御法度。母家は松屋町九之助橋の角、一ッ屋の五兵衛殿隠れはない」罵「いや懸請では御座らぬ。伏見坂町柏屋のさがと申が、是も二日の夜から見へませぬ。今日で四日、さま〲にしても知れませず。こんな所によもやとは存ながら、嘉平次様とは深い中、念の爲で御座る」といふ所へ、利窟臭い白髪まじり、「嘉平次どのはまだで御座るか。歸られたらいふて下され。西國橋印傳屋長作から參つた。手形の銀子不埒につゐて、明後日お願ひ申ますと」若者「アヽ聞に及ばぬ。爰は出見世の棚貸、何事も存ぜぬ。本宅へ〲」と、取合ねば詮方なく、皆東へと走ける。紺屋の者共あきれはて、「なんと清介、此さがといふお山見やつたか。ムヽ其方は終に見ぬか。さい〲爰へ泊りに來た。それは〲よい女房。如何にも〲嵯峨の釋迦、毘首羯磨の御作といふてもだんない」と、いへば一人が頷て、「ムヽそれで聞えた。嘉平次の借錢檀」と打笑ひ、しむる門口しん〲と、川音更て靜なり。世の中に秋果よとて付し名か。今は身にさへ秋のさが、平と二人が二日の夜、身のうきまゝにふつと出て、何處をとぼ〲行先の、當もない駕籠かりの世に、死なねばならぬ信濃紬の糸よりも、心が細く氣も弱く、廣ひ國をも

田簑の島云々―夫木集に「誰か聞く難波の夕のみつなべに田簑の島の鶴の諸聲」

梅の雨―天神の梅と梅雨にかく

大和橋―嘉平次の出店ある所、渡るの縁に用ゐたり

淡―泡

際は素燒の云々―あきはは空閨を守る

菖蒲の節句―五月節句紋日はやがて其祝日

外樋がうつとしい。身は濡ても厭はぬ。是を爰に捨置て、俄雨に逢ふた人、著て下されば本望。是はさがが囉ふた」と、手を上て引しほり、疊んでひらりと捨ければ、平は立寄拾取、押戴きて雨に著る、田簑の島の寡鶴泣て立たる哀れさに、さが「ア丶忝ない、誰かは知らねど能ふ拾ふて著て下んす。私も其下に暫しが程の雨宿り、こなさんも其通、其雨外樋を一樹の蔭、他生の縁で御座んす」と、駕籠は見返る、嘉平次は見送る中に降る涙、無情や神の梅の雨、降隔てゝぞ 三重 別れゆく。

中之巻

心々の商ひも、皆世渡りの大和橋、下行水の淡よりも、色にぞ銀は消やすく　際は素燒の明德利、今日の菖蒲の節句にも、見世指身皿とやかくと、人も火入や灰吹も、碎けて物や思ふらん。繁昌の地の紋日さへ、更て淋しき五月闇。駕籠の者共提灯提げ、嘉平次が見世割る計に叩け共、誰そと咎むる人氣もなく、頻りに叩けば家主、紺屋の若い者共大欠して出合、者「誰じややかましい。一年に一度の五月の節句、我人皆休んでゐる。嘉平次殿は晦日前から爰にはいられぬ。二日の晩方ちよつと戻つて、それから影も見せ

打れてゐようか」とぶちかくる、腕捻上ひつくり返せば起上り、むしやぶりついて摑き合ふ。さがはあせつて、「なふ喧嘩〳〵」と呼はる聲、客も駕籠も醉潰れ、「させぬ〳〵」と割込で、ひよろつく足を踏こかされ、客「さへ人踏だは堪忍せぬ」と、相手がどれやらめつた撲、大道へまくり出、大臣も泥まぶれ、駕籠の者もちんば引、さがは嘉平次かこはんと身を捨て駈廻る。喚く人聲雨の音三重瀧を流すに異ならず。祝子宮奴棒突散し、「社内の騷ぎ狼藉千萬。出よ〳〵」と制すれば、どやくや紛れに長作は、行方なく迯失せたり。茶屋は思はぬ踏立、「はや日も暮た御門がしまる、お客樣もはやお立。さが樣は大事の身、駕籠の衆早う乘せて往つしやれ。お客樣も笠貸ましよか、但お駕籠かりましよか」客「いや〳〵駕籠は錢が出る、只貸す笠を借ぬが損。さがは夜る晝身共が揚、道の間も算用の内、駕籠について歸らふ」と、跣足に成て出ければ、さがは心も暗紛れ、「何としてじや何處にじや」と、見廻せば、アヽ悲し、平は鬢もかき亂れ、亂るゝ雨の藤の蔭、濡て立たる味氣なさ。勤とて口惜い、大事の男を打擲かせ、濡しほるゝを見て居ながら、我身は駕籠に乘る事か。エヽ儘ならば飛下て、共に抱ても濡う物、と見やれば男も目を合せ、焦るゝ中のうき涙、いとど雨こそしきりなれ。さが「なふ駕籠の衆、先待てや。わしや此

人かと思ふて—裏に畜生の意あり

せちがな奴—小才子

好い中の垣—諺に好い中に垣せよ

頤を云々—見込が違ふ

めつかう—眞額

にゐるのも見付てじや。姉の前で能ふ恥を與へた。人かと思ふてはまつた。涙が溢れて口惜い」と、齒嚙をなして泣居たり。長「ヲヽ成程姉とは一言で見て取た。買主の方へ往べき手形が、中にとまつて有とは、何じや女の猿智惠。先へは此長作が請取して上た。あれは身が方への請取。をのれもせちがな奴じや者、銀も見ずにあたゝかに請取をせうわいなあ」嘉「エヽさもしい詐僞め。ヤイ銀が欲くば穢い云懸せうより、奇麗に家尻きれいやい。さつてもたくんだく今思ひ當た。嵐の芝居の曾根崎の狂言が、面白ふて再々見ると吐したが、能ふ見覺えた。取も直さず油屋の九平次。惣じて狂言淨瑠璃は、善惡人の鏡に成。をのれは詐僞の手本にするか。師匠の九平次より倍越た大詐僞。此春をのれに三百目銀借た。念比の中手形もいらぬと吐したれど、よい中の垣と預り證文してやつた。それに引續ぐ合點なら差引して算用せい。こりや油屋の九平次、醬油屋の德兵衛をだました格を出したらば、少と頤を喰違よふ。ちよつと手をつけるが最期じやぞ長作」と、腕まくりして捻寄れば、長「ヤアぴこく するない、わやにしてもさせぬく。手形の銀は手形の通、取所で取て見しよ」嘉「ヲヽ三百目の手形に十六兩は得遣まい」長「やるまいとはどふして」嘉「先かうして遣まい」と、めつかうほうど喰はする　長「ヤア二才め

公界—人中

構へて—注意して

付屆—揚屋へ時折に與ふべき金

つゝなや—せつない、苦しい(俚言集覽)

中使—長作をさす

敎る智惠云々—智惠のない神に智惠付ると云諺をとりて知らぬ者に智惠付るにいふ

くる。姉「アヽ心もとないけたゝましい、何事が起つた。こりや爰は公界じやぞ。誰も人の名はいはず、樣子計ちやつといへ。構へて人の名をいふな」と、心のきいたる姉の利發。使はるゝ丁稚も氣轉者、丁「角屋敷の親仁樣がお出なされて、「彼の板圍ひの惣領殿が、一昨日から在所が知れず、付屆借錢乞親仁樣も一分立たぬ、お前の留守も合點がいかぬ。兄弟の事なれば眼醫者にかこつけ、惣領殿をかくまへたに極つた。姉も共に勘當じや」と喚き散して御座りました。それで走つて來ました。アヽつゝなや」と息をつぐ。姉「アヽそんなら往ざ成まい。往ひでは叶はぬ所も有。見捨がたない事もあれど、男も女も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼使、アヽ女郎樣お邪魔しました」と、怪我の振にて駕籠にはつたと行當り、姉「ハア駕籠が有とは氣がつかなんだ。是に限らずうろたへては、鼻の先な事に氣がつかぬ事が多ひ。商ひ物の請取なら、買主の手へ渡りそうな物が、中使の手に握てるとはの、是も氣のつかぬ事」と、敎る智惠や天神を、伏拜みてぞ歸りける。嘉平次憚る方もなく、駕籠踏散し跳り出、長作が髻取て引居へ、「此嘉平次を盗人のかたりのとは、何の頰顚で吐いた。先は武家方、中取したと思はれては出入がならぬ。先請取書て渡せ。銀取て遣ふとうま〳〵と能ふ喰せたなあ。今のは身が姉じや人、駕籠

なめすぎた—無禮極る

おゑ樣—おかみ樣

捨られた。慘いぞや〳〵。なんと元へ戻して、おれが念比してやろふか。嘉平次などとは違ふた。十貫目や拾五貫目は手の惡い事せずに、見ん事今でも〳〵じや。此方も憎かろ筈がない」と、しなだれ寄て手を取れば、さが「アヽいや〳〵なめすぎた置んせ。あれ町の御内義樣も見て御座る。勤の者はあんな者かとさげしみが恥かしい。たとへ平樣が盜人で有ふが、强盜で有ふが、いとしうて〳〵命をやつた此さがじや。何程此方が佛程正直でも、顏も見たふないわいの」長「サア先一旦そういはねば譯が立ぬ。それも此方に合點じや。今に嘉平次が大盜人仕をつて、一ツ屋の五兵衞、鹽町の姉が首にも繩付、其身は此方の裏の西の方に烏のとまつた樣に、首計になつた時、長作樣念比しやうといはふより、今思切たれば、彼奴も仕合此方も德。どれ前の樣にむつちりと肥てか。嘉平次めが吸取たか。肌を見たい」と懷へ手を入る。取て突退け、さが「小見ともないおかつしやれ。いひにくけれど此さがと、平樣とは一心づくで逢ふてゐる。こなたの樣な口前ではないぞや」と、おろ〳〵淚の腹立聲、嘉平次はもう是迄、堪忍袋も破れかぶれ、飛で出んとする處へ、姉の內より迎ひの丁稚、大息ついで、「申おゑ樣、ちやつとお歸りなされませ。早ふ呼で來い、と旦那樣は門に出て待て御座ります。はやう〳〵」とせきか

追付て―追付戻ると也、てはてか

無か―無くば

術ない―仕方がない

棚―見世

あつければ―苦しければ

いへ共さがは姉の前、駕籠に共いはればこそ。さが「いやちよつと彼處迄。追付て御座んしよ。今日入らいで叶はぬとは私も聞たが、あの樣の賣物をこな樣が取次で、屋敷方へ賣んした其銀が、十何兩とやら昨日渡る筈じやげな。請取も往つて有との事。大事無か私に渡さんせ。左無か先少酒でも呑で待んせ」と、いへば長作、「ヤア〱大それた事いひますの。酒處で御座らぬ。エヽいかに身が術ないとて不器用な氣に成おつた。如何にも賣物は取次、銀高壹貫貳百三十目代、拾六兩慥に彼に手渡しして、則自筆印判の請取を握てゐる。地躰是は九之助橋、親五兵衛の棚の賣物。銀はおのれが使ふて、親の手前の算用立たず。此長作を横道者にせうとは、底意の怖い盜人。此物騷の世の中、此方の所も裏は野じや。内の勝手は知てゐる。必用心さつしやれ。身があつければどの樣な事仕樣も知れぬ」と、眞顔の云分。さがははつと色違ひ、兄弟は猶、身にかゝる難義を察して駕籠の中、くはつとせき上げ身をもがき、嘉「エヽ無念やかたられた、姉の手前が恥かしい。いつそ駈出踏で腹をいよふか、出ては姉の恥辱か。早ふ歸つて下されかし」と、千萬碎く氣の働。胸の吹子に怒の火炎、駕籠も搖めく計なり。長作駕籠には氣もつかず、「是さが殿、驚く事ではない。地躰あの氣な生れ付、それを知らずに仇惚して、此長作は

てんや者―商賣女
けつかつた―ゐよつた
嵐―俳優嵐三右衛門
散し太鼓―芝居のはねの大皷
つんと―とんと

やてんや者じやないぞや、身を賣る女子じやないぞや。肌ふれねば聞ぬ」と喚いたりや、「こりや誠の契りは重て。約束のしるし是じや」といふて、引寄しつぼりと頬摺して、「サア往ね〱」と突出さるゝ。私も名殘が惜うて、跡覗いて見たれば、氣味悪そうに見世の手水鉢で、頬を洗ふてけつかつた」と、語れど二人は余りの事、紛らす耳の余所の町、風に嵐の芝居果て、散し太皷の聞ゆれば、南無三寳長作が來ぬ先に、姉も往んで下されかし、と飛立計の駕籠の中、今にも來たらば何とせう、のめ〱共出られぬ首尾、出ねばぐはらりと筈違ふ。氣を揉でも詮方なく、何御存知なき天神を、俄に頼む計なり。約束なれば長作、暖簾の書付見て、「ムウ清水屋は是じやな。少たのも。道頓堀の茶碗屋嘉平次は爰にか。約束の通長作が來たといふてたも。嘉平次〱」といふ聲に、兄弟驚く其中にも、姉は知たる駕籠の中、思遣りては諸共の心づかひぞ殊勝成。さが聞付て走出、「ヤア長作樣久しうごんす」長「さがどのか。嘉平次が來るからは、此方も爰にと思ふた。我らは今日侍衆の相伴で、嵐の芝居から直に鯉屋へ往く筈で、是袴の躰なれど、嘉平次が何やら内々の一物、今日入らいで叶はぬ持て來てくれといふ。棧敷の事武士の前、おうといふたが何の事ぞ。つんと此方に覺へがない。嘉平次は何處にぞ。早う逢ふて聞たい」と

曲もない—なさけない
有る事か—有らう事か
骨頂—最上

便はなけれ共、あの人ゆへに迷はつしやる母樣がいとしひ」と、慈悲の涙も眼に余る、幾松駕籠に當ての口說言。嘉平次は身も縮み、命も縮る計にて、消も入たき心地なり。私は嘉平次が、駕籠に有共氣もつかず。「エヽ曲もない兄きの心、今ならでは申さぬが、私が眼病もあの人ゆへ。聞て下され有事か、「おきはと其方と夫婦になれ。其代に家屋敷、商ひの株共に親父の跡を繼する。合點せい〳〵」と、道ならぬ事耳かしましく、所詮私が死ぬるか、かたはにして下され、と山上樣へ願をかけたれば、御利生で此病。つゐ時花目の顔すれど、眼は綿繰で繰るやうで、響いて物もいはれぬ。天滿に上手の眼醫者が有と連てお出なされしゆへ、道すがら物語も、と是迄は參りしが、養生はしませぬ。私が盲目になつたらば、兄樣の一人して見世の事も取捌、内に身が居つたら、自然らおきはさまと一つになる氣も出來ませう。エヽ私等迄身を捨て、是程に思ふとは思遣も有まい。聞へぬ所存な兄きや」と、目を抱へて泣ければ、供の竹がさし出口、「嘉平次樣といふ人は嘘つきの骨頂。私にもきつうほれて居る。いつぞ日の暮に出見世へ來て、思ひを晴させてくれと、口說つしやるいとしさに、お使の序に寄たれば、「今宵は遁れぬ客が有。重ねて此方から便宜せう。心ざし嬉しい」と、錢三十程包んで懐へ入らるゝ。むつと腹が立て來て、「私

世話が病―世話をして苦勞をする
たまか―忠實
身躰―身代

めあまる、涙は聲にはやもれて、蜱なふ幾松、そなたは仕合な。よい時に眼を病で淺ましい事も見やらぬ。今のお山が、今日一日は奥の客に身を賣ながら、座敷を忍んで駕籠にかくれて居た躰は、外に深い人に逢ふ手管とやらで有ふが、お山はお山の道にもせい、其深い男は、誰じや知らぬが、有まい事じやないかいの。定て此方の嘉平次もまああの通り。嘉平次の惡性では、お山と相駕籠で外樋の下に屈んで居ようも知れまい。見るも悲しい淺ましい。是といふも親の恩を忘るゝゆへ。心もみだらに身を持崩し、人にも人とはいはれぬ。父樣や母樣に娘は有息子は有。何を不足におきはといふ子を囉ふて、乳母を取守を付、うき世話が病みたかろ。少い時から女子の手業も敎込、心もたまかに育てあげ、嘉平次と夫婦になしたらば身躰の藥なり、商ひの勝手も能〱繁昌もさせたいと、嘉平次が可愛ひばつかりに世話をやんで病み死の、母樣の恩をはや忘れ、可愛げにおきはもほんの天竺牢人、見世の若い者共、彼の女子始として、兎や斯う評判する時は、姊が耳へ八寸釘を打るゝよりも猶こたへる。若も自然此駕籠に、お山と嘉平次と乘合て居る處、今の客が見付て引摺出して踏とても、何と云譯有物ぞ。見こそせね聞こそせね、定てさい〱行先で恥をかきつらふ。其身一人の恥かいの。親兄弟は何になれ、來世の

さながら—あの通りの若者と也

い。頭痛がしやうば爰へ來て寢やしやれ。どりやお迎ひに自身お馬を出されふ」と、表へ出るひよろ〳〵足、駕籠の者共生の醉、「さがさま〳〵、迷ひ子になつてか。返せ〳〵さが樣返せ。ヤア爰にか。酒呑むまいとて手が惡い」と、姉に取付手をもぎ放し、姉「エイ狼藉な。さがとやらじや御座らぬぞ。此方や道通り、雨宿りに茶屋の見世へ腰懸れば賣物と思やるか。阿房くさい」と叱られて、客「南無三寶さがのお山と取違へ、愛宕山へ上ろとした。御免〳〵」のちろ〳〵目、あたりを見廻し、「扨こそな愛宕山から見下せば、嵯峨は一目に見付たぞ。駕籠から帶の端が見へるぞ。さがを探し出さうか」と、寄らんとすれば、さが「アヽ是々、出まする〳〵許さんせ」と、外樋の影より這出て、「こなさん達欺して隱ん坊したれば、つい探し出された其代に、何程成と飲さんせ。何處のお内義樣やら麁相な、こらへて下んせ。みんなごんせ〳〵」と奥に入れば、嘉平次はさがを放れし嵯峨松茸、選殘されし風情にて、駕籠に縮んで居たりけり。姉はもとより商屋の、妻となる身の眼も早く、ちよつと見るより一寸やらず。駕籠なは弟の嘉平次、扨情ない身持かな、引摺出して叱らふ。いや〳〵供の下女が見る處、さながら若い者、人中で恥もかかされまい。身の成果が可愛ひ、父樣がいとしひ、おきはが心が無慙な、と樣々胸にせ

濡かけ—色仕懸

それとも道—夫とも見知らずにかく、次句は西行の歌をとる

飲しこり—飲て夢中になる

どさくさ—混雜、次句は業平の歌をとる

ざゝんざ。伏見坂から道頓堀、壹厘殘さず物の見事に仕廻ふて、待て居や節句から面も笠も脱せう。ヤ借錢の笠は脱でも傘は放されぬ、又降て來た。南無三寶あれ見や。あの菅笠著て來る女房、鹽町の姉じや人。目の惡い角前髪は弟の幾松」さが「ムヽ〳〵ほんに恰好が能ふ似やした。それ〳〵爰へ御座んす。こなさん逢ふてもだんないか」與「いかな〳〵俤も見せともない。あの幾松が手を引て來る、腰の太い尻のひよつと出た女子、姉の内の竹といふ食焚。彼奴が見た事聞た事、其日の内に大坂中に事觸れ、此方が取沙汰、何のかのと親仁に告るいやさに、少し濡かけて欺したりや、ほれられ自慢でもう其事を觸れ歩く。それで彼奴が名を筒拔と付て置。そなたも姉の知てじやげな。アヽうるさ、何處ぞにちよつと隱れ」笠、隱れみのなき身の置處、駕籠の雨外樋打明て、二人が膝を組合せ、身を抱合て身を忍ぶ。姉はそれ共道の邊の、淸水が見世に少時とて、「爰借ります」とぞ休らひける。奥には猶も飲しこり、踊るやら謠ふやら、騷ぐどさくさ若草の、妻もこもれる駕籠の中、あられぬ姿顯れて、姉や弟の見咎めん。さがは奥より尋ねんかと、こはさに猶も身を寄せて、締めあふ中の冷汁は、外樋漏る雨の如くにて、肌著も絞る計なり。奥の客がだら聲にて、「こりやさがは何してじや。色が無ふて飲ぬは

ずんど堅い—餘程堅い

負た—借金

生身に云々—生あるものには自然に食を與ふ

建山—乾山にて尾形乾山の造りたる陶器

はづまう—踊らう、きばらう

ぬ鎌親仁、「チヽこりや出來した、イヤ能ふいふた。ヤイ畜生吟味する根性で、茶屋者とくさり合、親にも知らせず夫婦に成極めして行先が借錢だらけ、人に疎まれ指さゝるゝ、是が又人間か。五兵衛が眼には畜生と見へるはい。茶屋者と緣切ておきはと女夫に成迄門詰も踏さぬ」と、打たぬ計の首尾なれば、母屋へとては禁制。姉聟は他人なり、ずんど堅い商人。一人の弟は眼病氣、問談合も誰とせう。いろは茶屋から坂町かけて、負ふた門は七八間、銀高僅壹貫目余り、身を刻んでも當なければ、欠落か自害と思ひ定た所になふ、生身に餌食天道人を殺さず。覺えてか此前、扇風呂でそなたの事で大喧嘩した、西國橋の印傳屋の長作、味な事で其喧嘩から、兩方心底見屆、歯の根も喰合ふ念比、彼奴は所帶持なれば、少の取替もしてくれる。此長作が肝煎で、中國のお屋敷へ親仁の棚から錦手建山音羽燒の、皿の鉢の茶碗のと、十五六兩が物賣てくれ、晦日にお銀が渡る、請取書ておこせと四五日前に取に來た。定めし昨日請取つろ。今日嵐の棧敷に侍衆につゐて居た。おれも芝居を立樣に、棧敷の裏から音信て、直に爰へ來てくれ、と旁々約束して來た。今では此平に命もくれる挨拶、筈違へる男じやない。芝居果に長作が銀持て來るか、爰へもぱつとはづもうし、此方の出見世の仕廻は少シ取ル懸も有。貳百目あれば

のけるとーのけるのと歟

りくぎー詩の六義より出たる詞。要は道理といふ位の事

中將姫ー横佩豊成の女にて蓮の糸にて曼荼羅を織りしといふ人

詰らぬ云々ーぬからぬ剛情爺

のけると、十人が十人で町の衆は思はんす。涙が溢れて疎ましい。私可愛が定ならば、父御さん共姉弟御とも首尾能ふして下んせ」と、涙ぐみたるしんみの詞、更に勤と思はれず。嘉平次もとも涙、「今に始めぬそなたの心底、過分〱。ハテたつた一人の父親なり、一ッ屋の五兵衛とて、若い時は男を研き、物の筋道りくぎを立。無理をいふ人でもなく、子共が少シ色遊び、五百目壹貫目つかふた迚悔む人ではなけれ共、どう共かう共叶はぬ事が有ぞいの。今迄は隠したが、弟の幾松とおれとか間に、十八に成おきはといふ妹が有。元は在所一ッ屋の叔母の娘、後々は此嘉平次と従弟同士女夫にする約束で、藁の中から養ひ、死なれた母の肝情で、物も書き縫針、綿もつむ機も織る、算用もやり居る。顔も十人並なれど、其方をのけて此世界に女子が有と思ふにこそ。綿をつまふが機織ふが、おきははおろか中將姫の再誕が、蓮の糸で一重羽織おりやるとて、見向もする平でない。され共親の契約、少さい時からいひ名付、今日祝言明日祝言とせがまるゝ。一理屈こねたの。「是親仁様、私や畜生じや御座らぬ。胤腹わけねど兄弟、妹よ兄様といひつゝも、夫婦に成は犬鶏のする所爲。男もたてた一ッ屋の五兵衛は、畜生を子に持たといはせては私も不孝、こなたも一分廢る事。ならぬ〱」と云破る。そこらを詰ら

宛上げても馴染となつた故其手引てあるとなり扇風呂ー天滿五丁目にあり（國花萬葉記）

ゆへじや」といひければ、さか「さればいな、其文見ると嬉しうて、客を勸めて此天滿といふ思ひ付。幸と此淸水屋は、私が前方扇風呂にゐた時からの近付ゆへ、爰を賴んで芝居へも呼にやりやした。それに付ても父御さんの內方へも、また往かれぬ首尾と有。是逢ひたい見たいは私とても、ほんに〳〵寢た間にも忘れね共、つゐには末で女夫に成大願ではないかいの。其間が互のしんぼ。人は次第に身を持上るがほんなれど、扇風呂のさが共いはれた身が、晦日節季は前垂掛で、裏屋瀨戸屋けんどん屋、三界懸取に步く樣な勤するのも澤山に逢はふ爲。こなさんが大和橋の濱納屋借ての出見世も、私が近くに居ようため。念比な宿では斷りたて、出見世へ泊りに往く夜さは、女夫所帶をする心。同じ寢るのも身に付樣で嬉しい。され共一度は父御さんのお耳へ入ねば、どうもならぬぞゑ。聞けば姉御さん、堺筋の鹽町邊に、緣付してござんすとや。此姉さんなど賴まし、前方から父御さんに能ふ思はれて下んせ。昨日の晦日も內に居さんせず。譯の惡い評判聞けば頭髮一筋づつ拔るゝよりも苦しうて、氣を揉でももがいても、身は裸なり工面はならず。大方は四日迄と私が請合置やした。私一人なら死で成としまはふが、こなさん惡ふ云するが口惜い悲しい。茶屋の勤する者は、人の小息子唆かし、惡道に引入れるの、不孝者にして

錦手―五色の模様ある碗器
わくせき―鬱結
粋―酸いにかく萬事に委敷人（皇都午睡）
濱側―河岸
ほん―眞實
一文宛云々―天神様に毎日一文

より、さがが心や焦るらん。假初の薄茶茶碗も名染ては、濃茶茶碗屋嘉平次は、さがが情の錦手に、染付られて親兄弟の、異見も耳に蓋茶碗、深編笠も隠れなく、さがは見付て、「是爰じや爰じや」と、招けばちよこ〳〵走、床几に腰を打かけて、側へ寄たい抱付たい。云たい事のわくせきも、主人が見る目憚かりて、他人向なる折からに、奥より客「何ぞお肴銚子替やや」と手をたゝく。花車「あゝい」と引のがお定り。蒲鉾梅干粋な花車、氣を通して立ければ、さが「のふ二日逢ぬはどうじやいの」と、顔差入る編笠の、下こそ戀の宿りなれ。嘉平次もなつかしさ、「此中は田舎客で平野屋にじやと聞たゆへ、往か戻りに顔見よ、と濱側を用有げに往つゝ戻つゝ、入もせぬ和中散買ふたり、心太屋の水機關もそう〳〵は見ていられず、うろ〳〵すれば長町側の子共が見知て、「ありや〳〵東の難波燒が坂町通ひ、柏屋通れば二階からちよいと招く。のつ是何としよ」と、惡口いへばあたりからはきよろ〳〵見る。親の内へは往かれぬ首尾、出見世にも尻すはらず。いつその事遠かげに、蜆川の芝居の曾根崎の狂言見て、醬油屋の徳兵衛と我等が思ひ引合せ、浮を晴す合點で、其通一筆書て小弁を頼ふで置て來た。其文見てか。今日爰へおじやつたは天神様の御利生。神も佛も名染がほん。親仁の見世の燒物に一文づつでも天神様、お名染

茶こく—お茶ひく
射干—逢ふにかく、此章の初めは傾城の階級境遇を述べ「思ひ切れとは」よりおさがの身の上を說く
一言客—一見客か
外桶—桐油
こつい客—強い無骨者
おけ—置けと桶とかけて桶でても飲むと也
おか樣—主婦次の花車も同じ
心中の狂言—曾根崎心中の口上を述べてゐたから其隙に嘉平次に事告したと也

ないとて見殘して、見捨る花や 三重 恨むらん。色の勤の浮節の、峠を越て伏見坂、戀のないにもならひとて、あたら肌を柏屋の、さがは大和の一言客が、今日は天滿の社内の茶屋で、酒と出かけて遊ばん、と一昨日からの揚續け、空も雨氣の駕籠の外樋、賣木の花に氣を晴し、淸水屋にこそ入にけれ。茶屋には待かね、主人「エイさが樣、駕籠の衆何として遲かつた。お客樣は待焦れ、たつた一人飲でじや いざ先あれへ」といひければ、さが「さればいの、こつい客の癖に、揚の日は半時も側に置ねば、損の樣に吸付て居たそうな。それで勤が續く物か。是駕籠の衆賴ます、私は雨氣で頭痛がして、休んでゐると間に合せ、盃の相手になつて、日比の手並にいきつかして下んせ」嘉平「どつこい氣遣なされますな。任せておけでもたらひでも飲付てやりませう。是おか樣精出して豆腐燒つしやれ、鰻も四五本燒つしやれ、冷飯も燒つしやれ」と、からげおろして入にけり。さがは主人の側に寄り、「さつきにいふておこした蜆川の、嵐の芝居へ便宜して下んしたか。樣子はどふで御座んすぞ」主人「何の如在いたしましよ。お前からの書付を其儘持てやりました。心中の狂言の口上の處、直に觸て囉ふた、と使はとうに戾つたが、もうお出なさるゝ筈。定めし狂言に見とれて、それでがな遲いか」と、いひつゝ灸る豆腐

れても騒がす猶まず猶威勢ありとなり
松―太夫、梅は天神又天職ともいふ
一夜流れ云々―一夜天神を買へば其色香忘れず
さんさ―それが也
瞞されて云々―客が女の無情を怒りしが後にはその反對になる
局女郎―天神の次にて勤銀廿匁(異本洞房語園)
牡丹畠云々―一つの部屋に局女郎多く居る事
せきだい―石臺にて堰くにかく
呂州―湯女
白―白人にて藝なき遊女(五蘊雜考)
桂仙花―翁草をいふ傾城にかく

思ひの種かひの。根から嫌なら添ふ氣じやないに、だまされて憎や辛やをさかさまに。客に泣せてきぬ〳〵の、別れあやなき菖蒲草、局女郎に擬らへて、牡丹畠の名盡しに、大臣も目を遣手の玉が、忍ぶ戀路をせきだいの、女蘭夫蘭は呂州の姿、白と眺めて白牡丹、しやんとしてからいやみなく、しかも色香の深見草、歌「思ひきれとは死ねとの事か。江戸生て添はれぬ浮世なら、いつそ烟に成たやな。辛氣燃して待宵に、似たりや似たり桂仙花、暫し休らふ木影を宿の、枝は木こく我身はちやこく、うるさき里の勤めぞと、誰かは黄楊や柏槙や、樅南天に、小手毬に、いとし男と射干の、扇の形に末廣の、逢瀬を祈る神垣に、柏手ならぬ柏屋の、我名も嵯峨の若楓、戀草千草思ひ草、眺めらるゝもながむるも、をなじ色なる袂百合、扇かざして神々詣で、安井生玉清水坂を、しやならく〳〵ちよこ〳〵走り、しやんとして見よや。歌「柏屋さがははすはに御座る。戀の意地酒ヤトン〳〵、手もとでかゝる押へてかゝる。どうでもさがは濡者じや。油壺から出すよな女房、しんとろとろりと見とれる女房。拗る男をぼつかけて、そこら〳〵をずんづと飲しやる〳〵。サアエイトン〳〵、エイトン〳〵〳〵〳〵」しんぞ一夜はお手枕、日影色どる五月棚、草の異名は樣々に、よむ共よしや葭簾、西の茶屋から我を呼ぶ。忙し

心々の願立云々—天滿宮に數多の人願がけに來る故神も忙しい

駕籠も一里云々—道頓堀より天滿宮迄一里の道をさがは駕籠で詣る、飛梅は菅公の故事、

すんと流し—活花に云詞にて天地の間に一枝挿すを流しと云

悋氣の嵐云々—太夫は他の女郎より悋氣をせら

嘉平次
おさが

生玉心中

近松門左衛門作

上巻

次第今に傳へて老松の〳〵、かはらぬ色を頼まん、其松が枝の宮柱、今に榮へて數萬人、心々の願立に、神のお身さへア、いそもじの、まして流れの憂節や、日毎に替る身の勤め、今日も苦海の神詣で、道頓堀を天神へ、駕籠も一里を飛梅や、社の廻り浮れ出、見渡せば數々の、花屋植木屋立竝び、色賣る〳〵花の色賣、我も色賣る身は仇花の、花に價の高下があれば、勤の品もだん〳〵の、品々有もことはりや。花と色とはもと一つ、されば身を賣る金の名を、花代とこそ名付けれ。先鉢植の作り松、すんと流しの一枝は、太夫の威勢備はりて、悋氣の嵐手管の雨、無理な口説の霜雪も、騒がず痛まず彌増しに、情の緣はびこりて、松の位とたとへられしも憎からず。冷泉春立行ば色失て、さびしき梅も捨られず。是天職の姿にて、一夜流れの軒端の梅の、仇な袂に香をとめて、歌 さんさ

阿闍世—親を幽閉し釋迦に抗せし惡人

嫁入船—藤照姫唐出に嫁入する

取り、引出して胴骨むずと抱き、一しめ「ゑい」としめ付、弱る處を下腮踏へ、上腮擱んで二ツにさつと引裂し、勇力膽を冷しけり。万「サア虎は異國に澤山。唐土の土産には、貴殿の首にしく物なし」と、いふより早く飛かゝり、入鹿をはたと蹴倒し、脊骨にどうど乘かゝり、万「朝敵入鹿の大臣を組留たり」と呼はる聲に、鎌足兩眼くわつと見開き、利劒の鎌を取直し、首ふつゝとかき切給へば、首雲中に舞上り、骸は太刀を引拔て、玉躰に討てかゝる。淡海公、鎌足公、「多年の本望此時」と、づだ〳〵に切伏せ、立上らんとし給ふ處に、俄に天地震動して、雷火亂るゝ雲間より、入鹿が首聲を出し、「我先生は天竺にて阿闍世王、唐土にては殷の紂王、今此土にては入鹿と生れ、佛法王法傾け、魔界に沈めんと誓ひしに、鎌足が天質の明徳にをされ、外道破滅口惜し。せめて此面向不背の玉を取、衆生成佛の直道を塞がん」と、飛下つてしるしの箱を引喰へ、もとの雲井に上ると見へしが、王法鎭護の三笠山、春日の宮の方よりも、佛法守護の白羽の矢、雨の如くに降かゝり飛來り、入鹿が首に貫きて、朝敵亡び消失し、雪の春日の神風や、唐土さして嫁入舟、和國に寄する寶舟、帆は十分の秋津島、神と君が代治りて、五穀豐饒民安全、御藏にみつの御寶、蓬萊國とぞ祝ひける。

立、虎を入鹿にけしかくる。入鹿も爰は大事ぞ、と太刀を拔て打かくれ共事共せず、或は欄干椽の柄、打折り引拔き投かけ〳〵防げ共、更に恐るゝ氣色なく、さすがの入鹿詮方盡き、冠も衣紋も打亂れ、迯つ追ふつ揉合しは、すさまじかりける 三重 はげみなり。終に萩の戸の片隅に追詰め、身を縮め脊を立て、喰ひ付んと狙ひ寄る。入鹿今は是迄と、「卑怯なり万戸。さすが三公の位に至りし某を、畜類の牙にかけ殺さんとは、奇怪なり無念なり。入鹿が最後の念力に、睨殺してのくべき」と、虎に向つて拳を握り、はつたと白眼む眼の光、さしもの猛虎毛を伏せて、じりゝ〳〵と尻込す。たるめばかゝりかゝれば白眼み、とゞろ〳〵と小足をつかひ、面も振ずまじろぎせず、哮りうなつて白眼合ふ、虎と入鹿が根くらべ。猛虎は白眼ふせられて、一文字に迯歸り、仁壽殿の軒近き、一村竹にぞかくれける。其時入鹿左足を踏み、入「あれ見たるか万戸、汝等が鬼神と恐るゝ猛虎をも、一念の眼力に睨み伏せたる此入鹿。人力にて討ん事今生にてはかなふまじ。あつたら命を失ひ、日本の土とならんより、天王鎌足を捨置、本土に歸り、入鹿と云大勇の者有、と末代の物語にとゞめよやつ」と呼れば、萬「ヲヽ潔し。去ながら眼力はまさる共、腕の力はかなふまじ。是を見よ」といひもあへず、虎の尾筒をしつかと

石の帶―束帶の時に用ふる寶石にて飾る帶

平緒―束帶の時袍の上に著くる前垂

はまゆか―高さ一尺に三尺四方の臺にて四隅に柱を立てゝ帳を垂る

みの手―左右に張つたる形

名を得たる、万戸を只今蹴殺して、唐人の寐言いふ夢を、覺してくれんず」と、跳出て高欄の角柱、「ゑいやつ」と引抜つゝ突立ば、万戸も飛下り、宣命の邊の大石かろがろと提げ歩み寄る。鎌足公は玉躰に引添ふて、心を配つておはします。入鹿すかさず飛かゝり、万戸が眉間を微塵になれと、打かくるを飛退り、八尺四面の切石を、礫にはたと打ければ、柱砕けて余る石、入鹿が仕丁五六人、ひし／＼と打みしやがれ、同じ枕に死してげり。入鹿大きに怒をなし、「よしをのれ等は追而の事、先天王と盲目めを打殺さん」と駈上る。万戸入鹿が石の帶、平緒をかけてむんずと取、「ヤア口程もなし日本一の入鹿の大臣。唐土の万戸將軍ぞや。勝負もつけぬは本意ならず。留まれ」とこそは引たりけれ。入鹿につこと笑ひ、「ヲヽをのれも助けぬ奴なれ共、某が身に腕をかけ、留れといふとて留るべきか。推参なり」と睨付る。其隙に淡海公、虎を繋ぎし鐵の、檻の錠前鎖を解て、「時分はよし」と呼り給へば、豫て相圖の官人共、管絃の吹物大鼓鉦、一度に法螺を吹立れば、虎は哮つて跳出、殿上のはま床を飛上り飛下り、簾も几帳も踏破り、煙をたてゝ飛まはれば、堂上堂下上下の男女、皆ちり／＼に三重迯失て、あたりに近付者もなし。異國人は心へて、太鼓鉦をみの手に

鍾馗大臣—唐の玄宗夢に見し豪傑にて鬼を提ぐ

給へば、入鹿心地よげに打笑みて、「いかに鎌足、此入鹿に降參請ふて唐土へ渡らんとや、一段の思案。日本の地にて人の交りかなふまじ。はや〳〵暇とらするぞ。ヤア万戸と云はあれ成か。さま〴〵のさゝげ物祝著せり。是へ來つて三拜せよ。盃くれん」と云ければ、万戸一言の返答なく、ずんと立て大床を、碎けよ割よと踏鳴し、入鹿が側につゝと寄れば、入鹿も褥を立上り、兩方柄に手を掛て、隙間を窺ふ其勢、獅子象のごとくにて、「すはや事こそ出來たれ」と、宮中騷ぎひしめきて、片唾を吞んでぞ扣へける。万戸御殿も響く大音上、「本朝はそは知らず、我唐土の道として、天に二つの日なしとて、二人の帝を一時に拜したる例なし。惣じて國王は國の魂。臣を手足にたとへ、君は腹心頭の如く、國に二人の王有は、人の身に頭二つ有五躰不具のかたわ者。万戸はゑこそ拜すまじ。疾う〳〵汝其座を下れ。異義に及ばゝ、異國の劒に日本の血を付ん」と、沓先ぐつと踏出し、はつたと睨む顏色は、さながら鍾馗大臣の、惡鬼を制する如くなり。入鹿から〳〵と笑ひ、「ヤア事おかしし下唐人。扨は鎌足が眼つぶれ、をのれが力にかなはぬ故、此唐人めを頼んで降參と僞り、又某を亡ぼさん手だてよな。ムヽ面白し。日本には手に立者もなく、まだも唐土はかうばしく、入鹿が相手ほしかりしに、四百余州に

貧家には云々―貧人には舊知の人も疎遠にする譬

「さしも朝家の御堅め、ゆゝ敷忠臣成けるに、悼はしの有様や、天下の鏡曇りし」と、忍び涙を流さるゝ。御簾近く膝行寄給へ共、途方を分ぬ風情にて、玉座の方を後になし、あらぬ方を拜し給へば、伺公の諸卿笑止がり、「ナフ玉座は背後、あとよ〳〵」と申さる。鎌足公驚き、居直つてさしうつぶき、涙をはら〳〵と流し、「鎌淺ましき身の果や。兩眼こそ見へず共、稚きより馴仕へし、殿上の方角忘るべき樣はなけれ共、此年月土民となり、海邊野山を家として、大内の方角も忘れはてたる情なさ。入鹿公はおはせぬか。降參申上からは、何の憎みの候ぞ。唐土へ渡れば二たび見へぬ鎌足なり。昔のよしみにめぐみ有詞もかけ、御殿の方角道引もして給はらば、かゝる恥辱も有まじき。貧家には古人疎しとは、今身の上に知られし」と、かき口說き〳〵、涙に沈む心中には、「和國の宗廟天照御神、住吉八幡、別して春日大明神、大小神祇哀愍加護の神力を加へ、今日入鹿を討せて給べ」と、一心に祈誓有心の内こそせつなけれ。時に御帳臺の御簾さら〳〵と揭げさせ、褥の上に入鹿の大臣、天王に膝を竝べ、悠々と坐し居たり。御悼はしや天王は、鎌足を御覽じて、「方角は忘るゝ共、丸が聲はよも忘れじ。世の憂き中にも、范蠡有と賴みしに、兩眼盲て剩へ、唐土人にならんとや。世は是迄」と計にて、御涙にくれ

神文―神明に對して誓を立つる書狀

孫びさし―母屋の庇に更につけたる庇

龍の御馬―寮の御馬か

八音―金、石、絲、竹、匏、土、革、木の八種の樂器

介錯―介抱

と、涙を浮め宣へば、二人「ムヽ餘義なき御心底聞屆候。以前山上の次官有風が慮外、又此比三笠山にて貴殿と在天法師が振廻、入鹿公御立腹甚しといへ共、降參の願ひとあれば各別。殊に日本を去て、唐土へ赴き給ふとの詞、御聞屆有そふな事、隨分取成申べし。去ながら、例へ唐土に至ても、入鹿公に對し、永く野心有まじきとの神文血判せらるべきか」と、云ければ、淡「それこそ望む處、仰は背き申まじ」二人「ヲヽ一段〳〵。其心底に極らば首尾調ひ申べし。密に參内の用意あれ。追付吉左右申さん」と、立出れば淡海公、「御芳志頼み存る」と、御手を下させ給へ共、終に雲井の松が枝の、梢にのぼる藤原の、榮行しるしと三重聞へけり。既に和睦の事とゝのひ、万戸將軍獻ずる處、廿余種の寶物、孫びさしに飾らせ、中にも生たる虎を鐵の檻に繫ぎ、南庭にすゑければ、嘯く聲の宮中に響き、龍の御馬、御車やどりの牛迄も、毛を立てこそ恐れけれ。かくて万戸は羽旄の旗鋒、八音の管絃を奏し、上判事都訓導、軍官寫字官馬才官、使令及唱小童子、列を正して參内し、大床に冠をかたむくる。遙の跡より鎌足公、淡海公に手を引れ、月日の影も水鳥の、陸に迷へる如くにて、御階近く成しかば、淡海公も手を放し、介錯申人もなく、紫宸殿の階段を撫探り足をうけ、漸々として堂上有。心を知らぬ卿相雲客、

鴻臚館—京都七條にある外人を接待する所

智は萬代の寶とかや。大職冠鎌足公、明智を以て三國を察し、青海原の測りなき、寶を和國にとゞめ給へば、世上の覺えゆゝ敷て、万戸將軍誘引にて、一度歸洛ましまし、鴻臚館に入給ひ、御一家諸共入鹿を討ん謀略。かれに親しき公卿を賴み、降參の和睦を請給ふ忠心こそは淺からね。倉田の參議高向の玄理、和睦の中立として入來る。淡海公二人に對面まし〳〵、「父鎌足精誠を盡し、寶珠を二たび取返せしも、全く身の譽れを殘し、此國にをいて入鹿公に對し、威を爭ふべき心いさゝかも候はず。佛在世の寶をながく日本に殘し、衆生利益の力によつて、後生菩提の便を求る計なり。殊に一年余り海邊にて心を盡し、鹽風におかされ、兩眼盲て盲目と成たれば、何面目に官祿に心殘すべき。藤照姫が婚禮に伴ひ、我ら諸共万戸將軍と打連れ、唐土に渡り、唐土人と罷成、二たび日本へは歸るまじ。是入鹿公に敵對致さぬしるし、御疑ひは殘るまじ。同じ日本の內にても、古鄉を慕ふ人心、萬里の雲水隔りて、二たび歸らぬ我々が臨終も同前なり。此世の名殘に今一度參內し、眼こそは見へず共龍顏を拜し、入鹿公へは降參の一禮申、和睦のしるし、万戸をも同道し、三ッの寶は申に及ず、廿余種の寶殘らず入鹿公に奉り、唐土の御暇乞申たし。御惠に預らば、鎌足親子が生前の悅び。兩人の御挨拶偏に賴み存る」

干蕪—喉ひからびて恰も干蕪を吊した樣なり
かけまく—此祭日には兎狸もかけるとかけたり
たいてん—退轉か

れば、只聲計うん〳〵と、立ずくみにぞ成にける。在天見付て取て返し、園下を押伏せ、切付んとはしたれ共、藤は春日の御神木、かれを切れば藤も切る、刃をあつるは恐れ有と、躊躇ふ間に兄の園中をつかけ來り、在天に討てかゝれば、松が枝の藤葛すつと延て、園中が細首に纒付、蹶出れば引留め、飛かゝれば引留め、繋げる犬の如くにて、もがきあがくぞ心地よき。討漏されたる下人原、淡海公を追詰、既に危く見へけるが、枝々の藤葛一度にばら〳〵ばつと下つて、元首胴骨しめ寄せ〳〵引纒ひ、園中兄弟引寄せて、梢遙に引上る。足手ばかりは働きて、「エ、無念口惜腹立や」と、喚き叫ぶも寒風に、五躰とぢられ息斷れて、喉の潤ひ干蕪、釣上られてぞ死してげる。此因緣に末の世も、霜月春日の御祭、兎狸をかけまくも、忝し有難し、と社を開けば若君は、まめで小豆で若紫の、藤原氏の御世繼の、孫に奈良茶の煮花を、親仁も一ぱい旦那も一杯、我等も一杯、合せて神には三拜九拜。例幣奉幣たいてんなく、絕ず盡せぬ萬代の、松の齡を春日山、神の氏子の藤の門、開くる運こそ樂しけれ。

第五

珍んじ一陳じ

合口一匕首

けり。負腹の習ひに勝逃忌ば、あたりに近づく下ぬきなし。約束の錢さし動かせば、てらをよみ立つながれたりけり。よの玉は知らず、此隍が玉の段」とぞ語りける。坂熊兄弟けら〳〵と冷笑ひ、「うぬらは人を痴氣にして叶したり〳〵。如何樣に珍んじても鎌足がゆかりに紛れなし。搦捕れ」と寄る處を、ひらりとしさつて淡海公、女の出立脫ぎ捨給へば、在天頭巾取て捨、用意の刀脇挾み、裾捻褰げ鉢巻しめ、床几の上に突立、「ヲ、一段の推量。是こそ天津兒屋根の御末、大職冠鎌足公の御嫡子淡海公不比等。かく云坊主は山上が二男在天法師。寒天に藤の花咲こと、藤原氏の御運開くる神の告。此御祝ひにをのれ原をすかし寄せ、在天が手盛の奈良茶一杯づつ振廻んと待かけしに、能ふこそ〳〵。何も馳走はなけれ共、根本仕出しの一ぜん盛、代物僅か首一つ。サア來い」とするりと拔ば、淡海公も小太刀を拔き、數十人を左右に受、切立割立薙立、麓の岡へと三重追まくる。戸次は素よりかひぐ〳〵敷、小祠の扉押開き、懷の若君を社の内に隱し置、合口拔て打て出んとせし處へ、坂熊團下引返し、戸次が弱腰引摑み、「ゑいやつ」と取て投げ、社を開き若君を引出し、心元を一刀ぐつと指せば、不思議やな若君と見へつるは一連の藤葛、ゆう〳〵と延び出て、團下が五躰をくる〳〵〳〵と、纒ひ絡んでしめつく

くすねー窃に盗みとる
一枚ひねつて云云ー謡曲海士の大悲の利剣を額にあて龍宮の中に飛び入ればのもぢり
ばくてい、そろ三馬、あざがけー以下博奕の符牒
ごくどうー人を罵る詞
うんすんーうんすん骨牌にて其打方は半日閑話巻八に詳なり

奴めかな。誠それが定ならば、一々次第をとつくと語れ。サアぬかせ」と突放す。在「何が扨語て聞せん、よつく聞け。我は骨牌は知らね共、負て命を捨る共、女房故に捨ん命、露程も惜からず、と友達共を語らひ、三百の錢を腰に付、若し彼の玉を取得たらば、此錢を投出すべし。其時人々力を添へ、くすね給へと約束し、ウタイ一枚ひねつて額にあて、彼のばくていに飛入れば、そろを脇から二くすじの、三馬あざがけしのぎつゝ、火をくわつくわつとかき立て、加番見れ共青もなく、上りも知らぬひらよみに、そも三枚はいさ知らず、取得ん事はけなしなり。斯てかうの場に至りて、座中を見れば錢高は、三百文のごくどうが、此玉を起して夜食をたかせ、つけめには八むく並居たり。其外中目、二目おり、遁れがたしや我命、さすが恩愛の手みその癖ぞ悲しき。あの親の札にこそ、二三四やあるらん、七二大名やおはすらん。去にても此まゝに、打で果なん無念さよ、と涙ぐみて立しが、又思ひ切て手を合せ、南無や四と五に觀音釋迦樣、三枚坊主の苦患を助けてたび給へとて、大悲の利劍を親に打て、うんすんを二目飛おれば、跡先しやんとぞをしたりける。其隙にお玉を盗み取て、逃んとすれば、各人追駈。かねて工みし事なれば、又ひらよみにまき直し、五したに打きり、つんばねあざばね、にぎりのそろでぞ勝たり

よみとかう―よみは骨牌よみにて博奕、かうは女郎買なるべし
どう―博奕の元方
わや―故障
むさい―きたない事なさるな
ぶた―札の連濁
手付札

と申かづきの海士、則風殿と夫婦に成、此懐な子を設け、則此子を淡海樣の、御養子世繼になされん約束にて、娘の滿月命を捨龍宮に入、玉を二たび取返し、其悅びの御使」と、いひも果ぬに坂熊兄弟飛で出、二人の胸ぐらしつかと取、坂「サア曲者を捕へたり。出合へ〳〵」と呼はれば、散し置たる下人共、此處彼處より駈付て、一度にはらりと取廻す。坂熊團中大聲上、「最前より詞の端、心へがたく思ひしに、こゝな毛唐人めが娘の海士が命を捨、玉を二たび取返し、其悅びとは異國の万戶が、龍宮へとられし面向不背の玉よな。鎌足がゆかりに極つたり。有樣に吐出せ」と、取て伏せたる其勢。淡海公も浦人も、慄ひ恐れて返答なく、在天もとより氣轉利き、ちつ共臆せず、在「いやはや何れもの耳は何處に付た。龍宮ではない琉球と申た。玉と云は嚊が名、生國は薩摩の國、硫球問屋に玉と申て、年季奉公いたした時より、我等と夫婦の契約。所に彼の親方博奕うち。よみとかうとに屋財家財貧ほうけ、あげくに年季の此玉を、たつた三百の抵當に張て、既にどうへ取るゝ處を、我等仕かけてわやをいひ、玉を二度取返したと云咄。聞外して胸ぐら取、むさい事めさるかな。ムヽ其方も博奕打チやら、斯ふ取た手付は骨牌握つた手付が有。麁相して後悔すな。手つけぶたじや」と云ければ、坂「ヤア當話の利たる

釜─鎌足
杓子─嫡子
厄介─淡海のもぢり
大食─大職冠
追焚─食盡き又煮足す事
白癩─白癩になるともの略自誓の詞（俚言集覧）

とのお望み故、釜も杓子も清めるが厄介なりと申た」と、間に合すれば打笑ひ、坂「ヲヽ聞違へた尤々。隨分何も奇麗に」と、顏引入れば在天、「扨もいかいたわけ者。去ながら仕損じては、大職冠の御爲如何」といふ聲に、又顏をぬつと出し、坂「なんと／＼、大職冠とは何事じや」在「アヽ皆樣は耳は橫についたか。大職冠とは申さぬ。御兩人ながら柄はよし、大食そふなと申事」坂「ハア又聞違へたゆるせ／＼。目利は違はぬ一人前に五人當、追焚すな」とて入にけり。淡「たゞ取る樣成うつけ者、去ながら此方とても長袖。此上は運づく神力に任せん。いざ來い」と、主從勇んで神前に、暫く祈誓有處に、旅の老人在天が袖を扣へ、「今度此明神樣を勸請なされし、多武の峰の僧都樣お弟子の、在天御坊と申は御存じないか」と問ひければ、在「ム、在天とは我成が、親仁は誰ぞ」老「我等は讃刕志戸の浦、めかりの戸次と申者。鎌足樣より吉左右のお使」在「ヤア吉左右とは先目出たし。此女子と見ゆるは若君淡海公。御吉左右の次第、はや聞たし」と、時刻移れば以前の男、坂「こりや／＼亭主、なんと奈良茶は喰はさぬか、但人をなぶるか。白癩聞ぬ」と腹立る。在「あい／＼追付出來まする。それ鼻椀拭け釜の下、爺は火を吹」嵐吹く、霙まじりに身も口も、小聲に成て、在「今のはどふじや」戸「さればの事、我等が娘滿月

諸白─上等の酒

出來た─でかした

は奈良諸白、餘り過ては酒漬の、身は奈良漬と奈良柏、奈良刀の鈍燒な、破落漢は奈落の種、奈良苧績んだる子の親が、因果晒しに奈良晒し、奈良座の謠ひの口拍子、喰ならひ飲ならひ、好にならねばならぬ事。外にならびも奈良屋が奈良茶、下地は奈良の春日野の、雪の白づきすつくりと、鹿子斑に黑豆散し、さつとかけたる宇治の出花の、お茶がいやなら奈良計。されば古歌にも「奈良茶かや、此手盛りにて二タよそい、爺と嚊とが味を御覽ぜ」サア暖に一ぜんづつ上りませい」とぞ申ける。坂「ムヽ、是は實に珍しからん。去ながら、腰かけて諸人に見せても喰れまい。なんと小蔭は有まいか」坂「いや其爲の幕の内、葭簀圍ひの御座敷、いざ御通り」と云ければ、坂「是は出來た。箸も茶碗も奇麗に、加減よふしてはや〳〵」と、幕の内にぞ入にける。跡見送つて兩人は、小わきに寄て小聲に成、在「あれ〳〵きやつ等を御存ないか。入鹿が郎等坂熊兄弟、正しく御縁を狙ふ體。何とぞだまして討て捨たきもの」といへば、淡「是氏神の御惠み。何のだます迄もなし。おことも頭巾を取て捨、在天法師と名を顯はせ、我も此女出立をば脱捨て、鎌足が嫡子淡海公と名乘て打てかゝらん」と、宣ふ聲を聞咎め、幕より顏をぬつと出し、坂「ヤア〳〵鎌足が嫡子淡海公とは誰が事ぞ」在天はつと驚き、「アヽ惡い聞樣。奇麗にせよ

飾磨の徒路―飾磨の産褐にかく
室君―室の辻君
暫し休らひ―姫は之にて四國に渡り後には關係なし
四所明神―春日社は天津兒屋根、武甕槌、齋主、姫太の四神を祭る
三笠山若草山、つゞら山―皆同じ山なり
放下―田樂に似て鞨鼓サヽラにて舞ふ

明石潟、都の空の戀しさに、一首は斯ふぞ聞へけれ。「物思ふ心のやみに迷ふ身は、あらしの浦もかひなかりけり」と、思ひをのぶる言の葉に、飾磨の徒路辿り來て、室の港に室君の、夜な〳〵かはる契りには、空だのめなる人を待、旅はそれよりはかなしや。寄邊定めぬ四國船、うはの空吹く風待て、しばし休らひ 三重 給ひけり。來て見よとてや三笠山、冬もなかばに咲藤の、松の氷柱は氷れども、花のしなへは春の色、四所明神の黑木の小祠、雪は白帛藤は幣、花見がてらの參詣は、袖を列て夥し。麓の道は商人の、三笠山とて飴賣や、若草山の煙草賣、つゞら山には辻放下、飛火の野邊の燒豆腐、餅賣酒賣簾茶屋、嬶が色有前垂に、爺が頭巾の隅に目を、付て悋氣も痴話の種、戀をふくみし腰付は、「是こそ味い看板の、根本仕出しの御奈良茶、是へ〳〵」と招きける。入鹿が郞等坂熊團中、同團下兄弟、捕手の人數をまばらに散し、群集の中に立交り、世上の噂人の振、心を付て廻りしが、「やい〳〵亭主、昔より宇治茶近江茶、又は唐茶廿茶などとはいへ共、奈良茶と云茶は飮ず。一ぷく飮ん」と床几に腰を懸ければ「ア、御尤〳〵。さればこそ外に類の無き故、根本仕出しの看板、奈良茶と申因緣お物語仕らん。總じて奈良の名物、先奈良油煙、奈良團扇、奈良草履、奈良素麵、下戸衆には奈良饅頭、上戸に

月常住云々―壁破れて霧不斷の香をたき扃おちて月常住の燈をかゝぐ(謡曲大原御幸)

布留―振るにかく

かぐろひ―隱るの延言

殊勝ぞまさりける。尾上の鐘の聲近く、無常を知らする初瀨山、今宵は爰にこもりくの、

歌 籠る心は一筋に、佛の御名をくりかへす、乙女の袖や神樂の鈴、布留の御社あれかとよ。いざ立寄て御室山、麓の尾花うら枯れて、霜に弱りし虫の聲、いとゞ哀をもよほせば、淚を袖にせきかけて、紅葉しがらむ立田川、さながら山は、山はさながら唐錦、縫ふてふ針に苧環の、此山もとの神垣や、三輪の明神ふし拜み、勇む心は生駒山、神は濁らで住吉の、岸の姬松幾千歲、絕ゑぬ御法の天王寺、五重の塔の雲水に、月の光のかぐろひて、暗きより暗きを照す金堂の、舍利の靈德明らけき、佛法護持の四天王、實に有難き靈地かな。蘆屋の里の漁火も、晝は消へつゝ物思ふ。夢も難波の浦風に、霞晴れ行淡路潟。藤「なふ〳〵これ左手を見よ。あの島の洲崎に波立て、あれ〳〵濱千鳥の、友呼ぶ處に島蔭よりも、漕出したる海士小舟、實に面白きながめかな。ア丶傾ぶく月の西の宮、和田の岬を打過て、雲に流るゝ布引の、瀧の白糸數散りて、袖に波越すあさぎぬの、浦傳ひして行道の、やれ、彼の蘆邊に隱れ居る、田鶴のむら〳〵〳〵と立騷ぎ、磯邊の波に羽をひたし、搖れもまれて又飛集る、打退き寄つ戲れ遊ぶ。イヤ其風情、筆にもいかで盡すべき」須磨の浦曲の苫葺の、松の木柱竹の垣、夜寒の嵐堪へかねて、今宵一夜は

巖の松ー此句皆藤の緣語
忍びて出る云々ー春日野の若紫の摺衣忍ぶの亂れ限り知られず(伊勢物語)
奈良ーなるにかく
玉鉾のー道行の
三笠山ー見
白雪ー知らずにかく
飛火云々ー熢火の事古今集に春日野の飛火の野守出て見よ今いくかありて若菜つみてん
糸よりかけー淺綠糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か(古今集)

世かな。

藤照姫道行

巖の松の雪折れて、おのが枝さへ便りなき、それを力に這かゝる、身は危しや藤照姫。古郷は敵にせばめられ、父の行衛も覺束なく、乳母計を賴みにて、忍びて出る春日野や、若紫の摺衣、旅の袂に脱かへて、身はいつの間に賤の女と、奈良の都を立別れ、讃岐の浦へと玉鉾の、御有樣こそあはれなれ。かへり三笠の山かくす、あしたの雲の棚引て、春待敢ぬ鶯の、鳴音尊き法華經や、普門品の觀世音、二月堂よと伏拜み、猶行末は白雪の、山又山に降積り、妻戀かねてなく雉子の、涙やほろりほろゝ打ッ、野邊の景色は物寂し。飛火の野守出て見よ、今幾日して又こゝに、歸らん事も片糸の、糸よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳とつらねたる、ウタイ西の大寺是かとよ。日も夕暮の旅衣、一夜の宿を柏木の、森の下つゆ露もりの下、浮れ烏の告渡り、夜明の空もほの〴〵と、舞白きを見れば三芳野の、花を嵐にまづ見せて、雪をめぐらす車坂、豐浦の寺は露ふりて、月常住の御燈をかゝげ、霧不斷の香を焚き、ウタイ寒庭の松の風、讀誦の經に音信て、猶も

波羅蜜多—はらむにかく般若といはん爲に置きたり

鵆鳥—小さけれども大隼ありN

直に見分し、神力に咲花なり共、睨み散して世の人の、馬鹿信心を散ぜん」と、官人少少相具して、神慮も疑ふ悪念を、心に深く波羅蜜多、般若坂にぞ著にける。霜枯れ残る草村より、鼬一疋駈出、入鹿が指貫の、括の裾に隠れし處に、又大き成猫一疋、續いて鼬を追かけ出、此處彼處と尋しが、尾先を見付飛かゝり、引咥へ喰ひつかんとせし處に、四方の笹原薄蔭、隠れし鼬五六疋、飛出々々猫を取巻き喰かゝる。猫も命の大事ぞと、鼻を吹牙を研ぎ、振放せば飛かゝり、上へなり下へなり、哮りうなつてはげみしが、終に猫を喰殺し、鼬は悦ぶ畜生殘害、散り〴〵にこそ逃失せけれ。入鹿眉を顰め、「ヤア彼を見よ。猫は鼬を取獣に極れ共、友を語らひ隠れ居て、不意に打て出たれば、猛き猫も弱き鼬に亡ぼさる。鵆鳥海に隠れて鯨を害すといへり。人間の身の上かくの如し。何とやらん胸騒し。今日の出行氣遣し〳〵。油斷は怪我の基、藤は咲共さかず共、詮義して無益の至り。必定鎌足がゆかり近邊に忍び居て、我を狙ふと云天の告と覺えたり。いかに坂熊兄弟、汝等密に人數を伏せ、多武の峰三笠山の邊順見し、鎌足がよしみの者、男女によらず召捕るべし」と、木陰木の間に眼を配り、足早に立歸る。神佛おそれぬ心にも、猫と鼬に威されて、氣を失ひし野鼠の、穴に入鹿が身用心、あやうかりける 三重 浮

ますヽヽ—増すにかく

ちやるめら—喇叭の柄に笛の如き孔ある支那の樂器

勸請—神の靈を此地に移して祀る事

世になしもの—世に捨てられた

鎌足

「あつ」と禮する其聲は、しばし鳴もしづまらず。此佛力に神力も、ますヽヽ入鹿を亡さん、瑞相吉左右荒海の、底量りなき智惠の海、盡る事なき身の内の、寶の玉眞如の玉、花原磬、泗濱石、三つの寶に秋つ島、和國を祝ふ唐樂の、太鼓も鉦も千秋樂、吹や喇叭もちやるめらも、萬歳樂をぞ調べける。

第四

草木心なしといへ共、花に嘉瑞を顯はすためし。比は霜月廿日余り、名は春めきて春日の里、三笠山の松が枝には、一夜が中に藤の花咲亂れ、紫白色を爭ひ、彌生の空に異らず。是ぞ藤原氏榮ふべきしるしとて、多武の峰の眞園僧都、天津兒屋根の御神を假に勸請有ければ、貴賤上下の參詣に、引るゝ藤の花かづら、來る人群集をなすとかや。入鹿の大臣是を聞て大きに疑ひ、「老陰かへつて一陽の氣に催ほされ、寒天に諸木花咲こと有とはいへ共、三笠山に限り、しかも藤の花計、何條咲こと有べきか。誠や木の根に酒をそゝぎ、めぐりにて火を焚けば、時ならず花咲といふ。是は正しく藤原氏繁昌の印と諸人をなつけ、世になし者の鎌足を取立ん爲、眞園僧都が謀鏡にかけて覺えたり。我

文珠菩薩云々―法華經提婆達多品に出でたり

へば、誠に玉の男の子君、容顔氣高く出生ある。御裾の端を引斷り、若君押包み、船ばりに突立大音上、鎌「面向不背の寶珠、龍宮世界三十丈の玉塔に籠めたりしを、海士人奪ひ乳の下をかき切、玉を押籠め取歸り、主は空しく成たれ共、三國不雙の寶、日本に留り給ふ」と、呼はり給ふはあたりも響く計なり。万戸悦び、御舟にやがて乘移り、万「ア丶善哉々々。日本の大臣の智力の程こそ目出たけれ。もと此寶はいつの御代より傳はる共、始もなく終もなく、まして七重の箱の中、終に拜せし者もなく、微妙無盡の深理なれば、有無の二つをはかりかね、龍宮へ取れしと申せしに、御身其道理を察し、海士を入て龍宮より取返したりとの悟の智惠、尊ぶにかぎりなし。いで〳〵しるしの御箱を渡し參らせん」と、七寶莊嚴の箱を取出す。萬里の海山隔たりし、異國の智惠、日本の悟、割符を合せし如くなり。鎌足しさつて三拜有、鎌「むかし文珠菩薩釋尊の御法を受、龍宮界に至り、龍女を始、無量不可思議の魚鱗を濟度し給へ共、靈山淨土は一足も去給はず、居ながら爰も龍宮の、深き悟りの心の玉。萬法一理に歸する時は、地獄極樂餓鬼畜生、人界の善惡不二、面を向ふにそむかず。万劫末代不易の寶、國土安全民安樂の、正眞の佛躰」と禮拜あれば、御箱より金色の光さし、十方遍照赫奕と、僧俗男女一同に、

白毫―佛の眉間にありて光明を放つ圓形のもの
八歳龍女―法華經に八歳の龍女成佛したる事あり
南方無垢云々―龍女が北方陰の方より南方無垢の陽に赴き變生の男子となりて成佛す(法華經)
於刹那頃―忽ち
行潦―雨降る時俄に地上に溜る水
狐の奉り―狐が鎌を奉りて鎌足の名とす

も猶余り有。其儘是を捨置ば、唐土日本寶なきに極つて、一切衆生信心怠り、佛力神力淺はかに、天下邪の道に入らん事を悲しみ、扨こそ斯は計ふたれ。汝只今龍宮へ入、二度玉を取返し、觀世おんの白毫に籠置たりと披露せば、萬民信心の誠に入、佛法末世に流布せん事、汝は正しく八歳の龍女、南方無垢の成道。胎内の子は左に宿つて男子なり。たとへ母は死しても、左鎌にて腹を割き、誕生すること我國の故實。養ひて我孫となし、此浦の名に寄せ、房前の大臣と名乘せん。於刹那頃發菩提心、變成男子」と合掌あり。鎌「サア只今が臨終」と、兩眼に御涙浮め給へば、則風も「國土の爲佛法の爲、死する命ぞ悦べ」と、おとなしくは云けれ共、馴れしふすまの妹脊の別れ、次第〳〵に身も冷て、我肌に覺ゆれば、共に消度憂涙、袖にも波を湛へけり。海士人微かに眼を開き、「扨は此御子を御養子の孫君、世繼の位になし給はんとや。アヽ有難や忝や。かかる貴人の、賤しき海士の胎内に、宿り給ふも一世ならず。たとへば日月の行潦に、映りて光を増すとは妾が事、今生に思ひ置事なし。心殘るは我妻老たる親を賴むぞや。さらば」と計夕汐の、引とる息や波の泡、終にはかなく成にけり。其時鎌足公、古へ狐の奉り、御名にしおふ利劒の鎌、錦の袋より取出し、左鎌に押取直し、乳の下をかき切給

出―どれ
帝―朝廷
非口所宣―口の述ぶる所に非ず心の測る所に非ず（法華經提婆品の句）

千尋計へばやう〳〵と、肌少温まり、息の下より苦しげに、謡「雲の波煙の波を分入、千尋計入けれ共、龍宮とやらんは思も寄らず。底には大蛇八尋の鰐、異類異形の惡魚多く、鰭をたゝき歯を鳴し、飛かゝり追廻し、身もづだ〳〵に成と思へば息絶へ、二度此界へは歸りしが、アヽ苦し、最早息も續かず。胎内の子も潮を呑み、共に苦しむ堪がたさ。親子の命も惜しからねど、龍宮へも至らず、御本意遂げざる口惜や。なふ我妻、今一度海へ入てたべ。幾度成共此からだの續く迄」と、起上らんともがきしを、鎌足をさへて、詞「暫く〳〵。命をくれよといひしは此事。たとへ龍宮に至らず共、玉を取たる道理なり。出其いはれ語て聞せん。耳にとゞめて悟りを開き成佛せよ。抑面向不背の玉、唐の帝に有とはいへ共、箱を開いて慥に玉を拜したると云こと、何れの書にも見へわたらず。然れば、此玉は本佛の悟り、甚深祕密の一大事。非口所宣非心所測とて、口にも説かれず心にも測られず、鏡の内の影の如く、有ともなし共、手のさゝれぬ不思議不可得の、妙理をさして寶と名付し物ならんと、推量せしに違はず、唐土人の智惠深く、なしといへば僞り、有といへば覺束なく、折ふし海上の波風を幸として、玉を龍宮にとられしと、鎌足に謎をかけ、日本の智恵に打預けたる、万戸將軍が方便の僞り、感じて

しんゐ―心耳の訛なるべし

歸りしは―歸りしよ

五躰―頭と兩手兩足

を添へ、引上給へ」と約束し、一つの利劍を拔持て、舷蹴放し、波間にかつぱと飛入ば、唐船樂船見物船、陸の貴賤一同に、「はあ」と計に目を塞ぎ、積たる繩を繰入繰入、二三百丈くり入しが、不思議や繩先四方に亂れ、彼方へ引れ此方へ引、くるりくるりと引廻し、繩にたゞかれ散る浪は、一村雨の如くなり。鎌足御覽じ、「是は正しく海底にて、惡魚惡龍の追廻すと覺えたり。龍神いさめの管絃を奏し、猶々繩をくりおろせ」と、いらつて下知をなし給へば、小山の如く手繰積たる繩を、くりさげくりおろし、樂は平調波返し、しんゐるも澄て三重覺えける。數千疋の繩殘りなくくり入て、「今はいか成龍宮界、底津國へも屆かん」と、則風は繩先に目を離さず、今や動くか〳〵と見る處に、遙の沖に紅の、血汐の波渦き上り、玉は知らず海士人は、海上に浮み出たり。「すは龍宮より歸りしは。繩を手繰て引寄よ」と、大勢どつと集つて、「ゑいや〳〵」と手繰よせ、程なく舟に引上れば、惡龍毒魚のわざと見へて、五躰もつゞかず朱に成、髮は藻くずにからまれて、底の藻に住虫の息、今を最期と見へければ、「とても取得ぬ物故に、むざんの命捨しよ」と、船中「わつ」とぞ叫びける。鎌足御覽じ、「いや〳〵玉は取たるぞ。雜人共近く寄て罸うくるな」と、あたりの人を遙に退け、則風に抱起させ、いたはり給

戒行―因緣といふに同じ

いさめ―なだめしづめる

聟―夫の事、以下同じ

淺ましさ。恩愛慈悲の道欠けて、心に任せぬ戒行や」と、顏を見てはわつと泣き、二人の死骸に取付てはわつとなき、狂氣の如く取亂せば、戸次は娘に縋つき、「おことが母も海士の業、鰐にとられて死したるが、鰐より猶龍宮の、遁れがたなき毒蛇の口。いとしや不便や可愛や」と、三人手に手を取組て、聟を揃へて歎きしは、目もあてられぬ次第なり。され共海士人氣を取直し、満「ア、おろかなり。龍宮世界もあればこそ、昔も入し例あり。とかく佛の御力。此人々の菩提の爲、玉を取得ん祈の爲」と、三人諸共手を合せ、南無や志戸寺の觀音薩埵の、力を合せてたび給へ」とて、大悲の利劒娑婆の緣、思ひ切たる海士人の、心の中こそ三重あはれなれ。既に其日も極りて、唐船に案内有。万戸も船を浮ぶれば、志戸寺の諸僧樓船を飾り、龍神いさめの糸竹の調、近國の見物男女、陸には棧敷幕毛氈、沖に舟幕舟じるし、磯は吉野の花と成。海は錦の波瀶る、立田川とぞ變じける。大職冠鎌足公、樓船に乘移り給へば、むざんやな海士人は、つまと父とが櫓櫂を取、腰に付たる千尋の繩、舟三艘に手繰積み、今こそ娑婆を出小舟、父も夫も涙の海、波に任せて揺れ行。海士人は妻の爲、思ひ切ても老たる親、夫の名殘是迄、と涙を袖の沖津波、舟ばりに立上り、満「若し此玉を取得たらば、此繩を動かすべし。其時人々力

さばくな―ひろぐなとも云、猥舞ふなに同じ
恩の死は云々―誘にて恩を報ずる爲には命を捨てれど情の爲には死す

して烏は黑し。生れ付たる身の因果」と、いふも我身の憂涙、押へかねて見へけるが、則「是を見よ。只今則風が切ル腹は、女房へは恩送り、舅へは恨み晴し、一ッ腹を二ッに切。心を付て見物せよ」と、突通さんとする所を、戸次は駈出縋付、涙を流して、「エヽ聞へぬ〳〵曲がない。かゝる邊士の海邊に住賤しい我等風情とて、猿でもなし犬でもなし、此爺も人間ぞや。始よりかふ〳〵となぜ打明しては給はらぬ。戸次が身代知ての通、見る影はなけれ共、褒美に惚て訴人せふと云心はさら〳〵ない。大事の娘が月花共樂む男のわき心、それが憎さの苦口。科ない二人迄むざ〳〵殺せと云はせず。可愛や宵迄小坊めが、爺樣〳〵といふた物」と、聲を上て泣けるが、「ヤレ滿月卑怯さばくな。恩の死はせね共、義理の死はすると云。武士の軍陣で死ぬるも、海士の海で死ぬるも、いはゞ同然。殊に天下の一大事、鎌足樣へ命を捧げ、死んでくれや」と計にて、「わつ」と泣ば滿月は、「能ふ思ひ切給ふ。女の身には主人にも、親にも神にも夫なり。龍宮は扨置、奈落の底に沈んでも、命は露塵惜からず」と、涙をかくす笑顏。則風は只伏沈み、「扨は命をくれんとや。則風が忠孝は、皆女房のお蔭ぞ」と、又咽返り歎きしが、則「思へば御身が胎内にも我子有、母が死すれば子も死する。妻二人子二人の命を取て、忠孝の道を立る

頼もしい心入—膽と反對にいへり

おこと—滿月をさす

代なし—賣る事

則風血刀提げ、門の戸たゝいて、「女房滿月には今迄情の一禮詞には盡されず。恨み有は舅殿。身こそ賤しき海士成共、鎌足のゆかりならば、入鹿が方へ訴へ褒美を取らんなどとは頼もしい心入。推量の通某は、大職冠鎌足公の執權、山上の次官有風が嫡子、若狹之介則風と云者。あの女の色に迷ひ、君の御大事にもはづれ、父が入鹿に討れしをも知らず。不忠不孝の罪を悔い、子の有中をふり捨、此屋に緣を結び、君此浦にまします故、一年余りおことが取たる海藻和布を代なし、家内の物をかすめしは、身の榮耀にも欲にもあらず、皆主君のはごくみ。異國迄聞へし鎌足公、賤のはごくみ受給ふ、御運拙き御身の上、賤しき身にも心あらば、御悼しとは思はずや。然るに此度万戸將軍、龍神にとられし面向不背の寶の玉、此儘に置ん事、君御一生の御恥辱。海士を入奪ひ返さんと思せども、そこ共知らぬ龍宮世界、惡龍毒蛇の住家、生て歸らん樣はなし、と御心を痛め給ふ故、御心安かれ某が女房滿月が、命を奉らんとお受申て立歸り、今宵は我身の一生未來のこと迄染々と語り、夫婦の情におことが命囉はんと思ひしに、時こそあれ、昔の妻の入來り、嫉妬に胸を焦す折から、そもやそも夫の爲、死んでくれといはるべきか。かく成下つて我一生、忠孝は立られず、浮世は是迄。鷺は洗はずして其色白く、染ず

すかせ共―減らせ共

祭ならでは使はぬ米迄もすかせ共、男の惡事を親に見せまい知らせまい、隱そふとする氣苦勞さ。女房が海につかつて憂目して、刈た海藻和布賣ても、錢一文内に置ず持運ぶ。鮑でも赤貝でも、中での見事な一番が、わごりよの口へ入るものが、乳がはらいでなんとせふ。乳計でも有まい、赤貝を喰やつたら、まだ何處ぞがはらふ。乳がはつて迷惑な、ちぎつてやらふか」と、摑付ば突倒し、兩方擲いつたゝかれつ、金松は泣出す、更に分ちはなかりけり。かく共知らず則風は、我家に歸れば家の内、女の聲々、𨶒諍は、何事やらん」と覗けば、花月、今の女房、髮引合ふて泣伏したり。𨶒君御一生の御大事、命をもらふ女房。大願の邪魔、身の難義」と、心を碎く其間、舅の戸次わめき出、「一々殘らず聞てゐた。うぬら女夫談合で、入聟させて是の内を空にする。大強盜のいき掏摸め、どうでも鎌足の緣の奴に極つた。男めを詮義して、入鹿樣へ引ずり、盜まれた入替に御褒美に預る。あた喧しいうぬめら、つまみ出してくれん」と、親子を兩手に引摑み、外へかつぱと投出し、門の戸はたとさしければ、花月「わつ」と泣く〳〵も、子を抱上て、「なふなつかしの則風殿」と、縋付を突退け、和布刈刀ずばと拔き、向ふ樣にはたと切、負たる我子は眞二つ、母は肩先切込まれ、うんと計に臥たるは、扨もあへなき最後なり。

和御寮—汝

のきざり—退き去り歟、夫を捨てて去りたるをいふなるべし

わんざん—無理非道

粟なら—粟でも

子、夜更て囉乳も仕憎いに、嬉しや〳〵。サア先爰へ腰懸て。扨も此子は喰分に仕合な」と、抱起せば抱取て、「余所の叔母がうま〳〵」生れ出たる懐中は、抱れ心の柔な、兩手を肌にひつたりと、乳房を含む口元も、目付鼻筋、花「ヤア金松ではないかいの」金「なふ母様」と抱付ば、花「ヲヽ母じや〳〵」と思はずも、傍へ遠慮も撫摩り、抱しめ〳〵泣より外の事ぞなき。満月宵より腹立矢先、親子を横に突倒し、満「是介べい、和御寮は五郎介の馴染じやの。それ程心が残らば、のきざりせず共なぜいたどいては居やらぬ。水子を我等が苦にして、囉乳して育てたも、五郎介殿を思ふ故。大事の男を夜鷹にして、あけくに爰迄のさばり頬。エヽ憎や腹立や」と、泣わめけば、花「いや是、尤これは我子なれ共、五郎介とやら四郎介とやらは何人やら知らぬぞや」満「ヲヽ知るまい。わごりよの處にばッかり居て、内に尻が居はらぬとて蠑螺殻の五郎介と、土地で異名が付て有。毎晩毎晩蠑螺の壺燒、暖かな味い所を喰て仕廻、我には底に熬付た、苦い處を戴かせ、まだ其上に殻舐にうせたか。サア男連て來い。男返やせ」と身を燃す。花「なふ我腹の立まゝに、去とてはわんざんな。誰が家共知らね共、折しも乳がはつた故、縁でがな此通。そなたの男の夜歩きの番はせぬ。阿房くさい事いやるな」満「ヲヽ乳がはる筈。内の粟なら麥なら、

すこびた―俗にすこつぺ生意氣な事
聟―夫
しどけなき―だらしない
しほらし―かはいらし

「なふ悋氣も男の大切さ、そんな事は聞もいや。上つ方の緣が何んの爰らへ入聟。假令それが定にても、夫や聟の命を賣て、儲けた金が身に付ふか。此金松は敏い子で、寢耳へでも入事は、五郎介殿へ筒拔。胴慾な事いはず共納戸へ往てお寢れ」と、足にてそつと搖起せば、金松わつと眼を覺し、「乳のみたい」と泣出す。滿「ヲヽいとし。明日は磯端のせんまの嚊の乳囉ふて飮せふ」と共に寢轉び抱寄て、親の方へ手を振て、金「彼方へ〳〵」と目まぜする。戸次不興氣に顏ふくらし、「エヽすこびた餓鬼め待て居れ。父めと一所に入鹿樣へ引ずり、乳の替りに籠の飯喰はせふ」と、呟き納戸に入にけり。花月は不思議の難を遁れ、入鹿が館を忍び出、妻の行衞も知らざれば、先はお主の有家をと、尋る姿しどけなき、志戸の浦曲の浪の音、松の嵐も聲すごく、一夜は爰の軒の下、膝に藻屑をかき集め、しく〳〵泣て宿りしが、花「アヽ何の因果にか悅してもふ三年、今宵の乳のはることよ。絞り捨ふか。可愛や是は金松が呑む筈。此子は生たか死だか」と、思ひ沈みて泣居たり。花「ハアウ此家も子持やら、乳呑たいとの稚聲」細目に開たる門口より、「アヽ御免なりませ。我らは旅の女、乳のはつた折しも、乳欲いとの痳むづかり。苦しからずば一口」と、愛想らしく云ければ、滿「なふ能ふこそしほらしい。是は亭主の土産の

縮々—葺くにかく
かひ〴〵しく—貝にかく
につとり—うるほひ粘る心に用ゐる(俚言集覽)
そこだめ—腹に仕込みたる子供
二人—五郎介と金松
生れぬ前云々—生れぬ先のむつき定めにかく
ならず—破落漢
おかた—妻
云じらけ—云うて却て興をさます種になる
庚申甲子—庚申甲子の夜は男女の交接をつゝしむべしといふ俗傳あり、あたは不平の發語

りと、油に髪の赤ばりも、今は翡翠のくる〳〵島田。今玆三つの金松は、是聟殿の土産物、腹に八月のそこだめも、生れぬ前の睦しく、世帯持こそ奇特なれ。戸次は外より立歸り、「ヤア聟のならずはまだ留守か。いかな夜も〳〵日が暮ると出あるいて、浦中に不審うたるゝ。兄めは其方が子でもなし。腹の子を早ふ産め。二人共にくゝり付、大きな事の起らぬ先、まくし出して退ふ」と、頭を振て罵れば、「さればいの、側目にさへ余る物、女房の身に成て是が勘忍成物か。前のおかた金松が母近所にゐて、其處への日參、此推量は違ふまい。悋氣したらば厭れふかと、こらへてもこらへられず、いへばいふ程云じらけ。一期連添ふ大事の男、すひがらにせまいと本女房さへ懸引する。跡構はずにあた見られぬ、庚申甲子。一夜の間日も有事か、身が燃かへる」と泣わめく。戸次小聲に成、「こりや悦べ。今に腹立のやむこと有。今夜庄屋殿に浦中の寄合有、「入鹿の大臣樣より御觸にて、鎌足殿が四國の地におはするよし。緣の者でもあるならば、詮義して申あげよ、黄金十兩下されふとのお觸。是の聟の五郎介は上方者、あの夜歩きは曲者、穿鑿して注進せよ」と、庄屋中の內證。もしそれが定なれば、十兩と云金㬉まる。うまい事で有まいか」と、かねと云字に目の光り、慾頬見れば滿月、ぞつと身顫ひ興さめて、

やと也

房前の余り—余りに房前浦の海士をかく、房前は満月の子なるを淡海公の世嗣とせるなり

人の、我に命を捨つべきぞ。如何はせん」と宣ひて、思し煩ひ給ひける。則風聞もあへず、「玉取る事は不定成共、一命を奉るはいと易し。夫婦は一身、殊に胎内に我らが種を懐妊の身、重々譜代の主君、龍宮の道こそ存ぜず共、千尋萬尋はおろか、奈落々々金輪際迄分け入て、命を捨てよと申さんに、何か厭ひ候べき」と、申上れば鎌足公、「ヲヽ嬉しし本望たり。然らば日限を定め、万戸が船へも案内し、國中にも披露し、諸人の前にて、鎌足が玉を二たび取たり、と唐土迄も知らすべし。去ながら、汝が妻の命を取はかなさよ」と、宣へば則風も打萎れ、「我君の御勘氣は、御詞の御免蒙れ共、死したる父が勘當は、妻の命に我命、百千の命を報じても、許すと申詞は、今生にては聞れず」と、そゞろに浮ぶ涙の色、君も不便と思召、「汝が妻の海士人は、父が爲に嫁ぞかし。海士人を我子にして、天津兒屋根の苗裔藤原氏を授くべし。是こそ父も悦びの、露の恨みも殘るまじ。猶語るべきこと有」と、庵に伴ひ入給ふ。扨こそ後に房前の、余り恐れも有磯海、深きめぐみと三重夕しほの、和布刈の戸次は此浦の、蠣売屋根も福々と、人の羨む老人は、一人娘の満月が、養ふ手業海士の業、海に浸りてみるめ刈、螺蚫のかひがひ敷も、内で和布の干たばね、入聟の五郎介が、都男に採るれば、鹽じむ肌につと

有か―所在

何の恩にか云々―何の恩ありて我爲に命を棄て

且我等も共心にて縁を結び、樣子を窺ひ候へ共、何處に龍宮有べき共量られず。惣じて海士の潛きと申も、僅か十尋か廿尋、それより底には鰐、鮫、鯱、などの惡魚すんで、人を捕るとて恐れをなす。殊に我等が女房、心狹き賤の女、夫を大事と存る故に嫉妬深く、萬疑ひ強き女、其上入鹿が方より、我君の縁迄も有かをせんさくいたす故、なまなか成事申出し、入鹿が方へ聞へんかと空しく暮し候。まして墓なき浦人の、波荒く汐疾ければ、過有とて海松も刈らぬ海士の業、そも神變はいさ知らず、取得ん事は中々に不定なり」とぞ申ける。鎌足重て、「いや〳〵、成難しとて爲さずんば、何事か成就せん。殊に万戸が唐土へも歸らず、此浦に碇をおろし逗留す。日本の地にて失ひし玉、日本より取返さずば、且は唐土の嘲り、此界の寶を其儘にして捨置事、鎌足が云甲斐なさと、萬民に譏を受ば、入鹿が威勢彌増し、王位を傾け天下をしたがへん事遠かるまじ。かづきの海士を海に入、假令海底にて惡龍毒蛇の餌食となす共、二度玉を取返し、三國一の寶を日本に止めなば、貴賤萬民信仰して、心を研く眞如の玉、正直の誠を正し、皆忠孝の道を守らば、朝敵入鹿を討ん事、扇を以て燈を消すよりも易かるべし。去がなら、限りも知らぬ千尋の底、生て歸らん樣はなし。命は千金萬金より重し。何の恩にか海士

影ながらの―内
内物を貢ぐ事

敷物迄、兎や角まかなひ候」と、申上れば鎌足公、「なつかしや親が形見に早く見ん。勘當ゆるす、是へ〳〵」と御諚ある。則風夢共辨へず、「はあ」と計に枴投げ捨て、御膝元に頭を垂れ、泣くより外の事ぞなき。やゝ有て鎌足公、「遊女花月を藤照姫と名付　入鹿めを欺きしに、聞ば汝が子迄生せし妻なるとや。父有風は君の爲國土の爲、入鹿を討んとたばかり入、運盡て討れたり。勘當も親の慈悲、黄泉までも汝が事、さぞや不便や、最期の顔見る樣に思はるゝ。有風を失ひしは、鎌足が片腕を打落されし如くぞ」と、御落涙は限りなし。則風猶も涙に咽び、「恥しや親は忠義に命を捨る、子は好色に身をやつし、主君の御大事、親の最期も存ぜず。不忠不孝の後悔、今更歎くにかひもなし。一たび忠を勵し、草の蔭成父が恨みを散ぜんと存る旨候故、只今は當浦、和布刈の戸次と申海士人の家に入聟と成、名も五郎介と改め、此比影ながらの御奉公、御前を憚り扣へしに、御勘氣御免の御詞、苔の下成父有風も、面を和げ申べし」と、又さめ〴〵とぞ泣居たる。鎌「チヽ實にも汝が一歳余り、我をはごくむ心ざし、とくより斯は見たれ共、底意を見屆大事を語らん、と知らぬ由にて暮せしが、扨は此浦の蜑と夫婦に成しよな。幸かな其女龍宮に入、此度万戸が取れし面向不背の寶の玉、取返すべき事かなふべきや」と宣へば、

楚王に報いん爲自頭を刎て客に渡す客之を王に寄る、王之を煮るに爛れず、客王の頭を切り自刎す、三の頭湯の中にて喰ひ合ふ(捜神記)

龍門に云々—寶主も一時災難に出逢ふ事

ひじきもの—海藻にて鼠尾の如く長さ二三寸

卞和—卞和楚山に璞を得て獻ぜしに王石なりとて其兩足を切る(韓非子)

ひなび樽—鄙びたる樽

仇を報じて其譽れ、名を三國に三つ巴、是は日本當代に、一つ巴の波の音、四海にかくれなかりけり。

第三

龍門に跳る魚も、時あれば漁人の手に落るとかや。御痛はしや鎌足公、入鹿が惡逆に惱まされ。官を去り祿を辭し、藤咲門や紫の、花摺衣引替て、八重の汐路の鹽衣、讃州志戸の浦住ゐ。都よりの御供には、乙鶴といふ童只一人、磯山松の下庵に、海士のみるめのひじき物。賈誼が長沙に遷され、卞和が楚山に脚きられ、あればある世の玉の緒の、命かぎりに彼の寶、日本に輝し、唐土に緣を結び、逆臣入鹿を亡し、君を安んじ、民を恤みの謀ごと、明暮に御心を碎き給ふぞ賴もしき。入日の殘る西の海、東の山に有明の、月ほの〴〵と暮も隈なき木陰より、若き男の山枴、重箱ひなび樽の酒、一荷に擔ふて、「乙鶴殿〳〵」とぞ招きける。鎌足御覽じ、「あれは若狹の介則風にてはなきか。何とて汝を招くぞ」と宣へば、乙「されば主親の勘氣の身、大事の時の御用に立ず、せめて寸志の忠節とて、此比ひそかに我等を賴み、其名を匿し、折々破子小竹筒を參らせ、戸障子床の

遣戸―引戸

さしもの―鎖すにかく

眉間尺―父の仇

ず。其しるしには最後迄、いふまじといふ詞は違へず。大丈夫の魂思ひ知れ」と、はつたと睨む眼の光、たゞ明鏡の如くなり。さすがの入鹿返答なく、石丸に目配せすれば心得て、太刀抜そばめ後に廻り、有風が首打落すと見へけるが、此首宙に飛上り、飛下つて石丸が、細首ふつつと喰切たり。入鹿恐るゝ氣色なく、「やあ誰か有。法師めが首を打て。打てやうて」と下知すれば、在合ふ侍抜つれて、前後左右に立かゝる。有風が首飛上り、眼をいからし歯を鳴し、我子をかこふてくる〱と、彼方へめぐり此方へ廻り、寄付ものゝ眞額頬骨嫌ひなく、さん〲に喰付噛付追廻し、猶も入鹿を餘さじと、火焔を吹かけ 三重 追かくれば、唐戸遣戸をはた〱と、さしもの入鹿堪りかね、帳臺さして逃て入り、家内の上下門外に、むら〱わつと逃散て、寄付者こそなかりけれ。有風が首立歸り、我子の縛め高手の繩、ふつ〱と喰切て、膝の前にどうと落、我子の顔をつくづくと、無念といはぬ計にて、別れを惜む血の涙、睡るがごとく成にけり。法師は夢の心地にて、父が首に抱きつき、前後不覺に歎きしが、「思へば父は忠と義の、名を重んじて身は輕き、我墨染の衣手も、不忠の垢に汚さじ」と、首引包む五帖の袈裟、かた見の色や紅の、血を佛の法の袖、泣く〱山に立歸る。眉間尺が古へは首に留る念力の、

たぐり—流す

大内—禁中

天はつと目もくれて、伸上り身をもがく。父は猶も色かはらず、「物いふな物をいふな」とゑせ笑ふ。入「ヤアいはせずにをくべきか。それ片腕打落せ」石「畏つた」と鑓投捨、太刀引抜て有風が、右の腕をずつぱと切て切落す。在天悲しさたまられず、兩眼に涙をたぐり、在「をのれ蹴殺してくれん」と、駈出るを引すへ、引すゆれば駈出る。父は是を尻目にかけ、「見苦しい騒ぐな〱。物をいはゞ我子でない」と、云處を石丸又飛かゝつて、左の腕はたと切て打落す。有「物をいふな物いふな」在「いや〱何も申さぬ」と、いへ共さすが目前の、親の苦み見る心、前後を忘れ齒を喰しばり、涙は瀧の如くなり。入鹿大きに興をさまし、「扨々しぶとき奴ら。をのれ鎌足が家人、山上の次官有風とは知たれ共、をのれが口からいはせん爲よ。それ〱頬を洗ふて見よ」「承る」と下人共、大桶に灰水を入、長柄杓にて酌かけ〱、流るゝ水も薄紅葉、顔も緣の鬢髭も、あらはれ落て白妙に、白髪とこそ成にけれ。入「扨こそ〱。世悴と云も兄則風は勘當と聞、多武の峯の坊主めならん。頭を見よ」と、唐人笠引ちぎつて法師の形。有風諸腕落されながら、入鹿が側に突と寄り、有「いつぞや大内にて、汝が首を取べしとの契約覺えつらん。今生の運盡て、只今汝に討るゝ共、一念主君の御身に入、契約の首を取ん事、三年は過べから

奈落—地獄

喰ふた顏—欺かれたふり

太踏で齒嚙をなす。親は我子の縛めを、見る目に無念の涙をうかめ、齒をきり〳〵と喰しばり、怒の氣ざし頭に上り、髮逆立て冠を拔き、針を植へたる如くなる。樊噲が鴻門の、怒れる形も今爰に、奈落へ通れと踏む足に、熊主が脊骨はつしと折れ、目の玉飛で死したりしは、凄じかりける次第なり。かゝる處に奧よりもあはたゞ敷、「先日奪ひ取たる藤照姬、何處ともなく落失せ候。追手をかけられ然るべし」と訴ふれば、入鹿につこと笑ひ、「ヲヽ構はぬこと、しやつは似せ者、鎌足が誠の娘ならぬとは疾くより知たれ共、彼等に心ゆるさせん爲、態と入鹿が喰ふた顏。先兩人を引すへよ」と、椽先にすつくと立、入「をのれは正しく日本人。何故誰に賴まれし。眞直に白狀せよ」と、大音上て睨つくる。在天繩取引立跳出て、云んとすれば父はつたと白眼で、在「アヽウおろかなり。我我は人間彼は畜類。人間と畜類と問答したる例なし。一言も返答すな」在「實に尤」と頷きあひ、空嘯いてぞゐたりける。入鹿から〳〵と笑ひ、「ヲヽ畜類に搦めらるゝ人間、此入鹿が目には虫と見る。あれ石丸白狀させよ」石「承る」と偃月の鑓鞘外し、二人が目の先鼻の先、突付〳〵閃かしても、びく共せず、またゝきもせず睨付る。石「ヤアヽ凄まじい性根な奴」と、有風が弓手の横腹、ぐつと貫く鑓先の、朱になつて馬手へ通れば、在

あのくたら云々—梵語にて無上正等正覺と譯す
こんへい云々—皆菓子の名なるを支那語にもぢりたり
菊塵—麴塵天子の袍の色黄に青みがかつた染色
金巾子の冠—冠の纓を巾子と共に金箔の紙に包む、帝王の冠(貞丈雜記)
さしつたり—オイ合點

と成、飛で入たる青海の、底」意殘さぬ御物語。「ア、いひなれぬ日本詞くたびれたり。こんへいあるへい花ぼうる、かすてらかるめら、やうかんかん」といひければ、愚の兩人誠と思ひ、「いで〳〵披露仕らん。暫く是に」と饗して、打連奥に入にけり。仕濟したりと有風親子、眼と目を見合せ、奥を見入て待處に、入鹿の大臣金巾子の冠、菊塵の裝束、さながら天子のよそほひ、ゆう〳〵と動ぎ出、「万戸將軍とはあれ成か」と、目をも放さずまもりつめ、對座にどつかと著座する。有風飛かゝつて、入鹿が眞中指通さんとする處を、入「さしつたり」と引ぱづし、腕首に縋付を、向ふへかはと突倒す。在天透さず飛でかゝれば、入鹿起直つて襟髮摑んで、「ゑいやつ」と、三間計あなた成柱にどうど打付られ、たゞよふ隙に眞鳥の石丸、在天を取て押へ、既に繩をぞかけたりける。羽黑の熊主、有風に組付處を、一振ふつて打伏せ、胴骨踏へて突立間に、入鹿後よりむんずと抱き、「おりあへやつ」とぞ呼はれば、我も〳〵と郎等共、弓手馬手より馳集まるを、大手を伸しはらり〳〵と投たりしが、大力の入鹿にしたゝかにしめつけられ、我子の繩目に氣も弱り、老木の松の雪折と、捻曲られてかひなくも、數多の郎等立替り、千筋の繩を投かけ〳〵、七重八重にぞ搦めける。在エ、口惜や腹立や」と、子は親の躰を見て地團

阿修羅王―身長二萬八千里、九頭千眼、口中出火、有九百九十九手八脚(祖庭事苑)

五衰三熱―天上の五衰とて汗出塵著く等五の衰態あり。三熱は一日に三度熱き目に逢ふ事

金剛不壞―堅くして壞れぬ

三摩耶戒―八方の人を濟度する本誓

綱ぬき―皮履

一筆を給はらば、それを證據に唐土に歸り、其よしみには、四百余州、入鹿公の御下知にしたがひ申べし。此旨披露」と云ければ、兩人彌悦び、「龍神玉を奪ひしこと、都迄もかくれなし。さて其處は日本の地か唐土の地か」在天心さかしくて辯舌は達したり。少もためろふ氣色なく、「ヲヽされぱこそ、唐と日本の汐境、ちくらが沖を通りし時、俄に一天かき曇り、震動雷電雨霰、渦く波の內よりも小島一ツ湧出、八大龍王阿修羅王、異類異形の眷屬、數萬騎に身を變じ、玉を奪て龍畜の、五衰三熱をまぬかれんと、火焰の惡風劒を降らし、大盤石を飛する事、雪を散すに異らず。万戸更に事ともせず、抑大國のならひにて、百人の大將を百戸と名付官人といひ、千人の大將を千戸と名付受領といひ、万人の大將を万戸と名付將軍と云。音に聞らん万戸將軍雲宗とは我なり、と出立其日の裝束は、金剛不壞の左右の小手、三摩耶戒の臑當、忍辱慈悲の綱ぬき、寶篋陀羅尼の大鎧、あのくたら三藐三菩提の五枚甲、大とうれんの降魔の利劒、麒麟葦毛といふ名馬、波に沈まぬ浮沓かけ、平地を行より猶易く、さら〳〵さつと乘伏せ切伏せ戰へば、さしもの龍神阿修羅王、かき消す樣に失てげり。それより波風靜なる、此日の本や葦原の、四國の地に聞へたる、讃州志戸の浦舟の、美女と變じ戲ふれて、玉を奪ひ大蛇

うす〳〵云々ー例の出鱈目の唐音以下同じ

頭が高いー膏の字音をとりて高ずるの意に用ふ

と、慇懃に述ければ、在天少しなぶらんと、まが〳〵しき顔付にて、「はあゝ、うす〳〵、すあぜ、ひい、さすわもう。さきがちんぶり、かゝさくきんないろう。きんにやうにやうにやん」とぞ答へける。石丸熊主合點せず、唐人は學問強く、我々が分にては詞中々通ぜずと、其比日本の學者、高向の玄理を挨拶にて、「御口上承らん」と云ひければ、「はあゝ、君けんくるけん、くるめあめいたかりんかんきう、さいもうすがすんへいするたら、こんたかりんとんな。ありしてけんさんはいろ。きんにやうにやん」とぞ申ける。さすがの玄理一圓合點いかね共、知らずと云はゞ恥と思ひ、「あれ皆文字にあたりし事。今度入鹿公鎌足を追失ひ、追付帝位に立給はん御祝義なり」と、物知顔の推當。猶使はんと團を以て玄理を招き、玄「てれめんていなばじりこん、さんとらにいによう萬能膏」と、膏藥の名をいへば、玄「それ〳〵慮外な、頭が高いと御意なさるゝ」石と熊「あつ」と頭を下たりし、おかしくも又愚なり。兩人重て、「不學の我々唐韻通じがたし。日本詞御存じならば、和語の御口上承らん」と望ければ、玄「ヲヽ尤々。某此度渡海の處、面向不背の玉、龍宮へ取られしこと都迄も隱れなく、聞も及び給ふらん。殊に鎌足一家沒落、此分にてすご〳〵と唐土へも歸られず。入鹿公の御情に、彼の玉恙なく日本の帝に納る由、

に帝唐の束帶を召さる

ちくら―唐と日本の汐境をちくらが沖といふ

章甫の冠―支那にて儒者の被る冠

烏羽云々―判別のつかぬ故人は有風と見るものなし

れながら我是を著し、万戸將軍と僞り、汝には次將の裝束通事の判事にまなび、入鹿が館に案内し、近付て討てだて有。延引しては入鹿めが、若し万戸に通路して、異國に心を通はしては事むつかし」と人々に內談しめ、俄に出立裝束の、姿は唐人身は日本、是やちくらが沖津波、碎く心ぞ三重逞しき。入鹿が方にも入「万戸將軍、龍神に寶珠を取られしこと、其かくれあらざれば、今は鎌足唐土の緣きれたり。願ふ處の幸。我唐土に因んで、日本の王位を傾けん」と、傳を尋ね便宜を求め、人橋かけて志戸の浦、每日事をぞ窺ひける。かゝる處に有風は、「面を塗て唐紅、錦の袂綾の沓、章甫の冠石の帶、素より丈は六尺二寸、老木に積る鬢髭の、雪を染なす烏羽玉の、烏羽に書文字なれや。それとは人も水いらず、親子智略の贋唐人。在天は中官と笠に仕付の髭喰そらし、入鹿が車寄に案內し、「唐の天子の勅使万戸將軍雲宗、葦原國の大臣入鹿公に、申し陳る子細有、見參」とぞ云入る。入鹿が執權眞鳥の石丸、羽黑の熊主、「すは唐土の因みぞ」と、家內の上下悅び勇み、上段に褥を構へ請ずれば、ちつ共臆せずゆう／＼と、上座に著しうづ高さ。在天は次の座に、威儀を正して座したるは、さすが大國の臣下と見ゆる風儀なり。兩人頭を下げ、執權「只今の御光臨何の爲にか候。我々承つて主君へ披露いたさん」

淡海公―鎌足の二男不比等

君の召されし云云―當時即位式

入鹿が惡逆さかんにて、鎌足公は官祿ともに御辭退有、御一家殘らず都を去り、御身が父有風御供して、當山に忍びましますと、宣ふ處へ、若君淡海公、藤照姫も立出給ひ、「なつかしの法師や。逆臣にさへられ、父を始我々も、冠をすてゝ山樵と成、口惜き躰を是見よや。父鎌足は河内の國平岡の宮、兒屋根の御神に一七日の御參籠、氏神の御惠み、頼む」と計宣ひて、翼しほるゝ友鶴の、雲井を慕ふ御有樣。在天法師も「あつ」と計、あきれて詞もなかりけり。父の有風奥より出、「ヤア坊主、汝は兄を尋に出しとな。傾城白拍子に身を持くづし、今度の御大事にはづれし奴、尋出して何にせん。同じ手間に、一事も君の御用に立詮義こそ肝要なれ。扨此比都の取沙汰には、唐土の万戸將軍、讚岐の國に著しか共、面向不背の寶の玉、龍宮へ奪はれしとの風聞、西國邊にて聞ざるか」と云ければ、在「さればく、其時我等も四國に候ひしが、三日三夜海上波風荒く、風雨雷電只事ならず、と近所の浦々恐れしに、程なく唐船讚州志戸の浦に著、寶の玉を龍神に奪はれ、万戸は日本へも渡られず、唐土へも歸られず、今において彼の浦に逗留、と西國四國是沙汰」と、語りもあへぬに、有風大きに悅び、「扨は疑ひなき實說。入鹿を亡す時節到來。我鬚髭を墨に染め面を塗り、天子御卽位の時、君の召されし禮服は唐の束帶、恐

石を抱き云々─好んで禍を招く事。抱レ石而沈二于河一(韓詩外傳)

つて、軒に滴り流れしは、恐しかりける眼力なり。入鹿大床に跳出、「あれを見よ。石も金も草も木も、我にしたがふ天地の間、大内も殿上も、此兩足の下にあり」と、南殿の板敷を、どう〳〵〳〵と踏鳴せば、有風も突立て、「ヲヽ天罰知らぬ邪の、力頼みは石を抱き、淵に入鹿が白骨は、此兩足の下にあり」と、長はしの渡殿を、ぐはた〳〵〳〵と踏鳴らす。入鹿が足音どう〳〵〳〵、ぐはた〳〵どう〳〵、どうと踏とめ踏かへり、白眼で別るゝ二人の眼、夕陽滿月東西の、峰に輝く電光、項羽が勇力八十梟、本朝異國の古へを、一度に見るが如く成、中に正敷大職冠、天津兒屋根の藤原や、藤のしなへゆう〳〵たる、神代も思ひはかられて、善惡鏡に照しけり。

第二

谷の水峰の薪の道ならで、浮世に迷ふ墨の袖、山上の次官有風が末子、在天法師は七歳より出家と成、多武の峰眞圓僧都に仕へしが、兄若狹の介則風が、父の不興を悲みて、師の御坊に暇乞、四國中國尋れ共、兄の行方あらざれば、老僧の御事も、床しき山の身は後住、多武の峰にぞ歸りける。師の御坊待受、「ヤア在天、汝をこそ待かねつれ。都には

紙の頭巾―神宿るとかく

臣は船―君者船也庶人者水也（荀子）

ばゝん―倭冠の旗に八幡の印ありしを明人しか呼ぶ、禁を破る海賊（俚言集覽）

いけ―罵る發語

たる有風、娘を奪はれ官祿を棄て、國民となつたるも玉躰安穩の忠節。威勢有入鹿公に對し此擬勢、天王の御命は如何せん。冠すてゝも恥ならず、忠臣の頭には紙の頭巾も玉の冠、不忠の臣の冠は、鎌足が履たる沓を戴かせたるも同前。罷歸れ」と宣へば、有「いや聊爾はいたさず、入鹿に一つの契約有」と、振切てつゝと出、「なふ入鹿の大臣殿、只今勝負を決すべきが、天王の御運時至らず、向ふ風に帆を上るは愚蒙の勇者。追付追手の時を得て、四海を治る臣は舟。ばゝんの海賊乘ふせ、入鹿公の御首は此有風が討約束。御面躰見覺え申」と、鎧の引合より眼鏡を出し面に當て、ためつすがめつ打詠め、立はだかつたる其勢、入鹿少共驚かず、「いけ年寄の推參者、捻り殺すはやすけれ共、能ふ生て五年か十年、老耄と思ひ助け置く。長居せば睨殺す、はや歸れ」と喚く聲、牛の哮るにことならず。有「チヽ、睨みづくには有風も、眼力には負まじ」と、目鏡をとつてからりと投げ、四角にきれたる兩眼を、八角に見出し、向ふをくはつと睨つくる。折ふし南門の軒に止りし番の烏、念力の眼に氣を打れ、羽をたゝき身を縮め、かつぱと落てぞ死てけり。入「ヤアをのれは曲者、いで入鹿が威勢を見よ」と、明星の樣成眼を開き、きつと睨付ければ、南門の棟瓦、作りすへたる赤銅の唐獅々、搖めき鎔け湯とな

崇神天皇―崇峻天皇の誤なる事論なし

君辱めらるゝ云云―君憂臣勞、君辱臣死（國語）

黑戸の御所―萩の戸の北、烟にくすぼりたるより此名あり。

人でも九位でもない―謎、人でも何でもないの意、九位を杭にかけたり

崇神天皇を害せしが、見ンごと罰も當らず。父蝦夷の大臣、某迄日本に威を振ふ。國王の罰も人による。サア以前の御返事承らん」と、玉座を取て引下し、御胸にかつぱと乘かかる。帝は御歳十九歳、怖させ給ふ御氣色なく、帝「官祿を取上よとはをのれが事か。鎌足に何のあやまり有ル。忠臣の命に替るは天下に君たる道ぞかし。丸が位を下り居る共、たとへ命は取るゝ共、鎌足が身にかはらば露程も厭はじ」と、下をめぐみの御涙、御悼はしくも有難し。鎌足横手をうつて、「扨は我官祿を妬んで、君への恨みよな。ホヽウ〱易い事〱。君はづかしめらるゝ時んば、臣死すといへり。君より賜はる官祿、君の爲にすてん事、いたむ所に候はず」と、みづから冠打落し、「サア今日より土民となつたる鎌足、雲井の名殘是迄」と、御階を下りて庭上の、土に手をつき膝をつき、頭を下し忠義の程、帝を始奉り、見る人涙を流しけり。入鹿歡然と打笑ひ、「ヲヽ出來した。約束なれば天王は助けん」と、取て引立、黑戸の御所に押籠め、其身は玉座に安座して、「如何に鎌足、六位七位八位を下れば、汝は人でも九位でもなし。禁中には穢らはし。あれ引出せ」と云處へ、鎌足の執權山上の次官有風、年積て六十一歳、本卦がへり未の白髭、白糸の腹巻草摺高く捲り上げ、大大刀横へ一文字に飛で入ル。鎌足押へて、「ヤレ老に惚れ

婢―男暇男
紫の冠―大化に御定したる七色の冠の中の第三階の紫
趙高―鹿をさして馬とよばしめたる故事
位田―位によりて朝臣に與へらるゝ田地を

を譲り、上を輕んじ下を苦しめ、威勢四海にはびこつて、凡そ飛鳥も睨み落す勢ひ、諸卿も諂ひしたがひて、かの秦の趙高が、馬と欺く小鹿の入鹿に恐れぬ者はなし。鳳闕をも憚らず、のつさ〳〵と玉座にどうと居かゝり、入「是王殿、鎌足と心を合せ、彼が娘を唐の天子の后に立て、異國本朝一味して、此入鹿を亡さんとの御分別、入鹿が知らで有べきか。藤照姫は此方へ奪取、唐の緣も切れたれば、天が下に恐しい者なく、上見ぬ鷲とは某よ。サア鎌足が官位を褫ぎ、大職冠と云冠を脫せ、位田の所領を取上、無官の民となし給ふか。若左もなくば、御位安穩には置まじ」と、御衣の胸ぐら俯伏に取て伏せ、四方を睨む眼の光、御殿の壁に輝きて、只電の如くなり。伺公の公卿内侍達、怖れわなゝき給ふ處へ、大職冠鎌足參內あり、大音聲にて、「エヽ淺ましき入鹿。此葦原國は忝も、天照太神瓊々杵の尊を天降し、此國の主とすゝめ給ひしより、神の御子孫相續いて三十七代、人間の胤ならず。月日の影にあたる者、畜類草木迄神と君との惠ならずや。況て大臣の位を給はり、國土の榮華を極る朝恩を忘れ、勿躰なや恐しや。此鎌足が首を取、身をづだ〳〵に刻んで、君をゆるめ奉れ」と、心を焦ち御身を揉み、落涙玉を亂しけり。入鹿から〳〵と笑ひ、「ヤア おろかなり鎌足。某が祖父馬子の大臣、

さすがも―栽刀もなしにて流石にいひかく

一分五厘云々―浮世は一分五厘といふ諺、浮世を輕く見る事

震襟―御心、宸襟

魔醯修羅―大欲天の魔王にて奪二慧命一壞二道法功德善本一(智度論)

にて、斯樣に毎日出ること」と、語りもあへぬに則風、「ム丶入鹿めが數年の逆心知つたる事。斯樣の時こそ御奉公。入鹿が館に亂れ入、腕の骨太刀の金、續かん程」といふても、刃物は小刀も、さすがの則風腰撫廻し、齒嚙をしてぞ泣居たる。かゝる處に深山の樣成荒男、十人許むら〱と、「藤照姫はこりや爰に」と、花月が小腕引立る。則風「どつこひ合點」と、先に進む大男どうど蹴倒し、續て來るを取て投げ、起上るを組伏せ、摑合ふ其間に、殘る奴原花月を輿に打込で、飛ぶが如くに落失せけり。則「エ丶をのれ等には構はぬ」と、左手右手へ撲伏せ、「やれこし本衆六尺衆、出合へ〱」と呼つても、怖れて寄付者もなし。たつた一人、追かけつ戻つつ泣つ駈廻り、踊ても跳ても詮方なければ、すご〱と賴みもきれし笠かたぶけ、「唐人の行列唐人の行列、三文と六文」と、一分五厘に見限りし、浮世のならひぞ三重定めなき。入鹿が猛威盛にて、諸卿も恐れしたがへば、帝震襟を惱まされ、御力には鎌足一人、氷に座せるごとくなる御位こそ危けれ。折しも殿上の小板敷どう〱と聞ゆれば、帝「すはや入鹿が足音、いか成非道かなすべき」と叡慮を苦しめおはします。抑蘇我の入鹿の大臣は、其母欲天の魔醯修羅、胎内に宿ると夢見て出生したる逆臣。父蝦夷の大臣驕慢の余り、勅諚もなき紫の冠

十二一重—女官の禮裝にて白小袖、單、五衣、表衣、唐衣、緋の袴等を著す

籠屋—牢屋

いくせ—幾何

達、門の小蔭に鏡屋の、見世先「御免」と舁寄て、六尺も皆横町の辻を廻れば乗物より、「なふ介様かいの」と轉び出、編笠押除け首筋に、抱付て「わつ」と泣、顔は花月姿は十二一重にて、勿躰ないと戀しいと、兎角思案に則風が、涙も夢の心地なり。ヂ「ヲヽ〱合點がいくまい。流浪の御身と聞より、此子が事の氣遣さ。足手限り命限りに、尋逢んと思ひ立、まんまと廓は走り出、須磨の關を通りしに、關破りの科人とて、縛つて都へ送られ、一年餘り籠屋の住ゐ。籠の中には様々の科人、人の子を養ふて殺したと云者有につけ、もし金松では有まいか、とそれはいくせの案じごと。是母じやぞや。あれ見知てか笑ひが出る。いとしや乳が不自由なか、男鰥の介抱苦勞に有ふ」と、親と子に縋付て泣ければ、則風猶も不審晴ず、「籠舎に似合ぬ此ごとく供廻り美々敷、今日の見物どふぞ〱」といひければ、ヂ「ヲヽ是が猶辛い事。入鹿の大臣と云悪人謀反を起し、王位を亡さんとたくめ共、鎌足様の御威勢強く、異國の大王を聟に取、唐と日本一味しては、をのれが本望遂られず。唐と日本の縁切ル爲、姫君様を奪取らんと、さま〲の謀計。鎌足様は御油斷ならず。幸みづから姫君様に能ふ似て、とても仕置に遭ふ身なり、藤照姫と見せかけ、入鹿に奪ひとらせ、心をゆるす其隙に、安々と唐土の嫁入急がん智略

こふじて―過ぎて
尾上の金―鐘にかけたり謠曲高砂に高砂の松の春風吹暮れて尾上の鐘も響くなりとあり

かたふて讀にくい。口上で聞たい」と、宣ふ聲に女房達「まア〳〵慮外なあの和郎は、お姬樣へ訴狀とは推參では有まいか。お願ひが有ならば、サア口で申しや」と叱らるゝ。商「アヽ其樣にかど〳〵しうは云ぬ物。此ごとく背中に子を負ひ、其日過ぎの我等。人は情が第一。アヽ去ながら、此躰に成しも余り情が過ての事、我らはもと御父鎌足公の執權、山上の次官有風が一子、若狹の介則風と申せしもの。先年御領分、播州高砂の明神、社頭御建立の奉行に下り、逗留の氣晴し。同國室の戀里花月と申傾城を、只假初の酒の友、酒がこふじて、淚になり、淚がこふじて夫婦の約束。誠を盡す阿房を盡す、其かたまりが花月が腹の波間より、あらはれ出し此世悴。浮名はぱつと高砂の、尾上の金も皆に成、まだ借錢に帆を上て、波のあはぢや見る影なき、貧に鳴尾の裏借屋、はやすぎはひに唐人の、行列賣と罷なる。お主の不興親の勘氣、日本の地にて申譯は成がたし。あはれ、唐土のお供に召連られ下されば、一命かけて御奉公申、唐の天子の勅諚にて、主親の勘當御免を受たき御願ひ、姬君樣の御慈悲」と、淚にくれてぞ居たりける。お乘物より仰には、姬「聞けば不便や唐へ供に連るに付、直に密に問ふこと有。何處ぞ靜な見世借て、幕の陰に乘物寄せ、供の者は暫しが內、傍へ退け」と宣へば、應と答へて女房

負が子が―子を負うてるが
通じ詞―通譯の次第
命命鳥―雪山に栖む一身二頭の鳥（三才圖會）
潯陽―潯陽
人魚―魚身人面者也（三才圖會）

と、態と忍びの町乘物、暫く立させおはします。辻に立たる商人の、背中にしやんと負が子が、編笠傾け聲張上、「唐人の行列唐人の行列、通じ詞の次第、進物土産寶物の次第具さに記し、上下は六錢一册で三錢、萬里の彼方迄つぶさに知れる唐人の行列」と、讀立てこそ賣にけれ。商「今度唐の帝より、大職冠鎌足公への御進上、花原磬、泗濱石、面向不背の玉、象一疋、虎豹二疋、花の咲根付の伽羅五本、實のなる枝珊瑚樹十本、小人島の夫婦丈は六寸、唐獅子の毛蒲團三十枚、赤栴檀の水風呂桶、命命鳥の雛、孔子の自筆の論語大學、一里四方の毛氈百枚、五色の氷砂糖千斤、麝香の猫、夢喰ひ獏、潯陽の江の生猩々二疋、但内一疋は下戸にて胡桃餅を餌がひとす。其外八疊敷の落雁二箱、八尺廻りの金米糖一折、麒麟の粕漬、薄鹽の人魚、龍門の生鯉迄。日本の姫君の御出世祝ふ進物なり」と、讀たつれば、往來の貴賤珍しがり、皆々買ふてぞ通りける。供のこし本、「是なふお乘物よりお望。是へ〳〵と」呼ければ、商人腰を屈め、「ハアお乘物なは唐土の花嫁御、鎌足公の姫君樣と見參らせ、別に紙をも改し」と、懐中より一通を乘物に投入、世を忍ぶ身は編笠を、御免と計肩すほめ、打傾いてぞ居たりける。ヤヽ有て乘物より、姫「やいこし本共、是は唐人の行列ではない、あの人の訴狀そふな。字が

親子の緒—日本支那と親子の緣を結ぶ

翰林云々—翰林院學士の起草たる國書

ちんぷんかん—唐人の詞を嘲りて眞似たる詞、かんに酒の燗をかく即ち下人迄もちんたといふ酒を燗して別盃を酌むと也

供廻り—貴族の供人の一群

ふべし」と宣へば、万戸謹んで承り、「是は大事の御使、去ながら、臣つら〲考ふるに、小國の智恵何事か候べき。二つの寶に相添へ、面向不背の玉の箱をもつて彼の土に渡り、たとへ箱は開かず共、日本人に佛法の疑ひ晴させ、萬民彼の玉信仰の威力淺からざる樣に、何とぞ計ひ申べし。然らば道に達せし大職冠、唐土の智恵に歸伏し、姫を后に奉り、親子の結び末ながく、唐土日本隔てなく、御代萬歳の御使。はや御暇」とぞ奏しける。帝を始 卿相 雲客、大夫諸侯に至る迄、皆々「此義然るべし」と、花原磬、泗濱石、面向不背のしるしの箱、其外寶の數々に、翰林學士の書翰の草、御暇の天盃給びければ、万戸は時の面目にて、彼方の餞別此方の門出、上官 中官下唐人、ちんぷんかんするちんたの酒盛、三國一の不二の山、見んとて勇む唐船、海路遙に 三重 出る日の、神の傳へし君が代や、唐使來朝の聞へかくれなく、日本の手柄國の晴と、兼て用意の都の町、思ひ〱に美を盡し、錦の幔幕玉簾、引續けたる金屏風、日影に照りて町小路、皆黄金の撒砂に、往來の人も身を飾る、女中の顏に映へば、軒の壁さへ白粉して、見物色を盡しけり。鎌足公の御娘、藤照姫は十八の、玉の肌を終にまだ、日本の殿にいらはせず、唐へ嫁入の惜きかな。和國の名殘今日は又、町屋の飾御覽とて、御供廻りかろ〲

いはひこめ—齋ひこめる
ふか／＼—うかうか
奏聞—奏上

心を、いはひこめられ候やらん。但誠の玉の有やらん、箱の中を存ぜず。ふか／＼と日本へ渡し、若彼土にて開き見て、誠の玉のなき時は、唐土日本寶なきに極れり。但細工の上手を選んで作りたて、慥にして渡さるべうもや候」と道理正しく奏問あれば、帝を始伺公の臣下、あつと感じておはします。中にも中書馬周、笏取直し、「小國とは申ながら、日本の王道補佐の臣たる大職冠、玉の道理を考へ知て、唐土の智慧を量らん爲の望と覺へ候。然るに今誠の玉は、有共無しとも云がたし、と披露せば、愚痴の衆生信心冷め、佛法を疑ひ罪障の種成べし。又世俗の迷ひを晴さんとて、細工人に勅諚有、玉を作つて渡されば、愚痴の衆生は信ずる共、智ある大職冠一人に嘲られんは、唐土の恥辱に候へば、能々御評議然るべし」とぞ奏せらる。帝實にもと思召、「所詮使の辯舌にこそ有べけれ。万戸將軍雲宗急ぎ召せ」との宣旨に任せ、衣冠あらため參内ある。其たけ八尺七寸、髭左右へ分れ、面色赫々たる骨柄は、四百余州に竝びなく、粧ひ由々敷見へにける。帝遙に御覽有、「此度日本大職冠に、婚禮の聘物、花原磬、泗濱石、面向不背の玉、汝に持せ遣すべし。然るに此玉は佛法の深理にて、誠の玉の躰、有共なし共終に箱の中拜したる者なし。日本の萬民疑ひの心なく、佛法繁昌唐土の恥辱なき樣に、計ら

大職冠—尤も高き位なり
花原磬—寶の磬石
泗濱石—寶の硯
七寶七重—金銀瑠璃玻璃硨磲赤球瑪瑙にて鏤めたる七重の箱
法性の理躰—不生不滅の眞理
三世—過去未來現在
十界—六道と聲聞緣覺菩薩佛
中道實相—何れにも偏せず眞實にして常住なる相

彼の國の大臣、大職冠鎌足が娘を呼びむかへ、后妃の位に立べき由、望みつがひしかば、鎌足悦び、「小國の臣下、大國の大王に婚禮せんこと、日本の面目なり。唐朝に傳はる花原磬、泗濱石。面向不背の玉、此三つの寶を、賴みの引出物にて和國に渡し、姫を迎へとるべし」との返牒なり。早く使者の器量を選んで、三つの寶を日本へ渡すべし」とぞ宣旨ある。少師房玄齢進み出、「さん候。彼の三つの御寶花原磬を打鳴し、九帖の袈裟を覆ふ迄、其聲更に止まず。泗濱石の硯には、水なくて墨の色、心のまゝに候事、いづれも度々御覽有。中にも面向不背の玉、七寶七重の箱の中、君を始拜したる者一人も候はず。抑此玉と申は、赤栴檀のみそぎにて、五寸の釋迦の尊像玉の中にまし〱、何方より拜しても、同じ面に向ふとは申傳へ候へ共、昔より誰有て、箱を開き拜したると申こと候はず。されば覺りの佛性を如意寶珠にたとへ、法性の理躰を指して玉と名付、面を向ふに背かずとは、善惡邪正森羅萬象、來れば映りされば去り、一善も貯へず一惡もとゞめず。月日の世界を照すが如く、一念の佛性三世十方に通達し、十界一心平等大會、有無の間の中道實相。上天の事は聲もなく臭もなし。有とも無しとも手をさらぬ、則天なり佛なり。此義を以て萬代不易の御寶と名付、御藏の中に壇を構へ、七重の箱に此

大職冠

作者　近松門左衛門

大職冠―大織冠の誤

虧心―心を損ねる事。此章は人の知らぬ所にて不正を働くとも神はよく知ると也

震旦―支那

徳にとなり―德不孤必有鄰(論語)

人間の私語、天の聞くこと雷のごとく、暗室の虧心、神の見ること電のごとしといへり。天を父とし地を母とし、日を兄とし、月を姉とする時んば、四海皆兄弟にして、唐も大和も國民の、一つ心に睦しき、天の道こそ目出たけれ。我日の本の天つ君、孝徳天皇の御宇にあたつて、震旦四百余州、唐の世第二の主、太宗皇帝と申奉るは、聖化殊に盛にして、異國本朝明王の、徳にとなりし遣唐使、唐土船の來朝と、往來絶へぬ萬里の海、波しづかなる御代とかや。比しも貞觀十九年、秋も半ばの月の宴、麟徳殿に出御有、もろ〳〵の臣下をめされ、太「朕中國に君として、天竺韃靼、外國迄もうとからず。就中日本秋津島は、神の苗裔絶へせず、佛法を尊んで慈悲を旨とし、儒道を學で五倫の道を守り、正直柔和の君子國と傳へ聞。かゝる目出たき日本に縁を組、隣國に親まんと

近松淨瑠璃集 下卷 目錄

傾城酒呑童子（七行本）	享保三年十月廿五日	六十六歳
博多小女郎波枕（七行本）	同　年十一月廿日	同
心中天の網島（十行本）	同　五年十二月六日	六十八歳
女殺油地獄（十行本）	同　六年七月十五日	六十九歳
心中宵庚申（七行本）	同　七年四月廿六日	七十歳

右篇名の下なる括弧内は校正に用ひし丸本を示したるものにて、寫本は一册もなく、殊に世話物三種まで、世の珍とする十行本を得たるは、余の竊かに誇とする所なり。其他校訂に就ての用意は一に中巻のそれに同じ。

大正三年三月

校註者　忠見慶造

が僞、殊更に其出典を多く擧げたり。されど識淺くして引證猶十分ならず、且は見誤り聞き損ねたる點もあらん。こは偏へに校者の愧づる所なり。

今本書に收めたる十二種の登場年代等を示せば左の如し。

大職冠（八行本）	正德三年十一月朔日	六十一歲
生玉心中（七行本）	同 五年八月朔日	六十三歲
國性爺合戰（七行本）	同 年十一月朔日	同
鑓の權三重帷子（十行本）	享保二年八月廿二日	六十五歲
壽の門松（七行本）	同 三年正月二日	六十六歲
日本振袖始（七行本）	同 年二月廿二日	同
曾我會稽山（七行本）	同 年七月十五日	同

の片言隻語と雖も、寸鐵人を殺さゞるなく、讀むに隨つて興趣起り、卷を釋くに忍びざらしむ。すべて時代物は、古淨瑠璃の流れを汲み、史上の材料を採つて之を敷衍したれば、必ず傑人出でて身を挺し、よく萬艱を排して剛敵を摧くといふ、一種豪壯なる結構に出づるを常とすれども、世話物は之に反して、事を當時の出來事に採り、專ら男女の關係を寫したれば、自然情と義との衝突起りて、失望落膽終に死に臨むといふが如き、極めて悲哀なる脚色に落つるを以て、二者の言表もまた相同じからず、一は震旦天竺に迄亙りて、多く神儒佛の古典を引き、一は中社會以下の人情を陳べて、俗諺俚言鄙語等を用ひ、其解甚だ困難なるものあり。仍て頭註を施すに當りても、或は之を古老に聞き、或は之を古書に索め、力めて自己の判斷を避けん

緒言

近松淨瑠璃百餘種中、本集擇ぶ所總て四十二篇。其内彼の三傑作と稱する國性爺合戰、曾我會稽山、雪女五枚羽子板を始めとして、蝶の翼に上皇を驚かし進らせし百人上﨟、扨は金の冠に小出雲等の膽を冷しゝ酒呑童子の如き、時代物の粹は更なり、一代の碩儒物徂徠をして嘆賞措く能はざらしめし曾根崎心中などの世話物をも、全部卷中に收めたれば、巢林子の大作に於ては殆ど遺憾なかるべし。彼の豐富なる學殖と、非凡なる天才とは、篇中何れの作にもよく發揮せられて、或は英雄豪傑の目覺しき振舞となり、或は市井の男女の纏綿せる情事となり、人物悉く紙面に躍動して、恰も其時に生れて其人に接するが如き感あり。加旃、文章極めて簡潔にして、座談

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

近松淨瑠璃集

下卷